

第8章 豊臣後期の遺構と遺物

第1節 堀83とその関連遺構

1. 前提

今回の府警本部棟新築2期工事に伴う発掘調査では、豊臣期の大坂城に関わる大規模な堀（堀83）を検出した。今回の調査地はあたかもこの堀を調査するために設定されたかのように、調査区内に堀を包括することとなり、その掘削から大坂冬の陣によって埋め戻されるまでの歴史的経過をきわめて具体的に知ることのできる画期的な調査成果となった。

当該期の遺構としては、これ以外には井戸などの遺構をわずかに検出したのみであり、検出した多くの遺構は堀83に付帯するものか、もしくは堀の埋め戻しに関連するものが大半である。したがって、以下では堀83を中心に報告を進めるが、堀83に関しては掘削されて機能している間の段階と埋め戻しによって埋没する段階に大別される。当然のことながら、作業の内容や主体者が異なっており、ここでは、一つの遺構ではあるが、その掘削から埋め戻し直前までの遺構の状況と、埋め戻し作業に伴う遺構を区別して報告を進めることにしたい。

2. 堀83

(1) 前提

堀83は北側でやや西に振りながら調査地内を南北に縦断するものであり、調査地南端部では東に向かってL字形に折れて大坂城二の丸堀（現在の大阪城外堀）の方向にのびている（図90）。

以下では、南北方向の堀を「南北堀」、東西方向の堀を「東西堀」、両者の接点を「南西コーナー」と呼称して記述を進める。なお、南北堀に関しては後述するように、遺構141の北端部分でわずかに屈曲して方向を変えており、便宜的に当該部分を境として、「南北堀北半部」、「南北堀南半部」として報告する。

(2) 方向

堀の方向は、上面が大きく削平されている点で不確定要素を残すが、堀の方向を座標北を基準として記していくと以下ようになる。南北堀南半部の西側肩の方向はN-3.9°-W、対岸の東側肩は南西コーナーから遺構141までの間はN-0.5°-Eで真北に近い方向を指向する。遺構141から北側では西にわずかに振っており、ここではN-4.4°-Wとなり、これは磁北に近い。南側の東西堀は南北両肩ともに東側に向かっていずれも5.0°南に振っており、ほぼ磁北に直交する。したがって、堀のコーナー部分の角度は外側では約99°を測るのに対して、内側では約94°で直角に近い角度を呈している。

(3) 規模

検出長は南北約110mで、東西は約50mを測る。上端幅はいずれも堀の内側が大きく削平されていることから、旧状を留めるものではないが、東西堀で約16.8m、南北堀南半部で約17.6m、同北側では約22.5mを測る。とくに南西コーナーの内側付近は上面が大きく削平されて、堀の法面が僅かに残るのみであり、実際には25m前後であった可能性が高いものと考えている。一方、底面の幅に関しては旧状を残しており、東西堀から南北堀南半部にかけては12.7m前後を測る。南北堀北半部では堀底の幅は狭く、約7.4mを測るのみである。

深さは再三にわたって記述してきたように上面を大きく削平されており、旧状を留めるものではない。

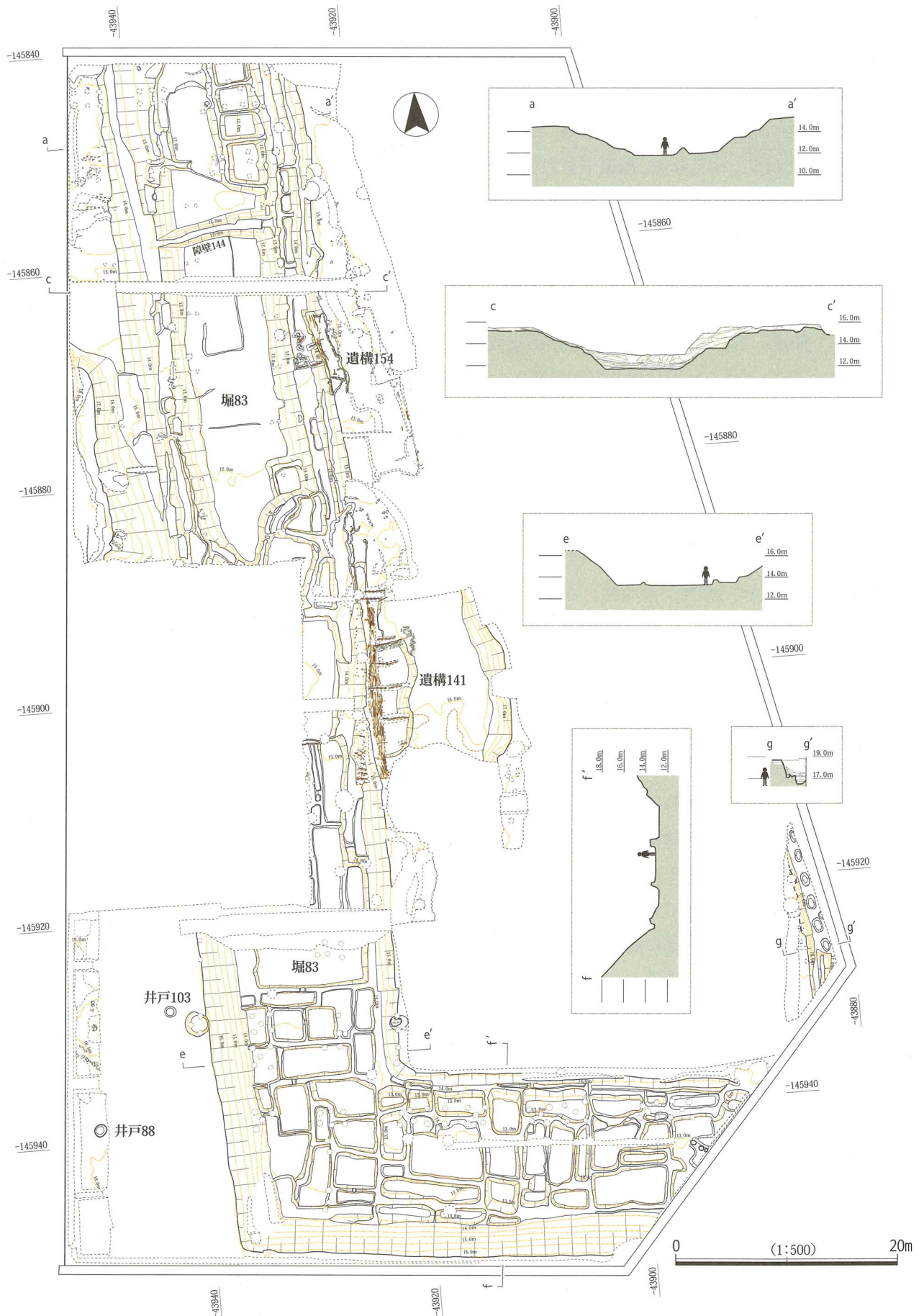


図90 豊臣後期遺構分布図

南北堀北半部では深さ約 5.6 m、同南半部では約 4.4 mを測る。

なお、最も残りのよい東西堀では堀の南肩は調査範囲外であるが、過去に大阪府教育員会で行われた発掘調査で堀 83 の上端が検出されており、ここでの肩部のレベルは T.P.21.6 m前後であったことが報告されている(大阪府教委 1990)。今回の調査で検出した堀底は堀障子の上端で T.P.13.5 m前後であり、両者の比高差は 7.1 mとなる。堀障子までを含めると、7.5 m以上の深度をもっていたものと判断できる。

(4) 構造

構造は石垣を持たない素掘りである。堀の法面は平均すると 35 ~ 45° 前後の角度をもつ。東西堀では北側法面はほとんど遺存しないが、比較的残りのよい南側法面は、基本的には平板な急峻な斜面を作り出している。ただし、詳細にみると、この法面は中位で微妙に傾斜が変換しており、その角度は下半が 50° 前後、これより上半が 42° 前後を測る。北側法面はわずかしかなかったが、36° 前後の傾斜をもつ。このような状況は南北堀南半部でも同様であり、当該部分では西側法面の下半が 48° 前後、上半は 38° 前後である。対岸の東側法面も 35° 前後の角度を測る。後述する堀障子の状況も東西堀と南北堀南半部では共通しており、同一設計に依拠して施工されたことを窺わせている。

一方、南北堀北半部では東西ともに法面中位には階段状に犬走り状の平坦面が造成されている。東側の法面では 2 段に造成されており、下段の平坦面は T.P.13.4 ~ 13.6 m前後で緩やかに北に傾斜し、幅 0.92 ~ 1.75 mを測る。上段は T.P.14.1 ~ 14.3 m前後で、幅 0.50 ~ 0.54 mである。当該法面の角度は下半が 38 ~ 40° 前後であるが、犬走り状の平坦面より上方では 60° を超える急峻な箇所もみられる。

西側法面では、T.P.13.4 ~ 13.7 m前後で、幅 0.57 ~ 1.63 mの平坦面が造成されている。ここではこの犬走り状平坦面を境として下方は 45° の急傾斜であるのに対して、上方は 25° 前後の傾斜となる。

なお、この犬走り状平坦面からは、若干の傾斜はあるものの、物理的には障壁 144 の上面を通して堀を横断することが可能である。しかしながら、対岸にはこの堀障子を取り付く部分にのみ、犬走り状平坦面に堀障子が掘削されており、防御的效果を意図したものであることが窺われる。

なお、南北堀北半部では谷地形(谷 1)と交差しており、この谷 1 は自然堆積や整地によって、豊臣前期段階には深さを減じてはいるが、それでも深さは 3 m以上を測り、これに直交する堀を掘削しても、谷の部分では堀と十字形に交差し、開口して防御機能を著しく減じることとなる。今回の調査では、堀の西側法面が調査区西端部に該当することや、既存建物の攪乱によって、十分な調査を行うことができなかったが、断面観察や隣接する府警本部 1 期調査の成果を勘案すると、谷 1 は堀の掘削時に、大規模な客土を行い、当該部分については人工的な盛土によって堀が形作られていた状況を看取することが可能である。同様に、東側法面でも堀の肩部に人為的な盛土がわずかに残っていることから、堀の上半に関しては人為的な盛土によって形成されていたものと考えられる。

したがって、現状では堀と谷が交差する部分にのみ盛土が観察されるのみであり、これをもって土塁の存在を指摘するには至らない。ただ、後述するように、埋め戻しに際しては堀の内側からのみ、多量の花崗岩が投げ落とされており、これらの石材を用いた構造物が堀の内周に存在していたことは明らかである。

(5) 堀障子

今回の調査で検出した堀の底面には、随所に不整な土坑が掘り込まれた、いわゆる堀障子となることが明らかとなった。堀底の堀障子は、堀の南西コーナーから東西堀にかけて顕著であり、これら



図91 堀83北半部



图 92 堀 83 南半部



図93 堀83中央部

は一瞥すると無秩序かつ乱雑に掘削されたかのようにも見えるが、巨視的にみると堀を横断するアゼによって区画された単位を抽出することが可能である。ただし、このような状況は今回の調査で検出した堀の底面全体に及ぶものではなく、南北堀北半部では犬走り状の平坦面にも堀障子が設けられている部分が看取される。なお、堀障子の障壁はいずれも地山面を掘り残すことによって形成されたものであり、盛土による部分はみられない。

ここでは北から順にまとまりのある堀障子ごとに、便宜的にA～Kまでのアルファベットを付して記述を進めていくことにしたい（図94）。なお、調査地東端部で検出した堀45に関しては出土遺物の年代観から豊臣前期の遺構と考えているが、堀底の堀障子の計測値に関しては、堀83のものと一緒に一括して表10に掲げた。

Aブロック 南北堀の北端で検出した堀障子である。北側は調査範囲外にのびており、詳細は不明である。調査範囲内においては堀底の東辺に沿って矩形を呈する4基の土坑が直列し、その西側に2基の大きい土坑がL字形に並ぶ。A1～A4まではほぼ同様の形態を有しており、障壁の高さは約0.5～0.7mで他に比して高く、周囲の壁面は60°近い角度で急峻に立ち上がっている。一方、A5およびA6は不整形であり、両者を隔てるアゼ状の高まりも西側で0.4m前後、東側では段差を残し、不明瞭となっている。また、南は堀を横断する幅1.85～2.74m、高さ1.4m前後の巨大なアゼ状の高まりである障壁144によって区画されている。

Bブロック 南北堀の東側法面に造成された犬走り状平坦面（下段）で検出した堀障子である。長方形を呈する3基の土坑が南北に直列する。土坑の深さは20cm前後でさほど深くはないが、堀の内側にあたる東側法面は60°近い急峻な斜面になって堀法面につながっている。

堀の法面中に掘削された堀障子はこのBブロックのみであるが、この部分は堀を横断する障壁

表10 堀障子規模一覧

ブロック	No.	東西 (m)	南北 (m)	深さ (m)	ブロック	No.	東西 (m)	南北 (m)	深さ (m)	ブロック	No.	東西 (m)	南北 (m)	深さ (m)	ブロック	No.	東西 (m)	南北 (m)	深さ (m)
A	1	2.9	2.0	0.68	D	6	0.5	5.2	0.14	F	8	4.0	3.4	0.55	H	9	3.4	1.8	0.68
A	2	3.8	2.4	0.50	D	7	0.9	1.9	0.13	F	9	3.5	1.3	0.28	H	10	3.1	1.1	0.64
A	3	3.9	2.4	0.47	D	8	0.3	1.5	0.11	F	10	8.8	4.4	0.31	H	11	2.8	0.5	0.29
A	4	3.5	4.0	0.69	D	9	0.5	5.4	0.14	G	1	2.6	2.1	1.05	H	12	5.1	0.8	0.27
A	5	4.5	9.2	0.13	D	10	10.5	4.0	0.58	G	2	2.3	2.2	1.02	I	1	4.8	2.1	0.57
A	6	10.4	6.5	1.29	E	1	1.4	1.0	0.18	G	3	4.6	2.4	1.13	I	2	2.1	1.4	0.41
B	1	0.9	2.2	0.21	E	2	5.2	1.5	0.45	G	4	2.4	4.6	0.86	I	3	4.5	1.3	0.30
B	2	0.9	1.7	0.25	E	3	2.9	4.6	0.15	G	5	2.1	1.5	0.18	I	4	4.5	4.0	0.71
B	3	0.8	4.3	0.19	E	4	1.8	3.9	0.55	G	6	6.7	5.6	0.92	I	5	2.1	0.8	0.42
C	1	1.2	8.8	0.37	E	5	2.5	3.6	0.66	G	7	2.1	1.2	0.31	I	6	2.6	1.7	0.52
C	2	1.5	3.0	0.12	E	6	3.1	3.1	0.44	G	8	9.0	2.1	0.98	I	7	3.7	7.5	0.60
C	3	1.9	1.2	0.57	E	7	2.7	3.1	0.58	G	9	5.2	1.8	0.60	I	8	4.3	1.2	0.62
C	4	2.4	2.3	0.18	E	8	2.8	3.5	0.41	G	10	3.6	1.5	0.83	I	9	7.0	3.7	0.62
C	5	0.9	3.5	0.24	E	9	6.4	3.0	0.63	G	11	2.0	0.7	0.21	I	10	6.2	0.7	0.16
C	6	3.9	4.0	0.45	E	10	2.0	3.8	0.33	H	1	3.0	4.2	0.96	I	11	12.5	0.7	0.16
C	7	5.0	4.4	0.52	F	1	1.6	2.5	0.59	H	2	6.1	3.2	0.92	J	1	2.1	2.0	0.82
C	8	2.2	4.7	0.50	F	2	3.1	4.4	0.60	H	3	3.1	3.0	0.71	K	1	0.4	1.1	0.33
D	1	3.3	11.7	0.59	F	3	1.4	3.2	0.27	H	4	2.2	5.1	0.77	K	2	0.6	1.1	0.40
D	2	2.6	7.8	0.52	F	4	5.8	3.6	0.64	H	5	2.4	6.0	0.60	K	3	0.7	1.3	0.43
D	3	1.0	5.4	0.14	F	5	4.0	3.1	0.49	H	6	1.3	5.1	0.46	K	4	0.8	1.3	0.66
D	4	1.2	3.9	0.14	F	6	4.5	6.0	0.34	H	7	3.2	3.1	0.89	K	5	0.8	1.3	0.53
D	5	2.5	7.6	0.27	F	7	2.9	5.6	0.34	H	8	2.5	1.7	0.73	K	6	0.8	1.2	0.56



図94 堀障子の単位

144の取り付け部分にあたっている。すでに報告したように、この障壁144は堀の東西両法面に造成された犬走り状の平坦面をつなぐ形で掘り残されており、物理的にはこの上を通過して侵攻することも可能である。状況からみて、Bブロックとした堀障子は、障壁144を意識して掘削された可能性が高いものと判断する。

Cブロック 南北堀の中央やや北寄りで検出した堀障子である。すでに記したように、南北堀の北端では障壁144の北側で堀障子が造成されているが、これ以南ではおよそ20mの間はほぼ平坦な堀底が続いている。この平坦な堀底は南側ではV字形に入り込んでおり、Cブロックとした堀障子は東西両法面の法裾から中央に向かって展開している。ただし、南西では既存建物の攪乱が及んでいるために全容は不明である。後述するDブロックとの境界も明確ではないが、Dブロックとした堀障子では掘り込まれた土坑が矩形を呈するのに対して、Cブロックでは不定形な掘り込みが多いことなどの諸点を勘案して区別している。

堀障子は西側法面では、犬走り状の平坦面に対応するようにC1～C3が掘削されている。東側では遺構141に対応するように円弧を描いて堀障子が造成されており、この北側にC4とした矩形の掘り込みが付帯する。土坑は全体に不整であり、法面から堀底に向かって徐々に傾斜しており、あたかも柵田のような景観を呈している。

Dブロック 南北堀のほぼ中央で検出した堀障子である。Cブロックと同様に西半部が攪乱を受けており、全容は不明である。基本的には南北に長い長方形を呈する土坑が掘削されている。D3とD4はレベル的にはやや高く、D3とD5間の障壁上面には両者間をつなぐ水口状の窪みがある。後述するE～Iブロックの状況を勘案すると、D1やD10は別のブロックであった可能性も残る。

Eブロック 南北堀の南側で検出した堀障子である。すでに、記述してきたようにE～Jブロックはまとまりのある堀障子である。一見するとランダムに配置されているように見えるが、図95に示したように、堀底を横断するようにして設定された一定間隔の障壁によって区画されていた可能性が高い。

Eブロックの南側は東西堀の北側法面の下端の延長線上の障壁によって区画されており、Dブロックとの境界となる障壁との距離は芯々距離で約8.2mを測る。

区画内には10基の土坑が掘削されている。平面形はE3が逆L字形を呈する以外は、基本的には矩形である。深さは最も浅いもので15cm、最も深いもので66cmである。D10とE2間の障壁上面では両者間を結ぶ水口を検出している。また、堀の東方面には、当該ブロックを区画する北側の障壁の延長線上に約30cmのクランク状の段差を検出している。

Fブロック 南西コーナー部分で検出した堀障子である。当該ブロックを区画する北側および東側の障壁は、いずれも堀の下端ラインの延長線上に配されている。南北約13.1m、東西は北辺で約11.1m、南辺で約8.4mを測る。

区画内にはEブロックと同様に10基の土坑が掘削されている。最外の土坑は堀の南西コーナーに沿って細長く掘削されており、この状況は東に隣接するGブロックでも同様の傾向が看取される。深さは最も浅いもので27cm、最も深いもので64cmである。E8とF1間およびE9とF2間、F8とF9間の障壁上面では両者間を結ぶ水口を検出している。

Gブロック 東西堀の西側で検出した堀障子である。当該ブロックを区画する西側の障壁は、堀の下端ラインの延長線上に配されている。東西幅は9.7mである。区画内には11基の土坑が掘削されている。深さは最も浅いもので18cm、最も深いものは1.13mである。とくに、堀の内側で東西に直列す

るG1～G3は、いずれも深さが1mを超える。G11はH11やH12、I11などと同様に法裾に溝状に掘られたものである。

Hブロック 東西堀の中央部で検出した堀障子である。東西幅は9.6mである。区画内には12基の土坑が掘削されている。深さは最も浅いもので27cm、最も深いものは96cmである。Gブロックと同様に堀の内側にあたるH1・H2が1m近い深さを有している。法裾には溝状のH11およびH12が掘られているが、深さは30cmにみたない。なお、当該ブロックのH1・H3・H7・H10が南北に直列しており、この東側の障壁を区画とみることもできるが、H11がこれをさえぎる点を考慮して区画としなかった。

Iブロック 東西堀の東側で検出した堀障子である。南東側は調査範囲外である。東西幅は11.8mを測る。区画内には11基の土坑が掘削されている。深さは最も浅いもので16cm、最も深いものは71cmである。全体に不整な土坑が多いが、堀の内側にはGブロックと同様に東西に長い長方形の土坑が掘削されている。

Jブロック 東西堀の東端で検出した堀障子である。Iブロック北端のI11が途切れることから、区画を設定したが、大半が調査範囲外となることから必ずしも確実性のあるものではない。

Kブロック 豊臣前期の遺構として報告した堀45の堀底で検出した堀障子である。詳細はすでに報告しているので、ここでは繰り返さないが、堀83の様相とは異なり、単列の土坑が規則正しく並んで掘削されているものである。

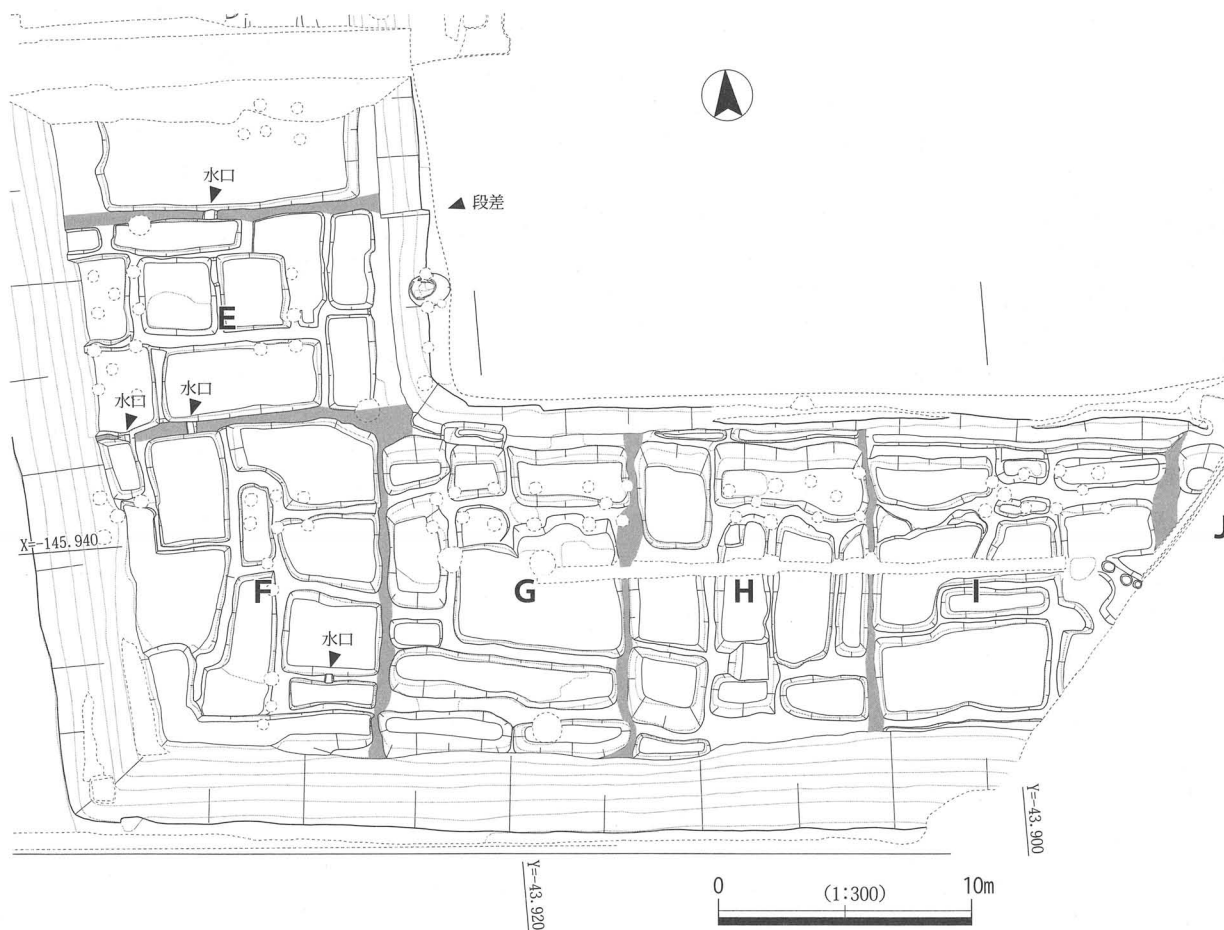


図95 堀83南半部の堀障子区画

(6) 堀機能時の堆積環境

堀の基盤層となる地山面は、T.P.14.5～15.5 mを境に下方がグライ化の著しい暗灰色海成粘土層、上半が明黄灰色の粗砂層である。調査時にはSMWによって外界とは遮断されていたが、この層境からは少なからず、湧水がみられた。今回の調査で検出した堀の大半は上記の海成層を基盤としており、当該層を微細に観察すると極細砂と粘土の薄層が互層となっており、急峻な角度で掘り込んでも崩落が生じにくく、かつきわめて透水性の低い土層である。

後述するように、堀83は最終的には人為的に埋め戻されているが、堀底付近には、堀が機能していた段階での堆積層が認められる。当然のことながら、堀底の状況が異なるために必ずしも一様ではない。細部については、図108～112に掲げた土層断面図を参照いただき、ここではその大略について記述を進める。

堀全体に共通する点としては、堀の埋め戻しに関わる人為的な客土層を除去した段階で若干のレベル差はあるものの、止水堆積による黒色粘土層をほぼ全面で検出していることである。この黒色粘土層はきわめて粘性の高いヘドロ状の堆積である。堀83の南半部では、この黒色粘土層が下層の障壁に対応する形で高まっており、この堆積状況からみて堀が機能している段階では、湧水によって少なくとも堀障子の障壁の上面を超えて、湛水した状態であったのは明らかである。

ただし、この状況は南半部のEブロックからJブロックに顕著な状況であり、北半部では同様のヘドロ状の黒色粘土層の堆積はみられるものの、障壁の上面を超えるほど湛水状態ではなかったことが窺われる。とくにAブロックのA1～A4とした堀障子内では黒色粘土層の堆積は見られず、ほとんど水が溜まらない状態であったことが窺われる。Aブロックの堀障子と堀の南半部で検出した堀障子とでは様相が異なっており、このことは堆積状況にも反映している。

また、多くの堀障子ではこの黒色粘土層の下層に堀障子を掘削した際の崩落土などと考えられる地山起源のブロック土を含むシルト層の堆積も観察される。

いずれにしても、南半部を中心とした堀障子は、少なくとも大坂冬の陣直後に埋め戻される段階には、障壁の上面さえも覆い隠すように粘性の高い泥と泥水が溜まっていたものといえる。すでに報告したように、一部の障壁には水口が見られることを考えると、障壁そのものが防御的な意味をもつものではなく、後の軍学書である『武教全書講義』（廣瀬1944）などに記されるように、水田畦畔のごとく、湛水を目的とするものである可能性が高い。

堀底のレベルは南が高く、北に向かって低くなっている。したがって、堀の南半部が湛水した状態であれば、少なくとも障壁144までの間は一時的ではあっても、湛水していた可能性が高いものと判断される。

なお、土壌分析でもこの黒色粘土層では好汚濁性種の珪藻が優占するという結果が報告されており、これは上記の考古学的な調査所見とも呼応する。

また、蛇足ながら、堀83は人為的に埋め戻されたこともあり、埋め戻し直前の様相を非常に良く残している。本来、石垣などとは異なり、土が露頭した素掘りの場合、地面の表面には植物が生えたり、酸化したりして土壌化する。しかしながら、堀83の法面はグライ化しているとはいえ、ほとんど土壌化した部分が見受けられず、しかも、雨水などが斜面を流れて生じる浸食痕跡もまったくみられない。また、すでに報告したように堀の内側法面の1箇所、30 cm前後のクランク状の段差が残り、ここでは直角のエッジをもつ段差が風化することなく残っている。

上記のような調査成果を勘案すると、堀 83 では埋没の直前に堀の斜面を削り直すなどの整備がなされていた可能性が高いものといえる。

3. 護岸遺構

(1) 遺構 141

①概要

堀 83 の南北堀の東法面中段から検出した遺構である。北半部および南端部に攪乱が及んでいる上に、東側に堆積する土砂の土圧によって変形している部分も多い。しかしながら、骨組み構造等はほぼそのままの形で残されており、変形するなどして旧状を損ねてはいるものの、造営当初の具体的様相を実によく残している。

計測値を含む細部の状況については、後述するが、最初に基本的な構造を概説しておくことにしたい。

当該遺構は、まず堀の中段を 2 段の階段状に掘り込んで平坦面を造成し、その下段の平坦面に杭を打ち込んで骨組みを作っている。杭は南北方向の 2 列でおおむね 2 m 強の間隔である。次にこの 2 本の杭を梁で繋いで門型の骨組みを作り、その西側には堀の法面側にも杭を打設しつつ土塁を構築している。土塁の東西両壁面は竹しがらみを用いて、垂直に護岸している。平面的には中程で掘り込みの東法面と土塁の間が細くなっており、南北に 2 つに分かれていた状況が看取される。南側の掘り込みの北寄りには当該遺構の背面にある平坦面から竹を用いた暗渠が作られ、この暗渠は土塁を貫いて堀へと伸びている。

当初、遺構の構造のみの偏向的解釈によって、当該遺構については短絡的に堀に侵入した敵兵を銃撃するための防御施設と考えていた。その後、この解釈について森田克行氏（高槻市教育委員会）から再考すべきとの重要な指摘を受けた。報告書作成過程では、森田氏の指摘を真摯に捉え、虚心坦懐に再検討を行った。しかしながら、結果的には森田氏の指摘に照らすことによって、筆者が調査時から疑問に思いつつも未解決であった多くの問題が氷解することとなった。さらに進めて、上層で検出した礫群 91 や土層の整合性を再検討することによって、少なくとも下段平坦面では土塁の背面にあたる東側は人が入ることができる空間とはなっておらず、土留めとしての土塁が構築された後、すぐに埋め戻されていたと考えることが最も妥当な見解であるとの結論に至った。

これまで、「トーチカ状遺構」などの名称を与えて、ことあるごとに特殊な防御施設として発信してきたが、今回の報告にあたっては堀に法面の護岸のために行われた土木工事の痕跡である蓋然性がきわめて高いことを明記し、遺構 141 に関する前言、前文を撤回して報告を進めることにしたい。

②平面構造

上記のように遺構 141 は堀の西側法面の中位を 2 段の階段状に掘り込んで造成している。土塁などが造成される下段の平坦面には、西側に凸形に突出した部分があり、大きく南北に二分できる。ここでは、2 段の平坦面をそれぞれ上段平坦面と下段平坦面、下段の平坦面については南側を下段南側平坦面、北側を下段北側平坦面と呼称して報告を進めることにしたい。

上段平坦面は東西幅 5.6 ～ 6.6 m で南北長は不明である。当該平坦面のレベルは南側の最高所で 16.08 m、北側の最低所で 15.74 m を測る。地勢と同様に北に向かって緩やかに傾斜するが、全体にきわめて平坦に造成されている。この平坦面は上層の砂礫層と下層の粘土層に地山が分かれる土層の境界にあたり、この層境を意識して平坦面が造成された可能性が高い。この平坦面の東端約 49° の角度で急峻に立ち上がる法面となる。この法面の上端は削平されているものの、下端は旧状を留めている。

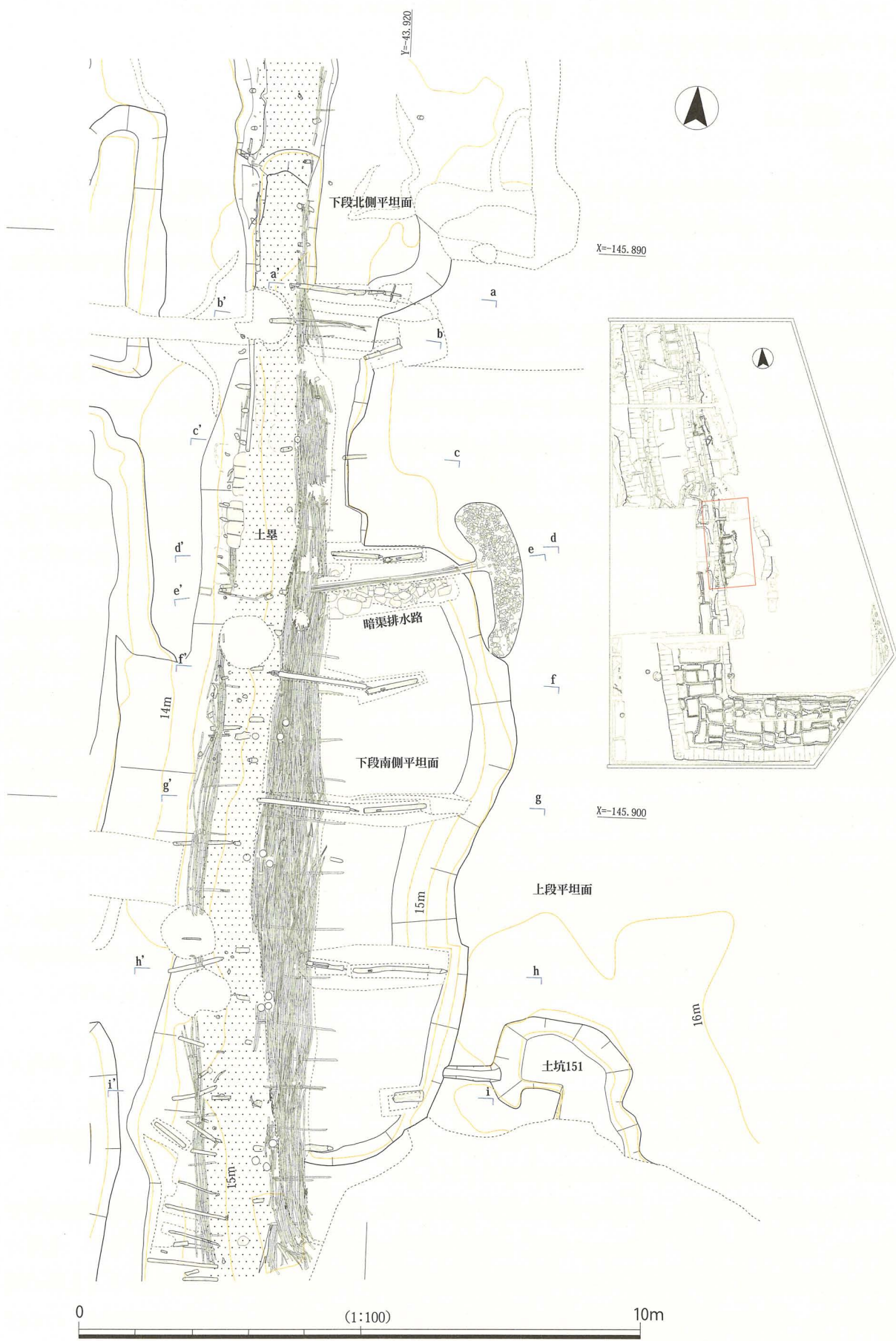


図 96 遺構 141



図 97 遺構 141 下層

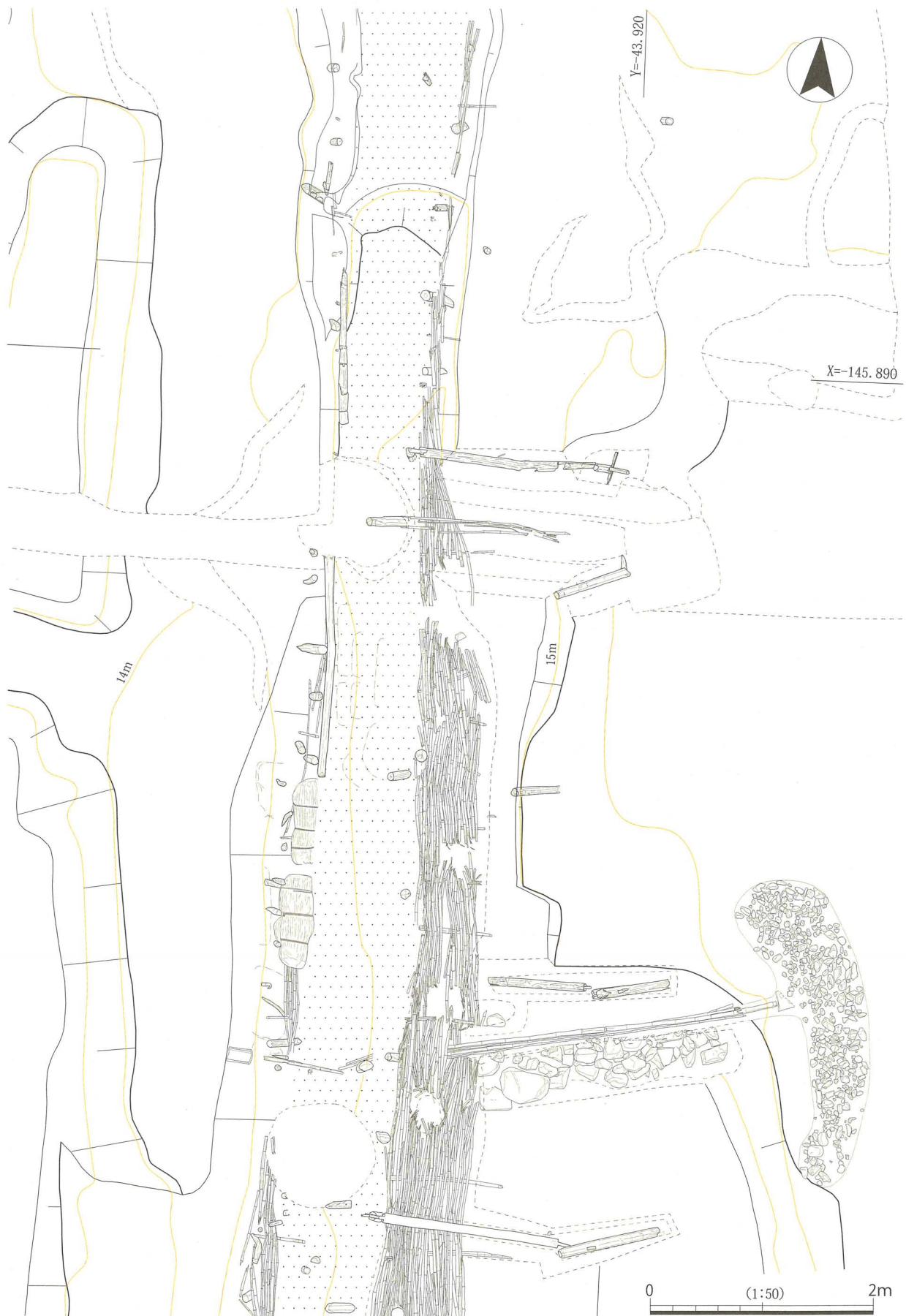


图 98 遺構 141 (北半)



図99 遺構141(南半)

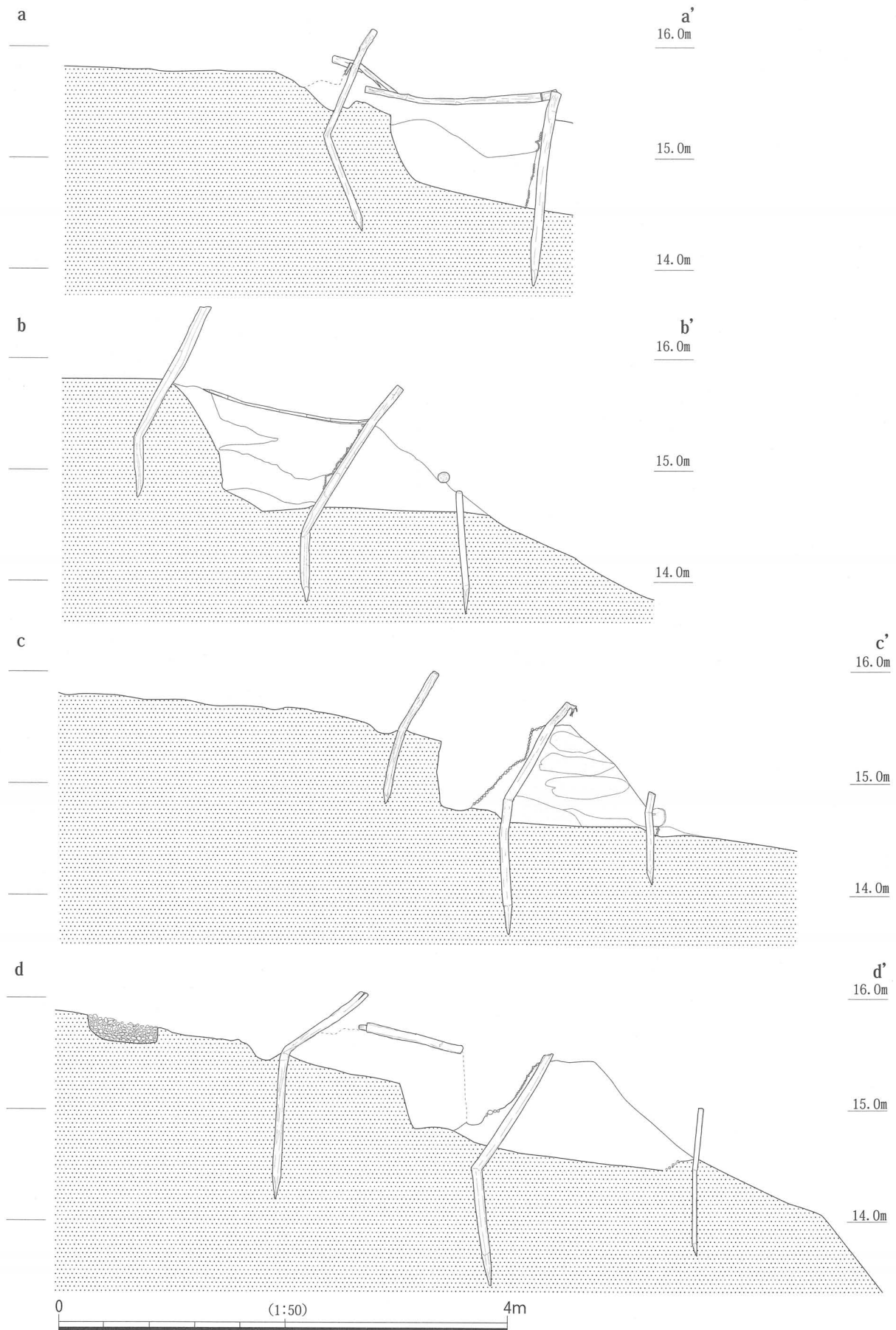


图 100 遺構 141 断面图 (1)

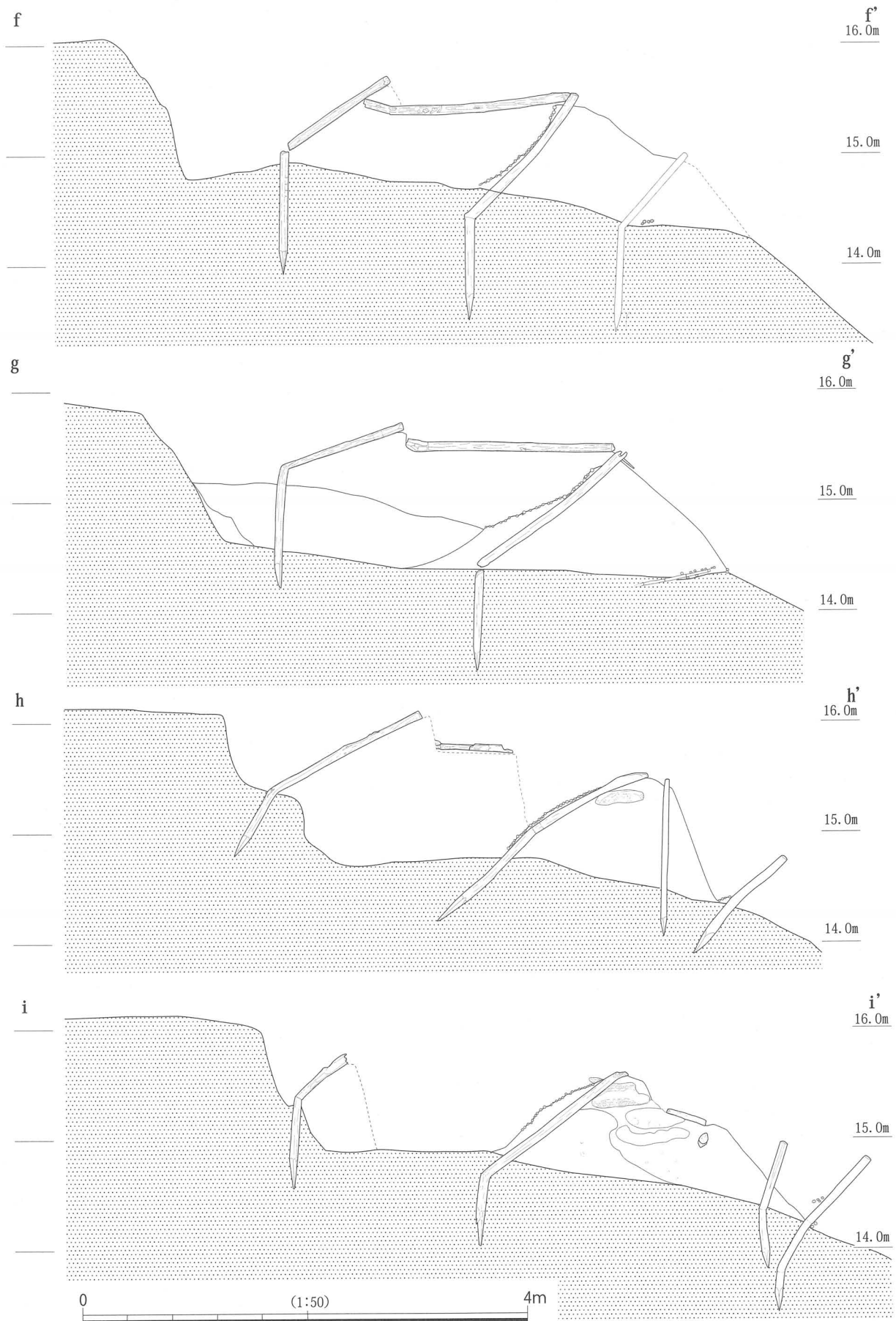


図 101 遺構 141 断面図 (2)

この下端線は、直線的ではなく、下段平坦面の上端に呼応する形で東側にふくらんでいる。

下段南側平坦面は、南北約 11.0 m、東西は土塁西辺までで 2.6 ~ 3.4 m を測る。東辺は緩やかに蛇行しており、整正な矩形を呈するものではない。深さは 1.24 ~ 1.28 m でほぼ均一である。

この北側では、最も狭い部分で幅を約 0.35 m に減じ、これが約 4.5 m 続いている。当該部分の東辺は直線的である。深さは約 0.78 m である。一見するとこの部分は深さを減じているようにみえるが、これは肩部のレベルが下がっているためである。底面のレベルは南側の掘り込み部分と同様に T.P.14.75 m 前後で掘り込みの底面は、レベルを合わせて平坦に掘削することを意図していた状況が看取される。ただ、微視的にみると、底面は西側に向かってわずかに傾斜している部分もある。

下段北側平坦面は大半が攪乱によって破壊されているが、南東隅部分がわずかに残っている。現状では正確な規模は判然としないが、攪乱の範囲内で収まっていることは明らかであり、南北長は長く見積もっても 7 m 前後であったと考えられる。幅は南東隅で 2.6 m であり、規模はやや小さいながらも南側平坦面と同様の掘り込みが行われていた可能性が高い。

③ 骨組み構造

遺構 141 では土塁を構築するにあたって、木杭や、梁などを用いて骨組みを作っている。木杭の一部には粗い面取りを行ったものもあるが、杭の先端加工やほぞ穴など以外には、ほとんど手を加えておらず、多くのは樹皮をそのまま残した丸太材である。

土塁西側の状況を見ると、まず最初に図 97 に赤色で示した直径 10 cm 前後の木杭を南北に直列して打設している。間隔は、若干の差はあるものの、0.7 ~ 1.0 m 間隔のものが多い。長さは最も残りのよいもので、2.6 m を測る。南から 5 本目の木杭は長さが足りなかったためか、2 本の杭を縄で縛って使用している。

木杭は、いずれも東側からの土圧によって西側におよそ 45° 前後の角度で倒れこむか、もしくは、

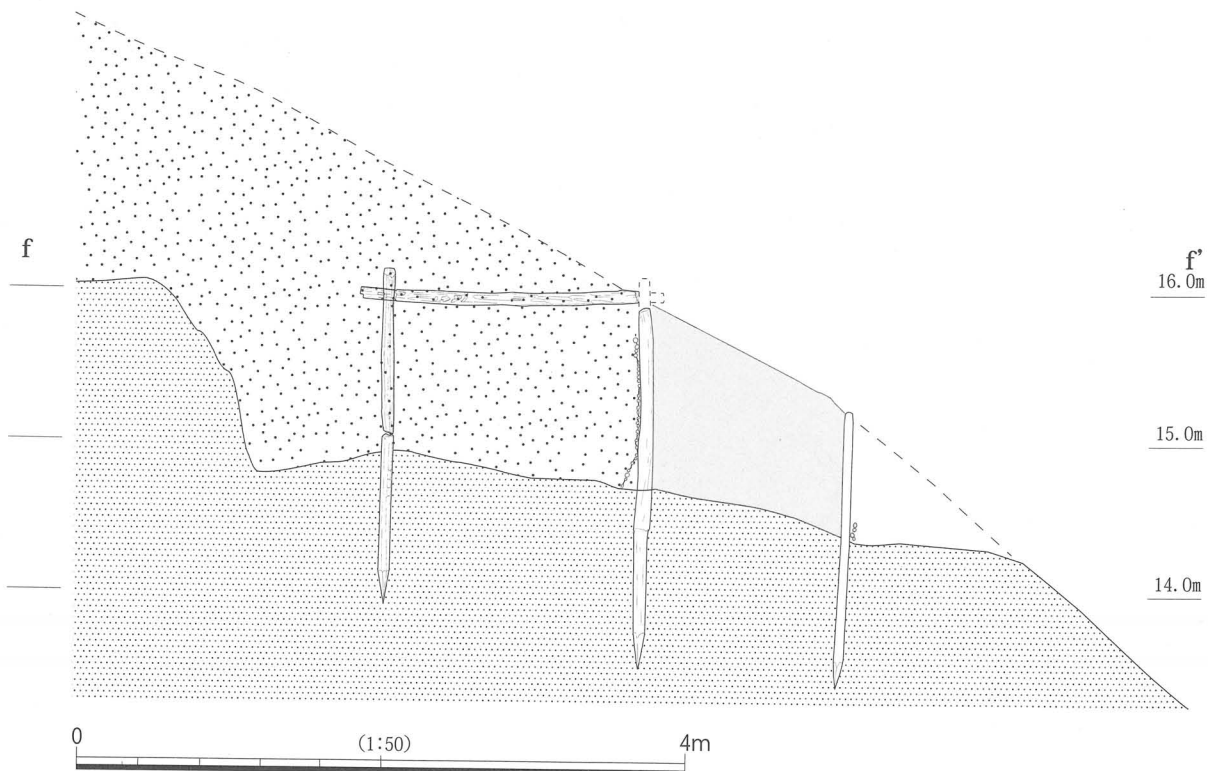


図 102 遺構 141 復元断面図

地中に打ち込まれた先端部分を残して西側に倒れ込んでいる。地中に残る木杭の先端部の状況をみると、多くの木杭は先端から 0.9 m前後が地山に打ち込まれていたようである。

また、この木杭は南から 4 本目（図 96 の i - i'）、7 本目（h - h'）、10 本目（g - g'）、13 本目（f - f'）、16 本目（d - d'）といったように、おおむね 3 本おきに控えの木杭が打設され、これを梁で連結している。長さは最も残りのよいもので 2.6 m、直径は 10 cm強である。南側土坑での木杭と控えの木杭との間隔は、比較的旧状を残す杭の先端付近の計測値でみると、最も間隔が狭いのが、f - f' で 1.65 m、最も広いのが h - h' で 1.92 mを測る。ただし、後者では杭の先端部分を含めて西側に向かって倒れ込んでおり、不確定要素を残す。平均すると間隔は 1.7 m前後であったと考えられる。また、f - f' および g - g' では、梁がほぼ旧状のまま残っており、この梁の両端に残るほぞとほぞの間の内法を計測すると、前者では 1.60 m、後者では 1.63 mを測る。したがって、土塁西辺の木杭と控え木杭の間隔は内法で 1.6 m前後の間隔で設計されていたものと考えられる。

なお、土圧で変形した骨組みを旧状に復元すると、図 102 に示したように梁は水平であったことが看取される。地面から梁までの高さは 1.3 mであったと推定され、この高さは上段平坦面の高さ、すなわち掘り込み面の高さとはほぼ同じである。なお、梁の上面には、釘穴や紐擦れの痕跡などは確認できない。

木杭と梁の連結部は写真図版 29 に掲げたように、梁にほぞを設け、ほぞ穴を穿った木杭と連結している。さらに、ほぞには矩形の穿孔があり、この部分に楔状の門を打ち込んで固定している。

下段の南側平坦面と北側平坦面との間の狭い部分に関しては、杭の間隔も狭く、b - b' では 1.05 mである。なお、b - b' 間では丸太を用いた梁は用いられず、4 本の竹が残っている。縄などを用いて結束し、梁の代わりにしていた可能性が高い。なお、同様の工法が後述する遺構 154 でも見られる。

また、北側土坑では上部を欠失するが、控えの木杭の先端がかろうじて残っており、ここでも土塁西辺の木杭と控え木杭の間隔が約 1.7 mである。残りは悪いが、南側平坦面と同じような骨組み構造を有していた可能性が高い。

この構造は、後述する竹しがらみとの関係でいえば、土塁を支持する柱と控え柱という関係ではなく、東からの土圧に対しての土留めとしての土塁が堀側に倒れ込むのを防ぐための構造であるといえる。杭と梁とが門をもつほぞで結合されていることや、木製の梁の代わりに竹が用いられていることも、ここにかかる力が引っ張り力であったことを証左するものである。

④土塁

遺構 141 の下段平坦面では堀側に南北長 23.5 mの土塁を検出している。南北端はいずれも攪乱されているが、周囲の状況からみて、さほど広がるものではない。とくに南端はわずかに攪乱されるが、ほぼ旧状を残すものと考えられる。

南側平坦面の西側で検出した土塁は、東からの土圧で西側に崩落しているために原形を留めない。したがって、正確な規模は提示できないが、東西両面を竹しがらみで護岸しており、この竹しがらみの基底部分の幅をとると、幅 1.8 ～ 1.9 m前後の幅を有するものであったと考えられる。北側平坦面の西側では、土塁の上面は削平されているものの、基底部はほぼ原形を保っている。ここでは幅 0.95 mを測り、南側に比して幅を減じている。

土塁は地山の掘り残しではなく、すべて盛土で構築されている。とくに、版築などによって丁寧に盛土を行ったような状況は看取されないが、要所には俵に土を詰めた土俵を積み上げている。土俵は土圧によって扁平に変形しているが、そのうちの一つの計測値を示すと、長さ約 85 cm、幅約 65 cm、厚さ

約 20 cm を測る。法量や形状からみて米俵を転用したものであると考えられる。

土塁の東西の両壁面は竹しがらみによって護岸されている。竹は直径 3 ～ 4 cm 前後のものを、半裁することなくそのままの形状で使用している。すでに記したように南側平坦面では、堀に向かって倒れ込んでいるが、北側平坦面では垂直に立ち上がる壁面が残っている。この竹しがらみは土塁壁面を垂直に立ち上げるためのものであったと判断される。なお、調査時において、東壁の竹しがらみを覆う土砂を除去した直後、竹の一部には青竹の色調を残した部分を確認している。

東壁の竹しがらみは、図 97 を見てもわかるように、基本的には木杭の中間に先端を斜めに切り落して尖らせた竹杭を打ち込んで、それを横方向の竹で縫うようにしている。土塁の高さは東壁は 1.1 m 前後であったと推定される。一方の西壁は堀の法面側に倒れ込んでいるために全体に残りが悪いが、北側では竹しがらみの上面に横木を置いた箇所も確認できる。また、南半でも竹しがらみは 30 ～ 50 cm の高さ分しか残らない。上部が破壊された可能性を考慮する必要もあるが、西壁に打設された木杭が相対的に細いことなどを考えると、元々、東壁に比べて高さが低かった可能性もある。

また、西壁部分には土俵を貫くようにして打ち込まれた木杭なども確認でき、補強もしくは補修のために数度にわたって木杭が打ち込まれている状況が看取される。西壁の高さは推測するしかないが、杭や護岸の状況から勘案して図 102 の復元断面図に示したように 0.85 m 前後であった可能性が高い。

なお、この土塁を護岸する竹しがらみのうち、東壁の竹しがらみは骨組み構造を成す木杭の東側に作りつけられており、土塁壁面を保護する目的であれば、その関係は逆に竹しがらみを杭で押さえる構造をとる方が自然である。細い竹杭を支柱として竹しがらみを組んだ東側壁面の状況は、土塁を保護するというよりも、後述するように東側からの土砂をおさえるためのものであったと考えることができる。繰り返しになるが、ほぞで結束された木杭と梁の関係も単に土塁を支持するという構造ではなく、東からの土圧に対する土留めの役割をもつ土塁が堀側に倒れ込むのを防ぐための構造であるといえる。

⑤ 暗渠

南側土坑の北端部から竹を用いた暗渠排水路を検出している。この暗渠は土坑内の水を排水するものではなく、上段平坦面に集水用の土坑を設け、竹を用いた排水管が土塁を貫き、堀に排水するものである。すでに記述してきたように上段平坦面は地山上層の砂礫層を除去し、透水性の悪い地山下層の海成粘土層上面までの掘削を行っている。したがって当該暗渠の集水部は透水性の悪い地山粘土層上面の地下水を排水するためのものであるといえる。

集水土坑は南側土坑の北東に位置し、南北約 2.8 m、幅 0.5 ～ 0.8 m、深さ 0.3 m を測る。土坑内には、

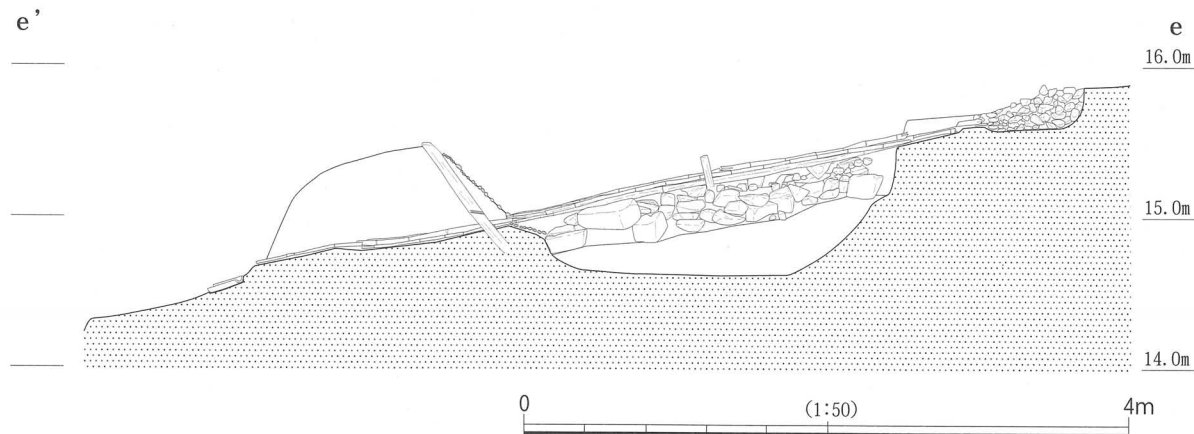


図 103 遺構 141 暗渠立面図

径5 cm前後の円礫が充填されている。土坑は緩やかに湾曲し、西辺のやや北寄りからは竹を用いた排水管が西にのびる。排水管の上面には平瓦が布置されている。

排水管は12°前後の傾斜で堀に向かって真っ直ぐに敷設されており、下部には盛土と石積みを行い、基礎を造成している。基礎の石積みは一定の盛土を行ったのちに一辺30 cmを超える大きめの扁平な石を、上面を揃えて敷き並べ、その上に排水管との間を微調整するように小さめの石が粘土とともに充填している。なお、一部の石材には被火痕跡がある。

配水管は竹を半裁して節を除去した後に、再び組み合わせて表面を隙間なく藁縄で巻いて管状にしている。直径は約4～5 cmで堀側が細い。さらに、周囲には直径3～4 cm前後のやや細めの竹4本を添えるようにして補強し、隙間には藁が充填されている。暗渠という性格を鑑みると、上方からの土圧に対する保護であると考えられる。

なお、この排水管は土塁を貫いて堀側に抜けており、出水口には、水を受ける部分に丸瓦が凹面を上面にむけて布置されている。

この暗渠排水路は、既述のように下段平坦面部の排水を意図したのではなく、上段平坦面からの排水を目的に設置されたものである。また、暗渠排水管下の基礎が石積みによって丁寧に行われているのは、上方からの土圧によって、排水管が沈み込んで機能不全を起こすことに対するものであると判断される。

したがって、遺構141は下段平坦面のみで機能していたのではなく、2段の平坦面造成と土塁による土留め支保工、それに付随する暗渠がすべて同時に行われた蓋然性はきわめて高い。

また、下段の南側平坦面の南東では、一部が攪乱によって破壊されているが、深さ約60 cmの土坑を検出し（土坑151）、ここから幅約25 cm、深さ約15 cmの溝が南側土坑に抜けている。この遺構は上記の暗渠排水路を完掘した状況に類似している。土坑の埋土は地山ブロックを多量に含む明黄褐色シルト混じり粗砂層であり、埋土の状況から堀の埋め戻しが行われる以前に人為的に埋め戻しが成されていた可能性が高く、何らかの理由で施工途上で放棄されて埋め戻された排水施設である可能性が高いものと判断している。

⑥埋没状況

図104には遺構141を横断する部分の土層断面を掲げている。西半部は旧府警本部の建物によって攪乱されて残らず、またこの時に一部で地すべりを起こし、土層断面に不整合部分を生じている。この断面では下層のヘドロ状の黒色粘土層（土層番号52）以下が堀が機能していた段階の堆積層であり、最上層（土層番号1・2）は現代の整地層である。当初、この両者に挟まれた最大5 mの間のすべての土砂を堀の埋め戻しに関わる客土層であると考えていた。

しかしながら、森田克行氏の指摘を受けて、土層断面図および写真資料を再検討した結果、まったく別の解釈が成り立つことが明らかとなった。

結論的にいえば、遺構141の土塁を挟んで東と西では、同じ客土層であるとはいえ、まったく異なる性状をもち、東側は堀掘削時もしくは改修時の客土、西側は大坂冬の陣後の埋め戻しに伴う客土である可能性が高いのである。

事実、調査では礫群91を検出した段階で堀83南北堀の東辺に沿う法面を検出し、これ以下の客土には遺物を1点も含まないことも確認していた。しかしながら、調査時には遺物をまったく含まないという点に関しては、この客土層が堀の内側に土塁状に盛られていた土砂を落し込んだが故の現象である

と考え、先に報告した上段平坦面と下段平坦面は堀機能時には、そのままの形で露呈していたと考えていた。

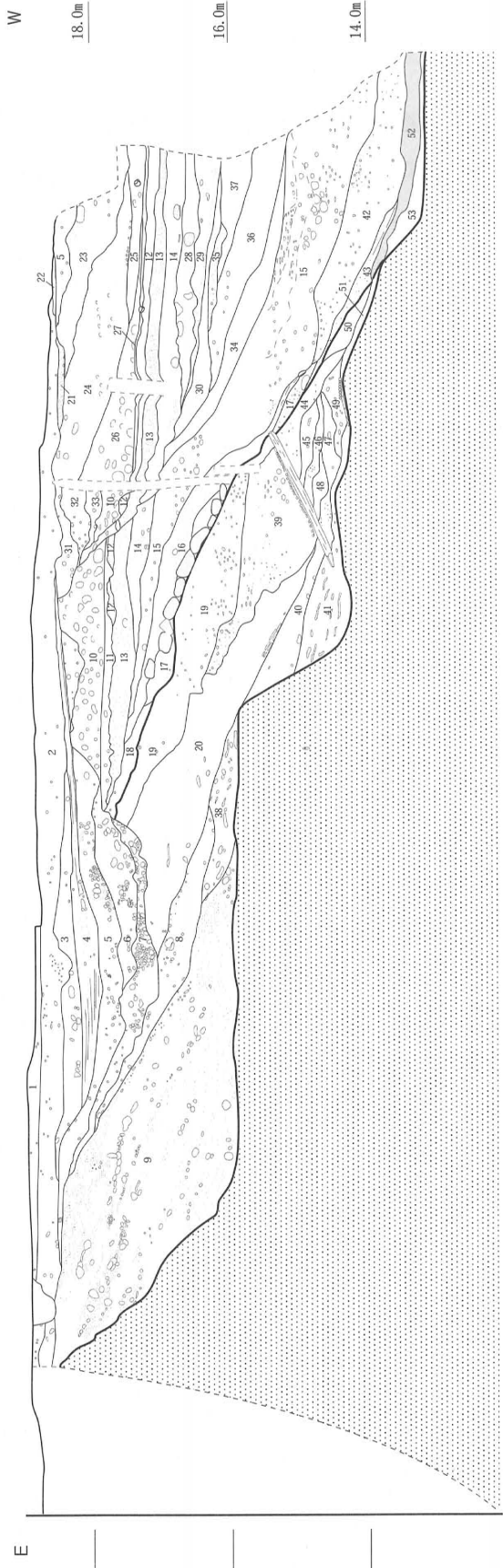
しかしながら、すでに記してきたように暗渠排水路の状況をもみても分かるように、少なくとも下段平坦面がオープンな空間であったとは考えられないとの結論にいたる。

ここで改めて土層断面に目を移すと、遺構 141 の土塁以東は、かなり大きな単位で客土がなされていることが看取される。また、大きく2分される土層は下層が黄色の砂礫層、上層が暗青灰色の粘土層と、地山の層準と逆転していることも窺われる。上下2段の平坦面が掘削後、さほど時間をおかず埋め戻されたことを示すものである。

上段平坦面の東側法面が砂礫層の地山を掘り込んでいるにも関わらず、急峻な斜面を保ち、しかも法尻に崩落した土砂がまったくみられないこと、5m以上の平坦面を造成しながらも、まったく遺構が認められないことなどを勘案すれば、この上段平坦面から西側の土留めとしての土塁までが、基礎工事を行ったうえで埋め戻して法面を造成する土木工事の痕跡であったと捉えることができるのである。



写真 11 遺構 141 土層断面
(上段：上層断面合成写真、下段：下層断面)



1. 褐灰色粗砂混じりシルト(炭化物粒、瓦片等含む)
2. 灰黄褐色砂礫混じりシルト(径15cm以下のシルト・粘土ブロック含む、炭化物粒多い; 客土層)
3. 黄灰色シルト(径20cm以下のシルト・粘土ブロック多く含む、下部は粘土・砂礫多く含む; 客土層)
4. 浅黄色粗砂(下部にFe沈着、東半部では黄灰色シルトと厚さ2~3cm幅の互層となる、自然堆積に近い)
5. 灰色シルト(径3cm以下の礫、径5cm以下のシルト・粘土ブロック多く含む; 客土層)
6. にぶい黄褐色シルト(径15cm以下のシルト・粘土ブロック多く含む、Fe沈着; 客土層)
7. 暗灰黄色シルト(径5cm以下の灰黄色粘土ブロック多く含む)
8. 灰黄色粗砂(径5cm以下の灰黄色粘土ブロック多く含む; 客土層)
9. にぶい黄褐色粗砂・シルト(殆ど全体が径20cm以下の粘土・シルトブロックに入る、約30°の角度で細かく堆積する、一括客土)
10. にぶい黄褐色粗砂・シルト(炭化物、径2cm以下の粘土・シルトブロック含む、部分的に砂層入る)
11. 灰色シルト(炭化物、径2cm以下の粘土・シルトブロック含む、部分的に砂層入る)
12. 灰オリーブ色粗砂(径2cm以下の粘土ブロック含む)
13. 明黄褐色粗砂(均質だが、径15cm以下の粘土ブロック若干含む)
14. 灰オリーブ色シルト(粗砂、径3cm以下の粘土ブロック多く含む)
15. オリーブ灰色シルト(径5cm以下の灰黄色粘土ブロックを多く含む)
16. オリーブ灰色シルト(径2cm以下の粘土ブロック若干含む)
17. オリーブ灰色シルト(礫群の層はこの層に含まれる)
18. 緑灰色粗砂(径2cm以下の粘土ブロック含む)
19. 灰色粗砂混じり粘土(径5cm以下の粘土ブロック若干含む)
20. 灰色粘土(粘土と極細砂の互層堆積層をブロック状に落とし込んだ層)
21. 灰白色粗砂(径5cm以下の礫含む)
22. にぶい黄色シルト(径5cm以下の粘土ブロック若干含むが密)
23. 黄褐色粘土(径2cm以下の粘土ブロック含むが均質、Fe・Mn沈着)
24. 灰色粗砂混じりシルト(径5cm以下の礫含む)
25. にぶい黄褐色シルト(暗黄褐色粘土ブロック多い)
26. 暗緑灰色粗砂混じり粘土(比較的均質)
27. 暗緑灰色シルト(径15cm以下の粘土・シルトブロック含む、上面に植物遺体が薄く堆積)
28. 暗緑灰色粗砂(部分的にブロック状の粗砂含む)
29. 暗緑灰色シルト(径5cm以下の粘土ブロック含む)
30. 緑灰色中砂~シルト(径3cm以下のオリーブ黄色シルトブロック少量含む; 地山起源土)
31. 明黄褐色粗砂混じりシルト(径5cm以下の灰オリーブ色シルトブロック多量を含む)
32. にぶい黄褐色粗砂混じりシルト(径5cm以下のオリーブ黄色シルトブロック、径3cm以下の明褐色粘土ブロック少量含む)
33. 黄褐色中砂~シルト(径5cm以下のオリーブ黄色シルトブロック、径3cm以下の明褐色粘土ブロック少量含む)
34. オリーブ灰色シルト(径10cm以下の粗砂・粘土ブロック含む)
35. 灰白色粗砂(径10cm以下の粗砂・粘土ブロック含む)
36. 灰色粘土(植物遺体、炭化物粒若干含む)
37. 明黄褐色粗砂混じり粗砂ブロック(径10cm以下の褐色粘土ブロック、暗オリーブ灰色シルト~粘土ブロック多量を含む)
38. 明黄褐色粗砂混じり粗砂ブロック(径10cm以下の褐色粘土ブロック、明黄褐色粘土ブロック多量を含む)
39. 暗オリーブ灰色シルト(径5cm以下の明黄褐色粘土ブロック含む)
40. にぶい黄褐色粗砂混じりシルト(灰色粘土ブロック、明黄褐色粘土ブロック多量に混じる)
41. オリーブ灰色中砂~シルト(径1cm以下の灰黄色シルトブロック、青灰色シルト~粘土ブロック多量を含む)
42. 暗灰色粗砂
43. 灰色粗砂混じりシルト(径1cm以下の明緑灰色粗砂ブロック、褐色シルトブロック微量を含む)
44. 灰色シルト(径3cm以下の明緑灰色シルトブロック、明赤褐色シルトブロック少量含む; 地山起源盛土)
45. 灰色粗砂混じりシルト(径1cm以下の明緑灰色シルトブロック多量を含む)
46. 灰色粗砂混じりシルト(黄褐色シルトブロック多量を含む)
47. 灰色粗砂(21と対応が)
48. 灰色シルト(黄褐色シルトブロック微量を含む)
49. 灰色シルト(黄褐色粗砂混じりシルト混じる、径3cm以下の小礫少量含む)
50. 灰色微砂~シルト(明黄褐色微砂少量混じる)
51. 灰色シルト(明緑吹微砂少量含む; 堀築能時の堆積層)
52. オリーブ黒色シルト~粘土(へドロ状堆積; 堀築能時の堆積層)
53. 灰色シルト(地山起源盛土; 堀築能時の堆積層)

図 104 堀 83・遺構 141 断面図

土塁の倒壊と連動して原位置を保たないが、遺構 141 に伴う堀法面の盛土層上面では花崗岩の礫群を検出しており、この礫群 91 も一連の法面の土木工事に伴うものであると考えられる。

(2) 遺構 154

①概要

遺構 141 と同様に堀 83 の南北堀の東法面中段から検出した遺構である。上面を削平されている上に、堀の埋め戻しの際の東方からの土圧によって竹しがらみが堀側に倒れ込んで変形している部分も多いが、南北両端は竹しがらみの先端部までが遺存している。遺構 141 と同レベルに造営された遺構であり、細部では遺構 141 と異なる部分が多いものの、共通した性格を有する遺構である可能性が高い。

②平面構造

上面を大きく削平されているが、堀の法面を矩形で階段状に掘削して平坦面を造成している。規模は南北 7.6 m、東西は南端で 1.5 m、北端では 1.0 m 前後である。底面のレベルは南側で T.P.14.80 m 前後、北側で T.P.14.65 m 前後であり、北側に向かって緩やかに傾斜するものの、ほぼ水平である。この平坦面は遺構 141 の上段平坦面と同様に地山の層境に対応している。

③骨組み構造

矩形に造成した平坦面の西端の法肩におよそ 1 m 間隔で木杭を打設している。木杭は直径 6 ～ 10 cm 前後であり、遺構 141 とは異なり、一部の杭には六角形前後に面取り成形されたものもみられる。木杭の多くは先端が折損しているが、C-C' 断面にかかる木杭は土圧によって、折れているが、長さ 1.85 m を測る。この木杭を元に戻すと遺構の底面からの高さは 1.1 m となる。

また、南から 3 本目の木杭には控えの木杭があり、両者は竹で結束されている。杭間の竹の高さは平坦面から 10 cm に満たない。杭と竹がいかにして結束されていたかは、痕跡を残さないために不明であるが、当該部分の竹しがらみが旧状を留めていることを勘案すると、十分に機能を果たしていたことが窺われる。なお、同様の状況がすでに報告した遺構 141 でもみられ、既述のように竹を用いていることをみると、堀側に打ち込まれた杭が東に倒れるのを抑えるのではなく、堀側である西に倒れるのを防ぐための工夫であると考えられる。

上記のように法面の肩部に沿って打設された木杭の東面に竹しがらみを設けている。遺構 141 とは異なり、竹しがらみは一重である。堀側にも落ち込んでいないことから、当該遺構に関しては元来、土塁は構築されていなかったものと判断される。竹しがらみは、南側では直立して旧状を残すが、北側では堀側に倒れこんでいる。土塁は堀の法面との関係で見ると、さほど大規模なものであったとは考えがたい。

④暗渠

遺構 154 では平坦面の東側法尻に沿うように敷設された暗渠排水路を検出している。暗渠は南北 2 箇所に分かれる。南側の暗渠は竹しがらみに対応する位置から北に約 2.1 m のびて西に直角に曲がり、竹を用いた排水管が土塁を貫いて堀に向かっている。

南北方向の暗渠は幅 20 cm、深さ 10 cm の溝に一辺 5 ～ 15 cm の石を詰め込んだものである。一方、平坦面を横断して堀へ向かう東西方向の溝は竹の排水管の上面を平瓦で覆っている。竹の排水管はそのままの形状で節を抜いたものである。北側の暗渠は北に 4.7 m のびて西に直角に曲がり、節を抜いた竹を用いた排水管が竹しがらみの下を通して堀に排水している。南北方向の暗渠は、南側の暗渠と同様で幅 20 cm、深さ 10 cm の溝に一辺 5 ～ 30 cm の石を詰め込んだものであり、堀へ向かう東西方向の溝は

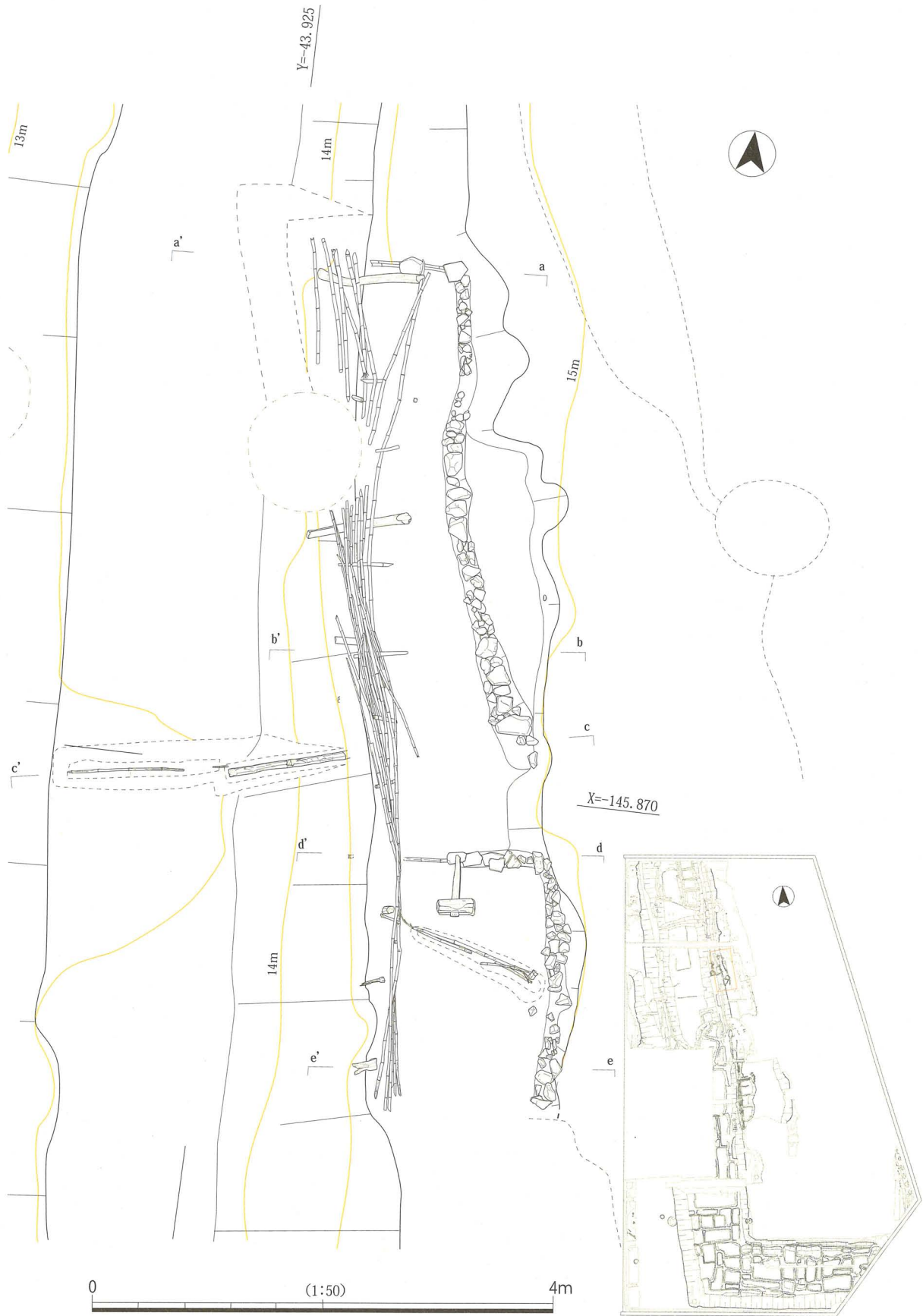


図 105 遺構 154

竹の排水管の上面を平瓦と扁平な石で覆っている。

⑤ 性格

当該遺構に関しても、調査・整理作業の過程では遺構 141 と同様に防御的な性格をもつ遺構であるとの先入観をもっていた。しかし、排水路を暗渠としていること、杭が堀の法肩ぎりぎりに打設されていること、竹しがらみが東側に面をもつこと、南側で検出した杭間を繋ぐ竹が引っ張り力を意図したものであること、などの諸点で防御的な施設とするには種々の矛盾がある。

結論的にいうならば、遺構 154 に関しても、遺構 141 とは規模も小さく細部では異なるものの、同様の土留め施設であった可能性が高いものと判断できる。

⑥ 出土遺物

遺構 154 からは南側暗渠の上面から掛矢が出土している。この掛矢は柄が途中で折損している。当初、当該遺構の埋没は、徳川方による埋め戻し段階のものと考えていたが、層位的にみて、遺構 154 造営時に折損したものが、廃棄されて埋められたと見るほうが穏当である。

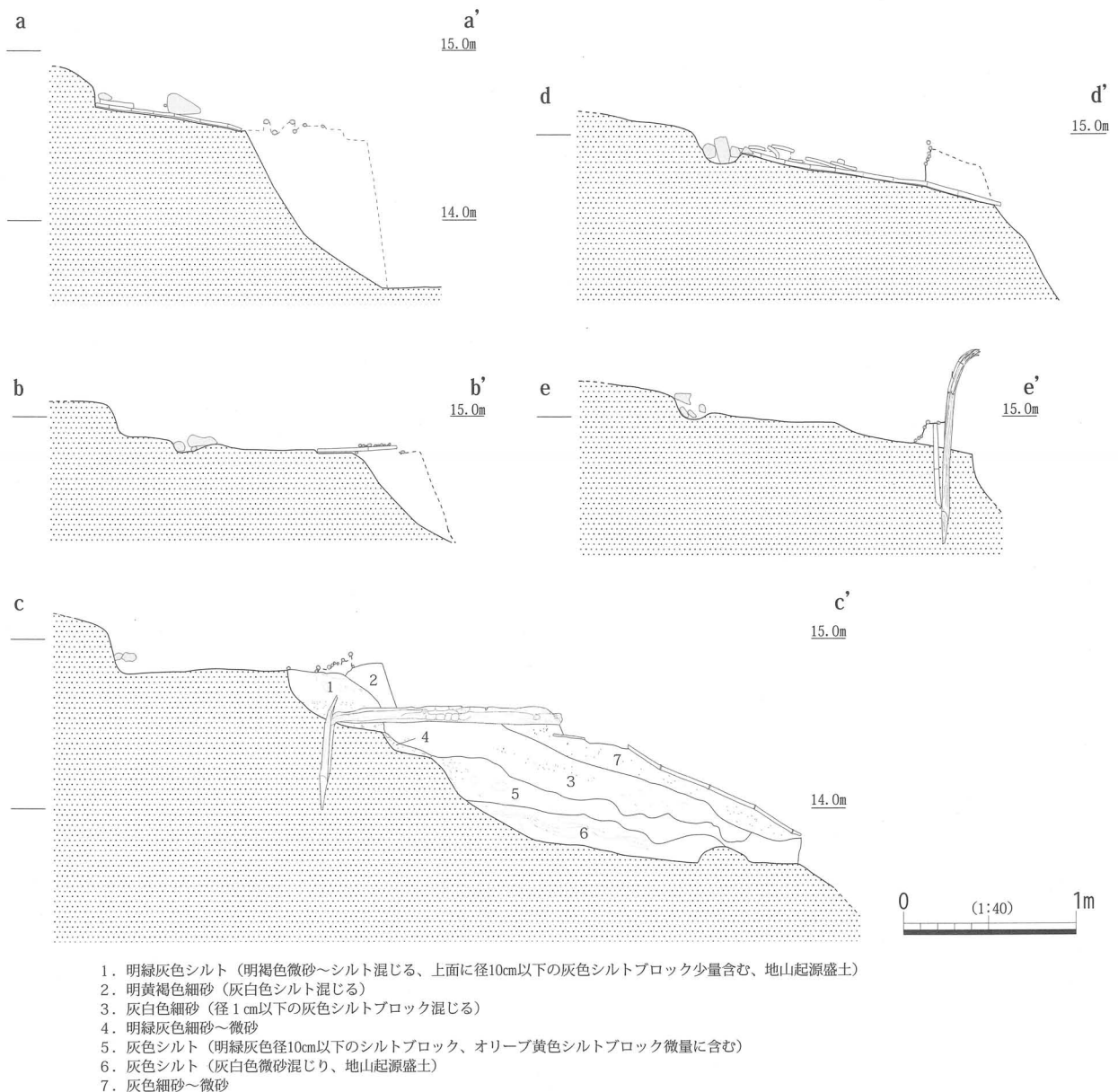


図 106 遺構 154 断面図

4. 杭列

(1) 杭列 165

堀 83 の南北堀の東側から検出した杭列である。遺構 141 の北東で南北方向に杭が打設されている。杭は 24 本を検出しており、ややばらつきはあるものの、ほぼ南北に直列している。

当該部分は旧府警本部の建造物の攪乱が直上まで及んでいる箇所であり、地山に打設されたこの杭列の年代を特定することは難しい。しかしながら、杭列の方向が座標北に対して $N-5.6^{\circ}-W$ で堀の方向に比較的近いことや先に報告したように人為的に埋め戻された豊臣前期の井戸 166 にも杭が打ち込まれていることなどを勘案すると、堀の掘削に伴う段階の杭列である可能性が高いものと判断している。

杭は直径 5 cm 前後で先端を尖らせる以外には成形せず、ほとんどが樹皮を残した丸太材である。上端はいずれも折損しているが、それでも長さ 1.3 m に及ぶものもある。

性格は不明だが、位置的にみて、堀の掘削に伴う土塁造成に関連するものである可能性が高いものと考えられる。整然と直列せず、一部ではジグザグに打設されている状況も看取されることから、土留め用の横矢板を固定するための杭列であったとも考えられよう。

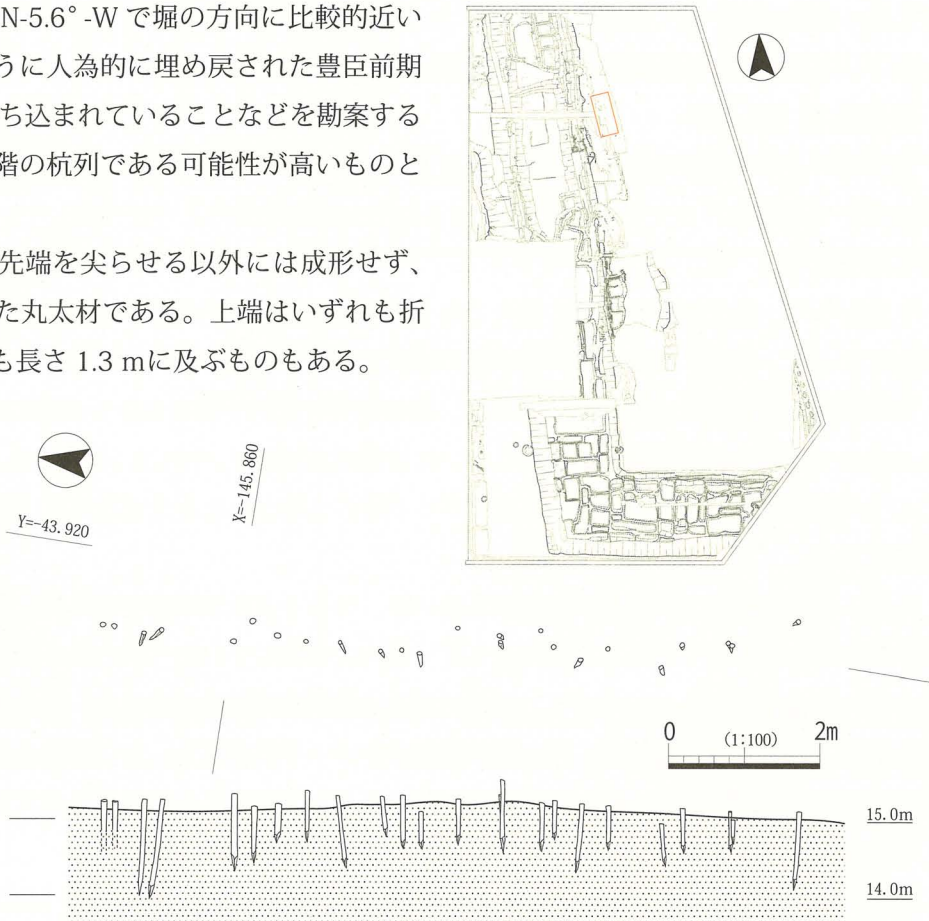


図 107 杭列 165

第2節 堀 83 埋め戻し関連の遺構

1. 前提

すでに記述してきたように、今回の調査では豊臣期大坂城に関連する堀を検出した。この堀は以下で報告するように、人為的な客土層によって一気に埋め戻された状況を呈している。この堀が今回の調査に至るまではその痕跡すら残していないのも、この埋め戻しが徹底されていたことの裏返しでもある。

堀の埋土中からは多種多様な遺物が多量に出土しているが、その中でも「菅平右衛門」木簡は堀の埋没時期を特定する上できわめて重要な意味をもつ。菅平右衛門は大坂冬の陣に藤堂高虎軍の一員として惣構南方に参陣し、講和後の堀の埋め戻しを巡って高虎と口論となり、慶長 19 (1614) 年 12 月 26 日に切腹する。

考古学的な調査成果と文献史料の整合から、堀の埋め戻しは大坂冬の陣の講和後に徳川方が行ったものである蓋然性はきわめて高いものといえる。さらに文献史料の記述を援用すれば、堀の埋め戻し作業

は、慶長 19 (1614) 年 12 月下旬から翌年 1 月下旬までのわずか 1 ヶ月あまりの間に特定することが可能となる。

2. 堀 83 埋め戻しの状況

(1) 埋め戻しの単位と様相

堀 83 は全域にわたって人為的に埋め戻されている。したがって、下層に堆積した一部の土層を除けば、いずれも人為的な客土層である。堀の延長が 150 m にも及ぶこともあり、その埋め戻しに関しては必ずしも一様ではないが、基本的な様相については共通する部分も少なくない。

以下、堀 83 の土層断面図に沿って記述を進めることにしたい。

① 南北堀 (北半部)

南北堀の上半は遺物の包含が僅少であるとの判断に基づいて、時間と経費の関係で上層に関しては重機を用いて掘削を行っている。図 108 に示した土層断面図の上方が欠落しているのは、これに起因するものである。

したがって、南北堀の北半部に関しては上層の状況を図示することはできないが、掘削途中における観察によって、後述する南北堀の南半部の状況と大きく変わるものではないことを確認している。

堀の法面には斜めに土砂が堆積するが、堀の中央付近の下層は大きく 2 層に分かれる。底面から 0.5 m 前後までの水平堆積層が堀が機能していた段階の堆積層で、それ以上が埋め戻しに伴う客土層である。この土層断面をみると堀の東側からはブロック状の土砂がかなり大きな単位で落とし込まれている状況が看取される。

一方、西側からはブロック状とはならないが、かなり大きな単位で埋め戻しが行われている。この東西両側からの埋め戻しによる土圧によって、堀内に堆積していたヘドロ状の黒色粘土層 (土層番号 42) は上方に大きく盛り上がっている。単純に当該土層断面の位置でみると、東と西からの客土の割合はおおむね 6 : 4 となる。東側からの客土の単位がブロック状を呈し、かつ割合が高いのは、堀の内側に構築されていたと考えられる土塁などを切り崩したことを示すものであると考えられる。

② 南北堀 (中央部)

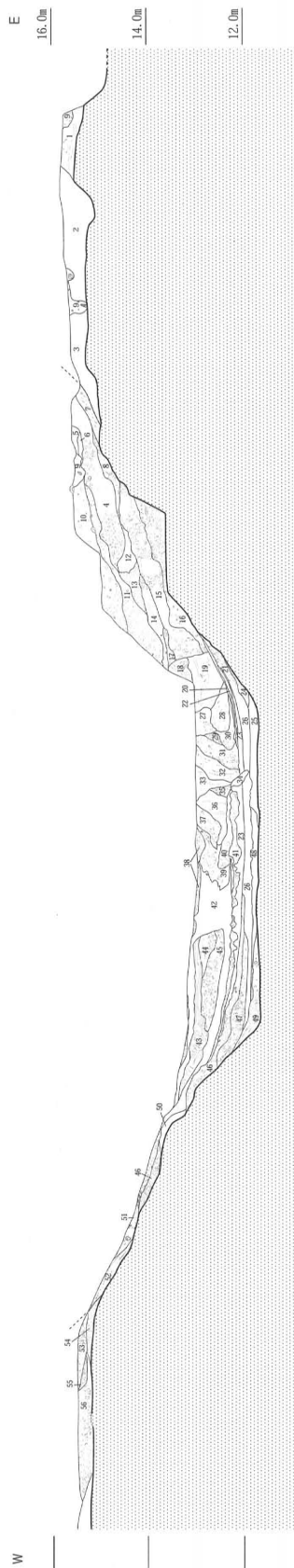
図 104 には遺構 141 を横断する部分の土層断面を掲げている。すでに、遺構 141 に関わる部分については報告を行っているので、ここでは堀の埋め戻しに関わる部分の状況のみを報告する。

西半部は旧府警本部の建物によって攪乱されて残らない。この断面では下層のヘドロ状の黒色粘土層 (土層番号 52) 以下が堀が機能していた段階の堆積層であり、最上層 (土層番号 1・2) は現代の整地層である。この両者に挟まれた最大 5 m の間が堀の埋め戻しに関わる客土層である。

ここでは、大きく 3 単位の埋め戻し工程が看取できる。まず第一に堀の底面から約 3 m までの間を 0.5 ~ 1.0 m 前後の層厚をもつ土砂を東側から堀の中央に向かって落とし込み、続いて、その上方は約 1.3 m の厚さを 0.1 ~ 0.3 m 前後の土砂を水平にいれて埋めている。そして最終的に、下層と同様に比較的大きな単位で土砂をいれて埋め戻しを完了している。

なお、この土層断面図で西側で斜め下方に落ち込むラインが観察できるが、これは旧府警本部の建物の地下工事の際に生じた地すべり痕跡であり、元来の堆積状況を示すものではない。

また、東側上方では幅約 6.3 m、深さ約 1.3 m の落ち込みが観察できる。この部分に関しては平面的な精査を行っているが、溝や土坑などといった明確な遺構としては確認できず、不定形な落ち込みであることを確認している。



1. にぶい褐色粗砂 (灰黄色中砂、黄灰色中砂混じる：盛土)
2. 橙色中砂～シルト (径 1cm以下の灰オリーブ色中砂ブロック含む：盛土)
3. 明褐色中砂～シルト (灰白色中砂～シルト混じる：盛土)
4. 灰オリーブ色中砂～シルト (径 3cm以下の灰色シルトブロック含む)
5. 暗灰黄色礫混じり細砂 (径 5mm以下の暗灰黄色シルトブロック含む)
6. 黒褐色礫混じり細砂
7. 灰色シルト (灰白色細砂混じる)
8. 灰色中砂～微砂
9. 粗乱
10. にぶい黄色中砂 (径 1cm以下の明オリーブ灰色シルトブロック多く含む)
11. 明黄褐色礫混じり細砂 (径 3cm以下の小石多く含む)
12. 灰色微砂～シルト
13. 明黄褐色粗砂 (径 3mm以下の礫多く含む)
14. 灰色細砂混じりシルト (灰オリーブ色細砂ブロック少量含む)
15. 黄灰色細砂～シルト層 (明黄褐色粗砂混じる)
16. 黄灰色礫～シルト (浅黄色細砂ブロック、黄褐色シルトブロック少量含む)
17. オリーブ灰色微砂～シルト
18. 灰色微砂～シルト (浅黄色細砂がラミナ状に含む)
19. 灰色微砂～シルト (浅黄色細砂が全体に混じる)
20. オリーブ灰色シルト (植物遺体層少量含む)
21. 灰色微砂～シルト (植物遺体層少量含む)
22. にぶい黄色微砂 (黄灰色微砂混じる)
23. 灰色シルト～粘土
24. オリーブ黄色細砂
25. 灰色シルト (にぶい黄色細砂、水平堆積)
26. 灰色シルト～粘土 (浅黄色細砂が互層状に水平堆積)
27. 褐色微砂～シルト (径 1cm以下の灰白色シルトブロック多く含む)
28. 灰色シルト (にぶい黄色微砂が互層状に水平堆積：地山起源土)
29. 明黄褐色微砂～シルト
30. 黄灰色シルト (径 1cm以下の明オリーブ灰色シルトブロック含む)
31. 灰色微砂～シルト (径 1cm以下の明黄褐色シルトブロック、径 1cm以下の同色細砂ブロック少量含む)
32. 灰色シルト (にぶい黄色微砂が混じる：地山起源土)
33. 灰色シルト (明黄褐色細砂が混じる)
34. 灰色微砂
35. 明黄褐色細砂 (径 3mm以下の灰色シルトブロック、明緑灰色シルトブロック含む)
36. 灰色シルト (浅黄色シルト、径 3cm以下の明緑灰色微砂ブロック含む)
37. 黄灰色シルト (橙色シルト～粘土混じる)
38. 浅黄色粗砂 (径 3～5mmの小礫多く含む)
39. 黄灰色シルト (明緑灰色微砂混じる、同色粗砂ブロック、明緑灰色シルトブロック含む)
40. 褐色微砂～シルト (径 5cm以下の黄色細砂少量含む)
41. 黄灰色細砂混じりシルト (明緑灰色微砂ブロック微量を含む)
42. 暗灰色シルト～粘土 (ヘドロ状堆積)
43. 明黄褐色細砂 (上面に黄灰色細砂～微砂が堆積)
44. 灰色シルト (浅黄色細砂～微砂混じる)
45. 灰色シルト (径 5cm以下の浅黄色細砂ブロック少量含む)
46. 黄灰色粗砂～中砂 (径 3cm以下の明オリーブ灰色シルトブロック含む)
47. 黄灰色粗砂～中砂 (径 1cm以下の明オリーブ灰色シルトブロック含む)
48. 灰色シルト～粘土
49. 黄灰色細砂～シルト (下層ほどシルトが強くなる)
50. 暗灰色微砂混じりシルト
51. 灰色微砂～微砂 (径 3mm以下の小礫、径 10cm以下の礫を少量含む)
52. 灰色シルト (径 1cm径の明黄褐色シルト～粘土ブロック含む)
53. 灰色シルト (褐色シルト混じる：盛土)
54. 暗灰黄色微砂～シルト
55. 明黄褐色粗砂～細砂 (径 5mm以下の礫多く含む)
56. オリーブ褐色微砂 (径 5mm以下の褐色細砂ブロック・オリーブ黒色細砂ブロック多く含む：盛土)

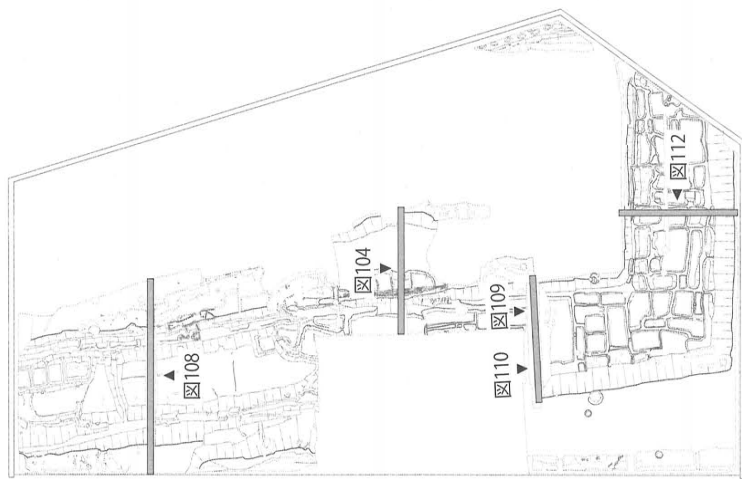
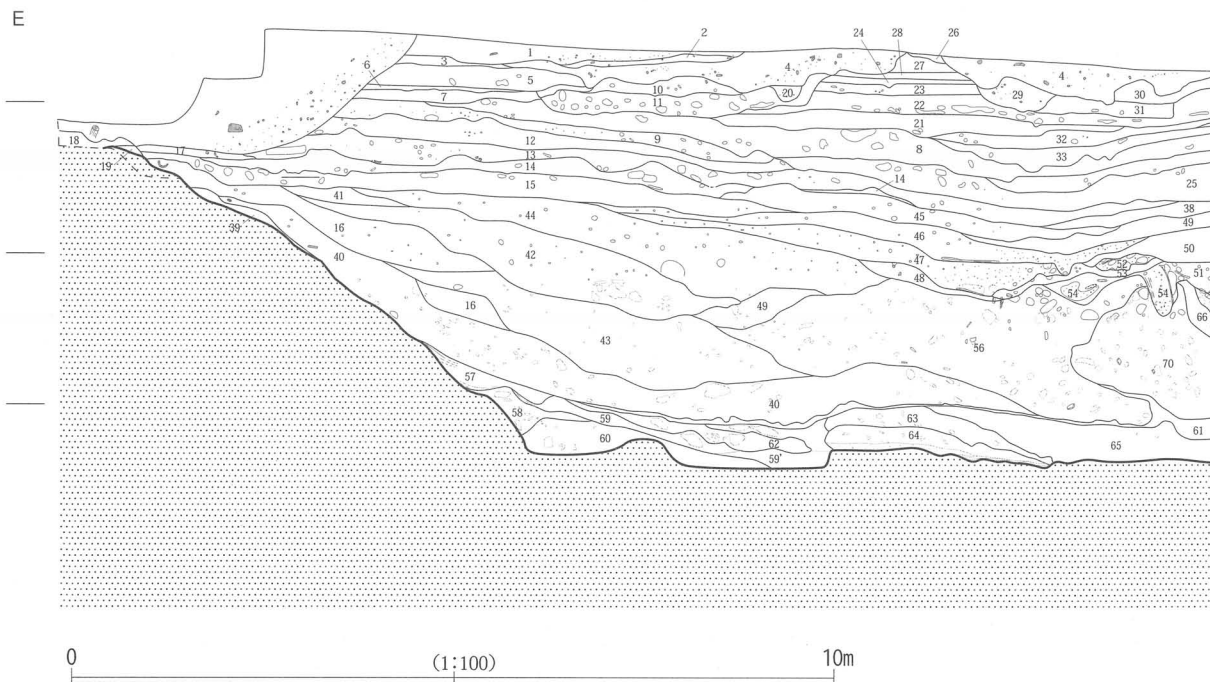
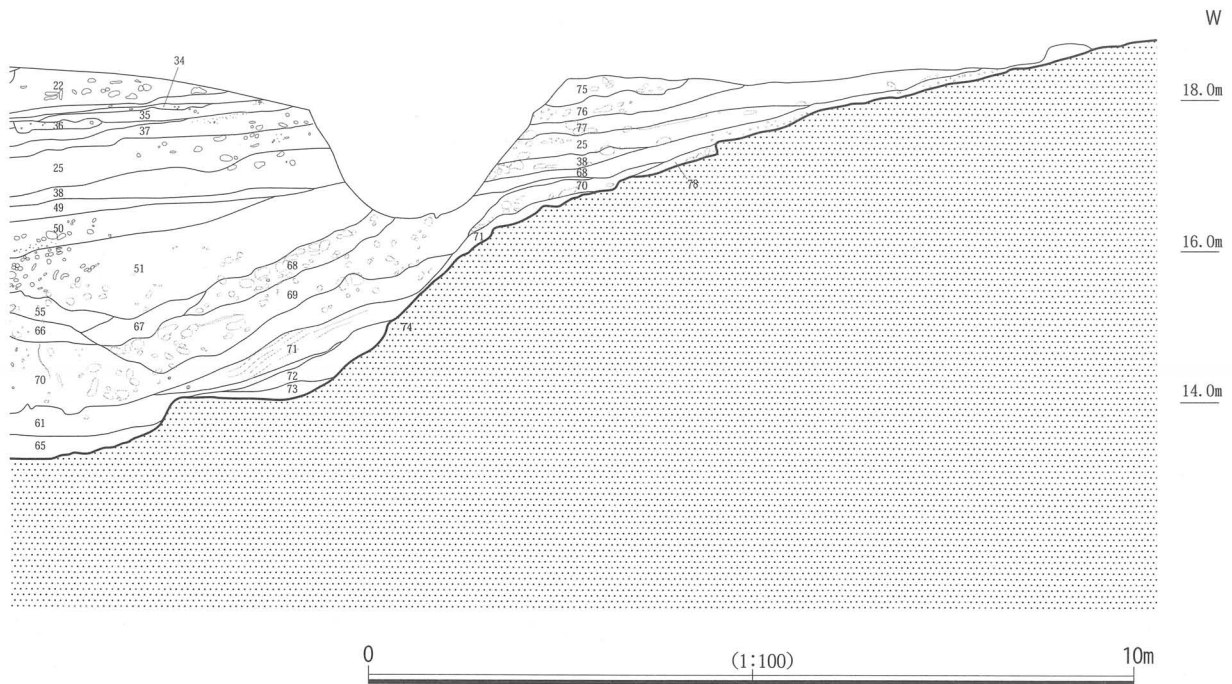


図108 堀83断面図(1)



1. 黄灰色シルト(砂礫=人為的客土多く含む、シルト・粘土ブロック若干含む)
2. 黄灰色粘土(シルトブロック・径5cm以下の礫若干含む、炭化物粒含む)
3. 灰色粘土(シルトブロック・礫若干含む)
4. 暗オリーブ灰色シルト(砂礫・瓦片多い)
5. 灰色粘土(地山起源の粘土ブロック、上部に砂礫含む)
6. 灰オリーブ色粗砂混じりシルト
7. オリーブ黄色粗砂(径5cm以下の粘土・シルトブロック多い、地山起源土)
8. 灰色シルト(径15cm以下の粘土・シルトブロック多い、炭化物多い、包含層起源土)
9. オリーブ黄色粗砂(径10cm以下の粘土・シルトブロック多い、地山起源土)
10. オリーブ灰色粘土(砂礫・シルトブロック含む)
11. 暗緑灰色粘土(径15cm以下のシルトブロック多い、地山起源土)
12. 暗オリーブ灰色粗砂混じりシルト(径3cm以下の粘土・シルトブロック多く含む、包含層起源土)
13. 灰オリーブ色粗砂(径20cm以下の粘土・シルトブロック含む、地山起源土)
14. 12と同じ
15. にぶい黄色粗砂(径15cm以下の粘土・シルトブロック含む、地山起源土)
16. 暗オリーブ灰色シルト(粗砂含む、瓦片あり)
17. 灰色粘土(礫含む)
18. にぶい黄褐色粗砂混じり粘土
19. 灰黄褐色粘土
20. 暗オリーブ灰色シルト(砂礫・瓦片多い)
21. 灰色中砂(シルトブロック・炭化物粒含む)
22. 暗青灰色粘土(下部に明緑灰色粘土ブロック入る、地山起源土)
23. 青灰色粘土(砂礫が層状に入る)
24. にぶい黄褐色粗砂(径1cm以下の粘土・シルトブロック多い、地山起源土)
25. 明緑灰色粗砂(径20cm以下の粘土ブロック多く含む、地山起源土)
26. 灰色粗砂混じりシルト
27. 灰色粘土(比較的均質)
28. 暗オリーブ灰色粗砂混じり粘土
29. 暗緑灰色砂礫混じりシルト(粘土・シルトブロック多い)
30. オリーブ灰色粘土(径5cm以下のシルト・粗砂ブロック多く含む、地山起源土)
31. 灰色シルト(砂礫、径3cm以下の粘土・シルトブロック多く含む)
32. オリーブ黄色粗砂(径5cm以下の粘土ブロック多い、地山起源土)
33. 灰色粗砂(径20cm以下の粘土・シルトブロック多い、炭化物粒含む、包含層起源土)
34. にぶい黄褐色粗砂(粘土ブロック若干含む)
35. 暗灰黄色シルト(砂礫・炭化物粒含む)
36. オリーブ灰色粗砂(径2cm以下の粘土ブロック含む)
37. 灰オリーブ色シルト(粘土・シルトブロック・炭化物粒多く含む)
38. 灰色粗砂(粘土・シルトブロック・炭化物粒多く含む、包含層起源土?)
39. 黒色シルト(均質、しまりなし)
40. 浅黄色中砂(シルト・粘土ブロック・瓦片含む)

図 109 堀 83 断面図 (2) 東半部



- 41. にぶい黄色中砂(シルト・粘土ブロック含む、地山起源土)
- 42. 暗灰色シルト(シルト・粘土ブロック含む、炭化物粒・粗砂含む、包含層起源土)
- 43. 明オリブ灰色粗砂(シルト・粘土ブロック含む、地山起源土)
- 44. 緑灰色シルト(シルト・粘土ブロック・粗砂含む、包含層起源土)
- 45. にぶい黄褐色中砂(シルト・粘土ブロック含む、地山起源土)
- 46. 緑灰色シルト(粘土ブロック・粗砂含む、包含層起源土)
- 47. 暗緑灰色シルト(粘土ブロック・粗砂含む、包含層起源土)
- 48. 暗オリブ灰色粘土(木・陶磁器含む、包含層起源土)
- 49. 黒色シルト(均質)
- 50. 暗灰黄色粗砂混じりシルト(粘土・シルトブロック、炭、木片等含む、包含層起源土)
- 51. 黄灰色粗砂(中砂・粘土ブロック、炭化物等含む、地山起源土)
- 52. 灰白色粗砂(粘土ブロック、植物遺体、骨等含む)
- 53. 48と同じ
- 54. 暗オリブ灰色粘土(粗砂・シルトブロック含む)
- 55. 灰色シルト(上部に植物遺体堆積)
- 56. 灰色シルト混じり粗砂(粘土・シルトブロック・炭化物含む)
- 57. 灰オリブ色粗砂(灰色シルト～粘土混じる、ラミナ状堆積あり)
- 58. 灰色シルト～粘土(径15cm以下の明オリブ灰色粗砂ブロック、径3cm以下の明黄褐色粗砂～中砂を多量に含む)
- 59. 灰色シルト～粘土(灰色粗砂混じる、堀障子・障壁より西側から灰色シルト～粘土層=59'が全体を占める割合が多くなる)
- 60. 暗オリブ灰色粗砂混じりシルト(径10cm以下の明オリブ灰色粗砂ブロック・径1cm以下のオリブ黄色シルトブロック含む)
- 61. 黒色シルト(ヘッドロ状堆積、ラミナは見られない)
- 62. オリブ灰色シルト(径25cm以下の明オリブ灰色粗砂ブロック、径5cm以下のオリブ灰色シルト～粘土ブロック含む)
- 63. 灰色微砂混じりシルト(径3cm以下の浅黄色シルトブロック微量に含む、ラミナ痕あり：地山起源盛土)
- 64. 橙色微砂混じりシルト(下層にオリブ黄色粗砂混じりシルト、灰色シルト層沈着、ラミナあり、地山起源盛土)
- 65. 灰色シルト～粘土(明オリブ灰色細砂～粗砂ブロック含む)
- 66. 灰白色粗砂混じりシルト(径5cm以下の明緑灰色粘土ブロック、径1cm以下の灰黄色細砂ブロック含む、上層の55と酷似)
- 67. 灰オリブ色粗砂混じりシルト(径5cm以下の明緑灰色粘土ブロック、径3cm以下の明黄褐色細砂ブロック少量含む)
- 68. オリブ灰色中砂～シルト(径3cm以下の明緑灰色粘土ブロック、径3cm以下の明黄褐色細砂ブロック、植物遺体・貝殻含む)
- 69. 明黄褐色細砂～シルト(径10cm以下の明緑灰色粘土ブロック、径3cm以下の黄橙色粗砂ブロック多量に含む)
- 70. オリブ黒色中砂～シルト(明緑灰色シルトブロック含む)
- 71. オリブ黄色粗砂(オリブ灰色中砂～微砂がラミナ状に堆積)
- 72. 灰色シルト(明オリブ灰色粗砂ブロック微量に含む)
- 73. 暗オリブ灰色粗砂～シルト(径5mm以下の礫少量含む)
- 74. 灰色シルト～粘土(地山)
- 75. 褐色シルト～粘土(径10cm以下の明緑灰色シルトブロック、橙色粗砂ブロック含む)
- 76. 明黄褐色微砂～シルト(灰色シルトブロック、橙色粗砂ブロック含む)
- 77. 明黄褐色粗砂～シルト(径10cm以下の明緑灰色シルトブロック含む)
- 78. 黄灰色シルトに明黄褐色粗砂(小礫混じる)

図110 堀83断面図(2)西半部

③南北堀（南半部）

図 109・110 は南北堀南半部の東西断面を掲げている。

埋没過程はすでに記述を進めてきた南北堀北半部と大きく異なるものではない。

底面からおよそ 0.6 m の高さで堆積するへドロ状を呈する黒色粘土層（土層番号 61）以下が堀が機能していた段階の堆積層であり、これより上方が埋め戻しの際の客土層である。埋め戻しの客土層は巨視的にみて大きく 2 つに分かれ、下層は 2.0 ～ 2.5 m 前後で堀の東西両側からかなり大きな単位で土砂が落とし込まれている状況が看取される。南北堀北半部と同様に東西両側からの土砂投入による土圧によって、堀内に堆積していたへドロ状の黒色粘土層（土層番号 61）は上方にめくれ上がっている。単純に当該土層断面の位置でみると、東と西からの客土の割合はおおむね 1 : 1 であり、東西から均等に埋め戻しが行われた状況が看取される。

客土層の上層は下層と同様に 2.0 ～ 2.5 m 前後の厚みであるが、層厚 0.1 ～ 0.4 m 前後の土砂が堆積する点で下層とは大きく様相を異にする。基本的には地山を起源とする砂層と包含層を起源とするシルト～粘土層を互層にして埋め戻しており、版築とまではいかないが、丁寧に埋め戻し作業が行われた状況が看取される。

④東西堀

図 111・112 には東西堀の南北断面を掲げている。

ここでは北側が旧府警本部棟の攪乱によって大半が削平され、しかもこの工事の際に地すべりや地割れを起こしている。また、ここでは崩落などの事由により、一部で未実測の箇所を残すものの、工事用の仮設道路と考えられる遺構や埋め戻しの単位を明確に検出するなどの成果をあげている。

ここでも最下層は堀が機能していた段階の堆積層であり、へドロ状の黒色粘土層（土層番号 46）以下がこれにあたる。その上部はいずれも埋め戻しに伴う客土層であるが、ここでは南北堀と同様におおむね 4 単位の作業工程を追うことができる。

下層の状況を見ると、南北から同時に土砂が入れられたのではなく、まず北側からブロック状の土砂

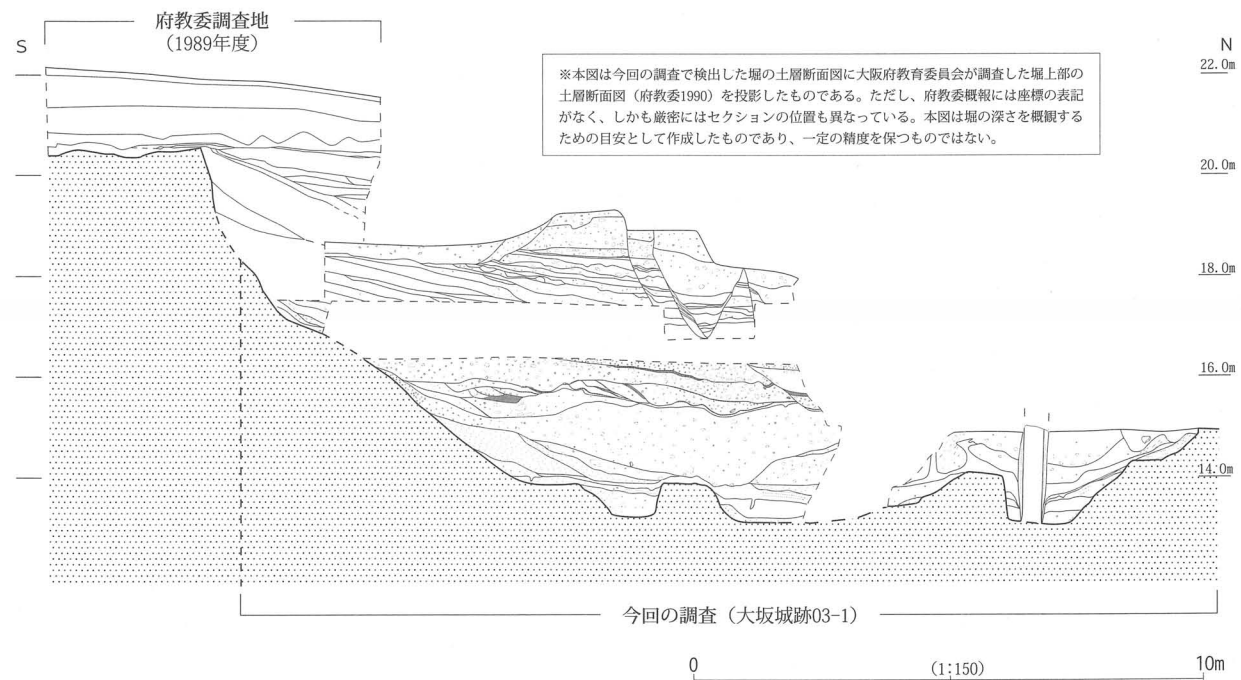
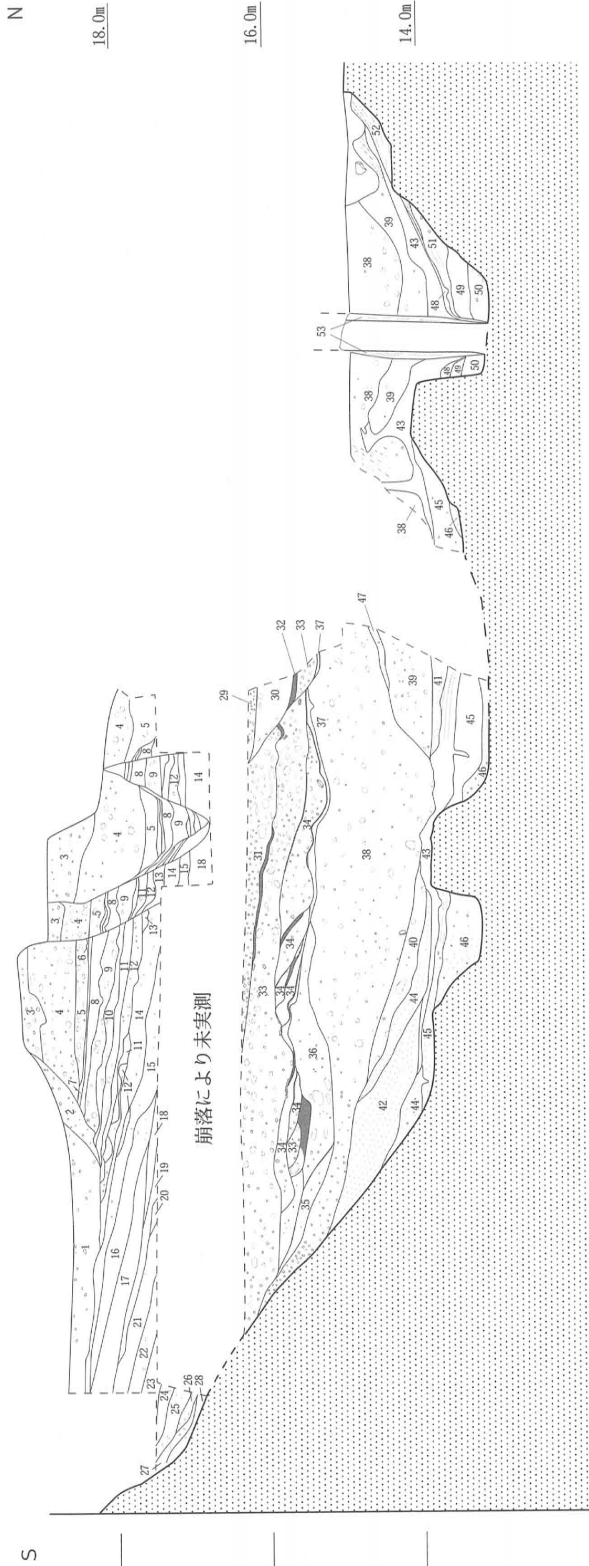


図 111 堀 83 断面図（3）



0 10m (1:100)

1. 緑灰色粘土 (土坑5埋土下層、径5cm以下の円礫・瓦片等多く含む、比較的均質)
2. オリープ灰色粗砂混じりシルト (土坑5埋土下層、径2cm以下の礫多く含む)
3. 暗オリープ灰色粗砂混じりシルト (径5cm以下の礫・粘土ブロック多く含む)
4. 灰色シルト (径15cm以下の同色粘土ブロック、径3cm以下の礫多く含む)
5. 灰色粘土 (北側の低い所にのみ堆積した粘土層、均質で自然堆積に近い)
6. 灰色粘土 (比較的粗砂・鉄分沈着)
7. 灰白色中～粗砂 (鉄分沈着)
8. 灰色中～粗砂 (径1cm以下の粘土・シルトブロック若干含む、均質で硬くしめる、包含層起源土)
9. 灰白色細～中砂 (径1.5cm以下の粘土・シルトブロック多く含む、地山起源土)
10. 灰白色シルト (粗砂、径5cm以下の粘土・シルトブロック多く含む、包含層起源土)
11. 灰白色中～粗砂 (径10cm以下の粘土・シルトブロック含む、地山起源土)
12. 灰白色シルト (径10cm以下の礫、径5cm以下の粘土・シルトブロック含む、包含層+地山起源土)
13. 灰色粗砂 (径10cm以下の粘土・シルトブロック含む、地山起源土)
14. にぶい黄褐色細～粗砂 (径3cm以下の粘土・シルトブロック含む、部分的に鉄分沈着)
15. 灰黄褐色細～粗砂 (径3cm以下の粘土・シルトブロック少量含む、部分的に鉄分沈着)
16. にぶい黄褐色細～粗砂 (灰色シルトブロック、包含層起源土含む、人骨・骸骨集積遺構86はこの層位に対応)
17. 灰オリープ色シルト (粘土・シルトブロック若干含む均質、上面に鉄分沈着)
18. にぶい黄褐色シルト (粘土・シルトブロック、炭化物物多く含む、地山+包含層起源土)
19. にぶい黄褐色シルト (径3cm以下の粘土・シルトブロック多く含む、炭化物若干含む)
20. にぶい黄褐色シルト (炭化物多量に含む)
21. にぶい黄色シルト (径5cm以下の粘土・シルトブロック多く含む)
22. にぶい黄色シルト (径10cm以下の粘土・シルトブロック多く含む、上面に炭の薄層あり)
23. 黄灰色シルト (径20cm以下の粘土・シルトブロック多量に含む)
24. 相灰色シルト (礫、粗砂、径1cm以下の粘土・シルトブロック多く含む、包含層起源土)
25. 灰色中砂 (礫、径2cm以下の粘土・シルトブロック多く含む、包含層起源土)
26. 灰白色粗砂 (径3cm以下の粘土ブロック含む、地山起源土)
27. 灰オリープ色シルト (径3cm以下のシルトブロック含む、包含層起源土)
28. 灰色極粗砂 (地山の崩落土)
29. 灰オリープ色シルト (炭化物粒、粘土、径5cm以下のシルトブロック含む)
30. 灰色シルト (炭化物粒、粘土、径10cm以下の粘土・シルトブロック含む)
31. 黄灰色シルト (径20cm以下の粘土・シルトブロック含む、炭化物粒含む)
32. 黒色植物遺体層 (未分解の植物遺体の層・木製品も多く含む)
33. 灰色礫混じり粗砂 (径15cm以下の粘土・シルトブロック含む、しまりが少ない)
34. 灰色礫混じり粗砂 (径15cm以下の粘土・シルトブロック含む、しまりが少ない)
35. 灰色礫混じりシルト (径3cm以下の粘土・シルトブロック含む)
36. 灰オリープ色粗砂混じりシルト (礫、粘土、シルトブロック含む)
37. 灰色粘土 (上面に植物遺体層あり)
38. 緑灰色粗砂混じりシルト (小礫、径15cm以下の粘土・シルトブロック含む、瓦片等含む)
39. 緑灰色粗砂混じりシルト (径10cm以下の粘土・シルトブロック含む)
40. 灰オリープ色シルト (径20cm以下の粘土・シルトブロック含む、砂礫含む)
41. オリープ灰色粗砂 (4分が流出した砂層、自然堆積、ラミナは顕著ではない)
42. 緑灰色シルトとオリープ黄色 細～中砂の互層 (自然堆積、ラミナ顕著)
43. オリープ黒色粘土 (埋没過程で堆積したへドロ、止水堆積層；埋没能時の自然堆積土)
44. 灰色粗砂 (ラミナなし、埋没能時の自然堆積土)
45. 緑灰色中砂混じり粘土 (部分的にラミナあり、筒子堀内の自然堆積・埋没能時の自然堆積土)
46. 緑灰色中砂混じり粘土 (筒子堀の中心に径5cm以下の粘土・シルトブロック含む、埋没能時の自然堆積土)
47. 灰白色中砂 (粘土ブロック含む)
48. オリープ灰色シルト～粘土 (堀内に堆積したへドロ状堆積の下層?)
49. 灰色シルト～粘土 (土層と同様の土)
50. 灰色シルト (一部ラミナ状堆積、径1cm以下の緑灰・浅黄色粗砂ブロック少量含む)
51. 暗オリープ灰色粗砂混じりシルト (径3cm以下の黄色粗砂ブロック、灰色シルトブロック含む)
52. 灰色粗砂+灰色シルト (堀の肩に沿ってラミナが見られる)
53. 灰色中砂 (PC杭の露出)

図 112 堀 83 断面図 (4)

が投入されている状況が看取される。ここでは土塊の投入によって堀の中に堆積していたへドロ状の黒色粘土層が大きくめくれ上がっており、このような状況は先に報告した南北堀北半部と共通するものである。

次の段階には堀の外側にあたる南側から層厚1 mをこえる多量の土砂が投入されている。ここでは部分的に薄い植物遺体層が間層として入るものの、基本的には類似した土砂が大量に落とし込まれており、一気に埋め戻し作業が行われたことを示唆している。

この上部では0.1～0.3 m前後の層厚をもつ土砂をほぼ水平にいて埋めている。この上面は下層と同様に比較的大きな単位で土砂をいて埋め戻しを完了している。この状況は距離的にも近い南北堀南半部の状況と同様であり、基本的には地山を起源とする砂層と包含層を起源とするシルト～粘土層を互層にして丁寧に埋め戻し作業を行っている。

なお、東西堀では堀の埋め戻しに伴う道路状遺構などが検出されたこともあり、数度にわたって、堀を埋めた客土層の途中で平面的な精査を行っている。このうち、特筆されるのはT.P.16.75～16.80 m前後で写真12に示したような縞状の土色の違いを検出したことである。この土色の相違は南北に長い波状を呈し、1.0～1.5 m前後の間隔で並列している状況が看取される。

微視的にみると、これらは南から半島状にのびた土砂の痕跡であり、後述する道路状遺構などとの関係から、これは埋め戻し作業単位の痕跡であると判断される。

したがって、堀の上部の埋め戻し作業に関しては、列をなした大勢の作業員によって行われた可能性が高い。それぞれの幅が1.5 m以下であることや、堀の中心に向かってやや傾斜することなどを勘案すると、南北方向に並んだ作業員が、箕などを用いて、バケツリレーのごとく土を投入していった可能性が高いものと考えられる。

先の断面図との関係でいうと、このような状況は比較的層厚の薄い地山起源土と包含層起源土が互層となって堆積する客土上層と対応する。層厚が薄いのは客土下層のように上方から多量の土砂を落とし込むのではなく、人海戦術によって人が持ち運べる程度の土砂を繰り返し投入していったことを示すものであるといえる。

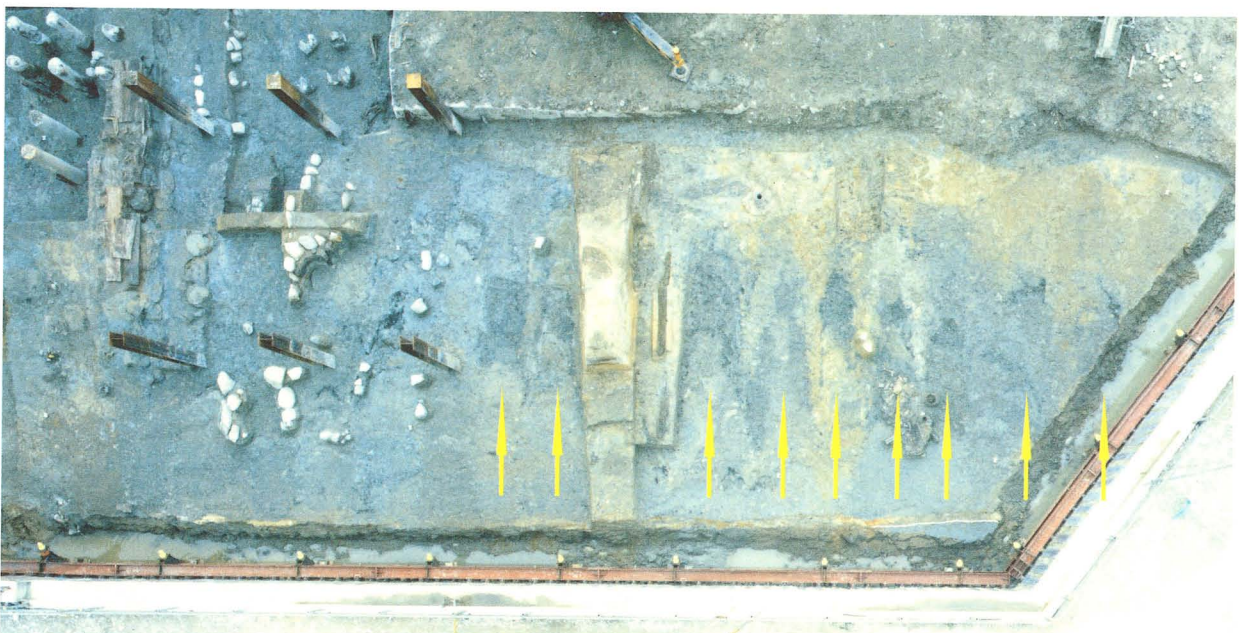


写真12 堀83東西堀埋め戻し作業痕跡

(2) 礫群

堀の客土中からは少なからず礫が出土している。これを平面的にみると図 113 に示したように一定のまとまりをもつ群に分けることができる。

① 礫群 195

南北堀北半部で検出した礫群で堀の東側から落とし込まれたものである。基本的に堀の東側から行われた土砂の投入と連動して投棄されており、したがって、堀の法面に沿うような形でやや散漫に分布している。最も高い礫のレベルは 15.42 m、最も低い礫は 13.49 m であり、立面的には 2 m ほどの幅を有している。礫は一辺 20～70 cm の花崗岩で、212 個が落とし込まれている。堀の内側至近にこれらの石材を用いた構造物が存在していた可能性が高い。

なお、堀 83 と一連の遺構と考えられる 2D 調査区の堀 1 でも堀の内側にあたる東から礫が投棄された状況で検出されており、似通った状況を呈している（大文セ 2002）。

② 礫群 91

すでに、遺構 141 の項でも触れたように、その上面を覆うようにして検出したものである。レベルはおよそ 16.0～17.0 m の幅におさまる。礫の大半は花崗岩である。大きさは一辺 10～60 cm 前後と幅があるものの、30 cm 前後のものが多く、比較的大きさが揃っている。合計 492 個の礫を確認している。

礫群 195 と比較すると密集度が高く、下方ほど大きい傾向が看取される。いずれも原位置を留めていないが、状況からみて遺構 141 と関連して貼石状に積み上げられていたものが、下方にすべり落ちた可能性もある。なお、北端部付近の下方では、礫の隙間から人の刀傷のある頭蓋骨が出土している。

③ 礫群 197

礫群 91 の約 10 m 南で検出したものである。堀の内側から北西方向に落とし込まれた状況を呈している。全体的な状況としては礫群 195 と類似する。レベルはおよそ 14.0～15.0 m の幅に分布している。礫は他群と同様に花崗岩であるが、大きさは一辺 10～40 cm とやや小振りである。礫は合計 96 個。

④ 礫群 198

堀の南西コーナーから東西堀の南側肩部までの広い範囲で検出した。他群が基本的に堀の内側から堀の埋め戻しに伴う客土とともに落とし込まれたような状況を呈するのに対して、礫群 198 は分布の中心が東西堀の南側肩部付近にあり、平面図を一瞥しても分かるように南北方向に直列する部分を見出すことができる点で様相を異にしている。

レベルは南側が 17.3 m 前後で高く、北側では 16.5 m 前後である。礫は花崗岩で、大きさは一辺 10 cm 前後のものから、一部では 1 m を超えるものもある。全体的な傾向をみると、南側のものが大きく、北に向かって小振りとなる傾向がある。

先に報告した堀の埋め戻し作業単位や後述する道路状遺構がいずれも南北方向を指向していることなどを勘案すれば、礫群 198 は必ずしも整然と並べられてはいないが、埋め戻しの際の足場を固める役割を果たしていた可能性が高いものといえる。

また、1 点のみであるが、矢穴をもつ花崗岩を確認している。矢穴は隅丸の台形状を呈し、大きさは平均して長さ約 14 cm、深さ約 6 cm である。

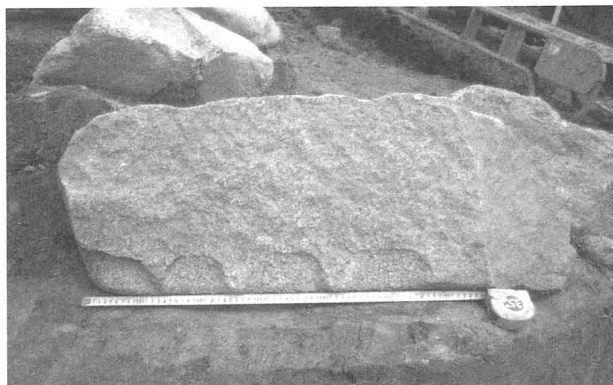


写真 13 矢穴をもつ石材



図 113 堀 83 礫群検出状況



図114 礫群91・遺構141

(3) 足場状遺構

堀 83 の客土中からは、堀の埋め戻しに際して仮設された道路状および階段状を呈する足場の遺構を検出している。当該遺構群については、調査段階には道路状遺構と称していたが、上記のように階段状を呈するものもある上に、土俵を積んだ上面に板材を敷き並べたもののほか、竹束を客土中に投入して足場を確保しただけの事例もある。したがって、ここではこれらを総称して、足場状遺構として報告することとしたい。

堀 83 の客土中から検出した足場状遺構は調査範囲内でいえば、南半に集中している状況が看取される。南北堀北半部では明確な形で足場状遺構が検出できなかったことを勘案すると、この堀のうち、南側を集中的に埋め戻すなどの作業がなされたことを示唆するものと捉えることも可能である。

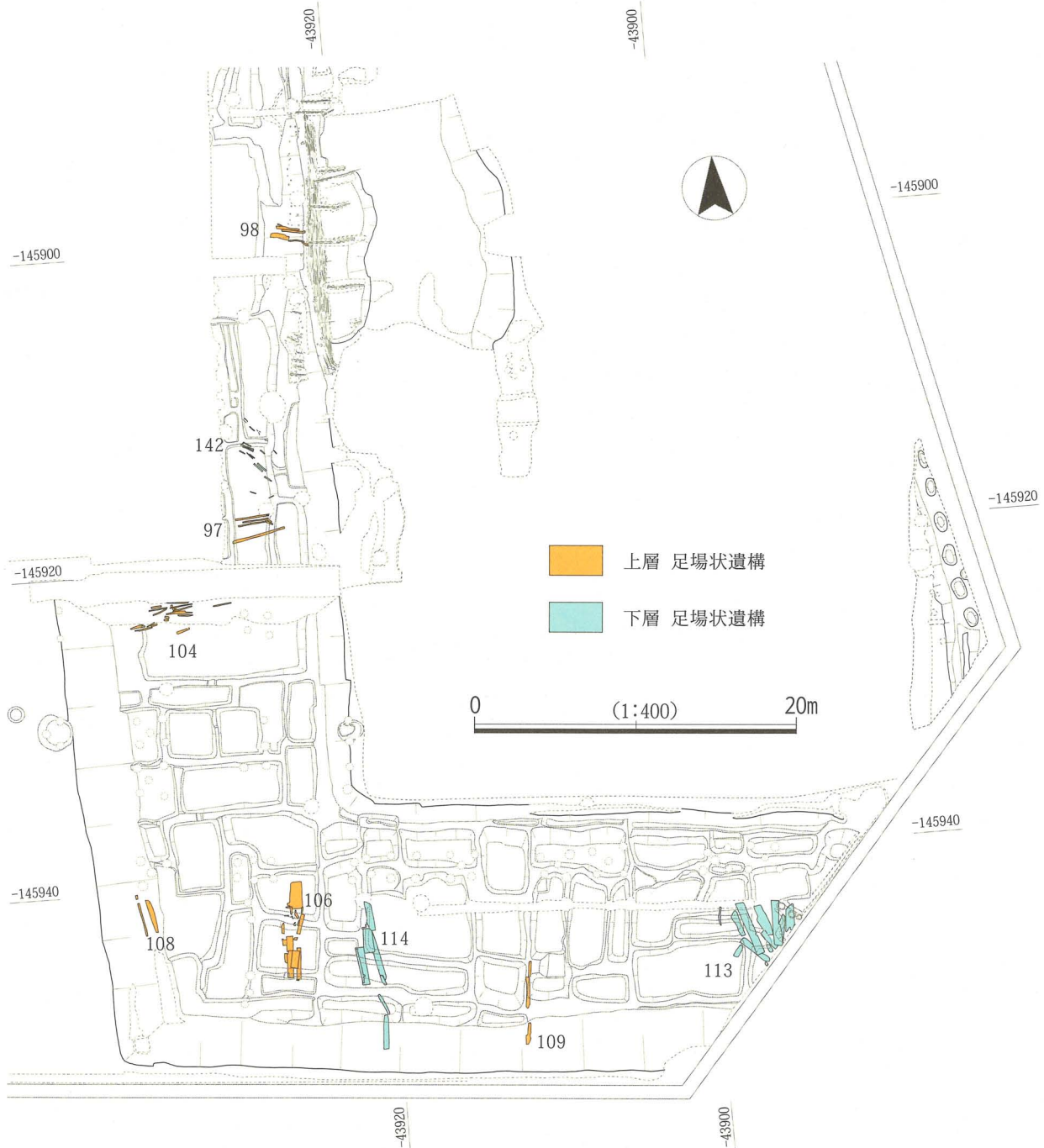


図 115 足場状遺構等分布図

図 115 には堀 83 から検出した足場状遺構の分布状況を示している。東西堀ではいずれも堀に直行する形で、しかも南側から北に向かって足場状遺構が造成されており、これはすでに報告した堀の埋め戻し作業の痕跡とも呼応する。南北堀においても基本的には同様の状況が看取され、堀に直交する形で足場が作られている。

足場の造成は仮設の施設であることから、さほど丁寧に造られているわけではない。しかしながら、後述するように足場状遺構 106 では瓦片や礫を敷いた上に土俵を積み上げ、さらにその上面に板材を敷いて道路状に造成している。これ以外では板材を併用したものは見られず、板材や柱材を敷き並べた足場状遺構が多い。このほか、竹束を敷いて足場を確保した足場状遺構 109、竹束や杭などを用いて階段状に造成した足場状遺構 108 などがある。

足場状遺構は、すべてが同一レベルで検出されるものではなく、おおむね、上下 2 層から検出される状況が看取される。上層の足場状遺構は T.P.17.0 m 前後から検出されるものであり、先に報告した埋め戻しの諸段階との対比で言えば、第 2 段階の埋め戻し作業に対応するものであると考えられる。また、一方の下層の足場状遺構は T.P.15.0 ~ 15.5 m で検出されたものであり、埋め戻しの初期段階に造成されたものであると考えられる。

なお、足場状遺構の中には、後述する足場状遺構 114 などのように同時に多量の松葉などを投入している事例もあり、一気に埋め戻し作業を行ったことによって軟弱でぬかるんでいる地盤に足が逃げ込まないように配慮したものであると判断される。したがって、足場状遺構の板材などすべてが露頭していたのではなく、竹束などの場合には作業路の下層に埋め込んで、地盤を固めていたものと考えられる。

ここでは上記のような状況を踏まえて、可能性のあるものも含めて足場状遺構の報告を行うことにしたい。なお、報告にあたっては、上層で検出したものを先行して報告し、続いて下層で検出したものを報告する。

① 足場状遺構 97

後述する足場状遺構 104 の北東から検出したものである。南北堀外周にほぼ直交する形で東西方向を指向する。図 116 では南側に長さ 3.3 m を超える角柱を図示しているが、この柱のレベルは T.P.17.2 ~ 17.4 m 前後である。一方、その北側で検出した 3 本の角柱は T.P.16.1 ~ 16.3 m 前後である。同一図面上に図示しているが、同時に敷き並べられたものではない。北側の 3 本の角柱は一辺 10 cm 前後を測るもので、ほぼ平行して並べられており、東から西に向かって緩やかに傾斜している。下部にはこれらと直交する形で木が据えられている。部材の東端は工事用の H 鋼を打設する際に折損もしくは変形している。南側の 2 本は西端を尖らせた木柵もしくは

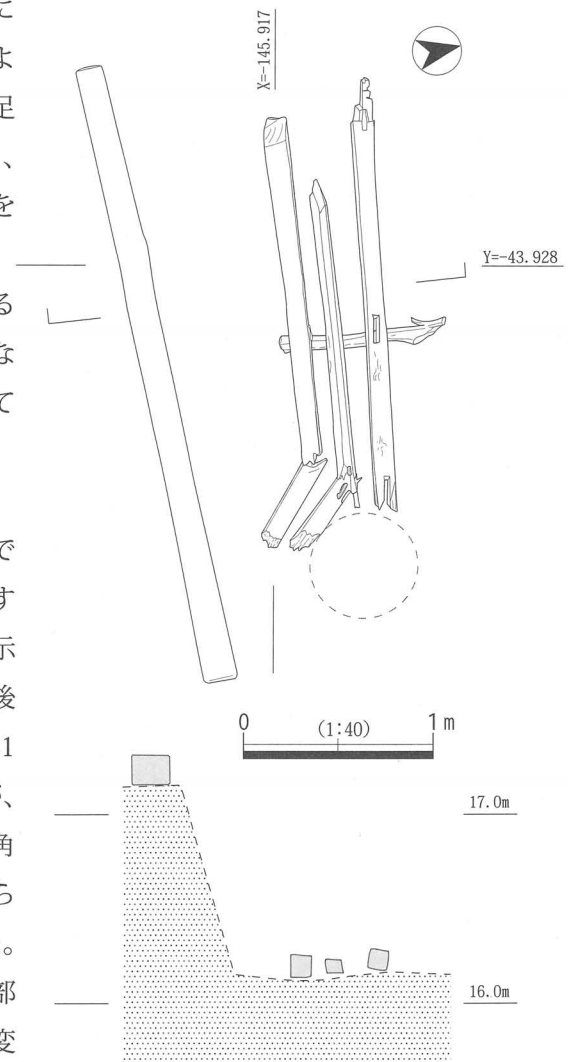


図 116 足場状遺構 97

はその控え柱と考えられるものである。

南端で検出した角柱は、検出レベルは異なるものの、ほぼ同一方向を指向するものであり、北側の一群と同様に東から西に緩やかに傾斜している。単体ではあるが、足場材として転用されていた可能性もある。なお、この柱材の西端は府警本部の建物建造の際に鋸で切断されている。側面にはほぞ穴が穿たれており、木柵などの台となるものである可能性が高い。

②足場状遺構 98

礫群 91 の西側から検出したものである。堀の内側にあたる東から西に向かって板材を敷き並べている。東から西に向かって傾斜しており、東側では T.P.16.0 m 前後、西側では T.P.15.0 m 前後で、かなりの傾斜がある。ただし、当該箇所は、旧府警本部の建物建造の際に地すべりを起こしている部分にあっており、実際には、現状よりも緩やかな傾斜であった可能性も高い。したがって、当該遺構に関しては確定的ではないものの、堀の埋め戻しの際に仮設された足場状遺構である可能性が高いものと判断している。

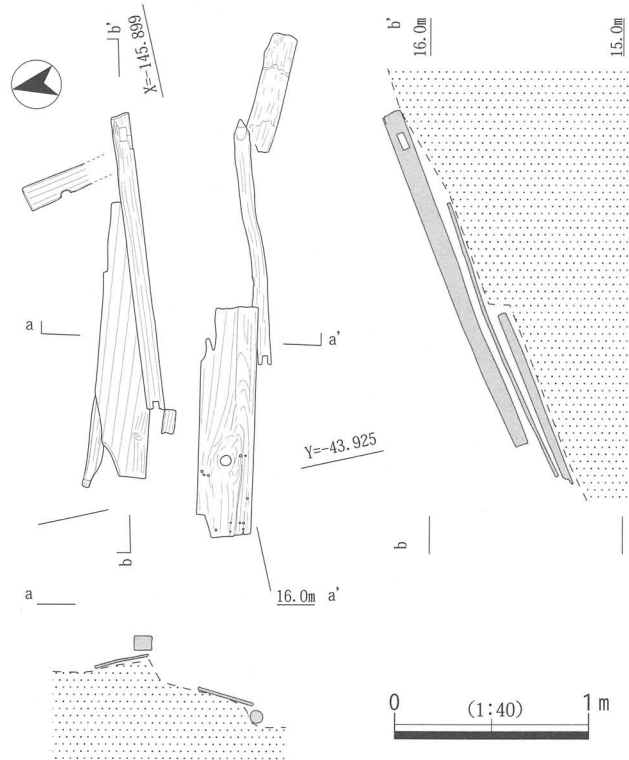


図 117 足場状遺構 98

③足場状遺構 104

堀 83 の外周南西コーナーから北に約 29 m で検出したものである。南北堀外周に直交して西から東にのびている。上面のレベルは T.P.16.5 ~ 17.0 m 前後であり、西から東に向かって緩やかに傾斜している。当該足場状遺構はおおよそ東西 5.1 m、南北 2.6 m の範囲に柱状の部材が敷き並べられたものである。転用された部材は一辺 8 cm 前後の角柱が多いが、一部には円柱や木の根なども使われている。下層には特別な地業は行われない。

当該足場状遺構は、後述する足場状遺構 106 と同様に堀の外周にあたる西肩から堀の中心に向かって仮設されたものであると考えられる。

④足場状遺構 106

堀 83 の南西コーナーで検出したものである。東西堀に直交して南から北にのびている。

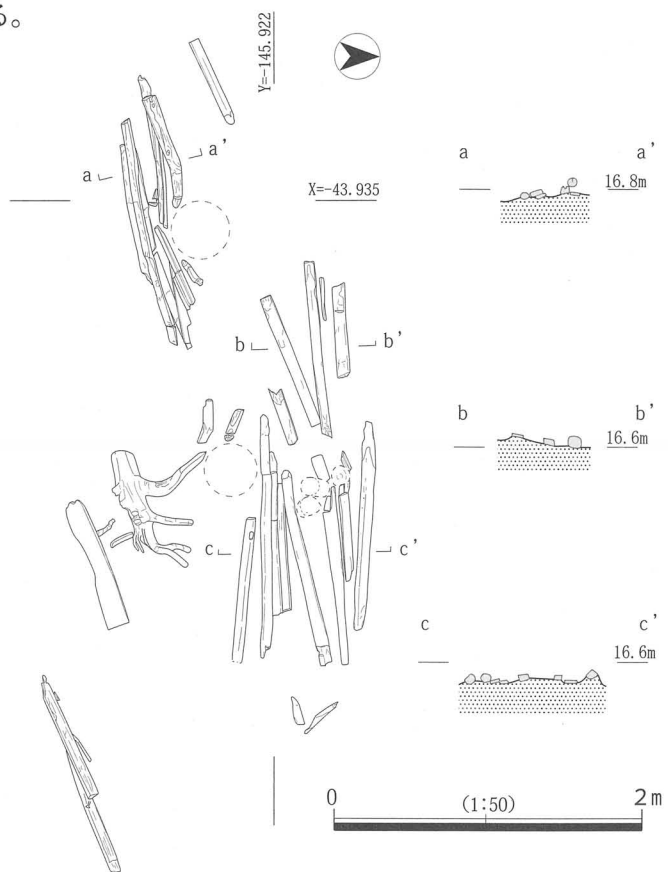


図 118 足場状遺構 104

上面のレベルは T.P.17.0～17.5 m 前後であり、足場状遺構としては上層に位置する。南北長 20 m で道路状の足場が造成されているが、その造成方法は北半部と南半部では状況を異にしている。

北半部では下部に礫を敷き並べ、その上面には瓦片を多量に含む客土をいれた上で、その上面に土俵を南北に並べている。一方、南半部では下層に土俵を 4～5 段前後で積み上げて、その上面には南北約 5 m にわたって板材などが敷き並べられている。土俵の下部からは五輪塔火輪が転用されて用いられている。板材の多くは堅木であり、鉄砲玉がめり込んだ板材などもあり、塀などに用いられていたもの一括して転用されたものである可能性が高い。

当該遺構の縦断面を見ると、土俵が階段状を呈して南から北に向かって緩やかに傾斜している状況を見出すことができ、その上面も斜路となって緩やかに北に向かって下がっていた可能性が高い。実際、当該遺構の南側ではさらに高い位置から南北方向に並んだ土俵の痕跡を検出している。

したがって、この足場状遺構 106 は堀の南肩近くから堀の中心部にまで造成された作業用の道路状遺構であり、他例に比して丁寧な造成されていることを考えると、最も広い堀の南西コーナー部分の埋め戻しのために設置された基幹的な性格をもつものであったと考えられる。

⑤足場状遺構 108

堀 83 の外周南西コーナーから北に約 10 m の地点で検出したものである。他例とは異なり、杭と竹束などで階段状に造成した足場状遺構である。上下 2 段の竹束と植物遺体層のステップ部分を別々に調査してしまっているために、厳密に言えば、同一構造物を構成するものか否かは断言できないが、両者は平行するなどの点から、一体となって階段状に造成されていたものと考えられる。

上段は南北長 2.63 m、東西幅 0.12 m の竹束であり、検出レベルは T.P.16.38 m 前後である。この東側には、約 0.4 m 下がって杭で土留めされた段差が造成されている。下段は長さ 1.5 m を前後する 4 本の杭を東側に打設して土留めし、上面には植物が南北長 2.95 m、東西幅 0.28 m の範囲に敷き詰められている。状況からみて、階段状を呈する足場状遺構である可能性が高いものの、縦断面の観察が十分にできなかったこともあり、当該遺構を構成する盛土と上面を埋める客土の峻別が十分にできず、やや不確定な部分を残している。

⑥足場状遺構 109

堀 83 の東西堀のほぼ中央で検出したものである。東西堀に直交して南から北にのびている。長さ約 5.2 m、幅 0.2～0.3 m の竹束が布置されたものである。

下層には特別な地業痕跡はみられず、単に竹束が客土とともに投棄されて埋没したということも考えられなくはないが、先に報告した堀の埋め戻し方向と対応するなどの点から、足場として機能していたものと判断している。竹束は南から北に向けて傾斜しており、南側での上面レベルは T.P.16.9 m、北側では 17.3 m である。ただし、当該竹束は先に報告したように、旧府警本部棟建築の際の地すべりの影響を受けた部分に該当しており、厳密には旧状を留めるものではない。

しかしながら、全体としては南から北に緩やかに傾斜していたことは看取でき、東西堀で検出される他の足場状遺構と同様に堀の南側からの足場の痕跡であると考えられる。

⑦足場状遺構 113

堀 83 の東西堀東端で検出した。3 m を超える板材などを敷き並べた足場状遺構である。南側は調査範囲外にのび、全容は不明である。東西幅は 4.7 m、南北は 4.3 m 以上である。

幅 40～50 cm、長さ 3 m 前後の大型の板材の長辺をおおむね南北に向けて敷き並べている。全体に

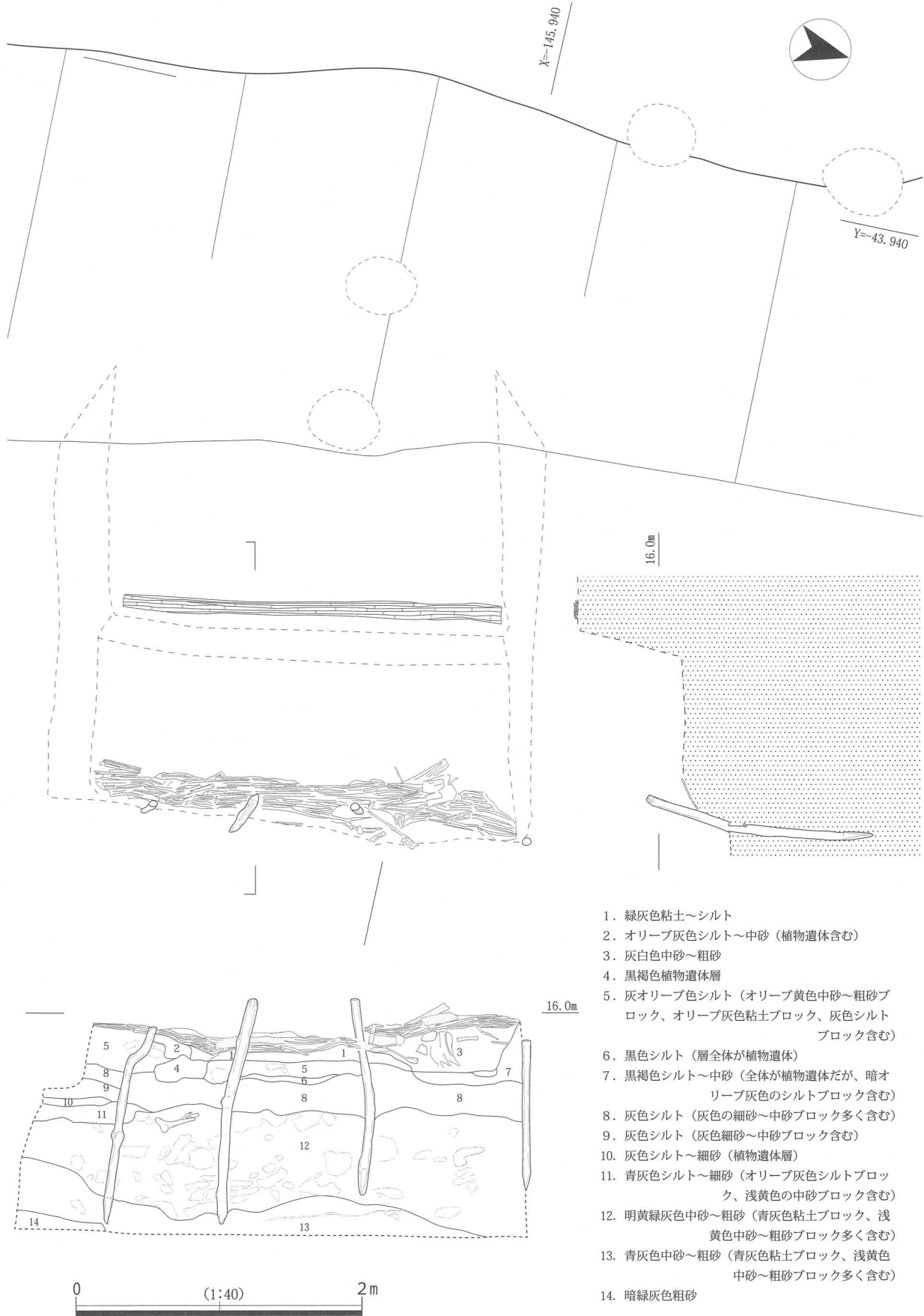


図 120 足場状遺構 108

ほぼ水平であり、最も高い部分のレベルは T.P.15.7 m、最も低い部分では 15.4 m を測る。足場状遺構 106 にみられるような特別な地業は行われていない。

足場状遺構全般にいえることではあるが、性状の似通った部材がまとまって用いられており、近隣に存在した施設を解体し、時間を経ずに転用している状況を窺うことができる。

⑧ 足場状遺構 114

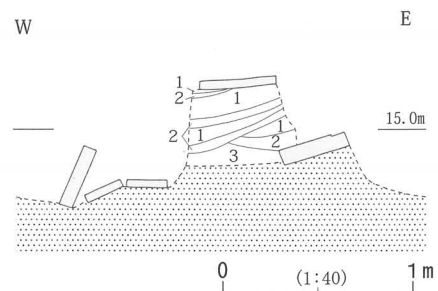
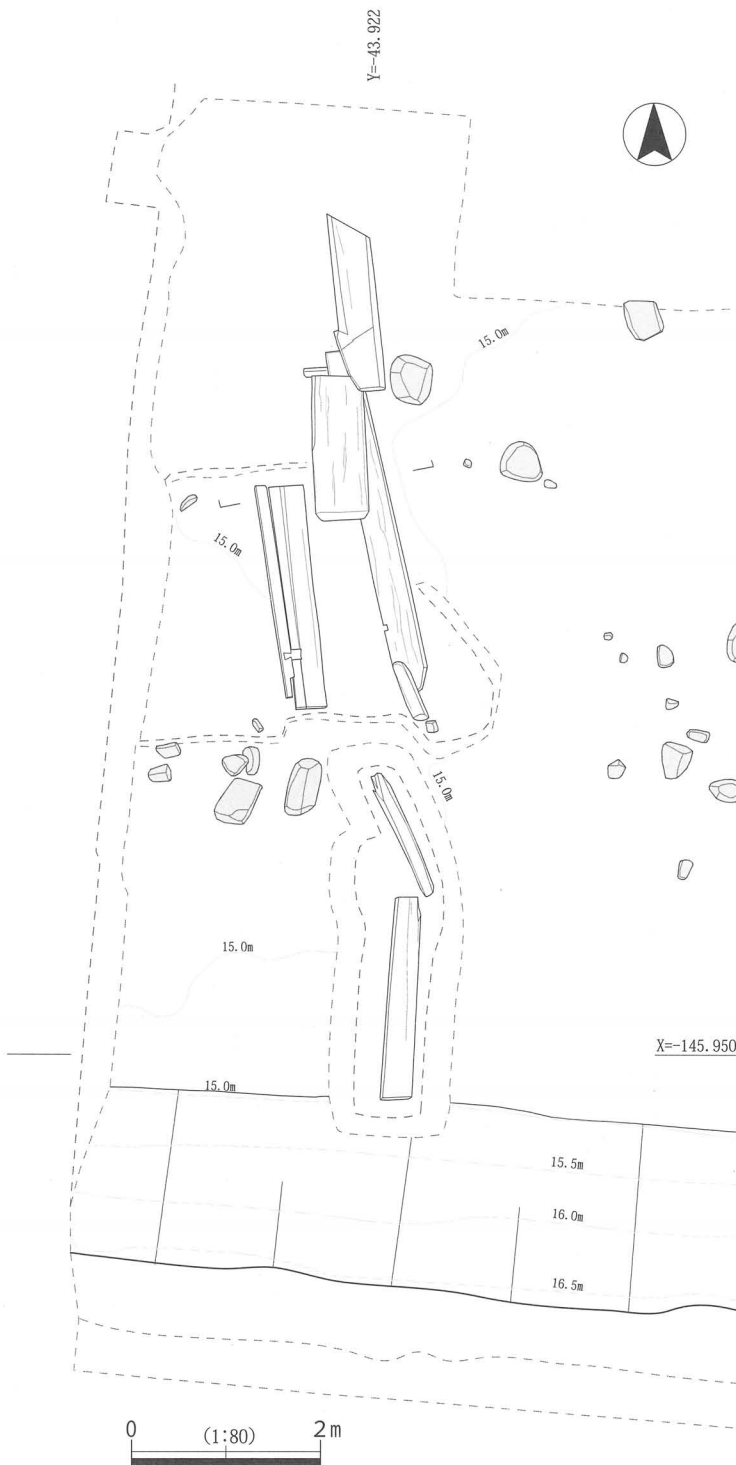
堀 83 の南西コーナーで検出したものである。すでに報告を行ってきた上層の足場状遺構の約 1 m 下層から検出している。

南北堀の東側肩部の延長上に位置し、堀の南側法面から北に向かって傾斜しながらのびている。基本的に木樋を解体した部材を南北に雑然と並べている。南北長は 9.4 m、東西は最大幅で 1.5 m を測る。上面のレベルは南側では T.P.15.9 m、北側では 15.1 m である。

先に報告した足場状遺構 106 の場合とは異なり、板材はかなり傾いたものもみられる。

したがって、当該足場状遺構に関していえば、板材は露頭して道路状を呈していたのではなく、ぬかるんだ客土に足をとられないように作業通路を確保する程度の目的をもっていただけであると推察される。

なお、部材周辺にのみ、松葉が大量に投入されており、局地的な状況であることを勘案すると、これも板材の投入とともに足場の安定を意図したものである可能性が高い。



1. 緑灰色シルト混じり粗砂(径2cm以下の礫含む)
2. 黒色植物遺体層(大部分は松葉)
3. オリーブ灰色シルト(粗砂、粘土ブロック含む)

図 121 足場状遺構 114

⑨足場状遺構 142

堀 83 の南北堀で検出したものである。これまでに報告を行ってきた足場状遺構とは異なり、長さ 1 m に満たない一辺 8 cm 前後の角柱などが集中しつつも、やや散漫に分散する。ただし、いずれも長辺を北西方向に向ける点や、レベルがほぼ揃うなどの点で意図的に投入されたものである可能性が高いものと判断している。

部材の分布範囲は約 3.9 × 2.1 m であり、レベルは最高所で T.P.14.9 m、最も低い部分で 14.5 m を測る。南東から北西に向かって緩やかに傾斜するものの、この状況はさほど顕著ではない。

なお、当該足場状遺構は、先に報告した礫群 197 と近接する上に、レベルがほぼ揃っている。あらためて礫群 197 を俯瞰すると、その分布は南東から北西に向かってのびる傾向を看取することができ、その先端に足場状遺構 142 が連続するようにみえる。両者は足場の確保のために一連の作業で投入されたものであった可能性もある。

(4) 埋葬施設

今回の調査では、堀の客土中から 2 基の埋葬施設を検出している。いずれも、客土中からの検出であり、堀を埋め戻す過程で埋葬されたものである。

また、後述するように堀 83 の客土中からは南西コーナーを中心として牛や馬などの骨が多量に出土している。一方、南北堀の北半部では骨の出土分布は希薄であり、骨の廃棄が南西コーナーを中心に行われたことを示唆している。以下で報告する埋葬施設も大局的には堀の南西コーナーをはさんで検出したものであり、副葬品と伴うことから遺棄したものとは考えられず、埋葬行為であることは確実である。しかしながら、両者ともに位置的には投棄された骨の分布密度が高い部分に位置していることも事実である。

①墓 107

堀 83 の南北堀で検出したものである。隅丸長方形の浅い掘方に竹行李を棺として人体を埋葬している。掘方は南北 90 cm、東西 70 cm、深さ 15 cm を測る。掘方の東寄りには人体を埋葬した竹行李を埋納している。掘方および竹行李の長辺の方位は N -19° - E で、やや東に振っている。

検出レベルはおよそ T.P.16.5 m であり、層位的には図 123 に示したように堀の埋め戻しの際の客土中から検出したものである。この図は北側約 5 m に位置する東西断面図に墓 107 を投影したものである。堀が全体に北に向かって下がっていることから、厳密には完全に対応するものではないが、大局的にみれば、先に報告した客土の上下 2 層の境目部分に位置していることが窺われる。

また、調査では左の肩甲骨が露頭した段階で周囲を精査したが、掘方や盛土を確認することができなかった。結論的にいえば、堀の埋め戻し過程で浅い掘方に竹行李を棺に転用して埋納し、堀の埋め戻す作業過程で埋没したものと考えられる。置石など墓の位置を示すような標示もなされていない。

この墓 107 は掘方の周囲を含めた遺構全体を切り取り、人骨・竹行李を含めて P E G 含浸処理による保存処理を行っている。人骨や行李は出土状況のまま保存しており、このために行李の底面の状況や人骨の詳細については、不確定な要素を残すこととなっている。

竹行李は身と蓋が組み合わされた状態であるが、埋葬時に空洞部分が多かったと考えられる西側が土圧のために大きく落ち込むとともに歪んでいる。行李は南北に長軸をもち、蓋は復元すると長さ 60 cm、幅 40 cm であり、当然のことながら、身はやや小振りであったと考えられる。身・蓋ともに高さ 18 cm 前後に復元できる。幅 2 cm 前後で薄く削いだ竹を網代編みにしたものであり、表面には黒色顔料が塗布

されている。蓋の側面角などには補強のための布が漆と考えられる黒色顔料で塗りこめられている。蓋の縁には短冊状に割った竹を用いており、蓋と身の長辺には木製の棧木が添えられている。

蓋に付された棧木は西側のみが残り、両端が緩やかにカーブを描いて細くなり、中央が上下ともに削り込まれている。本来、東側にも同様の棧木が付されていたと考えられるが、埋納された時点ですでに欠失していたものと考えられる。身の棧木は蓋のものとは形状が異なり、穿孔と矩形の削り込みが1箇所ずつ認められる。行李全体が傾いた状態を呈しており、地中に没した西側については、その有無についても不明である。

被葬者は頭位を北にし、顔を西に向けた横向きの状態で埋葬されている。60×40cmの竹行李に納めるために頸を直角に近い角度で曲げ、手足を折りたたんだ屈葬状態である。被葬者の性別等の鑑定結



図 122 埋葬施設分布状況

果については第11章に掲げている。これによれば、被葬者は老齢の女性である可能性が高く、骨の配列状況には不自然な箇所は見出すことはできず、埋葬時に関節をはずすなどの行為はなされていない。被葬者が窮屈な竹行李に埋葬できるほどの小柄な人物であったことが窺われる。

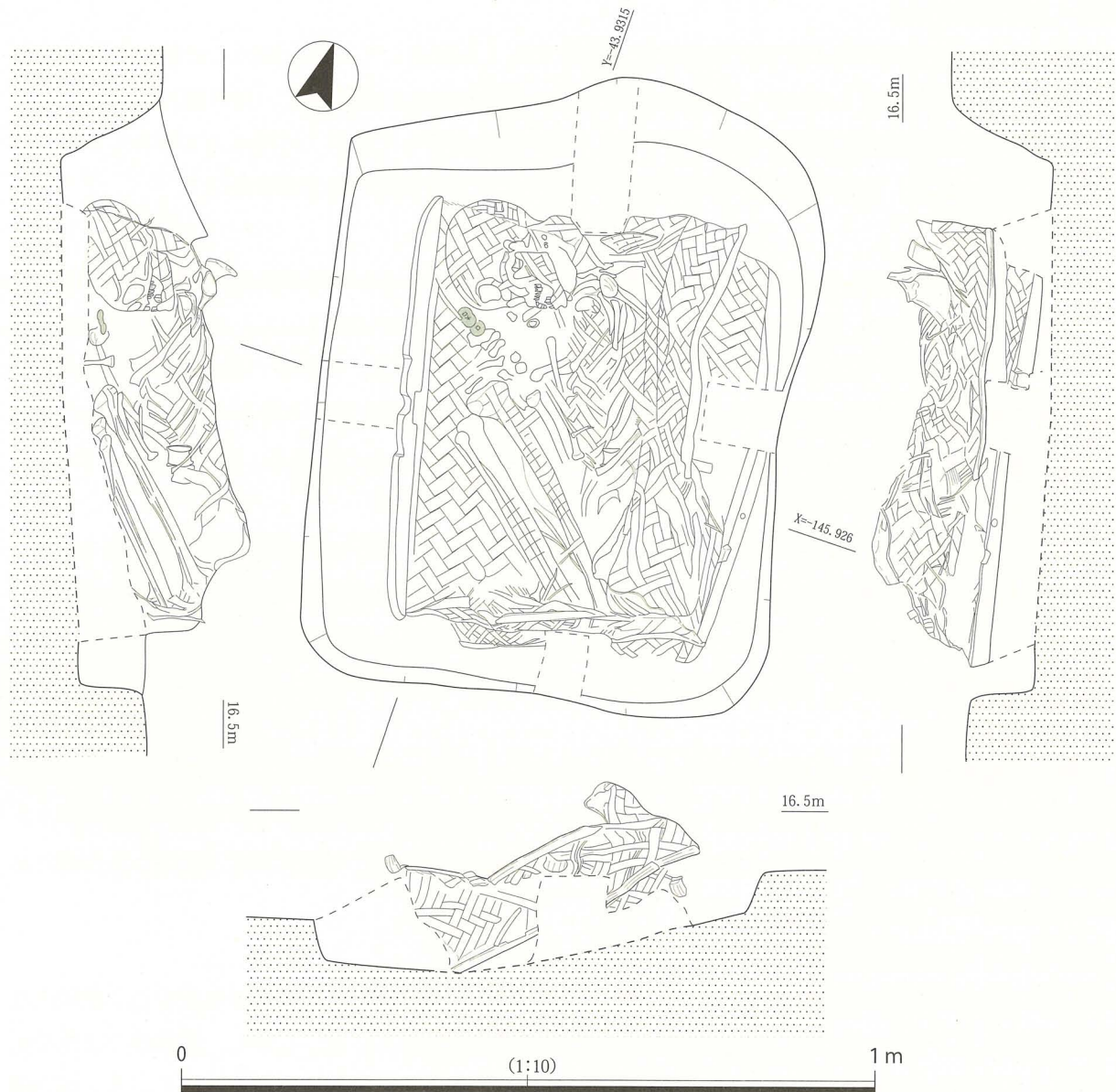


図123 墓107

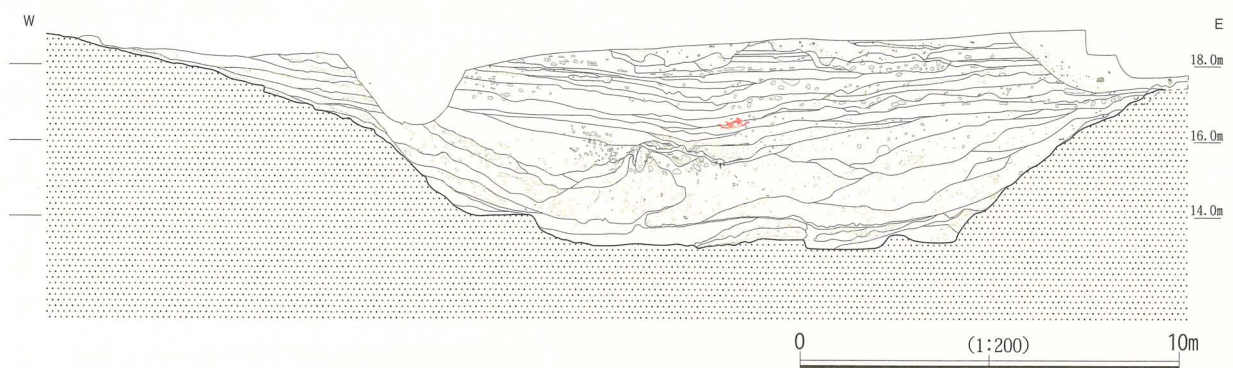


図124 墓107 断面投影図

副葬品としては銭貨・数珠が出土している。銭貨は頭蓋骨の前頭部側に5点が重ねて副葬されており、竹行李の蓋の下部から検出したものであり、行李の中に人体とともに埋納されたものであると判断できる。袋などの痕跡は確認できなかった。銭貨の種類は、それぞれ開元通寶・元豊通寶・紹聖元寶・政和通寶・大定通寶である。

このほか、保存処理作業の過程で胸骨付近で数珠玉を1点確認している。周囲には他の数珠玉は確認できず、詳細は判然としないが、後述する墓112と同様に数珠を副葬していた可能性もある。すでに記したように当該遺構は掘方を含めて切り取って保存処理を行っており、竹行李の下部や人骨の下部の状況は不明である。数珠を含めた他の副葬品が埋没している可能性も否定できない。

②墓112

堀83の東西堀で検出したものである。隅丸長方形の浅い掘方にムシロ巻きにした人体を埋葬している。掘方は長さ1.04m、幅0.63m、深さ0.11mを測る。掘方のほぼ中央にムシロで巻いた人体を埋葬している。掘方の方位はS-51°-Eで、頭位は南東に向けている。検出レベルはおおよそT.P.15.35mであり、層的には図126に示したように堀の埋め戻しの際の客土層の下部から検出したものである。この図は西側約5mに位置する南北断面図に墓112を投影したものである。若干の距離をおくが、客土層(図112土層番号41)の上面に造営されたものと考えられる。

墓107と同様に浅い掘方を掘るか、もしくは客土時に生じた浅い窪みを利用して埋葬を行っている。検出時には人骨の表面を植物繊維が覆っている状態であり、細部では藁を編んだ状態が確認されることから、ムシロであることを確認している。埋葬状態からみて、あるいは俵など袋状のものに納められていた可能性も示唆されるが、藁のほとんどが土と同化したような状態であったことなどから、確認することはできなかった。

被葬者は老齢の女性である可能性が高く、顔を斜め下方に向け、四肢を小さく折りたたんだ屈葬状態で埋葬されている。両手は顔を覆うようにしている。うつ伏せ状態で埋葬されていることになるが、この状態がムシロで遺体を巻いた後に安定して埋置できる体位であり、この埋葬状態が意図したものである可能性は低いのではないかと判断する。

副葬品としては漆器椀・銭貨・数珠が出土している。

漆器椀と銭貨は腹部に抱え込むような状態で出土している。単純に出土状況のみを記すと、漆器椀は高台を斜め上方に向けて出土し、漆器椀の体部上面に銭貨が置かれている。しかし、埋葬時の状況を想定すると、仰向けの遺体の腹部にまず、銭貨6点がおかれ、その上に漆器椀が置かれたという、逆の副葬順序を想定することも可能である。いずれにしても、漆器椀と銭貨はセットで副葬されている。なお、漆器椀は遺体の腹部で二次的な影響を受けることなく、出土したにも関わらず、口縁部や高台の端部が摩滅したり、漆が剥がれ落ちたりしている。被葬者の持ち物であったとは断言できないが、かなり使い込まれたものであったことは事実である。

銭貨の種類は嘉祐通寶・元豊通寶・元祐通寶・紹聖元寶・祥符通寶であり、元豊通寶のみが2点出土している。

数珠は玉が総数108点であり、手首周辺から東方に流れ落ちたような状況で出土している。糸が切れたためか、当該箇所では秩序が乱れているが、一部では2列に並んだ部分もある。なお、数珠玉は漆器椀の下面からも出土しており、先に記したように、埋葬準備段階には仰向けであったと仮定すると、数珠は最後に手首に掛けられて、その一方は腹部付近に及んでいたものと考えられる。

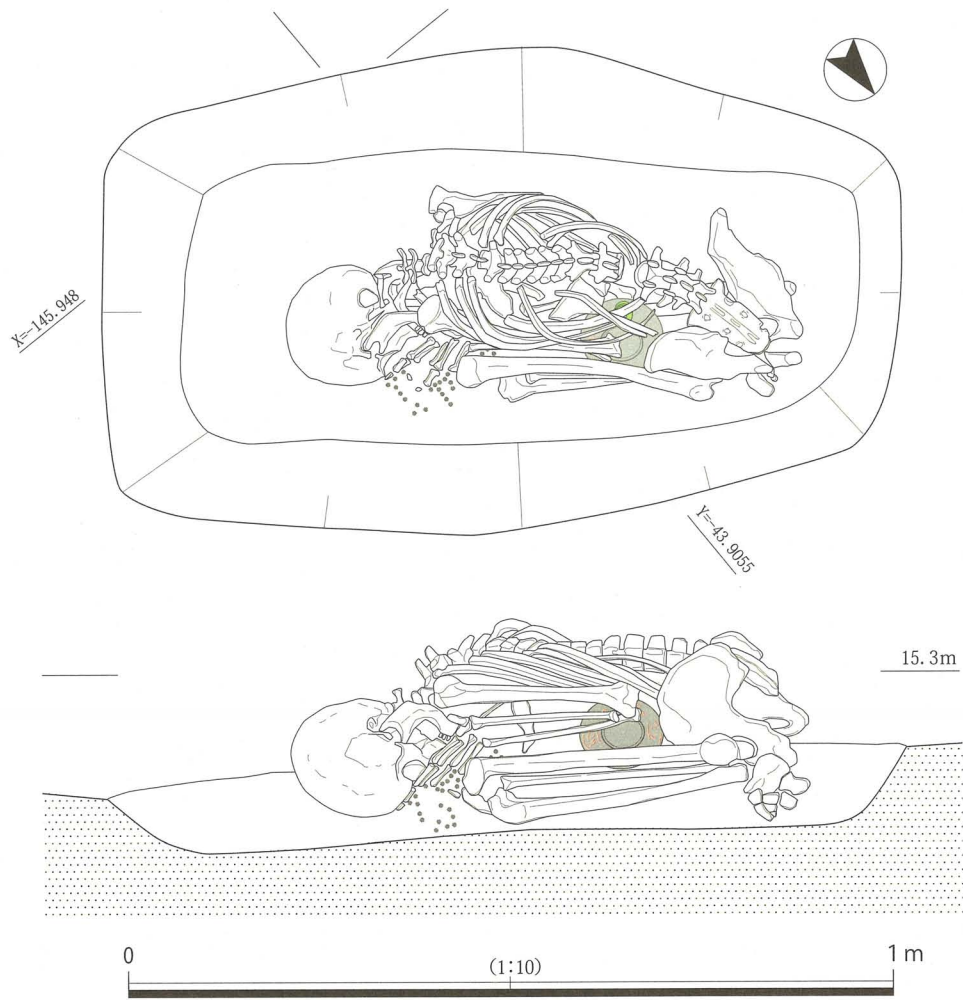


図 125 墓 112



図 126 墓 112 断面投影図

(4) 人骨・獣骨の出土状況

今回の調査では、堀の客土中から多くの骨が出土している。骨そのものの鑑定・分析に関しては第11章に掲げているのでここでは触れないが、分布や出土状況について概観しておくことにしたい。

主要な人骨・獣骨の出土分布は図128に示したとおりである。これを瞥見しても分かるように、人骨・獣骨の出土分布は南北堀の南半に集中する状況が看取される。当該図には出土したすべての骨の位置を網羅的に明示しているわけではないが、それでもこの状況は骨の出土分布の大局的傾向を示すものといえる。

なお、堀83の客土中からは500点を超える骨が出土している。この中には堀の埋め戻し作業に伴って単体で混入したものもあるが、一方で骨がまとめて廃棄されて集積していたり、解体痕をもつものなどの特徴を有するものも少なからず確認できる。先にも触れたように、骨の出土分布をみると、堀の南西コーナーから南北堀の南半部に集中している傾向を見出すことができる。これは、骨の捨て場が一定の場所に特定されていたか、食用とされた牛馬の残滓が、比較的短期間に廃棄された可能性も示唆されるところである。

以下ではこのような特徴的な一群を取り上げて報告を行うことにしたい。

①人骨・獣骨集積遺構 86

堀83の南西コーナーの南肩付近で検出した。検出レベルはT.P.18.25～18.40m前後であり、堀底からすると4m以上の高さであり、堀の客土中ではかなり上部に位置する。南北0.8m、東西1.5mの範囲に骨と瓦片、礫が集積した状態でまとまって出土している。礫は一部で一辺20cm近いものもあるが、

多くは10cm以下で、同時に出土した瓦片も10cm以下の細片が多い。

骨は礫や瓦片と混在する形で出土している。骨の大半は人骨であるが、わずかに獣骨も含んでいる。人骨には頭蓋骨や大腿骨などがあるが、頭蓋骨は破片となって複数出土した。このうち、東寄りの下層から横向きの状態で出土した頭蓋骨は土圧で変形しているものの、ほぼ原形を留めているが、下顎骨は伴わない。

また、この頭蓋骨には側頭部に貫通する刺突痕が残る。当該遺構で検出した人骨等に関しては、後に報告する人骨99などとは異なり、破片であること、頭蓋骨がほぼ原形を保ちながらも下顎骨を伴わない、等々の状況から一定の時間を経て、白骨化した後に瓦礫とともに廃棄された可能性が高いものと判断できる。

②人骨 99

堀83南北堀の東側で検出した礫群91の下方から出土した頭蓋骨である(図114)。検出レベルはT.P.16.3m前後である。

礫群91の礫と礫の間に挟まったような状態で出土した。出土状況からみて、特別な扱いを受けたような状況は看取

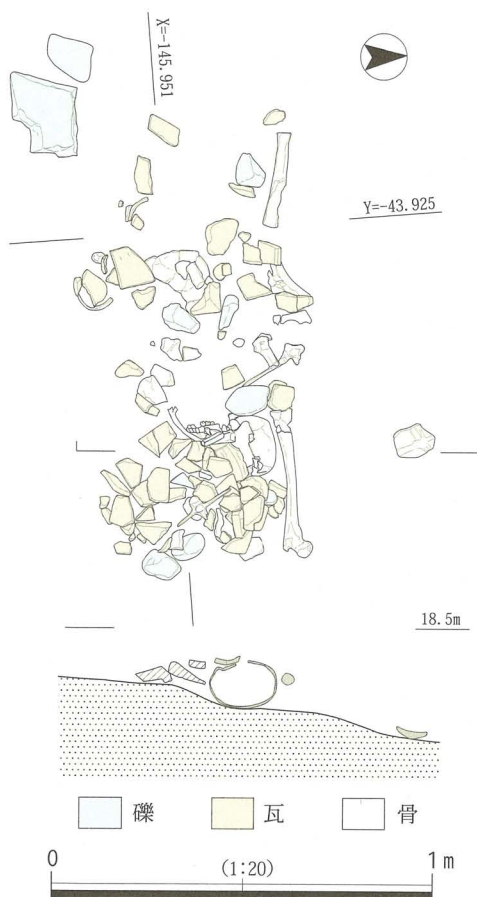


図127 人骨・獣骨集積遺構 86



図 128 主要人骨・獣骨出土分布

できない。顔面を下方に向けた状態の頭部であり、頭蓋骨のみならず、下顎骨や頸椎も残っている。頸椎は第2頸椎までが残るが、切断痕がある。頭蓋骨にも刀傷が4箇所以上残っている。

切断された頸椎が頭蓋骨との位置関係を保ったまま出土しており、生首の状態です。礫群91の崩落とともに埋没したものと考えられる。

③馬骨 101

堀83の南北堀の客土中から検出した馬の頭部である。顔の正面を東に向けた横位で出土した。検出レベルはT.P.16.5 m前後である。下顎骨および頸椎も秩序を保って遺存している。

第2頸椎には切断痕があり、頭部を切り落した後に投棄されたものである。とくに、埋納されたような状況は見出せず、客土とともに廃棄されたものと考えられる。

④獣骨集積遺構 115

足場状遺構114の下層および東側で検出した。犬と牛の骨が複数出土している。検出レベルはT.P.15.3 m前後である。2体分の犬は足場状遺構114を構成する板材の東側で出土しているが、牛の骨は板材の下面から出土している。足場状遺構114を造成する際に同時に獣骨が投棄されたものと考えられる。

⑤獣骨集積遺構 119

堀83の南西コーナー東寄りの客土中から検出した。牛の寛骨・仙骨・椎骨・肋骨が秩序を保って出土している。検出レベルはT.P.17.9 m前後である。とくに、埋納されたような状況は見出せない。

⑥獣骨集積遺構 120

堀83の南西コーナーの南西の客土中から検出した。牛の頭蓋骨が正位で出土している。下顎骨は伴わない。検出レベルはT.P.17.4 m前後である。とくに、埋納されたような状況は見出せない。

⑦獣骨集積遺構 122

堀83の南西コーナーの客土中から検出した。牛の下顎骨の上面に大腿骨と脛骨が重なった状態で出土している。検出レベルはT.P.17.8 m前後である。とくに、埋納されたような状況は見出せない。

⑧獣骨 123

堀83の南西コーナーの南寄りの客土中から検出した。ムシロに巻かれた状態で出土した猫である。検出レベルはT.P.17.35 m前後である。骨の表面は植物繊維が覆っており、これは先に報告した墓112との対比からムシロである可能性が高い。ただし、このムシロと考えられる植物繊維層は墓112の場合と同様に土と同化しており、詳細は判然としない。

猫は頭を北、顔を西に向けた横位で出土している。掘方や盛土などは確認できなかったが、ムシロで覆われていたことを重視するならば、埋葬を意識していた可能性もある。

⑨獣骨 124

堀83の南西コーナーの北寄りの客土中から検出した牛の大腿骨と脛骨である。検出レベルはT.P.17.7 m前後である。とくに、埋納されたような状況は見出せない。

⑩獣骨 125

堀83の南西コーナー付近の客土中から検出した。馬の頸椎と肋骨、大腿骨と脛骨などがまとまって出土した。検出レベルはT.P.17.8 m前後である。とくに、埋納されたような状況は見出せない。

⑪獣骨集積遺構 126

堀83の南西コーナー北東の客土中から検出した。図129に示したように南北約2.1 m、東西約1.3 mの範囲で解体されたと考えられる牛馬の部位が折り重なって出土している。検出レベルはT.P.14.7

m前後である。頭蓋骨は下顎骨がはずれた状態である一方、馬の後肢は大腿骨から指骨までが秩序を保ったままで出土している。解体されて、さほど時間をおかず、廃棄されたものと考えられる。

⑫ 獣骨集積遺構 129

堀 83 の南西コーナーの客土中から検出した。北側に牛の椎骨から寛骨、やや離れて南側に牛の大腿骨と脛骨が秩序を保って出土している。検出レベルは T.P.17.5 m 前後である。

⑬ 獣骨 131

堀 83 の南西コーナーの客土中から検出した。犬の頭蓋骨が単体で出土したものであり、下顎骨等は伴わない。検出レベルは T.P.13.9 m 前後であり、客土としては最下層に近い。

⑭ 獣骨 132

堀 83 の南北堀南半から検出した。牛の前肢のみで、上腕骨から指骨までが秩序を保っている。切断して廃棄されたものと考えられる。検出レベルは T.P.14.5 m 前後である。

⑮ 獣骨 134

堀 83 の南西コーナーの客土中から検出した。犬の頭蓋骨が単体で出土したものであり、下顎骨等は伴わない。検出レベルは T.P.17.5 m 前後である。

⑯ 獣骨 135

堀 83 の南西コーナーの客土中から検出した。牛の前肢が上腕骨から指骨まで秩序を保って出土している。検出レベルは T.P.17.3 m 前後である。

⑰ 獣骨 143

堀 83 の南西コーナーの黒色粘土層中から検出した。ほぼ全身が残る鳥骨であり、検出レベルは T.P.14.5 m 前後である。他の多くの骨が客土中からの出土であるのに対して、本例は堀が機能していた

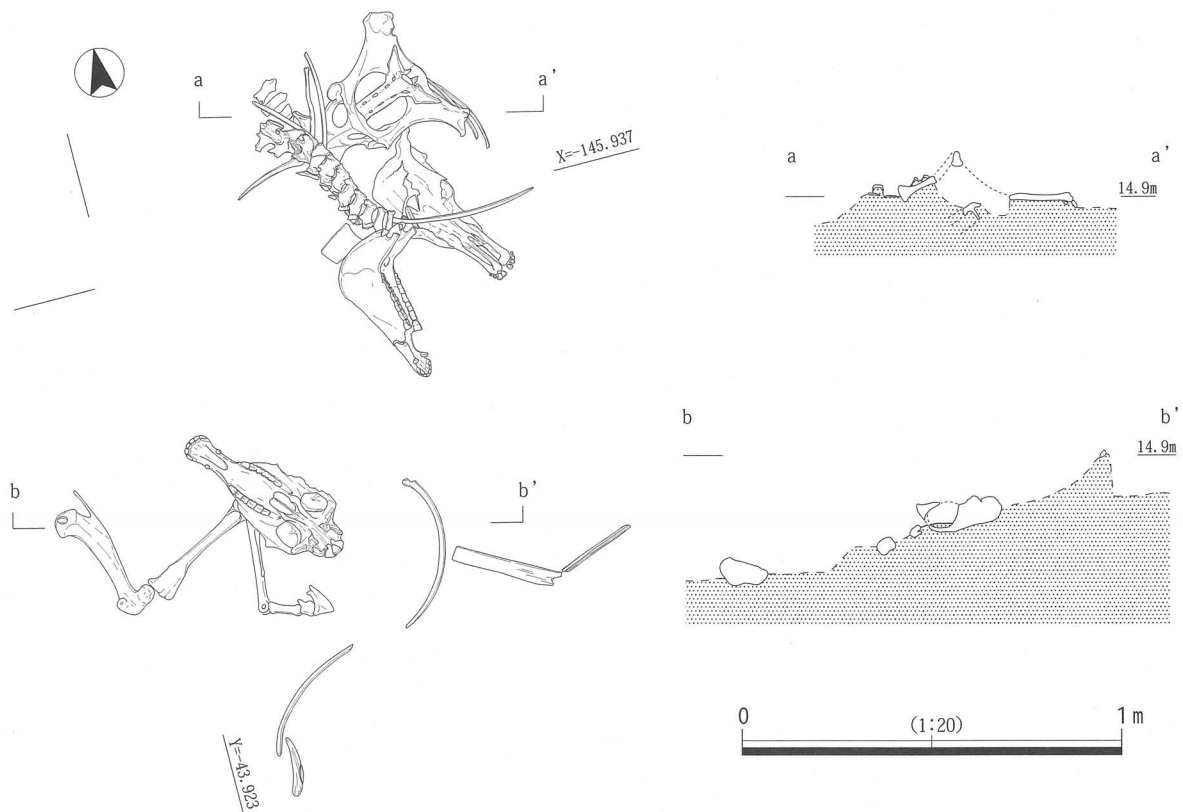


図 129 獣骨集積遺構 126

段階の堆積層である黒色粘土層（図 112 土層番号 46）からの出土である。

⑱ 獣骨集積遺構 148

堀 83 の南北堀北半の客土中から検出した。犬と牛の脛骨・尺骨・肋骨・肩甲骨などがまとまって出土している。検出レベルは T.P.13.88 m である。

⑲ 人骨 149

堀 83 の南北堀北半の客土中から検出した。人の頭蓋骨が単体で出土した。検出レベルは T.P.13.93 m である。

⑳ 獣骨 150

堀 83 の南北堀北半の客土中から検出した。犬の頭蓋骨が単体で出土した。検出レベルは T.P.13.79 m である。

㉑ 獣骨 198

堀 83 の南西コーナー西肩近くの客土中から検出した。牛の椎骨・肋骨・仙骨・寛骨が秩序を保って出土している。検出レベルは T.P.16.8 m 前後である。

（5）主要遺物の出土状況

今回の調査では、堀の客土中から多種多様な遺物が出土している。多くは客土中に混入したものであり、大半は 10 m グリッドを単位として取り上げを行っている。しかしながら、調査の過程では一定の範囲に遺物がまとまっている箇所もある。以下では、遺物が密集して出土した部分と主要な出土遺物の出土状況について一項を設けて簡単に報告しておくことにしたい。

① 遺物集積遺構 111

堀 83 の東西堀東南の客土中から検出した。検出レベルは T.P.17.00 m である。南北約 2.6 m、東西約 1.1 m の範囲から図 160 に掲げた経木がまとまって出土した。

周辺からは桶や漆器椀なども出土しているが、これらは厳密に言えば経木の出土層位よりはやや上位となる。わずかに南から北に向かって下がっていることや、出土位置から見て、堀の埋め戻し作業の工程と呼応して南から投入されたものと考えられる。

いずれにしても、経木は同一層位で面を成して出土している。堀の埋め戻しに伴う客土を行う過程で「南無阿弥陀仏」の六字名号を書した経木を一括で投棄もしくは人為的に投入した可能性が高い。

② 遺物集積遺構 127

堀 83 の南西コーナーの南西側客土中から検出した。検出レベルは T.P.17.0 ～ 17.5 m である。南北約 3 m、東西約 5 m の範囲から遺物がまとまって出土している。先に記した遺物集積遺構 111 とは異なり、堀の法面に並行する形で流れ込んだような状況を呈している。意図的に遺物をまとめたものではなく、客土とともに一括投棄された遺物群と捉えることができる。

遺物には唐津碗・土師器皿・漆器椀・折敷・下駄・祈祷札などのほか、多量の木片がある。唐津碗・土師器皿ともにほぼ原形を保つものが多く、同時に原形を残す 2 点の折敷も出土しており、あたかも、食事後の供膳具を一括で廃棄した感がある。このほか、ここからは慶長 13 年 12 月の紀年銘をもつ祈祷札が出土している。

③ 主要遺物の出土状況

ここでは、主要遺物の出土状況を概観しておく。

豊臣水軍の将として歴史に名を残す「菅平右衛門様」と記された木簡（1355）は南北堀南半の東寄

りて出土した。一括して取り上げた遺物中から見出したものであり、厳密なレベルは不明であるが、おおむね T.P.17.0 m 前後の客土層からの出土である。

漆塗りの傘 1790 は T.P.18.2 m 前後の客土中から先端を東に向けて出土した。江戸時代以降の井戸 117 に一部を壊されているが、骨も残り、同一個体のものと考えられる上ロクロも至近から出土している。

金属製の椀 2005 は堀の南西コーナー南寄りで検出したものである。この椀は他の遺物と異なり、堀が機能していた段階の黒色粘土層から逆位で出土した。土圧による変形が著しい。

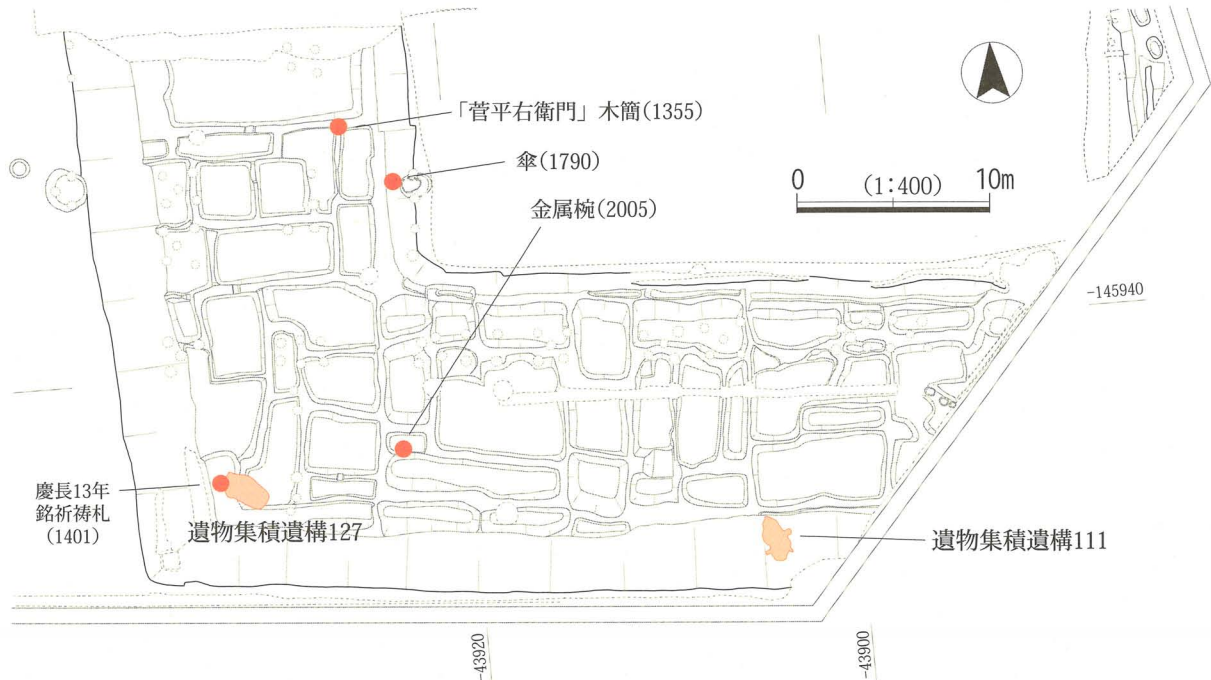


図 130 主要遺物出土分布図

第3節 その他の遺構

1. 井戸

今回の調査で検出した豊臣後期の遺構は堀 83 とそれに関連する遺構を除けば、調査地の南西で井戸 2 基を検出したのみである。

(1) 井戸 88

井戸 88 は調査地の南西で検出した。上面は江戸時代の土取りによって削平されており、元来の掘り込み面は不明である。直径約 1.1 m のやや不整な円形掘方をもち、下方には木製の円形井戸枠が残る。深さは残存で 2.03 m であり、地山の砂礫層を掘り込んでいる。井戸枠は桶状を呈し、直径 0.73 m、高さ 1.13 m を測る。内側の中位には、切れ目をいれた幅約 8 cm の補強帯が巡る。これより下方には、取水のためか、枠板におよそ 3 本に 1 本の割合で小さな長方形の穿孔がある。

埋土は大きく上下 2 層に分かれ、下層は井戸が機能していた段階の粘土層、上層は人為的な埋め戻し土である。埋め戻し土の下部には一辺 10 ~ 15 cm 前後の礫が投棄されている。

出土遺物はいずれも下層からの出土で、陶磁器は完形の唐津碗 1 点を含んだ 41 点、瓦片 57 点、木製品 15 点、銭貨 10 点が出土している。このほか、桃などの種実が 3 点出土している。

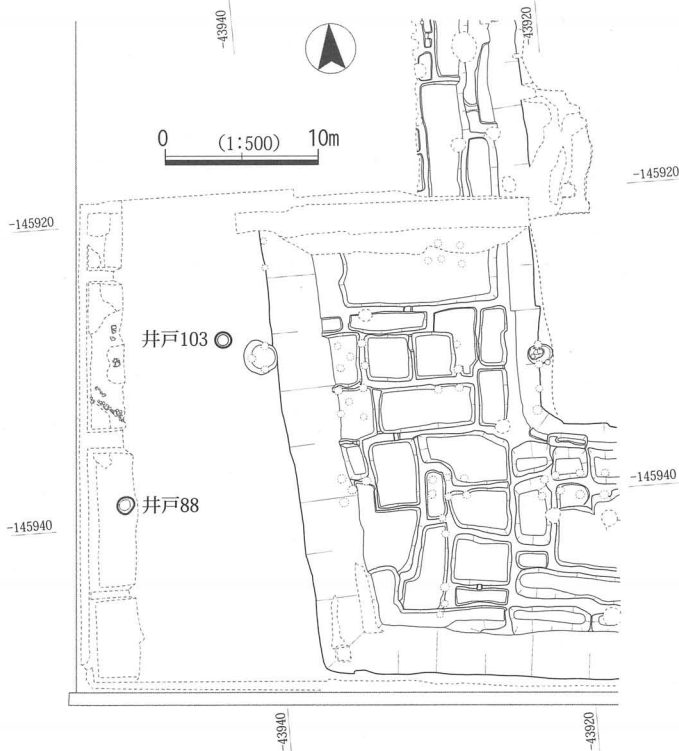
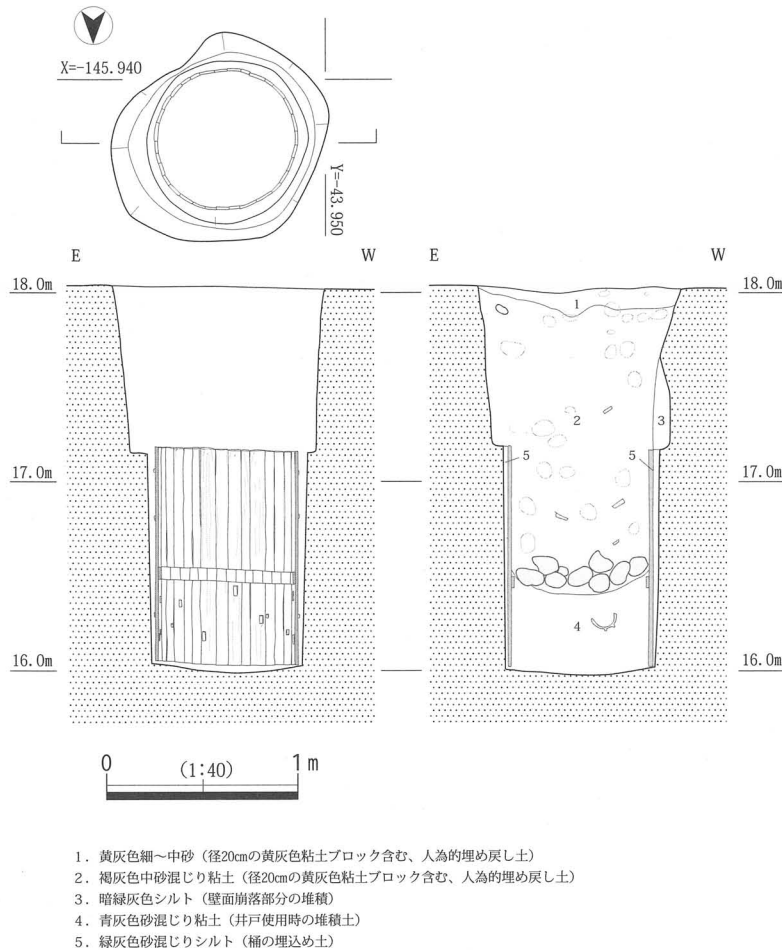


図 131 豊臣後期井戸分布図

(2) 井戸 103

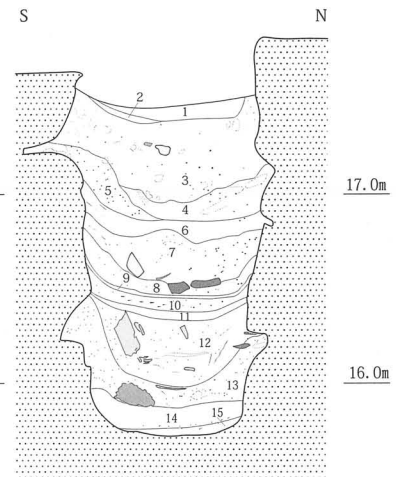
井戸 103 は堀 83 の南西コーナーから北に約 23 m の地点で検出した。円形の素掘り井戸であり、直径約 0.9 m、深さは検出面から 2.1 m を測る。埋土は基本的には人為的な埋め戻し土であるが、中位には水成堆積である粘土層がみられる。砂礫層の地山を掘り込んでいるため、壁面の崩壊が著しい。井戸枠は残らず、土層断面にも裏込め土の痕跡も確認できない。

出土遺物は、陶磁器では唐津碗・大皿が 4 点、志野織部皿が 1 点、備前甕片が 5 点出土している。また、完形の土師器皿が 1 点、瓦片 27 点のほか、スラグが数点出土している。このほか、短冊状の薄板が 150 点あまり出土しており、いずれも細かく割れているが、元来は曲物であった可能性が高い。



1. 黄灰色細～中砂（径20cmの黄灰色粘土ブロック含む、人為的埋め戻し土）
2. 褐灰色中砂混じり粘土（径20cmの黄灰色粘土ブロック含む、人為的埋め戻し土）
3. 暗緑灰色シルト（壁面崩落部分の堆積）
4. 青灰色砂混じり粘土（井戸使用時の堆積土）
5. 緑灰色砂混じりシルト（桶の埋込め土）

図 132 井戸 88



1. 灰色粘土（細砂との互層、ラミナあり）
2. オリーブ黄色中砂（均質）
3. 緑灰色シルト
（粘土ブロック粗砂礫混じり、人為的埋め戻し土）
4. オリーブ灰色粘土（シルトブロック、粗砂混じる）
5. 緑灰色粘土とにぶい黄色中砂の互層
6. 灰色粘土（細砂～中砂の薄層入る、ラミナあり）
7. 緑灰色シルト（灰黄色粗砂ブロック含む、下部に遺物多し）
8. 青灰色粗砂混じり粘土
9. 灰色粘土（均質）
10. 青灰色粗砂
11. 灰色粘土（均質）
12. 緑灰色シルト（粘土ブロック、粗砂、木片多く含む、人為的埋め戻し土か）
13. オリーブ灰色粗砂（下部に炭水化物多し、釜滓含む）
14. 暗オリーブ灰色シルト（地山土に似る）
15. 明オリーブ灰色粗砂

図 133 井戸 103

第4節 堀83の出土遺物

1. 前提

これまでの遺構では、堀83とその関連遺構については一括して報告する形をとってきたが、以下の遺物の報告では、堀83客土中の出土遺物を先行して報告し、個々の遺構からの出土遺物については後続して個別に報告することにした。

堀83の埋め戻しに関しては、後の報告する「菅平右衛門」木簡の出土によって、それが大坂冬の陣直後である蓋然性がきわめて高いものとなった。したがって、文献資料との対比でいえば、堀83出土の遺物群に関しては、遅くとも慶長20(1615)年の1月を年代の下限とするものとなり、各種遺物ともにきわめて重要な位置を占めるものとなる。

実際には惣構堀の埋め戻し完了の時期と菅平右衛門の切腹が慶長19(1614)年12月26日であったことを考えると、堀83の客土中から出土した遺物群は、慶長19(1614)年の年末であった蓋然性が高いものといえる。

2. 堀83の出土遺物

(1) 土器・陶磁器・土製品

図134～154には堀83から出土した土器・陶磁器・土製品の一部を掲げた。これらの多くは堀の埋め戻しに伴う客土中からの出土であり、土器・陶磁器に関していえば、堀が機能していた段階の堆積層からの出土は僅少である。本来、峻別して報告すべきところであろうが、ここでは一括して報告し、客土層以外のものについては、その都度、個別に記述を加えていくことにしたい。

998～1034は土師器皿である。このうち、1002・1003・1005・1008・1009・1017・1026は遺物集積遺構127からの出土で一括性が高い。以下、とくに記さない場合は、堀83の埋め戻しに伴う客土中からの出土である。

998～1010は口径7cm前後の小型の一群であり、多くは底部の中央が盛り上がるいわゆるヘソ皿である。998・1006は内湾気味の口縁をもつ。1011～1023・1026は口径9cm前後で、1012～1015・1018・1019は見込みと体部の境に明確な段差を作り出す。1024・1025・1027・1031・1032は口径11cm前後、1028～1030・1033は口径12cm前後である。1034は口径13.5cmを測る。扁平な底部から口縁部が斜め上方にのび、端部には段差をもつ。998・1003・1013・1014は、口縁端部を中心に油煙などが付着しており、灯明皿として使用された痕跡を残す。先に報告した3調査区出土の土師器皿に比して灯明皿の占める割合は明らかに少ない。

1035・1036は瓦質の瓦灯と考えられる。1037・1038は釜形土製品で、前者は瓦質、後者は土師質である。1037は鏝から下がヘラケズリ、上半はナデ調整である。口縁部は丸く短く立ち上がる。1038も鏝から下がヘラケズリ、上半はナデ調整である。口縁部は内湾する。

1039・1040は土師器の大和型土釜で、両者ともに底部を中心に煤が付着する。前者は口径13.3cm、後者は22.4cmである。1041は遺物集積遺構127から出土した焙烙である。口径23.3cmを測り、体部下半には格子タタキが残る。1042は口径32.3cmの土師器鍋である。口縁は外側に広げられ、端部はつまみ上げる。1043は上半部と底部が破片で出土しているが、直接的には接合しない。胴部上半には直径1.7cmの穿孔がある。

1044瓦質の茶釜である。全体に非常に丁寧な成形で、外面上半部は横方向のヘラミガキ調整である。

肩部には耳が付されるが、完存しておらず、何箇所に付されていたかは不明である。下半には煤が付着する。

1045～1047は陶磁器等を円盤状に加工した製品である。いずれも堀83南北堀の北半部で出土しており、直径が3cm前後である点で共通する。

1045は青花の周囲を細かく割りとして円盤状にしたものである。直径は約3cmである。1046は厚さ1.2cmの瓦質土器を円盤状に加工したものである。周囲は粗く研磨している。直径は約3cmである。1047は白磁の皿もしくは碗を円盤状に加工したものである。一方の面には高台が残る。周囲は粗く研磨している。やや楕円形で長径3.25cm、短径2.95cmである。

図135には陶器の碗類を掲げた。

1048～1084は唐津焼陶器で、うち1082～1084は天目碗である。1085～1087は瀬戸美濃窯製品である。大半は堀の埋め戻しに伴う客土中からの出土であるが、1071のみが堀83機能時の黒色粘土層からの出土である。

1048・1052・1056は高台と体部の境界が明確ではなく、口縁部が斜め上方に直線的にのびるものである。釉薬は灰釉で1048・1056が淡緑色、1052が濃緑色を呈する。1049～1051・1053～1055・1057～1063は細部では形態差がみられるが、基本的には内湾気味の口縁をもつ。釉薬は1049・1060が濃緑色、1050～1058・1061～1063が淡緑色である。1059のみ失透白色であり、見込みと高台付近に煤が付着している。1064～1070は斜め上方に開く口縁部をもつ。釉薬は1064が失透白色、1066が濃緑色、1067が白濁した淡緑色である。1065には高台と見込みに胎土目の痕跡が残る。1068～1070は灰緑色の釉薬で、1070の施釉は高台の外面にまで及んでいる。

1071は丸い体部をもついわゆる丸碗で、釉薬は淡緑色である。形態的に古いタイプの碗であり、出土層位と対応している。

1072～1079は高台から斜め上方に胴部がのび、口縁部の下方でくの字形に緩やかに屈曲するものである。天目碗の名残を残すものとされる碗であり、出土した唐津焼碗では新しいタイプのものである。1072・1074～1079では高台外側の下半が面取り成形されている。釉薬は1072・1074・1075・1077・1079が失透白色であり、1072は緑色を帯び、1075は灰色に近い。1075では外面に暗褐色の釉薬を掛け流し、文様としている。1073は外面に文様がある。

1080・1081は鉄釉を施した碗である。1080は口縁端部が外反し、高台外側は面取り成形される。1081は丸みを帯びた器形で、底部のケズリが浅く、胴部と高台の境界が明瞭ではない。1082～1084は天目碗である。1082は器高が低く、胴部がやや丸みを帯びる。1083は高台外側を面取り成形する。

1085～1087は瀬戸美濃窯の天目碗である。1085は丸みを帯びた胴部をもつもので、光沢のある暗緑色の釉薬がかかる。見込みには細かい擦痕がみられる。1086・1087はいずれも高台を欠くが、鉄釉を施す。

図136には杯・皿・向付・片口などを掲げた。

1088～1095は小型の杯である。大半は唐津焼陶器であるが、1089・1091が瀬戸美濃窯の製品、後者は志野焼である。1088・1089は鉄釉で、1088の底部には糸切り痕が残る。1090は淡緑色の釉で、高台の下面には糸切り痕が残る。1090は乳白色の胎土をもち、長石釉を全面施釉する。1092・1093は濃緑色の釉である。1092は高台周辺に黒色の物質が薄く付着している。1093の釉は透明度が高く、高台の外方は面取り成形する。1094は不透黄白色の釉を施し、高台の下面には糸切り痕が残る。1095

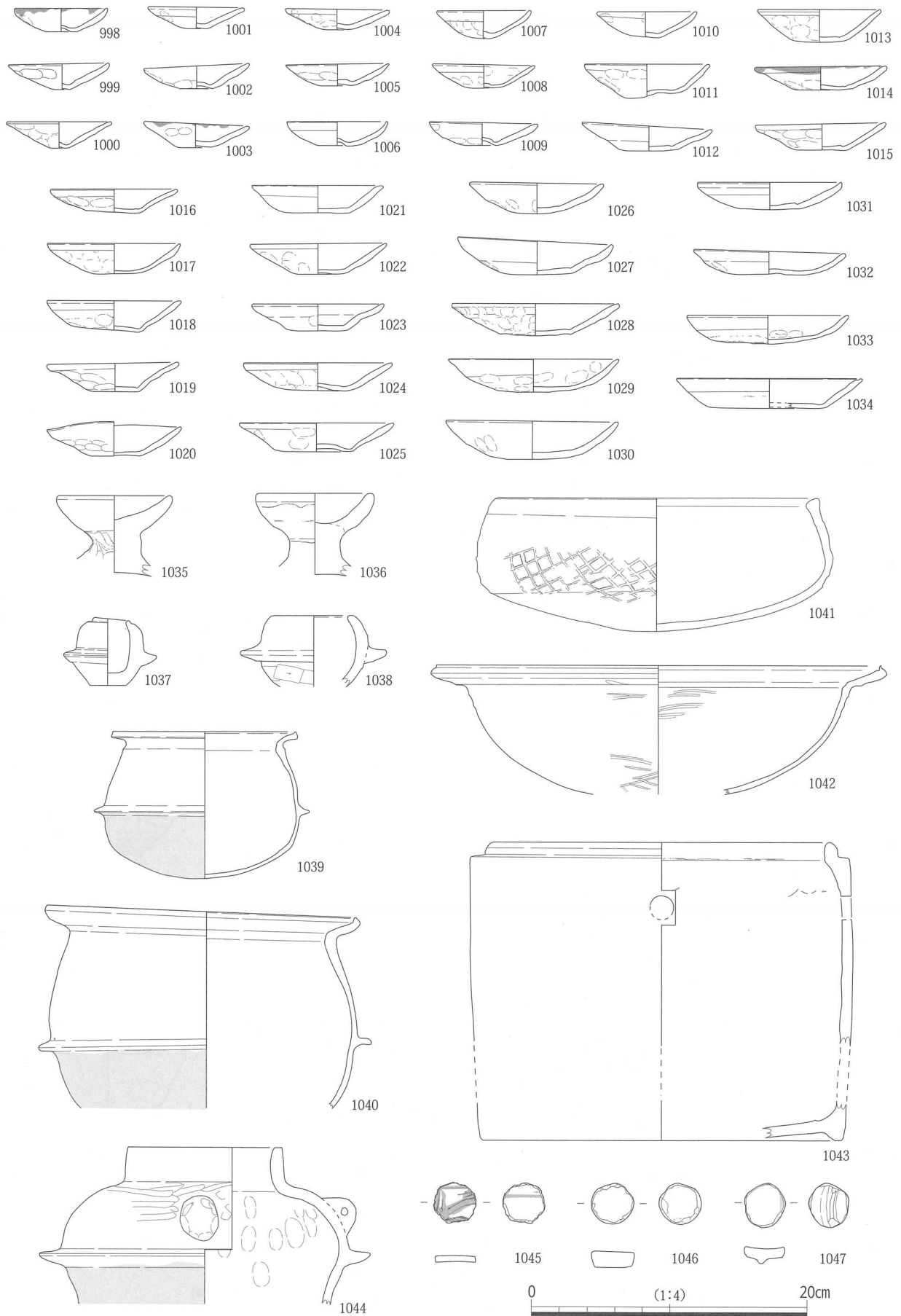


図 134 堀 83 出土土器・陶磁器 (1)

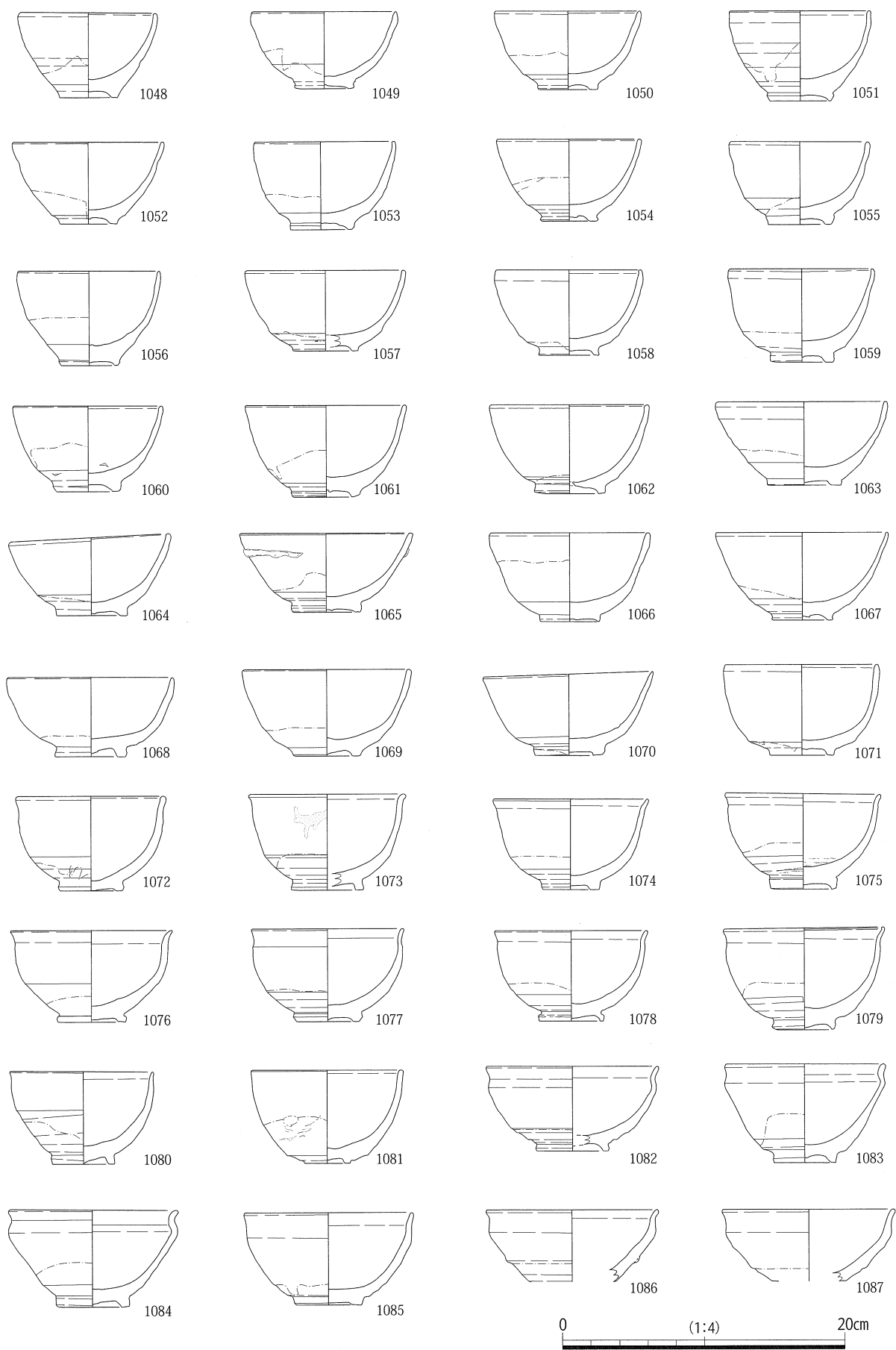


图 135 堀 83 出土土器・陶磁器 (2)

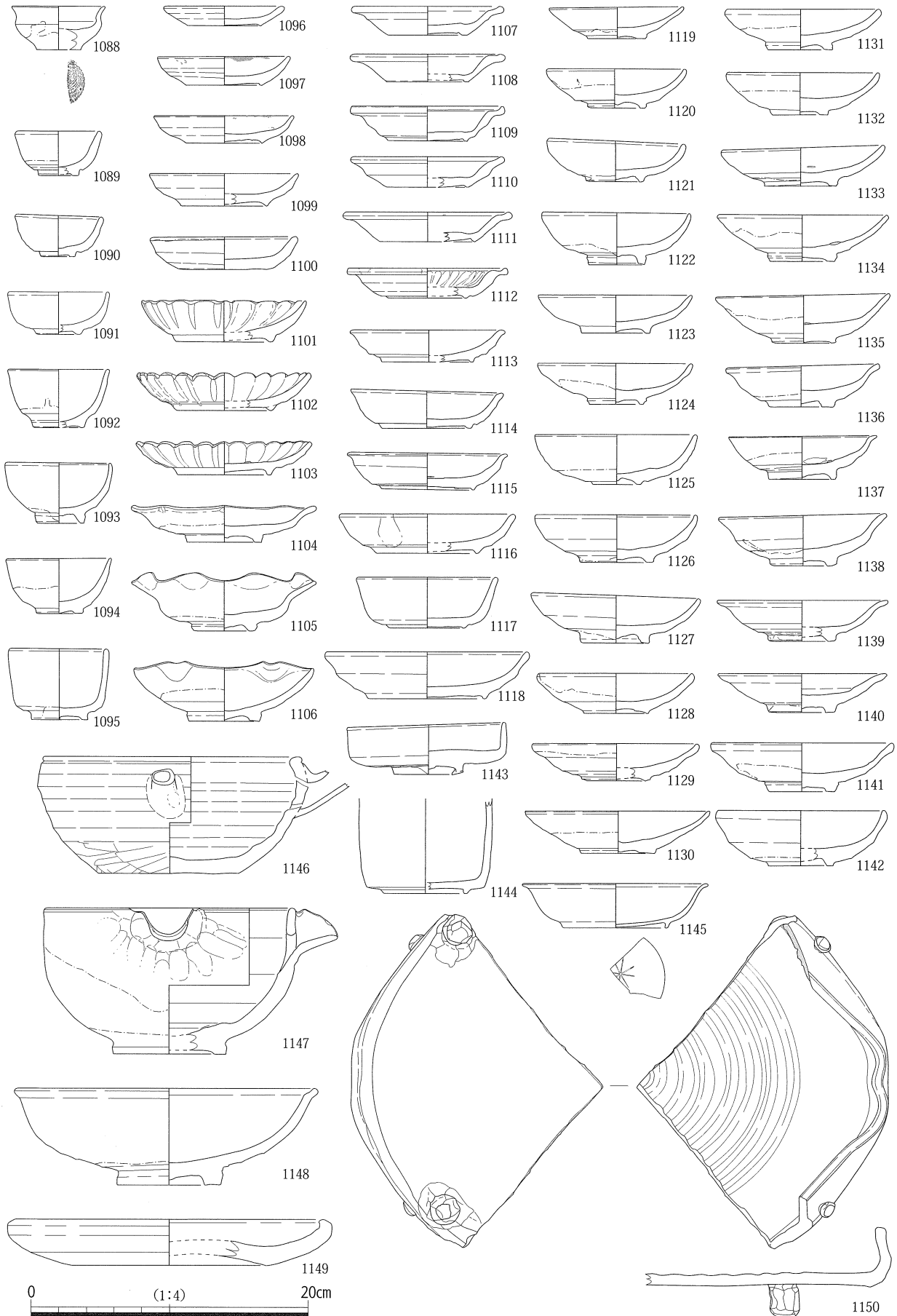


図136 堀83出土土器・陶磁器(3)

は筒形を呈するもので、釉薬は濃緑色である。

1096～1100は瀬戸美濃窯の灰釉丸皿である。1096・1097は底部に胎土目が3箇所に残る。1097の口縁端部の一部には黒色の物質が薄く付着する。1098・1099は底面には輪ドチ痕が残り、1099の見込みには菊文の印刻がある。1100は高台を削り取って研磨している。口縁端部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されていたものと考えられる。

1101～1103は志野焼の菊皿である。いずれも長石釉を全面施釉する。1103の見込みには胎土目が3箇所に残る。1104は口縁部を輪花状にした唐津焼の皿である。濃緑色の釉をかける。見込みおよび高台にそれぞれ3箇所の胎土目が残る。1105・1106は唐津焼の向付で、いずれも口縁部を花卉状に加工する。前者は6弁、後者は4弁である。釉薬は1105が濃緑色、1106が暗灰色である。

1107～1112は瀬戸美濃窯の折縁皿で、1112のみ削ぎ皿である。1107・1109・1111の底面には輪ドチ痕が残る。1113・1114は瀬戸美濃窯の丸皿で後者は被熱のためか、表面が荒れている。

1115～1118は志野焼である。1115は見込みに3箇所の胎土目が残る。数は不明ながらも、1116は高台見付に、1117は見込みに胎土目が残る。1118は大振りの皿で、高台見付は釉掻きされている。

1119～1142は唐津焼の皿である。口縁部が直線的にのびるもの、口縁部が内湾気味で丸みを帯びるもの、口縁端部が端反気味のものに大別される。

1119～1121は灰釉の皿で、釉の色調は濃緑色である。1121は高台付近まで施釉されている。

1122は濃緑色の釉で口縁端部の内面には黒褐色の釉を掛け流して文様としている。高台の外方は面取り成形する。1123は長石釉でほぼ高台見付を除いて、ほぼ全面に施釉されている。見込みには数は不明であるが、胎土目が残る。1124は灰緑色の釉で、見込みには胎土目が3箇所残る。1125は褐色でしまりがない胎土に失透白色の釉をかける。

1126～1128は濃緑色の釉で、1126・1128では外面が付着物で黒色に変化している。後者は油煙の可能性が高いが、前者は薄い塗膜状を呈する。1128は見込みに胎土目が4箇所残る。1129は灰緑色の釉を浅くかける。被熱のためか、釉の表面は荒れている。高台見付には糸切痕が残る。1130は緑灰色の釉で、見込みには胎土目が4箇所残る。外面の下半は黒変する。

1131・1139は失透白色の釉で、前者の内面には胎土目が3箇所残り、高台外側は面取りされる。1132・1136・1137・1141・1142は濃緑色の釉である。1136は見込みおよび高台に胎土目が3箇所ずつ、1141では4箇所ずつ残る。1137は見込みに砂目痕が3箇所残る。破片を含めて、砂目をもつものは僅少である。1133～1135・1138は灰緑色の釉薬を施釉する。1133・1135は見込みに3箇所、1134は見込みに4箇所の胎土目が残る。1138は見込みに砂目が3箇所残る。1140は明灰色の釉を高台近くまでかける。高台外側は面取りする。

1143は口縁部が直立する唐津焼の皿である。乳白色を呈する長石釉をかける。全体に歪んでいる。高台見付に粘土が付着する。1144は志野焼の向付か。筒形の器形をもち全面に施釉されている。

1145は景德鎮産の白磁皿である。高台見付に放射状の線刻が焼成後に入れられている。

1146は備前の鉢である。断面円形の注口をもつが、先端は欠損している。

1147は唐津の片口鉢である。淡緑色の釉薬を施釉する。欠損して全容は不明ながらも、片口の脇には文様と考えられる鉄釉がみられる。見込みには胎土目が残る。1148は唐津の大型皿である。釉薬は淡緑色を呈する。見込みには3箇所に胎土目が残る。1149は備前の平鉢である。体部下半をヘラケズリする。1150は備前の水盤状の大型製品である。全体の4分の1が残るのみであるが、復元すると一

辺約32cmの方形に近い形態となる。口縁部は内傾し、コーナーは入隅状に変形させている。直径約2cm、高さ約3cmの脚が2箇所に残るが、元来は4箇所であった可能性が高い。

図137には鉢・壺・甕などを掲げた。

1151は瀬戸美濃窯の茶壺である。鉄釉で底面には糸切り痕が残る。胴部下半から底部にかけて煤が付着している。1152・1153は徳利である。1153には肩部にヘラ描きの記号がある。1154は丹波の小型鉢と考えられる。1箇所片口が作り出される。1155は肥前系の甕である。外面の上半、内面は口縁部直下まで鉄釉を施釉する。内面は露胎で、口縁端部の上面も釉を掻き取る。底部は上げ底状を呈し、全面に砂が付着している。1156は備前の鉢。体部下半はヘラケズリで、重ね焼きの痕跡が残る。1157は備前の水指。口縁端部を内側に折り返す。体部外面にはヘラ描きがある。底面には直径6cm前後の焼き台の痕跡が3箇所に残る。底部から体部下半にかけて自然釉がみられ、底面を上にして焼成されたものと考えられる。1158は鉢精良な胎土であり、瀬戸の焼き締め陶器もしくは外国産の可能性もある。底部はヘラケズリ、胴部下半はヘラケズリの後、ナデ調整である。1159は信楽の蓋。手づくね成形である。水指の蓋と考えられる。1160は備前の壺である。胴部下半にはヘラ描きの記号がある。胴部上半には把手もしくは浮文の痕跡が確認される。

1161は唐津の壺。外面は上半部が暗緑色の施釉、下半は錆釉である。内面は肩部付近まで施釉し、下半は露胎で細かい同心円文の当て具痕が残る。底部外面には砂が付着する。

1162は織部の水注である。高台には胎土目が残る。外面に上方から緑色の釉を掛け流している。内面にも透明釉の上に緑系の釉を流している。1163は丹波の甕である。胎土は灰色で、外面には褐色を呈する鉄釉が施釉、胴部内面は露胎である。1164は備前の甕。胴部上半の2箇所に水滴形を天地逆転させた環状を呈する浮文を貼り付ける。胴部下半には重ね焼きの痕跡が残る。胴部の下半と底部には円弧を組み合わせた同一意匠に記号がヘラ描きされている。1165は備前の大甕である。胴部内面には同心円文の当て具痕が残る。

図138には播鉢を掲げている。

播鉢には図に掲げた備前、丹波のほかに信楽の播鉢が出土している。

1116～1168・1170・1171は備前、1169は丹波である。1166のみ遺物集積遺構127からの出土である。1167・1168は図面上では片口部分を表現していないが、これは破片で出土し、片口部分が残らないためである。

図139は焼塩壺である。1211のみ遺物集積遺構127からの出土、他は客土中からの出土である。破片を含めて、蓋の出土点数は少なく、身と蓋の比率はおおむね7：1である。

1172～1176の蓋はいずれも型押し成形で作られており、1174の内面には布目痕が残る。

1177～1212の身は、基本的には、型押しで作られた底部の上に体部を積み上げて成形するものである。大局的にみると、1177～1208・1212の器壁が厚い小振りの一群と、器壁が薄く器が高い1209～1211に大別される。比率的には破片を含めて図に掲げた比率に近く、後者は少数である。形態や色調などをみると、1181・1186～1188・1197は共通した特徴をもつ一群である。

成形は、外面は横方向のナデ調整を基本とするが、1185・1187・1196・1207・1208などでは縦方向に面を持つ。粘土帯を内型に巻きつけた際のタタキ成形によるものと考えられる。内面の成形は全体を通して粗く、底部および側面には粗い平織りの布目痕が残るものもあるが、多くは横方向のナデで消されている。

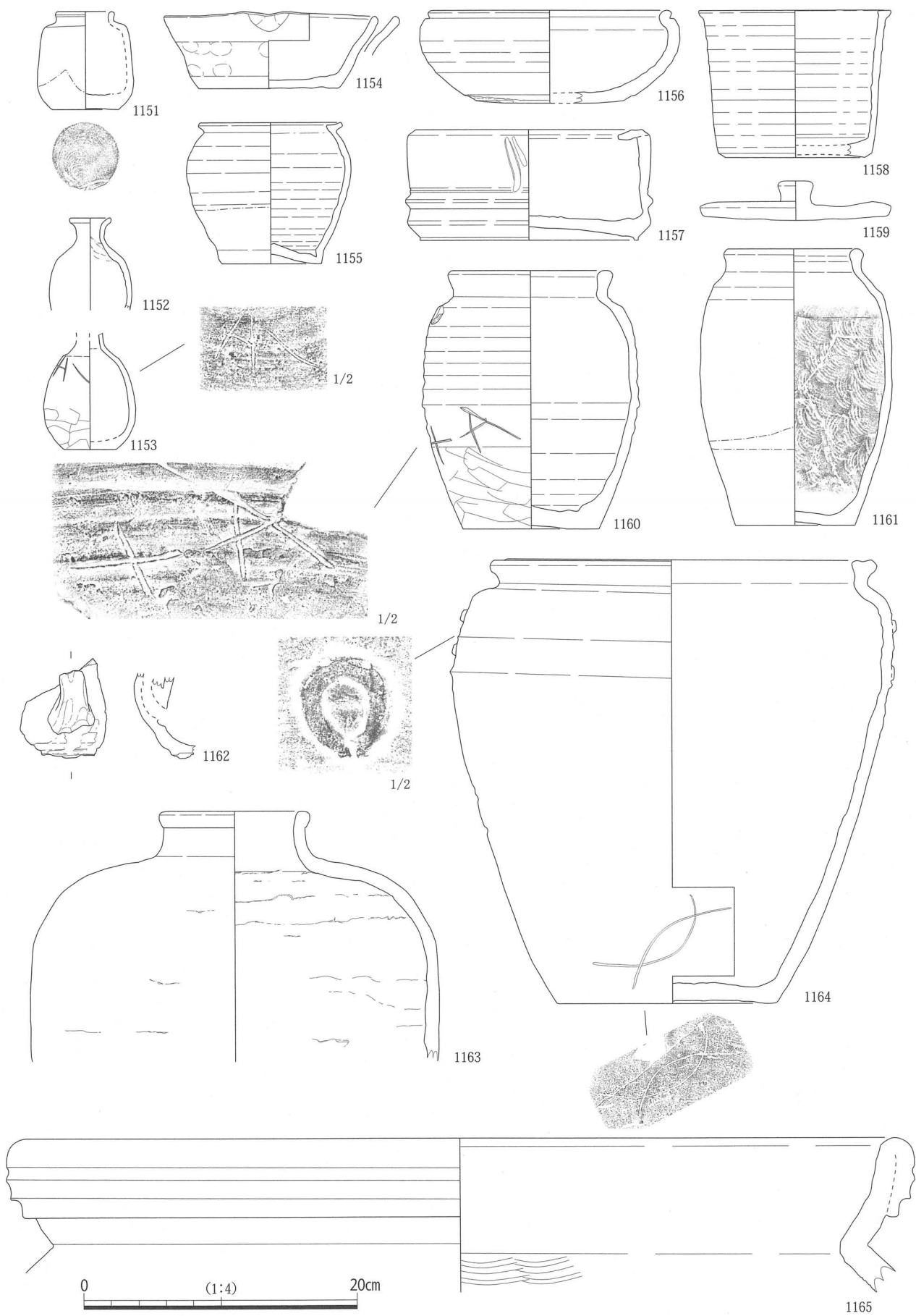


图 137 堀 83 出土土器・陶磁器 (4)

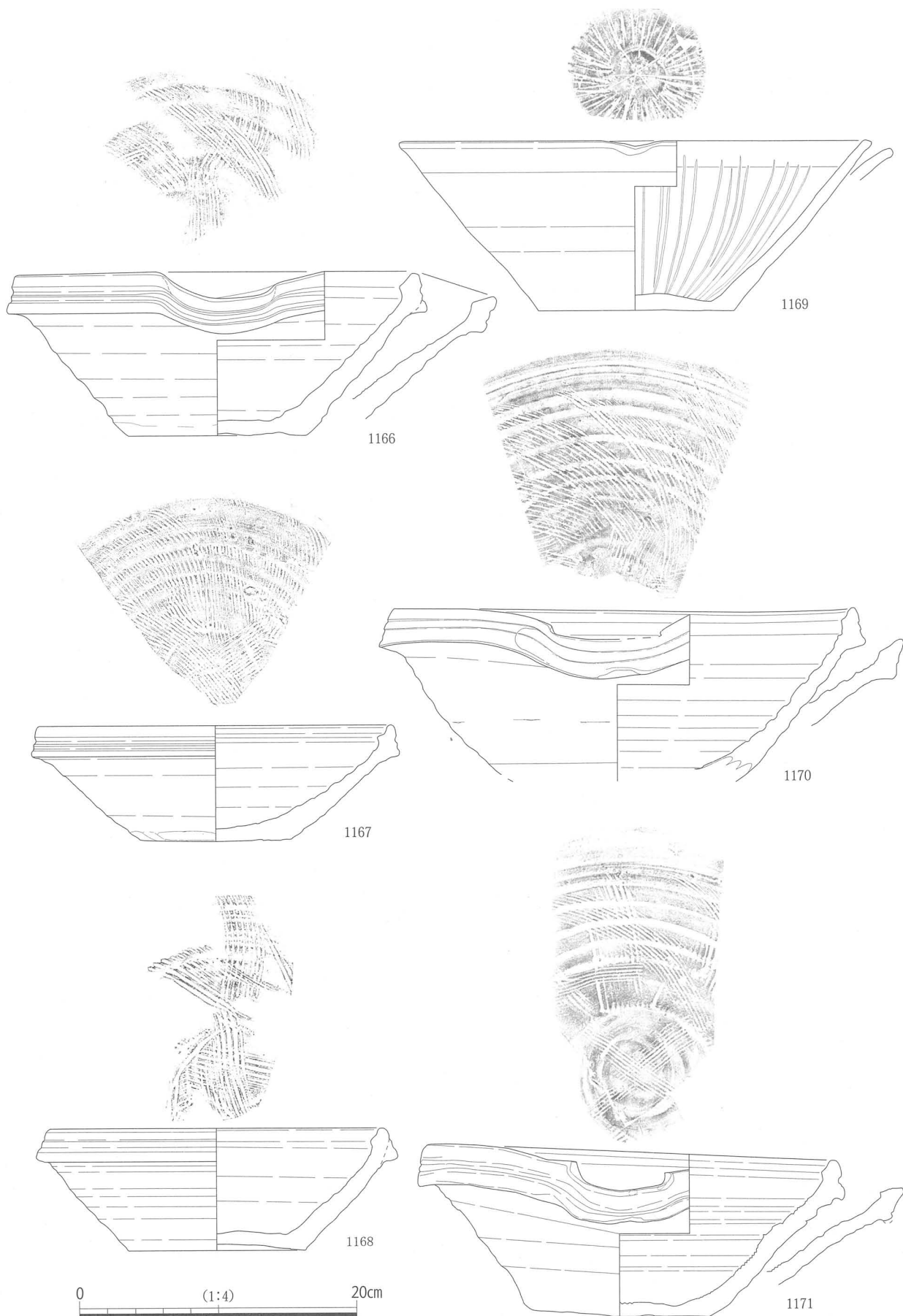


図 138 堀 83 出土土器・陶磁器 (5)

被熱による変色が見られるものも多いが、このうち、1183・1202 は口縁端部のみが赤変している
 また、1182 では外面に口縁部から底部にかけて液体をこぼしたような筋状の変色が看取される。
 1205 では内面のほぼ全面、1209 では底部部金に黒色の付着物が見られる。このほか、1198 では口縁
 部直下に直径 3 mm の焼成後の穿孔があり、1183 では、胴部上半に途中で穿孔をやめたような痕跡が残る。
 蓋・身ともに刻印は認められない。

なお、完存する身に関しては口縁端部まで一杯にした容量を計量した結果は以下の通りである。



図 139 堀 83 出土土器・陶磁器 (6)

1179 は 109 cc、1181 は 99 cc、1183 は 72 cc、1185 は 77 cc、1186 は 112 cc、1187 は 90 cc、1188 は 104 cc、1189 は 116 cc、1193 は 108 cc、1194 は 116 cc、1198 は 109 cc、1199 は 103 cc、1200 は 76 cc、1201 は 96 cc、1207 は 154 cc、1208 は 144 cc、1211 は 205 ccである。小振りの焼塩壺では 70 cc強、100 cc強のものが多く、一定のまとまりが看取される。

以下の図版では基本的に通常の実測図のみならず、カラー画像を添付しているので、釉調や文様の細部については、特筆すべきものを除いてとくに記さない。

図 140 には唐津の碗を掲げた。

1213・1214・1216・1217・1219・1220 は文様を持たないが、これ以外には鉄釉で絵付けされている。文様はいずれも外面の対向する二方に描かれている。

図 141 には杯・碗・皿等を掲げている。1238～1240・1242～1254 は唐津、1241 は軟質施釉陶器、1255・1256 は志野である。

1238 は杯、1239～1242・1244 は碗である。1240 は二方に山水文の鉄絵がある。1242・1243 は沓茶碗、1244 は天目碗である。なお、後述する図 142 に掲げた 1267 も唐津の沓茶碗である。

1243 は注口部分は残らないが、片口である可能性が高い。

1245～1254 は唐津の皿である。1245 は灰緑色の釉を掛けるもので、高台見付に「十」の墨書がある。1246 は端反の皿である。1247・1248 は青みがかった釉を掛ける。1250 は見込みに貝目痕が3箇所残る。1249・1251 は口縁部に鉄釉を掛けた皮鯨で、1251 には内面にも鉄絵がある。1249 の高台には藁が付着する。1252 は口縁部を輪花状にする。1253・1254 は見込みに草文を描いた絵唐津の皿である。1254 は口縁部の1箇所を變形させている。

1255・1256 は志野の皿である。1255 は菊皿で見込みに胎土目が3箇所残る。1256 は口縁部を輪花状にする。

図 142 には唐津・瀬戸美濃窯の皿・碗・向付を掲げた。

1257～1259 は皿もしくは向付けで、いずれも見込みに鉄絵のある絵唐津である。1261 は口縁部が直立する皿である。1261 は見込みに釉がまわらない露胎部分が残される。1262 は内外面に黒色の釉をかける。1262 は瀬戸黒である。

1260・1263～1266・1268 は向付である。1260 は口縁を輪花状にし、口縁部内面と見込みに絵付けする。1263 は口縁部を八角形にする。破断面の一部に煤が付着する。1264 は四方向付で、口縁部内外面および見込みに鉄絵が描かれる。1265 は口縁部を欠失する。見込みに芦文が描かれる。1266 は方形で、隅部を入隅状に變形させたものである。文様はない。1268 は口縁部内面に桧垣文、見込みに草文を描き、白濁した釉を掛けている。

1267 は沓茶碗である。口縁部は残らない。胴部外面と見込みに鉄絵が描かれる。

図 143 には唐津焼の皿・向付を掲げた。

1269・1270 は失透白色の釉を掛ける皿で、口縁部を輪花状にする。1271～1280 は向付である。1271 は端反の口縁部は輪花状とし、内面には文様を描く。見込みに鉄絵がある。1272～1275 は口縁部を變形させたものであり、見込みと口縁部内面に鉄絵を施す。1274 は口縁部内面に蕨文を描き、口縁部外面にも文様を描く。1276 は口縁部を削ぎ落して成形したものであり、口縁部に鉄釉を掛けた皮鯨である。

1277・1280 は同タイプの向付である。見込みと口縁部内面に鉄絵が描かれる。1277 は口縁端部が

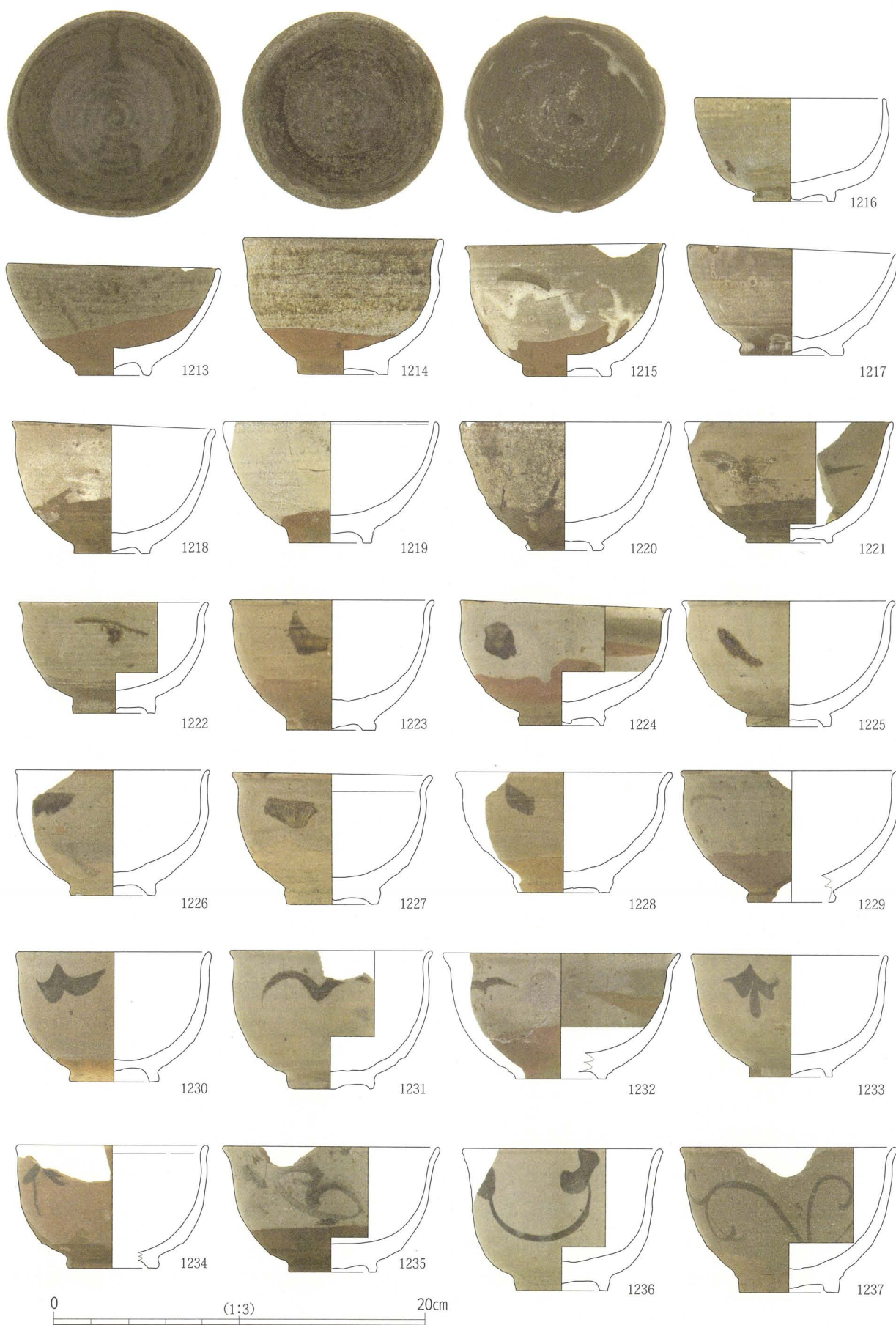


图 140 堀 83 出土土器・陶磁器 (7)

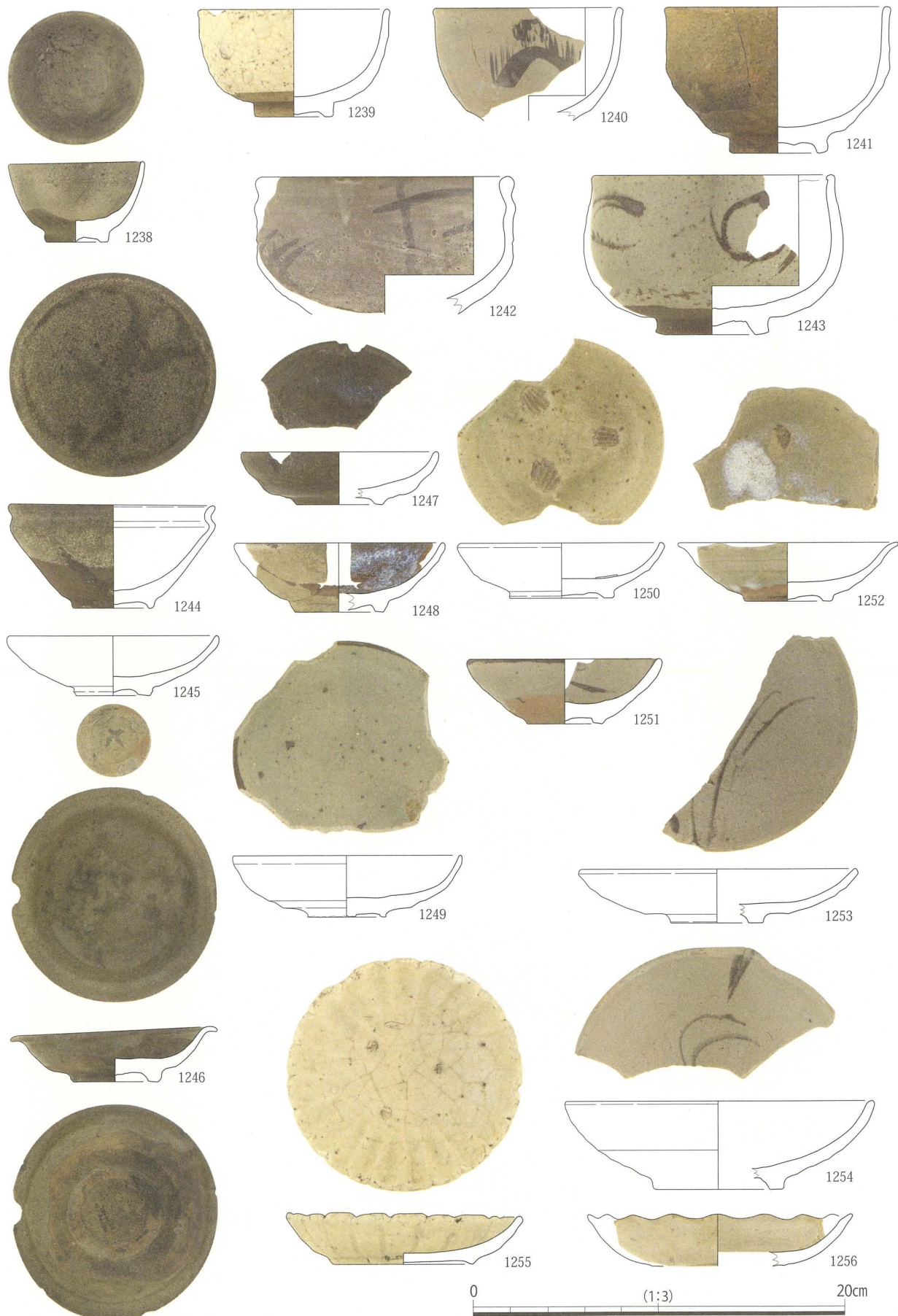


图 141 堀 83 出土土器・陶磁器 (8)

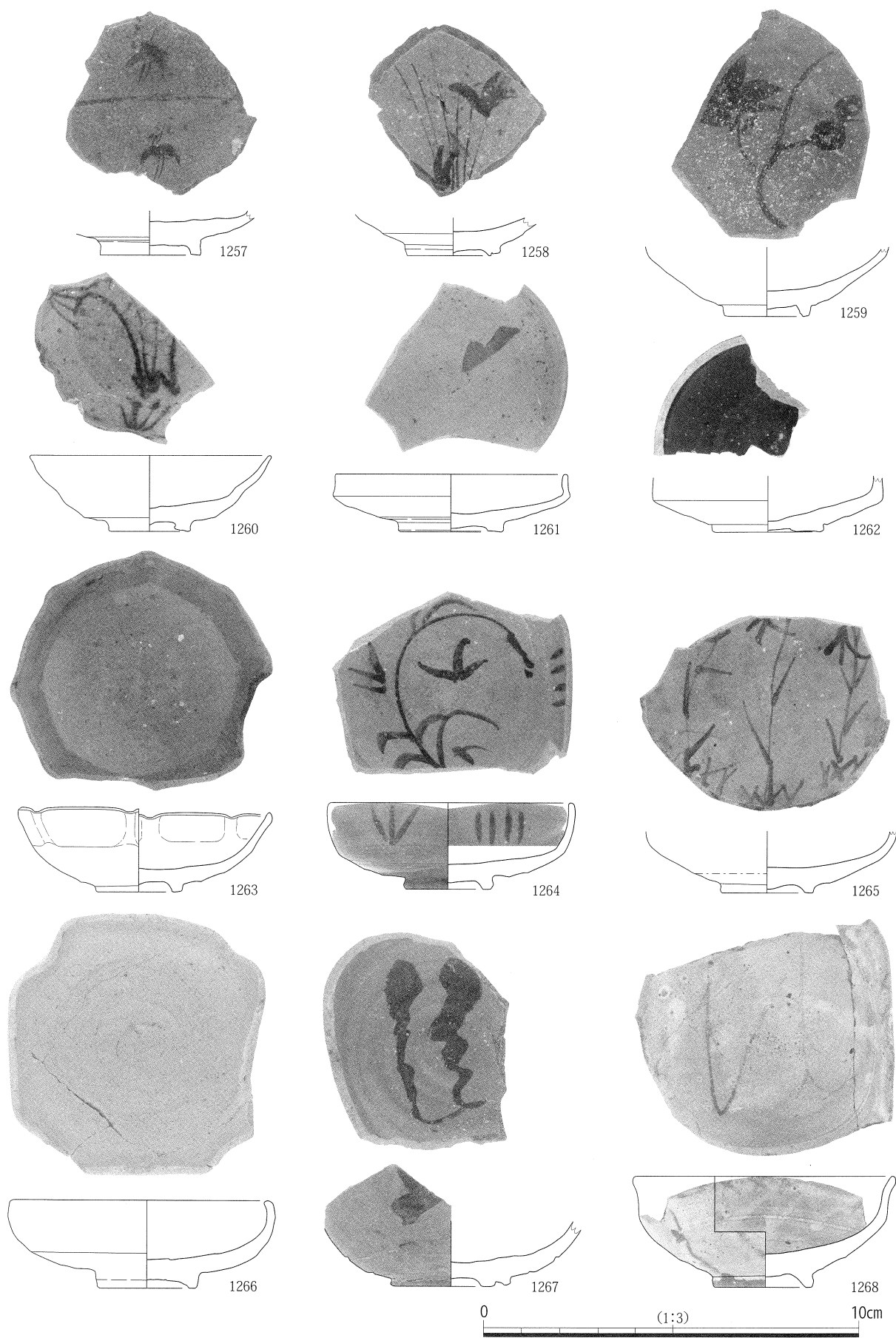


图 142 堀 83 出土土器・陶磁器 (9)

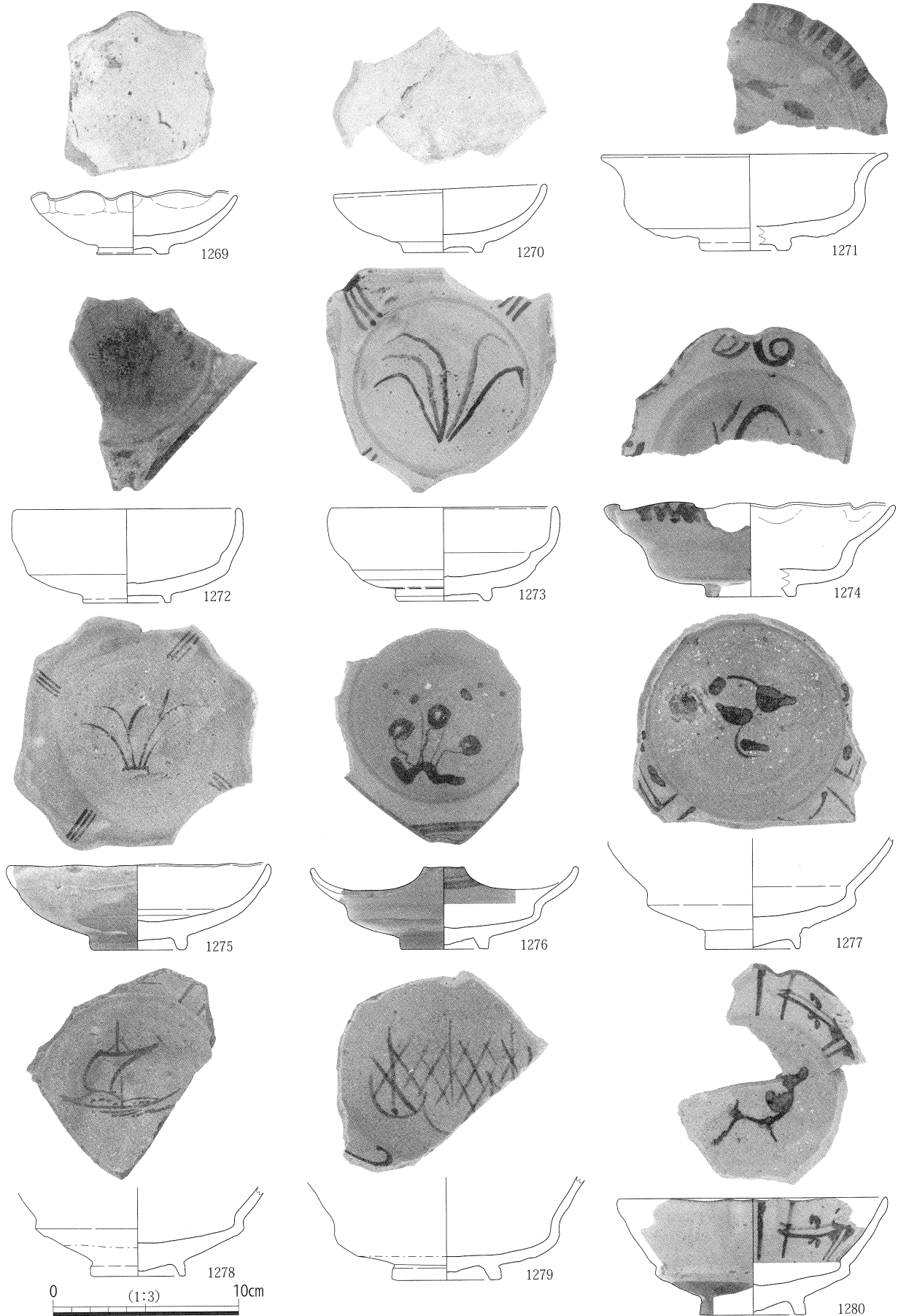


図 143 堀 83 出土土器・陶磁器 (10)

残らないが、1280では皮鯨とする。1278・1279は口縁端部は残らないが、見込みと口縁部内面に文様が残り、1278には見込みに舟が描かれる。

図144には向付と大皿を掲げた。

1281は唐津焼の向付である。1281は鉢形に深い器形をもつ向付である。口縁部が手捻りで輪花状に成形される。口縁部内面と見込みに鉄絵が描かれる。1283は黄瀬戸の四方向付で角は入隅にする。

1282・1284・1285は唐津焼の大皿である。1282は口縁部の一部に鉄釉をかける。見込みには胎土目が4箇所に残る。1284は内面に鉄絵で松文を描く。1285は口縁部内面に一文字の鉄釉がみられるが、絵を意図したものではない可能性が高い。

図145には瓶・向付・皿・大皿・播鉢などを掲げた。

1286～1291・1294～1297は唐津焼である。1286～1288は瓶である。1286・1287は鉄釉の上に藁灰釉を掛けた朝鮮唐津である。1288は鉄釉を施釉する。1289は壺である。胴部に鉄絵の山文を三方に描き、その間の肩部にU字形の把手を3箇所に貼り付けていたと考えられる。胴部内面の上半には同心円文当て具痕が残る。底部には藁が付着する。1290は筒形の向付である。底部は露胎で碁筍底である。側面にはストライプ模様が描かれている。1291は向付である。残りは良くないが、口縁部の四方を立ち上げて方形にしていたものと考えられる。口縁部内面に桧垣文、見込みには草文が鉄絵で描かれる。

1292・1293は志野焼の丸皿である。1292は志野織部で、口縁部内面と見込みにロクロを利用した圏線を引き、その中に花文を描いている。鉄絵の上から薄く長石釉がかけられている。1293は黄瀬戸の入隅方形の角向付である。高台は貼り付けの輪高台である。

1294は壺である。内面は露胎で同心円文当て具痕が残る。外面は上半に鉄釉が粗く掛け流され、底部近くは鎊釉を施釉する。1295は播鉢である。口縁部は残らないが、碗形を呈している。底面は削り出しの輪高台である。外面の上半は施釉されるが、底面と内面は露胎である。内面の播り目は不規則で乱雑である。1296は大皿である。口縁部は残らないが、内面には大振りな文様が描かれている。見込みには胎土目が3箇所に残る。1297は壺の底部片である。上半部は残らないが、破片の最上部には鈍い凹線が巡る。外面には鉄釉が厚くかけられる。平底の底部周縁には貝目痕が残る。釉が厚くかかっており、朝鮮産の可能性もある。

図146～149には志野の向付を掲げた。

1298は入隅方形の角向付である。底面には4箇所に板状の脚が貼り付けられる。外側面の四方と見込みに文様が描かれている。1299はやや丸みをもつ角向付である。側面の四方に異なる文様が描かれる。底面には四隅に柱状の脚が貼り付けられるほか、中央には輪ドチ痕が残る。また、この向付には漆継による修復痕跡が残る。1300・1301ともに入隅方形の角向付である。1300は側面の一つを欠失するが、いずれも外側面の四方には文様を描く。底部には四隅に円錐ピンの痕跡が残る。1300・1301は基本的には同形同大であるが、碁筍底の削りの範囲に大小の差異がみられる。1302・1303は入隅方形の角向付である。1302は四方に文様が描かれるが、対向する2面には同一の文様が描かれていたものと考えられる。底部は碁筍底である。見込みには3箇所に胎土目が残る。1303は側面が2面残るが、文様は不明瞭である。1304は口縁部が直立する向付である。底部は碁筍底である。1305は口縁部を欠くが、方形の向付であると考えられる。コーナーは外方に向かって凸帯状に隆起させ、その中央を入隅とする。底部は碁筍底である。1306は小振りの角向付で、胴部中位が括れている。側面には草文が描

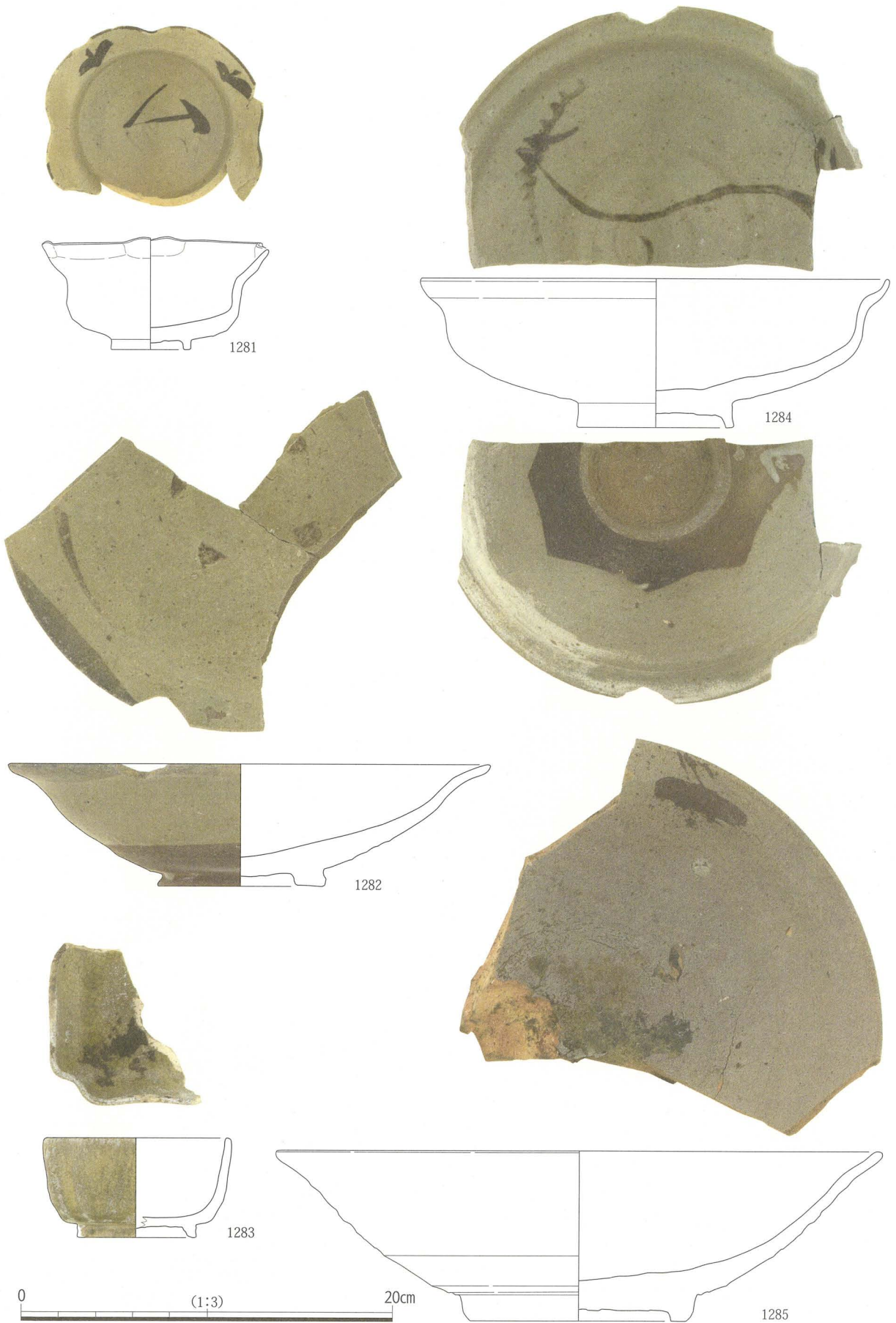
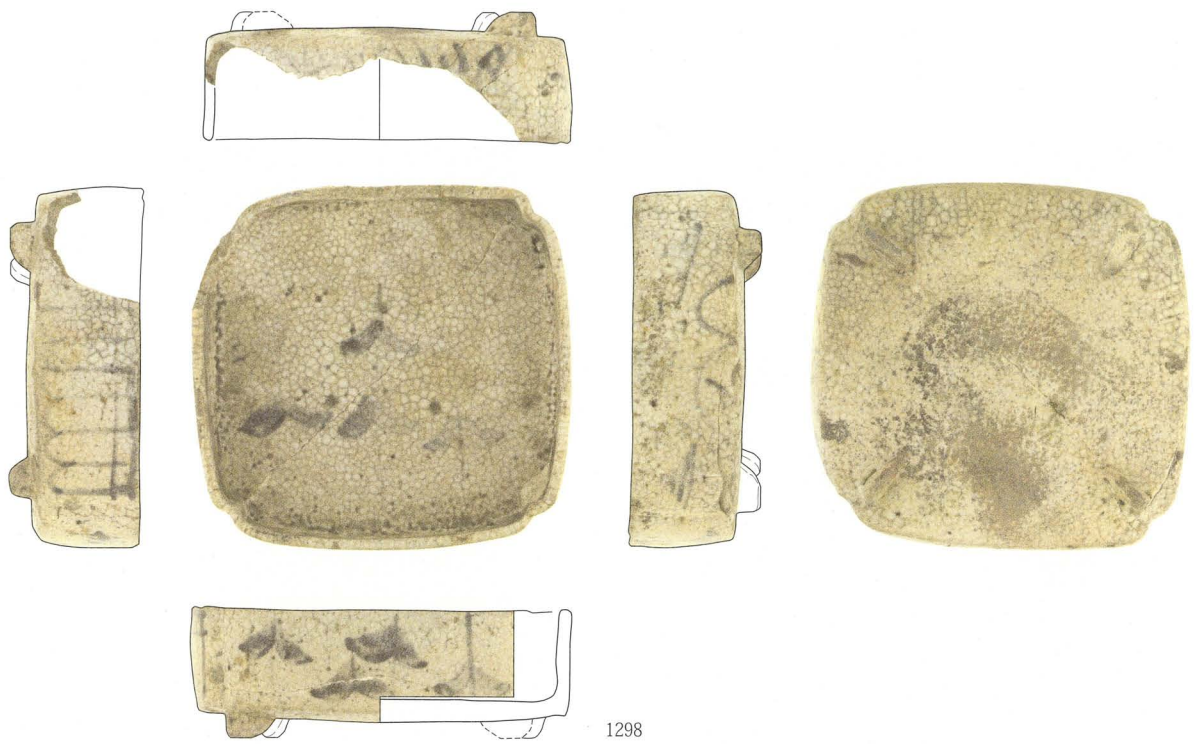


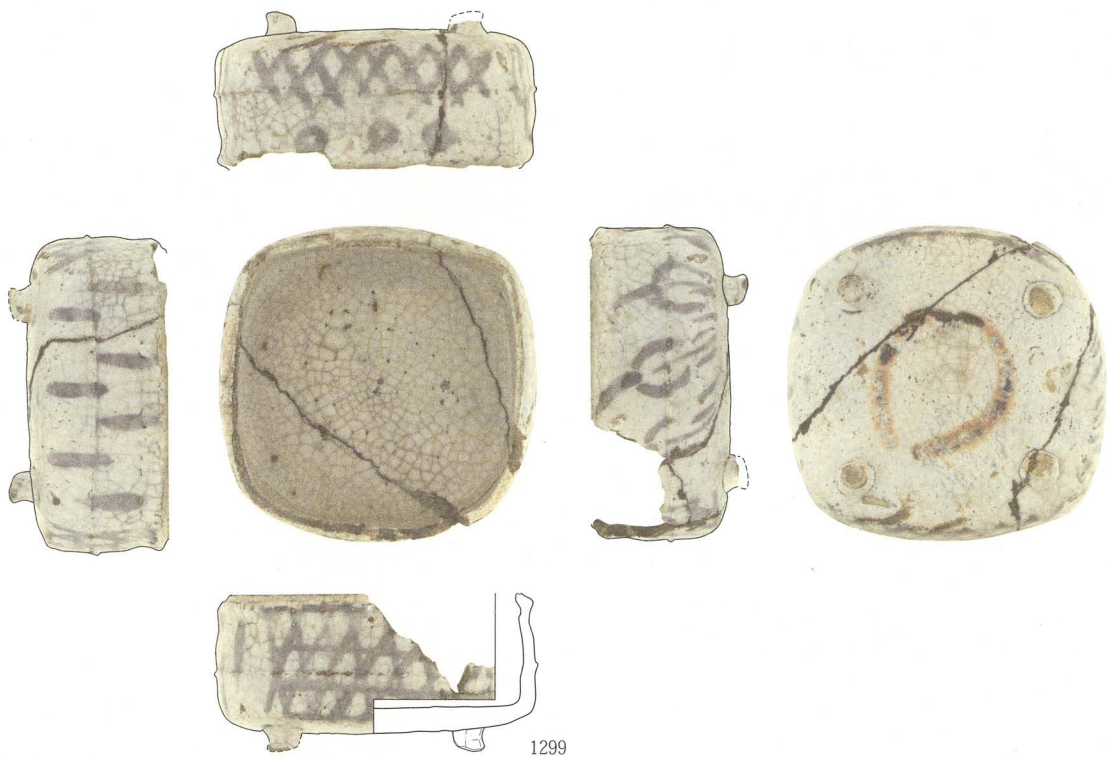
図 144 堀 83 出土土器・陶磁器 (11)



图 145 堀 83 出土土器・陶磁器 (12)



1298



1299



図 146 堀 83 出土土器・陶磁器 (13)



图 147 堀 83 出土土器・陶磁器 (14)

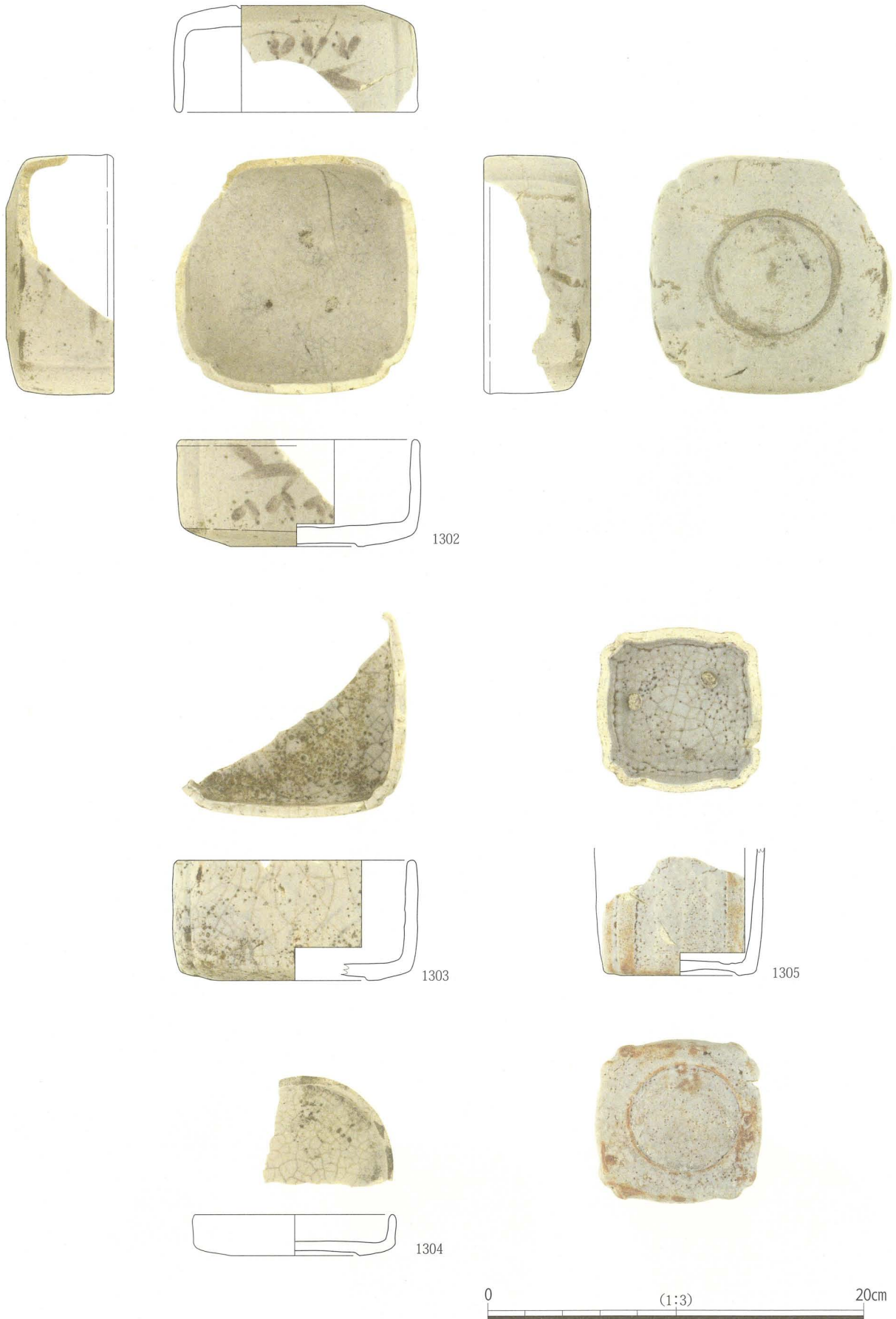


図148 堀83出土土器・陶磁器(15)

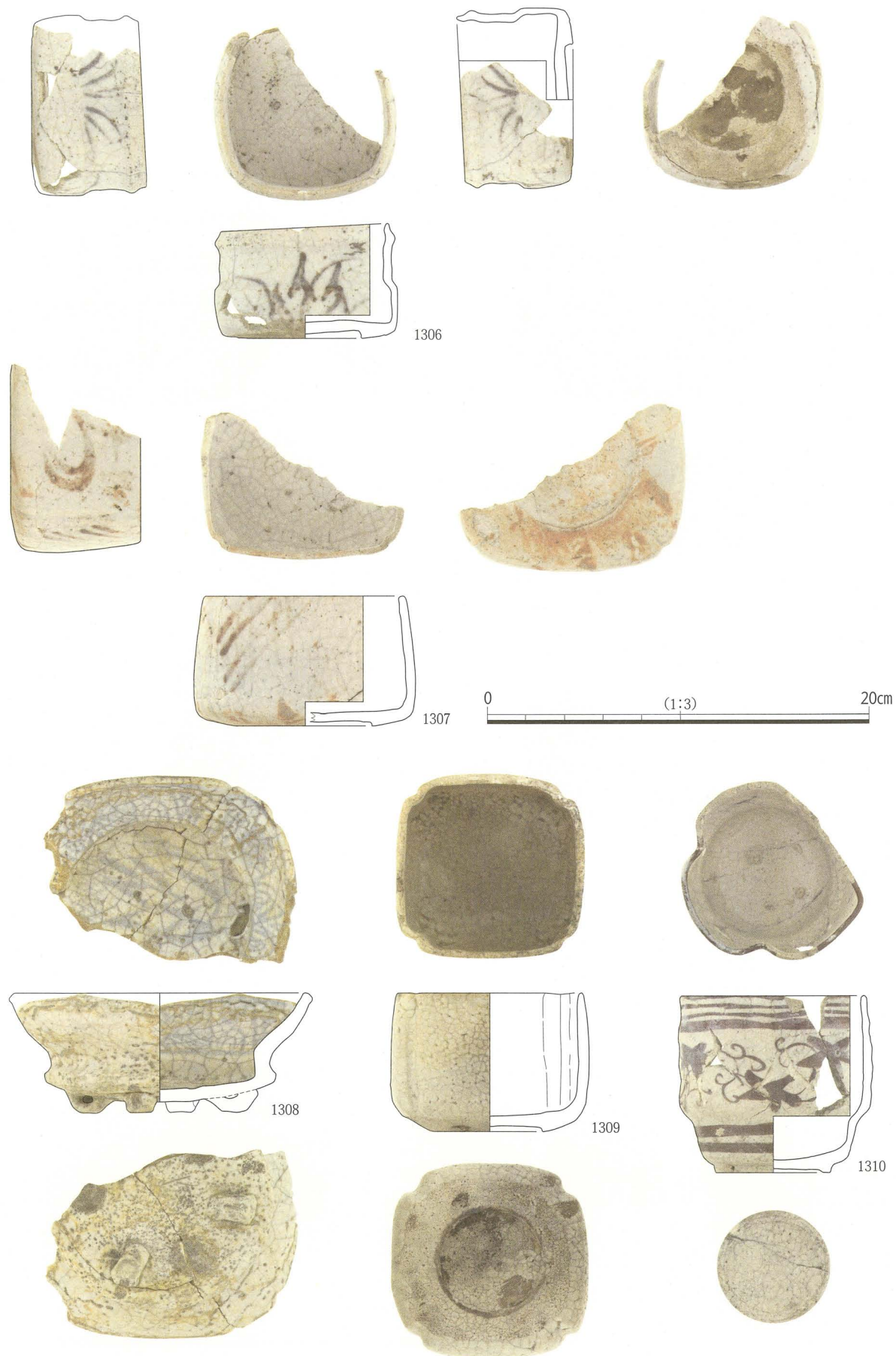


图 149 掘 83 出土土器・陶磁器 (16)



図 150 堀 83 出土土器・陶磁器 (17)

かれる。底部は露胎で、碁笥底である。

1307 は口縁部がやや内傾する入隅方形の角向付である。底部は碁笥底で、施釉されている。

1308 は隅丸方形を呈する向付である。内面に文様を描き、全面に施釉する。底部には2箇所脚が貼り付けられている。破片を反転させたため、脚が4個あるように表現しているが、配置からみて三脚であったと考えられる。脚の間には円錐ピンの痕跡が残る。

1309 は小振りの入隅方形の角向付である。底部は露胎で碁笥底である。

1310 は志野織部の向付である。口縁部は2箇所を窪ませ凸形を呈する。側面には上方に4本、下方に2本の横線を描き、その間を蔓草文で埋めている。上方の横線は1本は口縁端部にかかり、皮鯨となる。

図 150 には青織部および志野織部の向付を掲げた。

1311 ~ 1313 は青織部の向付である。いずれも、破片での出土である。1311 は底部を回転ヘラケズリする。1314 は志野織部の向付である。口縁部を入隅方形に成形する。外面は胴部に4条の横線、口縁部に縦線を描く。内面は全面を2条の線で区画したのち、その内側を梅文などで埋めている。底部には3箇所脚が貼り付けられていたと考えられ、その間には円錐ピンの痕跡が残る。

図 151 には朝鮮・中国産陶磁器のほか、国産陶器を掲げた。

1315 は李朝白磁碗である。見込みには砂目痕が残る。これ以外に李朝白磁碗は2点出土しているが、いずれも細片である。

1316 は伊賀信楽焼の水指である。胴部中位には彫り込みによる文様を描く。全体の半分を鉄釉、半部には緑色の釉をかける。対向する2箇所に環状の双耳を貼り付ける。美濃伊賀の可能性も残す。

1317・1318 は漳州窯産青花の大皿である。1318 は高台端部に砂が付着する。

1319 は頂部がキノコ状を呈する瓶であり、胴部に斜め上方に向く口縁を作り出す。頂部は円盤を充填して成形したものではなく、絞り込んでとじている。胴部の口縁部は手づくね成形で端部は整っていない。外面は底部付近を除いて鉄釉が厚く掛けられている。底面部分は鎊釉で、内面は露胎である。国産陶器に類例はなく、民俗例などに類品が見出せることなどから、朝鮮半島産であると考えられる。

1320 は備前の小型壺である。方形に変形させた胴部には4面ともに線刻があり、対向する面に「大」と「小」の文字、別の2面にはやや傾きをもつ3本の縦線と井の字状の線刻がある。これも文字と見なすことも可能性はあるが、「大」・「小」の筆致とは異なり、記号もしくは文様であると判断する。底面には「N」にアンダーバーを付したような記号が線刻される。

図 152 には中国産磁器である青花および呉須赤絵を掲げた。

1321・1327 ~ 1332・1335 ~ 1341 が景德鎮産、これ以外は漳州窯産である。

1321 ~ 1328 は碗である。1322 は見込みが盛り上がる饅頭心である。1327 は緑色と赤色で絵付けされた碗。1328 は口縁部が端反りする碗である。1329 は杯である。見込みには2条の細線が施文される。

1330 ~ 1338 は碗である。1330 は高台のみが残る碗である。高台見付には2条の細線の中に「成化年造」の文字がある。高台の輪郭に沿って細かく割れて整正な円形を呈しており、人為的に加工されたものである可能性が高い。

1331・1332 は同一意匠をもつ碗、1333 は饅頭心、1334 は高台見付が突出する。1335・1337 は見込みに鳥を描く。1336 は饅頭心の碗であり、見込みにはペンシルドローイングの技法を用いて蟠龍文を描く。高台見付には「大民宣徳年造」の文字がある。当該碗も周縁が細かく丁寧に打ち欠いたような状況を呈しており、先に報告した1330と同様に人為的に加工されたものである可能性も高い。

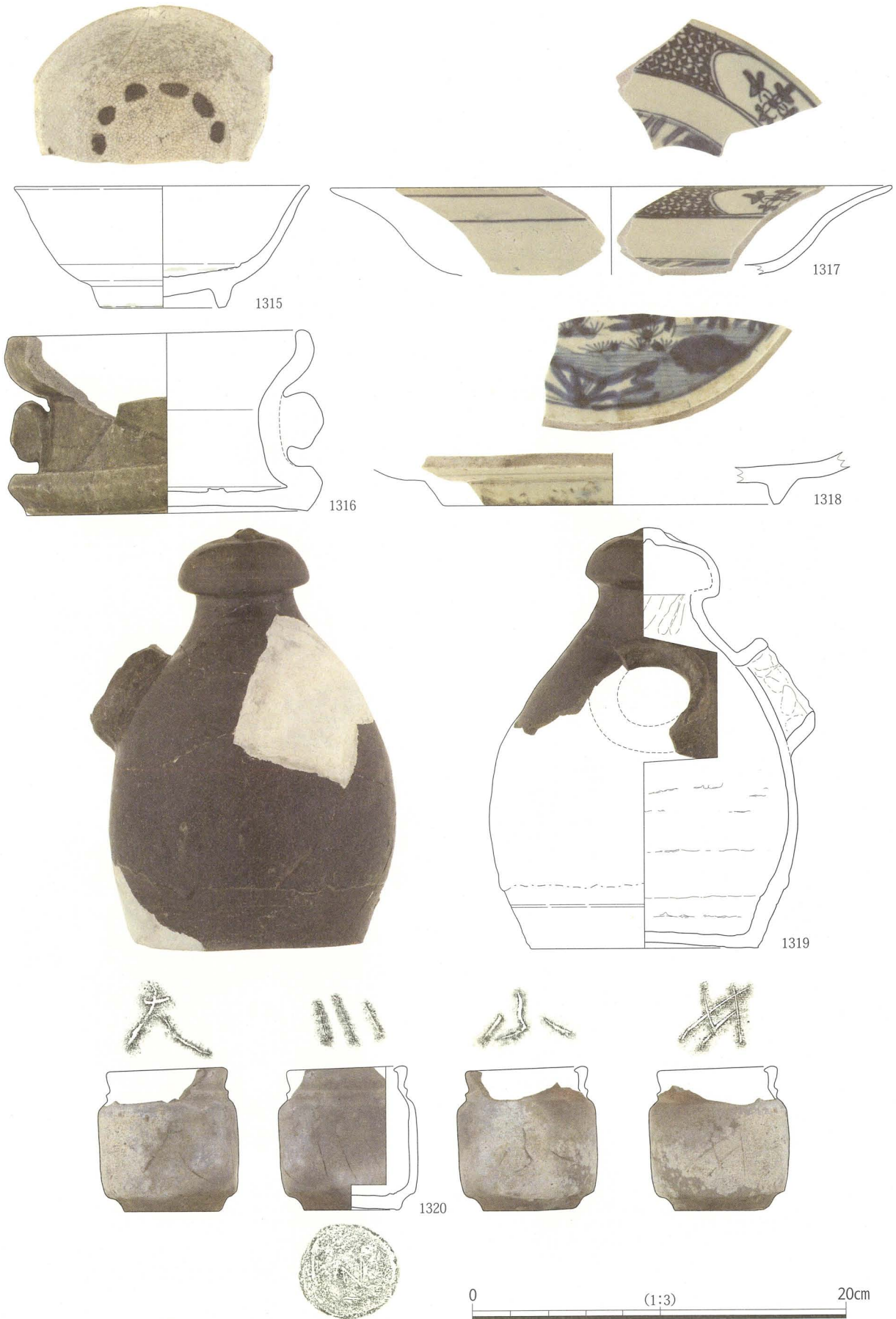


図 151 堀 83 出土土器・陶磁器 (18)

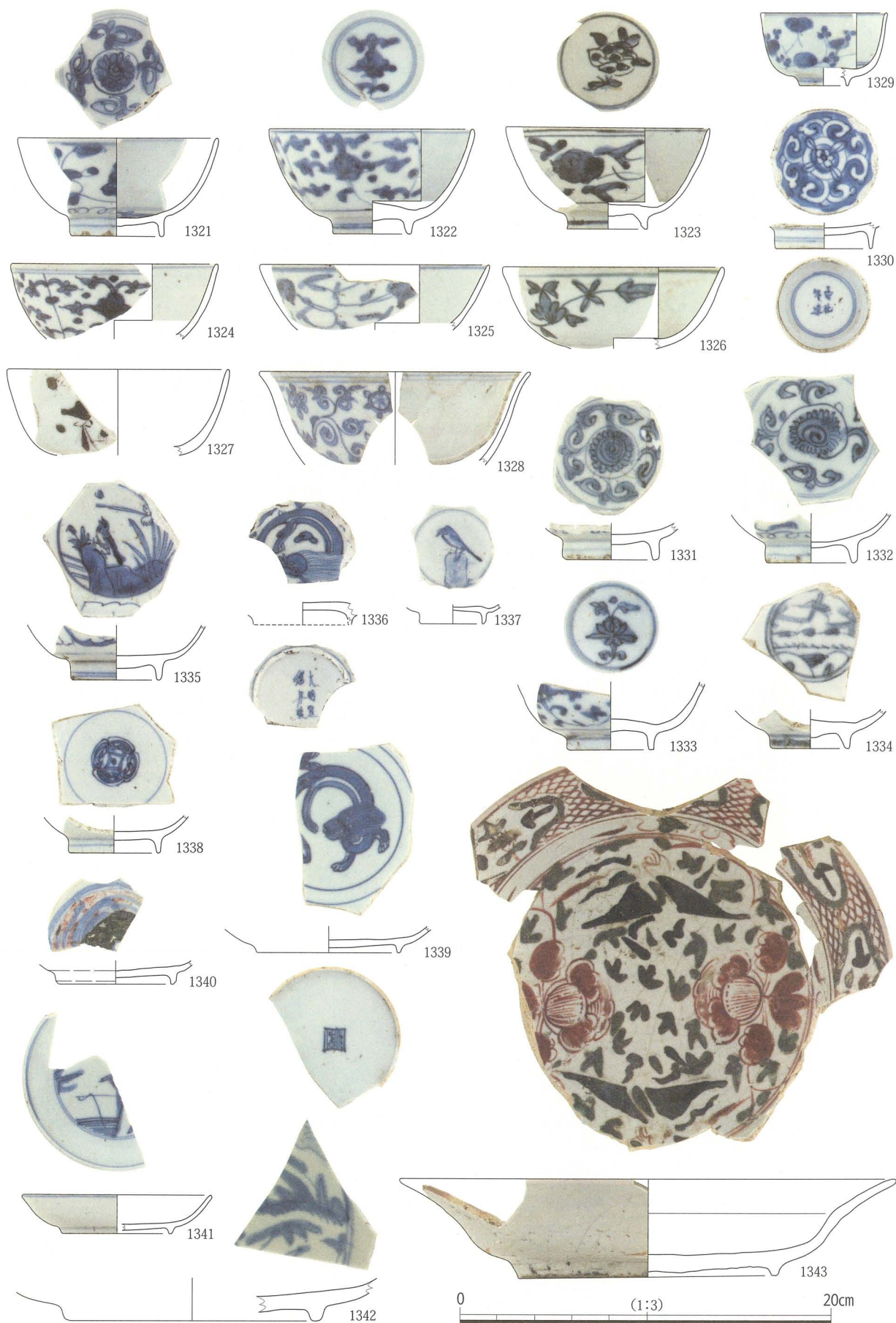


图 152 堀 83 出土土器・陶磁器 (19)

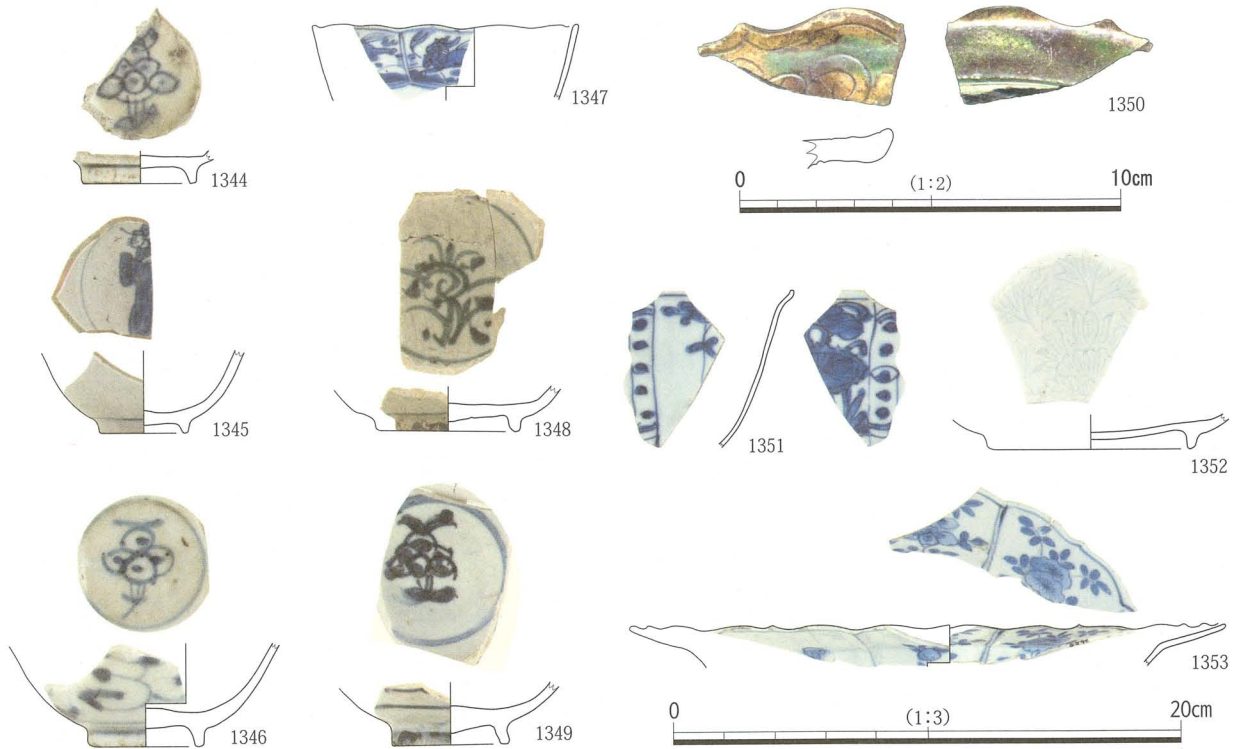


図 153 堀 83 出土土器・陶磁器 (20)

1339～1343は皿である。1339は見込みに蟠龍文を描く。高台見付には字款が書かれる。

1340は見込みに赤色と緑色で絵付けを行う。1341は見込みに文様を描き、口縁部に1条の線を引く。1342・1343は大型の皿である。

1343はいわゆる呉須赤絵の皿であり、内面全体に赤色と緑色で文様が描かれている。

図 153 には中国産陶磁器を掲げた。

1345・1347・1351～1353が景德鎮産、これ以外は漳州窯産である。

1344～1346・1348・1349は青花の碗である。1346は饅頭心であり、1343は高台見付が突出する。1347・1351・1353は芙蓉手である。いずれも景德鎮産で精製で器壁が薄い。1347は馬文が描かれる。1352は白磁の皿であり、見込みに線刻による文様が彫りこまれている。1353では外面に型押しの際についた細かい布目痕が観察される。

1350は華南三彩の盤である。口縁部の一部が残るのみであるが、線刻による文様に多色の釉が掛けられる。

1354は犬形土製品である。手づくね成形の土製品であり、両耳の先端を欠損する以外は完存する。体長4.5cm、体高3.3cmを測る。

堀 83 出土遺物の項で扱っているが、1cトレンチの攪乱層からの出土である。この攪乱は旧府警本部の建物の基礎工事に伴うものであり、出土した多くの遺物は豊臣後期に帰属するものである。

犬形土製品は、大坂城跡の既往の調査では豊臣前期の層順から出土することが多い。本例はA i類である(江浦2000)。

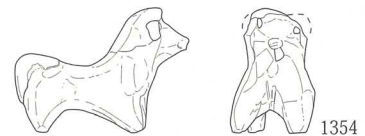


図 154 犬形土製品

(2) 木製品

① 木簡

堀 83 からは 48 点の木簡が出土している。この中には、現状ではまったく文字の痕跡を見出すことができないものも含むが、その形態的特徴から木簡である可能性が高いものについては、ここで報告することにした。ただし、遺物集積遺構 111 から出土した経木については、広義には木簡に含むものではあるが、一括性の高い遺物群として別に報告することにした。

1355 は完存する荷札木簡である。表面の上方には「菅平右衛門様」、下方には「赤右衛門」とも読める人名が書かれる。裏面には上方に「鴨」下方に「□衛門」という人名が記される。赤右衛門なる人物が菅平右衛門に鴨を送った際の荷札であると考えられる。「菅平右衛門」は歴史に名を残す武将であり、一時は豊臣水軍の将として活躍するが、関ヶ原の戦に敗れた後は藤堂高虎の傘下に入る。『公室年譜略』や『高山公実録』など、藤堂家の文献史料をみると、菅平右衛門は慶長 19 (1614) 年 12 月 26 日に、藤堂高虎と大坂城の堀の埋め戻しを巡って口論となり、切腹している。当該木簡は堀 83 の埋め戻しが大坂冬の陣後であったことを証左するとともに、その埋め戻しに藤堂高虎が関わっていたことを示唆する点で、きわめて重要な意味をもつものといえる。

1356 は下端を欠損する荷札木簡で、明瞭な墨痕が表裏に残る。表には宛先と送り主と考えられる人名が書かれる。裏の上方には「十」の文字がある。1357 は上下端を欠損する。表には「わたなべ忠三郎」とも読める人名が書かれる。裏面にも上下端いっぱいまで文字が書かれるが、一部が「五ヶ村」と読める以外は判読できない。

1358・1359 は食品に付された荷札である。1358 は頭部が方形を呈するに札木簡である。一面にのみ文字が書かれており、「干鯛五俵入」の文字に異論はない。5 俵の干鯛に付された荷札である。1359 は長さ 27.7 cm を測る大型の荷札木簡である。上下端の角は切り落している。表裏両面に薄いながらも文字が残る。表には中央に「からすミ」云々の文字があり、右肩には小さめの文字が添えられている。裏には「預ケ」の文字の下にやや間隔を空けて「うちや」の文字がある。カラスミに付された荷札木簡である。1360 は右辺を欠損するものの、他辺は完存する。長さ 7.6 cm と小型ながらも、繊細な筆致で人名が書かれる。人名は「甲浦孫左衛門」もしくは「甲浦弥左衛門」と読め、「様」が付され、やや左によって「受」の文字がある。物品などは不明ながらも、「甲浦孫左衛門」もしくは「甲浦弥左衛門」に宛てたものであることが窺われる。

1361・1362・1364 はいずれも一方に人名、他方に地名が書かれるものである。

1361 は上端を欠損する。表裏面ともに明瞭な文字が残り、一方には「道正谷七丁目」の地名が書かれ、他方には「あふらや宗左衛」という屋号と人名が書かれている。木簡自体は完存しないが、文字は完結している可能性が高い。「道正谷」は現在の大阪市中央区道修町付近のことであろうか。1362 も上端を折損している。一方には下方に偏して「長右衛門」、他方には大振りな文字で「下新庄村」と書かれる。下新庄村は現在の大阪市東淀川区下新庄辺りのことを示すものと考えられる。1364 は隅部をわずかに欠くものの、ほぼ完存する。一方には「九郎左衛門尉」と人名が書かれ、他方には上端寄りに「そねノ」と書かれる。「そねノ」は豊中市曾根付近のことであろうか。

1363 は下端を欠損する。一方にのみ文字が確認できるが、墨痕が薄れているために判然としない。1365 は幅広の短冊状の木簡である。2 文字分の大降りの墨痕が確認できるが、判読不能である。1366 は下端を欠損する。一方にのみ墨痕が認められる。右上方と左下方に 2 行の分かち書きがある。右上

の文字が「たいこ」と読める以外は判然としない。1367は小型の木簡で上端の一部を欠損する。下方の2文字が「殿へ」と読めることから、上半の文字が判読不明ながらも、宛名を記した木簡であるといえる。

1368は一方の面に墨痕がわずかに残るものの、判読不明である。1369は両面に明瞭な墨痕が残る完形の木簡である。一方の面には宛名である「三左衛門殿」と書かれ、他方には「南部与十郎」と読める人名が書かれる。2文字目の「部」に関しては不確定である。差出人の名前であろうか。なお、切り欠きの上方には、L字を180°回転させた左側に点を付した記号が書かれている。

1370は短冊形を呈する完形の木簡で上方に穿孔がある。一方には「酒九升八合入」と書かれており、酒に付された荷札木簡であることが窺われる。1371は先端を尖らせた完形の木簡である。表裏面に墨痕が確認できるものの、一部が判読できるのみである。1372は下端を欠損する。一方の面にのみ墨痕が残る。2行に分かち書きされている。1373は上端に穿孔を行う木簡である。一方の面にのみ文字が確認できる。文字は薄れているものの、「せき三右衛門尉殿弥」という人名が書かれる。1374は下端の一部を欠損する。上下端ともに圭頭形に成形する。下端には左に偏して直径約3mmの穿孔が行われる。一方の面にのみ墨痕が残るが、判読不能である。1375は縦方向の2分の1が残るのみである。全体に摩滅も著しく、墨痕も認められない。上方に切り欠きをもつことや法量の近似などから木簡状木製品とした。1376は上下端を欠損する。上方には切り欠きがあり、これを繋ぐように紐の痕跡が観察される。1面にのみ墨痕が確認されるが、全体に薄れており判読は困難である。1377は短冊形の木簡で、上半部の一部が残るのみである。一方の面にのみ墨痕が残り、「けん□」と判読できるが、文意は不明である。1378は下端と左辺が残るが、他辺はいずれも欠損している。表裏ともに墨痕が残るが、一部の文字が判読できるのみである。

1379は柱状の木簡であり、3面に墨痕が残る。日本語としては判読不能であることと、一見すると、筆記体のローマ字にも見えることから、京都外国語大学ポルトガル語学科のジョゼ・ジュリオ・ロドリゲス教授にご教示をいただいた。結果的には、ローマ字として読むことができる部分もあるものの、全体としては意味をとることが困難である。狭義には木簡とすべき遺物ではないともいえるが、墨書を文様と捉えることも困難であることから、性格不明ながらも木簡とともに報告することとした。

1380は短冊形を呈する木簡で、下端を欠損している。表裏ともに墨痕が残り、上端直下から文字が書き始められる。全体に文字は薄れており、判読困難な部分が多い。1381は先端を尖らせた木簡である。一方の面にのみ文字がある。一部を除いて判読できるが、文意はとりにくい。1382は短冊形の木簡の上端部片である。一方の面に「てら」の文字が残る。

1383は先端を尖らせた木簡である。表裏両面に墨痕が残る。一方の面には上端近くに「七刃」、他方には5文字前後の文字が書かれるが、全体に不明瞭である。

1384・1385は板の左右両辺を割りとった大型粗製の木簡である。筆運びの状況や内容の共通性からなどから同筆である蓋然性が高い。両者ともに一方の面にのみ、墨書がある。いずれも上端近くに「六刃」、1384では少し空けて「三百十」、1385では「三百九十八」という数字が書かれている。国立歴史民俗博物館の宇田川武久教授のご教示によれば、当時の軍用銃の玉が「六刃」であったことを考えると火縄銃に付されていたものである可能性もあるという。

1386は上辺が残る以外はいずれも欠損する。大振りの文字が確認できるが、全体に残りが悪く判読できない。1387・1388は短冊形を呈する木簡である。木簡として報告しているが、両者ともに箱など

の一部を構成する部品である可能性も残る。1387は上辺欠損する右辺よりに墨痕が残る。10文字を超える墨痕が確認できるが、文字は薄れており、判読は困難である。1388は幅広の短冊形を呈する。一方の面にのみ、墨痕が残る。赤外線画像を見ても分かるように、文字が不定方向に乱雑に入り乱れている。上辺と右辺に穿孔が認められる。1389は右辺の一部が残るのみである。表裏面ともに墨痕が残る。

1390は上辺の一部が残存するのみである。下端は炭化して細くなっており、火付け棒に転用された可能性が高い。1391・1392・1394・1396は形状からは木簡である可能性が高いが、文字が残らない。

1393は形状不明ながらも、明瞭な墨痕が残る。判読不能である。1395は左辺の一部が残るのみである。「六尺」の文字があり、その上方には細い横線が描かれる。

1397～1399は短冊状を呈する。先に報告した1387・1388と同様に箱などを構成する部材である可能性が高い。1397は上下辺に1箇所、右辺に2箇所、左辺に1箇所の穿孔がある。中央やや上寄りに繊細な筆致で「九」と書かれる。1398は上下端の一部は残るものの、左右両端は欠損している。左上方に大振りな文字が残るが、判読はできない。1399も上下端の一部は残るものの、左右両端は欠損している。下半部に文字らしき墨痕が観察されるが、判読には至らない。

1400は左右の端部の一部は残るものの、上下端は欠損している。3行の文字列が確認できる。左列が「次第」と読めることから文書木簡であると考えられるが、細片であるために文意は不明である。

1401は長さ52.2cm、幅10.3cmを測る祈祷札である。上端は低い圭頭形を呈する。中央には上端から下端まで文字が書かれ、右・左辺に年と月が記される。中央の文字列の最上には梵字の「ウン」が大きく書かれる。この種子は阿閃如来や明王部の通種子である。以下は「奉禱日天尊并心経秘鍵十二卷御子孫繁昌処」である。2文字目は不明瞭ながらも「修」や「祈」ではなく、「禱」であると判断している。また、「日天尊」と「心経秘鍵」の間の「并」（ならびに）は右にはみ出して添えられているほか、「十二卷」は2行に分かち書きされている。また、右側には左側の文字と同じ広い間隔をおいて「慶長拾三年」の文字がある。左側は「極月吉祥日」と読める。1608年12月某日に、子孫繁栄を祈って日天尊に関わる経典ならびに心経秘鍵（空海が書した般若心経の解説）を読んで祈祷した際の御札であることが窺われる。なお、この祈祷札の裏面をみると、上方と下方が日焼けによって変色しているのに対して、中位付近は白っぽいままであり、この部分は「禱」とも称される紙が巻かれていた痕跡である。

1402は表裏に数行の文字列が残る。細片であり、文意は不明である。1403は長さ69.6cmを測る。板材を乱雑に割りとっただけのものである。一方の面にのみ、かなりの文字数が確認できるが、内容は判読不能である。

② 経木

図160には遺物集積遺構111から出土した経木の一部を掲げた。

出土した経木は破片数にして539点を数える。厚さが1mm以下であることなどから完存するものは少なく、接合作業も困難である。全長が判明するものは1点のみで、長さは38.6cmである。幅は167点で旧状を留めており、平均すると3.58cmを測る。当時の1尺を30.3cmとすると、長さは約1尺3寸、厳密にいうと計算上は1尺2寸7分を測ることとなる。幅は1寸2分であった可能性が高い。また、上端は例外なく、圭頭形に成形されている。

個体数を把握するために、5箇所の隅部の計測を行った。このうち、頂部については1点につき1箇所であり、108点を確認している。ちなみに下部の直角の隅は合計で170点、圭頭肩部は合計で158点を確認している。両者は当然のことながら、計算上は2で除す必要があり、単純計算では85点

表 11 堀 83 出土木簡積文一覧

1355	「V菅平右衛門様 赤右衛門」	1371	「V□□□□」	1390	「□□□□」
	・「V□□□□」 鴨□衛門		・「V□□□□」 あせ□□□□	1391	木簡状木製品
	・「V□□□□」 様 佐平	1372	「ち□うあん	1392	木簡状木製品
1356	「V十□□□」 弥		て□□□□	1393	□□□□
	・「V□□□□」 様 佐平	1373	「○せき三右衛門尉殿弥」	1394	木簡状木製品
	・「V□□□□」 様 佐平	1374	「□□□□□□」	1395	六尺
1357	「V□□□□」 五ヶ村□□□□	1375	木簡状木製品	1396	木簡状木製品
	・「V□□□□」 五ヶ村□□□□	1376	□□□□	1397	「○九」
1358	「V干鯛五俵入」	1377	けん□□	1398	□□□□
	・「V□□□□」 干鯛五俵入	1378	□□□□	1399	□□□□
1359	「V□□□□」 予ヶ		□□□□	1400	□□□□
	・「V□□□□」 予ヶ	1379	□□□□		次第
1360	「甲浦□左衛門様 受」		□□□□	1401	「慶長 拾三年
	・「V□□□□」 甲浦□左衛門様		□□□□		「奉□□天尊并心経秘鍵十二」御子孫繁昌処
1361	「道正谷七丁目」		□□□□		極月 吉祥日
	・「V□□□□」 道正谷七丁目	1380	□□□□	1402	な
1362	「長右衛門」		□□□□		み
	・「V□□□□」 長右衛門		□□□□		ん
1363	「九郎左衛門尉」		□□□□		衆
	・「V□□□□」 九郎左衛門尉	1381	「□七殿まゐる□かり」		尺
1364	「そね」	1382	「べし	1404	南無阿弥陀仏
	・「V□□□□」 そね	1383	□□□□折	1405	南無阿
1365	□□□□		・「七夕	1406	南無阿
	・「V□□□□」 □□□□	1384	「六夕三百十」	1407	南無阿弥
1366	□□□□	1385	「六夕三百九十八」	1408	□□陀仏」
	・「V□□□□」 □□□□	1386	□□□□	1409	南無
1367	「V□□□□」 殿」	1387	□□□□	1410	□□陀仏」
	・「V□□□□」 殿	1388	□□□□	1411	南無阿弥陀仏
1368	木簡状木製品	1389	□□□□	1412	□□□□
	・「V□□□□」 木簡状木製品		・四十□□	1413	□□□□
1369	「V三左衛門殿」		・かす三		
	・「V□□□□」 三左衛門殿				
1370	「酒九升八合入」				
	・「V□□□□」 酒九升八合入				

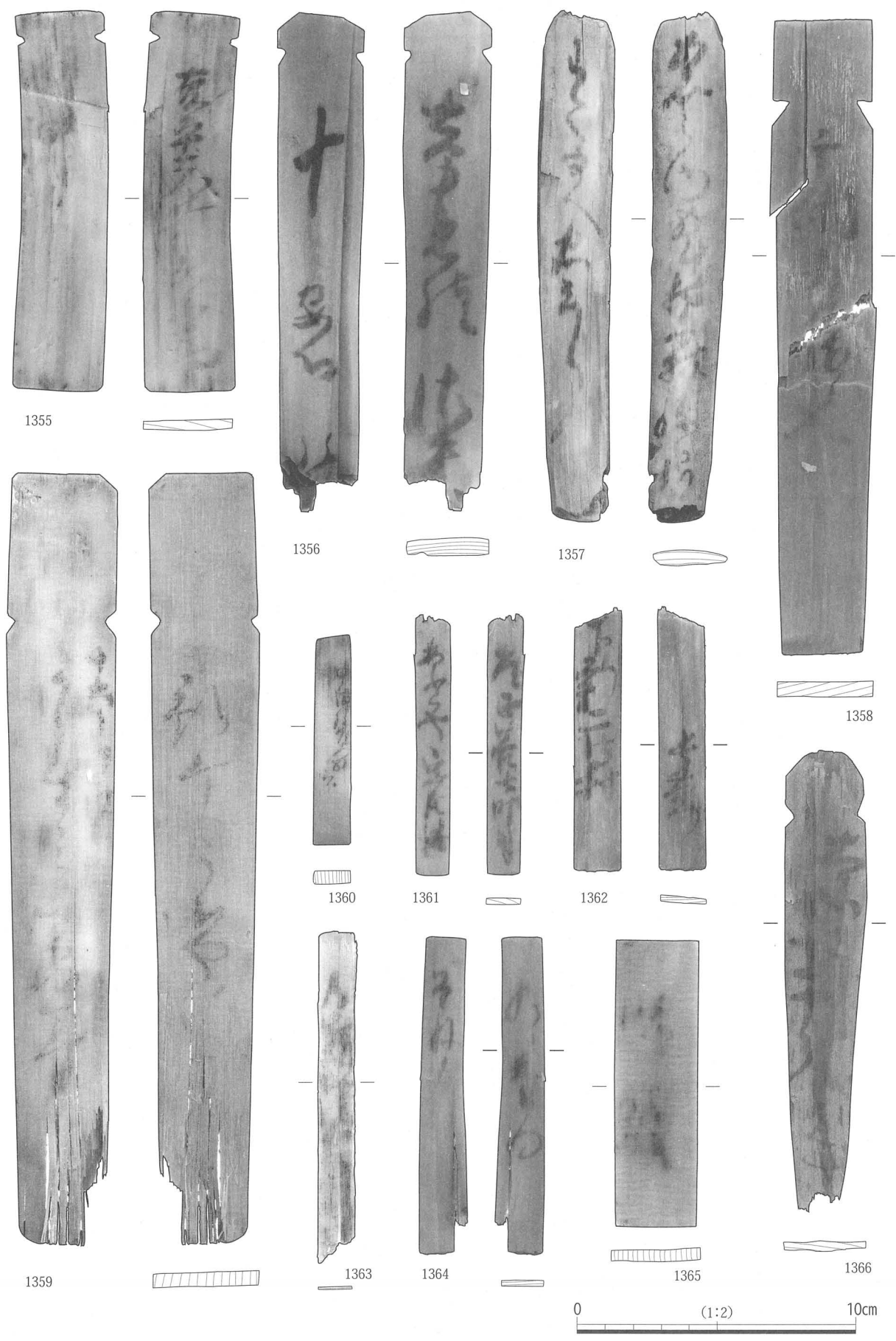


图 155 堀 83 出土木简 (1)

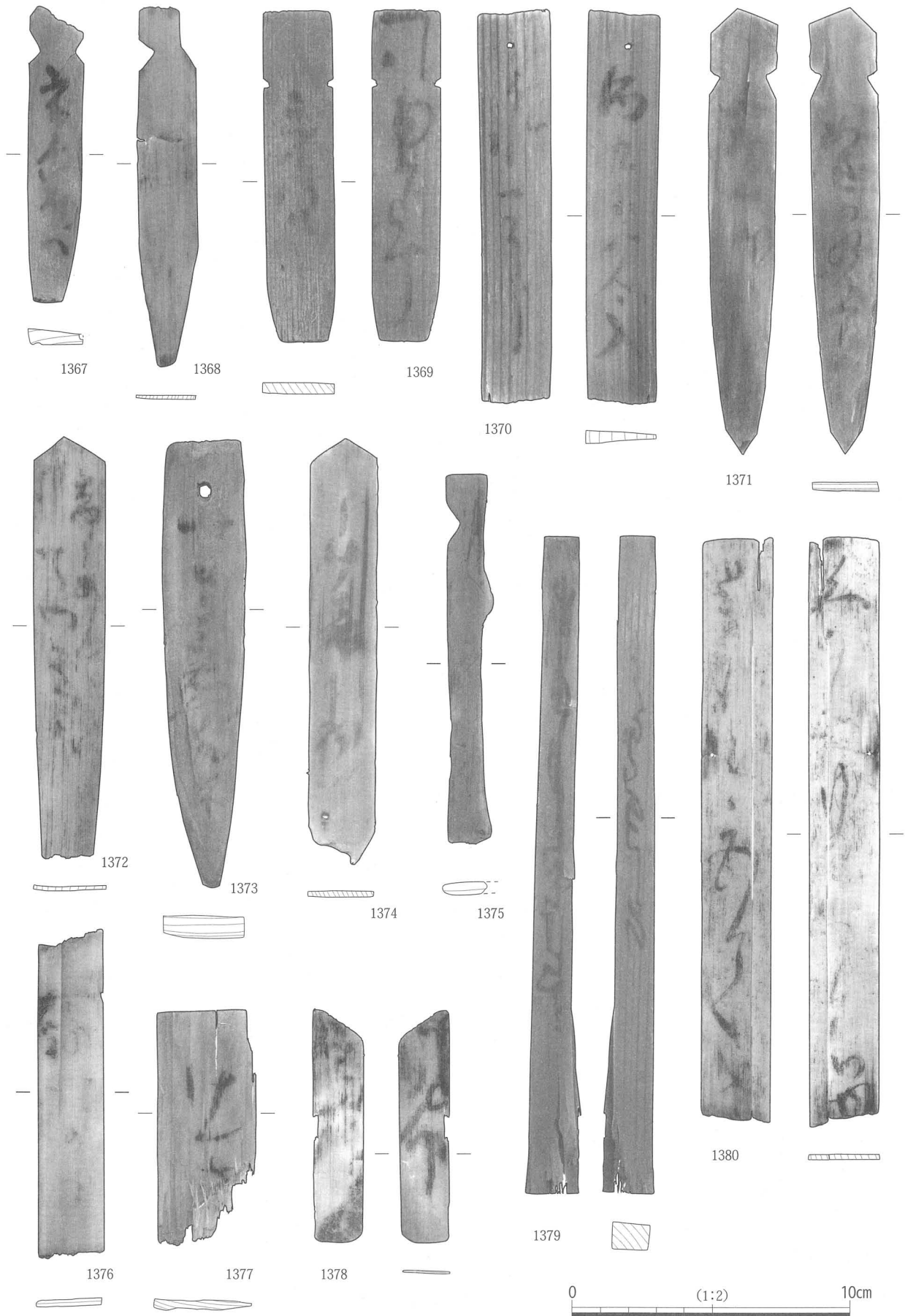


図 156 堀 83 出土木簡 (2)

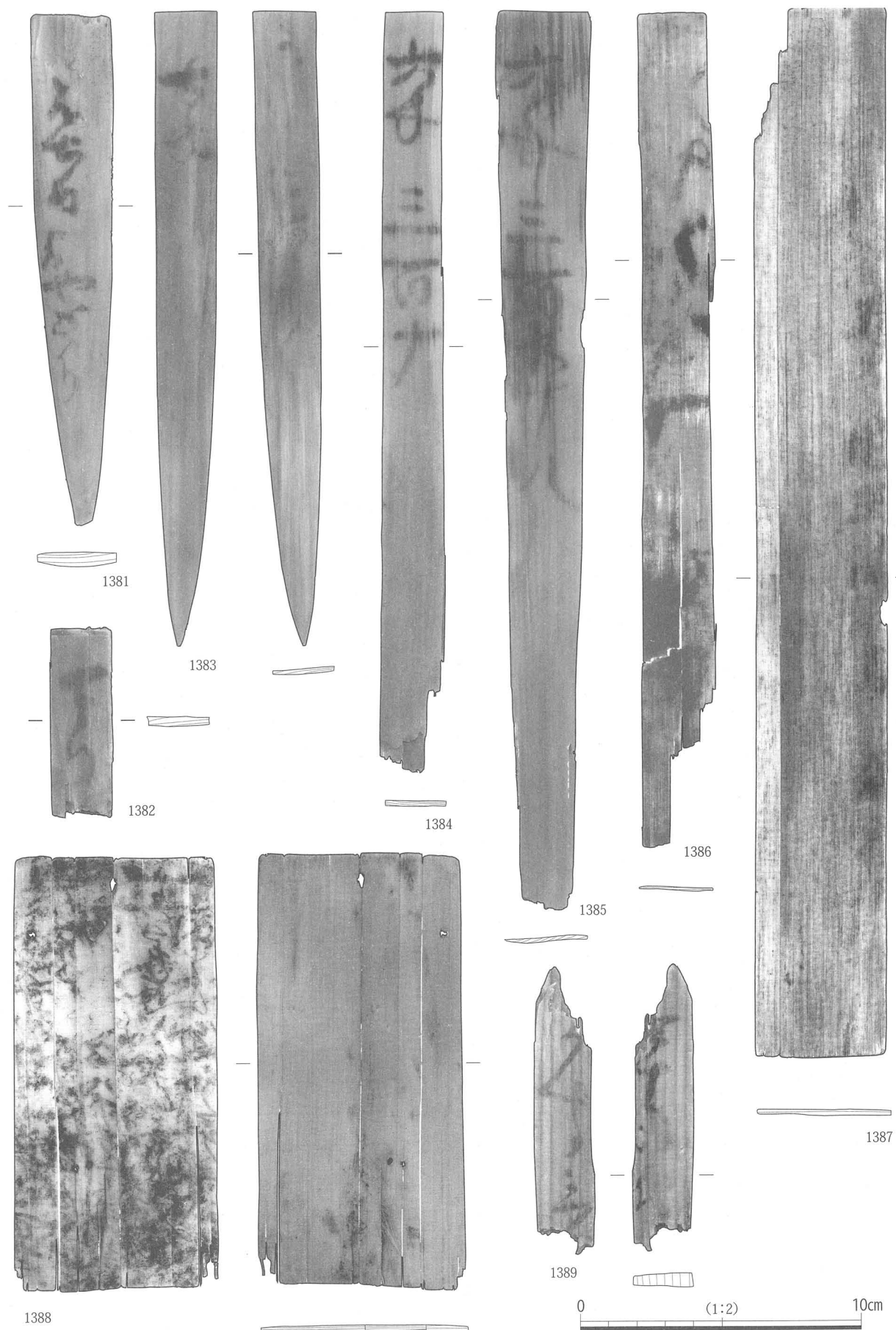


图 157 堀 83 出土木简 (3)

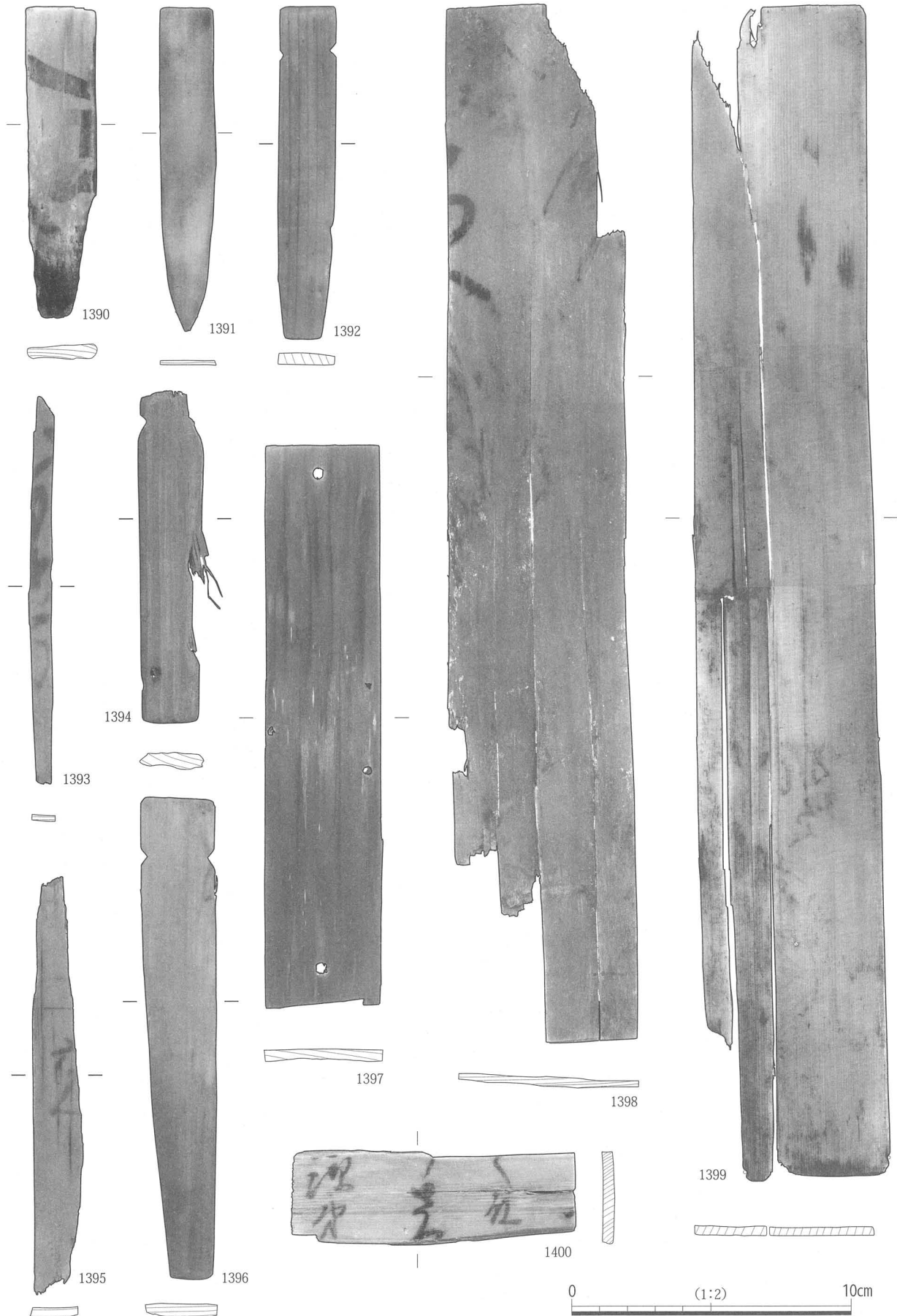
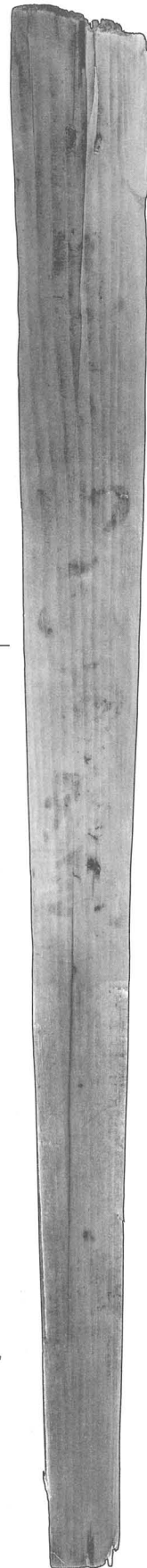
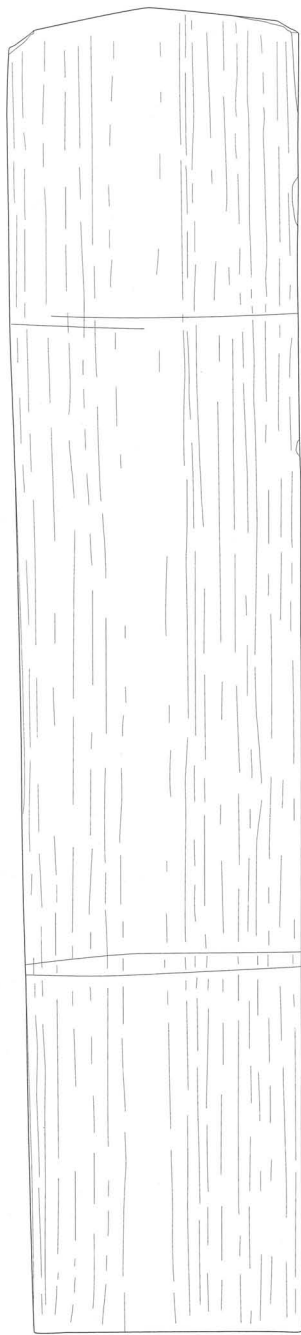
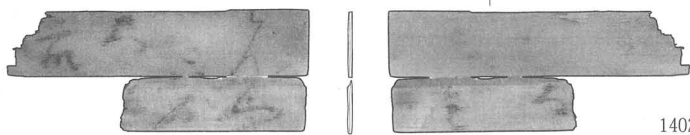
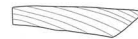


図 158 堀 83 出土木簡 (4)



1401



1402



1403

图 159 堀 83 出土木简 (5)

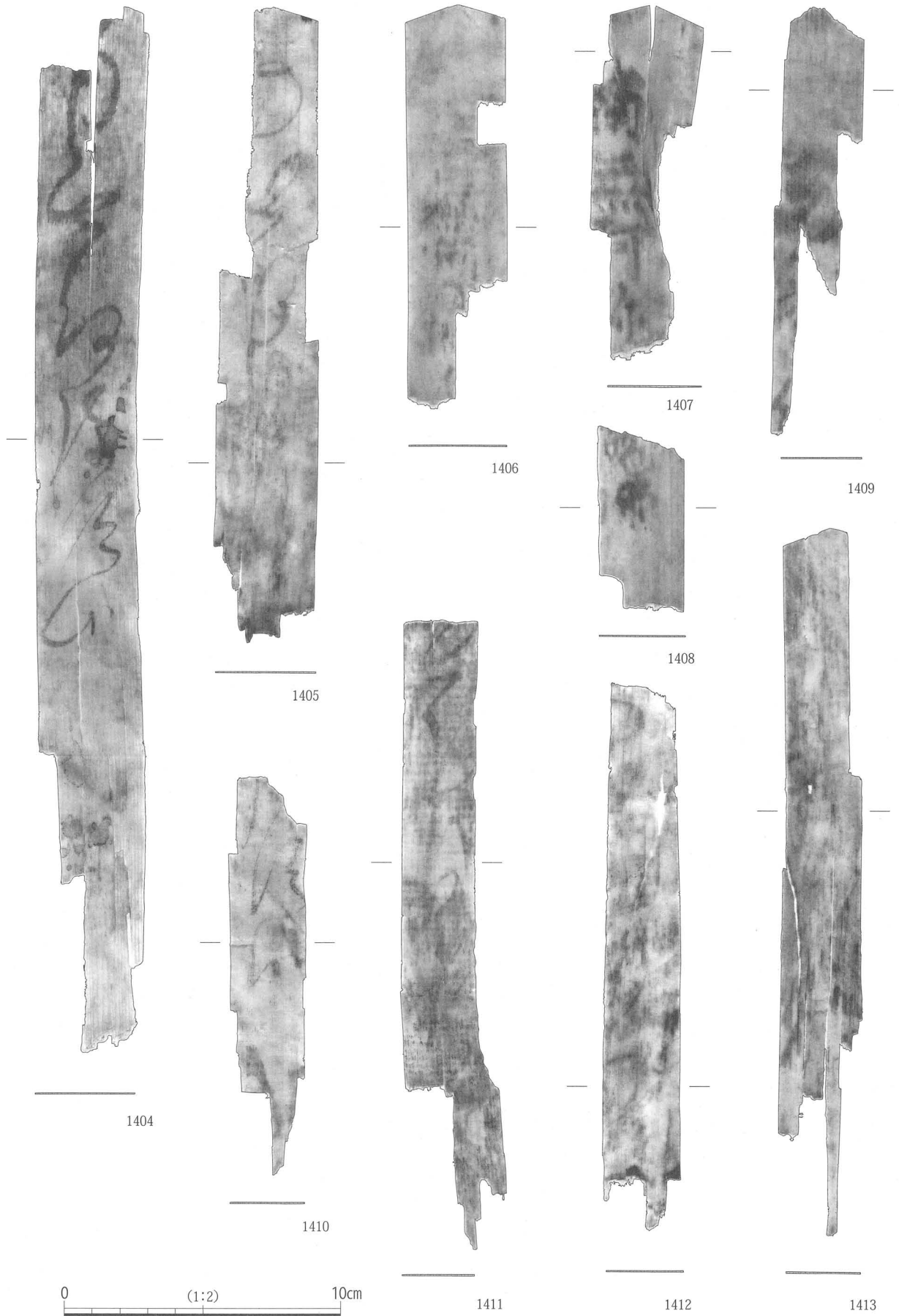


図 160 堀 83 出土経木

と79点ということになる。しかしながら、上記のように圭頭の頂部を含む破片が108点であり、これが現状では最も確度の高い最小個体数であるといえる。きわめて一括性の高い出土状況であり、かつ堀83の埋め戻し過程で投入されていることを考えると、108点という個体数は比較的有意な数量であると考えられる。

なお、経木には墨書が残るものが49点ある。文字が判読可能なものでは、いずれも例外なく「南無阿弥陀仏」と六字名号が書かれていることが看取される。文字は1404・1405・1410などの草書体のものと1407・1408など楷書体に分かれる。後者は中心ではなく、文字が左辺に偏していることや、1408にみられる文字のつぶれやにじみを見ると、あるいはスタンプ状に印字されたものである可能性もある。

③ 漆器

漆器に関しては、文様をもつ椀類や蒔絵を施した製品に関しては、カラー画像を添付した図を提示している。漆器は広義には漆塗りを施した木製品全般を包括するが、ここでは小型の椀などを先行して取り上げ、その他の漆塗り木製品については後述する木製品の項で報告することにした。

堀83から出土した漆器は、個体識別によると254個体が確認でき、大半が椀類である。このうち、比較的残りの良いものを抽出して図161～163・165に掲げた。

1414は口縁部を欠損する皿である。低い高台は畳付の摩滅が著しい。内外面ともに塗色は黒色である。外面と見込みには赤色の「丸に三つ引」を3箇所配する。外面には、間を埋めるようにデフォルメされた松と考えられる「立ち木」の文様を均等に配している。「立ち木」の文様は葉にあたる部分が黒味がかかった赤色の漆で描かれており、塗色の使い分けが見られる。高台見付にも記号もしくは文様が赤色で描かれる。1415は椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色である。外面には2方に粗雑な「丸に三つ巴」が赤色で描かれる。高台見付は被火により炭化している。

1416・1419は内外面ともに黒色の塗色とした椀である。1416は外面と見込みに赤色でやや粗雑に文様を描く。外面の文様は1箇所が残るのみであるが、2方に配されていたものと考えられる。高台畳付はかなり摩滅する。1419は高い高台をもつ。塗色は内外面ともに黒色である。見込みと外面の2方に「丸に十字」の文様が赤色で描かれている。1417は椀である。塗色は内外面ともに赤色であり、塗りは丁寧である。外面には竹をモチーフとした大振りな文様が繊細な筆致で描かれている。輪郭の2重線には6箇所節の表現が見られる。現状では2箇所が残るのみだが、3方に配されていたものと判断できる。底部には直径約1.8cmの円形の穿孔があり、この穿孔部の断面および見込みが被火によって炭化している。1418は椀である。全体の2分の1以下が残るのみで、口縁部および高台の端部を欠損する。塗色は外面が黒色、内面は赤色である。外面には赤色で文様が描かれる。「丸に對い鶴」をデフォルメした文様とも考えられるが断言はできない。

1420・1421・1422は亀甲系の文様をもつ椀である。1420は内外面ともに赤色の塗色である。器壁は薄く、塗りは丁寧である。口縁部および高台の端部を欠損する。外面には3方に「三つ盛り亀甲に花菱（花角?）」が黒色で描かれる。1421・1422はいずれも外面が黒色、内面が赤色の塗色である。1421は外面に大振りの「並び亀甲に花菱（花角?）」の文様を描く。亀甲の中の花菱はデフォルメされて、4つの点で表現されるのみである。1422は外面の3方に不連続な細線で「三つ盛り亀甲」を描く。亀甲の中の文様は「十字」である。1423は蓋である。内外面の塗色は赤色である。外面には3方に「三つ盛り分銅」が描かれる。内面中央が被火によって炭化している。

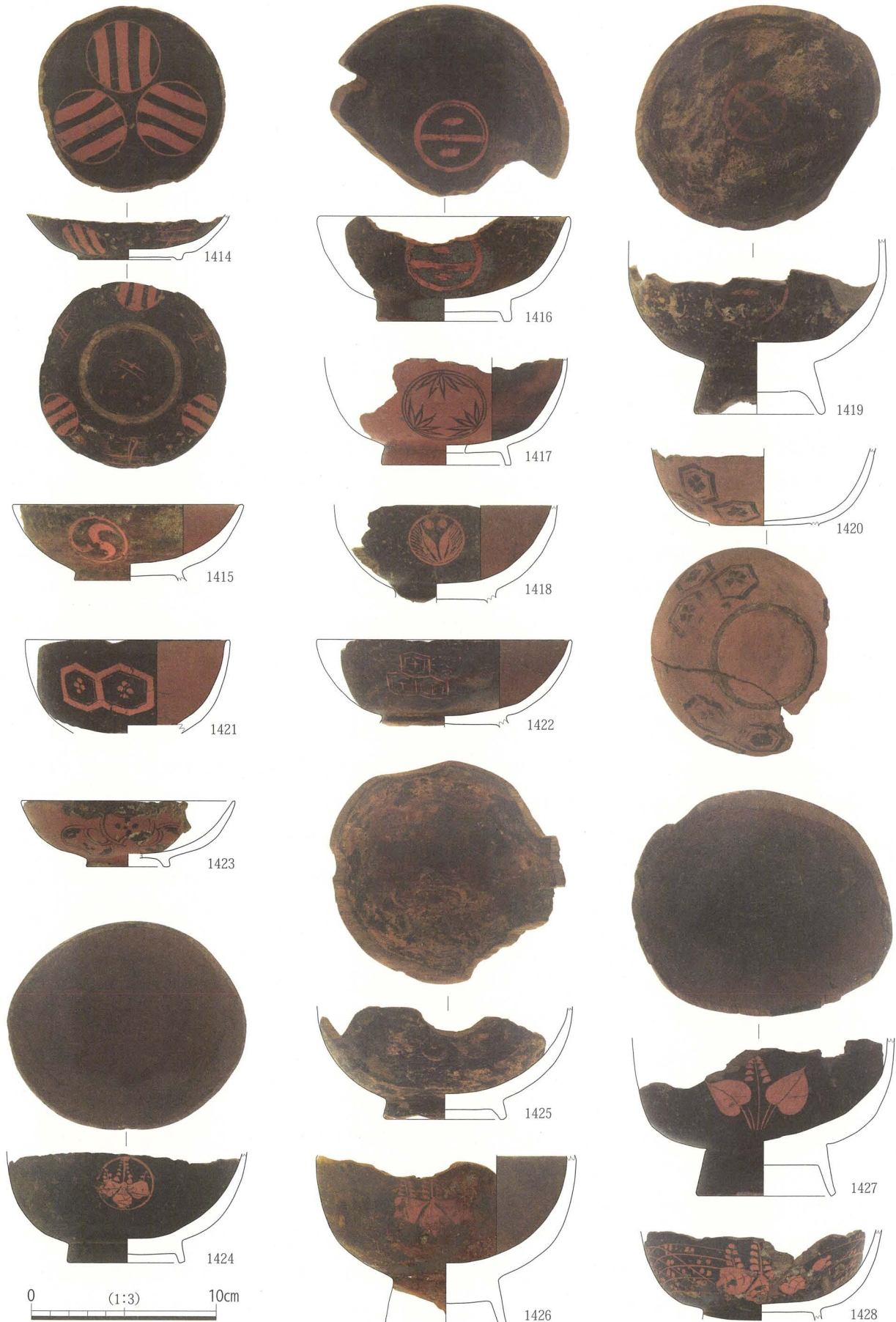


図 161 堀 83 出土漆器 (1)

1424・1426・1428は「桐」の文様をもつ椀である。1424は外面を黒色、内面を赤色の塗色とする。外面には3箇所丸で囲んだ「桐文」を赤色で描く。桐の葉脈は掻き取りで表現する。1426は高い高台をもつ椀である。塗色は外面が黒色、内面は赤色である。外面には「桐文」を赤色で描く。桐の葉脈は針描で表現する。1428は口縁および高台の端部を欠損する椀である。塗色は内外面ともに黒色である。外面には「桐」と「薄」が交互に2箇所ずつ描かれている。桐の葉脈は掻き取りで表現する。

1425は内外面ともに黒色の塗色をもつ椀である。全体に残りが悪く、文様は不明瞭であるが、見込みおよび外面に「木瓜」の崩しと考えられる文様が観察される。

1427は高い高台をもつ椀である。塗色は外面が黒色、内面は赤色である。外面には3方に赤色で文様が描かれる。見込み部分と外面の一部が被火によって炭化する。

1429・1430は「鶴亀」の文様をもつ皿である。1429は外面が黒色、内面が赤色の塗色である。全体の約3分の1が残るのみだが、外面には「鶴亀」の漆絵がある。亀・鶴ともに左向きで、鶴は脚を大きく広げる。1430は、内外面ともに茶色っぽい赤色である。外面には向かい合う「鶴亀」と「松竹」の文様が黒色で描かれる。高台見付にはT字の線刻がある。見込みは被火によって炭化している。

1431・1433～1435は「鶴亀」の文様をもつ高い高台の椀である。1431は遺物集積遺構127からの出土。外面が黒色、内面が赤色の塗色である。全体の3分の1が残るのみで、全体の文様構成は不明である。残存部分には「鶴亀」の文様が残る、「向かい鶴」の間に右向きの亀が描かれている。1433は口縁部を欠損するが、漆絵の状況からみて、かなり深手の椀であったと考えられる。塗色は内外面ともに黒色である。文様は1431と同様に「向かい鶴」の間に右向きの亀が描かれている。残りが悪く、判然としないが、3方に文様が描かれていたことが看取される。「松竹」であった可能性もあるが断言はできない。なお、鶴の文様は朱色に近いものと、茶色に近い赤色の漆の使い分けがなされている。見込みには乱雑に赤色の漆が塗られているが、文様か否かは判然としない。1434は外面が黒色、内面が赤色の塗色である。外面には繊細な筆致で文様が描かれる。残りが悪いものの、向かい合う「鶴亀」のほか、「松竹」が一面に描かれている。わずかに「横見梅」もあることから、「鶴亀」と「松竹梅」を図案とした文様であることが窺われる。松の葉の部分は針描である。1435は外面が黒色、内面が赤色の塗色である。鶴の文様は残らないが、右向きの亀が描かれていることから、「鶴亀」と「松竹」を描いていたものと考えられる。1432は外面が黒色、内面が赤色の塗色である。外面に「向かい鶴」の文様を描く。反対側にも文様があるが、摩滅が著しく詳細は不明である。

1436は口縁部の約3分の1が残るのみであり、高台はまったく残らない。塗色は内外面ともに黒色である。残存部には「松竹」の文様が描かれる。1437は口縁部の約4分の1が残るのみであり、高台を含む下半部はまったく残らない。塗色は外面が黒色、内面が赤色の塗色である。残存部には文様が残るが、全体の意匠は不明である。1438・1440はいずれも外面が黒色、内面が赤色の塗色である。両者ともに外面には赤色で文様が描かれる。残存部では2箇所に残るのみであるが、3方に配されていたものと考えられる。いずれも見込みの一部が被火によって炭化している。1439は遺物集積遺構127からの出土。外面が黒色、内面が赤色の塗色である。外面には2方に木葉の文様が赤色で描かれるが、部分的に残るのみである。高台見付には「人」字状の線刻がある。1441は高い高台をもつ椀である。土圧による変形が著しい。外面が黒色、内面が赤色の塗色である。外面には木葉の文様が赤色で描かれる。2箇所部分的に残るのみであるが、3方に配されていたものと考えられる。高台見付では長辺約3cm、短辺約2cmの範囲で漆が剥がれているが、意図的なものか否かは不明である。1442は皿である。



図 162 堀 83 出土漆器 (2)

高台を欠損し、全体の約3分の1が残るのみである。塗色は外面が黒色、内面が赤色である。外面には漆絵の文様がある。

1443～1445は高い高台をもつ椀である。1443は外面が黒色、内面が赤色の塗色である。外面には赤色で文様が描かれる。高台見付には扇形の肉太の線刻がある。見込みは被火によって炭化している。1444は内外面ともに黒色の塗色である。外面と見込みに赤色の文様がある。高台見付には「山」字状の線刻がある。1445は内外面ともに黒色の塗色である。土圧による変形が著しく、図に示した形状は本来の形状とは異なる。見込みに大振りの文様が描かれる。外面の文様はその有無を含めて不明である。1446はやや高めの高台をもつ椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色である。外面には細い筆致で「鶴亀」と「松」の文様が残る。亀の図案はデフォルメが著しい。見込みは被火により炭化している。1447は外面が黒色、内面が赤色の塗色である。外面には器壁全体に木葉などの文様が赤色の漆絵で描かれている。見込みは被火により炭化している。1448は高い高台をもつ椀。塗色は内外面ともに黒色である。外面には2枚重ねのモミジの葉が横方向に描かれている。現状では2方が残るのみだが、3方に配されていたものと考えられる。1449は内外面ともに黒色。土圧による変形が著しく、図示した形状は旧状とはやや異なる。外面には「鍵」とも考えられる文様が描かれるが、残りが悪く、全容は不明である。1450は高い高台をもつ椀であり、胴部下半が張り、口縁が直立気味である。内外ともに黒色の塗色である。外面には2箇所文様が残る。全体が残る文様は花文と考えられるが、もう一方の文様は横棒が残るのみで全容は不明である。見込みに文様の痕跡が残るが、詳細は不明である。

1451は高い高台をもつ椀であり、内外面ともに黒色の塗色である。外面と見込みに文様があり、外面には「俵」と「鍵」、見込みに「鍵」の文様がある。俵の中は針描で表現される。高台見付にはランダムな細い線刻が認められる。1452は高い高台をもつ椀であり、内外面ともに茶色っぽい赤色の塗色である。外面には「一つ蕪」と「折れ松葉」の文様が交互に2箇所ずつ配されている。前者の細部は針描で表現される。高台見付には「小」のごとき黒漆が残るが、意図的なものか否かは不明である。見込みは被火により著しく炭化している。1453は外面が黒色、内面が赤色の椀である。外面には器壁全体に赤色の漆絵が描かれている。残りの悪い部分も多いが、「鶴亀」や「松竹」などを描いている。1454は高い高台をもつ椀である。土圧による変形が著しく、図示した図は原形を損ねている。塗色は外面が黒色、内面が赤色である。外面には漆絵の簡単な文様がある。見込み部分を中心に被火によって炭化している。1455は内外面が黒色の椀である。見込みと外面には三つの水滴形の文様があり、見込みの文様の一つではV字形に開く尾鰭を表現している状況が看取されることから、金魚などの魚をモチーフにしたものと考えられる。1439と同様に高台見付には「人」字状の線刻がある。1456は内外面が黒色の椀である。見込みに「井」の字を崩した文様が二つ描かれている。高台見付には複雑な線刻が残る。1457は遺物集積遺構111から出土した高い高台をもつ椀である。外面は赤色に塗色するが、内面は炭化と剥離のために不明である。外面には残りは良くないものの、「鶴亀」と「松」が黒色の漆絵で描かれている。見込みは炭化が著しい。1458～1460は内外面とも赤色の椀である。1458はやや高い高台をもつものであり、全体に茶色っぽい塗色である。外面には黒色で文様が描かれるが、非常に粗雑である。1459はやや薄手の精製な作りである。文様は描かれませんが、高台見付に菱形の中に※をいれた記号を黒漆で描いている。見込みは被火によって炭化している。1460は高く外方に開く高台をもつ。大振りで器壁が厚く、重厚な作りである。文様はないが、高台見付に黒漆で「△」が書かれている。1461は平時絵を針描で桐文を描いた曲物である。円形の穿孔部分が残っており、湯桶もし

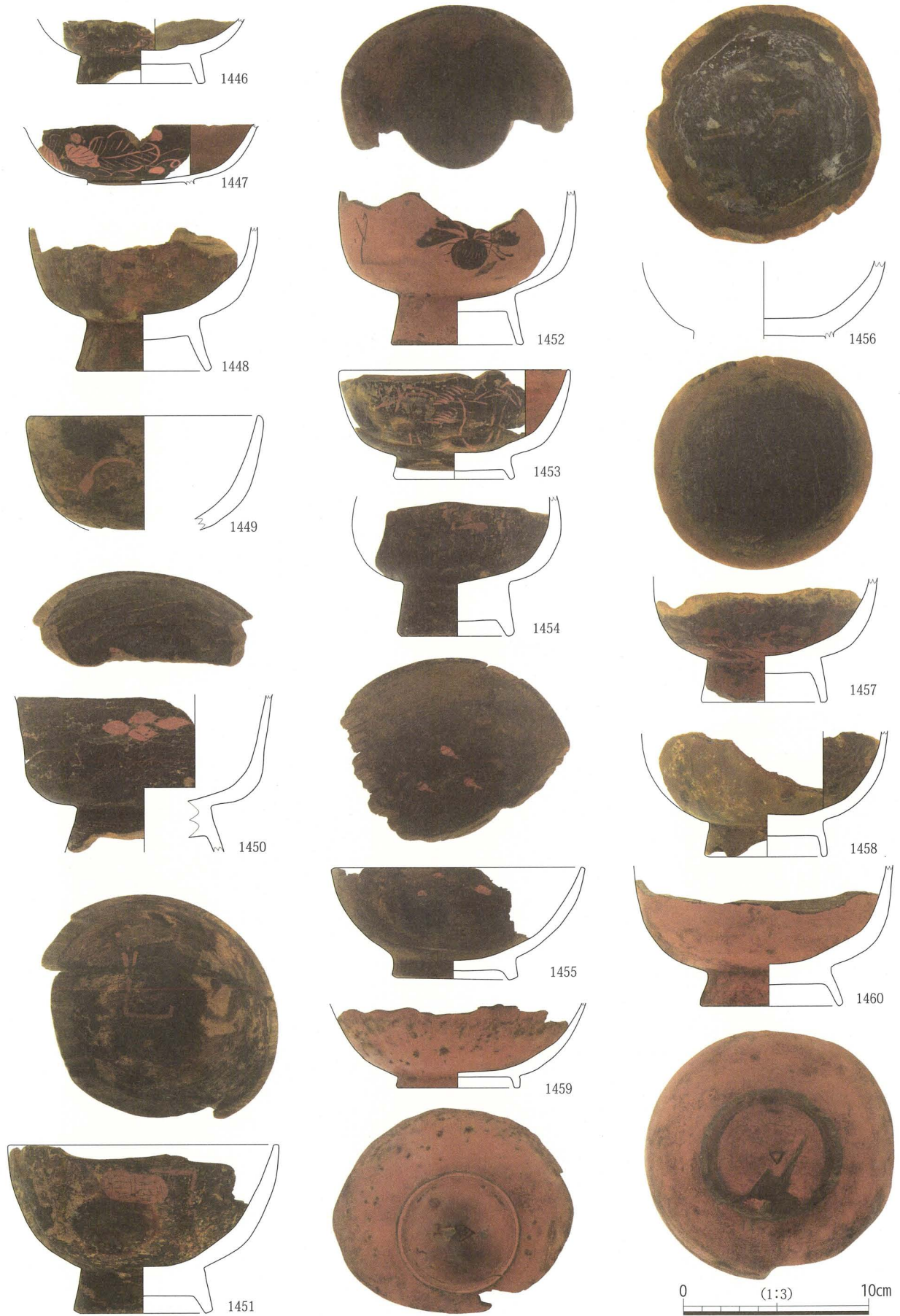


図 163 堀 83 出土漆器 (3)

くは水次である可能性が高い。外面は黒漆、内面はベンガラ漆の赤色である。細片のために桐文以外は残らないが、本来は菊文とセットで文様が描かれていたものと考えられる。京都国立博物館の永島明子氏のご教示によれば、「高台寺蒔絵」の典型的な事例、かつ優品であり、大名クラスの持物である可能性が高い。

1462 は金蒔絵が残る漆器の細片である。器壁が薄く、小型の皿もしくは杯であろうか。内外面ともに塗色は赤色である。外面には繊細なタッチでモミジの葉の蒔絵が施され、葉脈は針描で表現される。

1463 は「梅松」の文様をもつ蓋である。塗色は内外面ともに黒色で、外面には繊細な筆致で文様が描かれている。部分的に金色の文様が残

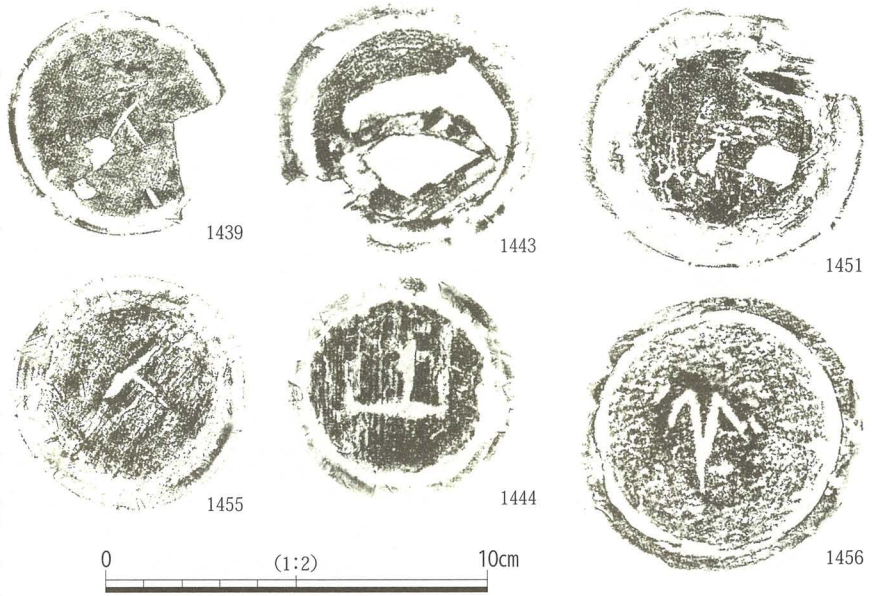


図 164 堀 83 出土漆器碗線刻拓影

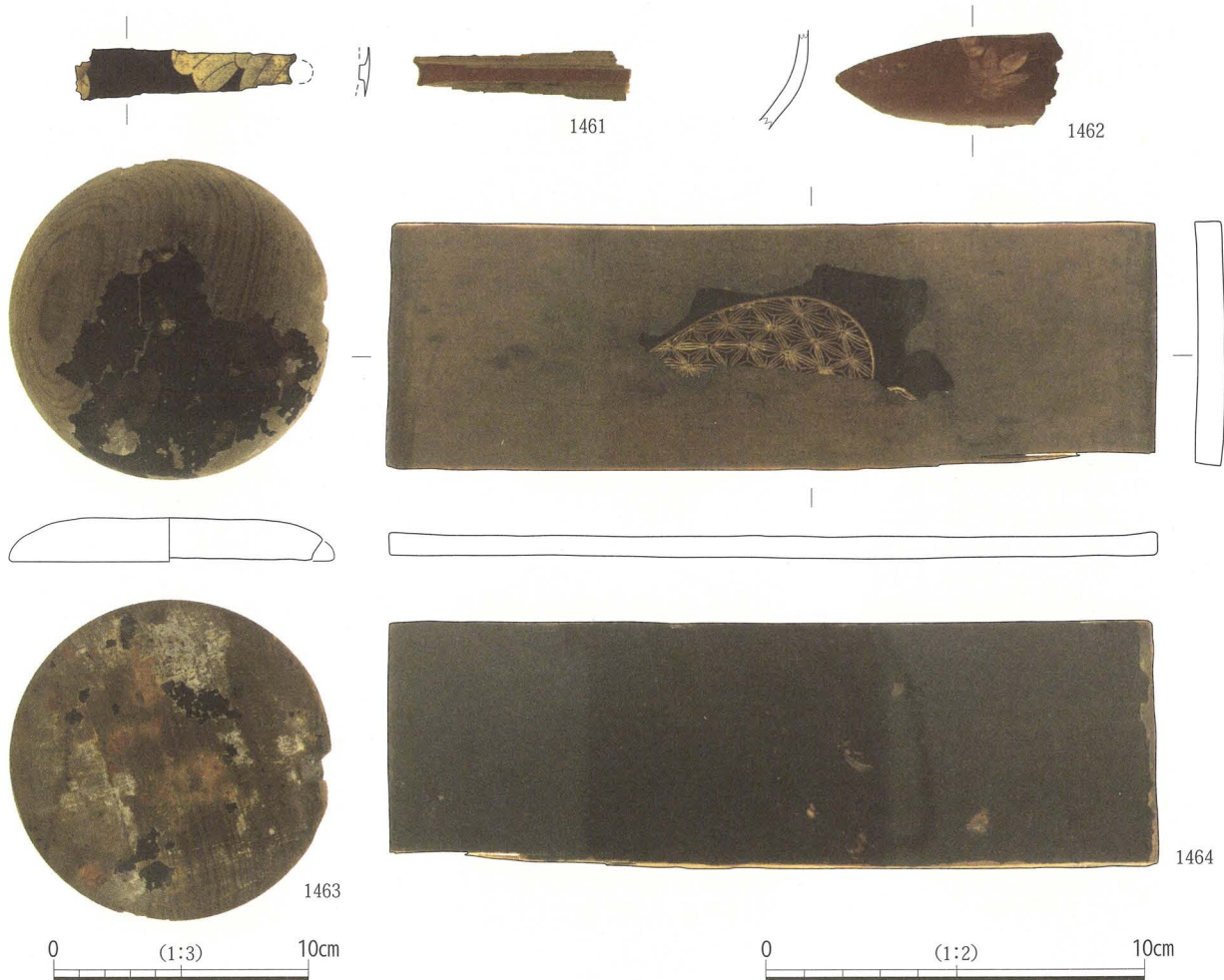


図 165 堀 83 出土漆器 (4)

るが、平蒔絵ではなく、箔絵の可能性も残る。下地漆がなく、漆は木地から遊離している。

1464 は箱などの側板と考えられるものである。内外面ともに黒漆を塗り、外面には「蛇籠」とも考えられる文様を描く。文様は蒔絵もしくは箔絵である。1463 と同様に下地漆が施されないか、もしくはきわめて薄く、木地と漆膜が遊離しかけている。

④ 掛矢

1465 は遺構 154 から出土した掛矢である。遺構 154 は堀 83 造成時の土木工事に伴う遺構であることから、一項を立てて報告することとした。頭部の大きさは長さ 33.2 cm、幅 13.6 cm を測り、大型のものである。全長は柄が中央付近で折れ、欠損するため不明である。頭は柱状の角材を面取りし、断面形は八角形である。側面の中央に長方形の孔をあけ、柄を挿入する。頭は使用により打面全体に欠けや摩滅が激しく、側面は擦過痕が多数見られる。

⑤ 漆器

1466 ～ 1474・1476 ～ 1478 は漆器である。漆器についてはすでに項を立てて報告しているが、ここでは画像を添付した図面作成から漏れたものを扱う。

1466 ～ 1468 は椀である。1466 は口縁部が端反で、腰部が角張る。塗色は内外面共に黒色である。轆轤の爪金具痕が高台内に 3 箇所塗りやや盛り上がり、確認できる。1467 は外面に「亀甲に花菱」が朱色で描かれる。全体の塗色は外面が黒色、内面は茶色である。1468 は椀を塗り作業用容器として転用したものである。とくに内面見込み部分は漆状の黒色塗料が厚く付着する。

1469 は鉢である。1470・1471 は皿である。いずれも底部を一段削り込み、上げ底である。塗色は内外面共に黒色である。1470 は内面に朱色で線描きされる。1471 は内面に朱色で草を模したような線描きがされる。底部外面中央の木地が露出する部分で轆轤の爪金具痕をとどめる。また、底部外面に刃物による擦過痕が見られる。

1472 ～ 1474・1476 ～ 1478 は湯桶や水次等の容器である。1472・1473 は湯桶の把手である。1472 は内外面が丸味を帯び、側面は平坦に整える。把手と本体の接合は合釘を埋釘し、さらに周囲を漆で固める。1473 は木地全体に布を着せてから黒漆を塗布する。断面形は長方形である。1474・1476 ～ 1478 は蓋である。1477 は蓋内面の周縁を一段低くし、そこに曲物の返りを 4 箇所に木釘で横方向から打ち込み接合する。1474・1476・1478 は返りが残存していないが、一段に低い縁部に木釘痕があり、おそらく 1477 と同様の返りがつくと見られる。1474 は返りの接合を樹皮紐で補修する。1477・1478 は蓋の中心に直径 2 mm の穿孔がされ、つまみが付いていたものと考えられる。また、内外面に刃物による擦過痕がみられる。

⑥ 容器

1475・1479 ～ 1486 は容器である。1475 は挽物合子状の蓋である。頂部外面に炭化箇所が見られる。1479 は杯である。高台内側は削り仕上げである。外面と高台畳付に墨で線描きがされる。1480 は皿である。中心に直径 1 ～ 2 mm の孔が残り、底部外面に轆轤の爪金具痕を 2 箇所とどめる。

1481・1482 は湯桶の注ぎ口部である。全体に精巧な作りで、丁寧に仕上げられる。全体の形状は 1481 よりも 1482 は扁平である。注ぎ口は液体が流れ出る部分にあたる口下のみ面取りされる。内側断面形は注ぎ口部から差込部へと円形から方形に変わる。本体との接合は方形の差込部を斜め上から押し込み、これを上下 2 箇所の木釘で留める。差込部は本体の円柱の曲面にあわせ丸みをもたせる。

1483 は湯桶や水指等の蓋である。蓋内面の周縁を一段低くし、そこに曲物の返りを 3 箇所以上に木

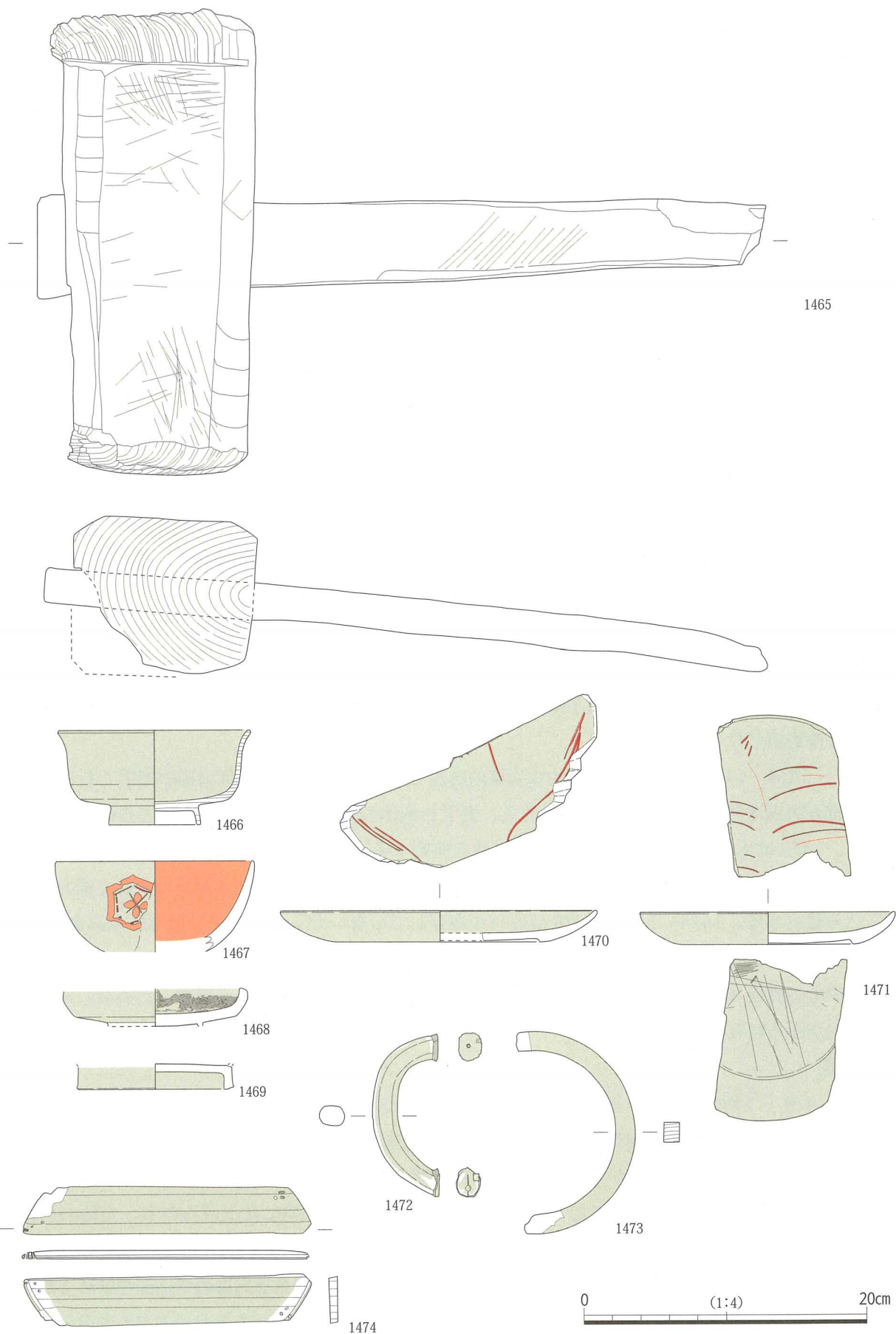


图 166 堀 83 出土木製品 (1)

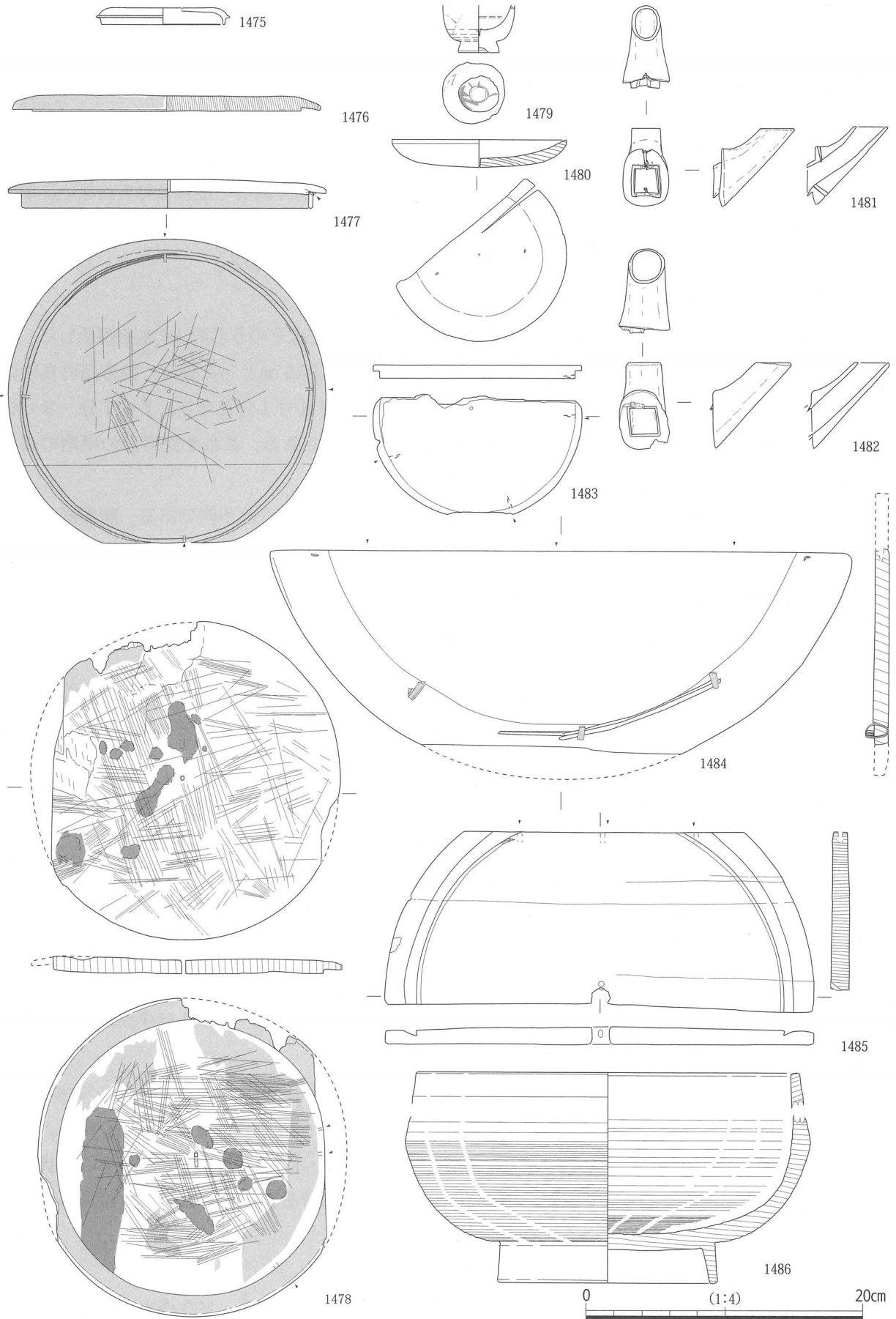


図 167 堀 83 出土木製品 (2)

釘を打ち込み接合する。蓋の中心に穿孔がされ、つまみが付いていたものと考えられる。内面全体に柿渋様の黒色塗料を塗布する。

1484・1485は大型容器の蓋である。1484は2枚以上の柾目材を埋釘で接ぎ合わせる。周縁は斜めに削り込み薄く仕上げる。内面は曲物の返りを接合するために端部より4.2cm内側に接合位置を印す刻線が引かれる。この線上とその外側に2孔を開け、樹皮紐で接合する。1485は2枚以上の板材を埋釘で組み合わせる。内面周縁は溝状に彫り込まれる。この溝の側面には木釘等の痕跡は見られない。中央に直径1.3cmの穿孔があり、その横には木釘が埋め込まれ、つまみが付いていたものと考えられる。

1487は挽物の鉢である。外面体部は轆轤の回転による筋目を生かしている。

⑦ 箸

堀83からは完形品509本、破損品3073本が出土した。ここではそのうちの18本を図示した。出土した全ての箸を計測した結果、12534.51cmで1寸の長さを3.025cmとした場合、完形品の長さは最も短い5寸7分から1尺1寸9分となる。平均長は24.63cmで8寸1分となり、7寸7分～8寸3分のものが43%を占める。破損品の延べの長さは3870.98cmである。これを完形品の平均の長さ24.36cmを基準とすると約1553本分にあたる。

1487～1489は黒漆塗の箸である。いずれも欠損しており全体の長さは不明である。断面形は整えられた円形で丁寧な整形を施す。1688は上端を斜めに切り落している。

1490～1503は白木箸である。白木箸の形態は中心付近に最大幅をもつ両口箸が最も多く、1494・1501のような寸胴のものは少数である。両口箸は箸先が切り落しであるが、1496・1503は先端をさらに細く削りだす。1492は中央に挟りがいられる。

1490は頭頂部に1本線、上下部はそれぞれに2本線を墨書きする箸である。全体を六角形に削り、頭部は圭頭、箸先が薄く削り平坦に仕上げる。今回の調査で破損品を含めこのような墨書を施した箸はこの1点のみであり、特殊な用途に用いられたものと考えられる。

1504は上部に切り込みを入れる有頭状の箸である。断面形は扁平な六角形である。

⑧ 棒状木製品・楊枝

1530～1535は用途不明有頭状木製品である。それぞれ頭部の形状は異なるが下端はいずれも細く削り出すものである。1531は頭部が四角柱で頂部が四角錘状に尖る。1532は頭部を八角形に面取りする。1533～1535は頭部がおおむね四角柱状で、頭頂部は平坦である。1530は頭部が扁平な三角形で、墨が付着する。

1536～1541は棒状木製品である。1537は上下面を平坦に削る。1538～1541は中央部付近に最大径をもち、両端もしくは片端が丸く磨り減る。

1520～1529は楊枝である。1521～1524・1526・1529は頭部を斜めに切り落としている。いわゆる「くろもじ」である。長さはそれぞれ異なるが、形態は共通しており、扁平な頭部を斜めに切り落とし、先端は細く削りだす。1522は遺物集積遺構127から出土した。1525・1528は欠損により頭部の形状は不明であるが、やはり先端を細く削り出す。1527は上部の持ち手部分を幅広にする。1520は頭部を平らに切り落とす。

⑨ 火付け棒

1505～1519は先端が被火によって炭化した、いわゆる火付け棒である。190点出土し、そのうち15点を図示した。大半が一方の端のみが炭化しているが、1513～1515は両端が炭化する。これらの

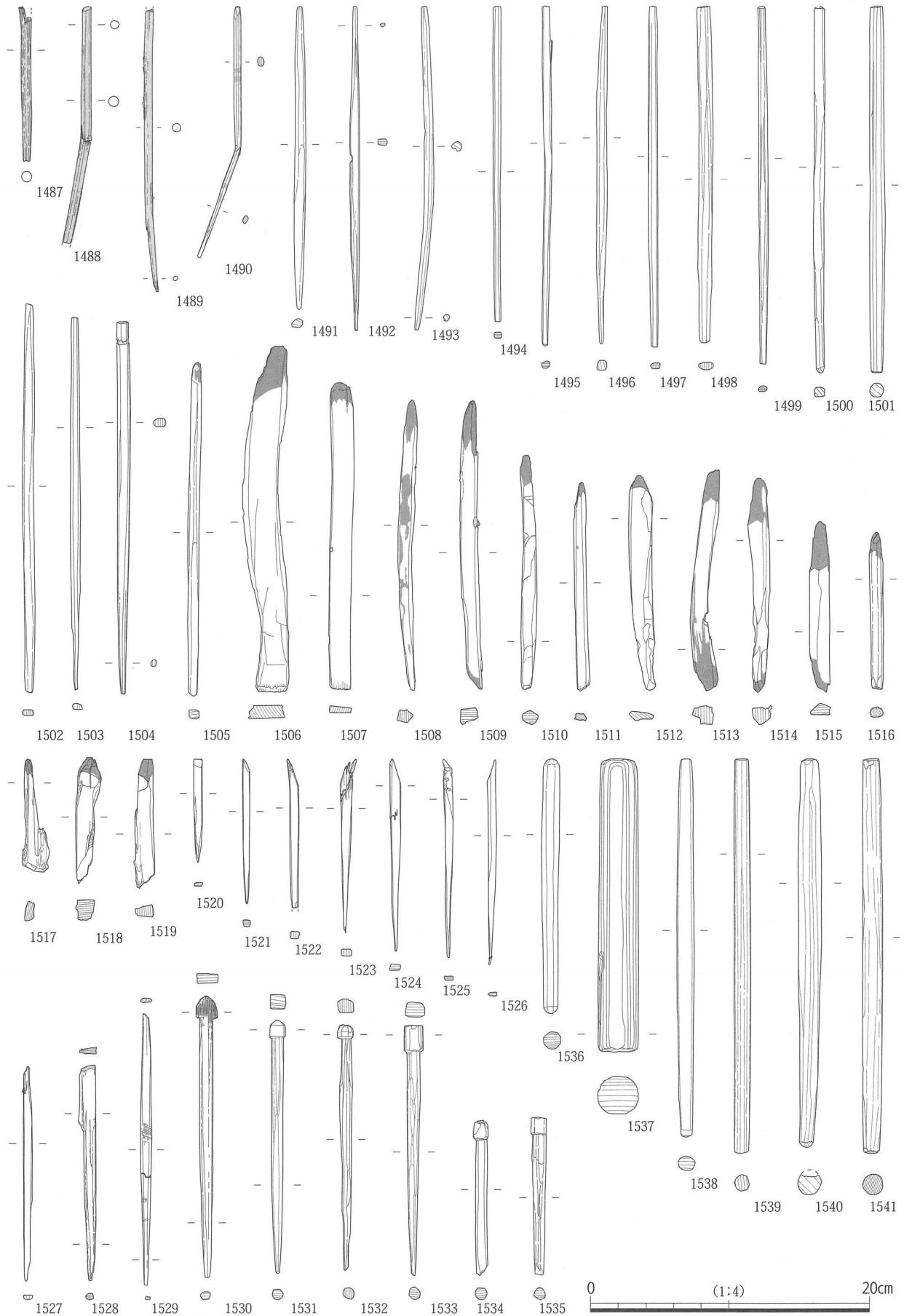


図 168 堀 83 出土木製品 (3)

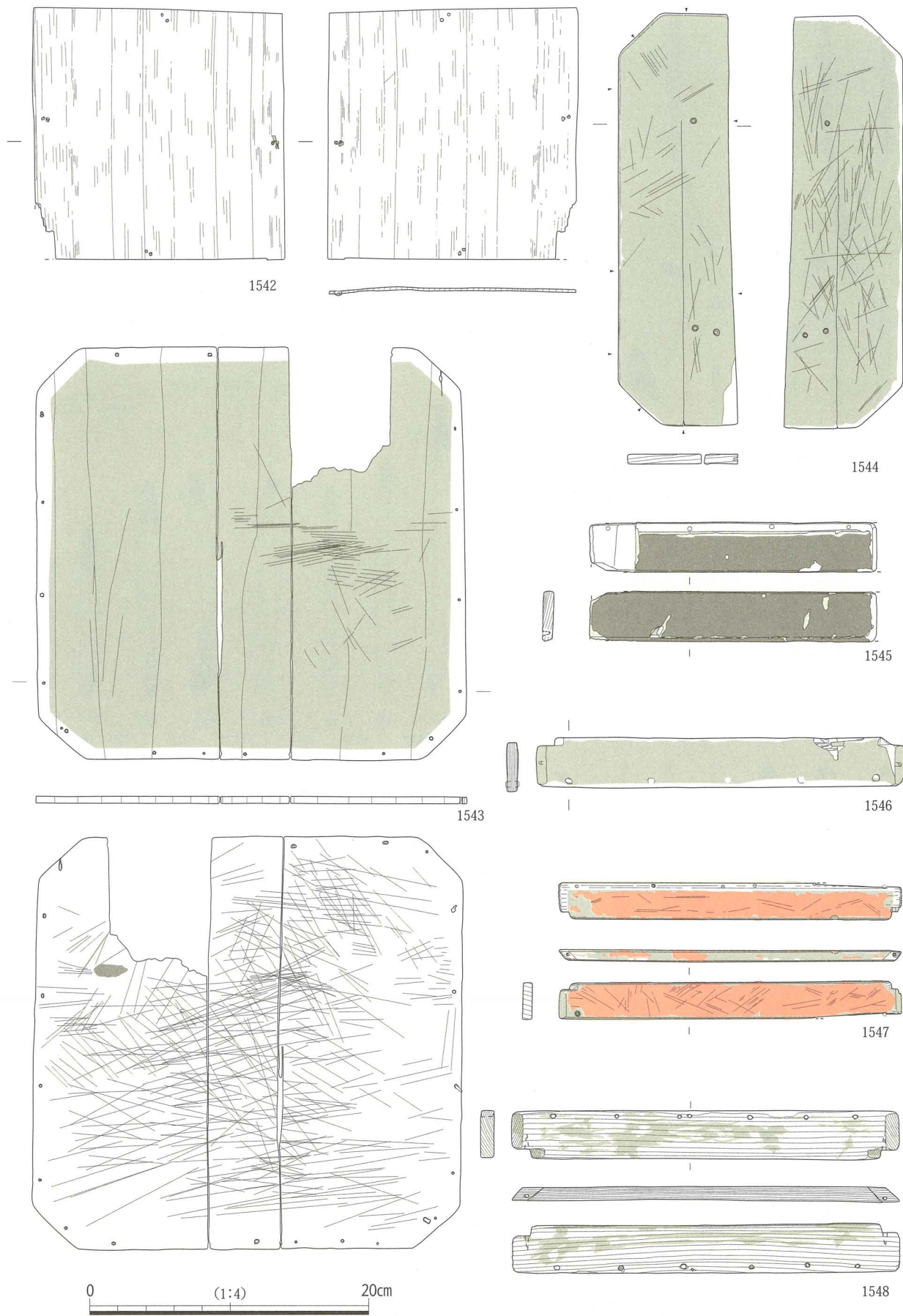


图 169 堀 83 出土木製品 (4)

火付け棒は割り放しのもの（1513・1514・1517・1518・1519）、おおまかに角状に割り出したもの（1506～1511・1516）が見られる。また1505のように箸の一方の端部が炭化したものが見受けられ、火付け棒として使用された可能性がある。

⑩折敷

1542～1569は折敷である。1542以外は全て隅切折敷である。1552・1554・1557・1561は遺物集

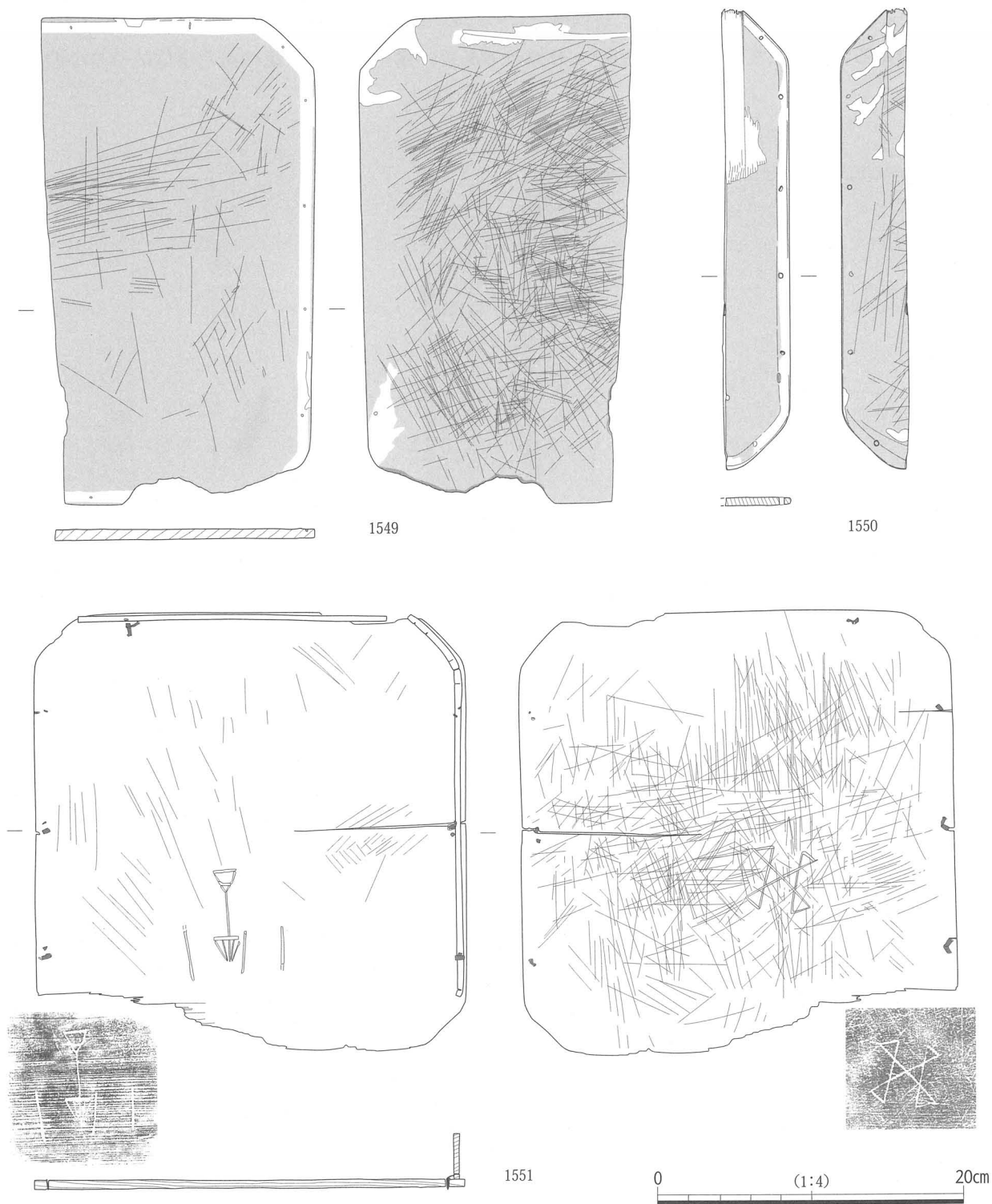


図 170 堀 83 出土木製品 (5)

積遺構 127 から出土した。

1542 の平折敷は寸法が 18 cm と小さく、板の厚さも薄いため他の隅切折敷とは用途が異なると考えられる。底板と側板の接合は各辺の中央 1 箇所樹皮紐により綴じ合わせられる。

1543 ~ 1550 は漆塗り折敷で、それ以外は白木である。底板の形は長さとの幅の差が 0.1 ~ 0.4 cm でほぼ方形といえよう。隅切折敷の寸法は 28.5 ~ 35.0 cm のものが見られる。しかし、最大寸法の 1558 は周縁に穿たれた木釘の内側に円形に樹皮紐綴じの痕跡が見られることから、曲物の底板であったものを折敷として再利用したものとも考えられる。このため 1558 を除いた寸法は漆塗り折敷が 29.8 cm と 32.1 cm であるのに対して、白木は 28.5 ~ 31.6 cm であり、漆塗り折敷に比べると全体にやや小振りである。

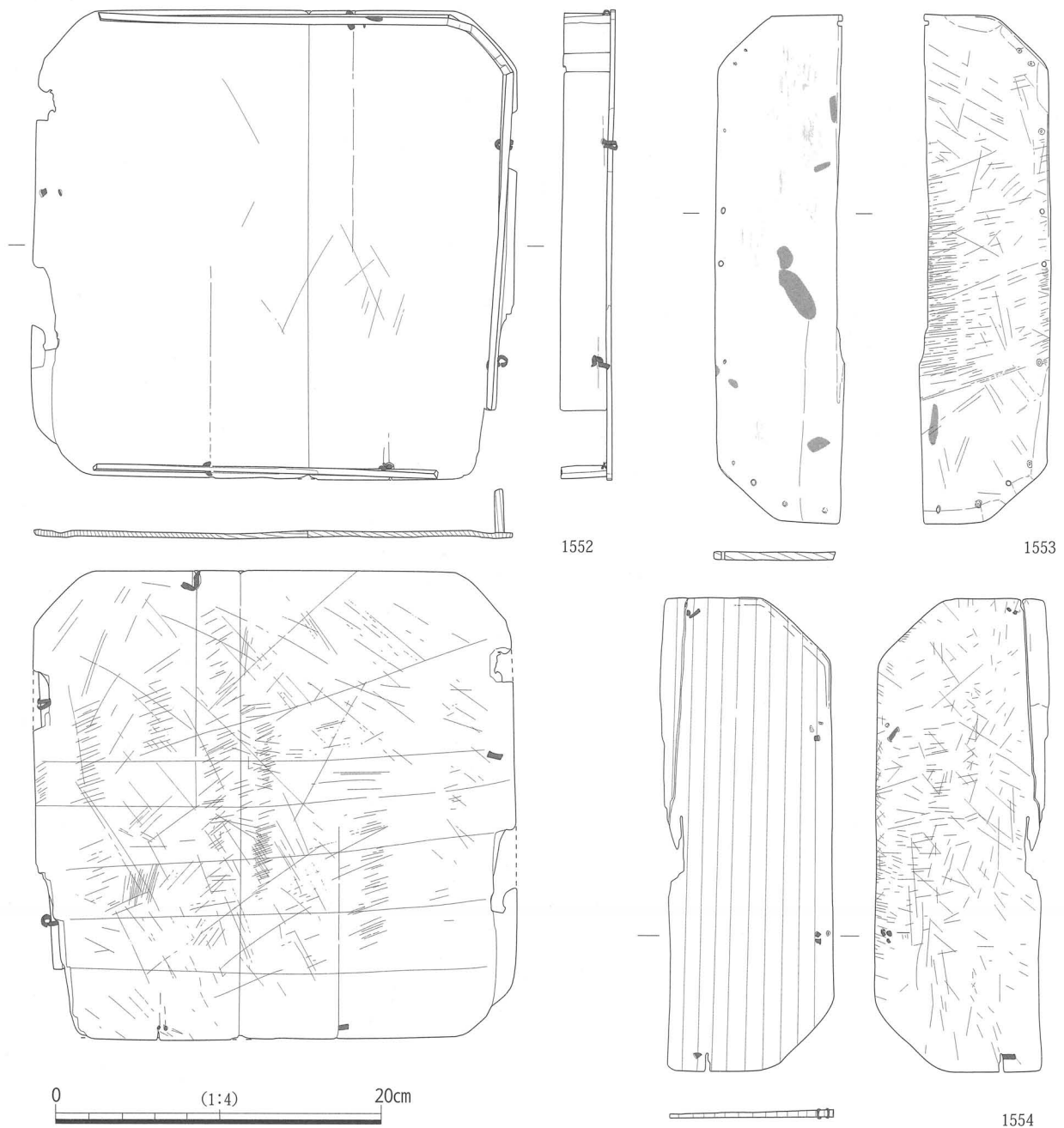


図 171 堀 83 出土木製品 (6)

1545～1548は側板である。全て漆塗りで、1547のみ朱漆塗りである。高さは2.8cmと3.6cmの2種類である。四方の側板の接ぎ方は仕口を斜めに切り落とし、上方は直角に切り込みに隅切部分の短い側板を合わせる。接合は仕口が漆もしくは、1546は埋釘と漆を併用し、上部切り込み部分は埋釘を用いる。

1545は左部分が段になる。これはさらに長く部材をつなぐ際に使われる相欠接ぎであることから、折敷の側板ではなく衣装盆のような大型製品の側板である可能性も考えられる。上縁部は丸味を帯びる。1547は上下端部が布を着せた後に、底板は接合される部分を除き全体に黒漆、その上に朱漆を塗布する。内外面に細かい擦過痕が見られる。

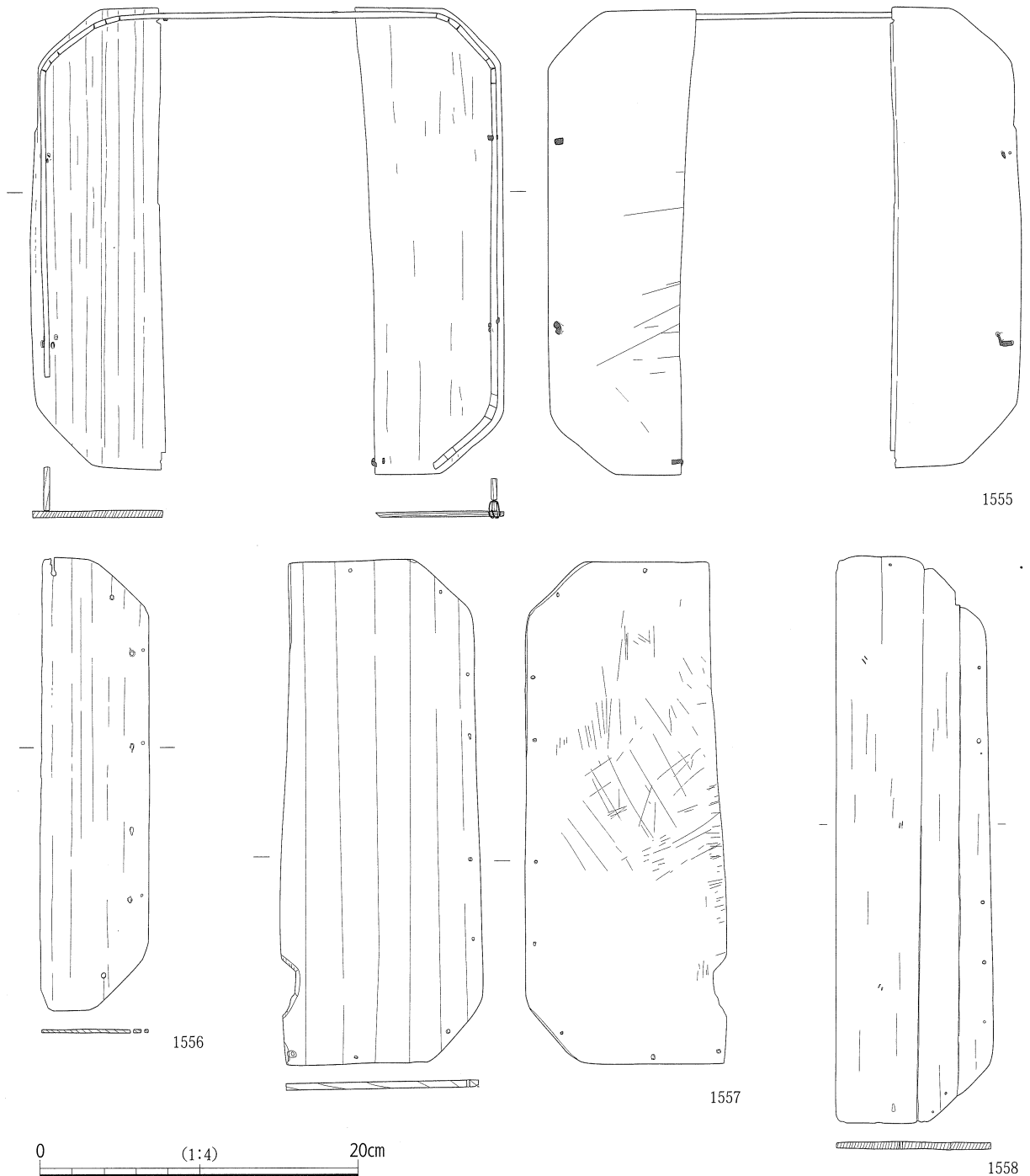


図 172 堀 83 出土木製品 (7)

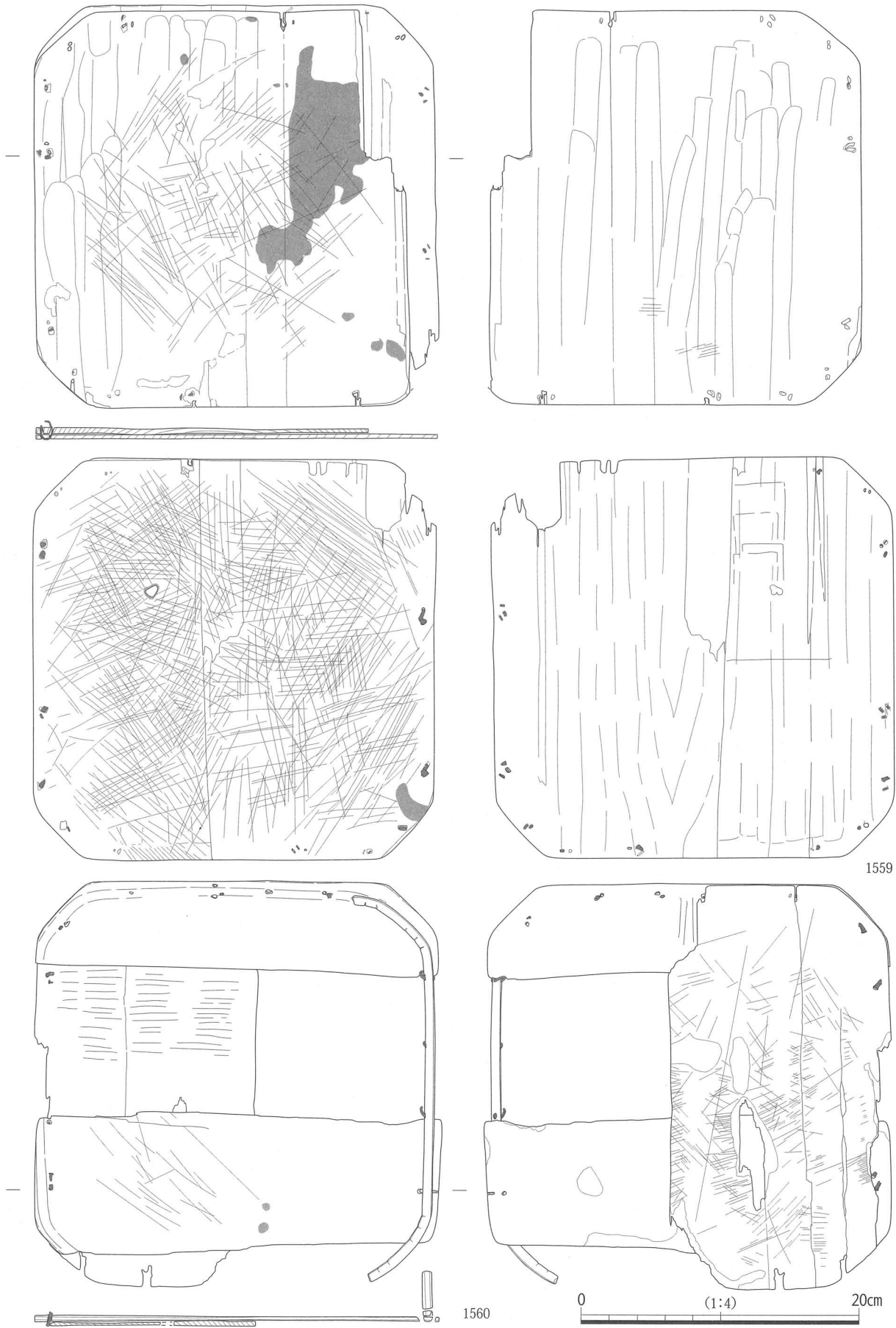


图 173 堀 83 出土木製品 (8)

1543・1544・1549・1550は黒漆塗りの底板である。1544は脚付折敷である。左端部から5.5cm内側に脚部との2列の接合痕が見られる。いずれも後補である。この底板には2箇所の埋釘が見られることから組み合わせの底板、もしくは破損したものを修繕した可能性がある。1550は外面周縁を薄く削り、反り上がる。

漆塗りの側板と底板の組方は2通り見られる。1543・1549は底板の上に側板を組み裏面から木釘で接合し、1544～1548は底板側面に側板を組み側面から木釘で接合する。この場合、底板側面には黒漆が塗布されていない。接合は全て木釘が用いられ、1546は5箇所の痕跡が全て補修によるものである。

1551～1563は白木の折敷である。側板は底板の周縁に合わせ、各角に3箇所の深いケビキを入れ

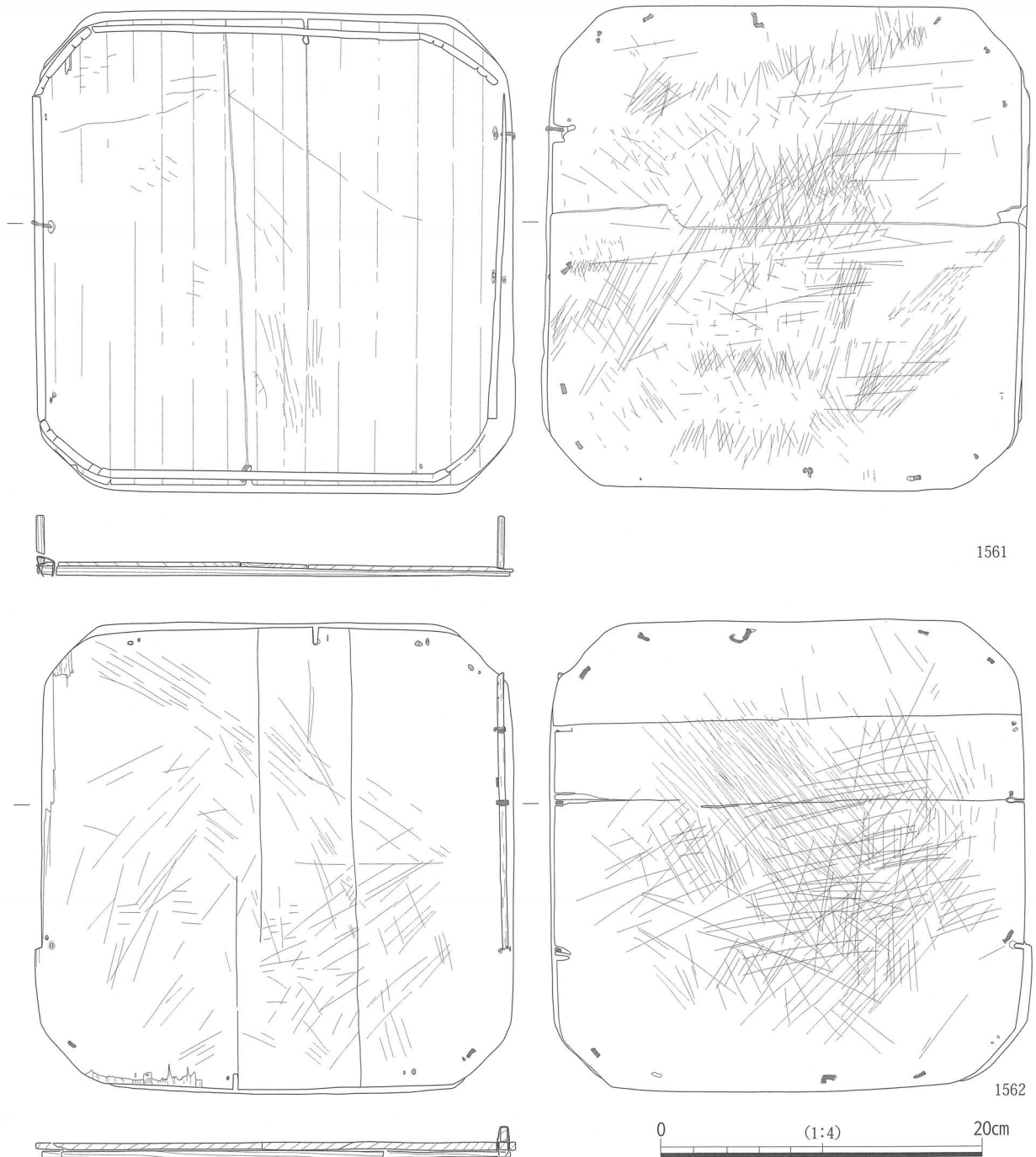


図 174 堀 83 出土木製品 (9)

曲げる。深いケビキのためほとんどの側板がこの部分で欠損する。側板の高さはいずれも目通し穴で欠損しているため不明である。側板と底板の接合は漆塗りのものは全て木釘を用いていたが、白木は1418・1478が木釘、その他は樹皮紐で綴じ合わせる。1418は元来の木釘痕の内側に4箇所補修痕がみられる。

側板と底板の樹皮紐による接合方法は底板に2孔1対、側板に1孔をあけ、そこに先端をやや厚みをもたせた約3mm幅の紐を、側板内側にあたる底板孔から側板孔に通し、底板外側孔から最初の孔にもどる。これを一辺に2～4箇所綴じる。1554・1555・1559・1562ではより側板との接合を強固にするため底板に3孔で1対とする箇所もある。

白木の隅切折敷には1559～1563のように底板を2枚重ねにしたものが見られる。この底板は現在の合板と同じ様に強度を増すために、木目を90° 違い重ねている。また、2枚重ねの底板内側は削り

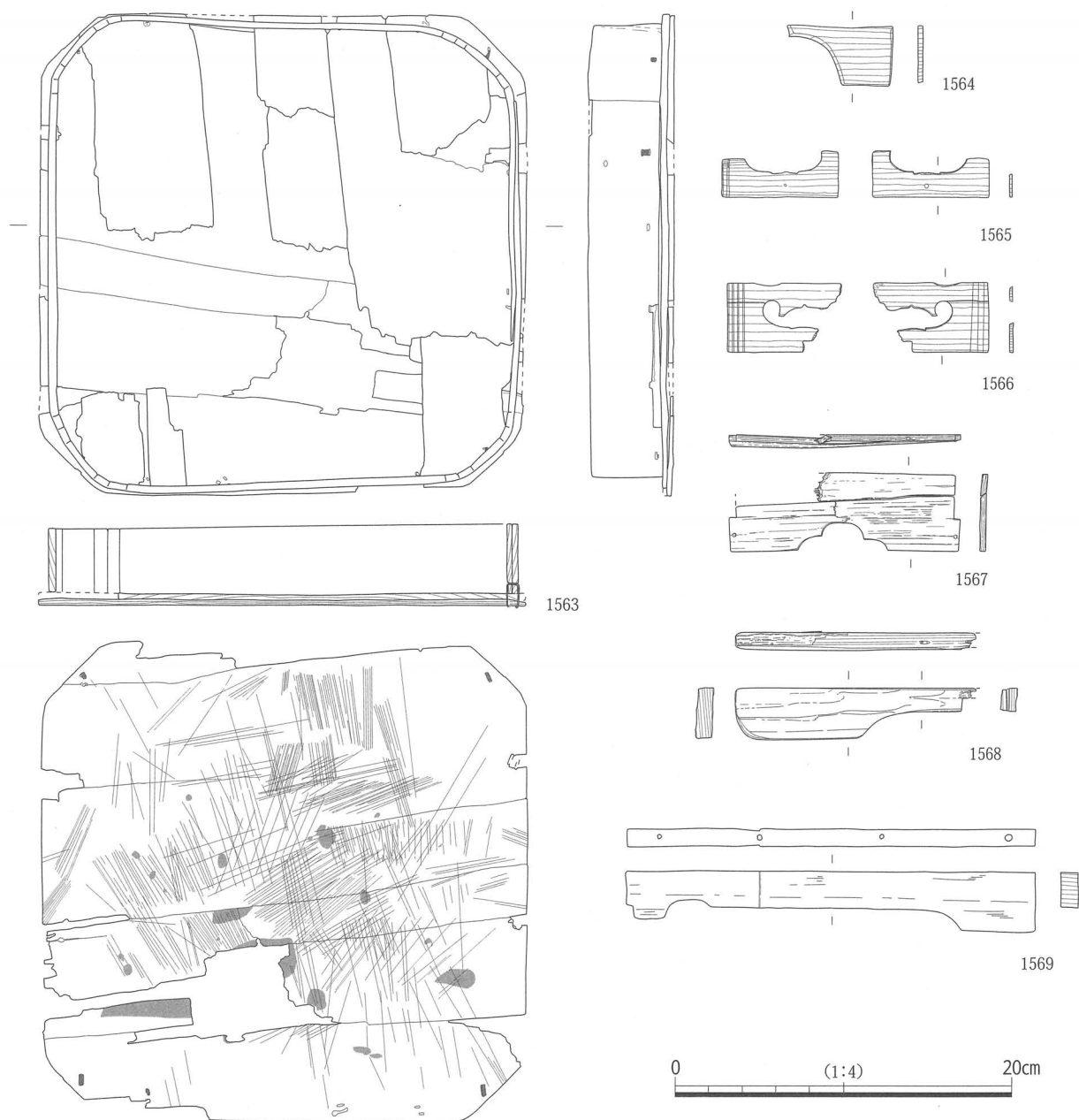


図 175 堀 83 出土木製品 (10)

痕が明瞭に残る。

底板は外面もしくは内外面に 1556 を除くすべてに直線状の無数の刃物による擦過痕が見られる。1552 は底板が破損したため異なる板を組み合わせ、修復する。1551 は内外面それぞれに異なる柄の線刻を施す。

1564 ～ 1569 は脚部である。1564・1565 は左右端に 3 箇所 of ケビキが入れていることから三宝の脚部の可能性がある。透かしの意匠は雲形でほぼ同じである。1565 は透かし上部に棒を通す穿孔が見られる。1567 は透かしが山形で、左右と上側面に木釘が見られる。全面に柿渋を塗布する。1569 は 1680 に見られるような曲物の脚部の可能性も考えられる。

⑪ 匙・へら・しゃもじ

1570・1571 は剝物匙である。黒漆塗りで、全体の作りは丁寧である。形状は身が長円形で中央を浅く窪め、匙先に向かって薄く削り込む。身から柄への作り出しは鋭角に削り、身の縁からほぼ水平にのびる。裏面に細かい擦過痕が多数残る。1571 は卵形で上面を弧面に削りぬく。整形は粗く、削りの痕跡が明瞭に残る。

1573 ～ 1575 はしゃもじである。いずれも身の先端はやや弧状につくられ、使用による摩滅が見られる。

1572・1576 ～ 1598 はへらである。1572 はしゃもじ形の小型へらである。身は先端ほど徐々に薄くなり、柄の先端は細く削り尖る。1576 は杓状のへらである。元々箸であったものの先端を削り、匙のようにしたものであろうか。

1577 は右縁中央に 2 箇所の穿孔と左側上部が弧状に切り取られていることから、元来は折敷等の脚部であったものをへらに転用した可能性が考えられる。1578・1580 は柄の先端を尖らす。1577・1578 は形状からかまぼこ板の可能性も考えられる。

1581 は直線的で刃を持たないものである。1582・1583 は柄が短く、身部分が長いへらである。1582 は上部が欠損しているものの、この 2 点は長さ・厚さ・柄から身部分の円弧の削りぬきの形状まで全てが同一である。

1584 ～ 1588 は身と柄に境がなく、全体に扁平で先端は柳葉形に尖らす。1584・1585 は竹製である。1587 は身の厚みが先端へ徐々に薄く削られ、端部は 0.2 ～ 0.1 mm である。

1589 ～ 1598 は柄をもち、篋部を弧状に加工し、先端はやや薄くし刃状になるものである。ほとんどが刃状の先端部分が摩滅し丸みを帯びる。1589・1590 は身に対して柄が長く、細身である。1597 はこれらのへらの中でもかなり厚みがあり重量感がある。

1590・1591・1594・1595・1597・1598 は柄部分に紐かけのための穿孔を有する。1590・1597 は三角形である。1593 は中央上部に直径 0.8 cm の穿孔があり、転用品の可能性も考えられる。1598 は折敷の底板をへらに転用したものである。内面のみ黒漆塗りであったものをへらとして使用されている。柄先は側板との接合部分であるため漆が塗られていない。刃先全体の摩滅が激しい。

⑫ 蓋

1599 ～ 1603 は小型の蓋である。中央につまみを通す穿孔が 1 箇所もしくは 2 箇所にある。1599・1600 は周縁を面取りする。1603 は漆が付着し、片面に擦過痕が見られる。

1604 は直径 12.5 cm の蓋である。形状は上面を曲面に削り、下面がそれに反して周縁から中心に窪み、全体に滑らかに仕上げる。

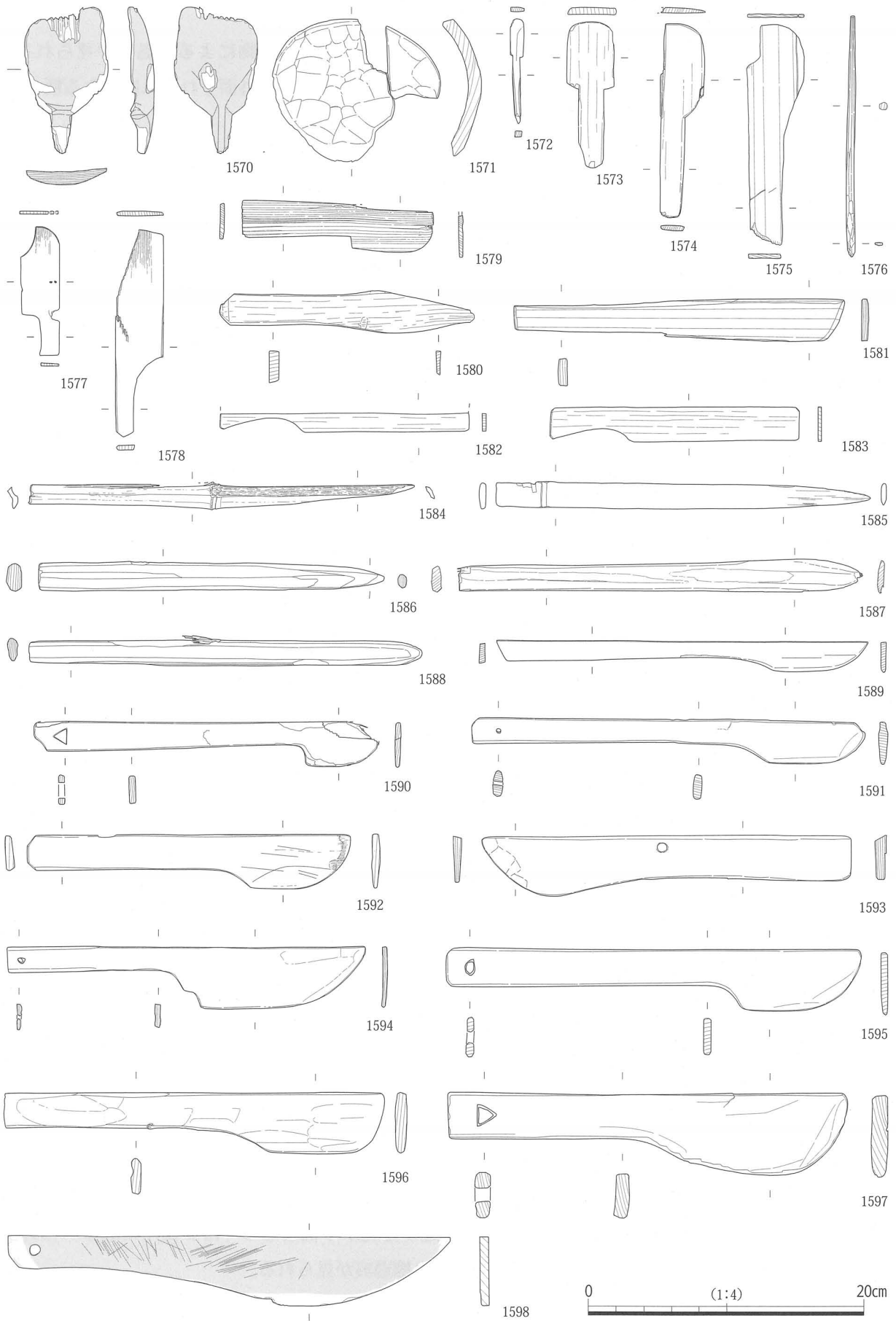


图 176 堀 83 出土木製品 (11)

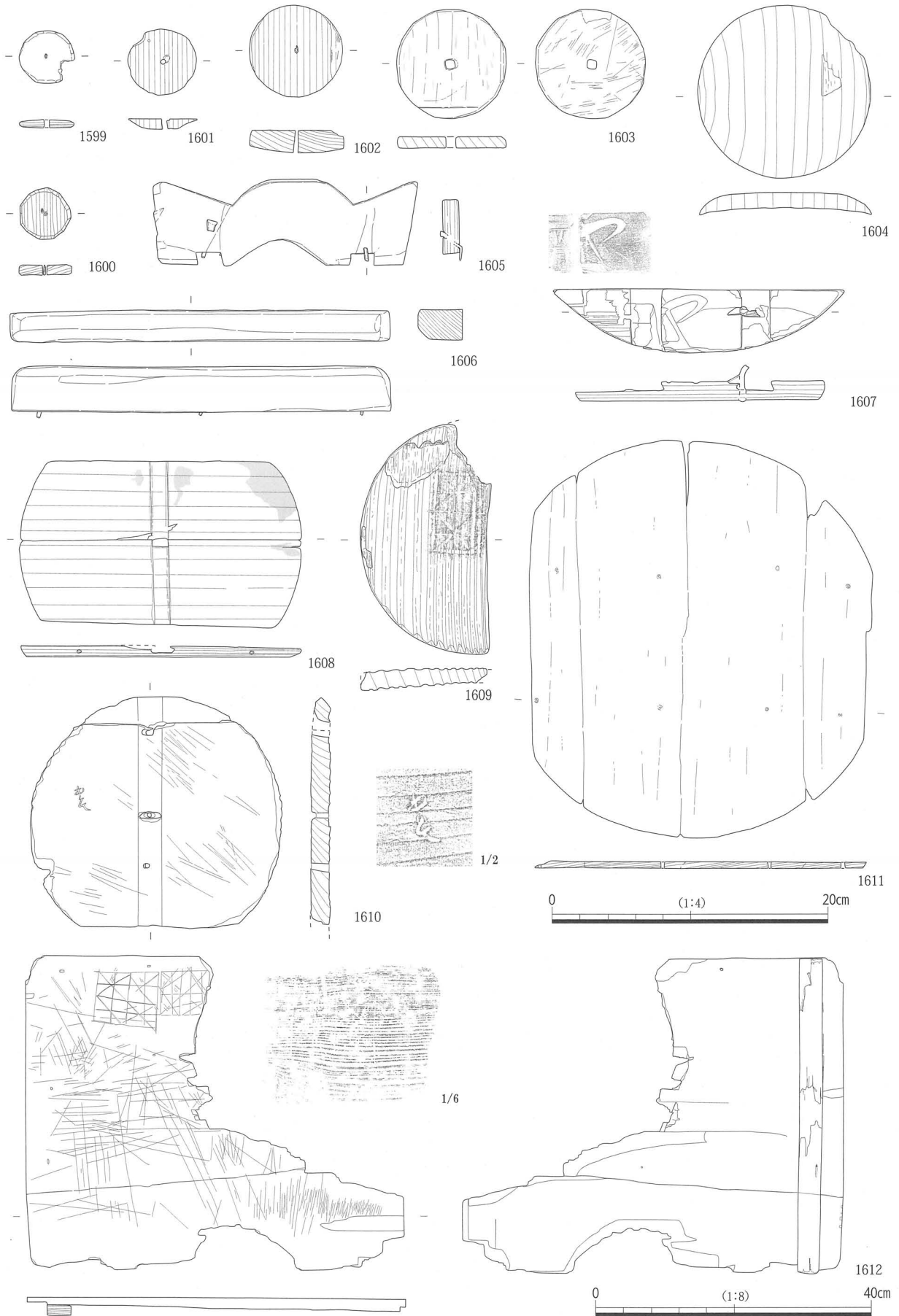


図 177 堀 83 出土木製品 (12)

1605・1606は蓋の把手である。1605は下端のほぞを1607のような蓋に取付けられた2本の角材に対して直角に嵌め込み用いたものと考えられる。角材との接合は当初木釘であったが鉄釘で修復する。周縁は面取り調整を行う。1606は1611のような蓋に取り付ける把手である。周縁は面取りを行い、全体に丸みのある形である。下面に蓋との接合のための鉄釘が3箇所被打れる。

1607・1608・1610・1611は把手付きの蓋である。1607は接ぎ合わせの蓋である。把手を嵌め込む溝は底面が広い蟻形に削られ、把手との接合のための鉄釘が打ち込まれる。中央下端に「や」の字を彫り込み、さらに焼き付ける。この「や」の字の彫り込みは溝に切られていることから、把手は後付けと見られる。1608は4枚以上の接ぎ合わせの蓋である。それぞれの板材は2箇所の埋釘で接合される。中央に把手を嵌め込む溝が切られる。溝は把手を外れ難くするため、中程で最も幅が広がる蟻形追入れ接ぎにする。1609は1610とほぼ同じ径と厚さの蓋である。上面に2段の方形の中に「×」の線刻がされる。裏面は炭化する。1610は左側におそらく文字と思われる不明線刻が見られる。中央の把手接合部を除き、内外面全体に柿渋様の黒色塗料を塗布する。この把手接合部に鉄釘穴痕が見られる。1611は把手が残存しないが2列に並ぶ釘穴痕が見られることから1607と同様に2列の把手が付いていたものと考えられる。

1612は大型方形蓋である。遺物集積遺構127から出土した。内面の左右に棧が取り付けられる。外面に1609と同様の方形線刻がある。また刃物による擦過痕が多数見られる。

⑬箱物

1613は組物の用途不明品である。これは長さ7.6cm、幅7.5cmのほぼ正方形の枠を組み、その下に3枚の板材を重ね合わせた底板を木釘で接合したものである。枠は三方の端を斜めに切り落して接ぐ留接ぎで、一方のみを直角に接ぐ。また1辺の枠のみ木釘による接合がされておらず、枠が底板から外れる。

1614は方形の木地枡である。外法は一辺約11.33cm、高さ約5.2cmを測る。側板の厚さは平均して0.77cmである。

組型は「人型」で、継手は矩形2枚継ぎである。側板のうち1枚は黒漆塗りの板材で、補修により後につけられたものである。各部材は竹釘によって、底板は各辺3箇所、側板は4箇所で接合される。側板の角や底板の縁は齧歯類に齧られた痕跡が明瞭に残る。そして補修した側板には痕跡が見られないことから、破損前に齧られたことが窺える。底面は墨書がされ、擦過痕や摩滅が激しく文字を判別することはできなかった。しかし少なくとも右側の列下に花押が書かれていることは確認できた。

枡として重要な法量であるが、全体に摩滅が激しく、側板の1枚は補修であり、かつ上端部が欠損している。そのため幅は比較的残りのよい6辺、高さは3辺の平均値から算出した。その結果、幅9.830cm、高さ4.305cm、体積は415.987cm³となる。

1615は箱釣瓶の底板である。底板・側板の一部が残存する。側板は底板縁から約0.3cm内側に生まれ、底板下面から一辺3箇所に鉄釘を打ち込む。底板周縁は摩滅により角が取れ丸みを帯びる。

1616は2枚以上の板材を接ぎ合わせた蓋で、中央に1箇所の穿孔があり、つまみがついていたものと考えられる。角は隅切で左端に溝状の彫り込みが見られる。

1617～1619は方形の蓋状製品である。1618・1619はいずれも三方の角は丸く、左下端は円弧に切り抜かれる。上部の2箇所に並列し直径0.75cmの穿孔がされる。1617・1618の穿孔は断面部分に炭化した部分がみられ、焼いた鉄棒を用い開けられた状況が判る。

1620は正方形の蓋である。表面は周縁を面取り、滑らかに仕上げる。左端に不整五角形の線刻がさ

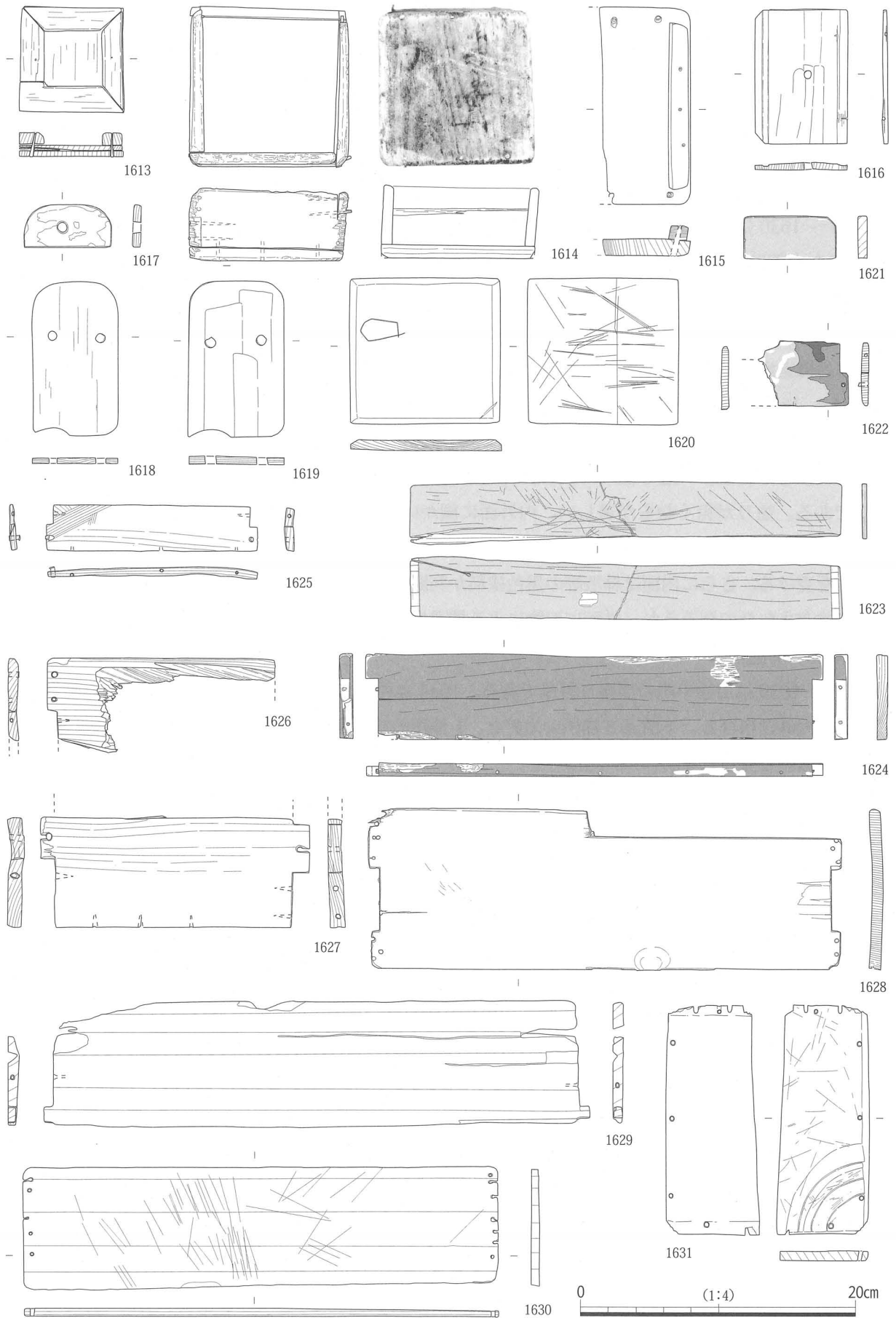


図 178 堀 83 出土木製品 (13)

れる。裏面は刃物による擦過痕が見られる。

1621 は黒漆塗りの箱物の蓋である。側面を含め全て艶のある黒漆である。周縁は全て面取りし、さらに丸味を帯びるように仕上げられている。

1622 ～ 1624 は黒漆塗りの側板である。組手は 1622・1624 が二枚組、1623 は付合せである。1623 は外面の漆塗りと比べると内面は雑な塗り方である。外面に擦過痕が多く残る。1624 は底板との接合は木釘 5 箇所と漆によるものである。

1625 ～ 1630 は側板である。組手は 1625 ～ 1627 が二枚組、1628 は三枚組、1630 は付合わせである。1625 は左上部に斜帯状に擦過痕が残る。底板との接合痕が 3 箇所で見られる。1628 の内面は齧歯類と考えられる引っ掻き痕が残る。側板は 5 箇所の木釘で接合され、補修痕も確認できる。底板との接合は 4 箇所、同じく補修される。1626・1628 は内外面共に柿渋様の黒色塗料を塗布する。1630 は刃物による擦過痕が見られる。

1631 ～ 1633 は底板である。1631 は右下隅に同心円状の三重の溝状の彫り込みをする何らかの製品として使用された後、底板として転用されたものの可能性がある。周縁は面取りし丸味を帯び、側板との接合による木釘痕が一辺 3 箇所に残る。外面は刃物による擦過痕が見られる。1632 は内面のみ黒漆塗りである。塗りが粗くむらが著しい。内外面に細かい擦過痕が残る。側板との接合は一辺に 5 箇所の木釘穴痕が見られる。1633 は内外・側面全て黒漆塗りである。全体の塗りはかなりむらがあり、雑な印象を受ける。さらに内面は柿渋等の黒色塗料か判断を迷うほど艶がなく、防腐等の実用的な目的のために塗布されたのだろうか。外面に刃物による擦過痕が残る。

⑭用途不明品

1634 ～ 1639 は用途不明の漆塗り製品である。1634 は棒状の部材である。全ての端面は面取りをおこない、丸味を帯びる。下面は 3 箇所の木釘と、1 箇所の補修痕がみられ、さらに漆を塗り他の部材と接合したものと見られる。

1635 は漆製品の部材である。扇形の板材全体に黒漆を塗布し、花を両面に描く。花が描かれた部分は銀色で何らかの箔が張られていたと考えられる。左縁に 2 箇所の穿孔があるが漆塗り面からあけられ、後補である。

1636 は六角形の棒状木製品に、竹製漆塗りの鞘が被さる。本体は白木である。鞘は厚さ 0.4 cm と薄く、外面は円柱状を呈し、内面は本体に合わせ六角形である。鞘と本体はほぼ隙間なく作られており、精巧なつくりである。

1637 は漆塗りの部材である。上部は断ち切られ欠損する。寸法は幅 7.5 cm、厚さ 4.0 cm で厚みがあり、周縁は全て面取りされる。表面と側面は艶のある黒漆が塗られ、裏面はむらのある下地かと思われ、他面とは異なる塗り方がされる。裏面は上半部が左右両端から 0.5 cm 幅のみ漆が塗られ、それ以外は塗布されていないことから、他の部材が接合されていたものと考えられる。その部材を取り除くためにこの部分を、2 次的にコの字形に切り取っているとも考えられる。各面には細かい擦過痕が見られる。

1638・1639 は漆製品からの転用品と見られる用途不明品である。2 点は長さ・幅・厚さ共にほぼ同じで、上部中央に 1 箇所の穿孔をもつ。1638 は穿孔部分の両端に抉りを入れる。細かい擦過痕が残る。1639 は元来の漆製品部材としては右側面が上面であったようで周縁は面取りがされ、対する左側面は他の部材と接合されたのか漆が塗られていない。上下は断ち落とされる。

1641 は板材の上面を鋸歯状に加工する。左右端は炭化により欠損する。1642 は断面形が方形の棒状

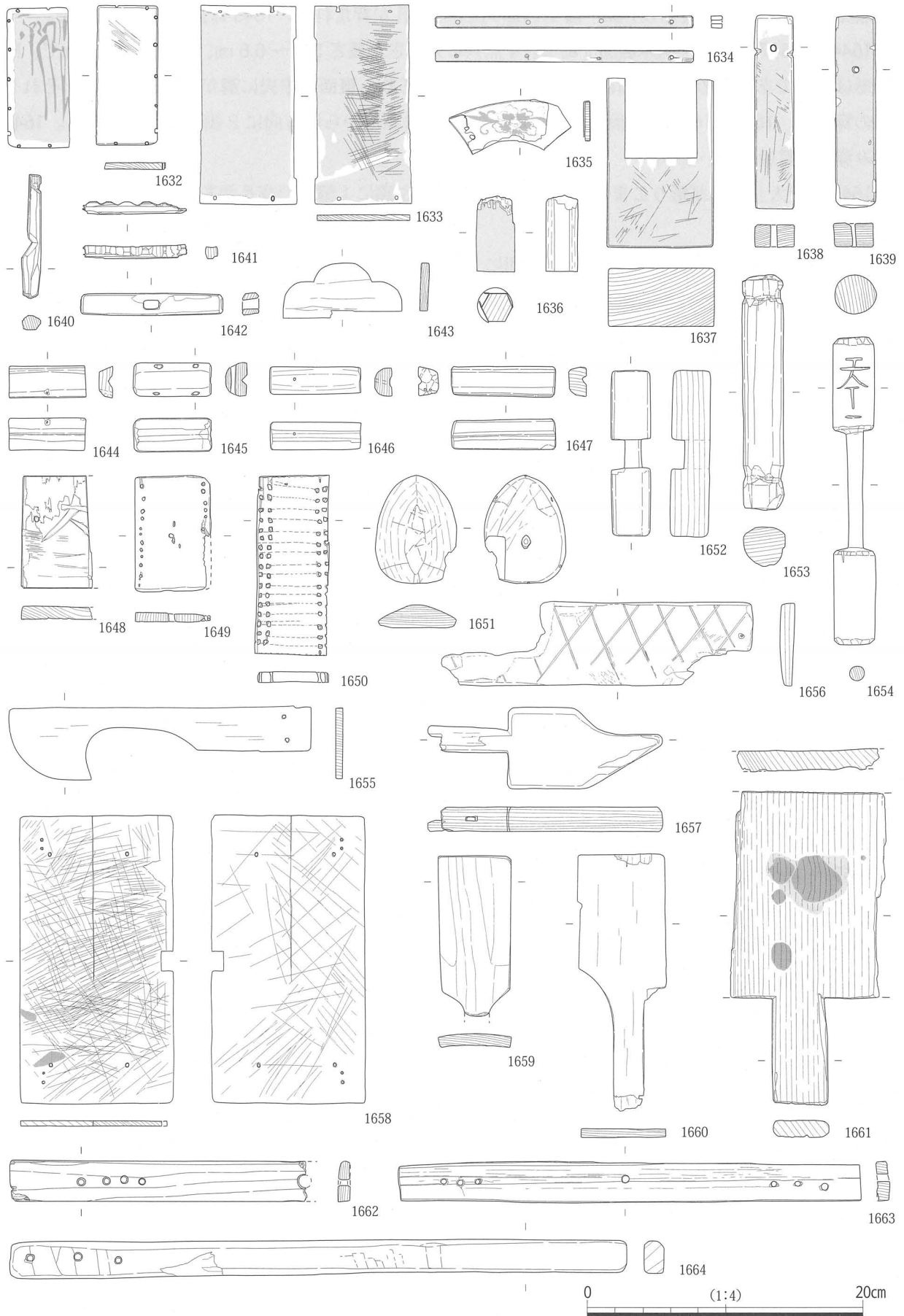


図 179 堀 83 出土木製品 (14)

木製品である。中央に長さ 0.7 cm、幅 1.1 cmの長方形の孔が穿たれる。1643 は雲形の板材である。

1644 ~ 1647 は用途不明木製品である。4 点共に大きさが長さ 5.6 ~ 6.6 cm、幅 2.0 ~ 2.4 cmで、断面形は台形である。形状は表面に 1 ~ 2 箇所穿孔があり、裏面は中央に溝が掘り込まれる。それぞれの穿孔は、1644・1646 が表面から下方向へ、1645 は側面から横方向に 2 箇所に開けられる。1647 のみ穿孔が貫通していない。

1648 は「大」の字が彫りこまれた板片である。字の左脇に 1 箇所の穿孔がある。下部に細かい擦過痕が残る。

1649・1650 は左右両端に 1 列または 2 列に十数箇所の小孔が穿たれた板材である。1649 は中央にも 2 箇所の穿孔が見られる。1650 は左右の孔を穿つ位置印のため横線が引かれ、左右各 2 列で 12 段、右は更に上下に 1 箇所ずつ孔を開ける。それぞれの穿孔の形は不揃いで全体としての列も揃っていない。1651 は長さ 7.8 cm、幅 5.8 cmの卵形の用途不明品である。意図したのか年輪が外形と同心円状になり意匠のようである。上面は平坦に削り周縁へ斜めに削り、全体に滑らかに仕上げる。裏面はほぼ平坦で中央に穿孔が見られるが貫通していない。表面左下に 1 箇所、側面は上下先端に各 1 箇所、左に 2 箇所の木釘が見られる。

1652 は中央部を細く切り込む木製品である。断面形は方形で、上下端面は摩滅する。1653 は上下に有頭状になる。全体に粗い削りである。上下面は四角形に浅く削りこまれる。1654 は一木作りの棒状木製品である。中央部を細くし、断面形は正円に近く整える。上下端は細かい削りにより面取りが施され、上部には「天下一」の文字が彫りこまれる。

1655 は右下部が欠損し全体の形状が不明である。中央は長楕円形に切り抜かれる。右端に 2 箇所の穿孔がある。1656 は板材全体に斜格子状の線刻がされ、右端中央に穿孔が見られる。裏面は欠損し不明である。

1658 は中央に方形の孔が穿たれ、側板との接合痕と見られる釘穴痕が周縁から上下が約 2.7 cm、右が約 1.7 cm内側に見られる。蒸籠の底板の可能性も考えられる。底板内外面共に柿渋様の黒色塗料を塗布する。また刃物による擦過痕が見られる。

1659 ~ 1661 は羽子板状木製品である。1660 は片面が一部炭化する。

1662 ~ 1664 は孔のある棒状の木製品である。1662・1663 は穿孔の数は違えるが、幅や厚さは同様である。長い板材の両端に 3 または 4 箇所と中央に 1 箇所に穿孔される。1664 は全体に摩滅しており、左端に 3 箇所穿孔され、中央の穿孔から先端へ薄く削られる。孔と孔の間には帯状の圧痕が認められる。

⑮ 灯明台

1665・1666 は灯明台である。1666 はほぞ穴に差し込む形である。ほぞに 2 箇所の釘穴がみられる。

⑯ 茶筌・柄杓

1667 は茶筌である。穂先は欠損する。節部を丁寧に削り、滑らかに仕上げる。

1668 ~ 1688 は柄杓である。1678 のみ組物による柄杓で他は全て曲物である。

1670・1676・1677 は身に柄が装着した状態で出土した。柄は身の右上方から斜め下に向かって差し込み、側板の両側から楔を挟みこむように打ち込み固定する。身の大きさは直径 6.8 cm から 14.75 cm のものまでであるが、8 cm・12 cm・14.5 cm前後の 3 種類に分けることができる。

側板の綴じ合せは内面に縦方向に 2 ~ 10 本のケビキを入れ、0.25 ~ 0.6 cm幅の樹皮紐を用い、ほとんどが 1.0 ~ 1.6 cm間隔に 1 列である。更に柄の差込部を補強するために口の左右を樹皮紐で「×」印

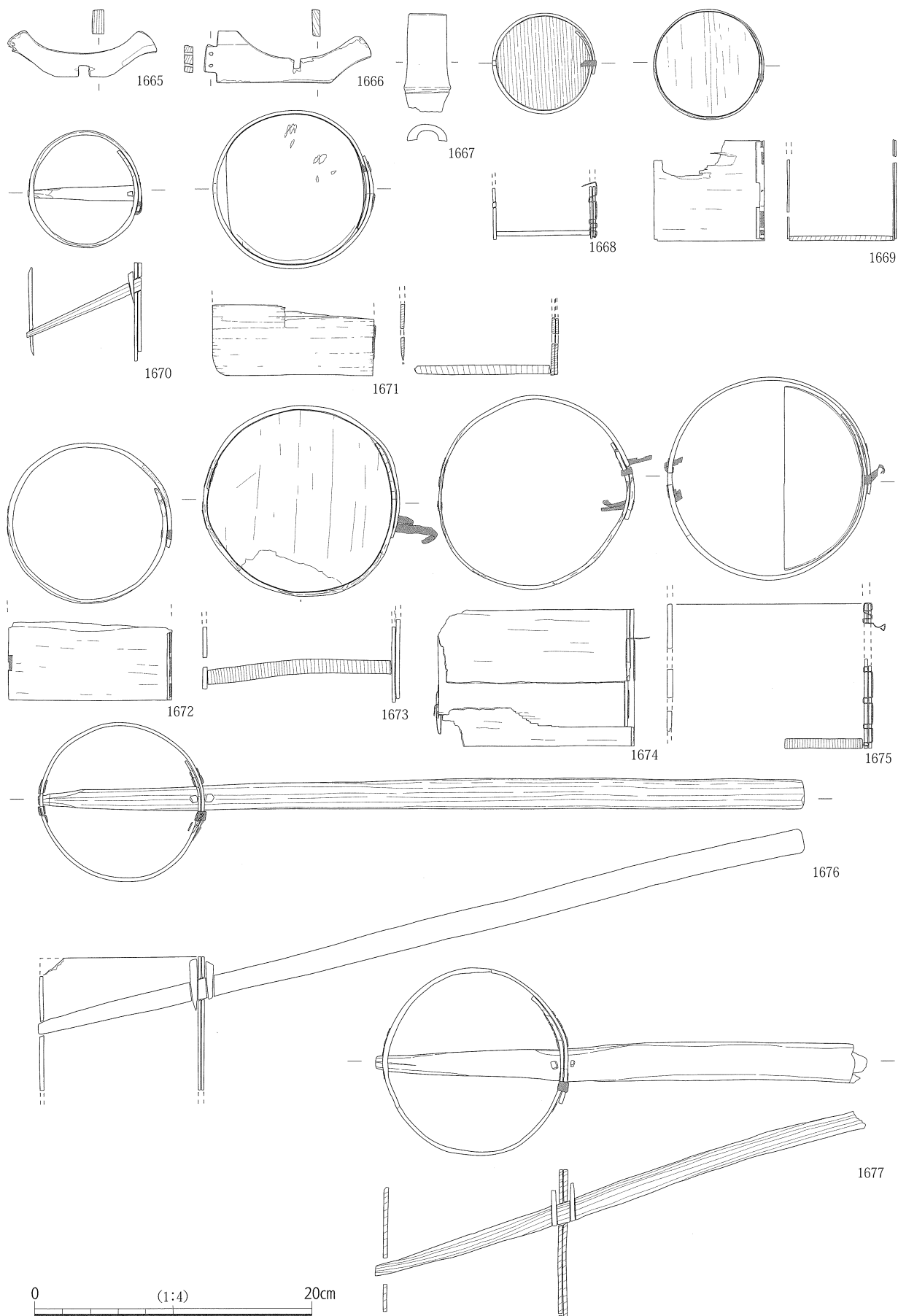


图 180 堀 83 出土木製品 (15)

等に縫い留める。1670はこの側板の綴じ合わせが他と比べ細かくされており、0.3 mm間隔に1 mm幅を主として13段である。予め綴じ合わせ箇所刻み線を引いている。柄の差込口の左右は補強のため木皮紐で右は縦3列に、左は「×」の形に縫い留める。柄先口も同じく補強のために左右に縦3列に縫い付ける。小型の1668・1669・1672は柄先口の補強がされていない。

1668・1670・1671は内外面に柿渋様の黒色塗料を塗布する。1672は底板に型取りする際の刻線が一部残存する。

側板と底板の接合は、1673・1677は4～6箇所の木釘を打ち込む。その他は木釘痕が見られない。底板は柄杓の身から外れて欠損しているものが多く、残存したのは1668・1669・1672・1673のみであった。残存したものが少ないのは底板を木釘等で接合せず、嵌め込みであったためと考えられる。1680～1682の底板も側面に木釘痕が見られないことから嵌め込みであったと考えられる。1679は側面に3箇所の側板を接合する木釘痕が見られる。

1683～1688は柄である。柄先を細く削り、楔を打ち込む孔を穿つ。孔の位置から推定される径は1684が5.5 cm前後、1686は12 cm前後、1687・1688は14 cm前後である。1685は柄杓の身が付け替えられており、推定される径は8.2 cmと11.2 cm前後である。1685は柿渋様の黒色塗料が塗布される。

1678は組物の柄杓である。平面形は正方形、側面形は逆台形で箱釣瓶と同形である。組方も箱釣瓶と同様で、左右の側板に決りを入れ組み合わせる。柄差込口側面は3箇所、柄先口側面は5箇所を鉄釘で留める。側板と底板の接合は底板縁の上に側板を載せ、一辺に2箇所ずつ鉄釘で留める。そのうち二辺は補修のため鉄釘が更に1～2本打ち込まれる。柄は差込口の大きさに合わせるため、厚さ0.05～0.3 cmの楔を打ち込み隙間をなくし、更に身の内側に鉄釘を側板と挟み込むように打ち込む。

⑰ 曲物容器

1689～1692は曲物容器である。直径は25.0～31.0 cmである。1689は1枚の側板を二重にしたもので、外側のみ残存する。その側板の綴じは2列で9段以上である。底板は2枚の板材を接ぎ合せ、内外面に擦過痕が見られる。

1691・1692は側板を一重で綴じたものを2枚重ね合わせたものである。1691は外側板を幅約2 mmの細い樹皮紐で細かく16段以上綴じる。内側板は欠損しており、2箇所で綴じ穴が確認できたのみで不明である。そして内外の側板間に下部のみ高さ1.6 cmの箍を挟み込み、二重の側板を外側板綴じ位置に木釘で留め合わせる。内外面に柿渋様の黒色塗料を塗布する。側板と底板は7箇所の木釘で接合される。1692の側板の綴じ方は外側板が幅3 mmの綴じ皮を0.2 cm間隔で32段、下部の3段は0.7 cm間隔でかなり細かくし、綴じ終わりは二重にする。内側板は2 cmで8段に綴じ、外側板の細かい綴じ方に対してかなり粗くおこない、内外側板を鉄釘で留め合わせる。内外側板の間の綴じ部の周りのみ厚みを調整するために箍を挟み込み、さらに楔を上部から1箇所打ち込む。内側板の合わせ部分は漆状の黒色塗料により接着する。底板と側板の接合は7箇所に木釘を打ち込み、さらに漆を塗布する。

1690は脚付きの曲物容器である。側板は内側に縦方向のケビキをし、幅1.0 cmの幅広い樹皮紐で3段に綴じる。そして下部に箍をはめる。側板外面に約1.5 cm間隔で縦方向の圧痕が見られ、これは下部が板材に食い込みかなり強く締められたものがあったと考えられる。側板と底板は7箇所の木釘で接合する。脚部は中央から放射状に三脚で、それぞれの脚部は底部内面から2箇所の鉄釘で接合される。釘は長さ3.0 cmである。脚部同士は中央の穿孔に棒を通し固定する。

1693～1695は底板である。1693は3箇所に綴じ皮が見られる。この綴じ皮が縁辺に対し平行に通

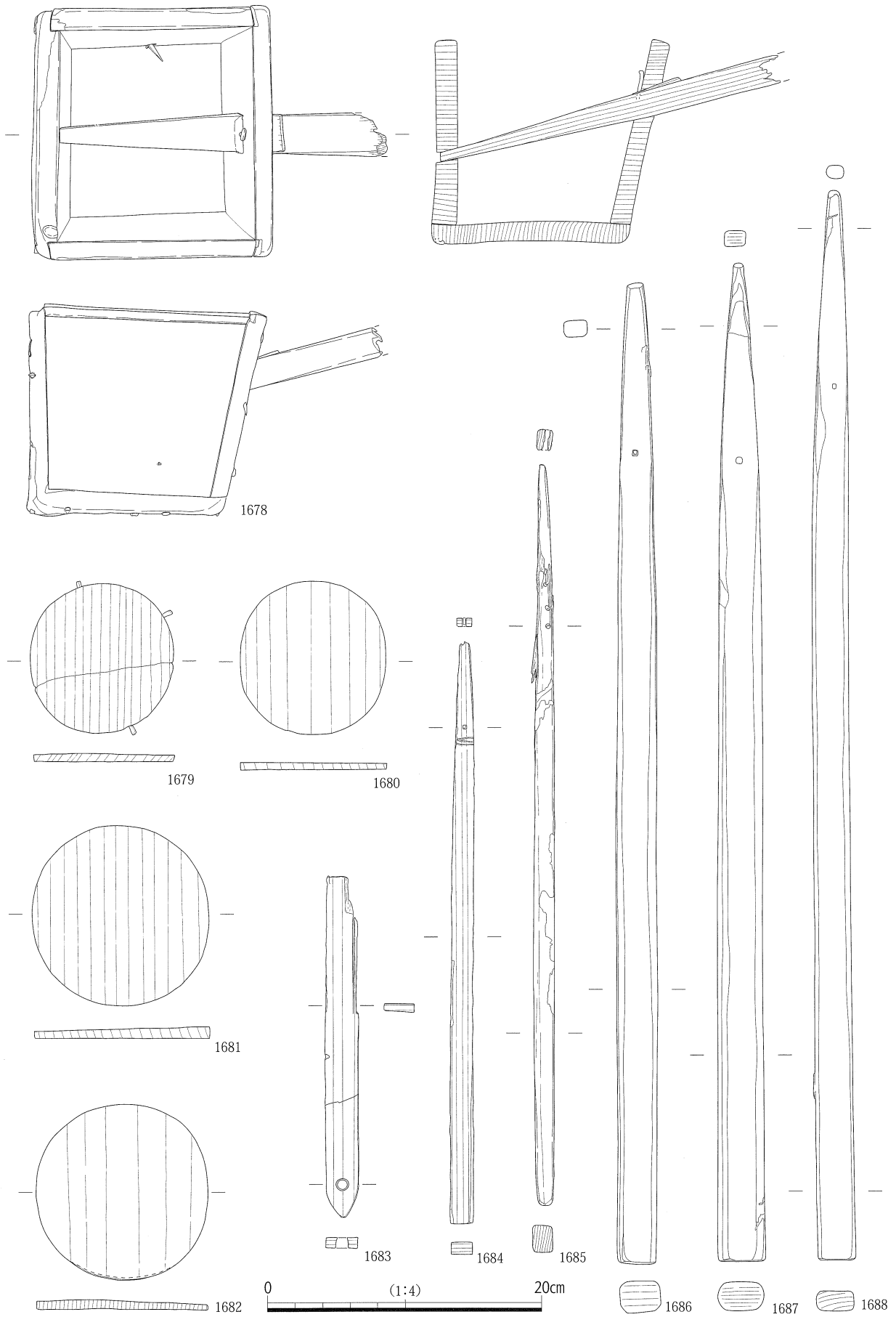
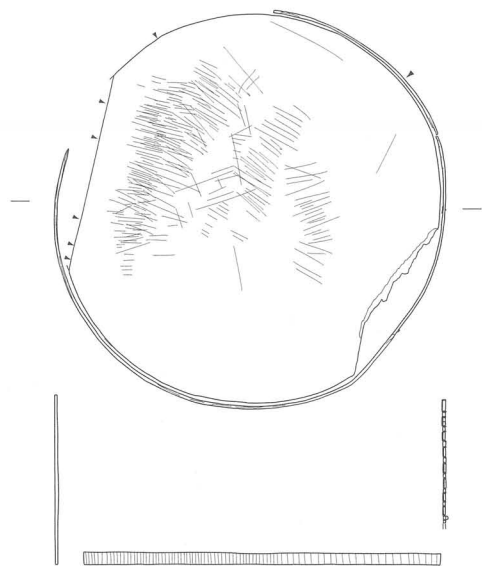
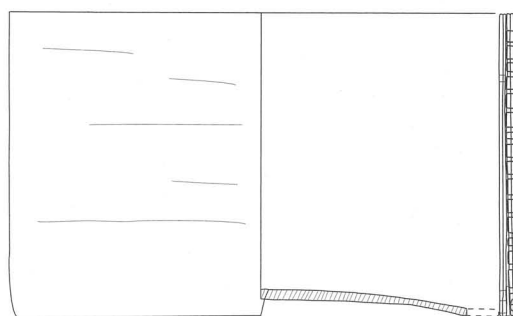
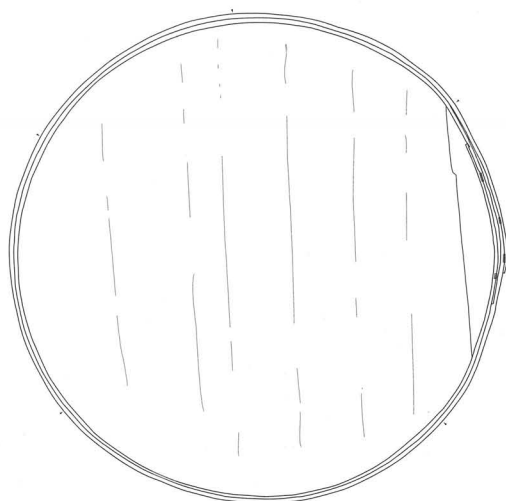


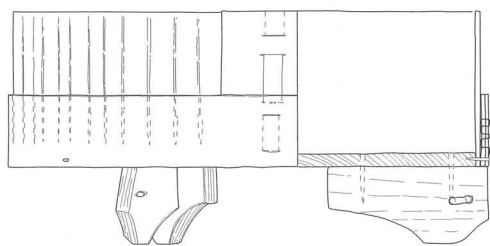
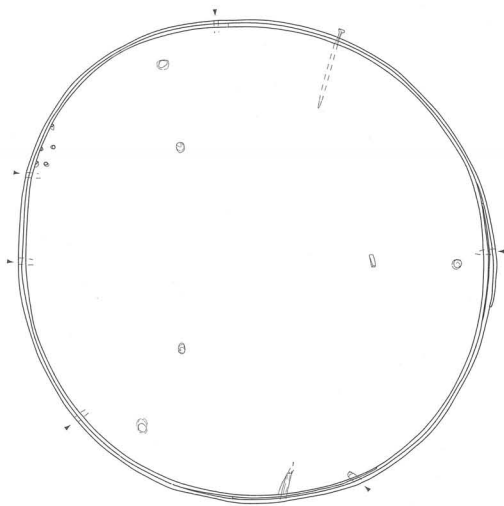
図 181 堀 83 出土木製品 (16)



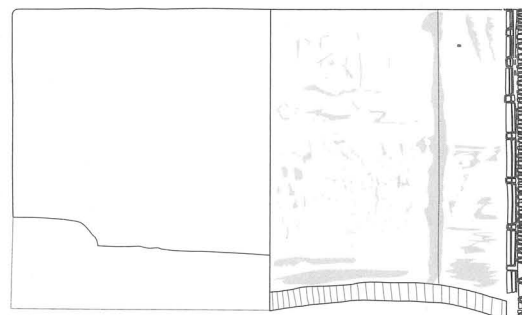
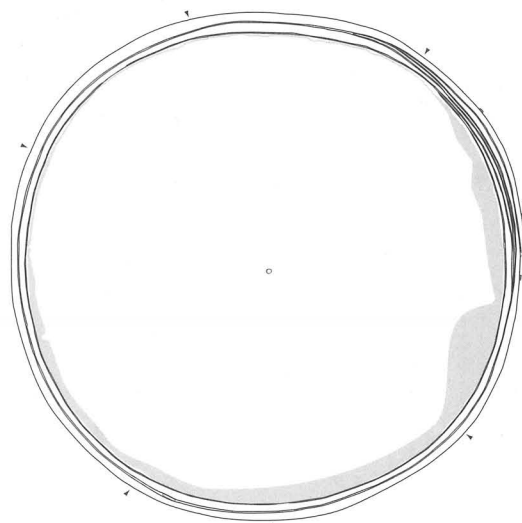
1689



1691



1690



1692

0 (1:4) 20cm

图 182 堀 83 出土木製品 (17)

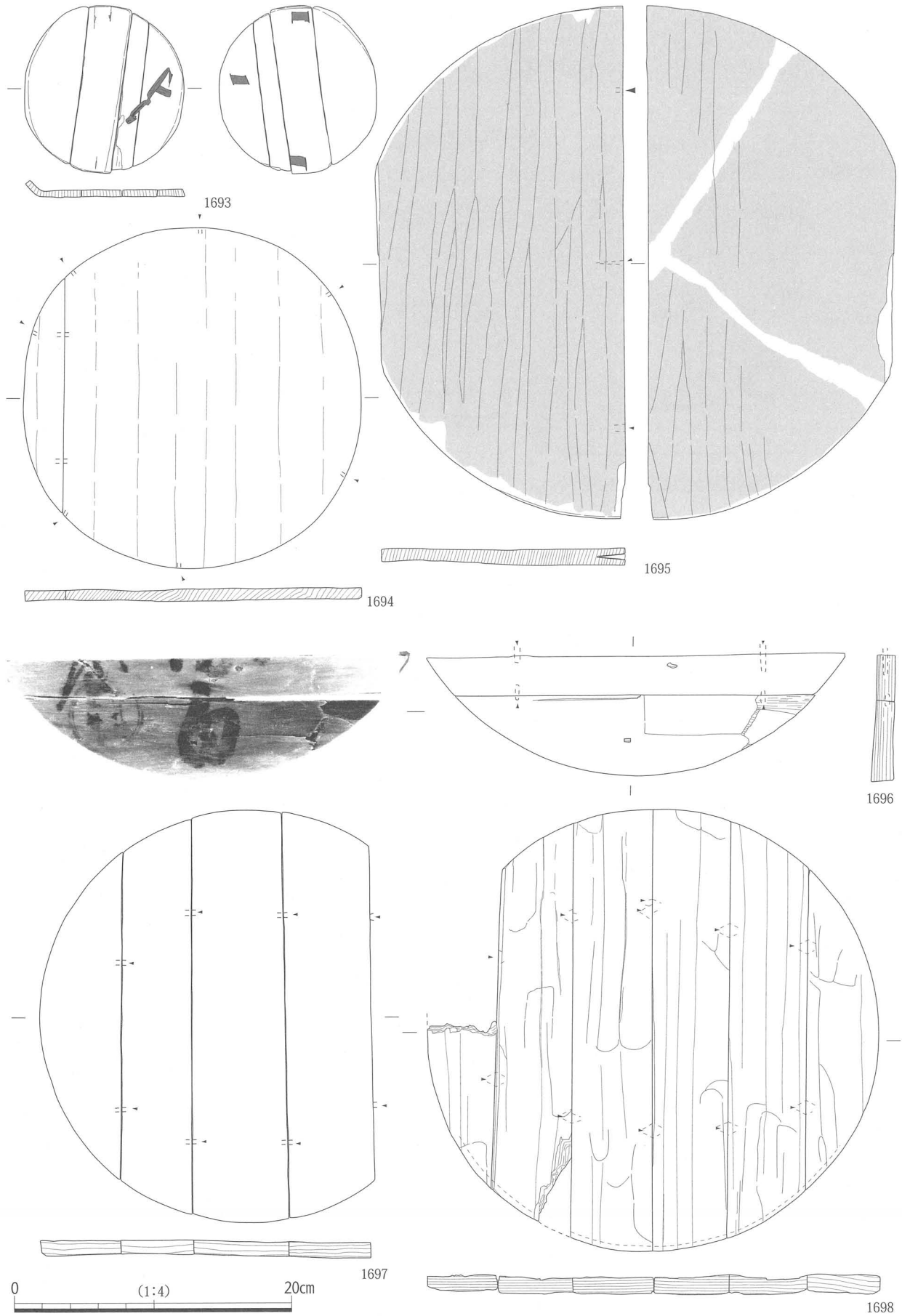


図 183 堀 83 出土木製品 (18)

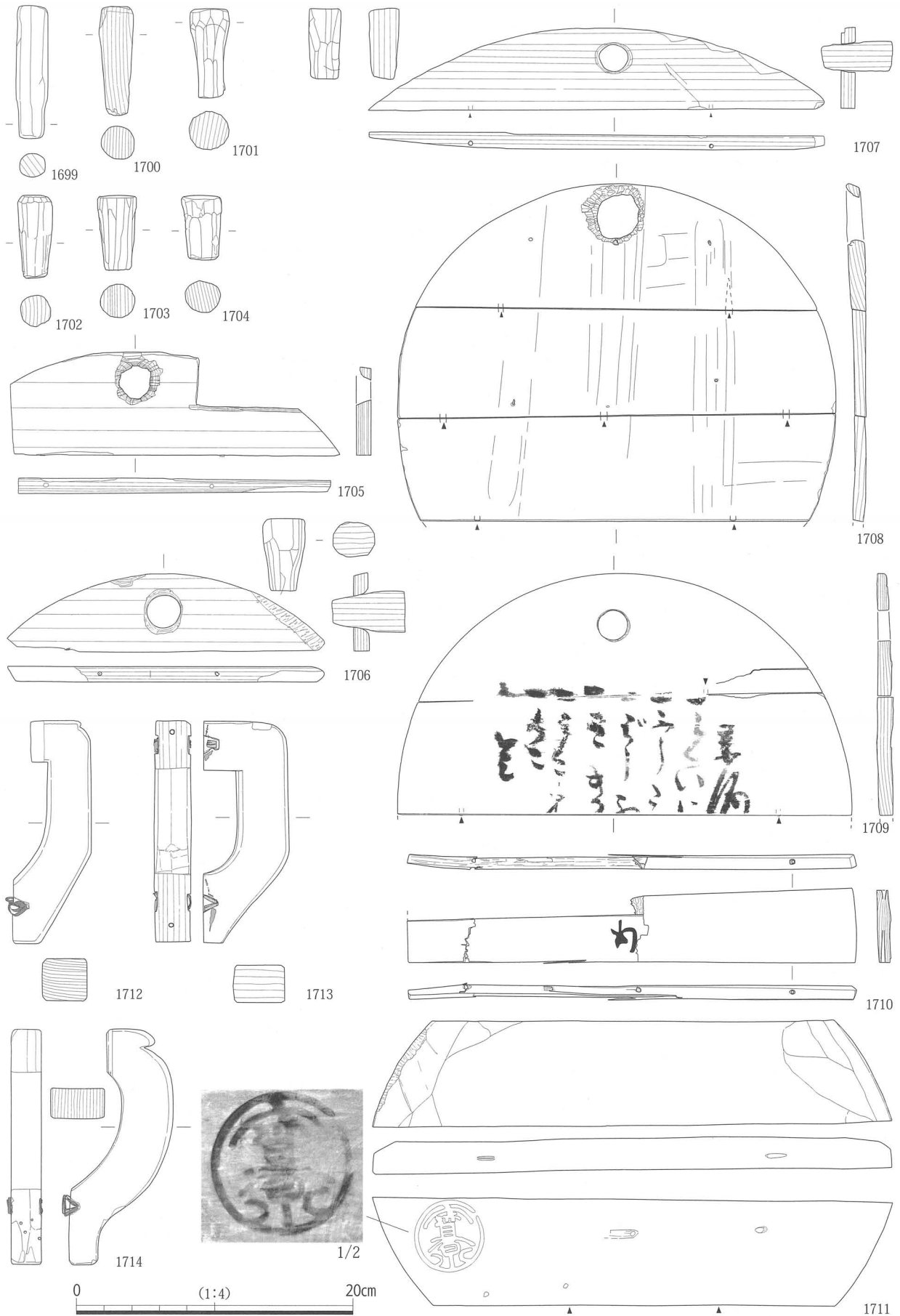


图 184 堀 83 出土木製品 (19)

されており、側板との接合方向とは異なることから蓋等の他用途も考えられる。

1694 は 2 枚の板材を 2 箇所埋釘で接ぎ合わせる。側板との接合は 7 箇所埋釘による。

1695 は 2 枚以上の板材を接ぎ合わせた黒漆塗の底板である。内外面共に削り調整痕が明瞭に残る。漆塗りの状態が内面と外面で異なり、内面に比べ外面は漆に艶がなく塗り方も雑である。この外面は中心から放射状に漆が塗られていない箇所が見られ、他の部材が接合されていた可能性も考えられるが、木釘等の接合痕は見られない。また内面は漆塗りの刷毛目痕を見ると、全体を塗色した後に周縁部を内側から外側に向かい重ね塗りされる。側面に漆は塗布されていないが、木釘等の接合痕は見られない。

⑱ 桶・樽

1696～1715 は桶・樽である。1699～1704 は樽の蓋栓である。栓は全体に削り調整を施し、下半部を細く削り込む。長さは 4.7～9.7 cm でそれぞれ異なり、最大径は 2.4～2.9 cm である。この最大径は 1705～1709 の蓋の差込孔とほぼ同径である。先端部は直径 1.8～2.3 cm でほぼ同径である。

1696・1705～1711 は樽の蓋である。1696・1705～1709 は直径 30～36 cm であるが 1707 は直径 48 cm でかなり大型の樽である。いずれも 3 枚以上の板を 2～3 箇所埋釘し接ぎ合わせたものである。1708 には埋釘の位置を合わせる線刻が残存する。上部中央に直径 2.4～2.8 cm の木栓差込孔が穿たれ、木栓を外れにくくするために、漏斗状である。1706・1707 は木栓が装着した状態で出土した 1699～1704 の木栓と同じく下半部を細く削り込み、差込孔と大きさを合せている。1706・1710 は外面や内面周縁を面取りする。1711 は表面に 4 箇所埋釘痕が残存することや他の蓋と比べて厚みがあることから転用品の可能性も考えられる。1696・1709・1710 は外面に墨書がされる。1696 は 2 行で中央下に「白」、左脇は「屋」とありその下に判読できないが焼印が押される。中央が物の名称で左が屋号であろうか。1709 は全体を判読することはできなかったが、右から 1 行目に大きく「□酒」とあり、3 行目が「ふしみ」とあり最後に以上と書かれる。樽の中身は酒であったのであろうか。1711 は外面に「寶泉」の焼印が押される。屋号であろうか。1706・1708 は木栓差込孔に、1711 は内面周縁に齧歯類に齧られた痕跡が見られる。

1712～1714 は結物の樽等の把手である。いずれも周縁は面取りし、上下 2 箇所に樹皮紐で二重の輪を表裏面そ

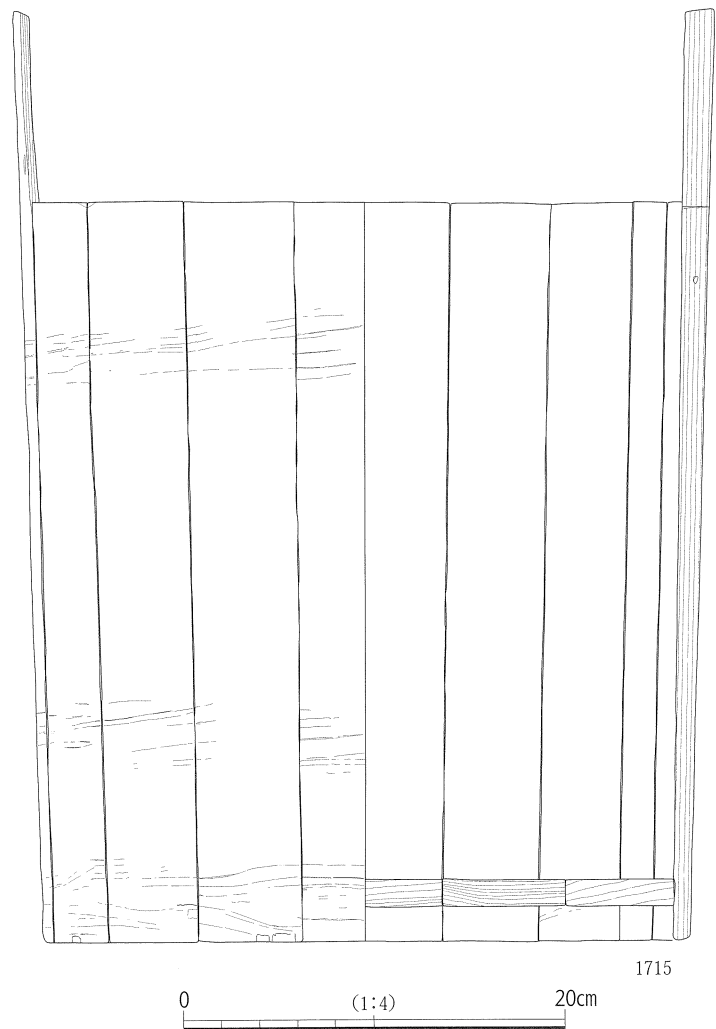


図 185 堀 83 出土木製品 (20)

れぞれに通す。本体との接合面には木釘痕が見られる。この二重の輪に板材を通し木釘で本体と接合したものと考えられるが方法は不明である。1713は全体に柿渋様の黒色塗料を塗布する。

1697・1698は底板である。直径約30～32cmである。どちらも6枚の板材を各2箇所の埋釘で接ぎ合わせる。底板と樽の蓋の違いは蓋の埋釘が長さ2mm程で断面形が正方形に近いものが多いが、底板は8mmほどの偏平なものを用いる傾向がある。

1715は桶である。大きさは直径約34～37cm、高さ49cmで形状は下部から上部へとやや開く。側板外面に上中下の3箇所に箍で結び止めた圧痕が残存する。側板は20枚で結われ、各材は底板の円周に沿うようにやや曲線をもち、上部から下部へと厚みが薄く削られる。底板は6枚の板材を各3箇所の埋釘で接ぎ合わされる。側板と底板の接合は嵌め込みで、側板下端より約2cmの上げ底になる。

⑨刷毛・ヘラ・漆容器

1716～1726は刷毛である。1716は筆状の刷毛である。柄は全体を多面体に削り、中央に挟り込みを入れ、下端は切り込みを入れ折る。先端は細く削り、これを芯のようにして周りに毛を巻きつけて用

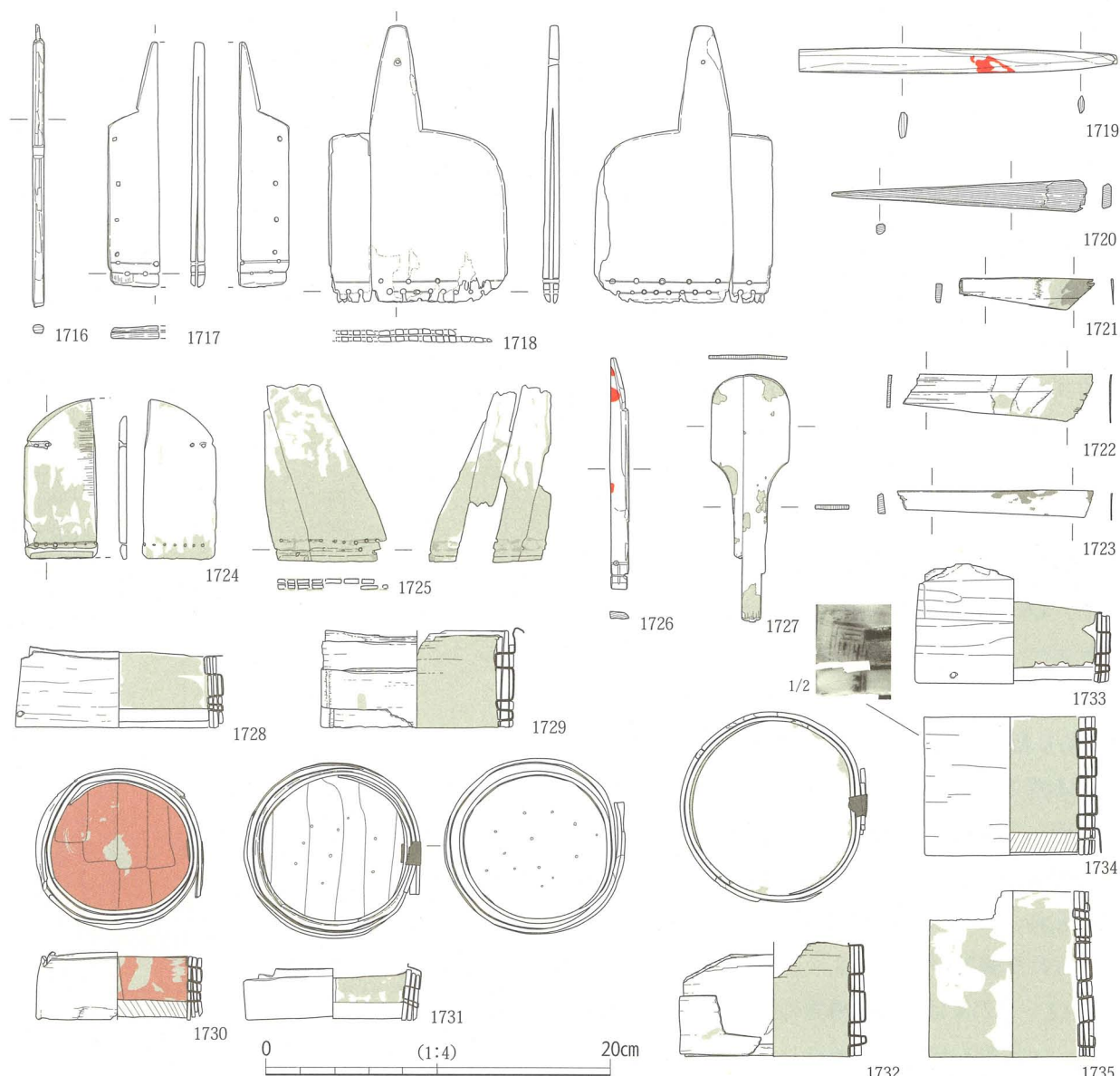


図 186 堀 83 出土木製品 (21)

いたと考えられる。

1717・1718・1724～1726は薄い板材を刷毛先から割れ目を入れて毛を挟む平刷毛である。形状は先端部に毛を固定するための糸を締める横方向の1～2本の溝を彫り、それぞれの溝中の小穴が互い違いになるように開けられる。1717は左端に4箇所の鉄釘が打たれた孔がみられる。1718は柄の先端に紐を通すための穿孔がされる。

1719～1723はへらである。1720以外は漆が付着する。1719はへら中程に朱漆が付着する。1720～1723は柄からへら先に幅が広がり、直線的なへらである。全て柄からへら先へ厚みを薄く削る。1721～1723はへら先に漆が多く付着する。

平刷毛のうち1724～1726は漆刷毛である。1724・1725は刷毛先になるほど漆が厚く付着し、とくに1725は小穴を覆い隠すほどである。1726は刷毛先に漆が付着していないが、柄先に朱漆が点々と残る。1724は先端部に1本の溝と小穴を開け、さらに肩部左端に2箇所の小穴が開けられる。

1727はしゃもじ形のへらで、厚さは3mm程とかなり薄いものである。へら先はやや摩滅し端面にも茶色の漆が付着する。柄下端にも漆が付着しており、この柄先も用いていたものと見られる。

1728～1735は曲物の漆容器である。いずれも内面に漆が付着する。容器は大きさが直径8.1～12cmまで見られ、高さは欠損のため不明なものが多いが、残存する1734は8.1cmである。側板は厚みが1cm程で、かなり厚みがある。厚さ0.1～0.4cmの板を2重に巻き、さらに底面付近は板間に薄板を3分の1周程挟みこむ。これを樹皮紐で1列に綴じ合せる。側板と底板の接合は1728・1733が4～6箇所の木釘を打ち込み、その他は木釘等の痕跡が見られないことから嵌め込みと考えられる。底板はやや上げ底になる。1729は側板内面に3分の1周程ケビキを入れ巻き付け、綴じは1.5cm幅の樹皮紐で下端から0.5cm・2.8cm間隔である。1730は朱漆の容器である。下地には黒漆を塗布する。1731は底板にいくつもの小孔があげられる。側板下端は面取りされる。漆は底部外面にも点々と付着する。1734は綴じの部分に字は判別できなかったが焼印が押されており、枡であったものを漆容器として再利用したものであろうか。

⑩ 工具等

1736・1737は糸巻きの横木である。1736は中央が相欠き仕口のかみあわせ部分で、軸孔は1.2cmである。中央から両端へ弧状に削り出し、杵木との接合のため切り込みを入れる。

1738は台付き砥石である。上面は粗砥、右側面は中砥の2種類が嵌め込まれる。台は砥石を嵌め込むために、削り貫かれており、角などの細部は砥石の形状に合わせて削り込む。台持ち手は滑らかに仕上げられており、丁寧な作りである。持ち手左側面に4箇所、右側面に2箇所の小孔があげられ、いずれも貫通していない。砥石の背面に当たる2面は使用による摩滅が激しい。

1743・1744は洗い張りに用いる伸子である。完形品357本、破損品228本が出土し、そのうち2点を図示した。長さ約32cm、幅0.2～0.3cmで、断面形は長方形である。いずれもゆるやかに彎曲する。1744は片端に二股に切り込みをいれる。

1739～1742・1746～1748は工具等の部材と思われる不明品である。1739～1741は長さが17.7cm、幅1.5cm前後と同寸法で、造作も全て角棒の両端を斜めに削り込み突起を作りだすものである。表面は周縁を面取りし丸味を帯び、裏面は平坦にする。1742は先端を扁平に削りだした棒状のものである。両側面は曲面に滑らか仕上げ、断面形は菱形である。下端は削り中央に1.2cm程の切り込みを入れる。

1745は板材の中央にV字形に抉りをいれ、その左右に斜方向の彫り込みをいれ滑り止めのようにす

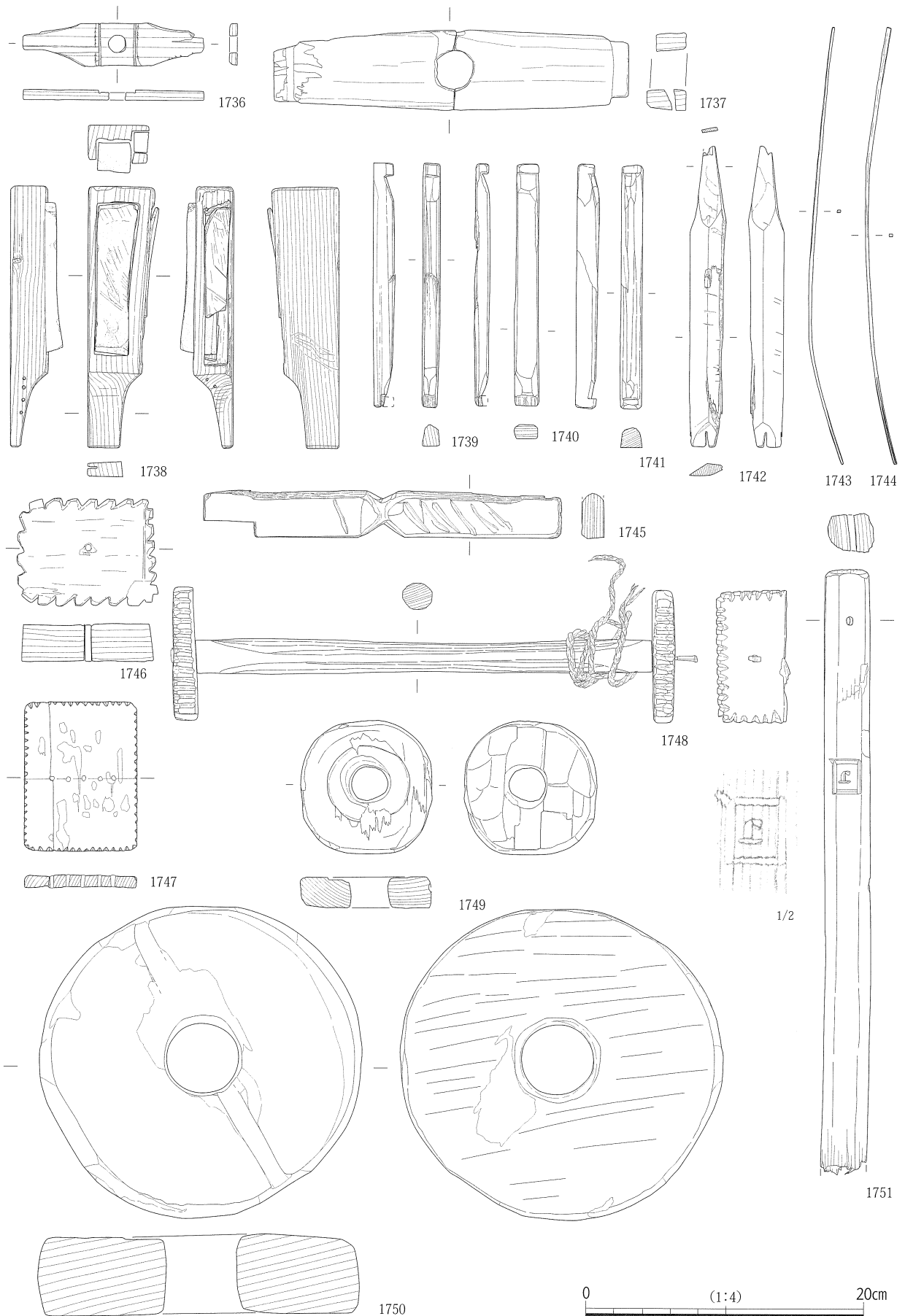


图 187 堀 83 出土木製品 (22)

る。1748は四方に刻みをいれた長方形板を棒状の軸両端に鉄釘でとめたものである。軸部分に縄が巻き付く。軸は中央部分を丁寧に削り、板材の刻みはV字に入れ粗い仕上げである。1746はこの長方形部分である。大きさも1748とほぼ同じである。中央には木釘が打ち込まれる。1747は1746と異なり周囲の刻みは表面のみで細かく入れられる。中央横1列に5箇所の木釘が打たれ、木釘を穿つ目安のための線刻が残る。表面に柿渋もしくは漆様の黒色塗料が飛び散る。

1749・1750は車輪である。板を輪状に削り出したものである。1749は直径23.1cm、厚さ6.0cmの

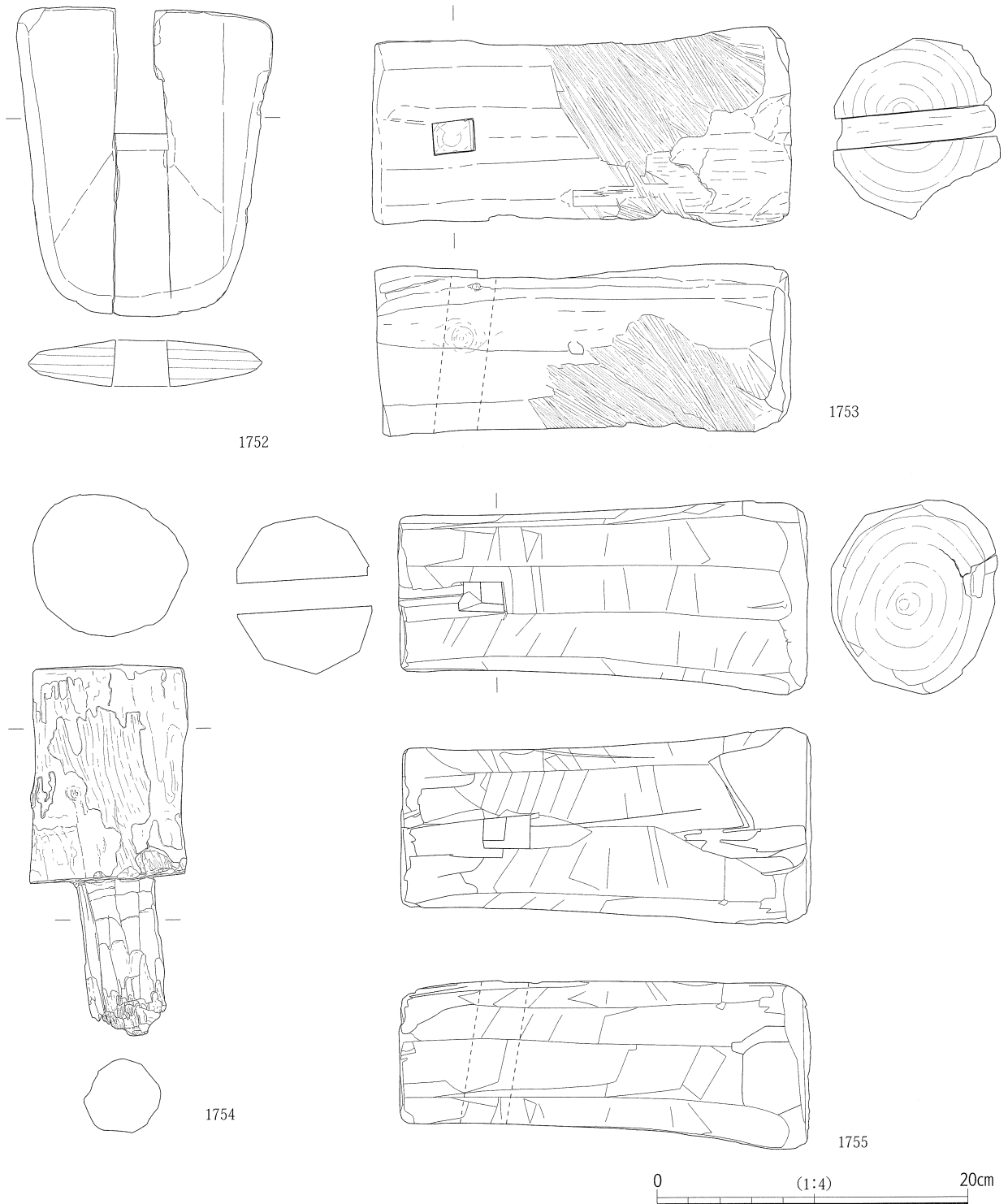


図188 堀83出土木製品(23)

小型である。表面は軸孔の周囲を1段削り込み、周縁は面取りする。側面は所々欠ける。1750は軸孔が整円で軸孔内面が摩滅する。1749・1750共に表面に中心に帯状に剥離が見られる。裏面は削り痕が明瞭に残る。

1751は柄である。欠損の為全体の長さは不明であるが、幅3.5cm、厚さ2.9cmで厚みがあり、しっかりとした作りである。先端に紐を通すための穿孔があり、その下には方形の中に「丁」の線刻がされる。

1752は鋤である。一部欠損しているが組み合わせの鋤である。中央に上部は欠損するが長方形孔をあける。この中央孔から縁に徐々に厚みを薄くし、縁は両面から斜めに削り込み刃状に整える。全体に摩滅が激しく調整は不明瞭である。

1753・1755は横杵である。頭長約27cmではほぼ同じである。頭は心持丸太材を用い、面取りを施し多面体である。柄は一側面端付近に長方形の孔を貫通させ挿入する。どちらも打面は使用により摩滅する。1753は柄の一部が孔内に残存し、長さ2cm、幅2.5cmの角材である。右小口は一部炭化し、側面は刃物で切り取られた痕跡が見られる。1755は側面の削り痕が明瞭に残り、左小口は断ち切りである。打面の摩滅が激しく周縁も潰れ、ささくれが見られる。

1754は一木作りの木槌である。心持丸太材を用い、柄は細く削り出す。柄の下半部は欠損する。身は側面に使用による敲打痕跡をとどめる。

②1 不明部材

1756～1763は用途不明角材である。長さ23.85～24.50cm、幅1.05～1.30cm、厚さ1.0cmでほぼ同寸法である。両端が鉤型の相欠け継ぎで、そこに釘孔が穿たれるものとなないものがある。

1764は黒漆塗りの角材である。長さ32.7cmのほぼ一尺で両端は軸ほぞ継ぎである。さらに長く継いだのか、天板等に接合したものと考えられる。四方角は全て面取りされ、木釘等の穿孔はみられない。ほぞ部は外れ難くするためか多面形に面取りされる。

1765～1774は用途不明の部材である。1765は等間隔に突起をもつ材である。両端は断ち切れ全体の長さは不明である。欠損により突起が残存するのは2箇所であるが、痕跡から約1.8cm間隔で5箇所であったことが判る。両端は下面から鉄釘が打ち込まれる。

1766はほぞ接ぎの角材である。ほぞの先端は面取りがされる。1767は板材の両端を直角に切り込みを入れる。その際の目安のための墨線が残る。1768・1769は円弧状の削り抜きを行う部材である。1769は表面を平滑に仕上げる。

1770は左端が凹状になる相欠け接ぎである。接ぎ部に墨で組み合う部材との合印である「×」の印がされる。

1771は表面が上端へやや細くなるよう幅広に面取りし、裏面は逆に下端へと面取りをおこなう。上部に木釘が穿たれる。表裏面に擦過痕が見られる。1772は黒漆塗りの板材である。両端は断ち切れ長さは不明で、遺存状況は不良である。表面と側面は漆塗りがされ、裏面は鋸痕が明瞭で調整がされていない。表面の黒漆上には金粉で10cm間隔に長方形を描き、その内部には絵柄は判別できないが何かを描いている。

1774は大きさが長さ63.8cm、幅1.5cmである。右端は斜めに切り落とす、削ぎ継ぎでさらに長くなるものと考えられる。ここには接合のための木釘痕が残る。上面は2.0cm間隔で、U字形に斜め上方から削り込みを10箇所し、さらに右端はもう1箇所削り込みをいれるつもりであったのか、ケビキ線が残る。全体に細かい削り調整がおこなわれ、丁寧な作りである。

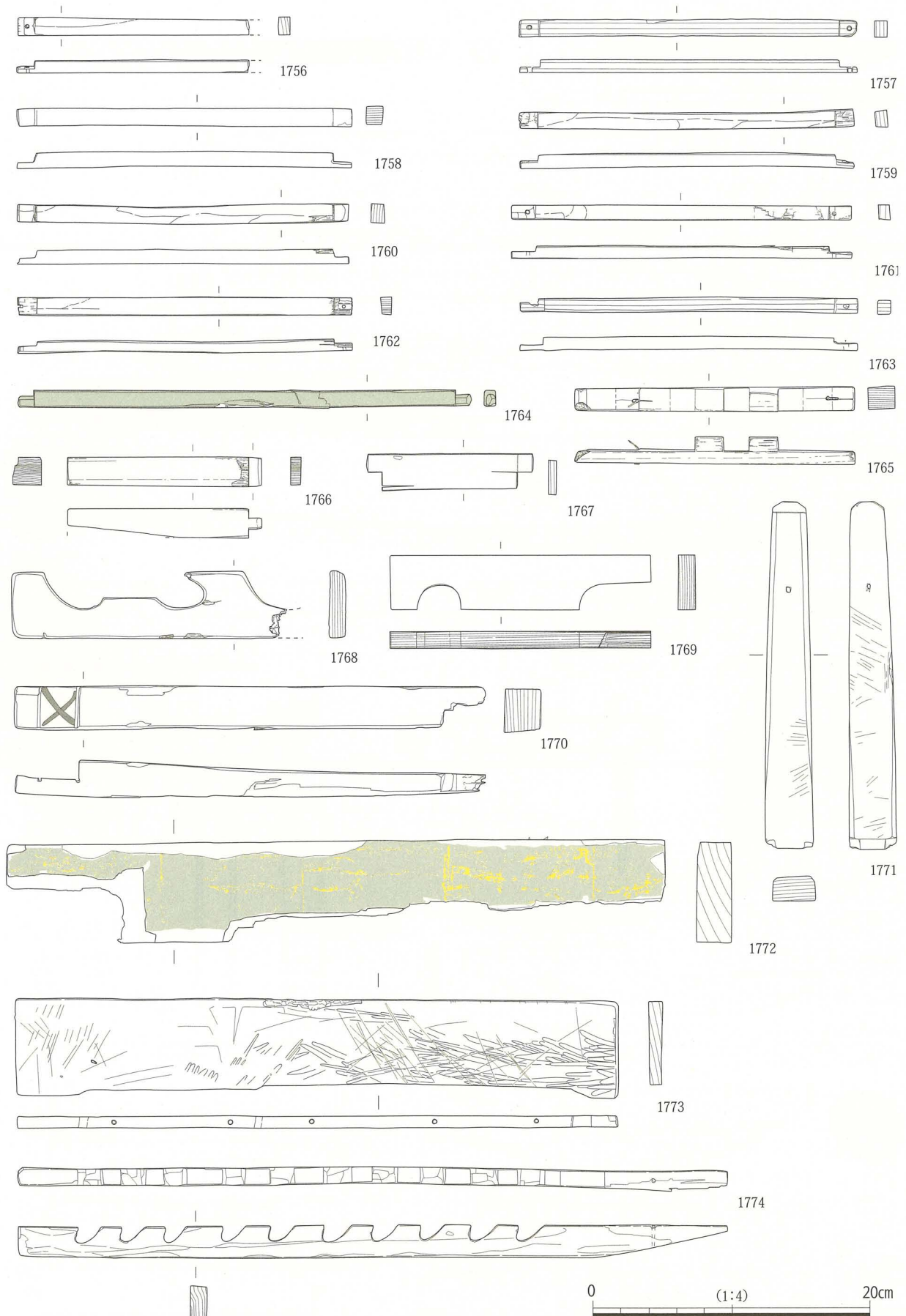


図 189 堀 83 出土木製品 (24)

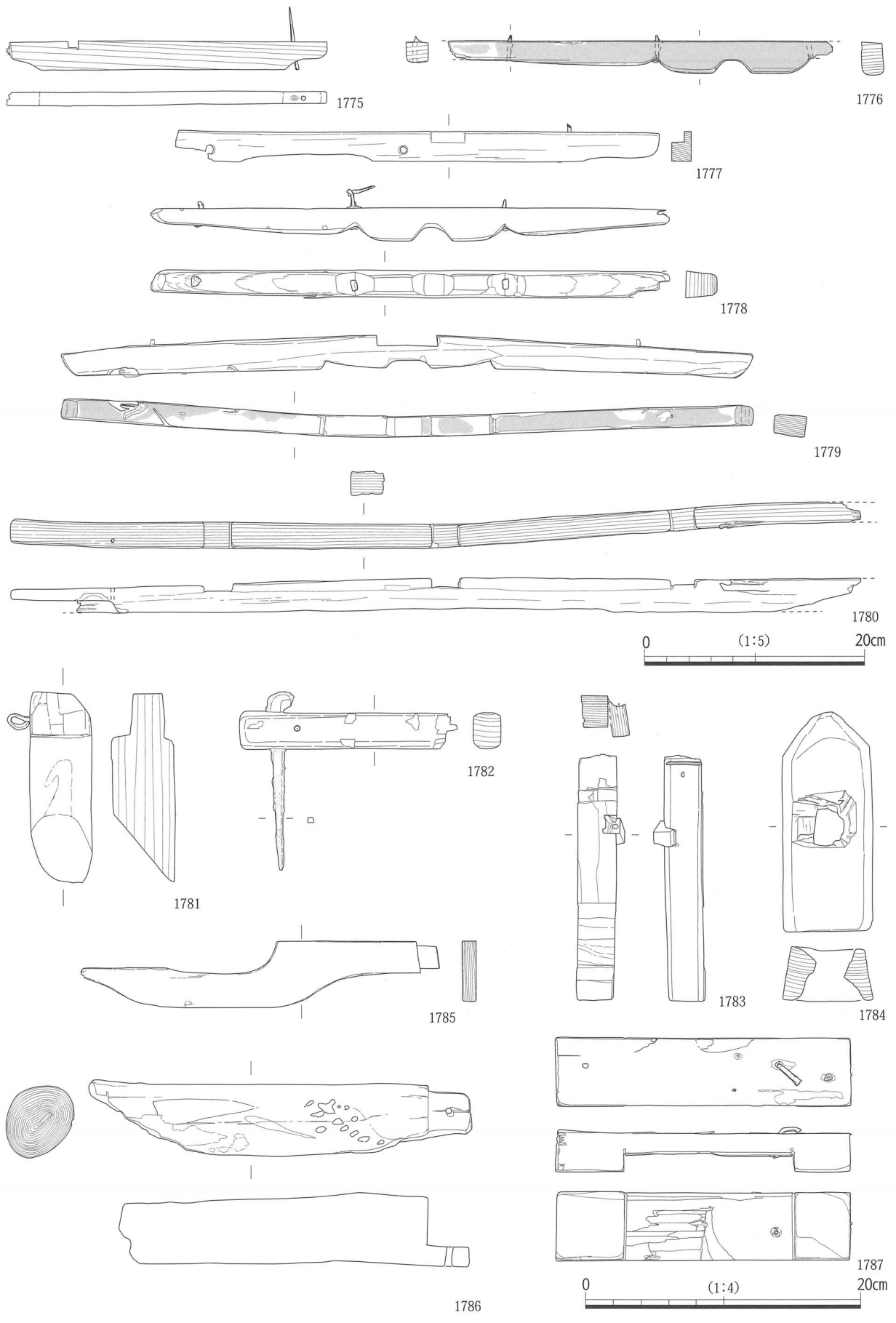


图 190 堀 83 出土木製品 (25)



1/1

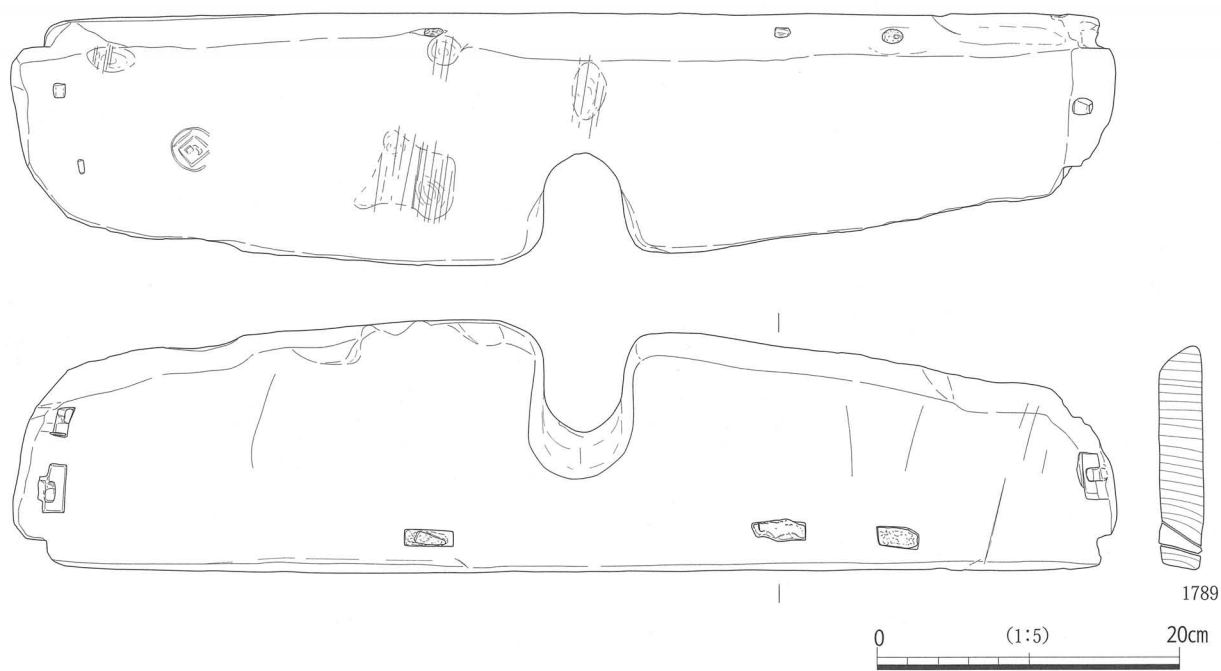
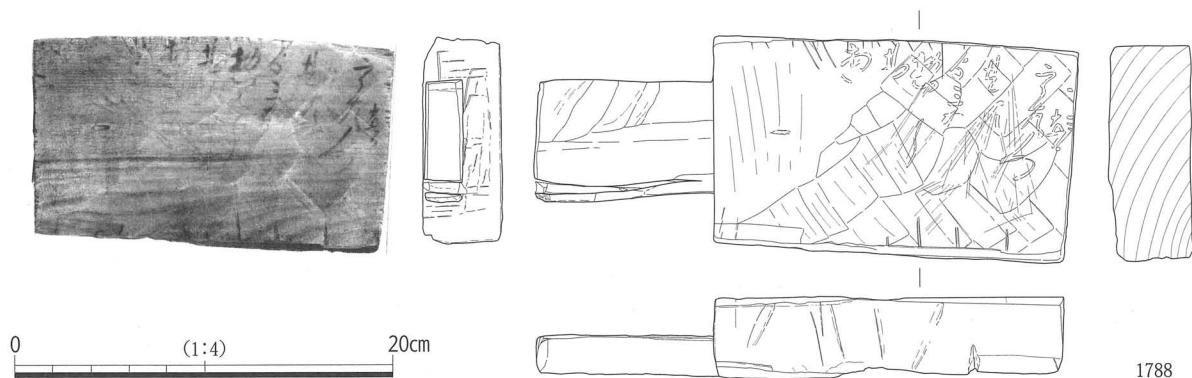


図 191 堀 83 出土木製品 (26)

1775～1780は行李の脚部である。欠損しているものが多く長さの判るのは1779で長さ62.75cmである。行李との接合面である上面は平坦なものと同箇所かに鉤形の切り込みがあるものがあり、下面は左右対称の弧状である。1776・1779は黒漆塗りである。1778は柿渋様の黒色塗料を塗布する。いずれも行李に接合するために同箇所かの鉄釘が打たれる。

1781～1787は不明部材である。1781は鉄釘を壺金のように環状にねじっている。1783は上下左右面ともに欠損しており全体の形状は不明である。下部は他の部材との接合部と見られる逆台形の切り込みがある。上部は欠損しているが痕跡から同様であったと見られる。上下の切り込み間にはほぞに板材を接ぎ鉄釘で打ち込む。1784は先端を尖らせた板材の中央に表裏面それぞれから鑿等の工具で不整形に粗くほぞ穴をいれる。1785・1786は右端がほぞ接ぎの部材である。1786は遺物集積遺構127から出土した。心持材で左端は斜めに切り落とし、接ぎ部に釘穴が穿たれる。1787は中央に直角に切り込む、相欠け接ぎの部材である。表面に1箇所は鉄釘が打ち込まれ、4箇所は釘痕が残存する。

1788は建築物の部材である。長さ28.5cm、幅11.2cm、厚さ4.4cmである。ほぞに楔が打ち込まれており、楔締めほぞ接ぎの部材である。全体に鋸痕が明瞭に残存し、とくにほぞ側の小口はほぞを切り出した加工痕が見られる。上面に墨書があり、「与三郎」等数人の名が箇条書きされる。

1789は船の部材である。長さ72.8cm、最大幅16.8cm、厚さ2.9cmでかなり厚みがある。これは舵を入れるトコと呼ばれる部材と考えられる。全体はかまぼこ形で中央が楕円に抉られ、両下端は直角に切り落とす。左右端に長方形のほぞが斜め内側に向き穿たれる。下端は3箇所に鉄釘を斜方向に穿つ。鉄釘は大型のものである。中央の抉り内面は使用により摩滅する。裏面に焼印が押される。

② 装飾具・玩具

1790～1793は傘の部材である。1790は骨と柄の一部、手元轆轤がまとまった形で出土した。出土した状態で保存処理を行ったため下半は不明である。骨は柿渋様の黒色塗料を塗布した竹製である。親骨と子骨の判別は付かなかったが、上端は厚さ0.3～0.4cmで下端が0.2cmであり下端へと細く削られる。断面形は方形である。手元轆轤と柄は木製である。轆轤は黒漆が塗られていたようだが、すでに剥げた部分が多く下地が露出する。轆轤と骨にはそれぞれの接合のため直径1mmほどの穴が開けられている。柄は黒漆塗りで下端は漆が塗布されず、先細りに削られる。これは柄の継ぎ部分にあたるため金具が装着した可能性も考えられる。上端に長さ2.4cm、幅0.4cmの抉れがあり、手元轆轤の留め金の痕跡であろうか。

1791・1792は頭轆轤である。1791は直径6.6cmで轆轤挽きである。中央の孔に柄が残存する。骨は50本である。柄は1790と同じく黒漆塗りである。柄は轆轤に挿入された部分が先端へと細くなるように、丁寧な削りをおこなう。1740は全体に圧迫のため押しつぶされた状態で出土した。復元した大きさは直径6.0cmである。轆轤挽きで中心は柄を通すための直径2.0cmの孔が開けられる。骨は46本である。1791・1792共に骨との繋ぎの穴がそれぞれに開けられる。

1793は傘の柄である。上下共に欠損しており全体の長さは不明である。黒漆の上に上端2cm下から赤漆が重ね塗りされる。全体に赤漆を塗布した際の刷毛目痕が明瞭で、縦方向に塗った後上部のみ横方向に一刷毛ぐるとさらに塗り重ねる。

1794は扇の骨である。2枚の骨が重なった状態である。下の骨は結束部までのみ残存する。1795・1796は鳥籠の枠と考えられ角材である。角材にほぼ0.5cm間隔に多数の小孔があげられる。

1797は直径1.7cmのおはじきのような小型円盤である。周縁は雑な面取りをし、上面中心に孔が開



図 192 堀 83 出土木製品 (27)

けられるが貫通しない。

1798・1799 は独楽である。1798 は砲弾形で、上面をすり鉢状に彫り窪め、渦巻き文様に年輪を磨き出す。先端に紐を巻くためと考えられる溝が1条見られる。1799 は心持材を用いた円錐状のもので、上部は突起状に削り出す。全体に粗い削りをおこない、下端は尖らず。1800 は轆轤挽きの円柱状の用途不明品である。周縁は面取りを行い、全体に滑らかで丁寧な仕上げである。中央に直径0.5 cmの孔が穿たれ、木釘が打ち込まれる。

1801 は車状木製品である。軸は角材で車輪を通す両端は丸材に整える。軸は車輪間に3箇所の木釘と、さらに車輪が外れないように脇木釘が打ち込まれる。

1802・1803 は削り抜きの船形の玩具である。1802 は船全体の形が写実的で精巧な作りである。調整の仕上げも滑らかに整え、丁寧である。舳先は削り出し、船尾は舵をつけたのか、挟りが入る。さらに船尾のトコと呼ばれる部分は別板材で作り、木釘で打ち付ける。船底中央には1箇所穿孔が見られる。帆を立てるためであろうか。上面へりに2箇所の釘穴が見られ、側面にも1箇所釘穴が見られる。1803 は1802 と比べると船の細部は作らず雑な作りである。板材を長方形に削り抜き、その際の鑿痕が明瞭に残る。中央のへりと舳先側面に釘穴痕が残る。

1804～1806 は羽子板である。1804 は上下共に欠損しており長さは不明である。1805・1806 に比べると雑な作りである。1805・1806 は左部分が欠損しているが版面は逆台形で両下端に2段の挟りをいれる。柄は中程がやや膨れ曲線である。1805 は彩色された羽子板である。表面は墨で描かれた部分は残存し、顔料は一部剥げ落ち、残存する箇所も茶色に退色する。全体の構図は横方向の帯状におおまかには3区に切っているようで、彩色は遺存状況が不良のため色は識別できないが、3色以上の異なる顔料を上部から帯状に交互に塗り分けているようである。その区画内に衣冠束帯の男性像を、その下に女性像を描く。男性像は冠を墨で、顔面は剥げ落ちているがおそらく顔料で、束帯は墨で輪郭を描く。女性像は髪を墨で、顔面と着物は墨で輪郭を描く。側面・裏面も全体に彩色され、裏面中央に鳥が描かれる。柄先端に墨書による印がされる。1806 は表面に使用痕と見られる凹みが見られる。

1807 は欠損部が多く全体の形状がつかみ難いが、やや尖頭の板材である。表面は風化のためか、摩滅する。表面に判読できないが墨書がされる。欠損しており全体の長さが不明であるが、札のようのものであろうか。

②人形

1808～1815 は人形である。1808・1809 は胴部に頭部を差し込む人形である。1808 は彩色を施された頭部である。頭髪は墨で黒に、顔面と頸部は漆であろうか赤褐色に彩色する。頭部は頂部が細かく面取りし丸味をもち、頂部から顎へと細く削り込み、面長である。顔面は目・鼻・口を表現する。目は墨でつり目に線描し、鼻先は欠損するが立体的であったと考えられる。口は墨で長楕円形を描く。口元の左右に直径0.1 cm程の小孔が穿たれる。後頭部に直径0.2 cmの孔が穿たれ、内部に棒が折れたまま残存する。顎から頸部は細かく削り込み、顔面を立体的にする。頸部は面取りし、胴体との接合のための直径0.15 cmの孔が側面から穿たれる。下端は切り込みを入れ折る。

1809 は頭部である。頭部は多角形に面取りをおこない、辺を鼻筋とし接する2面を用い顔面を表現する。各部位は頭頂部が細かく面取りし丸味を帯び、顔面は目・鼻・口を表現する。目と口は鼻の両脇と鼻下を削り直線的になり、鼻はより立体感を出す。頸部は側面に穿孔される。下半部は棒状で先端は尖る。

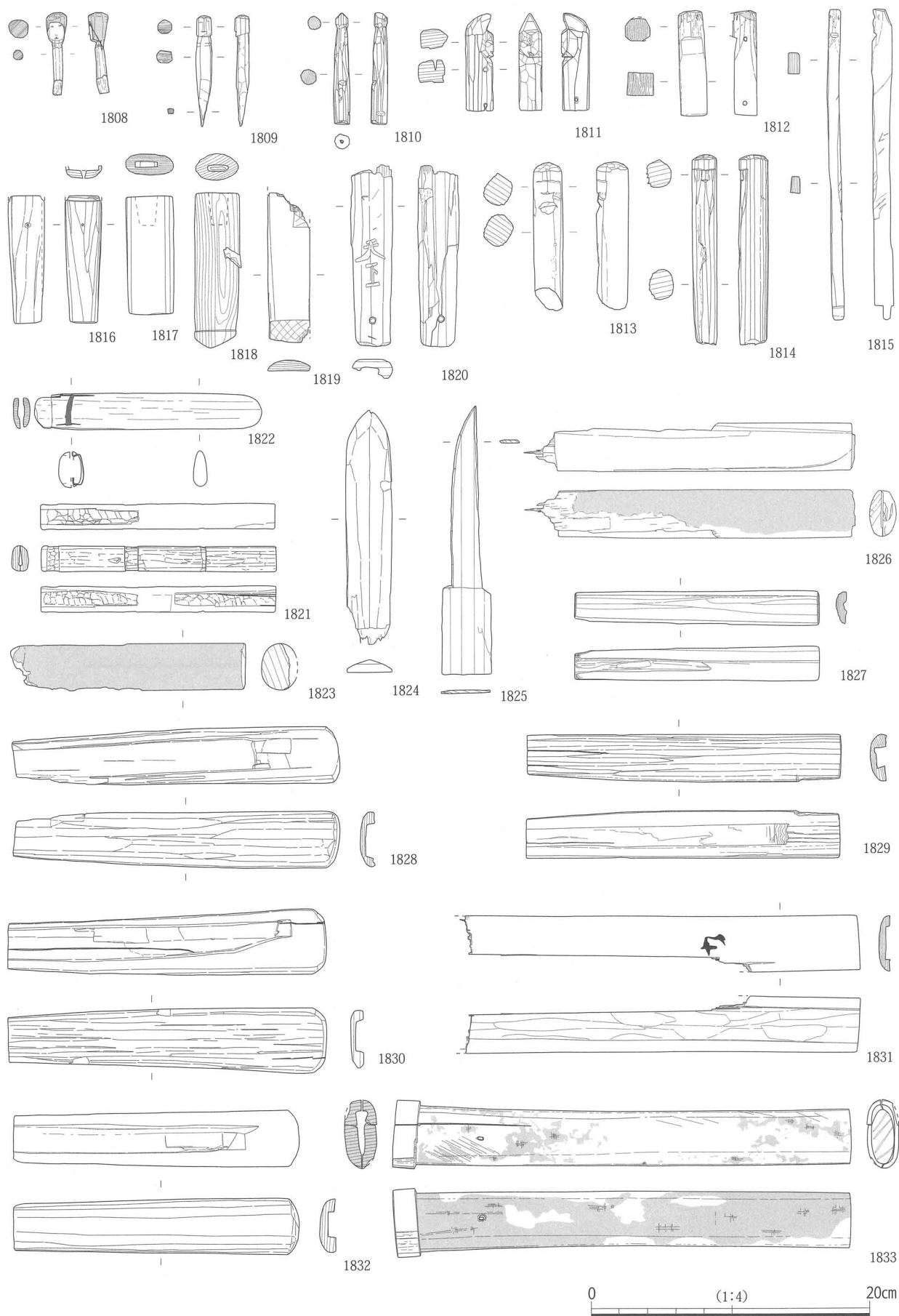


図 193 堀 83 出土木製品 (28)

1810 は頭部と体部の表現のみで目などは彫り込まれていない。全体に削りをおこない、頭頂部は面取りし圭頭である。頭部と胴部の境は細かく削り込みにより区別する。

1811 は烏帽子を被る人形である。全体に大きな面を持つように削られ角張った印象を受ける。烏帽子は墨で黒に彩色する。顔面は五角形に面取りし、鋭角に接する面を用い奥行きをだす。右目・鼻・口

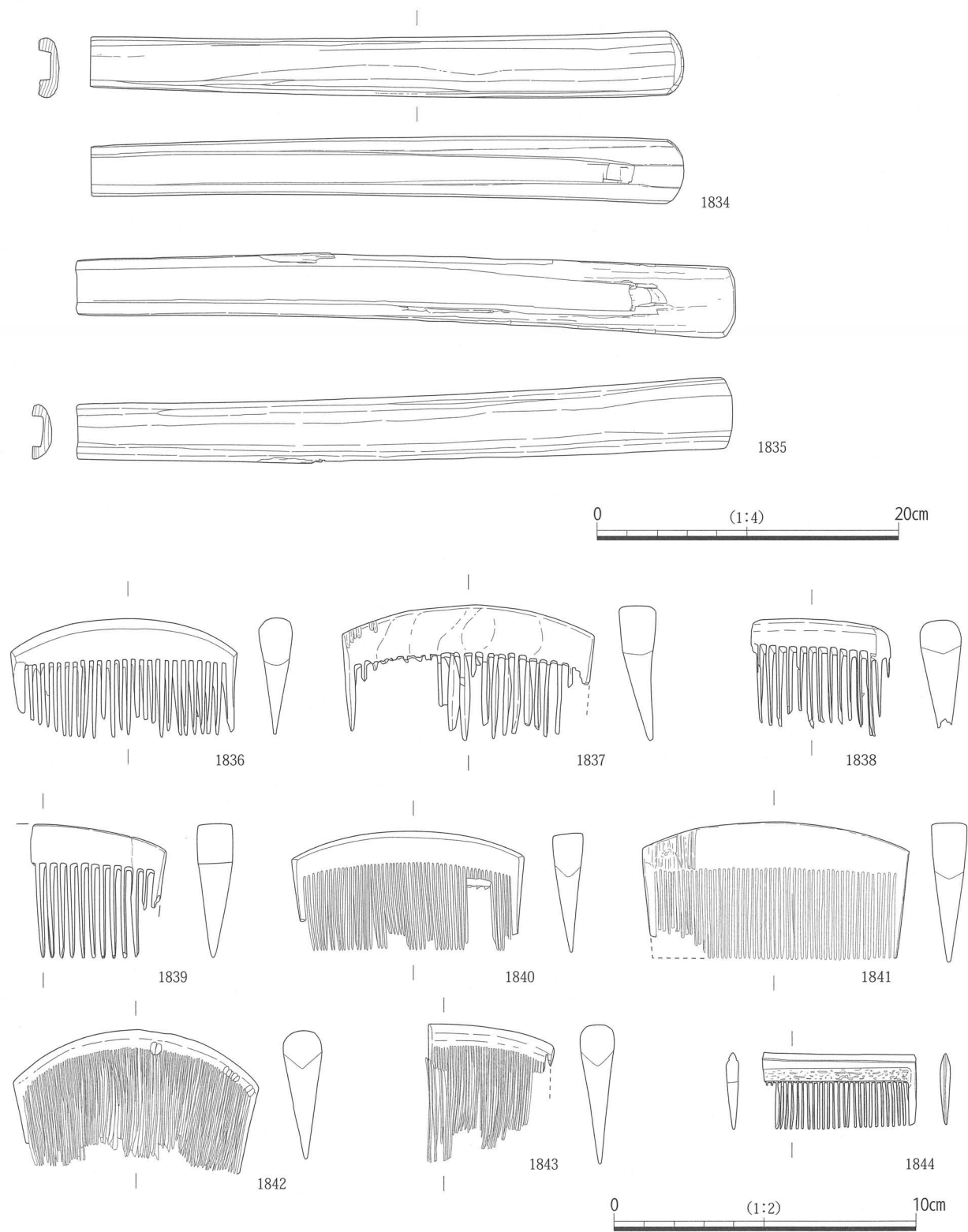


図 194 堀 83 出土木製品 (29)

を表現する。顎・頸部は上下方向から削り込む。胴部は断面形が長方形で、上端と下端にそれぞれ側面に孔が穿たれる。上端孔は左側面のみで貫通していない。手足を付けるためのものであるか。

1812は墨で頭髪を表現する。頭部は面取りし断面形が多面体に、胴部はほとんど削りをせず方形である。後頭部に細い棒が突き刺さる状態で折れる。これはこの棒を用い人形を操るためのものか。頭部と胴部は前面を上下方向から切り込み表現する。胴部下部側面は1811と同様に穿孔が見られる。

1813～1815は棒状の木に頭部のみ表現する人形である。1813は頭頂部が細かい面取りで丸味を帯びる。顔面は断面形が長方形であるため鼻筋を中心として左右で不均衡である。鼻の両脇を大きな面をとるように薄く削り、直線的な目を表現し、かつ鼻を尖らせる。口は上下からそれぞれ切り込みをいれ大きな口を表現している。下端は斜めに切り落とす。

1814は頭頂部が細かく面取りがされる。顔面はやや面取りし、目・鼻が表現される。鼻の両脇を削り込み突き出た鼻と直線的な目の形状を表現する。

1815は他のものと比べ段違いに長いものである。板材を加工したものである。後頭部は斜めに削られる。顔面は浅く切り込みをいれ目・鼻・口を表現する。体部中央には何かが巻かれていたような斜方向の圧痕が見られる。下端は突き立てて用いたのかほぞ状になる。

④柄・鞘

1816～1823・1833は柄である。1817・1818・1820・1821・1823・1833は一木の柄である。1817・1818は小口に長方形のほぞ穴が削り込まれる。刀身は残存しない。1820は小口に切り込みを入れ、茎部を挿入する削り込みをつくる。削り込みは柿渋様の黒色塗料が塗布される。表面に「天下一」と彫り、さらに墨書される。下端は紐を通すための孔があげられる。1821は縁を丸く削り出した呑口式で、一木柄に切り込みを入れる。柄の頭も丸く仕上げる。茎の固定は樹皮紐と、縁に段差があることから筒金等で巻いて固定されていたものと考えられる。断面形は楕円形で、頭が卵形と細身になる。1823は黒漆塗りで、遺物集積遺構127から出土した。1833は長さ33.1cm、最大幅5.0cmで他のものと比べるとかなり長く、両手で使用するものである。全体に布を張り、黒漆を塗布する。上方に目釘穴が開けられる。頭は鐙を取付ける為に斜格子状に筋目をいれ、接着剤として柿渋様の黒色塗料を塗布する。

1816・1819・1822は2枚の板材を合わせた柄である。1816は縁に段を付け、上方に目釘穴があげられる。全体に細かい削りを施す。削り込みは立ち上がりは上方を直角に、下方は斜めに緩やかに削り丁寧に仕上げる。1819は内面に削り込みは見られない。鐙を装着するために格子状に筋目をいれる。1822は内側に茎部を挿入する削り込みをもった相似形の2枚の板を合わせたものである。外面は全体を丁寧に削り、縁と茎基部にあたる箇所は帯状に削り込む。これは茎を固定する革などを締め付けるためのものと考えられる。内面は一方の板が縁と頭の両側に削り込みをいれる。削り込みは茎の形に合わせて中程に段を持って細くなり、反対側はやや弧を描く。

1824は槍代である。中央から縁に徐々に厚みを薄くし、刃状に整える。1825は刀代である。刃は厚さが0.2cmでかなり薄く、面取りにより片刃に仕上げる。

1826～1832・1834・1835は鞘である。鞘は全体に同幅で鐙が直線的に切り落とされたものと(1826・1827・1829)、縁から鐙へ幅広になり鐙が面取りし丸味を帯びるもの(1828・1830・1832・1834・1835)がある。この幅広になるものは全体に直線的なもの(1828・1830・1832)、緩やかに反るもの(1834・1835)があり、とくに1835は長さ43.8cmとかなり長いものである。1826は黒漆塗である。鐙を取付ける為に斜格子状に筋目をいれ、接着剤として柿渋様の黒色塗料を塗布する。削り込みは雑な

削りで仕上げをしない。1831 は上面に墨書される。削り込みはやや細かく削り仕上げをおこなう。

㊸櫛

1836～1844 は挽歯技法による横櫛である。1697 は鼈甲である。その他はすべて木製である。種類は1836～1839・1844 が解櫛、1840～1843 は梳櫛である。平面形態は、木製はいずれも円弧状になり、肩部に角をもつ。断面形態は面取りにより丸味をおびるもの(1836・1838・1842・1843)と直線的なもの(1837・1839～1841)がみられる。解櫛と梳櫛での平面・断面形態に違いは見られない。1837・1842 は背部分の一部が齧歯類に齧られた痕跡が見られる。1844 は今回の調査で唯一出土した鼈甲の櫛である。平面形は長方形で、棟部は直線になり肩部に角をもつ。厚みは0.4 cmで全体に木製と比べ薄い作りである。棟部は頂部が尖り、1条の沈線をもつ。

㊹下駄

下駄は堀83から159点出土した。そのうち欠損により全体形状が不明な31点を除き128点を図示した。

全体の組成は連歯下駄(I類)が121点で約94%を占め、差歯下駄(Ⅲ類)が6点で約5%である。付歯下駄(Ⅳ類)が1点見られるがこれは連歯下駄の補修の可能性も考えられる。無歯下駄は出土していない。

連歯下駄(I類)を断面形・平面形別に見ると、断面形は3以外のタイプは全て見られる。平面形はaからeまですべて見られるが、今回の調査では2とした長さに対する幅の比率が2:1より大きいものは出土していない。そして断面形と平面形での全体の出土割合はI 1 a類が42点で約35%、次いでI 1 b 1類が35点で約29%、I 2 b 1類が8点で約7%、I 1 c 1類・I 2 a 1類が7点で約6%、I 6 c 1類が4点で約3%、I 2 c 1類が3点で2%、I 5 b 2類が2点で2%、その他が各1点である。

下駄の全長は最小が14.4 cm(1845・1933)で、最大は23.2 cm(1932)である。全体に占める割合は21 cm代が58点で45%を占める。類別では差歯下駄のうち長さの判明した4点が21.0～22.9 cmで出土数が少ないものの、連歯下駄と比べ長いものが多く見られる。平面形や歯の形状で全長に差が見られるのかと考えたところ、もっとも出土数の多い連歯下駄の1の中で平面形が楕円形(a)、長方形(b)を比べると21 cm代が43%と49%で大きな違いは見られない。次に歯の形状の違いを見てみると1と2～7を見ると1は21 cm代が45%で、2～7は68%を占める。

これらの下駄のうち漆塗りものは23点で18%である。全て連歯下駄(I類)である。内訳はI 1 a 1類が14点、I 1 c 1類が1点、I 1 e 1類が1点、I 2 a 1類が6点、I 2 b 1類が1点、I 5 a 1類が1点である。歯の形状が同じ1でも平面形が楕円形(I 1 a 1類)は43点の出土したうち14点見られるのに対して、長方形(I 1 b 1類)は36点出土しているが1点もない。これに対しI 2 a 1類は7点出土したうち6点が漆塗りである。このように下駄の形状により漆塗りされるものとされないものに区別されていたと考えられる。次に調整を見ると同じI 1 a 1類でも漆塗りされた1845・1847・1848等は台座裏面が周縁を面取りし、歯の形状は角を丸く仕上げ長楕円形に整形する。全体の造作が丁寧である。白木はそのような仕上げを施さないものが多く、造作にも違いが見られる。

歯の形状が台より広がり外開きになるものは、歯が摩滅し判別が付きにくいものも多いがI 1 a 1類が9点、I 1 b 1類が11点、Ⅲ類(差歯下駄)は6点全てである。緒穴の穿孔位置は前緒穴が中央で、後緒穴が歯の内側である。緒穴の穿孔方法は錐や、1862のように緒穴内面が炭化しているものがみられることから焼いた鉄棒を用い円形に整えたもの、鑿等の工具を用い彫り込むため不整形のものがあ

る。これを下駄形状別に見ると、緒穴を円形に整えた下駄は I 1 a 1 類が 33 点、I 1 b 1 類が 19 点、I 2 a 1 類が 6 点、I 2 b 1 類が 4 点、I 5 a 1 類が 1 点である。漆塗りの下駄は I 2 a 1 類の 6 点がそうであるようにほとんどすべてが円形に整えられる。そして出土点数に占める割合から考えると I 1 a 1 類に比べ I 1 b 1 類は不整円形のものが多い。その他 I 6 類・Ⅲ類は全て不整円形である。

下駄の中には台部に線刻されたものが 25 点、焼印が 5 点出土した。そのほとんどが台表後部になっているが 1886・1905・1906・1959 は台裏にされる。そのうち 1905 は台表後部に「三ツ星」、台裏前部に「三角」の両面に焼印がされる。1853 も同じ三ツ星の焼印がされる。1886 は台裏後部に井桁の焼印が押され、屋号であろうか。また線刻ではないが 1933 は台裏前部に「う」の字に浅く彫り窪められている。1909・1906・1941 は同じ十字の線刻がされる。1915 は鳥を模した線刻である。

使用痕跡としては前緒穴周辺に指による圧痕や漆塗りの下駄は 1848 に見られるように指・かかなどで擦れた部分が剥げているもの多く見られる。また、後緒穴には鼻緒による擦痕がみられる。

歯は使用により擦り減りほとんど残存しないものや補修したものが見られる。1845・1848・1850・1854・1855・1868・1873・1923・1941・1948・1955 の 11 点は鉄釘を台座側からの打ち込みにより歯の補修がされる。前歯が補修されたものが 6 点、後歯が 5 点である。全て鉄釘によるものである。1854 のように歯が台部から折れて他の材で補修したものや、1923 のように歯の途中で折れて補修されたものがある。1855・1921・1926 は台座の前後端を齧歯類に齧られた痕跡が見られる。

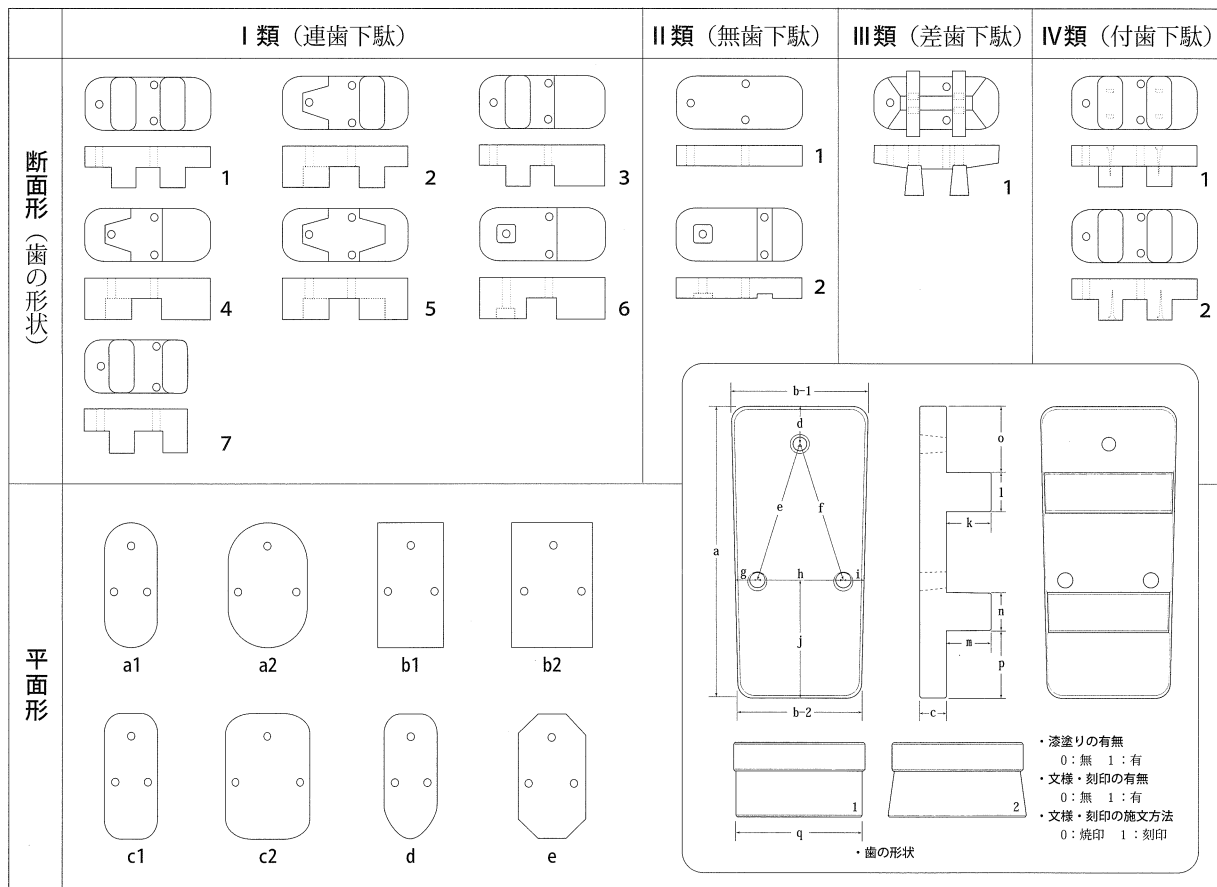
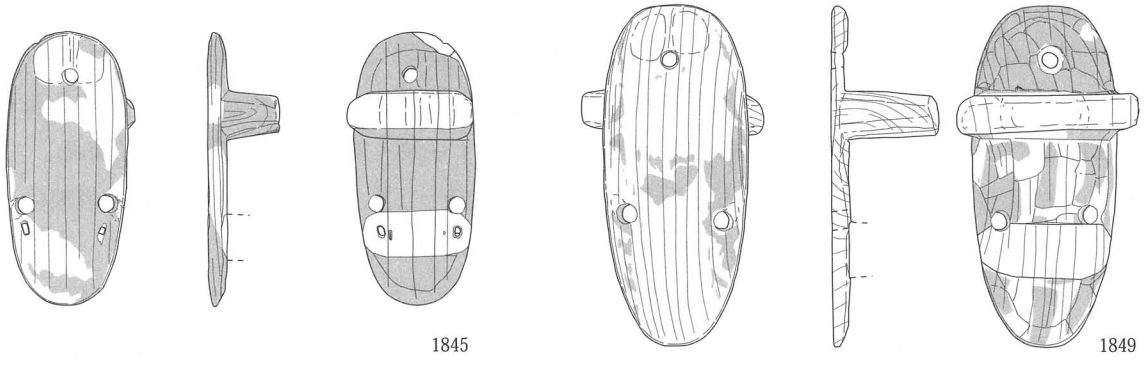
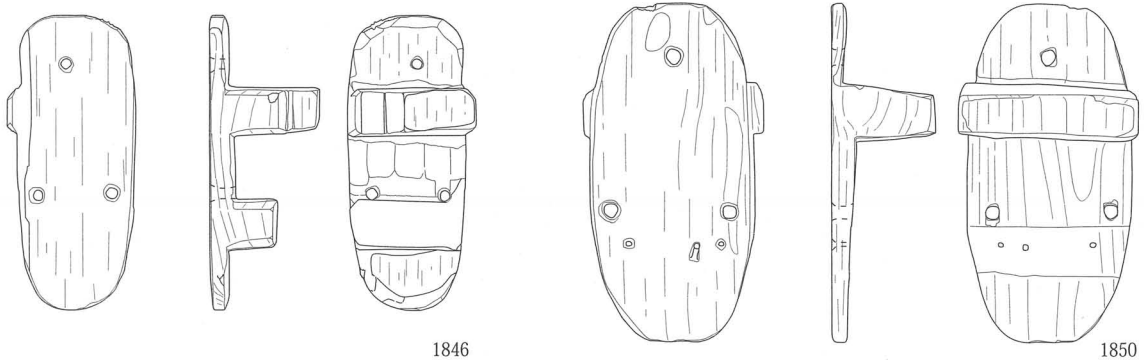


図 195 堀 83 出土下駄観察・計測凡例



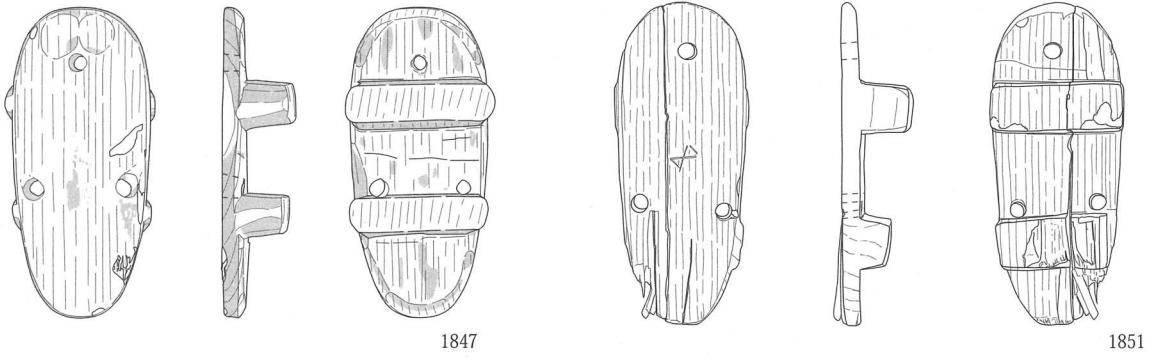
1845

1849



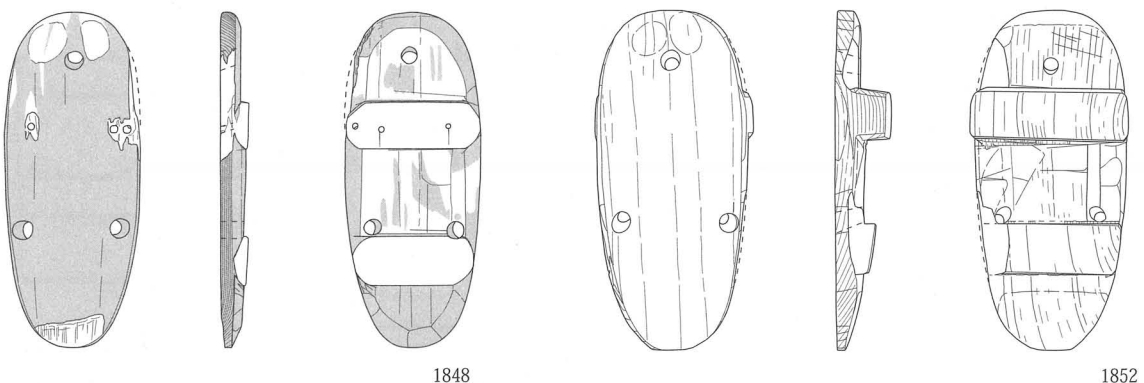
1846

1850



1847

1851



1848

1852

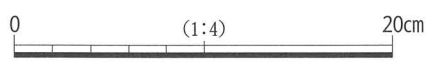


图 196 堀 83 出土木製品 (30)

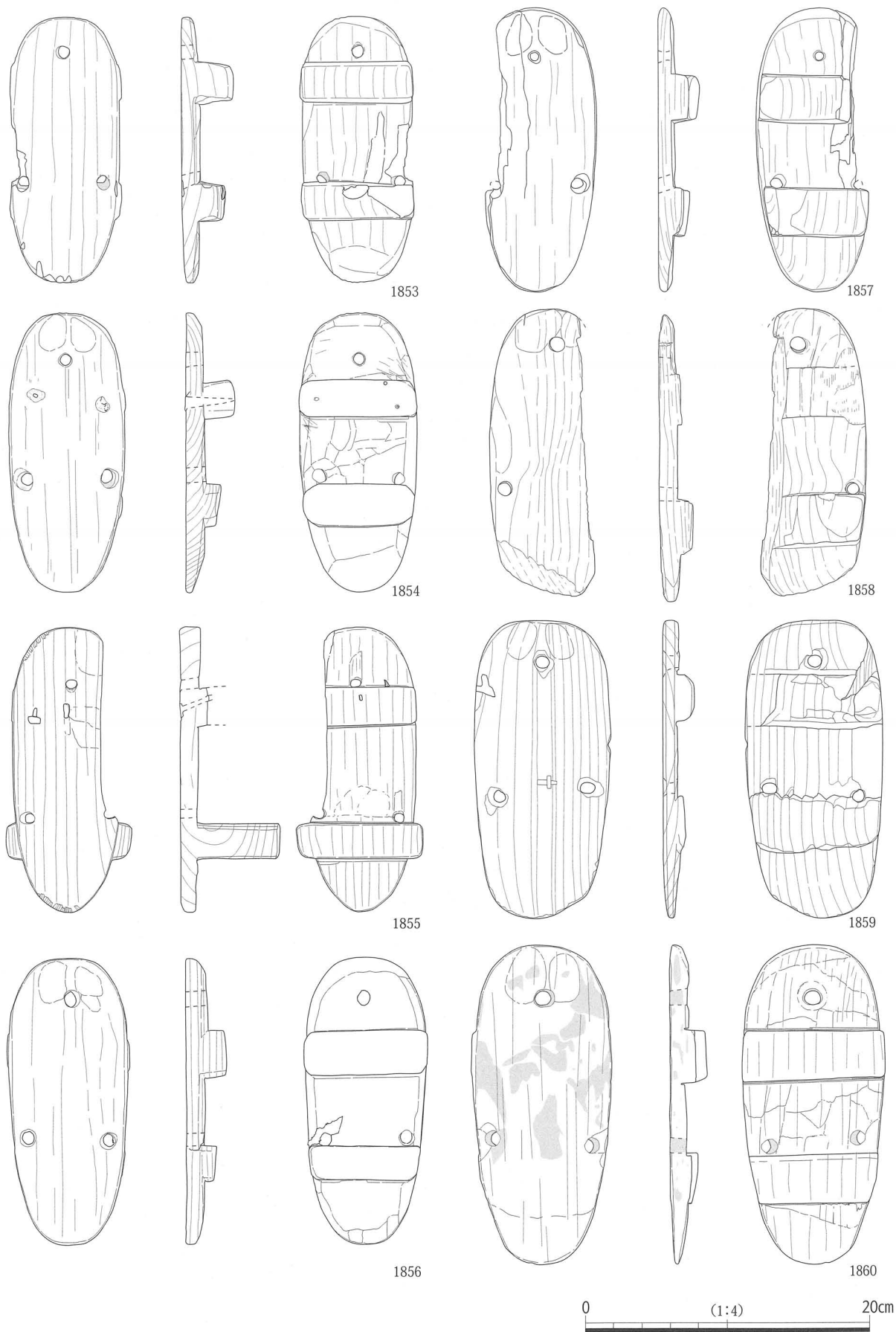


図 197 堀 83 出土木製品 (31)

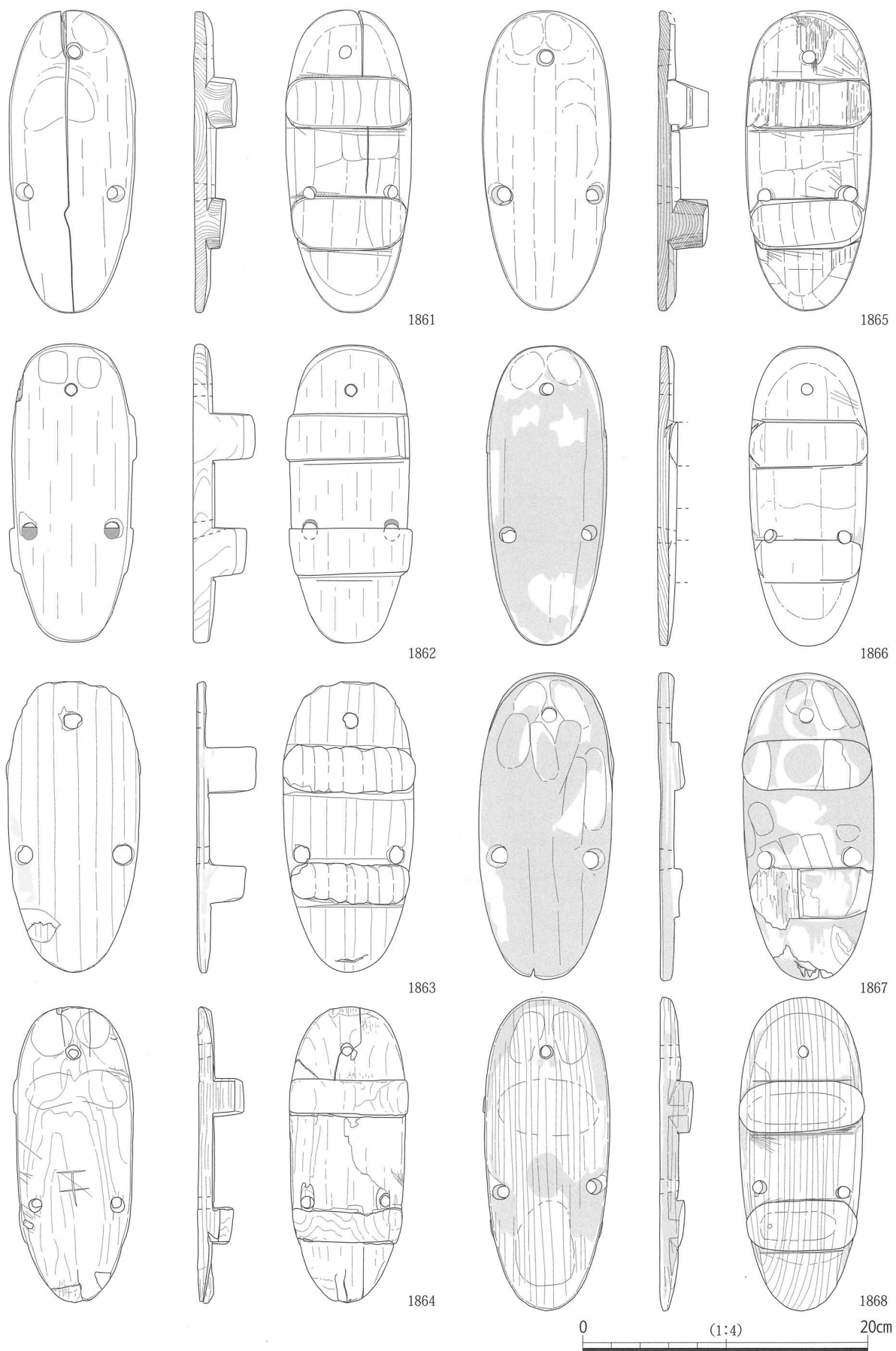


图 198 堀 83 出土木製品 (32)

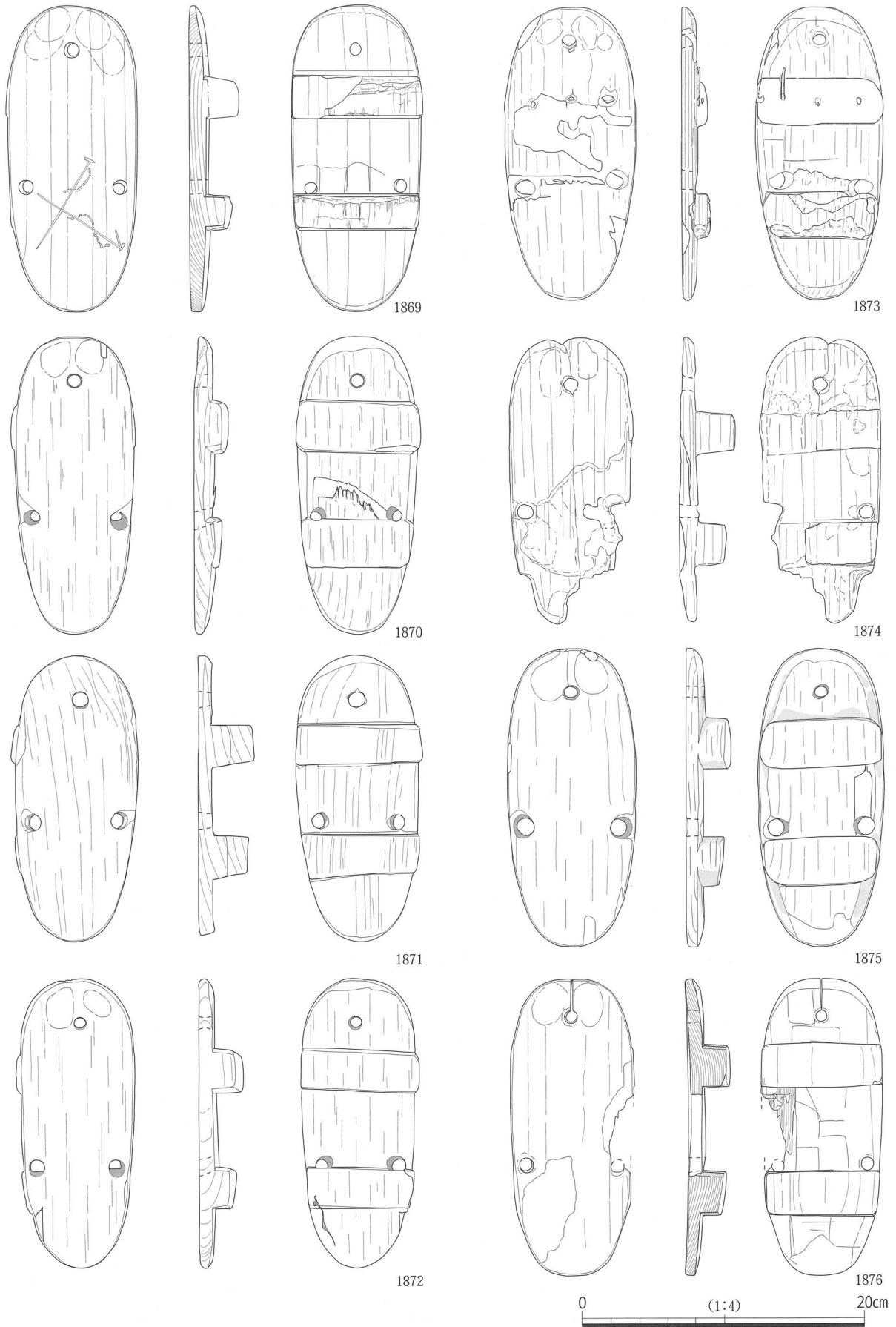


図199 堀83出土木製品(33)

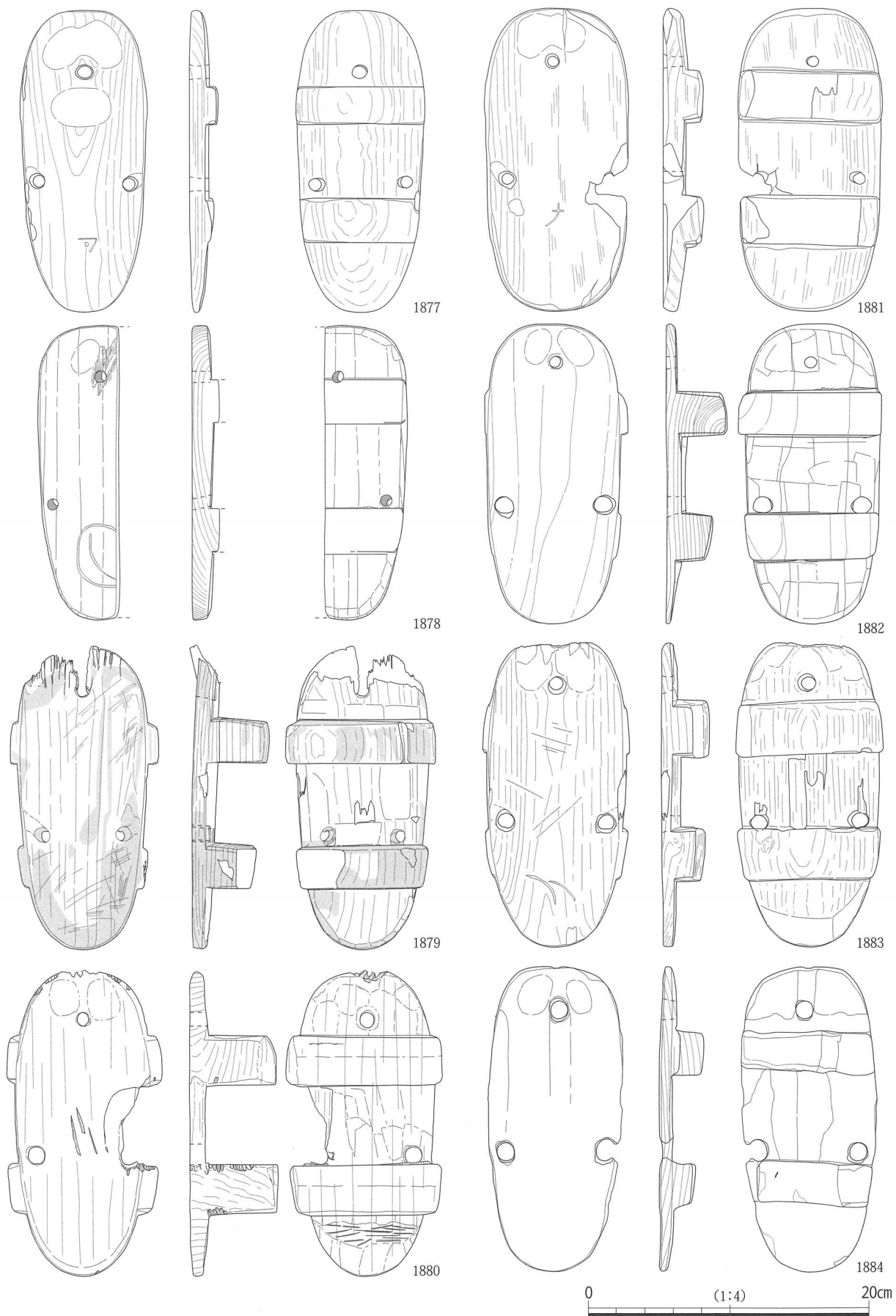


图 200 堀 83 出土木製品 (34)

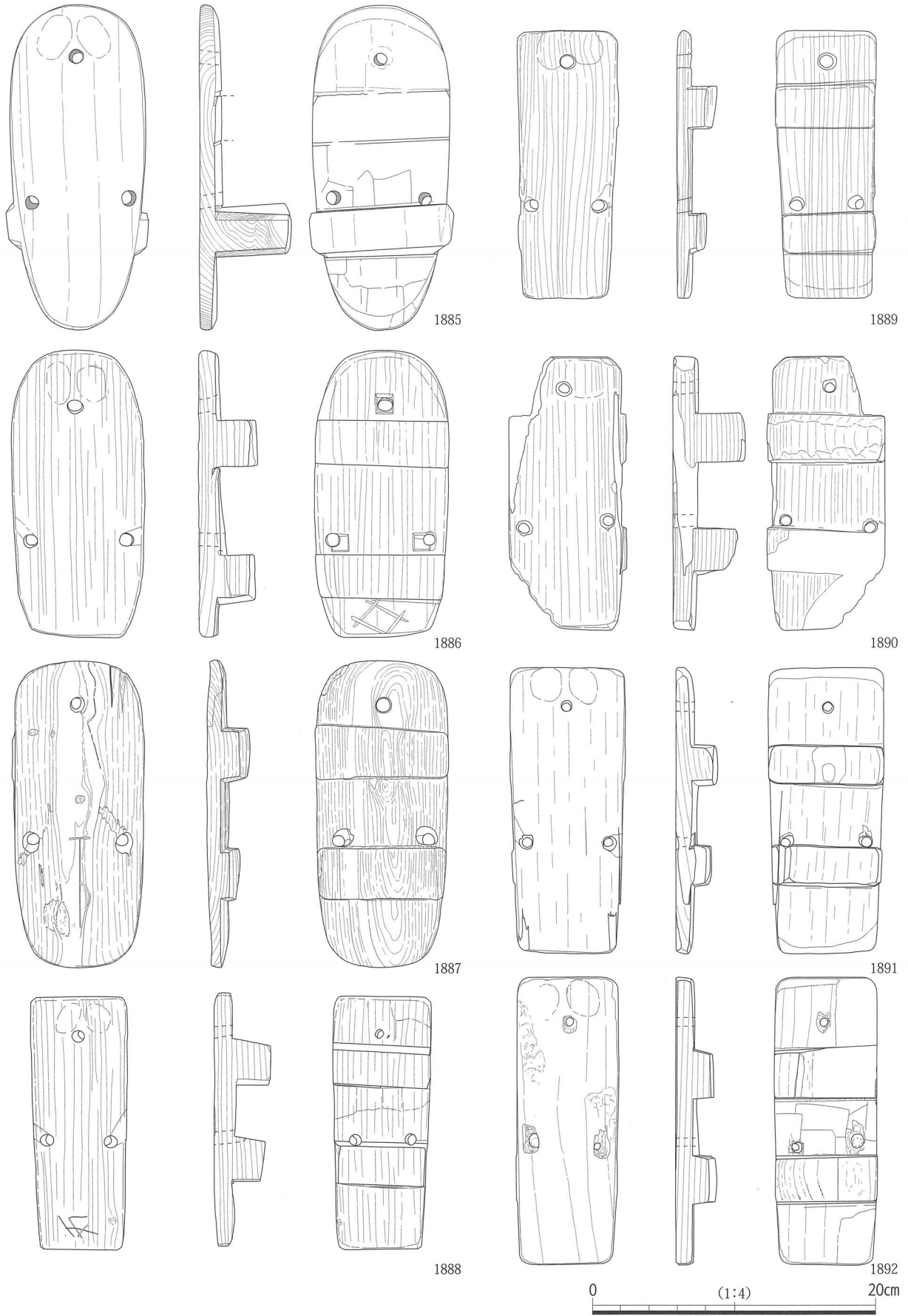


図 201 堀 83 出土木製品 (35)

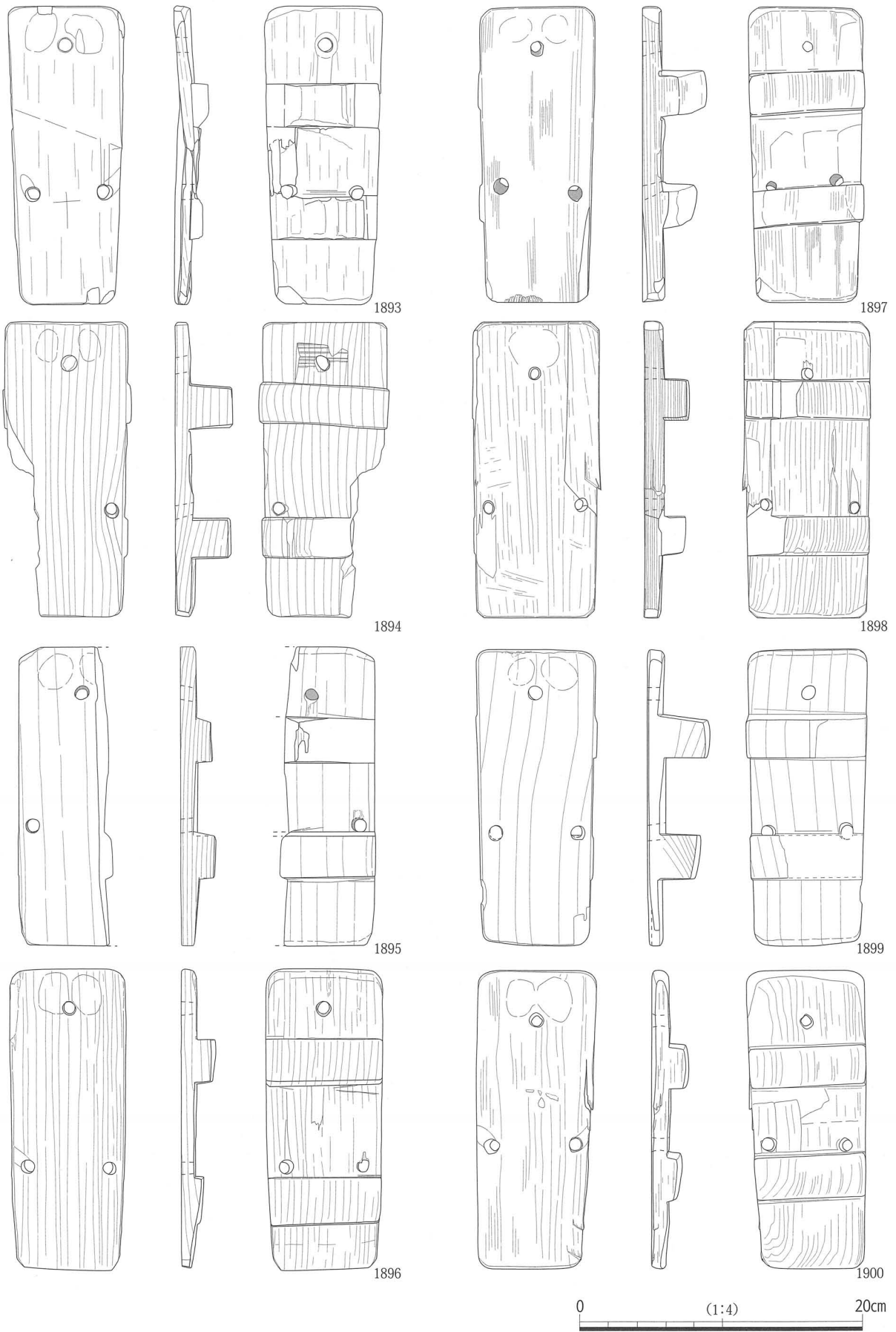


图 202 堀 83 出土木製品 (36)

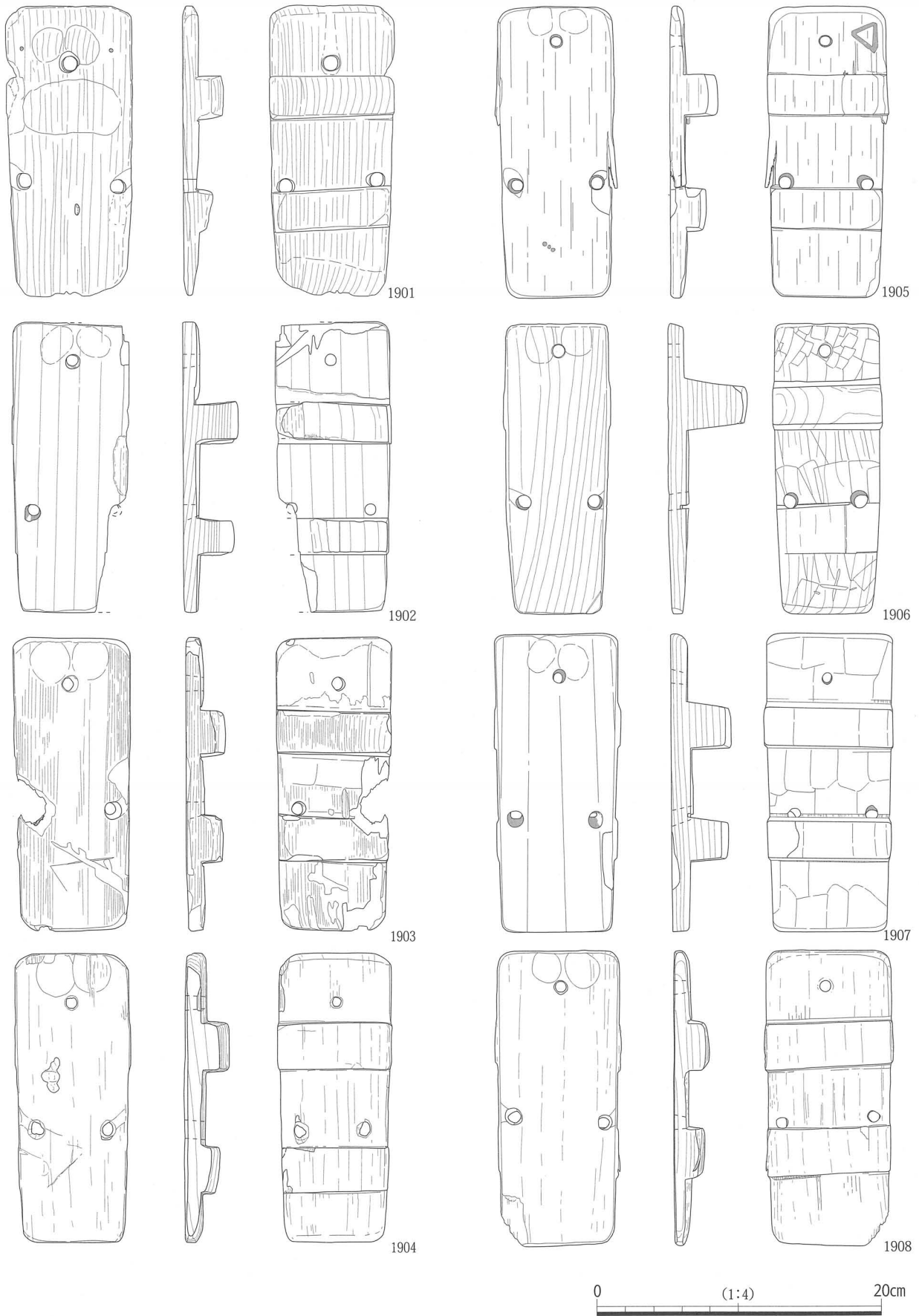


図 203 堀 83 出土木製品 (37)

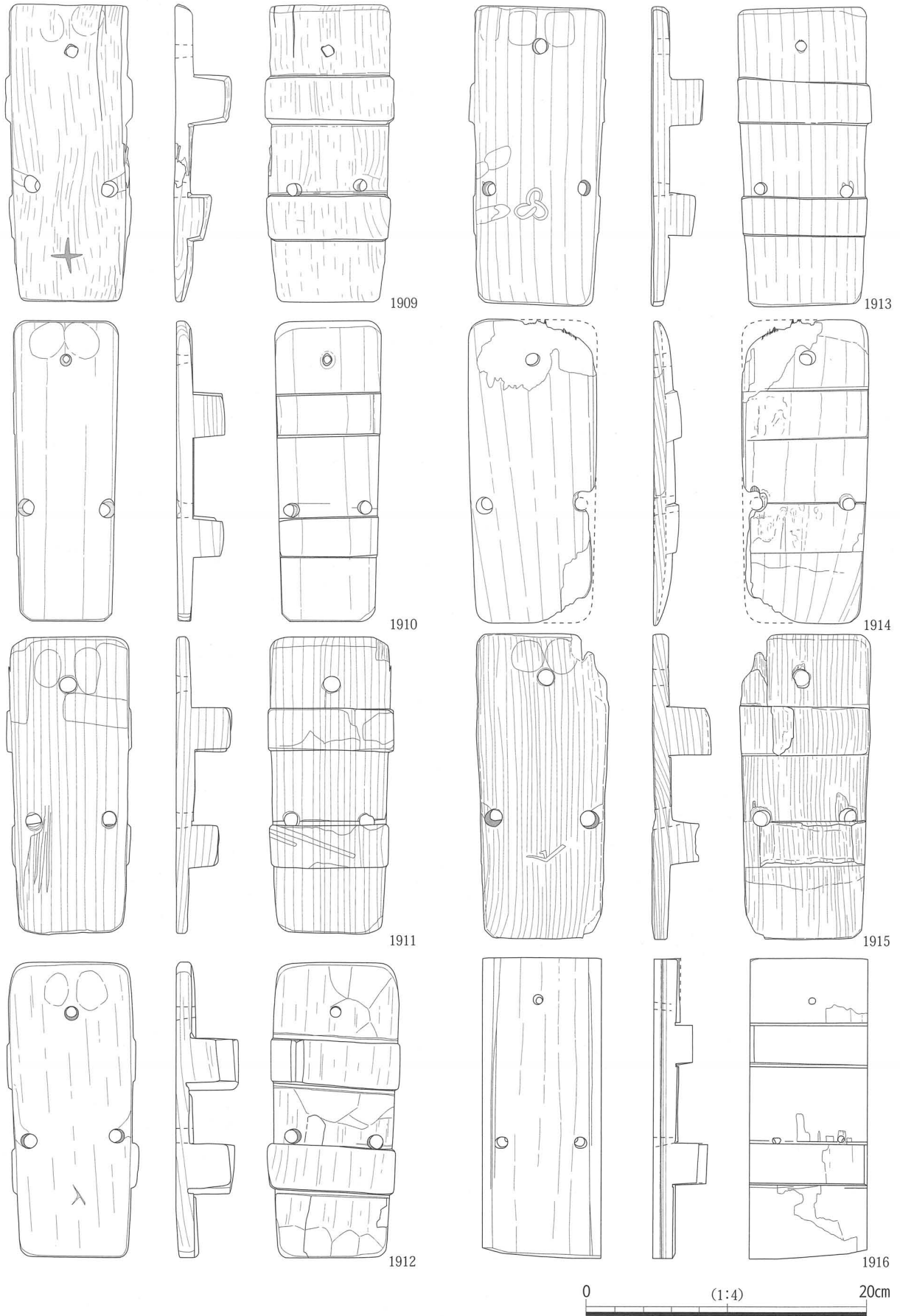


图 204 堀 83 出土木製品 (38)

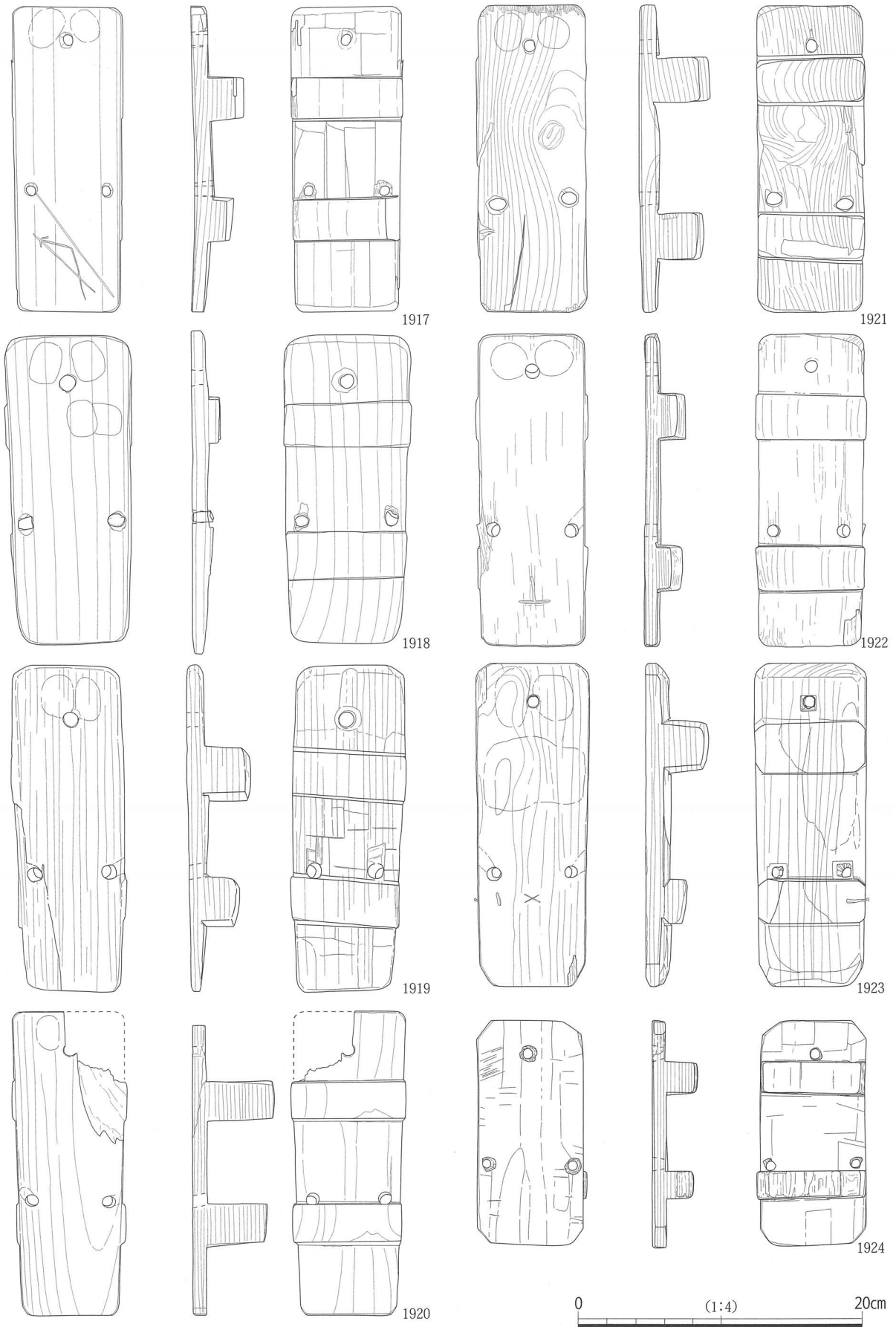


図 205 堀 83 出土木製品 (39)

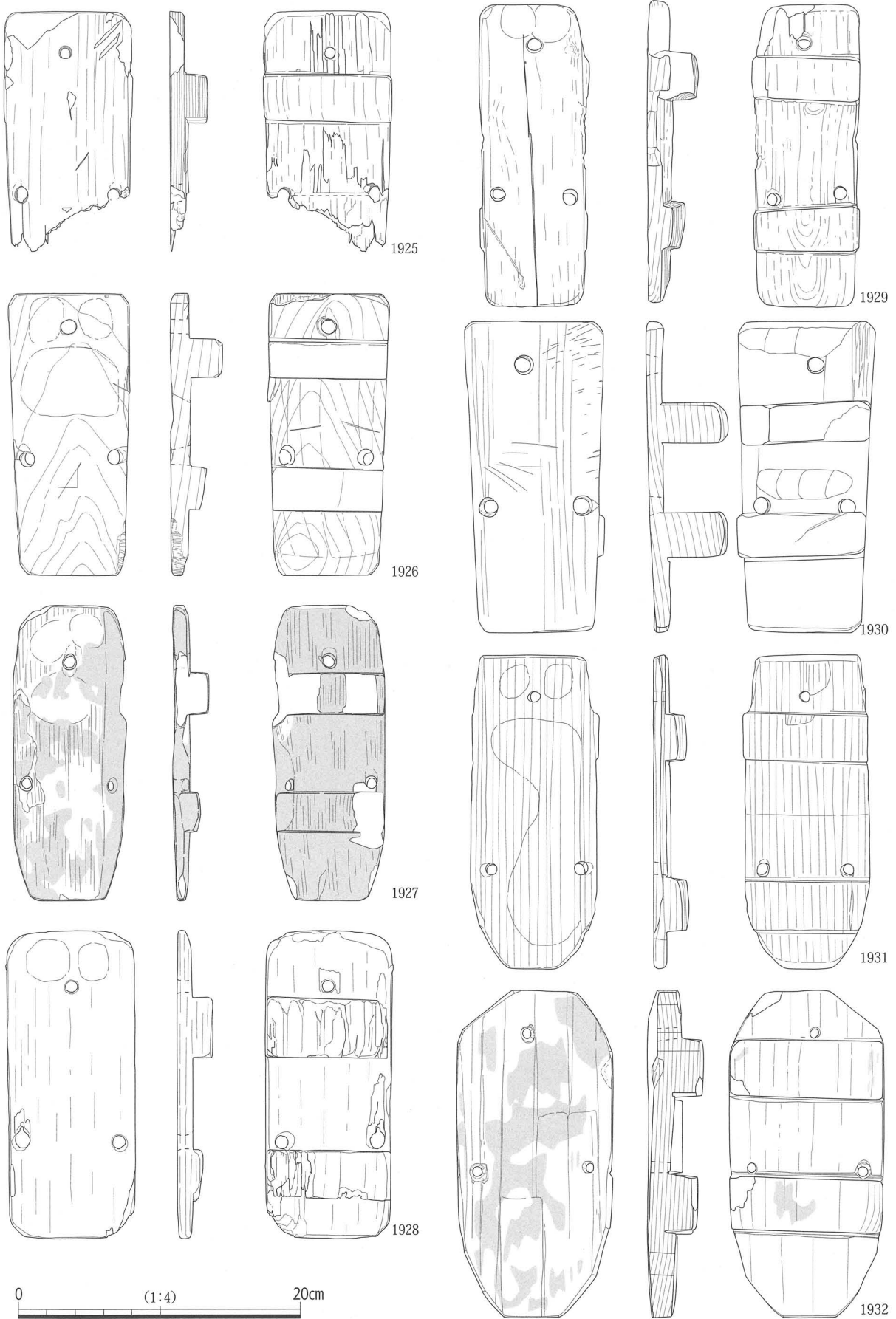


图 206 堀 83 出土木製品 (40)

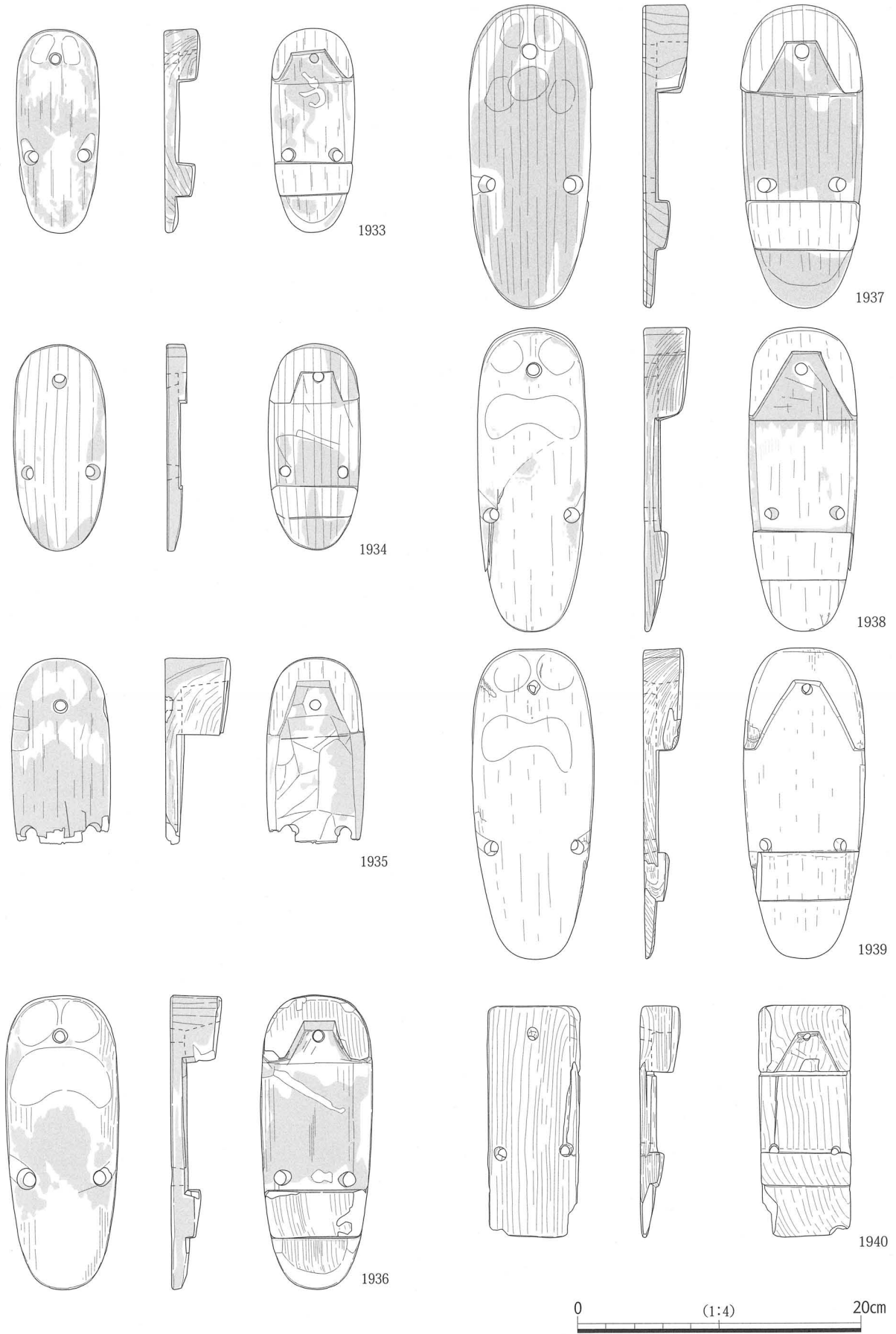


図 207 堀 83 出土木製品 (41)

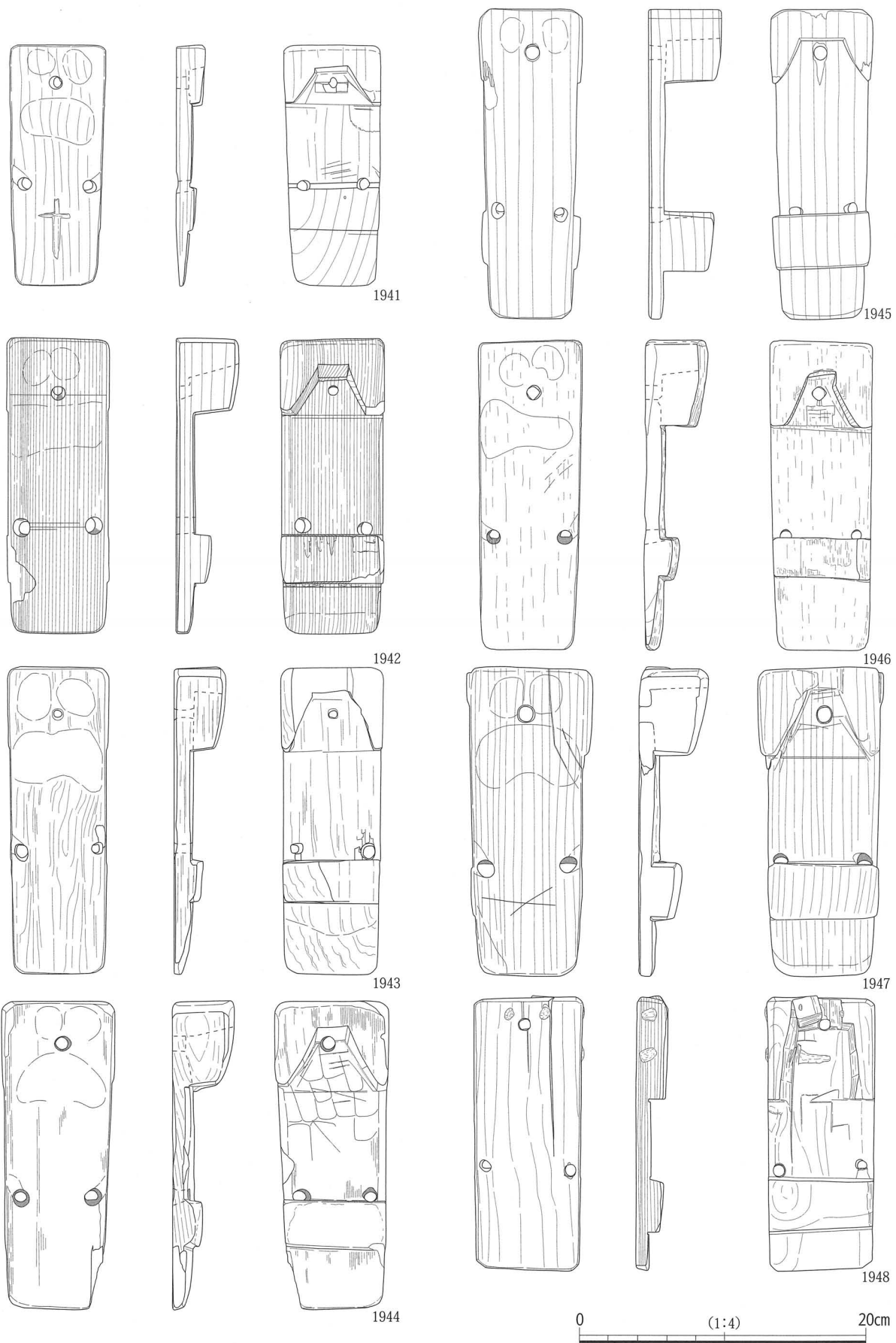


图 208 堀 83 出土木製品 (42)

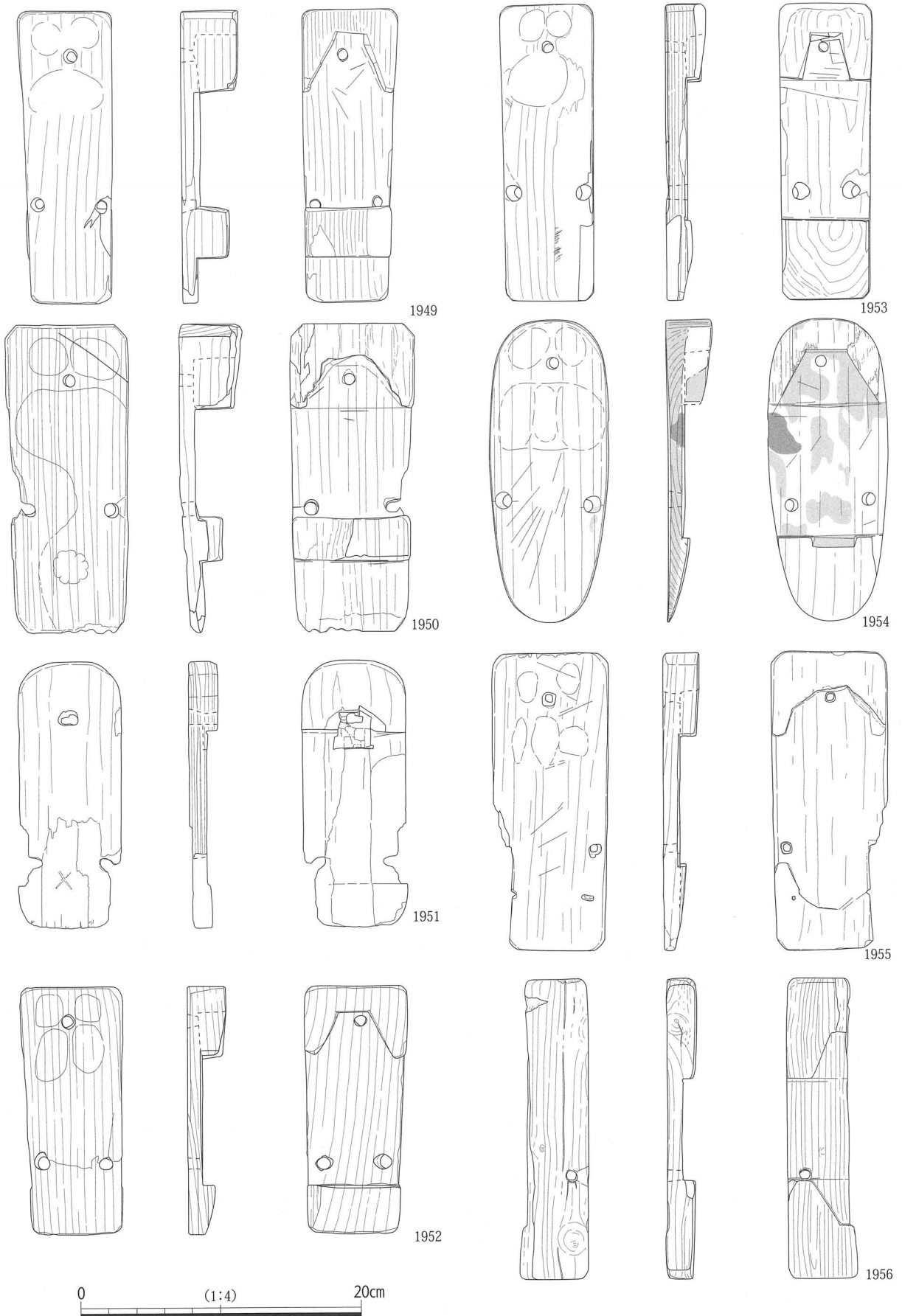


図 209 堀 83 出土木製品 (43)

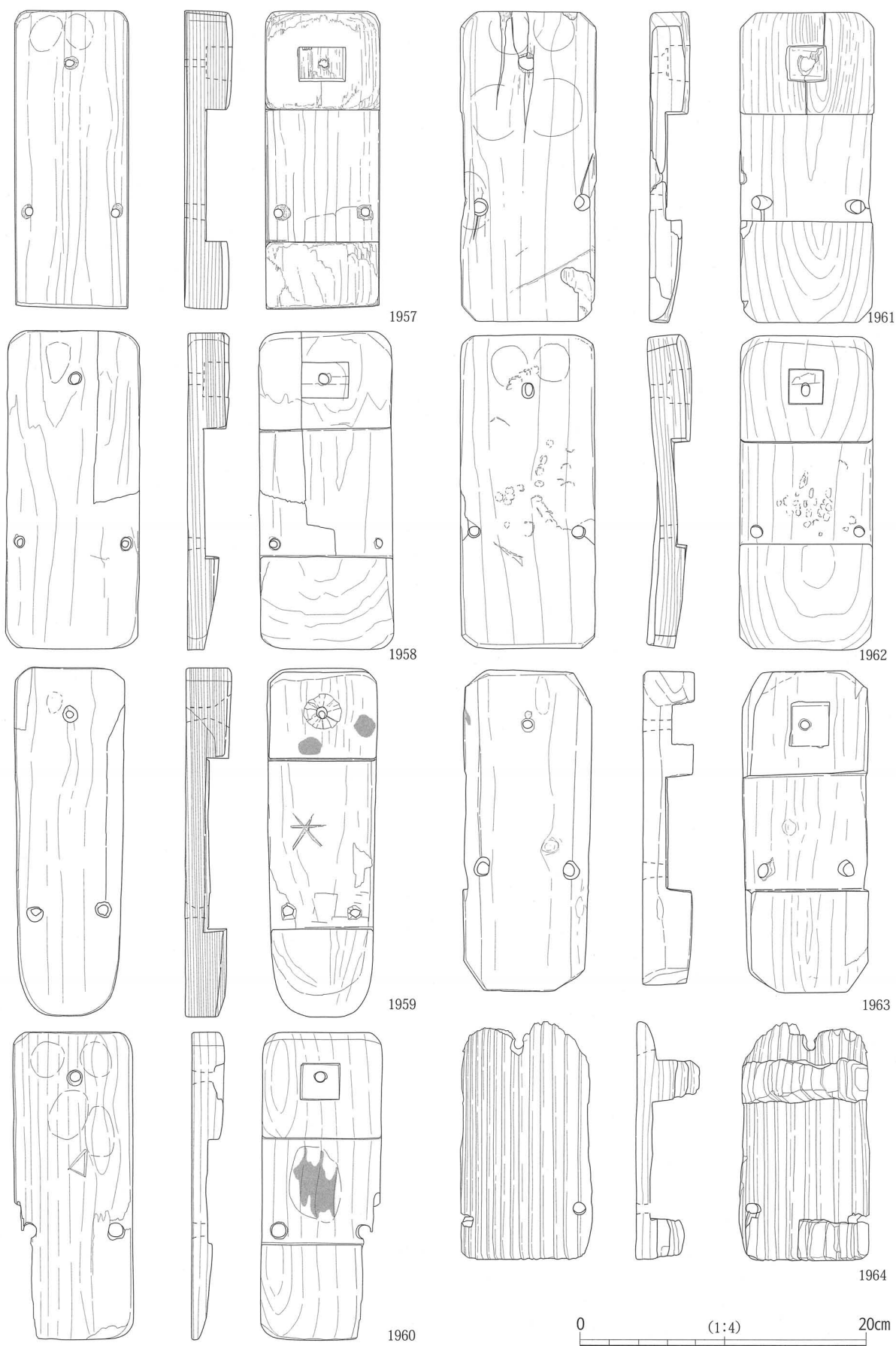


图 210 堀 83 出土木製品 (44)

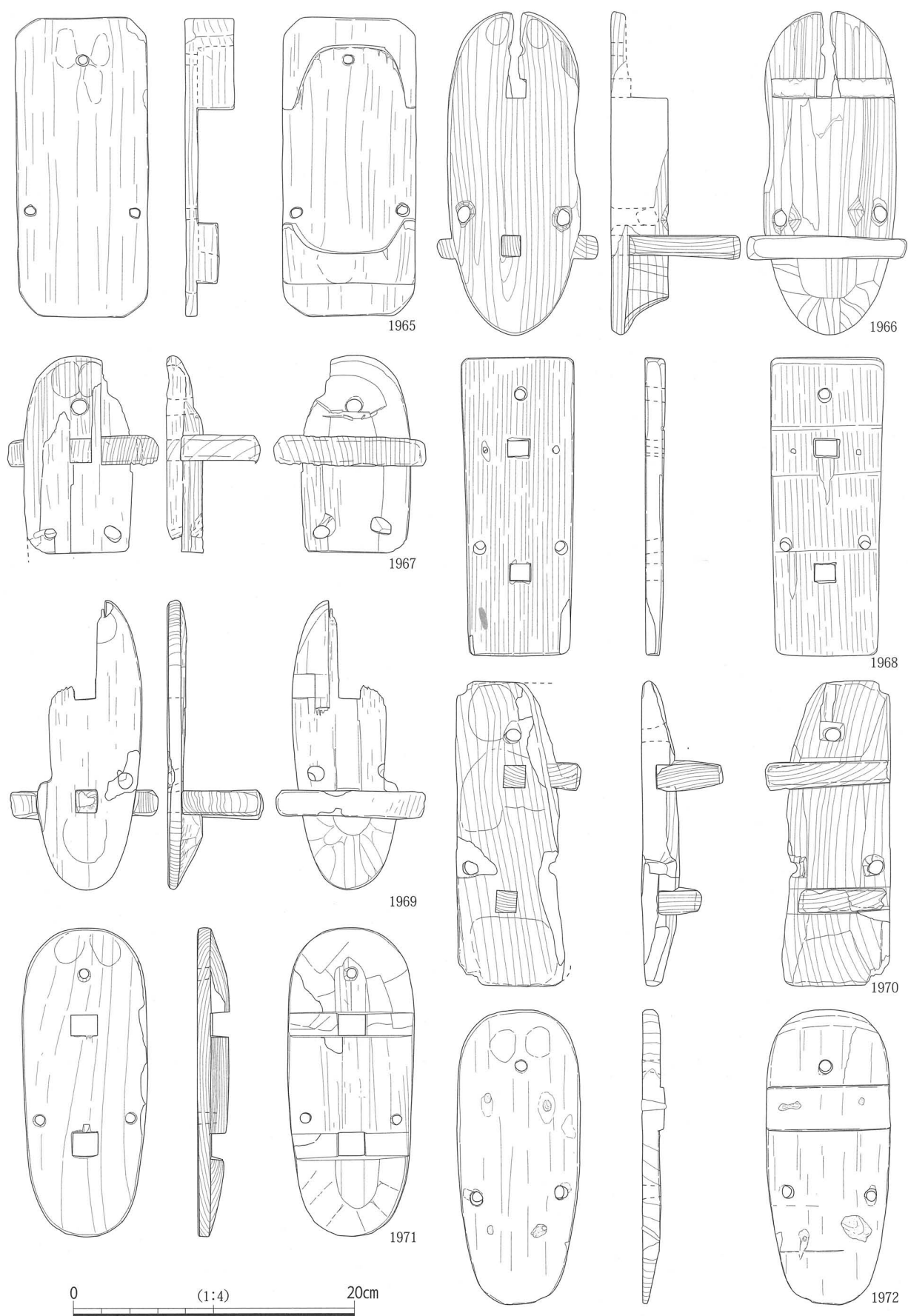


図 211 堀 83 出土木製品 (45)

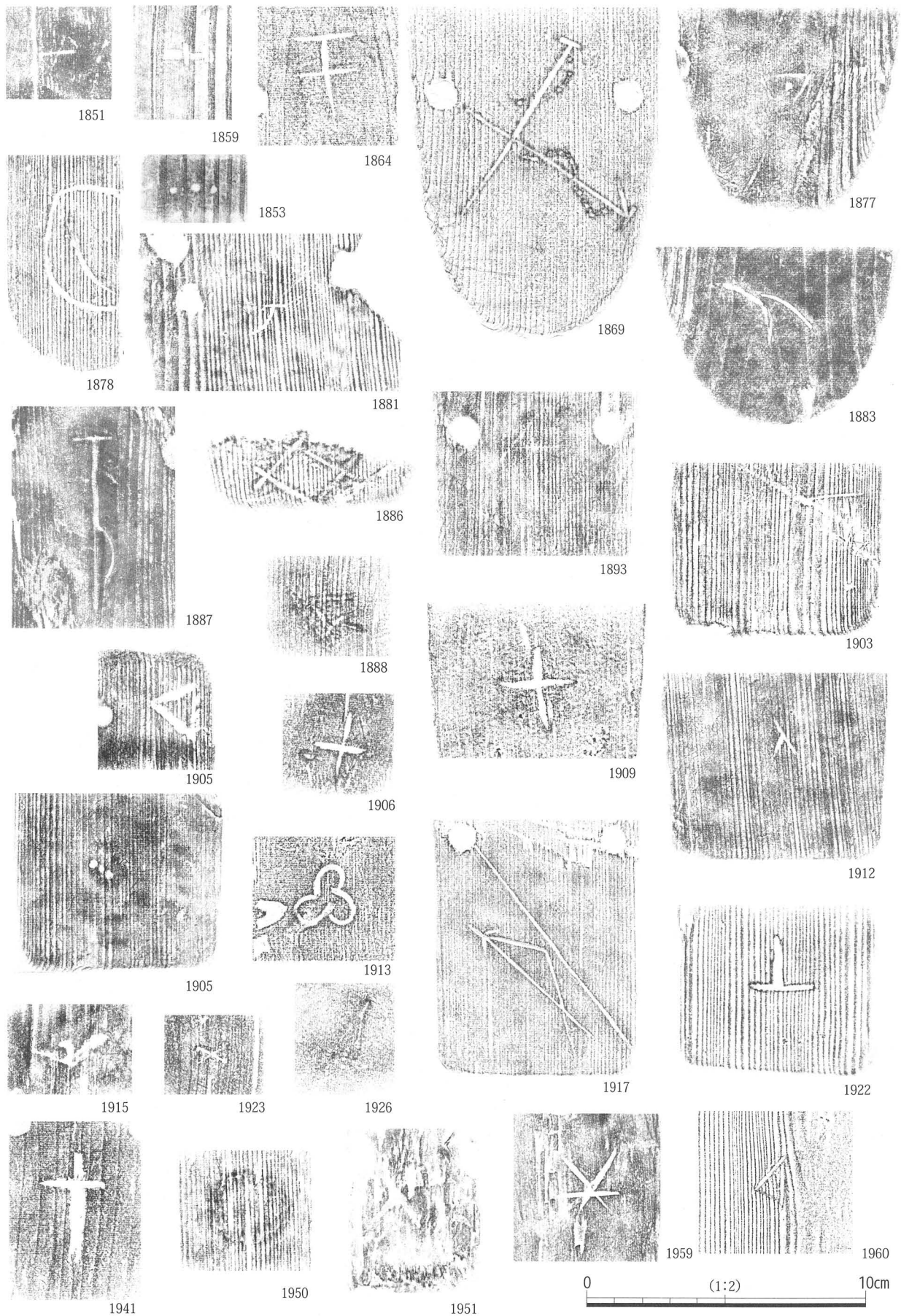


图 212 堀 83 出土下駄刻印拓影

表 12 堀 83 出土下駄計測表 (1)

遺物 番号	挿図	写真	出土遺構	分類	a	b-1	b-2	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	縦横比	歯形	塗り	刻印	施文 方法	歯の 摩滅	備 考	
836			土坑 162	I 1・a1	20.8	9.8	10.3	0.8	3.4	10.4	9.6	1.5	6.4	1.4	7.8	3.2	2.9	2.9	3.1	5.1	3.5	10.3	0.47	2	0	1	1		豊臣前期	
837			土坑 162	I 1・a1	20.4	9.8	—	1.5	3.1	10.1	10.1	1.7	6.1	1.5	7.6	0.8	3.0	0.6	2.9	3.6	4.1	—	0.48	1	0	0	—		豊臣前期	
838			土坑 162	I 1・a2	21.0	8.8	—	1.5	3.4	9.8	9.6	1.5	5.6	1.4	8.3	2.0	3.4	1.4	3.1	4.2	4.1	8.2	0.42	2?	1	1?	—		豊臣前期	
839			土坑 162	I 1・a1	13.2	6.2	6.7	0.8	2.5	6.4	6.6	0.6	4.8	0.7	4.7	1.6	2.1	1.4	2.2	3.1	2.0	6.8	0.47	2	0	0	—		豊臣前期	
840			土坑 162	I 1・c1	21.9	8.0	8.1	0.9	3.0	11.8	11.5	0.8	6.3	0.8	7.7	2.3	3.3	2.1	3.4	4.4	4.0	8.1	0.37	2?	0	0	—		豊臣前期	
841			土坑 162		19.8	9.0	—	1.5	—	9.8	—	1.1	—	—	—	1.2	3.0	0.7	2.8	3.6	4.0	9.4	0.45	1	0	0	—		豊臣前期	
842			土坑 162	I 1・b4	22.0	7.8	—	1.6	2.5	12.8	12.8	0.9	6.0	1.0	7.0	0.3	4.3	—	—	—	—	—	0.35	1	0	0	—		豊臣前期	
976			堀 45		18.3	8.0	—	1.2	2.7	9.2	9.3	1.2	5.6	1.1	6.9	1.2	2.5	1.2	2.5	4.1	3.5	8.0	0.44	1	0	0	—		豊臣前期、鉄釘3箇所にある	
1845			堀 83	I 1・a1	14.4	6.3	6.5	1.0	2.3	7.2	7.0	0.8	4.3	0.8	5.2	2.9	2.3	—	2.4	2.2	2.6	6.5	0.44	2	1	0	—	左		
1846			堀 83	I 1・a1	15.6	—	—	1.3	2.6	7.3	7.3	—	4.1	1.1	5.8	4.7	2.4	2.3	2.5	3.8	3.2	6.3	—	2	0	0	—	不明		
1847			堀 83	I 1・a1	16.4	7.2	7.9	1.2	2.8	7.2	7.1	0.9	4.8	1.0	6.7	2.5	2.0	2.2	1.9	3.8	4.3	7.9	0.44	2	1	0	—	均等		
1848			堀 83	I 1・a1	17.8	7.2	—	1.3	2.5	9.4	9.2	0.8	5.0	0.9	6.2	0.5	2.5	0.4	2.5	4.7	3.3	7.0	0.40	1	1	0	—	不明	前歯を釘で3箇所補修、焼棒穿孔	
1849			堀 83	I 1・a1	18.0	7.5	9.6	1.1	2.9	8.5	9.0	1.1	5.0	1.1	6.8	5.1	2.7	—	2.8	4.3	3.6	9.6	0.42	2	1	0	—	右		
1850			堀 83	I 1・a1	17.9	8.6	9.4	1.2	2.7	8.8	8.8	1.0	6.1	1.2	7.1	4.9	2.6	—	—	4.4	3.6	9.4	0.48	2	0	0	—	不明		
1851			堀 83	I 1・a1	17.0	6.7	5.7	0.9	2.5	8.3	8.5	0.7	4.4	0.8	6.3	2.3	2.4	1.6	2.5	4.1	3.1	7.0	0.39	2	0	1	1	左		
1852			堀 83	I 1・a1	18.0	7.7	8.3	1.3	2.7	8.8	9.0	0.8	5.6	0.7	6.7	1.6	2.6	0.7	2.6	4.1	4.2	8.3	0.43	2	0	0	—	均等	焼棒穿孔	
1853			堀 83	I 1・a1	18.9	7.5	7.8	1.2	2.4	9.7	9.7	0.8	5.5	0.9	6.9	2.4	2.2	1.2	2.7	3.1	4.2	7.8	0.40	2	0	1	1?	右		
1854			堀 83	I 1・a1	19.8	8.1	8.7	1.3	3.2	9.1	8.9	0.9	5.8	0.9	8.0	2.0	2.7	1.1	3.1	4.8	4.5	8.2	0.41	1	0	0	—	左		
1855			堀 83	I 1・a1	20.1	—	8.7	1.1	3.9	9.9	9.6	0.9	5.6	—	6.8	1.0	2.5	5.8	2.6	4.0	3.7	8.7	—	2	0	0	—	右		
1856			堀 83	I 1・a1	20.2	8.3	8.5	1.5	2.9	10.2	10.2	0.9	5.6	1.0	7.1	1.8	3.2	1.1	3.0	5.0	4.0	8.6	0.41	1	0	0	—	左		
1857			堀 83	I 1・a1	20.1	—	—	1.0	3.4	9.9	9.6	—	5.9	1.1	7.4	1.5	3.4	0.9	3.4	4.8	4.0	7.3	—	1	0	0	—	不明		
1858			堀 83	I 1・a1	—	—	—	1.2	2.5	10.8	—	0.9	—	—	—	0.2	3.6	0.8	3.6	4.4	—	—	—	—	1	0	0	—	不明	焼棒穿孔か
1859			堀 83	I 1・a1	21.1	9.5	—	1.5	2.9	10.0	9.6	1.5	6.5	1.4	8.8	1.4	3.3	0.7	3.3	4.0	5.0	8.9	0.45	1	0	1	1	右		
1860			堀 83	I 1・a1	22.6	9.8	9.9	1.4	3.8	10.5	11.0	1.1	7.0	1.1	8.5	1.8	3.3	0.9	3.6	6.0	4.3	9.9	0.43	2	1	0	—	右		
1861			堀 83	I 1・a1	21.4	8.7	—	1.3	2.9	10.4	10.4	1.0	6.3	1.1	8.1	1.6	3.6	0.7	3.7	4.7	4.5	8.7	0.41	1	1	0	—	均等	焼棒穿孔	
1862			堀 83	I 1・a1	21.0	8.3	8.4	1.5	3.1	10.3	10.3	0.9	5.6	1.1	7.9	2.6	3.2	2.3	3.3	4.8	4.6	8.0	0.40	2	0	0	—	右		
1863			堀 83	I 1・a1	20.3	9.1	9.3	0.9	2.7	9.9	9.9	1.0	6.8	1.0	8.2	3.5	3.5	2.5	2.7	4.2	4.5	9.1	0.45	1	1	0	—	左		
1864			堀 83	I 1・a1	20.1	8.0	8.4	1.0	3.2	11.0	11.2	0.9	5.6	0.8	6.9	2.0	2.5	1.4	2.6	5.1	4.2	8.2	0.40	1	0	1	1	右		
1865			堀 83	I 1・a1	21.0	8.6	—	1.5	3.3	10.2	10.2	1.1	6.2	1.0	7.9	2.3	3.3	2.0	3.1	4.8	4.4	7.8	0.41	1	1	0	—	右	焼棒穿孔	
1866			堀 83	I 1・a1	21.0	8.2	—	1.2	3.1	10.6	10.5	1.0	5.5	0.8	7.9	0.3	3.2	0.1	3.1	5.2	4.6	8.3	0.39	—	1	0	—	不明	焼棒穿孔	
1867			堀 83	I 1・a1	21.5	9.1	—	0.9	2.9	10.6	10.6	1.1	6.6	1.1	8.5	0.5	3.6	0.4	3.7	4.5	4.2	8.9	0.42	1	1	0	—	右		
1868			堀 83	I 1・a1	22.0	8.6	8.8	1.3	3.8	10.3	10.1	0.9	6.3	0.8	8.4	1.0	3.7	0.5	3.5	5.9	4.2	8.8	0.39	2	1	0	—	右	後歯を釘で1箇所補修	
1869			堀 83	I 1・a1	21.8	9.1	—	1.1	3.2	10.2	10.4	1.1	6.7	1.1	8.8	1.9	2.7	1.4	2.5	5.1	5.9	8.8	0.42	1	0	1	0	中心		
1870			堀 83	I 1・a1	21.1	8.5	8.8	1.4	3.1	10.1	10.4	0.9	6.1	0.8	8.2	1.2	3.7	0.7	3.5	4.6	4.8	8.8	0.40	1	0	0	—	右	焼棒穿孔	
1871			堀 83	I 1・a1	20.4	8.6	9.0	1.1	3.2	9.3	9.1	1.1	5.8	1.2	8.5	2.9	2.9	2.3	3.1	4.7	4.3	9.0	0.42	2	0	0	—	右	焼棒穿孔	
1872			堀 83	I 1・a1	20.6	8.0	8.4	1.2	3.1	10.5	10.5	0.8	5.5	1.0	7.2	2.1	2.8	1.6	2.8	5.0	4.2	8.4	0.39	2	0	0	—	右		
1873			堀 83	I 1・a1	20.8	9.1	—	1.0	2.3	10.9	10.5	1.2	6.3	1.2	8.2	0.6	3.3	1.0	3.3	5.1	4.4	8.2	0.44	1	1	0	—	不明		
1874			堀 83	I 1・a1	20.2	8.6	—	1.3	3.3	9.5	9.5	0.9	6.2	—	—	2.5	2.9	1.7	3.0	4.8	—	—	—	0.43	1	0	0	—	不明	
1875			堀 83	I 1・a1	21.2	9.0	—	1.3	3.1	10.0	10.1	1.1	6.4	1.1	8.4	1.8	3.3	1.2	3.4	4.8	4.3	8.9	0.42	1	1	0	—	右		
1876			堀 83	I 1・a1	21.0	8.6	8.7	1.2	2.6	11.0	—	0.7	6.3	—	7.6	1.8	3.1	1.6	3.1	4.6	4.3	8.6	0.41	—	0	0	—	左		
1877			堀 83	I 1・a1	21.6	8.8	9.1	1.2	4.3	8.6	8.8	0.9	6.6	0.9	9.2	0.7	2.7	0.3	3.2	5.9	5.0	9.1	0.41	2?	0	1	1	左		
1878			堀 83	I 1・a1	21.0	—	—	1.4	3.7	9.7	—	0.8	—	—	8.7	0.5	3.1	0.6	3.2	3.7	4.8	—	—	—	1	0	1	1	不明	焼棒穿孔
1879			堀 83	I 1・a1	21.6	9.2	10.2	1.3	2.8	10.8	10.8	1.2	5.7	1.4	8.2	3.5	3.1	3.3	3.0	5.4	4.4	10.2	0.43	2	0	0	—	左		
1880			堀 83	I 1・a1	22.0	9.5	11.0	1.3	3.5	10.3	10.3	1.2	6.5	—	8.7	5.4	3.6	5.0	3.7	4.5	4.4	11.0	0.43	2	0	0	—	右		
1881			堀 83	I 1・a1	21.7	10.2	10.3	1.5	3.8	9.0	—	1.3	—	—	9.4	1.5	3.5	1.0	3.6	4.6	4.9	10.3	0.47	1	0	1	1	左		

表 13 堀 83 出土下駄計測表 (2)

遺物 番号	挿図	写真	出土遺構	分類	a	b-1	b-2	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	縦横比	歯形	塗り	刻印	施文 方法	歯の 摩滅	備 考
1882			堀 83	I 1・a1	21.6	9.6	10.2	1.3	2.7	10.9	10.9	0.9	7.1	1.0	8.5	3.1	3.2	2.2	3.2	4.6	4.5	10.2	0.44	2	0	0	-	左	焼棒穿孔
1883			堀 83	I 1・a1	21.7	10.0	10.4	1.1	2.7	10.4	10.5	1.1	7.1	1.1	8.9	1.9	3.7	1.9	3.6	4.2	4.9	10.4	0.46	2	0	1	1	右	
1884			堀 83	I 1・a1	21.8	9.5	9.6	1.0	3.1	10.7	10.7	1.1	7.0	-	8.4	2.1	3.0	1.5	3.0	4.6	4.9	-	0.44	1	0	0	-	右	
1885			堀 83	I 1・a1	23.2	9.6	10.1	1.5	3.8	10.9	10.8	1.0	6.8	0.9	9.1	-	3.6	5.2	3.4	6.2	5.3	10.1	0.41	2	0	0	-	左	焼棒穿孔
1886			堀 83	I 1・c1	20.3	9.3	-	1.5	3.9	10.1	10.1	1.1	6.7	1.0	6.9	2.6	3.4	2.3	3.3	4.9	2.6	9.3	0.46	1	0	1	0	右	裏面後方に焼印
1887			堀 83	I 1・a1	21.8	9.1	8.2	1.2	3.2	10.6	10.4	1.2	6.6	1.2	8.7	1.7	3.7	0.9	3.7	4.8	4.9	9.0	0.42	1	0	1	1	右	
1888			堀 83	I 1・b1	18.1	6.7	-	1.7	2.7	7.7	7.8	0.8	4.4	1.0	7.8	2.8	2.9	2.2	3.0	3.3	4.4	6.6	0.37	1	0	1	1	左	焼棒穿孔
1889			堀 83	I 1・b1	19.1	7.2	-	1.1	2.2	10.4	10.5	0.7	4.7	0.9	6.6	1.6	3.3	1.0	2.9	3.9	3.3	7.1	0.38	1	0	0	-	右	
1890			堀 83	I 1・b1	19.5	7.9	8.3	1.5	2.2	10.4	9.9	1.0	5.8	0.9	7.5	3.3	3.4	2.7	3.0	4.2	4.0	8.3	0.41	2	0	0	-	左	
1891			堀 83	I 1・b1	20.3	8.2	-	1.5	2.7	10.1	10.3	0.8	5.9	0.9	7.8	1.4	2.7	1.1	2.8	5.5	4.8	8.1	0.40	1	0	0	-	均等	
1892			堀 83	I 1・b1	20.5	7.2	-	1.4	3.3	8.7	9.1	1.0	5.1	1.1	8.4	1.5	3.4	1.5	3.3	5.2	4.4	7.2	0.35	1	0	0	-	左	緒穴径0.5 cm前後
1893			堀 83	I 1・b1	-	8.0	-	1.0	2.7	10.9	10.7	1.9	5.0	1.0	7.8	-	3.1	-	3.0	5.5	4.7	-	-	1	0	1	1	不明	
1894			堀 83	I 1・b1	20.9	8.5	9.0	1.3	2.8	-	11.0	-	-	0.8	1.5	3.3	3.1	2.7	3.0	4.3	4.0	9.0	0.41	2	0	0	-	右	
1895			堀 83	I 1・b1	21.3	-	-	1.1	3.3	10.1	-	1.0	-	-	9.0	1.0	3.2	1.4	3.1	5.0	4.8	-	-	1	0	0	-	均等	焼棒穿孔
1896			堀 83	I 1・b1	21.3	8.2	8.3	1.0	2.7	11.5	11.6	1.1	5.7	0.9	7.3	1.2	3.2	0.6	3.4	4.7	3.1	8.3	0.39	1	0	0	-	右	足場状遺構 106 下層出土
1897			堀 83	I 1・b1	20.9	8.1	8.2	1.4	2.9	10.1	10.6	1.2	5.2	1.1	8.0	3.2	2.7	2.3	2.6	4.7	5.4	8.2	0.39	1?	0	0	-	右	焼棒穿孔、ネズミの齧り痕
1898			堀 83	I 1・b1	21.0	8.8	-	1.3	3.6	10.0	9.9	0.9	6.3	1.1	7.8	1.8	2.8	1.5	2.7	4.0	4.5	8.9	0.42	1	0	0	-	左	焼棒穿孔
1899			堀 83	I 1・b1	21.0	8.4	-	1.3	3.0	10.3	10.3	1.0	5.8	1.0	8.0	3.5	2.8	2.8	3.3	4.7	4.7	-	0.40	2?	0	0	-	均等	焼棒穿孔
1900			堀 83	I 1・b1	21.2	8.4	-	1.3	3.5	9.5	9.2	1.0	5.8	0.9	8.8	1.3	2.9	0.8	3.2	5.3	5.0	8.2	0.40	1	0	0	-	右	
1901			堀 83	I 1・b1	-	8.8	-	1.2	4.1	8.9	9.3	0.9	6.5	0.9	-	1.8	2.8	1.0	2.8	5.3	-	8.8	-	1	0	0	-	右	焼棒穿孔、木釘の痕跡? 3箇所
1902			堀 83	I 1・b1	20.5	-	-	1.1	2.7	11.1	-	1.1	-	-	7.1	2.6	2.8	2.5	2.4	5.9	4.1	8.1	-	1	0	0	-	均等	焼棒穿孔
1903			堀 83	I 1・b1	20.9	8.2	-	1.3	3.2	-	9.4	-	-	1.1	8.2	1.7	3.1	1.3	3.1	5.4	4.8	8.2	0.39	1	0	1	1	右	焼棒穿孔
1904			堀 83	I 1・b1	20.5	7.9	8.1	1.2	3.4	9.2	9.5	1.4	4.9	1.2	8.1	1.6	3.5	0.9	3.3	4.8	3.4	8.1	0.39	1	0	0	-	右	足場状遺構 106 下層
1905			堀 83	I 1・b1	20.6	7.9	8.3	1.0	2.5	10.6	10.5	0.9	5.6	1.0	8.0	2.2	3.0	1.4	3.0	4.9	4.8	8.1	0.38	1	0	1?	0	右	焼棒穿孔
1906			堀 83	I 1・b1	20.7	7.3	7.5	1.5	1.9	11.0	11.0	1.0	5.0	0.8	8.1	4.2	3.2	-	3.5	3.9	4.3	7.5	0.35	1?	0	1	0	右	焼棒穿孔、裏面に焼印
1907			堀 83	I 1・b1	21.2	8.7	8.9	1.4	2.9	10.5	10.5	1.2	5.8	1.2	8.0	3.0	3.0	2.8	2.9	5.0	5.0	8.9	0.41	2	0	0	-	均等	焼棒穿孔
1908			堀 83	I 1・b1	20.9	8.6	8.8	1.2	2.5	9.7	10.2	1.0	6.4	0.8	8.8	1.4	3.3	1.1	3.4	5.1	4.9	8.8	0.41	2	0	0	-	右	
1909			堀 83	I 1・b1	21.1	8.1	8.6	1.2	3.3	9.9	10.2	1.3	5.5	1.2	8.0	2.8	3.1	1.4	3.2	5.0	4.8	8.6	0.38	2	0	1	0	右	足場状遺構 106 下層
1910			堀 83	I 1・b1	21.6	7.5	-	1.2	2.8	10.9	11.3	0.7	5.6	0.7	8.0	2.1	3.1	2.0	2.8	5.2	4.6	7.4	0.35	1	0	0	-	左	焼棒穿孔、緒穴径約 0.8 cm
1911			堀 83	I 1・b1	21.0	8.4	9.0	1.4	3.4	10.3	10.2	1.1	5.6	1.0	7.8	2.5	3.1	1.9	3.1	5.2	4.7	9.0	0.40	2?	0	0	-	左	
1912			堀 83	I 1・b1	21.1	8.8	9.2	1.2	3.6	9.5	9.3	1.1	6.1	1.1	8.6	3.4	3.3	3.0	3.2	5.6	4.9	9.2	0.42	2	0	1	1	左	焼棒穿孔
1913			堀 83	I 1・b1	21.2	8.9	9.6	1.2	2.7	10.9	10.6	0.9	6.6	0.8	8.2	2.3	3.2	1.7	2.9	5.2	4.8	9.4	0.42	2?	0	1	0	左	焼棒穿孔
1914			堀 83	I 1・b1	21.8	9.1	-	1.0	-	11.0	11.0	1.0	6.6	-	8.4	0.7	3.6	0.2	3.6	5.1	5.0	-	0.42	1	0	0	-	右	焼棒穿孔
1915			堀 83	I 1・b1	21.8	9.0	-	1.3	3.1	10.7	10.6	0.8	6.6	1.0	8.5	3.1	3.5	2.1	3.1	5.2	5.3	-	0.41	1	0	1	0	右	焼棒穿孔
1916			堀 83	I 1・b1	21.2	8.4	-	1.6	3.1	10.4	10.6	1.5	5.5	1.6	8.0	1.1	2.7	2.4	2.9	4.7	5.2	8.4	0.40	1	0	0	-	右	焼棒穿孔、緒穴0.5 cm前後
1917			堀 83	I 1・b1	21.8	7.8	-	1.1	2.3	10.8	11.0	1.0	5.3	0.9	8.6	2.4	3.1	1.6	3.1	5.0	5.0	7.8	0.36	1	0	1	1	右	
1918			堀 83	I 1・b1	21.9	8.8	8.9	1.1	3.4	10.5	10.5	0.9	6.5	0.9	8.7	0.9	3.3	0.3	3.3	4.6	4.6	8.9	0.40	2?	0	0	-	右	
1919			堀 83	I 1・b1	22.2	7.5	7.6	1.4	3.5	10.8	10.6	1.1	5.0	1.0	7.9	2.8	3.2	2.2	3.1	5.6	4.5	7.6	0.34	1	0	0	-	右	緒穴裏面に方形の刻り込み
1920			堀 83	I 1・b1	21.6	7.8	8.1	1.1	2.7	11.0	11.0	0.9	5.3	0.9	8.1	4.5	2.8	4.3	2.9	4.9	5.0	8.1	0.36	2?	0	0	-	左	焼棒穿孔
1921			堀 83	I 1・b1	21.8	7.4	7.7	1.2	2.8	11.3	11.1	1.1	5.1	1.0	7.9	3.8	3.5	3.2	3.3	3.6	3.7	7.4	0.34	1	0	0	-	右	ネズミの齧り痕
1922			堀 83	I 1・b1	22.1	7.3	7.7	1.2	2.4	11.6	11.7	0.9	5.5	0.9	8.3	1.8	3.3	1.7	3.3	4.2	3.8	7.7	0.33	2	0	1	1	左	
1923			堀 83	I 1・b1	22.8	7.9	-	1.7	2.7	12.5	12.5	1.2	5.3	1.1	8.0	2.2	3.7	1.0	3.2	4.1	4.4	7.9	0.35	1	0	1	1	右	緒穴裏面に方形の刻り込み、後蓋に鉄釘1箇所
1924			堀 83	I 1・c1	15.9	7.4	-	1.0	2.3	8.2	8.6	0.8	5.7	0.7	5.7	2.1	2.3	1.7	1.9	2.8	3.3	7.2	0.47	1	0	0	-	左	
1925			堀 83	I 1・c1	-	8.9	9.1	1.3	2.9	10.4	10.6	0.9	6.5	1.2	-	1.6	3.4	-	-	4.4	-	9.1	-	2?	0	0	-	均等	
1926			堀 83	I 1・c1	20.1	8.5	8.5	1.4	2.3	10.0	9.8	0.9	6.2	0.9	8.3	2.1	2.9	1.3	3.2	3.3	4.5	8.5	0.42	1	1	1	1	右	

表 14 堀 83 出土下駄計測表 (3)

遺物 番号	挿図	写真	出土遺構	分類	a	b-1	b-2	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	縦横比	歯形	塗り	刻印	施文 方法	歯の 厚減	備 考
1927			堀 83	I 1・c1	21.1	7.9	-	1.0	3.9	9.3	9.3	0.9	6.0	0.7	8.0	1.4	2.9	0.8	2.9	4.9	4.8	-	0.37	1	0	0	-	不明	
1928			堀 83	I 1・c1	21.9	9.0	-	1.0	3.9	11.5	11.5	0.9	6.8	1.1	6.9	1.4	4.2	0.7	3.5	4.8	2.8	8.9	0.41	1	0	0	-	左	
1929			堀 83	I 1・c1	21.6	7.4	7.7	1.3	2.9	10.8	11.1	1.0	5.0	0.9	7.8	1.9	3.2	1.0	3.3	3.8	4.0	7.7	0.34	-	0	0	-	右	
1930			堀 83	I 1・c1	22.0	9.5	-	1.1	3.0	10.4	10.6	1.2	6.2	1.1	8.7	4.2	2.9	4.3	3.1	5.3	5.3	9.0	0.43	1	0	0	-	右	
1931			堀 83	I 1・d	22.3	8.8	-	1.1	2.9	12.6	12.6	1.4	6.2	1.2	7.1	1.0	3.5	1.3	3.7	4.1	2.6	8.8	0.39	2?	0	0	-	左	
1932			堀 83	I 1・a1	23.2	10.9	-	2.0	3.1	10.4	10.3	1.4	7.6	1.4	10.3	2.3	4.1	1.5	3.8	3.4	6.2	10.9	0.47	1	0	0	-	均等	
1933			堀 83	種別不明	14.4	5.8	-	1.0	2.0	7.2	7.2	0.8	3.7	0.9	5.4	1.5	1.7	1.2	2.3	-	2.5	5.4	0.40	2?	0	0	-	左	裏面に「う」の字状の窪み
1934			堀 83	I 2・a1	14.6	6.4	-	1.0	2.5	6.8	6.8	0.8	4.6	0.8	5.5	0.5	2.2	0.3	2.1	-	2.3	5.9	0.44	1	0	0	-	均等	
1935			堀 83	種別不明	-	6.9	-	1.0	3.4	9.2	9.2	1.1	4.4	1.3	-	3.6	2.1	-	-	-	-	-	-	-	1	0	0	右	
1936			堀 83	I 2・a1	20.2	7.8	-	1.0	2.8	10.4	10.4	1.2	5.1	1.0	7.8	2.5	1.9	0.9	3.3	-	3.7	-	0.39	1	1?	1	-	右	焼棒穿孔
1937			堀 83	I 2・a1	21.3	8.4	-	1.1	3.3	10.0	9.8	1.0	6.0	1.0	8.7	2.3	2.7	0.8	3.6	-	4.0	7.9	0.39	2	1	0	-	左	
1938			堀 83	I 2・a1	21.3	7.5	-	1.1	2.8	10.6	10.5	0.8	5.4	0.7	8.1	1.9	1.7	0.4	3.4	-	3.7	6.9	0.35	1	1	0	-	左	
1939			堀 83	I 2・a1	21.7	8.4	-	1.2	2.6	11.6	11.6	0.8	5.9	0.8	7.8	1.9	2.4	0.4	3.5	-	4.1	-	0.39	1	0	0	-	左	
1940			堀 83	I 2・b1	16.4	6.2	6.4	1.2	2.0	8.7	8.5	0.8	4.5	0.8	6.0	1.7	1.9	0.6	2.4	-	3.4	6.3	0.38	1	0	0	-	右	
1941			堀 83	I 2・b1	16.8	6.4	6.7	1.1	2.5	7.4	7.6	0.8	4.5	0.8	7.0	0.8	1.5	0.4	3.0	-	3.9	-	0.38	2	0	1	1	右	
1942			堀 83	I 2・b1	21.7	6.9	7.2	1.3	3.8	9.7	9.5	0.9	4.9	0.7	7.4	3.4	1.7	1.1	3.3	-	3.6	7.1	0.32	2	0	0	-	左	焼棒穿孔?
1943			堀 83	I 2・b1	21.3	6.7	7.1	1.3	3.1	9.8	9.8	0.7	5.2	0.6	8.8	1.8	1.8	0.8	3.0	-	5.1	-	0.31	2	0	0	-	右	
1944			堀 83	I 2・b1	21.4	7.6	8.0	1.5	2.7	11.3	10.9	0.9	4.9	1.1	7.9	3.3	1.9	0.8	3.2	-	4.3	7.1	0.36	2	0	0	-	左	焼棒穿孔
1945			堀 83	I 2・b1	21.6	6.5	7.1	1.2	3.0	11.1	11.3	0.7	4.3	0.8	7.5	3.6	2.1	3.3	3.8	-	3.4	6.7	0.30	2	0	0	-	均等	
1946			堀 83	I 2・b1	21.6	7.2	-	1.3	3.5	10.5	10.5	0.9	4.9	0.9	8.0	2.9	2.1	1.0	3.0	-	5.0	6.9	0.33	1	0	0	-	右	焼棒穿孔
1947			堀 83	I 2・b1	21.5	8.1	8.3	1.3	3.2	11.1	10.9	0.8	5.7	0.9	7.6	2.8	-	1.5	4.0	-	3.8	7.6	0.38	2	0	1	1	右	焼棒穿孔
1948			堀 83	I 2・c1	18.9	7.4	7.6	1.0	1.9	10.1	10.6	0.7	5.8	0.6	7.1	1.4	1.5	0.9	3.7	-	2.8	7.4	0.39	1	0	0	-	均等	前歯を鉄釘で4箇所補修
1949			堀 83	I 2・c1	20.9	6.4	6.6	1.0	3.2	10.9	10.9	0.8	4.4	0.6	6.9	2.9	1.8	2.1	3.5	-	3.2	6.1	0.31	1	0	0	-	右	
1950			堀 83	I 2・c1	21.8	8.4	8.7	1.1	3.9	9.7	9.7	-	5.8	1.0	8.8	2.8	2.3	1.7	3.1	-	5.0	-	0.39	1	0	1	0	均等	
1951			堀 83	I 4・a1	-	7.2	-	1.2	4.0	-	10.5	-	-	-	-	0.6	3.8	0.5	-	-	-	-	-	-	1	0	1	均等	
1952			堀 83	I 4・b1	17.8	7.1	7.3	1.1	2.7	10.0	10.3	0.8	4.7	1.0	5.0	1.9	1.8	0.8	3.3	-	-	6.2	0.40	1	0	0	-	右	
1953			堀 83	I 4・c1	21.2	6.5	-	1.3	3.0	10.7	10.7	0.7	4.7	0.8	7.7	1.3	2.2	0.5	5.7	-	-	6.2	0.31	1	0	0	-	均等	
1954			堀 83	I 5・a1	21.5	8.4	-	1.1	3.0	10.5	10.5	0.9	6.2	0.9	8.5	1.8	2.3	0.4	5.9	-	-	-	0.39	1	1	0	-	左	焼棒穿孔、裏面一部炭化
1955			堀 83	I 5・b2	21.1	8.1	-	1.1	3.1	-	11.2	-	-	0.8	7.1	1.1	2.8	0.2	3.0	-	-	-	0.38	1	0	0	-	右	後歯に鉄釘穴2箇所
1956			堀 83	I 5・b2	21.4	-	-	1.1	-	-	-	-	-	1.2	7.3	0.8	3.9	0.6	3.7	-	-	-	-	-	1	0	0	不明	
1957			堀 83	I 6・b1	20.7	7.9	8.0	1.5	3.7	10.8	10.9	0.8	6.3	0.7	6.5	1.3	6.9	1.3	4.7	-	-	8.0	0.38	1	0	0	-	均等	緒穴径 0.5 cm前後
1958			堀 83	I 6・b2	-	9.3	-	1.2	3.1	-	0.9	7.2	0.9	7.4	1.5	7.0	0.8	6.7	-	-	-	9.3	-	1	0	0	-	均等	
1959			堀 83	I 6・d	24.3	7.6	-	1.6	3.2	14.0	13.8	1.1	4.8	1.1	7.2	1.3	6.3	1.3	6.3	-	-	7.6	0.31	1	0	1	1	右	裏面に縞刻、前歯一部炭化
1960			堀 83	I 6・c1	21.4	8.3	-	1.0	3.1	11.1	11.1	-	6.2	0.9	7.4	0.7	7.4	0.3	6.8	-	-	8.3	0.39	1	0	1	1	左	緒穴裏面に方形の列り込み
1961			堀 83	I 6・c1	21.6	9.2	9.3	1.1	3.4	10.4	10.4	0.9	7.1	0.9	8.3	1.4	7.1	1.1	7.2	-	-	9.3	0.43	1	0	0	-	右	
1962			堀 83	I 6・c1	21.8	9.3	-	1.3	3.7	10.6	10.5	0.9	7.2	1.0	8.1	0.9	7.4	0.8	7.4	-	-	9.3	0.43	1	0	0	-	均等	
1963			堀 83	I 6・c1	22.4	8.9	-	1.7	3.6	10.4	10.5	1.2	6.1	1.2	8.5	1.9	7.2	1.7	7.0	-	-	8.9	0.40	1	0	0	-	均等	前の緒穴付近に鉄釘1箇所、一部炭化
1964			堀 83	I 7・b2	-	-	-	1.0	-	12.6	12.1	-	7.8	-	-	1.4	3.1	1.6	2.6	-	-	-	-	-	1	0	0	不明	
1965			堀 83	I 7・c1	21.2	9.3	-	1.0	2.9	11.1	11.4	0.9	7.4	0.9	7.3	2.4	1.8	1.3	2.1	-	2.2	9.2	0.44	1	0	0	-	左	
1966			堀 83	Ⅲ 1・a1	-	-	10.6	2.6	3.6	9.2	9.4	1.4	4.5	-	-	3.8	1.9	-	-	6.0	-	10.6	-	2	0	0	-	均等	後方差歯のホソ穴の部分で切断
1967			堀 83	Ⅲ 1・a1	-	-	10.4	2.5	-	-	-	-	5.4	1.0	7.1	-	1.7	4.2	1.9	-	5.3	10.4	-	2	0	0	-	右	前方差歯欠損
1968			堀 83	Ⅲ 1・a1	22.0	8.8	-	2.0	3.3	10.9	10.7	0.8	6.5	1.0	8.3	-	-	-	-	-	6.2	5.8	-	0	0	0	-	不明	
1969			堀 83	Ⅲ 1・a1	22.9	9.2	11.2	4.1	-	12.2	12.5	1.3	6.4	1.1	8.4	-	-	4.7	1.5	4.7	5.5	11.2	0.40	2	0	0	-	左	前方差歯欠損
1970			堀 83	Ⅲ 1・b1	21.1	7.9	-	1.4	2.6	11.3	11.3	0.9	5.8	0.7	7.6	-	-	-	-	-	4.9	5.3	-	0	0	0	-	不明	一部炭化、前歯を釘で2箇所補修
1971			堀 83	Ⅲ 1・b1	22.0	-	-	2.6	3.9	9.9	9.9	1.0	5.9	-	8.5	3.3	1.8	1.7	1.6	5.7	5.2	-	-	2	0	0	-	左	
1972			堀 83	Ⅳ 1・a1	20.8	8.6	-	1.2	3.8	9.8	9.4	0.9	6.1	1.0	7.8	0.3	3.2	-	-	5.5	-	8.7	0.41	1	0	0	-	不明	前後の歯、各2箇所ずつ鉄釘で補修

(3) 銭貨

堀 83 からは 12 点の銭貨が出土している。堀 83 内から検出した墓 107・112 からも銭貨が出土しているが、これらは個別に報告することとし、ここでは堀 83 の埋土内から出土した銭貨のみを扱うことにする。

堀 83 から出土した銭貨の内訳は表 15 に記したとおりであり、堀 83 の南半部からの出土が多い。

なお、各銭貨の計測・計量等に関しては基本的には隣接する調査地点である府警本部 1 期地区の調査報告時の方法を踏襲する（大文セ 2002）。

出土銭貨を銭種別にみると、紹聖元寶が 2 点（1980・1981）出土している以外は、開元通寶（1973）、嘉祐通寶（1974）、熙寧元寶（1975）、景德元寶（1976）、元豊通寶（1977）、元祐通寶（1978）、皇宗通寶（1979）、聖宋元寶（1982）、正隆元寶（1983）、政和通寶（1984）が各 1 点ずつ出土している。

出土銭貨中では、開元通寶が唐銭で 621 年初鑄で最も古く、正隆元寶が金銭で 1156 年初鑄で最も新しい。これ以外は北宋銭もしくは北宋銭を模鑄したものである。なお、嘉祐通寶 1974 は厚さが 1 mm 以下と薄く、質量も 1.5 g を切っており、背面の輪や郭も鑄出されているものの、模鑄銭である可能性が高い。

すでに報告した土坑 162 では 94 点の銭貨を確認しているが、これと比較すると土量比からみても堀 83 からの出土銭貨は著しく少ない。これは、様々な制約によって、堀埋土の洗浄による遺物抽出作業ができなかったことに起因している可能性が高いことを付記しておく。

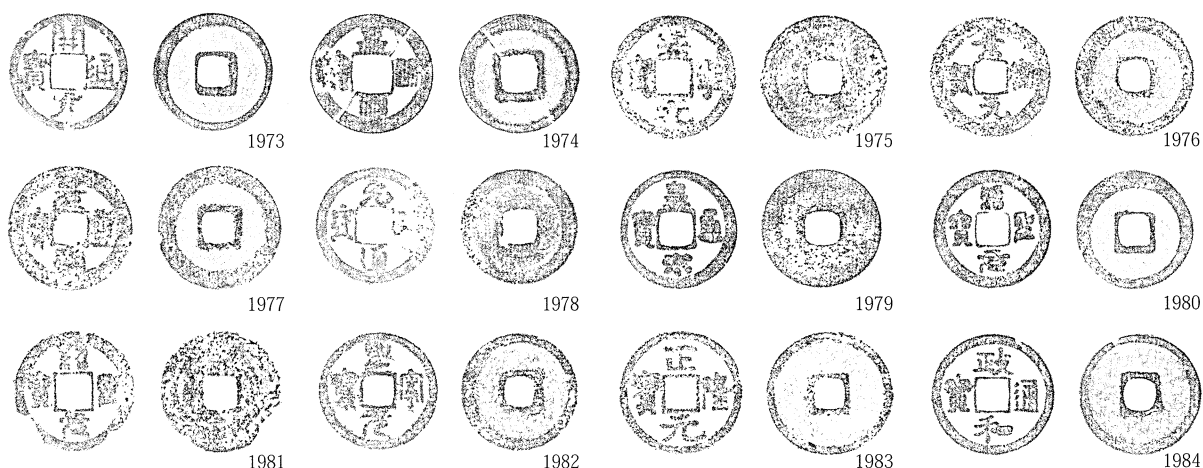


図 213 堀 83 出土銭貨 (2/3)

表 15 堀 83 出土銭貨一覧

遺物番号	旧銭番号	調査区	遺構	種類	直径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	残存率	直径 / 質量	登録番号	備考
1973	268	2d 南	堀 83	開元通寶	23.91	6.55	1.34	3.14	完存	0.13	2477	
1974	271	1e	堀 83	嘉祐通寶	23.96	7.57	0.95	1.43	完存	0.06	3991	篆書
1975	264	2d 北	堀 83	熙寧元寶	25.07	6.63	1.22	3.38	完存	0.13	2093	
1976	262	2d 北	堀 83	景德元寶	24.36	6.21	1.37	3.54	完存	0.15	2093	
1977	261	2c	堀 83	元豊通寶	25.25	6.15	1.16	3.34	完存	0.13	2044	篆書
1978	270	2d	堀 83	元祐通寶	23.37	6.67	1.09	2.83	完存	0.12	2930	行書
1979	269	2d	堀 83	皇宗通寶	23.90	6.81	1.16	3.01	完存	0.16	2690	
1980	267	2d 南	堀 83	紹聖元寶	23.79	6.14	1.62	4.19	完存	0.18	2476	
1981	266	2d 北	堀 83	紹聖元寶	24.34	6.82	1.11	2.45	やや欠		2093	篆書
1982	265	2d 北	堀 83	聖宋元寶	23.56	5.85	1.08	2.27	完存	0.10	2093	
1983	263	2d 北	堀 83	正隆元寶	24.73	5.95	1.51	3.61	完存	0.15	2093	
1984	272	1d	堀 83	政和通寶	24.47	6.29	1.18	3.53	完存	0.14	3992	分楷

(4) 金属製品

1985～1992は煙管である。いずれも真鍮製と考えられる。

1985・1986は雁首である。1985は細く短めの首部をもち、火皿の斜め後方には穿孔がある。1986は首部の途中で折れ曲がる。羅宇側には隆帯が付く。火皿の内側には黒色物質が付着する。

1987・1988は羅宇である。1987は雁首側に隆帯が残る。隆帯は雁首側を花卉状にし、羅宇側には2条の凹線が巡る。羅宇には3箇所5条の凹線を巡らせている。吸口との接合部にはヤスリ痕が残る。1988は斜格子の陽刻がある。銀蝋付けされた接合部で文様が不整合となっていることから、筒状に加工する以前に裏面から施文されたものと判断される。吸口との接合部は細くなっている。

1989～1992は吸口である。1989～1991には肩が残る。1989には菊文と考えられる陽刻文様がある。1990は口付の部分をわずかに肥厚している。1991は肩が斜めで長めであるが、吸口から口付にかけては太さが均一な筒状を呈している。1992は羅宇側に1条の凹線が巡る。

1993～1998は刀装具である。1993は切羽である。やや下膨れの楕円形を呈する。平造り短刀の柄側用であると考えられる。全体に切り回し仕上げである。一方の側面には小柄櫃用削り込みがある。1994は兜金である。土圧によって変形しているが、外面には黒漆が残る。

1995～1998は小柄である。

1995は柄部のみが残る。櫛などを描いたと考えられる線刻文様をもち、その周囲は細かい魚々子で埋めている。1996は文様を持たない棒小柄であり、戸尻は一文字である。柄部の途中で折れ曲がっており、刃部も先端を欠損している。1997は小刀で柄は残らない。片切刃造で研ぎ減りがみられる。銘は確認できない。1998の柄部は1996とほぼ同形同大であるが、片切刃造の刃部は大振りである。1999は足場状遺構106で出土した板材2423に打ち込まれていた鉄砲玉である。直径は平均して1.27cm、質量は4.33gである。

2000・2001は穿孔をもつ板状製品である。

2000は両端を装飾的に加工するが、2001では隅欠きを行うのみである。2001は一方の先端が斜めに折れ曲がっているが、元来は左右対称であったことが窺われる。いずれも、継ぎ目を補強する飾り金具と考えられる。

2002は桿秤である。鹿角や象牙等に金属を継いだ「つなぎ桿」とよばれる桿秤の金属部分である。真鍮の薄板を筒状にし、2方向に目盛を刻んでいる。3本の取緒と皿を吊るすための穿孔がある。目盛には銀色を呈する別の金属が埋め込まれている。秤屋健蔵氏のご教示によれば、現存資料との対比から、復元長は7寸5分(22.725cm)と考えられるとのことである。また、秤量は末目で17匁(1目盛:1分)、中目で50匁(1目盛:1匁)、元目で160匁(1目盛:1匁)であったと推定される。

2003は壺金である。先端部は折損して折れ曲がっている。

2004は覆輪である。断面U字形で一方の端部は欠損する。表面には時雨鑿がかけられている。

2005は真鍮製の椀である。堀機能時に堆積していた黒色粘土層中から出土したものである。土圧によって変形していたが、ここでは復元的に実測した図を掲げている。器壁の厚さはわずか0.14mmであり、口縁端部は外側に折り返して玉縁状に仕上げている。底面には低い高台を付している。外面と見込みには打刻による文様が施されている。器壁が極端に薄いことや、全面に文様を施すことなどから、実用的なものではない可能性が高いが、用途は不明である。

2006は鈴である。上下が別体で作られる鈴の上半部である。大きく変形し、上部には長方形の穿孔

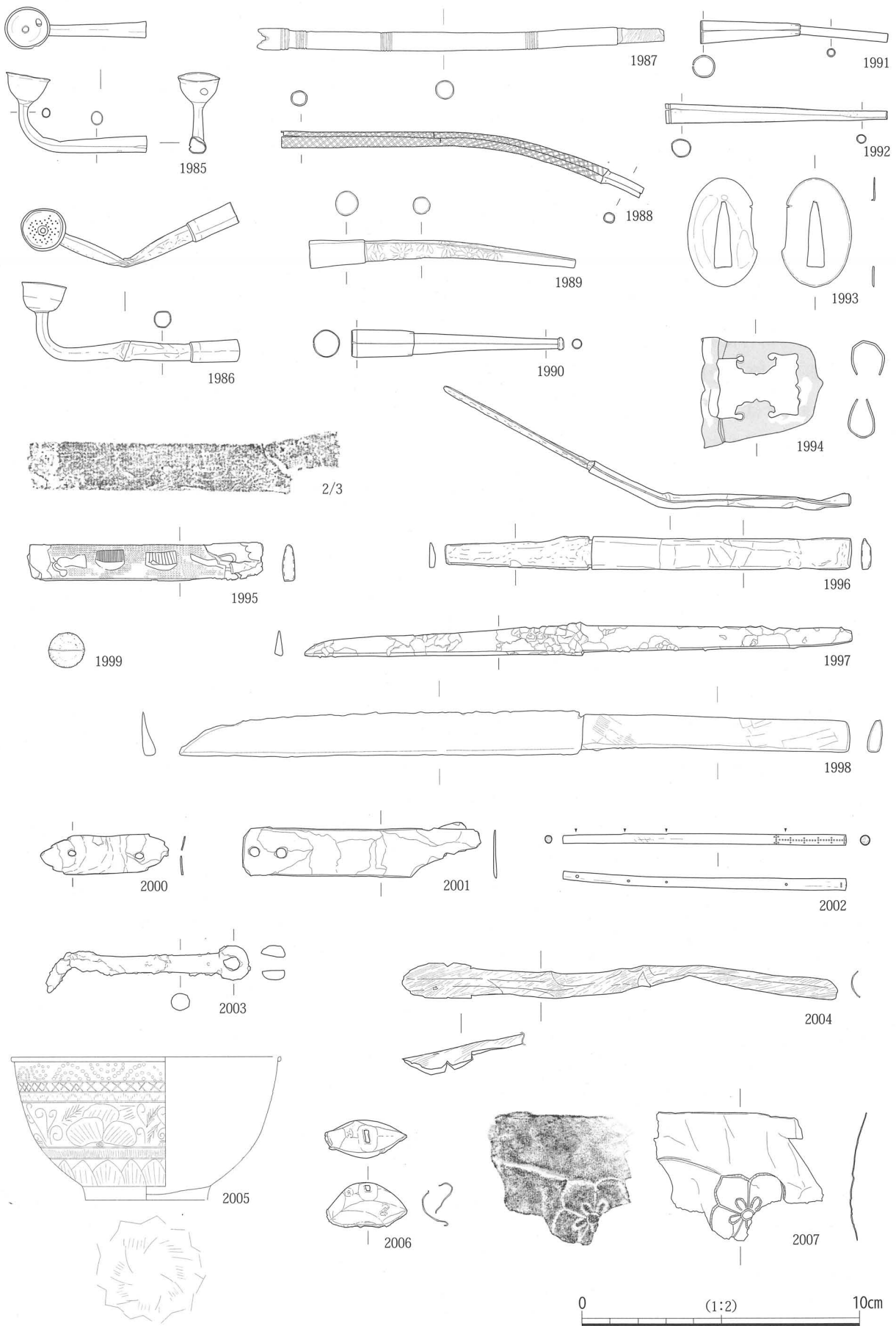


图 214 堀 83 出土金属製品 (1)

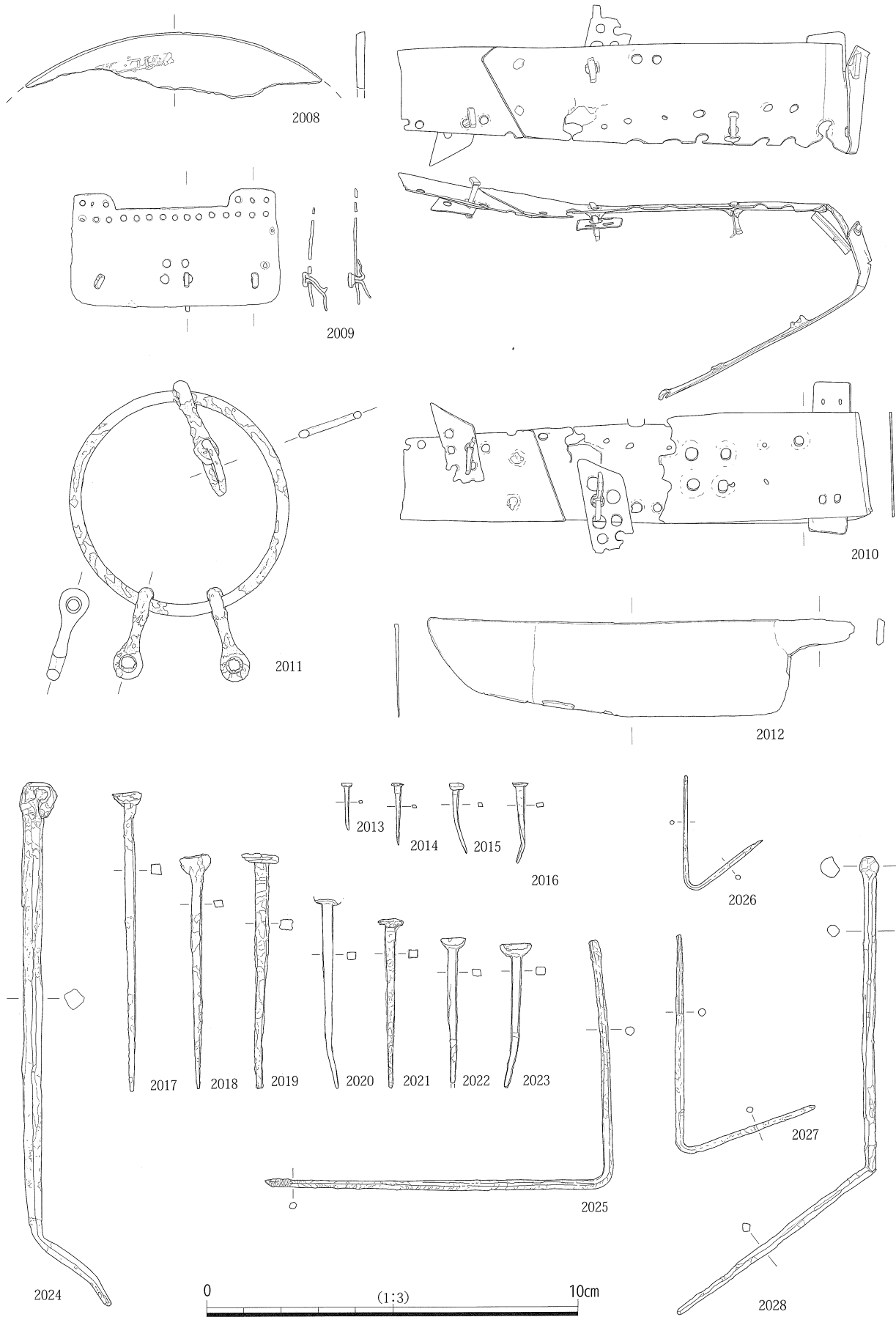


図 215 堀 83 出土金属製品 (2)

は残るが、鈕自体は欠失している。

2007 は文様をもつ銅製品である。厚さは 0.39 mm を測るのみである。上端の一部が残るのみで、他辺はいずれも欠損している。全体に変形が著しく、形状は不明である。桔梗とも考えられる文様が打刻されている。

2008 は鉄製の鑄造製品である。円形であるとする、直径 17 cm 前後に復元できる。用途は不明である。

2009・2010 は甲冑の部品と考えられる鉄製品である。

2009 はコの字形を呈する板状の鉄製品であり、天地左右ともに緩やかに湾曲している。上部には穿孔が横方向に直列し、下方には中央に 4 箇所、左右に 1 箇所ずつの穿孔がある。これとは別に右端には 2 箇所に穿孔がなされる。下方の穿孔には 3 箇所に割りピン状の留め具が残る。

2010 は帯状を呈する板状の鉄製品である。2009 と同様に穿孔があり、割りピン状の留め具に固定された小札が 3 箇所に残る。小札は 2 箇所が本小札であるが、1 箇所は伊予札である。上端に並ぶ穿孔は半分を残して切り取られている上に、複数の板を継ぎ合わせている。

2011 は素環の鏡板をもつ轡である。3 個の連結金具があり、そのうちの一つには円環が残る。2012 は包丁である。刃部の一部はわずかに折れ曲がっている。

2013～2023 は鉄釘である。堀 83 からは 66 点の鉄釘が出土しているが、ここでは完形もしくは完形に近い 11 点を図化した。出土した鉄釘は長短の差はあるものの、多くは頭巻の角釘である。2013～2016 は 8 分から 1 寸半、2017 は 5 寸、2018・2019 は 4 寸、2020・2021 は 3 寸、2022・2023 は 2 寸半を意図して作られたものと考えられる。なお、2018 は未使用である。

2024・2025・2028 は火箸である。2024・2028 は頭部を折り返して不整な球形としている。2025 は頭部を欠損する。2026・2027 は先端を尖らせた棒を鋭角に折り曲げた製品である。

(5) 石製品

2029～2032 は硯である。2029 は隅丸の硯で、陸側の端部は欠失している。2030 は陸側の一部が残るのみである。厚さが薄く、小型の硯であると考えられる。2031 は陸の一部が残るのみである。形状からみて大型の硯であったと考えられる。2032 は周縁の内側を隆帯状に加工した硯である。

2033～2041 は砥石である。砥石はこれ以外に台に装着した状態で出土したものがある (1738)。2033 は方柱形を呈するものであり、表裏 2 面を使用している。2034～2036・2038～2040 はいずれも砥石の破片であり、片面のみに使用痕が残る。2037 は表面に U 字形の溝状の使用痕が残る。2041 は薄い板状の砥石で表裏面ともに使用痕が残る。

2042～2045 は五輪塔である。2045 が和泉砂岩製である以外はいずれも花崗岩製である。2042 は一石五輪塔であるが、地輪は打ち欠かされている。側面が部分的に被火によって煤が付着している。2043 は空風輪である。下部にはほぞが作り出されている。2044・2045 は火輪部分の破片である。2045 には四方に梵字が刻まれている。2044 とともに風輪および火輪は人為的に打ち欠かされている。

2046・2047 はいずれも花崗岩製石臼の上臼である。2046 は全体の 2 分の 1 弱が残る。破断面をみると、下面中央に深さ約 1.5 cm に芯棒受けが彫られている。この横には供給口が貫通している。側面には破断面の 2 箇所に挽き木を差し込むほぞ穴が確認できる。

2047 は全体の 2 分の 1 が残る。破断面をみると、下面中央に深さ約 1.2 cm に芯棒受けが彫られている。この横には供給口が貫通している。側面には破断面の 2 箇所に挽き木を差し込むほぞ穴が確認できる。臼の目は供給口を中心として変則的に刻まれている可能性がある。

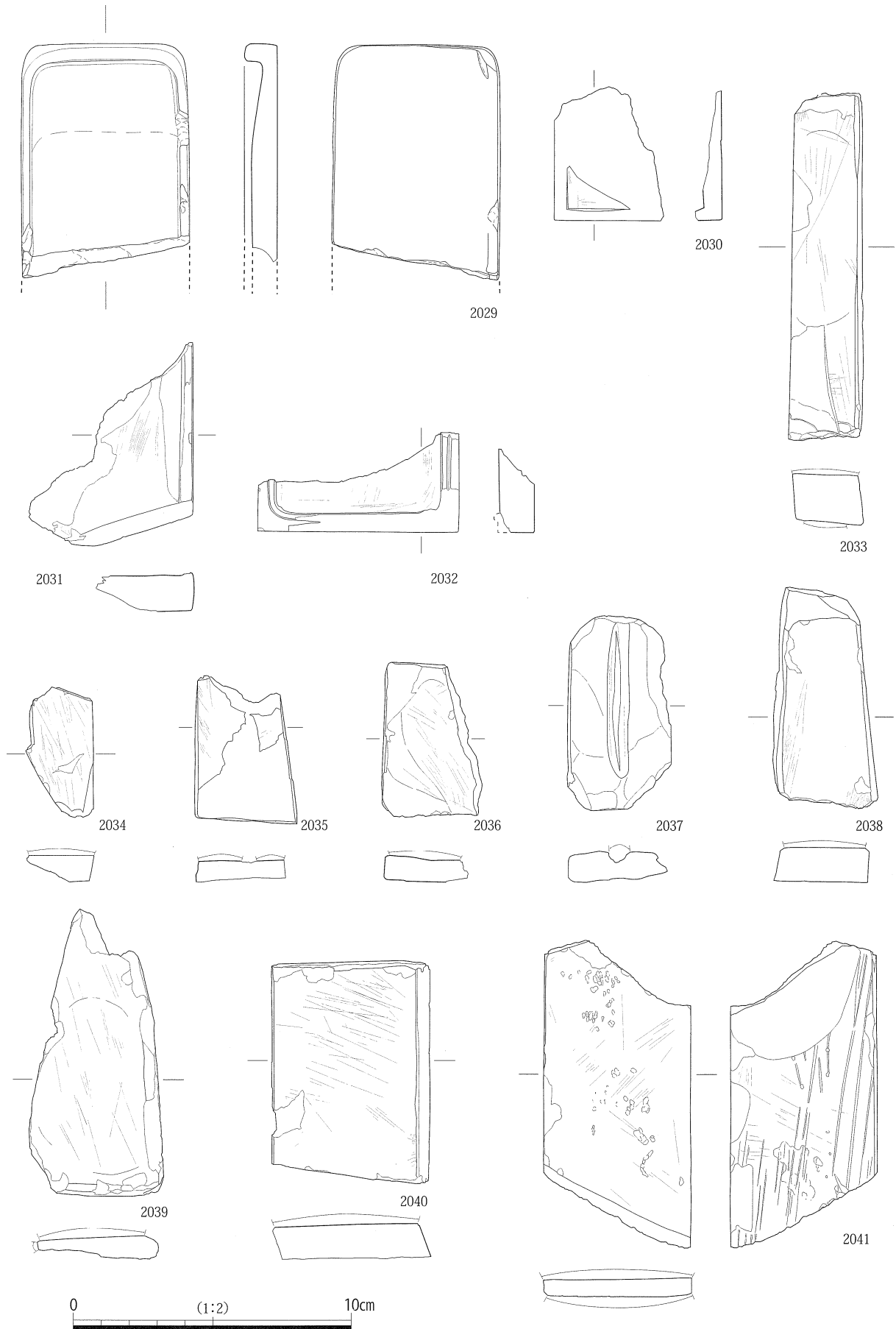


図 216 堀 83 出土石製品 (1)

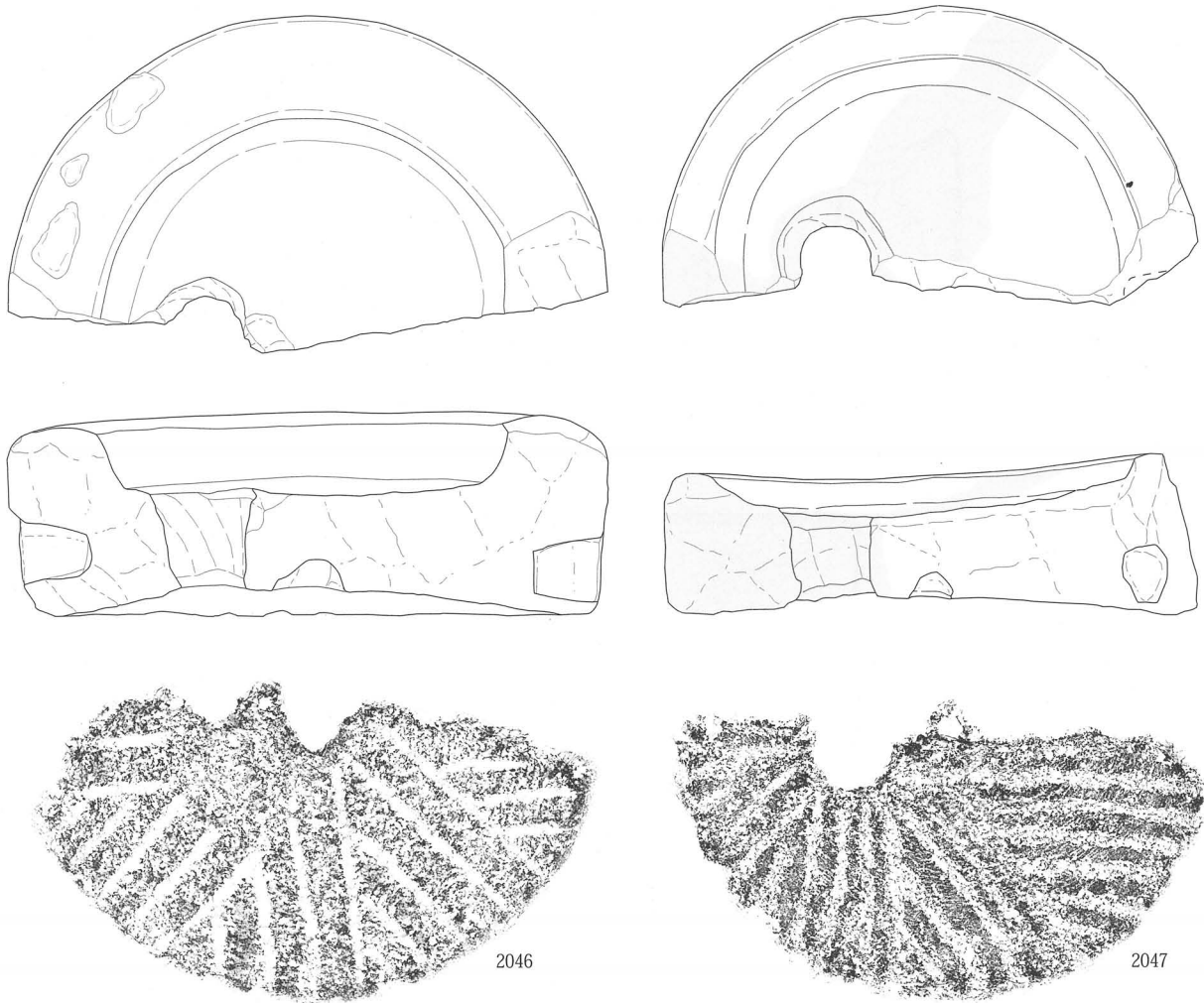
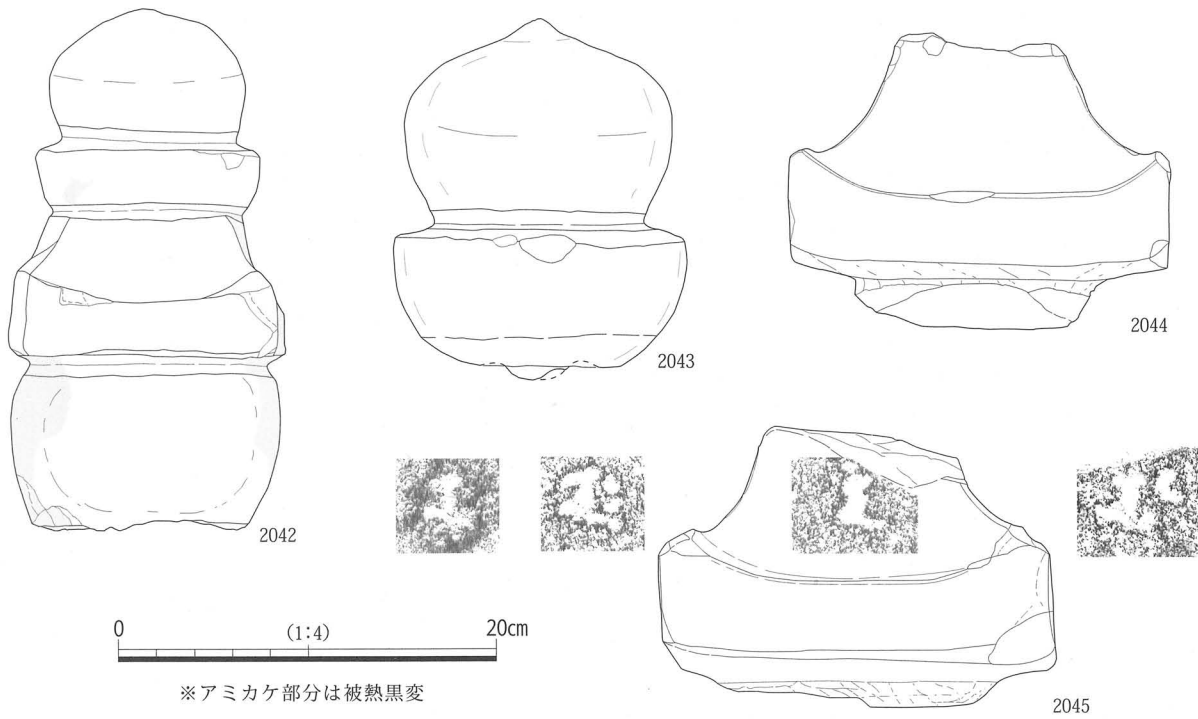


図 217 堀 83 出土石製品 (2)

(6) 金属加工関連遺物

2048・2052～2057は鞆羽口である。

2048は他例に比して小振りで、外径7.46cm、内径2.25cmを測る。先端の溶着物の付着状況からみて、炉には82°前後で挿入されていた可能性が高い。

一方、2052～2057はほぼ同形同大の鞆羽口である。いずれも完存せず、全長は不明である。

外径は8.21cm～8.88cmであり、平均すると8.50cmを測る。内径は3.25cm～3.83cmで、平均すると3.54cmを測る。

先端の溶着物の付着状況からみて、炉には63°～84°前後の角度で斜め上方から挿入されていたものと考えられる。

2049～2051は土製の鋳型である。

2049は内面が緩やかに湾曲する粗型である。真土は残らないが、内面を中心に被熱が顕著であり、赤褐色を呈している。

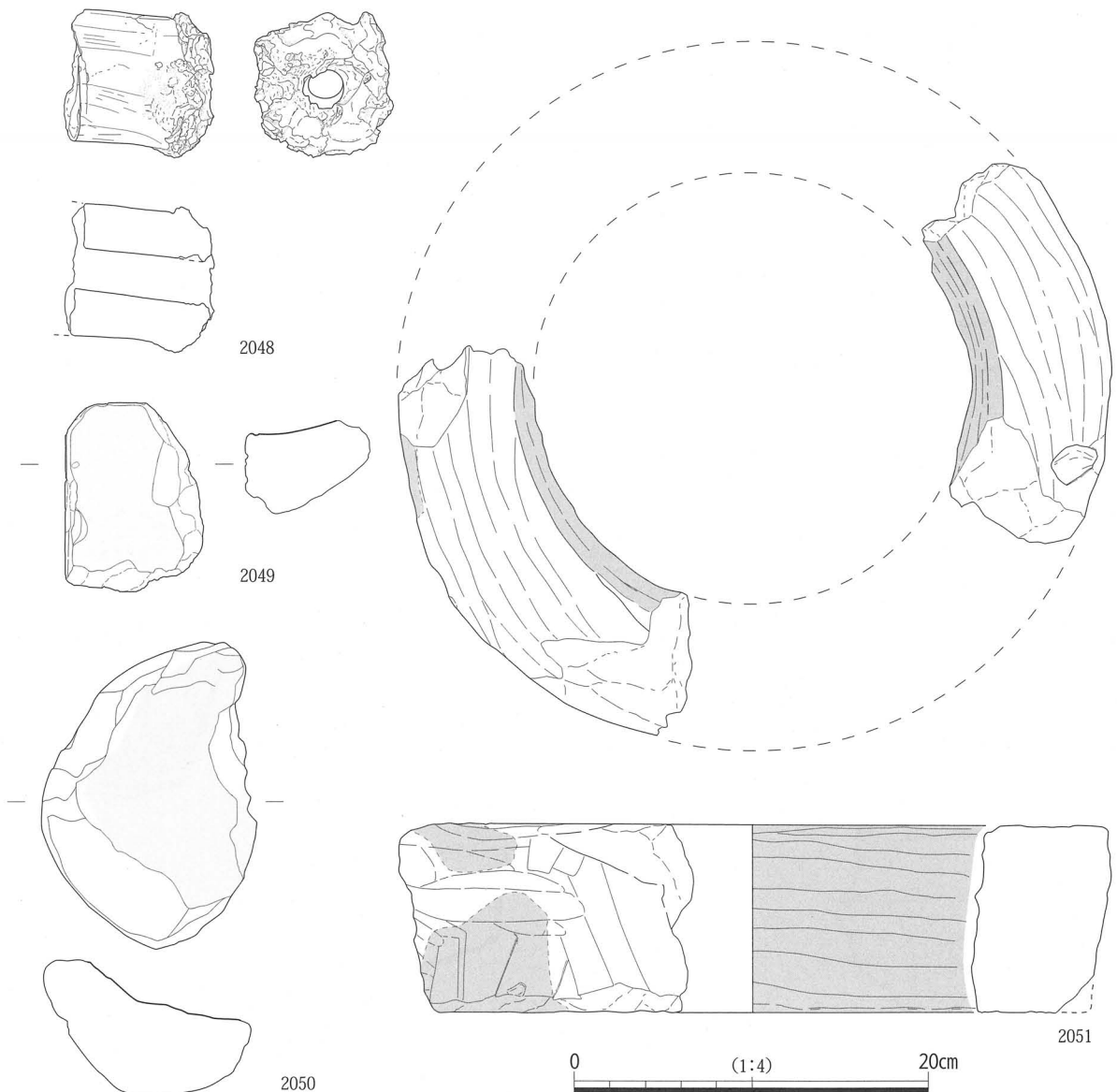


図 218 堀 83 出土鞆羽口・鋳型



图 219 堀 83 出土箭羽口

2050は椀形の粗型の破片である。内面の一部に真土が残るが、全体に残りは悪い。鍋の鋳型である可能性もあるが断言はできない。

2051は環状粗型である。多量の粉殻を含む粘土で作られている。出土した2片は直接的には接合しないが、成形の特徴などから同一個体であると考えられる。復元される内径は約24cm、外径は約38cmである。高さは約10cmである。

(財)大阪市文化財協会が調査を行った広島藩大坂屋敷跡の発掘調査で出土した環状粗型との対比でいえば、中型に属する(大阪市文協2004)。上面および内面は円周に沿って強いナデ調整が行なわれている。真土はまったく残らないが、内面および下面は被熱で黒褐色に変色している。

なお、本報告書には掲載していないが、約28.1kgのスラグが出土している。ただし、炉本体に破片などは確認できない。

(7) その他の遺物

2058～2062は縄であり、2058・2059は棕櫚縄、2060～2062は藁縄である。

2058は2本撻りした縄を3本撻りしたものである。両端は破断しており、長さ約60cmが残る。直径は約9.5mmである。

2059は2058と同様に2本撻りした縄をさらに3本撻りしたもので、2本の縄を軽く括ったような状態で出土している。長さはそれぞれ約60cm、65cmである。いずれの縄ともに先端は旧状を残していない。

2060・2061は2本撻りした縄を2本撻りにしたものである。2060は残存長約15cm、直径2.6cm、2061は残存長約18cm、直径1.1cmである。

2062は2本撻りした縄を3本撻りしたものである。残存長は約25cm、直径は2.1cmである。

2063～2066は箒である。

いずれも棕櫚を用い、直径3mm前後の細い棕櫚縄を3段で交互に縫い込んで結束している。長さは先端がすり減っていることから、一定ではない。最も残りのよい2065の長さは約32cmである。幅は先端で広がるが、結束部分ではおおむね18～20cmにおさまる。

2063では中央に竹の柄がわずかに残っている。他のものは竹の柄は残らないが、2065や2066では中央部分の結束が緩んでおり、元来は当該部分に竹の柄が差し込まれていたものと判断される。

2067は不明製品である。ペレット状を呈するもので、蠟の匂いがする。

表面には布や袋に入れられていたためであろうか、絞り目が残る。また、表面にはネズミと考えられる齧歯類に齧られた痕跡が残る。現状では固形化しているが、ネズミの齧り痕はやわらかい段階についていたものと考えられる。

表16 堀83出土鞆羽口計測表

遺物番号	挿図	写真図版	残存長 (cm)	外径 (cm)	内径 (cm)	推定挿入角度	備 考
2048	218	213	8.00	7.42	2.30	82°	
2052	219	214	9.81	8.51	3.47	63°	
2053	219	214	13.31	8.21	3.25	84°	
2054	219	214	12.50	8.88	3.83	79°	
2055	219	214	11.57	8.37	3.45	83°	
2056	219	214	12.65	8.79	3.63	84°	
2057	219	214	13.07	8.24	3.59	74°	先端下方に多量の溶着物

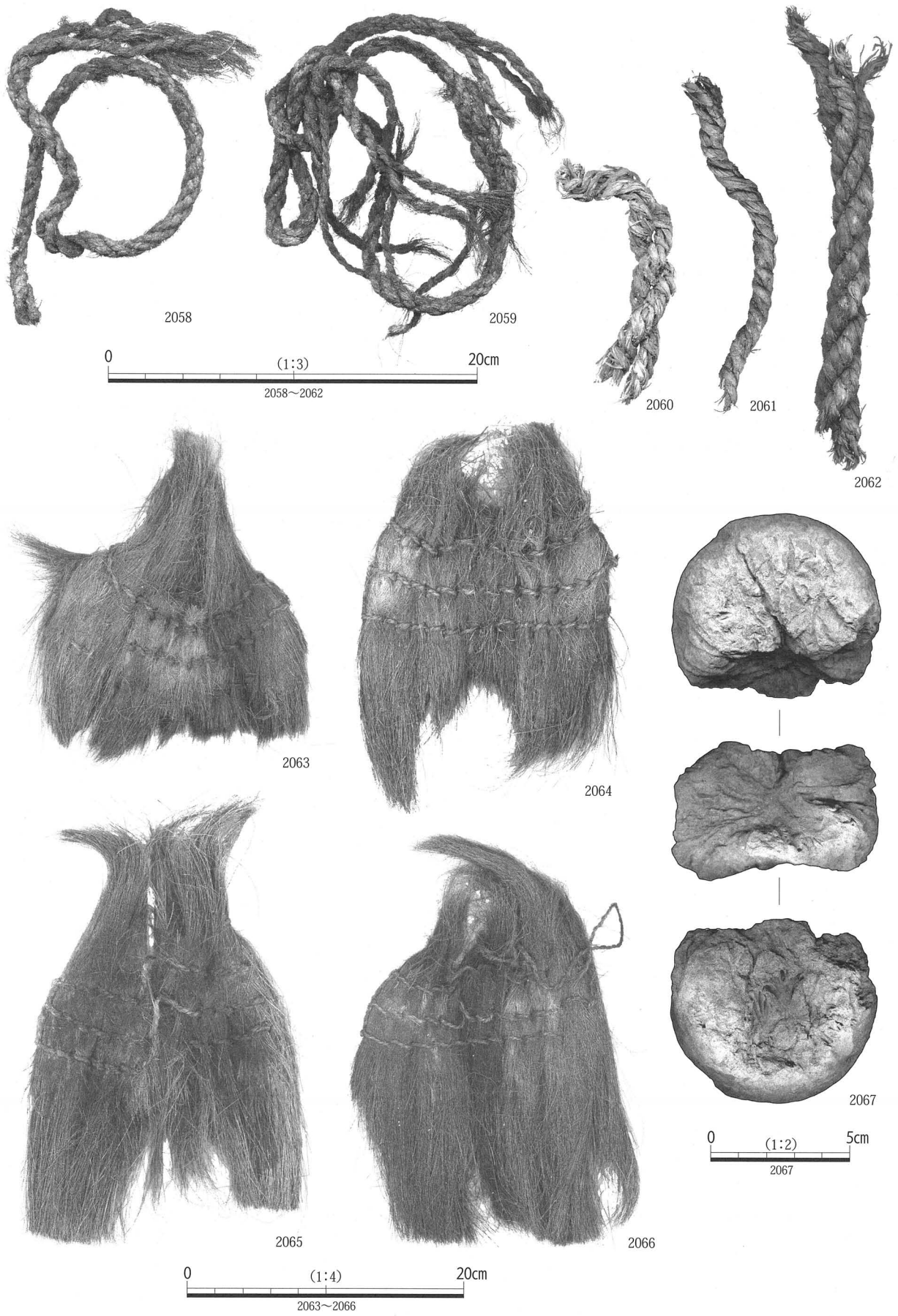


图 220 堀 83 出土箒・縄等

(8) 瓦埴類

① 軒丸瓦の分類と凡例

豊臣前期の瓦類の項でも述べたように、軒丸瓦実測図は丸瓦頂部の延長線上で切るが、瓦当内区は巴頭の最高点と中心点を結ぶ線の延長で測った。但し、破片の場合はこの限りではない。巴の巻きは頭から尾の方向である。また計測表に掲げた同型式瓦の個体数は堀 83 のみではなく、調査区全体のものがある。堀出土の瓦自体は客土に伴うものが多いから、調査区全体の傾向を知るためである。なお桐紋・菊紋など「家紋」と認識できるものは、「紋」字を用いて区別した。

三巴文軒丸瓦の型式は次のように分類した。

- NM01 型式：左巻き。巴尾と他の巴胴とは接しない。珠文 0 個。
- NM02 型式：左巻き。巴尾と他の巴胴とは接しない。珠文 10 ～ 15 個。
- NM03 型式：左巻き。巴尾と他の巴胴とは接しない。珠文 16 ～ 20 個。
- NM04 型式：左巻き。巴尾と他の巴胴とは接しない。珠文 21 個以上。
- NM05 型式：右巻き。巴尾と他の巴胴とは接しない。
- NM06 型式：左巻き。巴尾と他の巴胴とは接する。珠文 0 個。
- NM07 型式：左巻き。巴尾と他の巴胴とは接する。珠文 8 ～ 15 個。
- NM08 型式：左巻き。巴尾と他の巴胴とは接する。珠文 16 ～ 18 個。
- NM09 型式：左巻き。巴尾と他の巴胴とは接する。珠文 19 個以上。
- NM10 型式：左巻き。珠文の内側に圏線をもつ。巴頭はトビ口状。珠文 11 個以上。
- NM11 型式：左巻き。珠文の内側に圏線をもつ。巴頭は丸い。珠文 0 個。
- NM12 型式：左巻き。珠文の内側に圏線をもつ。巴頭は丸い。珠文 11 ～ 15 個。
- NM13 型式：左巻き。珠文の内側に圏線をもつ。巴頭は丸い。珠文 16 ～ 19 個。
- NM14 型式：左巻き。珠文の内側に圏線をもつ。巴頭は丸い。珠文 20 ～ 27 個。
- NM15 型式：右巻き。珠文の内側に圏線をもつ。珠文 10 ～ 34 個。
- NM16 型式：左巻き。巴尾が非常に長く、半径の線は必ず巴 3 本を切る。珠文 0 個。
- NM17 型式：左巻き。巴尾が非常に長く、半径の線は必ず巴 3 本を切る。珠文 10 ～ 19 個。
- NM18 型式：左巻き。巴尾が非常に長く、半径の線は必ず巴 3 本を切る。珠文 20 個以上。
- NM19 型式：左巻き。珠文の内外に都合 2 本の圏線がある。
- NM20 型式：右巻き。珠文の内外に都合 2 本の圏線がある。

ただし、範詰めの際の粘土の瓦范文様への当り方により、巴尾が長くも短くもなる。巴尾と巴胴との接触は同範瓦でも個体によって差異があり、範の彫刻が粗雑なものは各巴の長さが均等ではない。また圏線としたものも、上記の巴尾と巴胴とが接触して一周したに過ぎないものもあるかも知れない。今回、ある程度便宜的に分類したことを、お断りしておきたい。

② 金箔押軒丸瓦

金箔は基本的に文様（巴文・珠文・家紋）と周縁部、すなわち突出した部位に押されているが、厳密に突出部位のみに限定したのではなく、刷毛の勢いで漆が付着した文様周囲の地の部分にも金箔は付着しており、用意された金箔の一単位がわかる。接着剤は漆だが、黒色を呈する生漆と、赤色を呈する水銀朱またはベンガラ（酸化第二鉄）を混ぜた漆が知られており、後者は蛍光 X 線分析で同定できるが、分析を経ていない現時点では赤色漆と記述する。文中で赤色漆としたもの以外は生漆である。

2068 は NM02B 型式で、金箔の残りはすこぶる良好で、周縁部の箔足から金箔の幅は 3.5 cm と考えられる。周縁部・珠文・巴文に金箔を押し、珠文の金箔は方形を呈する。2069 は NM06D 型式で、周縁部と巴文に赤色漆が見られる。

2070 ～ 2076 は NM07K 型式で、2070 は周縁部の箔足から金箔の幅は 3.5 cm、2073 も 3.5 cm、2074 も金箔の幅は 3.5 cm、2075 も 3.5 cm、2076 は金箔の残りは悪く不明である。2072 から金箔押の NM07K 型式の丸瓦部は、コビキ B の丸 07 型式であることがわかる。

2077 は NM07T 型式と思われる、周縁部に若干金箔が見られる。2078 は NM07 δ 型式で、珠文・巴文に金箔が残る。2079・2080 は NM10H 型式と思われる、2079 は鉄分の沈着が顕著だが巴文に金箔が残り、2080 は周縁部と珠文に金箔が見られる。2081 は桐紋の NM21A 型式で、赤色漆を塗って周縁部

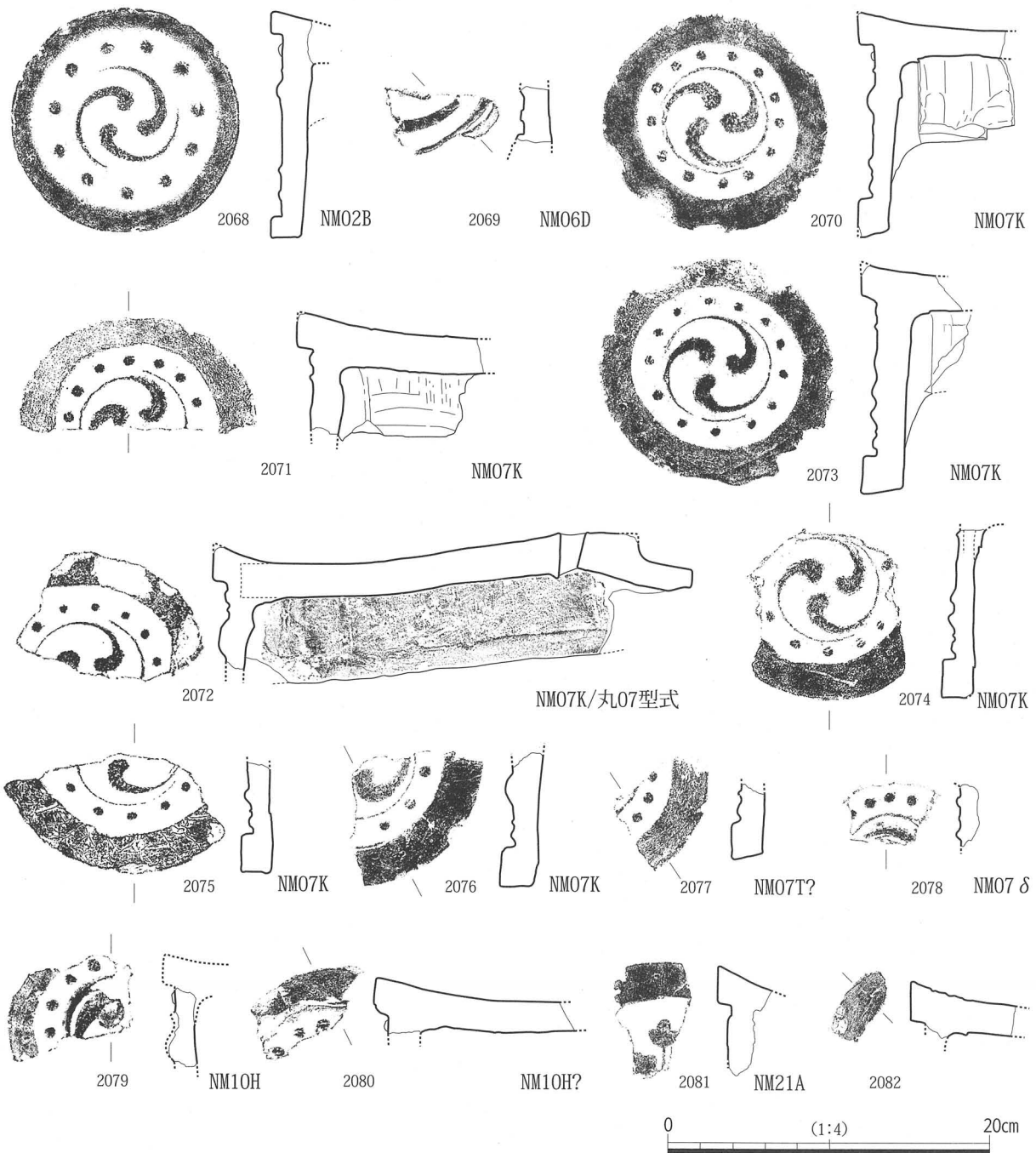


図 221 堀 83 出土 金箔押軒丸瓦

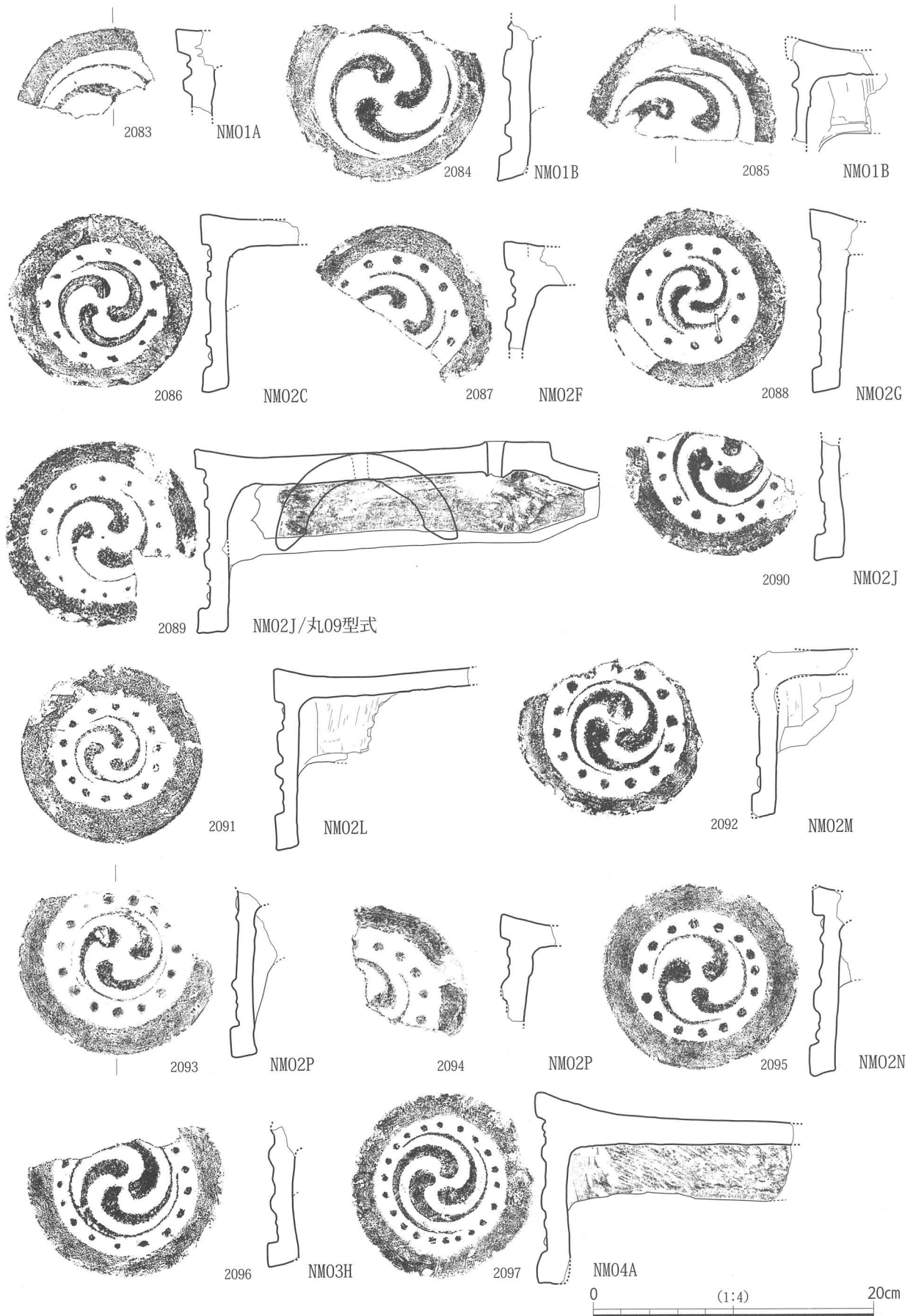


図 222 堀 83 出土 軒丸瓦 (1)

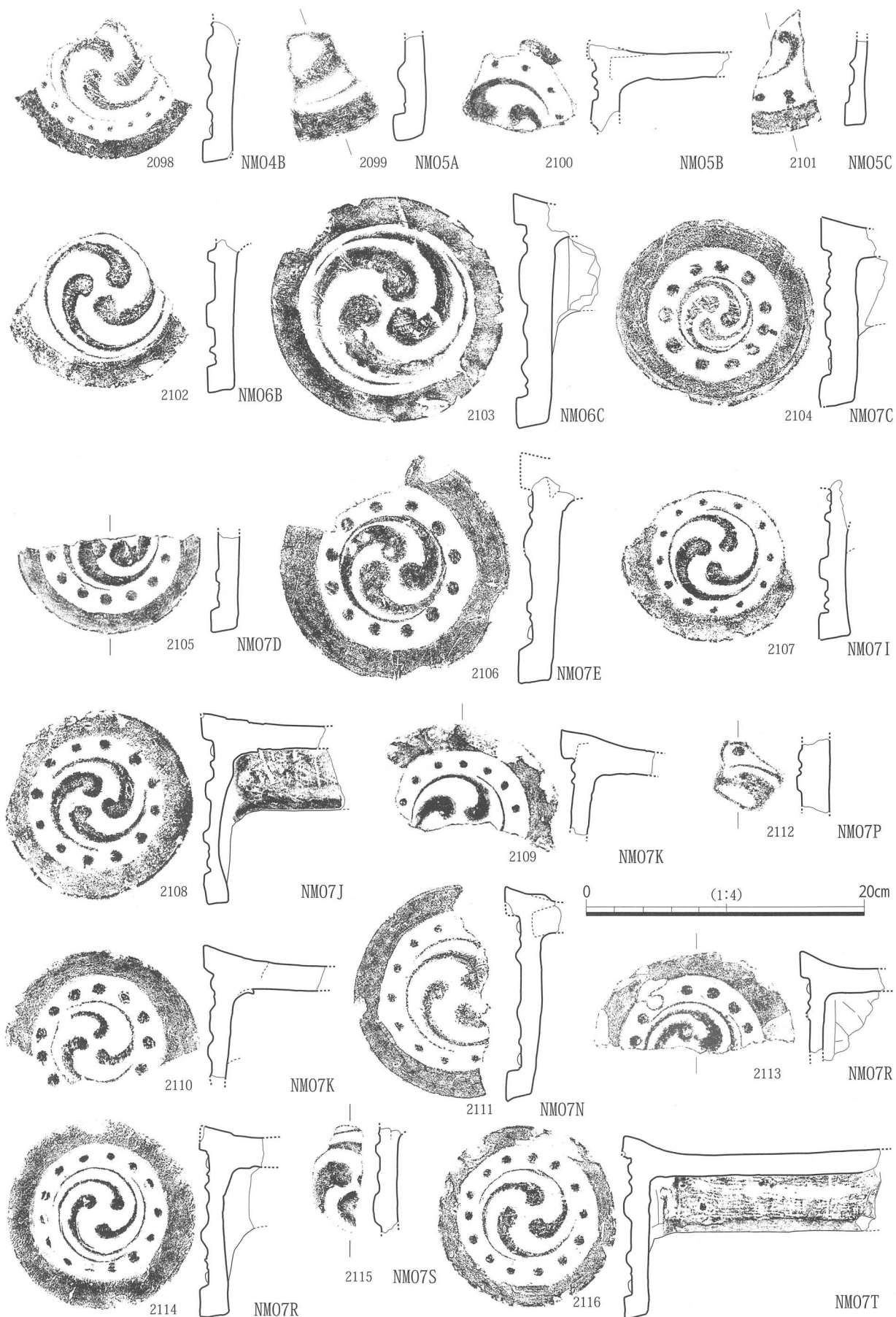


图 223 堀 83 出土 軒丸瓦 (2)

内側面、桐紋の側面にも金箔を丁寧に押す。2082は周縁部のみで型式は不明だが、赤色漆を塗って周縁部上面に金箔を押す。

③ 軒丸瓦

2083はNM01A型式で、須恵質に近い良好な焼成である。2084・2085はNM01B型式で、周縁部の造作が粗雑で、2085は周縁部内縁を指でナデる。

2086はNM02C型式で、文様区の地が波を打つように凹凸を見せる。2087はNM02F型式で、文様は立体的だが地は薄い。2088はNM02G型式で、巴は頭から胴にかけてほとんどクビレをもたない。2089・2090はNM02J型式で、中央にコンパス芯と思われる突起をもち、丸瓦部はコビキBの丸09型式である。2091はNM02L型式で、文様区の直径が8.5cmと小さいが巴文は立体的である。2092はNM02M型式で、巴頭は大きいが胴は細く尾も短い。2093・2094はNM02P型式、2095はNM02N型式である。2096はNM03H型式である。

2097はNM04A型式で、丸瓦部はコビキA。瓦当中央下部が巴文から周縁部にかけて削られている。2098はNM04B型式で、巴頭内側がややトビ口状になっている。

2099はNM05A型式で、火中したのか淡桃色を呈する。2100はNM05B型式で、丸瓦部はコビキB。巴頭は大きく、彎曲した胴は急激に細くなり、尾は短く、逆J字形を呈する。2101はNM05C型式で、瓦当厚が薄い。

2102はNM06B型式で、巴頭から尾へ漸次高さを減じるので、文様が螺旋状に見える。2103はNM06C型式で、直径17cm前後の大型である。

2104はNM07C型式で、文様区が9cm前後と狭く、範傷が顕著である。2105はNM07D型式で、範詰め後、巴文に押圧をかけて低くしている。2106はNM07E型式で、範詰め後、周縁部内面の一部を削っている。2107はNM07I型式で、巴頭が高く隆起している。2108はNM07J型式で、丸瓦部はコビキB。瓦当裏面からの押圧で内区がやや突出している。

2109・2110はNM07K型式で、丸瓦部はコビキB。2109の瓦当文様が非常に鮮明である。2111はNM07N型式で、文様区は離型剤のため文様は不鮮明である。2112はNM07P型式で、巴断面は低い台形である。2113・2114はNM07R型式で、丸瓦部はコビキB。2115はNM07S型式である。2116はNM07T型式で、丸瓦部はコビキB。2117はNM07W型式で、丸瓦部はコビキB。2118はNM07β型式で、範ズレを見せ、2119はNM07γ型式で、丸瓦部はコビキB。2120はNM07δ型式で、文様区は直径8.5cm前後と狭い。

2121・2122はNM08B型式で、頭と胴とのクビレ部から急に細くなる巴と、胴部も肥厚する巴を合わせもつ。丸瓦部はコビキBの丸11型式。2123はNM08C型式で、文様区の右上から左下にかけて範傷が横断する。2124はNM08L型式で、離型剤のため文様区は不鮮明で、丸瓦部はコビキB。2125・2126はNM08M型式で、高く隆起した巴をもつが内区で範傷が目立つ。2127はNM08O型式である。2128はNM08S型式で、高い堅固な周縁部をもち、丸瓦部はコビキA。2129はNM08V型式である。2130はNM08X型式で、文様・周縁部とも高いがイビツで、丸瓦部はコビキBである。

2131はNM09F型式である。2132はNM09H型式で、復元径18cmを越す大型。2133はNM09K型式で、文様は高いが瓦当厚は薄い。

2134はNM10D型式で、巴頭はトビ口をもつ。2135はNM10H型式で、非常に短い巴胴が太く小さな圏線に取り付く。2136はNM10I型式で、トビ口をもつ巴は圏線に接しない。2137はNM10J型式で、

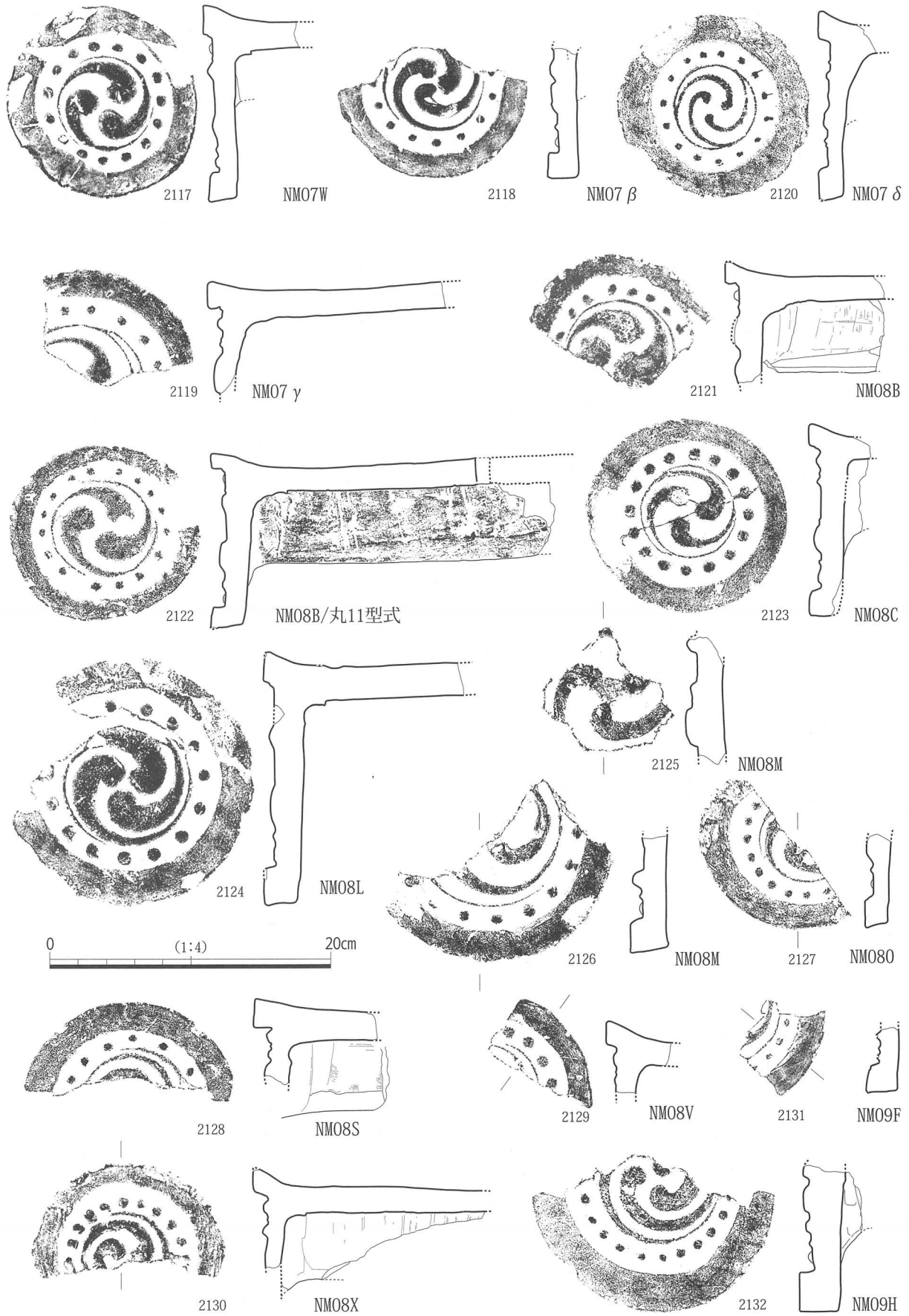


图 224 堀 83 出土軒丸瓦 (3)

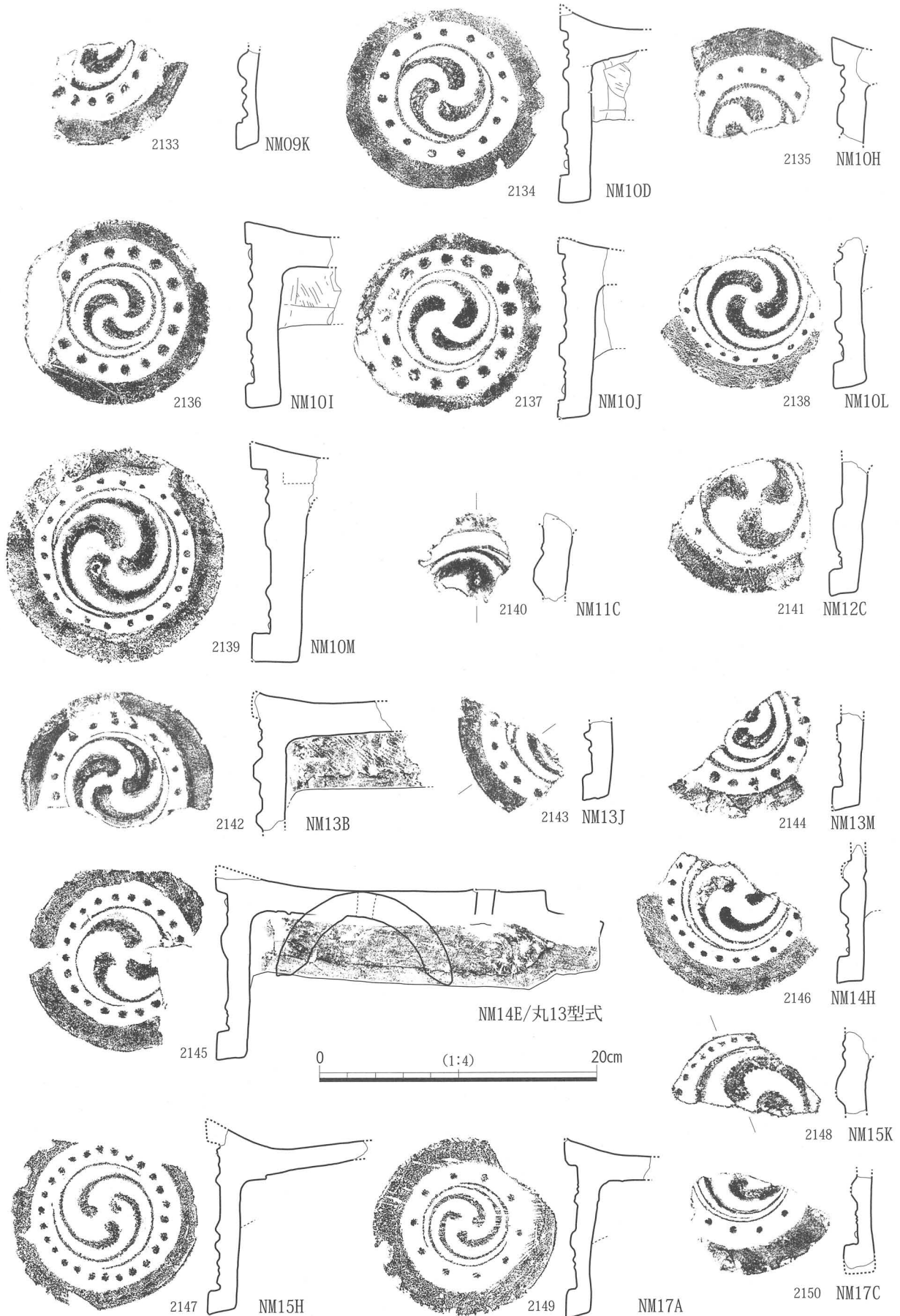


図 225 堀 83 出土 軒丸瓦 (4)

周縁部は狭く低く、トビ口をもつ巴頭の方が高い。2138はNM10L型式で、小粒の珠文は周縁部にほとんど接する。2139はNM10M型式で、高く堅固な周縁部にも離型剤は付着する。

2140はNM11C型式で、外区内縁には珠文はない。

2141はNM12C型式で、大きな巴頭をもつ巴はクビレた直後に寄り添うように圈線と接する。

2142はNM13B型式で、巴の背は平らで断面は台形である。2143はNM13J型式で、巴頭から尾にかけて漸次高さを減じる。2144はNM13M型式で、巴頭はややトビ口を呈する。

2145はNM14E型式で、丸瓦部はコビキBの丸13型式である。2146はNM14H型式で、周縁部をナデない。

2147はNM15H型式で、頭が小さく胴も細い巴で丸瓦部はコビキAである。2148はNM15K型式で、小粒の珠文を多数めぐらせ、瓦当の地には瓦範の木目が転写している。

2149はNM17A型式で、文様区は9cm弱と小さい。2150はNM17C型式で、離型剤を用いず文様は鮮明である。2151はNM17D型式で、周縁部は高く堅固で珠文は屹立するが範傷も目立つ。2152はNM17E型式で、やはり周縁部は高くしっかりしており文様は鮮明である。2153はNM17F型式で、焼成があまい。2154・2155はNM17H型式で、長い巴尾が珠文に接するのを特長としている。

2156はNM19B型式で、周縁部は高いが瓦当の地は薄く、文様は鮮明である。

2157はNM21C型式で、五七の桐紋で、離型剤のため文様は不鮮明で、丸瓦部の直径が小さいため周縁部にかけて凸面を外反させている。

2158はNM22A型式で、幅の広い周縁部をもつが文様区には形象は見えない。蛇の目紋の可能性はある。2159はNM22B型式で、五角形の中房をもつ桔梗紋である。2160はNM06B型式の鳥衾である。

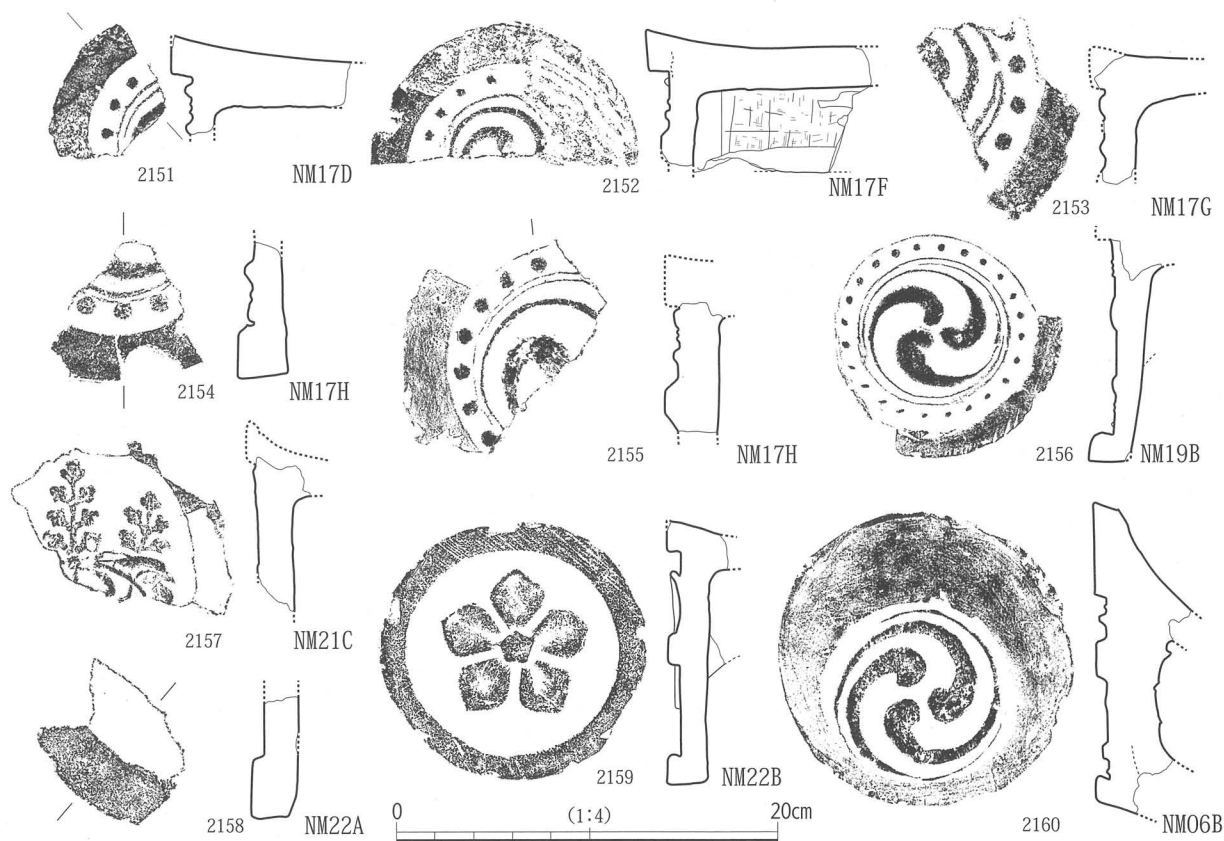


図 226 堀 83 出土 軒丸瓦 (5)

表 17 堀 83 出土 軒丸瓦計測表 (1)

遺物番号	型式	金箔押	直径	内区文様 (巴)	外区 内縁幅	珠文数	外区外縁幅	外区 外縁高	離型剤	瓦当厚	コビキ	個体数	備 考
2068	NM02B	○	14.2	左	2.2	11	1.3	0.7	無	1.9	—	1	
2069	NM06D	○	—	左	0.0	0	—	0.8	無	2.1	—	1	
2070	NM07K	○	13.8	左	1.3	13	2.0~2.3	0.9	無	1.8	B	21	丸 07 型式
2071			14.3		1.1	13	2.0~2.3	0.9	無	1.6	B		
2072			(14.2)		1.5	13	2.1	0.8	無	2.1	B		
2073			14.7		1.3	13	1.8~2.3	0.9	無	2.4	B		
2074			(14.8)		1.2	13	2.3	0.8	無	1.8	—		
2075			(14.4)		1.2	13	2.4	0.8	無	2.0	—		
2076			(14.4)		1.2	13	2.5	0.8	無	2.0	—		
2077	NM07T?	○	—	左	1.3	(14)	2.3	0.5	細かい離砂	2.0	—	3	
2078	NM07 δ	○	—	左	1.7	15	—	—	無	—	—	1	
2079	NM10H	○	(14.0)	左	1.5	16	1.8	0.7	—	2.0	—	4	
2080			—		—	16	2.2	1.0	無	—	B		
2081	NM21A	○	—	桐紋	0.0	0	2.3	0.8	無	2.3	—	1	
2082	不明	○	—	—	—	—	2.2	0.9	—	2.0	B	1	
2083	NM01A	×	(13.6)	左	0.0	0	1.9	0.6	無	2.0	—	2	
2084	NM01B	×	14.3	左	0.0	0	1.6~2.1	0.8	無	1.8	—	2	
2085			13.6		0.0	0	1.7	0.6	無	2.0	B		
2086	NM02C	×	13.1	左	1.2	11	2.0~2.3	0.5	無	1.7	B	1	
2087	NM02F	×	13.8	左	1.5	(13)	2.0	0.5	細かい離砂	2.2	—	2	
2088	NM02G	×	13.0	左	2.0	12	1.6~1.9	0.4	とも土	1.9	—	10	
2089	NM02J	×	13.4	左	1.7	14	1.8	0.6	無	2.0	B	1	丸 09 型式
2090	NM02L	×	13.1	左	1.4	14	2.0~2.5	0.6	無	1.7	B	19	
2091	NM02M	×	13.3	左	1.4	14	1.6	0.5	無	1.7	B	6	
2092	NM02P	×	14.0	左	1.6	15	2.0	0.6	とも土	1.8	—	4	
2093			(13.8)		1.6	15	1.9	0.6	とも土	2.0	—		
2094	NM02N	×	13.6~14.2	左	1.3	15	2.0~2.4	0.8	とも土	1.2	—	1	
2095	NM03A	×	13.3	左	1.7	16	1.8	0.6	無	2.0	—	1	
2096	NM03H	×	14.0	左	1.3	17	1.8	0.5	とも土	2.0	—	1	
2097	NM04A	×	13.4	左	0.8	21	2.0	0.5	無	2.0	A	1	
2098	NM04B	×	(13.4)	左	1.2	21	1.3	0.5	無	2.0	—	2	
2099	NM05A	×	(16.0)	右	0.0	0	2.0	0.7	無	1.8	—	1	
2100	NM05B	×	(13.0)	右	1.6	12	1.8	0.5	無	2.0	B	4	
2101	NM05C	×	(15.5)	右	2.0	12	1.8	0.6	無	1.4	—	1	
2102	NM06B	×	(14.0)	左	0.0	0	1.8	0.7	無	1.8	—	2	
2103	NM06C	×	17.0	左	0.0	0	2.2	0.8	無	2.2	—	6	
2104	NM07C	×	14.0	左	1.5	11	2.0~2.5	0.8	無	2.4	—	1	
2105	NM07D	×	13.2	左	1.3	11	1.6	0.5	無	1.8	—	1	
2106	NM07E	×	17.0	左	1.6	12	2.7	0.8	とも土	2.1	—	2	
2107	NM07I	×	13.5	左	1.3	12	2.0	0.8	無	2.3	—	3	
2108	NM07J	×	13.9	左	1.4	12	2.0	0.7	とも土	1.5	B	4	
2109	NM07K	×	14.0	左	1.3	13	2.0	0.7	無	2.0	B	21	
2110			14.0		1.3	13	1.5~2.5	0.6	無	1.8	B		
2111	NM07N	×	15.5	左	1.5	14	2.0	0.9	とも土	1.8	—	2	
2112	NM07P	×	—	左	1.7	—	—	—	無	—	—	2	
2113	NM07R	×	13.5	左	1.1	14	1.9~2.4	0.7	無	1.8	—	2	
2114			13.8		1.2	14	2.0	0.6	無	1.9	B		
2115	NM07S	×	—	左	—	—	—	—	とも土	—	—	1	
2116	NM07T	×	13.2	左	1.3	14	1.5	0.5	無	1.5	B	3	
2117	NM07W	×	13.9	左	1.3	15	1.9~2.4	0.4	無	2.0	B	1	
2118	NM07 β	×	13.7	左	1.3	15	1.7	0.6	無	2.1	—	1	
2119	NM07 γ	×	16.0	左	1.9	15	2.0	0.8	無	2.2	B	1	
2120	NM07 δ	×	13.5	左	1.3	15	2.0~2.5	0.7	とも土	1.5	—	3	
2121	NM08B	×	13.4	左	1.2	16	1.7	1.0	とも土	2.5	B	2	
2122	NM08B	×	13.0	左	1.2	16	1.5	0.9	とも土	2.3	B	2	丸 11 型式
2123	NM08C	×	13.9	左	1.5	16	1.8	0.7	無	2.0	—	3	
2124	NM08L	×	17.9	左	1.8	16	2.5	0.8	細かい離砂	2.5	B	3	
2125	NM08M	×	—	左	—	—	—	—	無	—	—	2	
2126			17.2		1.3	16	2.3	1.0	無	2.6	—		
2127	NM08O	×	13.3	左	1.6	17	2.1	0.4	とも土	1.5	—	1	
2128	NM08S	×	14.8	左	1.4	17	2.2	1.3	無	3.0	—	2	
2129	NM08V	×	(13.0)	左	1.5	18	1.9	0.6	無	2.1	—	1	
2130	NM08X	×	13.8	左	1.3	18	1.8	1.0	無	2.3	B	2	
2131	NM09F	×	(13.0)	左	1.0	20	1.9	0.7	無	2.1	—	5	
2132	NM09H	×	17.5	左	1.8	22	2.5	0.8	無	2.8	—	1	
2133	NM09K	×	14.4	左	1.7	22	1.9	0.8	無	1.5	—	1	
2134	NM10D	×	14.2	左	1.2	15	2.0	0.5	とも土	2.2	—	11	
2135	NM10H	×	(14.0)	左	1.4	16	2.0	0.6	とも土	2.7	—	4	
2136	NM10I	×	13.4	左	1.5	16	1.7	0.5	無	2.2	A	2	
2137	NM10J	×	13.2	左	1.5	17	1.2	0.4	無	2.0	—	9	
2138	NM10L	×	14.4	左	0.9	21	2.0	0.8	とも土	2.2	—	4	
2139	NM10M	×	15.8	左	0.8	22	2.0	1.3	とも土	3.2	—	1	

表 18 堀 83 出土 軒丸瓦計測表 (2)

遺物番号	型式	金箔押	直径	内区文様 (巴)	外区 内縁幅	珠文数	外区外縁幅	外区 外縁高	離型削	瓦当厚	コビキ	個体数	備考
2140	NM11C	×	—	左	0.0	0	—	—	無	—	—	1	
2141	NM12C	×	(14.0)	左	0.8	11	2.0	0.7	無	1.8	—	1	
2142	NM13B	×	14.0	左	1.1	16	2.0	0.6	無	2.1	A	1	
2143	NM13J	×	(13.0)	左	1.3	18	1.8	0.6	無	1.7	—	1	
2144	NM13M	×	(13.0)	左	1.2	18	1.8	0.7	無	1.7	—	3	
2145	NM14E	×	14.0	左	1.2	21	1.7	0.7	とも土	2.0	B	1	丸 13 型式
2146	NM14H	×	13.7	左	1.2	23	2.0	0.7	とも土	1.7	—	2	
2147	NM15H	×	13.8	右	1.2	26	1.5	0.8	無	2.1	A	1	
2148	NM15K	×	—	右	1.2	34	—	—	無	—	—	1	
2149	NM17A	×	13.0	左	1.2	10	2.1	0.6	無	1.8	—	3	
2150	NM17C	×	(14.4)	左	1.2	13	2.3	1.0	無	2.2	—	2	
2151	NM17D	×	—	左	1.3	16	2.0	1.0	無	2.0	A	1	
2152	NM17F	×	14.0	左	1.4	17	2.0	1.3	無	2.5	A	2	
2153	NM17G	×	17.0	左	1.6	17	2.2	0.6	無	1.7	—	1	
2154	NM17H	×	(17.0)	左	1.3	18	2.7	0.8	無	2.6	—	2	
2155		×	(17.0)		1.2	18	2.7	0.9	無	2.7	—		
2156	NM19B	×	(13.2)	左	1.0	24	1.5	1.0	無	2.0	—	2	
2157	NM21C	×	(16.4)	桐紋	0.0	0	1.8	0.5	とも土	2.0	—	1	
2158	NM22A	×	—	家紋	0.0	0	3.0	0.6	無	2.0	—	1	
2159	NM22B	×	14.0	桔梗紋	0.0	0	1.6	0.6	無	2.0	—	1	

④軒平瓦の分類と凡例

軒平瓦の型式は、中心飾が確認もしくは類推されるもののみ次のように分類した。

NH01 型式：中心飾は葉脈のある三葉で天正年間の播州（特に姫路）で見られ、唐草は 4 転。

NH02 型式：中心飾は葉脈のある三葉で、唐草は 3～5 転。

NH03 型式：中心飾は葉脈のある三葉か桐文で、唐草は 3 転。

NH04 型式：中心飾は三葉で、唐草は 3 転。

NH05 型式：中心飾の中葉が点珠であるなど特長のある三葉で、唐草は 3～5 転。

NH06 型式：中心飾は三葉一点珠で、唐草は 2～5 転。

NH07 型式：中心飾は三葉だが左右の葉先が外反し、唐草は 2～4 転。

NH08 型式：中心飾は三葉だが左右の葉先が内向し、唐草は 2～5 転。

NH09 型式：中心飾は五葉以上で菊花を横から見たようなものが多く、唐草は 2～4 転。

NH10 型式：中心飾は主として五葉だが、萼を有するもの、中葉から横に 3 葉ずつ派生するもの、十字などを含めた。唐草は 3～4 転。

NH11 型式：中心飾は中葉を二重の C 字対向で囲む五葉で、唐草は 3 転。

NH12 型式：中心飾は三葉で、唐草は 2 転。

NH13 型式：中心飾は三葉一点珠で、唐草は 2 転。

NH14 型式：中心飾は葉脈を有する三葉で、唐草は 2 転。

NH15 型式：中心飾は葉先が膨れる三葉で、唐草は 2 転。

NH16 型式：中心飾は左右の葉先が外反する三葉で、唐草は 2 転。

NH17 型式：中心飾は五葉もしくは特殊な三葉で、唐草は 2 転。

NH18 型式：中心飾は三葉で、唐草は 2 転の内、外側のものは必ず子葉である。

NH19 型式：中心飾は三葉で、唐草は 1 転。

NH20 型式：中心飾は萼をもつもので、唐草は 2 転。瓦当厚を拡張したものが多い。

NH21 型式：中心飾は二葉など特殊なものや、中心飾をもたない偏行唐草文、前代の連珠文も含めた。左右に展開する唐草は 2～9 転。

NH22 型式：拡張した瓦当に桐紋を配する。

NH23 型式：拡張した瓦当に中心飾として菊紋を用い、唐草は 2 転。

NH24 型式：拡張した瓦当に中心飾として桔梗など五弁花を用い、唐草は 1～2 転。

NH25 型式：中心飾は菱形で、唐草は 4 転以下。

NH26 型式：中心飾は突線による宝珠文で、唐草は 2～4 転。

NH27 型式：中心飾は半球形の立体的な宝珠文で、唐草は 2～4 転。雨降り文を思わせる斜めの突線を施したものや左半分が水波文のものもある。

NH28 型式：内区全体が水波文である。

NH29 型式：中心飾として半截した重圏文を用い、唐草は 2 転。重圏文と C 字対向の唐草を合わせて中心飾とする見方もある。瓦当厚を拡張したものが多い。

NH30 型式：中心飾は二葉と思われ、唐草は 1～4 転。瓦当厚を拡張したものもある。

NH31 型式：中心飾は唐草による C 字対向で、唐草は 1～2 転。

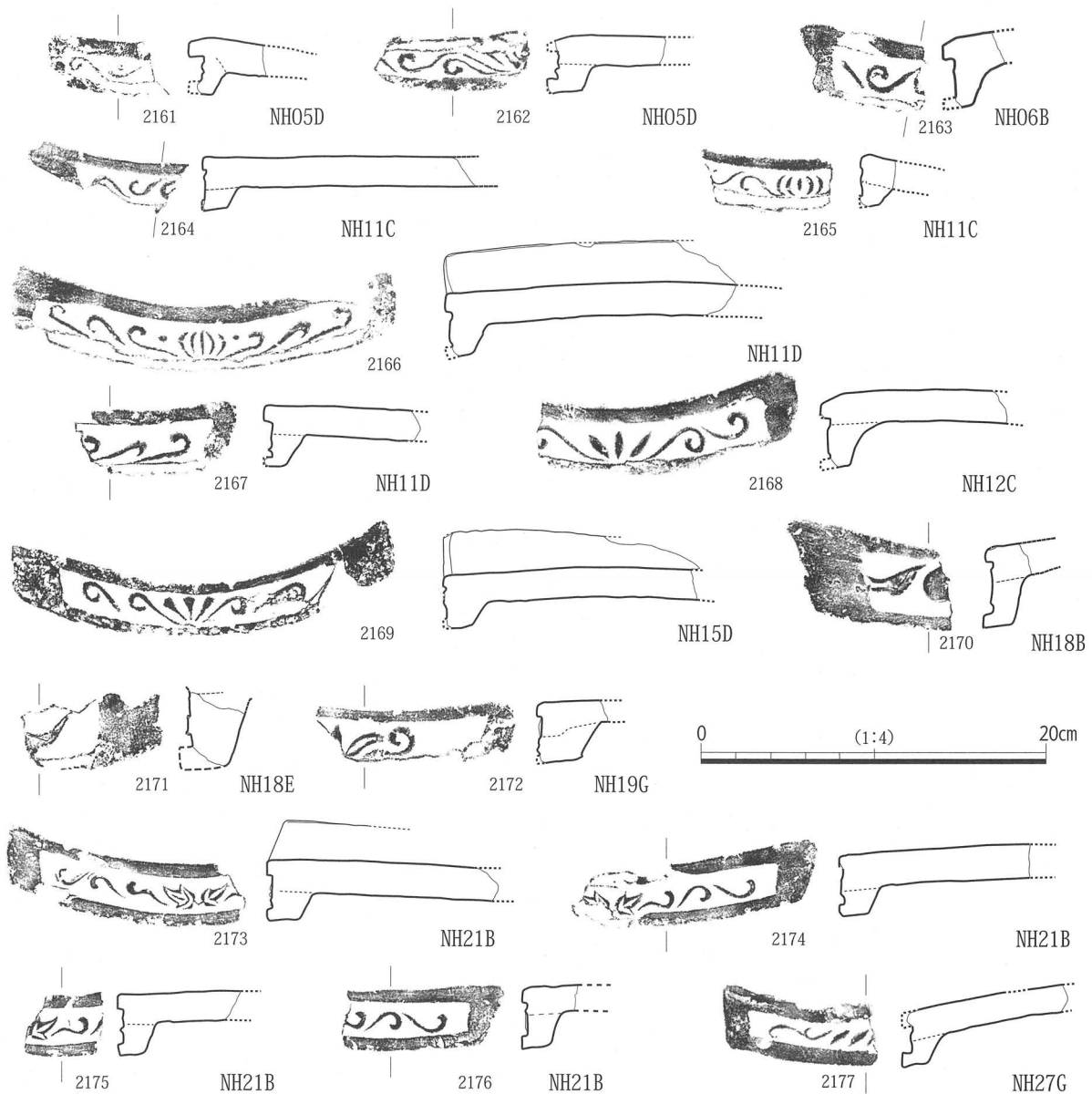


図 227 堀 83 出土 金箔押軒平瓦

⑤ 金箔押軒平瓦

2161・2162 は NH05D 型式で、2161 の蛍光 X 線による胎土分析資料番号（以下、蛍光 X 線資料と略す）は「金箔平 8」である。2161 は左側面に剥離痕があることから一体構成の隅唐草であった可能性がある。左側区に漆が付着し、側区まで金箔が押されていたと考えられる。

2163 は NH06B 型式で、蛍光 X 線資料は「金箔平 13」。左側区にも漆と金箔が残っている。

2164・2165 は NH11C 型式で、2165 の蛍光 X 線資料は「金箔平 7」。2164 は左の内区際まで漆が塗られているが、左側区端の幅 2.5 cm の軒丸瓦に隠れる部分は金箔を押さない。2165 は唐草や中心飾の突線に直交するかたちで箔足が残ることから、瓦当の地部分にも広く金箔が押されていたと考えられる。2166・2167 は NH11D 型式で、同型式の金箔押瓦の蛍光 X 線資料は「金箔平 15」。2166 は上外縁内面や中心飾五葉の葉間に金箔がよく遺存する。2167 は唐草の突線以外の地部分にも、広く漆が塗られている。

2168 は NH12C 型式で、蛍光 X 線資料は「金箔平 10」である。右側区 3.5 cm には金箔が押されてない。

2169 は NH15D 型式で、同型式の金箔押瓦の蛍光 X 線資料は「金箔平 1」。側区に漆が見られる。豊臣前期の井戸 147 から同型式瓦が出ているが、金箔を押さない。

2170 は NH18B 型式で、蛍光 X 線資料は「金箔平 6」。赤色漆で金箔を押すが唐草までで、左側の子葉から側区にかけては漆の痕跡はない。2171 は NH18E 型式で、蛍光 X 線資料は「金箔平 9」である。「金箔平 5」も同型式資料である。子葉に赤色漆で金箔を押すが、右側区には押さない。

2172 は NH19G 型式で、同型式の金箔押瓦の蛍光 X 線資料は「金箔平 2」「金箔平 14」。右側区には漆痕跡はない。

2173～2176 は NH21B 型式で、同型式の金箔押瓦の蛍光 X 線資料は「金箔平 3」。いずれも側区には漆を塗らない。外縁部の金箔押も唐草がある位置までである。2173 の左第 2 唐草は唐草の突線と唐草形の金箔がズレていることから、あらかじめ唐草形に金箔を切っていたことが察せられる。

2177 は NH27G 型式で、蛍光 X 線資料は「金箔平 11」。金箔押は左端の唐草とその上下の外縁までである。

このほか実測図は上げなかったが、NH03E 型式の金箔押瓦の蛍光 X 線資料は「金箔平 4」である。

⑥ 軒平瓦

2178 は NH01A 型式、2179 は NH01H 型式で、播州姫路で天正年間によく見られる文様である。2180 は NH01I 型式で、蛍光 X 線資料「軒平 1」である。前期の井戸 166 から出土した 989(NH04V 型式)は、同型式の瓦範を切り詰めた可能性がある。

2181 は NH03Ab 型式で、詰の丸や和泉町達磨窯から出土している。2182 は NH03G 型式で、中心飾は桐紋。

2183 は NH04B 型式、2184 は NH04C 型式、蛍光 X 線資料「軒平 7」で、2185 は NH04Q 型式で、三葉の下に萼をもつ。2186 は NH04R 型式で、左右の葉が下で蔓状につながり、2187 は NH04S 型式で、蛍光 X 線資料「軒平 12」は同型式瓦である。2188 は NH04T 型式で、蛍光 X 線資料「軒平 14」、2189 は NH04U 型式で、蛍光 X 線資料「軒平 5」、左右の葉が Y 字を呈する三葉である。2190 は NH04W 型式である。

2191 は NH05A 型式。2192 は NH05B 型式で、三葉の下で左右の唐草がつながり、2193 は NH05C 型式で、三葉の先に蕾みが見られる。

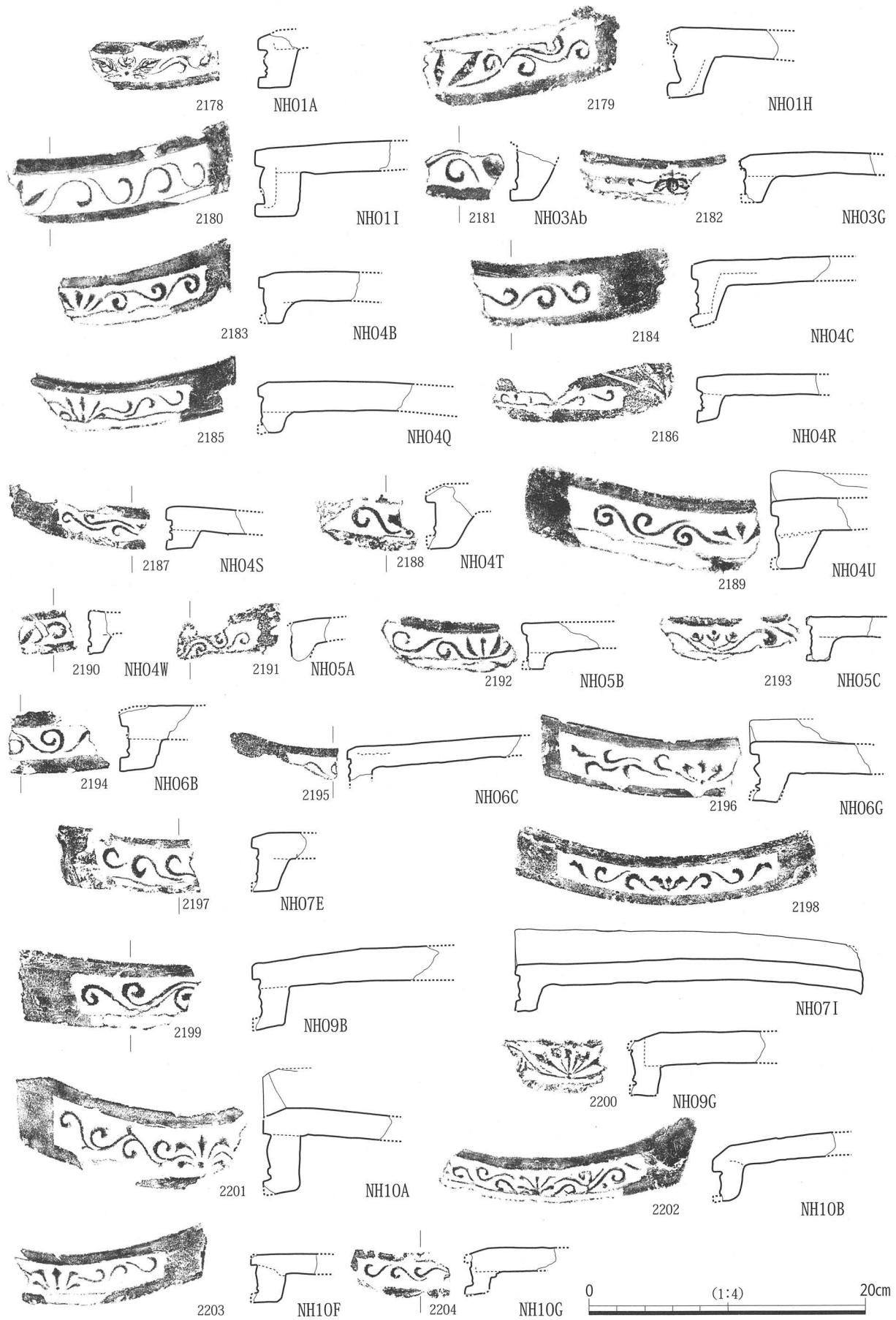


図 228 堀 83 出土軒平瓦 (1)

2194 は NH06B 型式で、蛍光 X 線資料「軒平 2」である。2195 は NH06C 型式で、中心飾に三葉一点珠をもつものである。2196 は NH06G 型式で、堅緻な仕上がりである。

2197 は NH07E 型式。2198 は NH07I 型式で、左右端の唐草は子葉である。

2199 は NH09B 型式で、蛍光 X 線資料「軒平 18」。書写山円教寺など姫路周辺で多く見られるもので、2200 の NH09G 型式は、NH09B 型式を形式化したものと思う。

2201 の NH10A 型式と 2202 の NH10B 型式は、瓦当厚の大小はあるが、文様構成で似かたより、2203 の NH10F 型式と 2204 の NH10G 型式も、文様構成が似る。2205 は NH10H 型式、蛍光 X 線資料「軒平 20」で、南側の NHK 敷地では金箔押瓦として現れる。2206 の NH10M 型式は蛍光 X 線資料「軒平 16」で、NH10A 型式をやや小型化したものである。2207 は NH10O 型式、蛍光 X 線資料「軒平 8」で、萼の代わりに二点珠を置き、2208 の NH10P 型式は、三葉の左右葉が Y 字を呈する。2209 ～ 2211 は NH10S 型式で、左右の唐草は非対称である。2212 は NH10T 型式、蛍光 X 線資料「軒平 9」で、五葉の先が膨れる。

2213 は NH11A 型式で、中心飾は C 字対向を二つ重ねた五葉である。2214 は NH12D 型式。

2215 は NH13H 型式。2216・2217 は NH13G 型式で、三葉一点珠の中葉が「+」になっている。

2218 は NH15A 型式で、三葉の中葉先が「+」になり、2219 ～ 2221 は NH15F 型式で、梅鉢文を思わせるほど三葉と第一唐草の先が膨れる。

2222 は NH16A 型式、蛍光 X 線資料「軒平 10」で、2223 の NH16F 型式、2224 の NH16M 型式は、三葉の左右葉が外反する。

2225 は NH17B 型式で、蛍光 X 線資料「軒平 6」、中心飾は五葉である。2226 は NH17F 型式で、先が三つに分かれた中葉と翼状の左右葉をもつ三葉である。2227 は NH17I 型式で、蔓状の唐草をもつ。

2228 の NH18B 型式、2229 の NH18F 型式、蛍光 X 線資料「軒平 15」、2230 の NH18G 型式は、太い三葉と太い唐草をもつ。2231 は NH18K 型式で、端に子葉を配する点で前者と同様である。

2232 は NH19I 型式で、蔦葉を中心飾とし、2233 の NH19J 型式と 2234 の NH19K 型式は似るが、三葉の付け根に差がある。2235 は NH19L 型式で、三葉の左右葉が Y 字を呈する。2236 の NH19S 型式と 2237 の NH19T 型式は、突線で縁取る唐草をもつ。

2238 は NH21A 型式で、NHK 敷地では金箔押瓦として出土し、2239 は NH21E 型式で、中心飾三葉の中葉が左巻きに彎曲する。

2240・2241 は NH22B 型式で、五七の桐紋を中央に据え、唐草風の周縁部で囲む瓦当をもち、平瓦との接合がやや鈍角で、朝鮮の滴水瓦を思わせる。

2242 は NH23B 型式で、二重菊紋を中心飾とする。

2243 は NH25C 型式で、蛍光 X 線資料「軒平 3」である。圏線内に四分割した菱形の中心飾と、その角から左右に伸びる直線状の蔓が配されている。

2244 は NH26D 型式で、堅緻な焼きである。2245 は NH26I 型式、2246 は NH26J 型式で、蛍光 X 線資料「軒平 17」、2247 は NH26P 型式である。2248 は NH26R 型式で、やや丸い杏仁形円環の中心飾の左右に枝が大きく屈曲する唐草が配される。

2249 の NH27E 型式は蛍光 X 線資料「軒平 19」で、大きな半球形の中心飾を、2250 ～ 2255 の NH27F 型式と 2256・2257 の NH27I 型式は、小さな半球形の中心飾を配す。

2258 は NH28B 型式で、中心に前面に押し出すように半截した圏線の水波文を置き、左右に後ずさ

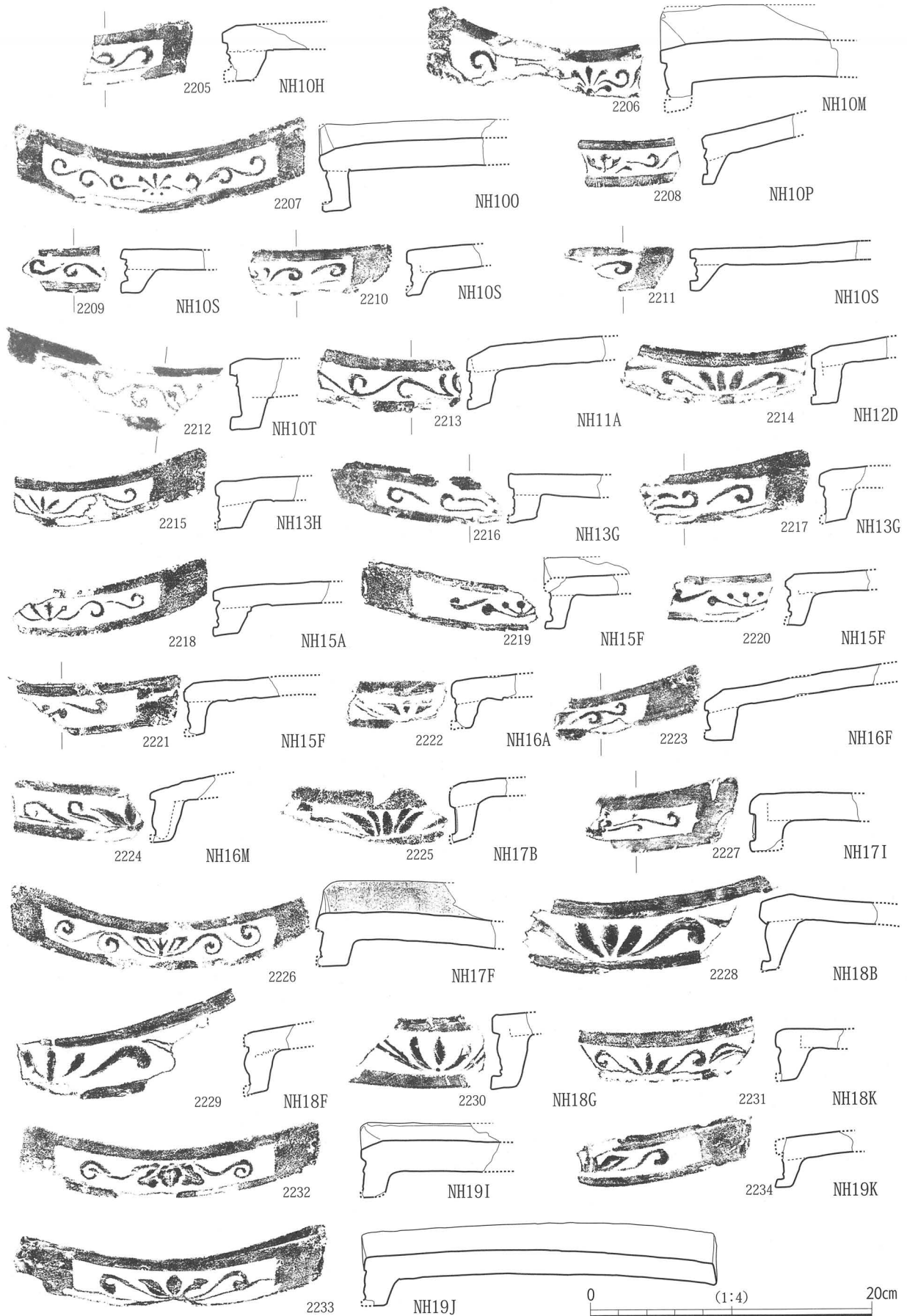


図 229 堀 83 出土 軒平瓦 (2)

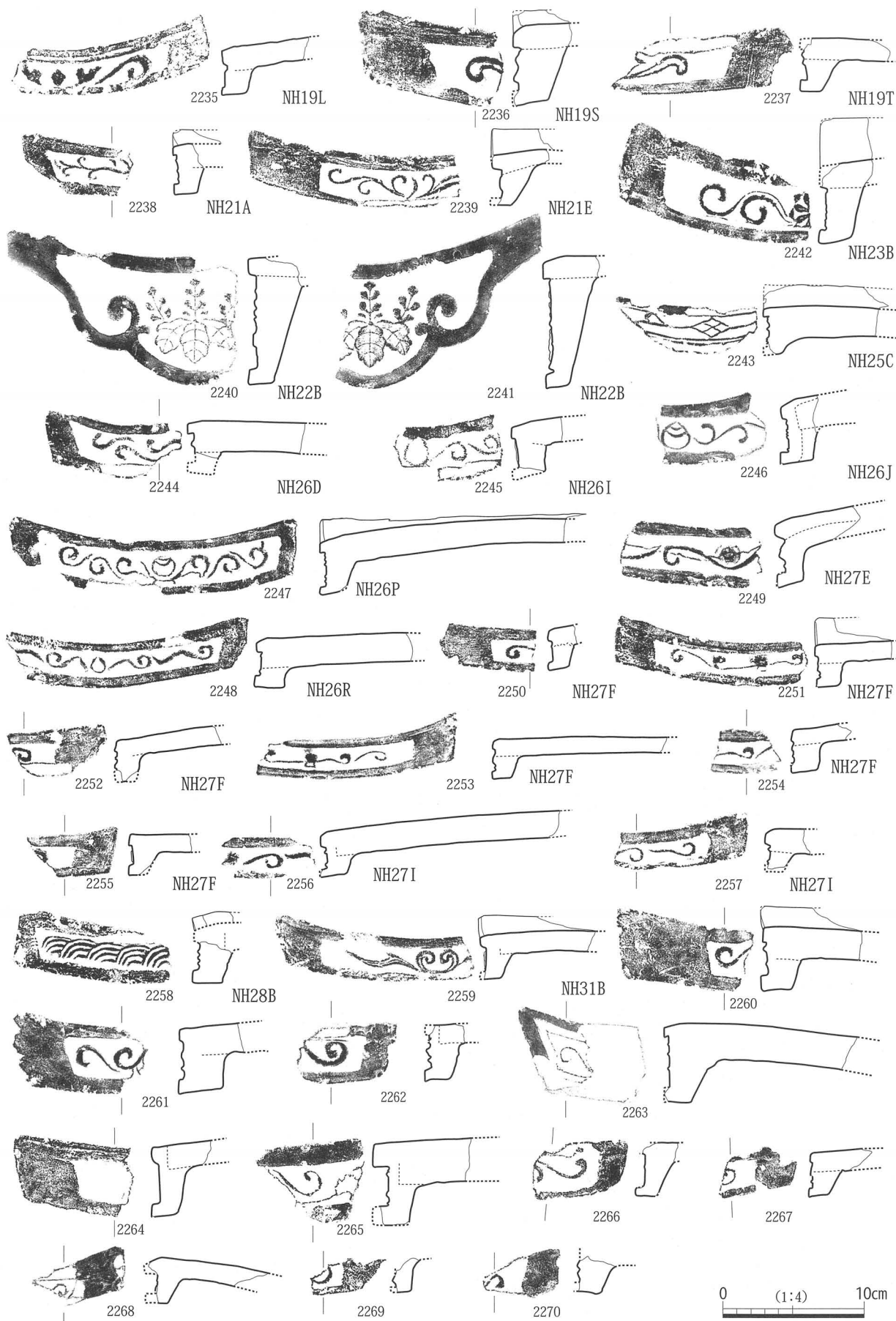


图 230 堀 83 出土 軒平瓦 (3)

表 19 堀 83 出土 軒平瓦計測表 (1)

瓦番号	型式	金箔押	上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当厚	内区 中心飾	内区 唐草数	上外縁 面取り	上外 区幅	下外 区幅	左側 区幅	右側 区幅	周縁 高	段額 幅	段額 深	離型別	個体数	備考
2161	NH05D	○	—	—	—	3.0	三葉	3 転	有	0.9	0.7	—	—	0.7	1.6	1.4	無	2	蛍光 X 線資料番号「金箔平 8」
2162			—	—	—	3.2			有	0.6	0.7	—	—	0.5	1.6	1.3	無	2	
2163	NH06B	○	—	—	—	4.0	三葉	3 転	有	0.7	0.6	2.2	—	0.6	1.9	1.8	無	2	蛍光 X 線資料番号「金箔平 13」
2164	NH11C	○	—	—	—	3.1	五葉	3 転	無	0.8	0.6	2.9	—	0.2	1.5	1.2	無	3	蛍光 X 線資料番号「金箔平 7」
2165			—	—	—	2.9			有	0.8	0.6	—	—	0.2	1.2	1	無		
2166	NH11D	○	21.8	22.5	2.4	3.6	五葉	3 転	無	1.0	0.5	1.5	1.0	0.4	1.4	1.6	無	8	
2167			—	—	—	3.6			無	0.9	0.7	—	1.3	0.5	1.0	1.7	無		
2168	NH12C	○	(21.6)	(21.8)	(2.2)	3.7	三葉	2 転	有	0.8	0.6	—	2.0	0.5	1.8	2.4	無	1	蛍光 X 線資料番号「金箔平 10」
2169	NH15D	○	21.6	22.0	3.0	1.8	三葉	2 転	有	0.6	0.5	2.8	3.5	0.3	1.8	1.7	無	9	蛍光 X 線資料番号「金箔平 1」
2170	NH18B	○	—	—	—	4.6	三葉	2 転	無	0.6	0.8	3.7	—	0.4	1.9	2.9	無	4	蛍光 X 線資料番号「金箔平 6」
2171	NH18E	○	—	—	—	—	三葉	2 転	—	—	1.2	—	3.7	0.5	2.6	—	無	2	蛍光 X 線資料番号「金箔平 9」
2172	NH19G	○	(20.8)	(20.0)	(1.1)	3.2	三葉	1 転	有	0.6	0.6	—	1.5	0.3	2.3	2.0	無	3	
2173	NH21B	○	(21.4)	(22.4)	(2.0)	3.4	花卉	3 転	有	0.7	0.7	2.0	—	0.4	1.9	1.5	無	8	
2174			(23.4)	(22.2)	(1.2)	3.4			有	0.8	0.6	—	2.1	0.3	1.8	1.4	無		
2175			—	—	—	3.4			有	0.7	0.6	—	—	0.3	1.6	1.6	無		
2176			—	—	—	3.2			有	0.6	0.7	—	1.5	0.4	1.7	1.8	無		
2177			NH27G	○	—	—			—	3.1	宝珠	2 転	—	0.8	0.8	1.4	—		
2178	NH01A	×	—	—	—	3.5	三葉	4 転	有	0.8	0.7	—	—	0.7	2.1	2.8	無	2	
2179	NH01H	×	(27.0)	(25.4)	(1.3)	4.9	三葉	4 転	有	0.9	1.1	—	1.8	0.8	2.6	2.7	無	1	
2180	NH01I	×	(31.2)	(30.2)	(2.3)	4.7	三葉	4 転	有	1.1	0.9	—	1.6	0.6	2.9	3.0	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 1」
2181	NH03Ab	×	—	—	—	—	三葉	3 転	—	—	0.8	—	—	0.4	0.9	2.7	無	3	
2182	NH03G	×	—	—	—	3.2	桐紋	—	有	0.7	0.6	—	—	0.2	1.3	1.8	無	1	
2183	NH04B	×	(23.0)	(22.2)	(1.5)	3.4	三葉	3 転	有	0.8	0.8	—	1.7	0.4	1.9	1.7	無	2	
2184	NH04C	×	—	—	—	4.4	三葉	3 転	有	1.2	0.8	—	4.7	0.4	1.9	2.2	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 7」
2185	NH04Q	×	(21.4)	(22.0)	(1.8)	3.2	下萼付 三葉	3 転	有	0.6	0.7	—	3.1	0.4	1.8	1.3	無	1	
2186	NH04R	×	(21.6)	(22.0)	(2.1)	2.9	三葉	3 転	有	0.9	0.8	—	3.4	0.4	1.6	1.6	無	1	
2187	NH04S	×	—	—	—	2.9	三葉	3 転	有	0.8	0.6	3.5	—	0.4	1.9	1.4	無	2	蛍光 X 線資料番号「軒平 12」
2188	NH04T	×	—	—	—	4.2	三葉	—	—	—	0.8	—	—	0.6	—	3.2	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 14」
2189	NH04U	×	(29.4)	(31.0)	(2.2)	5.0	三葉	3 転	有	0.9	0.8	3.1	—	0.5	2.4	2.7	細かい 離砂	7	蛍光 X 線資料番号「軒平 5」
2190	NH04W	×	—	—	—	3.0	三葉	—	無	0.7	0.6	—	—	0.1	1.0	1.0	無	1	
2191	NH05A	×	—	—	—	2.9	三葉	5 転	—	0.9	0.6	—	1.6	0.4	1.7	1.8	無	1	
2192	NH05B	×	—	—	—	3.3	三葉	3 転	無	0.8	0.7	—	—	0.4	1.7	1.1	無	1	
2193	NH05C	×	—	—	—	3.1	三葉	—	無	0.7	0.5	—	—	0.4	—	1.5	無	1	
2194	NH06B	×	—	—	—	4.3	三葉	3 転	有	1.2	1.0	—	—	0.7	2.3	2.1	無	2	蛍光 X 線資料番号「軒平 2」
2195	NH06C	×	—	—	—	—	三葉	3 転	有	0.6	—	4.0	—	0.2	—	—	無	1	
2196	NH06G	×	(22.8)	(22.8)	(1.9)	4.0	三葉 一点珠	5 転	有	0.8	0.6	1.2	—	0.6	2.0	2.4	無	5	
2197	NH07Ea	×	—	—	—	3.9	三葉	3 転	有	0.7	0.5	2.4	—	0.5	1.8	2.0	無	1	
2198	NH07I	×	20.5	22.0	2.5	3.4	三葉 一点珠	3 転	無	0.8	0.7	2.9	2.7	0.3	1.5	1.5	無	7	
2199	NH09B	×	—	—	—	4.7	菊花	3 転	有	1.0	1.0	3.8	—	0.5	2.2	2.5	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 18」
2200	NH09G	×	—	—	—	3.9	菊花	—	有	0.5	0.5	—	—	0.3	1.9	2.1	無	1	
2201	NH10A	×	(25.0)	(27.2)	(2.0)	5.3	下萼付 三葉 一点珠	4 転	有	1.1	1.0	2.6	—	0.5	2.5	3.8	無	3	
2202	NH10B	×	(23.6)	(21.0)	(3.0)	3.1	五葉	4 転	有	0.8	0.4	—	3.6	0.7	1.8	2.6	無	3	
2203	NH10F	×	(22.0)	(21.0)	(2.9)	3.4	下萼付 三葉 一点珠	3 転	無	0.7	0.6	—	2.8	0.5	2.2	2.0	無	2	
2204	NH10G	×	—	—	—	3.0	下萼付 三葉 一点珠	3 転	有	0.6	0.7	—	—	0.5	1.8	1.5	とも土	1	
2205	NH10H	×	—	—	—	3.5	五葉	3 転	有	0.7	0.8	—	2.1	0.3	2.1	2.0	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 20」
2206	NH10M	×	(23.4)	(24.0)	(1.8)	—	五葉 一点珠	4 転	有	0.8	0.7	1.7	—	0.4	—	—	無	3	蛍光 X 線資料番号「軒平 16」
2207	NH10O	×	20.5	21.0	2.0	4.1	下萼付 五葉	3 転	有	1.0	0.6	2.0	2.2	0.7	1.9	2.5	無	4	蛍光 X 線資料番号「軒平 8」
2208	NH10P	×	—	—	—	3.3	下萼付 三葉	3 転	有	0.7	0.7	—	—	0.3	1.0	2.1	無	2	
2209	NH10S	×	—	—	—	3.2	十字	3 転	無	0.7	0.8	—	—	0.4	1.4	1.8	無	13	
2210			—	—	—	3.3			無	1.1	0.6	—	2.7	0.3	1.0	1.6	無		
2211			—	—	—	2.9			無	0.7	0.7	—	2.3	0.3	0.8	2.0	無		
2212	NH10T	×	(28.0)	(28.0)	(4.2)	4.8	五葉	3 転	有	0.7	0.9	2.3	—	0.6	2.3	2.0	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 9」
2213	NH11A	×	—	—	—	3.4	五葉	3 転	有	0.8	0.7	—	—	0.3	1.7	2.4	無	1	
2214	NH12D	×	—	—	—	3.6	三葉	2 転	有	0.9	0.7	—	—	0.2	1.9	2.7	無	2	
2215	NH13H	×	(23.0)	(23.0)	(2.1)	3.2	三葉 一点珠	2 転	有	0.8	0.7	—	3.8	0.2	2.0	2.0	無	1	

表 20 堀 83 出土 軒平瓦計測表 (2)

瓦番号	型式	金箔押	上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当厚	内区 中心飾	内区 唐草数	上外縁 面取り	上外 区幅	下外 区幅	左側 区幅	右側 区幅	周縁 高	段顎 幅	段顎 深	離型剤	個体数	備 考
2216	NH13G	×	(22.8)	(22.0)	—	3.5	三葉 一点珠	2 転	無	0.9	0.4	3.1	—	0.3	2.0	1.5	無	2	
2217			(23.6)	(23.0)	(1.9)	3.5			有	0.9	0.6	—	3.0	0.3	2.0	2.1	無		
2218	NH15A	×	(23.6)	(23.0)	(1.2)	3.4	三葉 一点珠	2 転	有	0.7	0.7	—	3.6	0.5	2.0	2.1	無	1	
2219	NH15F	×	(22.0)	(23.2)	(1.0)	3.2	三葉	2 転	有	0.6	0.5	3.5	—	0.4	1.4	2.2	無	18	
2220			—	—	—	3.1			有	0.6	0.5	—	—	0.2	1.5	2.1	無		
2221			—	—	—	3.3			有	0.6	0.5	—	2.9	0.3	1.4	2.1	無		
2222	NH16A	×	—	—	—	3.3	三葉	2 転	有	1.0	0.7	—	—	0.3	1.6	2.0	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 10」
2223	NH16F	×	—	—	—	2.7	三葉	2 転	有	0.7	0.7	—	3.7	0.3	2.0	2.5	無	1	
2224	NH16M	×	—	—	—	3.6	三葉	2 転	有	0.5	0.7	—	—	0.5	1.8	2.5	とも土	2	
2225	NH17B	×	—	—	—	3.9	五葉	—	有	1.1	0.6	—	—	0.4	1.5	2.5	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 6」
2226	NH17F	×	21.2	21.2	2.0	3.5	三葉	2 転	有	0.9	0.6	2.2	2.5	0.5	2.1	1.8	無	2	
2227	NH17I	×	—	—	—	3.6	—	2 転	有	0.8	0.8	—	2.7	0.4	2.2	2.0	無	1	
2228	NH18B	×	—	—	—	4.8	三葉	2 転	有	1.1	0.8	—	—	0.7	1.5	4.0	無	4	
2229	NH18F	×	(29.0)	—	(3.0)	4.4	三葉	2 転	有	0.8	0.9	—	3.0	0.5	1.8	3.3	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 15」
2230	NH18G	×	—	—	—	5.2	三葉 一点珠	—	無	1.0	0.9	—	—	0.6	1.7	3.7	無	1	
2231	NH18K	×	—	—	—	3.4	三葉	2 転	有	1.0	0.5	—	—	0.2	1.2	2.5	無	1	
2232	NH19I	×	21.0	21.5	1.8	3.5	三葉	1 転	有	1.8	0.5	2.4	3.2	0.3	1.7	1.5	—	1	
2233	NH19J	×	21.4	21.4	2.4	3.4	三葉	1 転	無	1.0	0.4	3.7	3.3	0.2	1.9	2.0	無	1	全長 25.0cm
2234	NH19K	×	(23.6)	(23.4)	(1.5)	3.4	三葉	1 転	無	1.0	0.6	—	3.7	0.4	1.1	2.0	無	3	
2235	NH19L	×	(21.0)	(21.0)	(3.0)	3.1	三葉	1 転	有	0.9	0.5	—	2.7	0.3	1.8	1.9	無	3	
2236	NH19S	×	—	—	—	5.2	—	1 転	有	0.9	1.1	4.8	—	0.6	2.5	4.0	無	1	
2237	NH19T	×	—	—	—	3.7	—	1 転	—	0.7	0.7	—	4.5	0.4	1.5	2.5	無	1	
2238	NH21A	×	—	—	—	3.3	五葉	7 転	有	0.6	0.6	1.5	—	0.4	1.8	2.0	とも土	1	
2239	NH21E	×	(23.0)	(24.0)	(1.8)	3.6	C 字対向	2 転	無	1.0	0.5	5.2	—	0.7	1.4	2.5	無	1	
2240	NH22B	×	(26.0)	(28.0)	(2.5)	9.0	桐紋	1 転	有	1.0	1.1	3.7	—	0.5	1.7	7.4	無	2	
2241			(25.0)	(23.4)	(2.6)	9.0			有	1.0	0.9	—	3.6	0.5	1.7	8.0	無		
2242	NH23B	×	(25.4)	(28.0)	(1.4)	5.5	菊紋	2 転	無	1.3	0.9	3.2	—	0.4	2.3	3.8	無	1	
2243	NH25C	×	—	—	—	3.4	菱形	0	無	0.6	0.7	—	—	0.2	1.0	1.0	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 3」
2244	NH26D	×	—	—	—	3.7	宝珠	4 転	有	0.7	0.7	1.6	—	0.4	2.1	1.6	無	1	
2245	NH26I	×	—	—	—	3.8	宝珠	4 転	有	0.8	0.8	—	—	0.3	2.0	2.0	とも土	1	
2246	NH26J	×	—	—	—	4.2	宝珠	4 転	有	1.0	0.9	—	—	0.5	2.5	2.5	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 17」
2247	NH26P	×	20.3	20.0	1.5	5.7	宝珠	3 転	有	0.7	0.5	1.9	1.1	0.3	1.9	2.0	とも土	18	
2248	NH26R	×	(21.6)	(21.0)	(2.0)	3.1	宝珠	2 転	有	0.7	0.7	—	1.8	0.4	2.2	1.3	無	4	
2249	NH27E	×	—	—	—	4.3	宝珠	2 転	有	0.6	0.8	—	—	0.6	1.9	2.2	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 19」
2250	NH27F	×	—	—	—	3.0	宝珠	2 転	無	0.8	0.6	3.5	—	0.3	1.5	1.5	無	18	
2251			(20.4)	(23.0)	(1.8)	3.0			無	0.8	0.7	2.8	—	0.3	1.6	1.8	無		
2252			—	—	—	3.0			無	0.8	0.8	—	3.0	0.2	1.4	2.0	無		
2253			(21.0)	(20.6)	(1.9)	2.7			有	0.6	0.5	—	3.0	0.3	1.5	1.5	無		
2254			—	—	—	2.9			無	0.7	0.6	—	—	0.2	1.8	2.0	無		
2255			—	—	—	2.8			無	0.8	0.7	—	2.9	0.3	1.5	1.5	無		
2256	NH27I	×	(25.0)	(25.0)	(1.7)	3.0	宝珠	2 転	有	0.7	0.5	—	—	0.5	1.8	1.6	無	2	
2257			—	—	—	2.7			有	1.0	0.5	—	2.8	0.4	1.7	1.5	無		
2258	NH28B	×	(20.6)	(21.8)	—	3.8	水波文	0	有	0.9	0.8	1.2	—	0.4	2.1	2.2	無	1	
2259	NH31B	×	(23.2)	(22.0)	(1.8)	3.0	C 字対向	1 転	無	0.6	0.4	3.3	—	0.3	1.4	1.6	とも土	1	
2260	不明	×	—	—	—	4.5	—	—	無	1.0	1.0	6.3	—	0.4	2.1	2.3	無	1	
2261	不明	×	—	—	—	4.7	—	—	無	0.8	1.0	—	—	0.3	3.0	2.5	無	1	
2262	不明	×	—	—	—	4.1	—	—	無	0.7	0.8	—	2.2	0.5	1.8	2.5	無	1	
2263	不明	×	—	—	—	5.3	—	—	有	0.7	1.0	1.1	—	0.4	2.0	4.0	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 4」
2264	不明	×	—	—	—	4.8	—	—	無	1.1	1.0	4.0	—	0.5	1.9	3.5	無	1	
2265	不明	×	—	—	—	5.8	—	—	無	1.5	1.3	—	—	1.0	2.5	3.0	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 11」
2266	不明	×	—	—	—	3.8	—	—	無	0.6	0.7	—	2.0	0.4	1.6	2.1	無	1	
2267	不明	×	—	—	—	3.0	—	—	無	0.6	0.6	—	3.0	0.2	1.5	1.5	無	1	
2268	不明	×	—	—	—	3.0	—	—	有	0.8	0.6	—	3.5	0.9	1.7	2.0	無	1	蛍光 X 線資料番号「軒平 13」
2269	不明	×	—	—	—	—	—	—	—	—	0.3	—	3.2	0.5	1.7	1.5	無	1	
2270	不明	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.5	0.4	2.0	2.2	無	1	

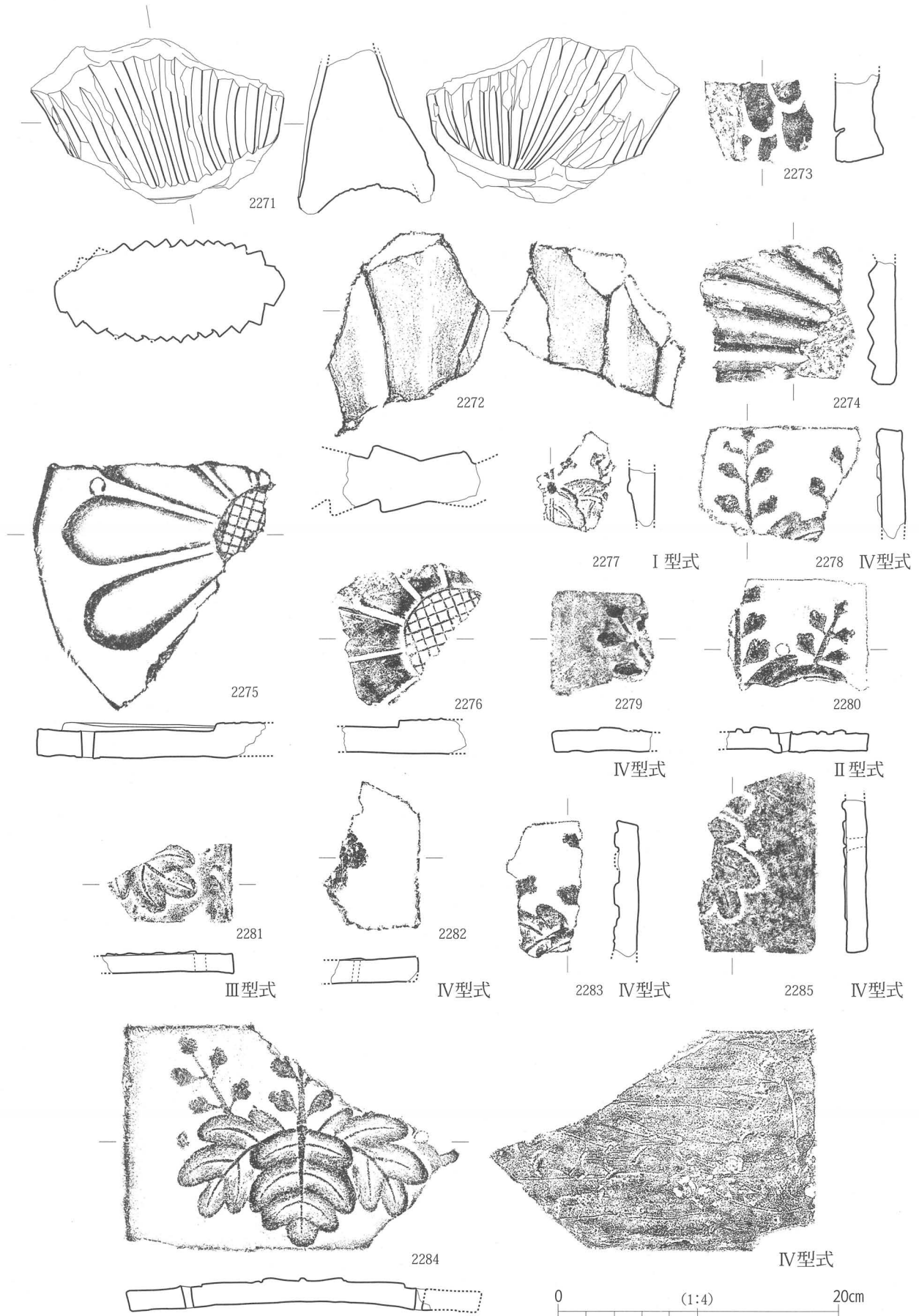


図 231 堀 83 出土 鯨瓦・飾瓦

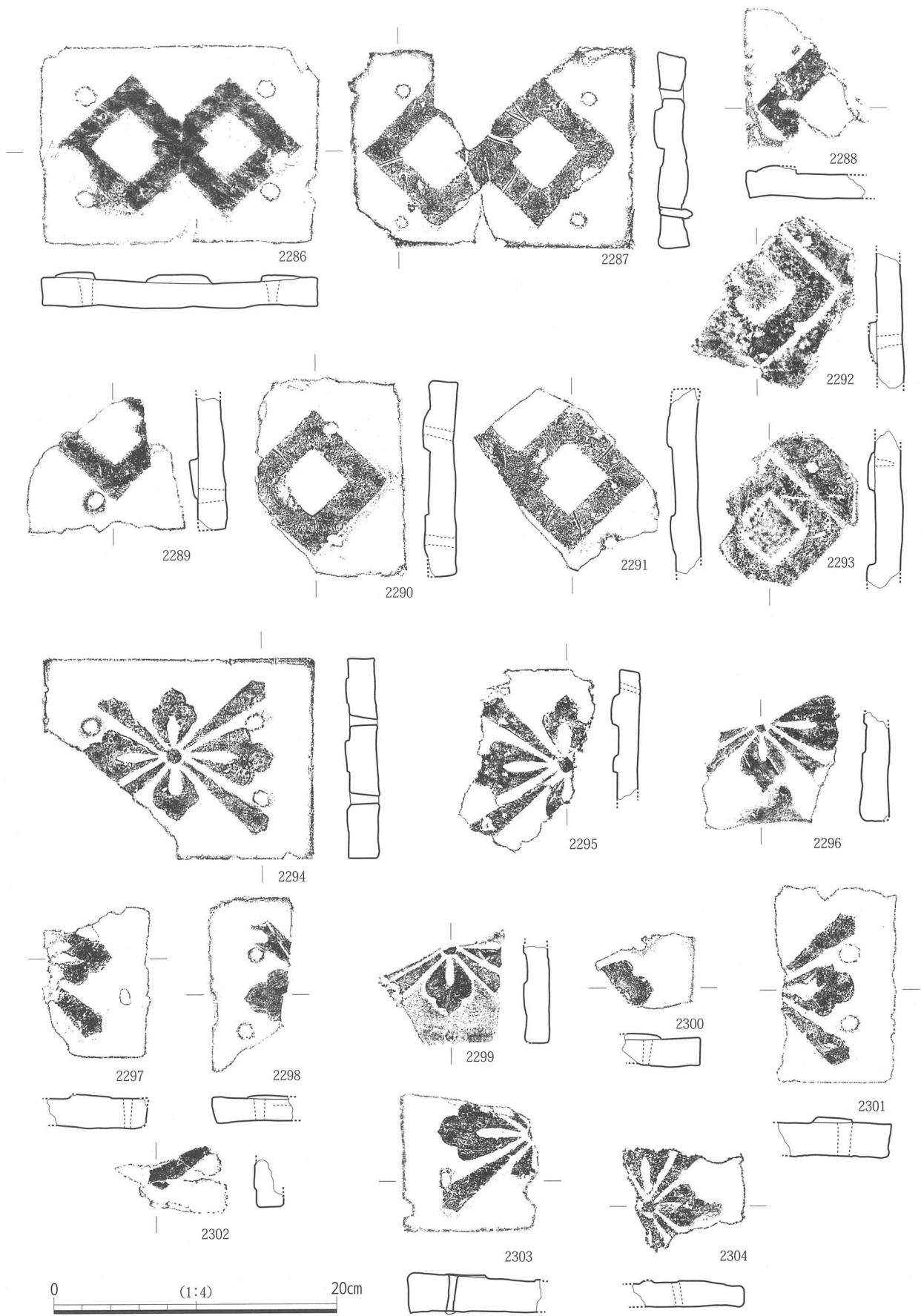


图 232 堀 83 出土 飾瓦

りするように水波文を配す。

2259はNH31B型式で、中心飾は下でつながる二重突線のC字対向で、縁取られた長い子葉が1転する。

2260～2270は中心飾不明で型式番号を付けられなかったものである。2261～2265は堅固な瓦当の作りから室町時代のもと考えられる。2260の雰囲気は2184に似る。2263は蛍光X線資料「軒平4」、2265は蛍光X線資料「軒平11」、2268は蛍光X線資料「軒平13」である。

⑦ 鯪瓦

2271は鯪の尻ビレで金箔は見られず、実測図の左が鯪の右側面、右が左側面である。

2272は赤色漆による金箔押の尻ビレで、やはり拓本の左が鯪の右側面、右が左側面である。

2273は沈線による長い鱗をもつ胴部の破片で、実測図下面で胴を横断してヘラ切りされていることから、焼成のため二体に分割構成されたものと考えられる。

2274は金箔押の右胸ビレである。粘土板を彫刻して成形している。

⑧ 飾瓦と釘穴を有する平瓦

2275は円形の十二弁菊紋飾瓦で、金箔は見られない。大きな中房は正格子で柄付けされている。2276も金箔押十二弁菊紋飾瓦で、やはり大きな中房を正格子で柄付けする。中房の直径は7.2cmで、2275とほぼ一致する。

2277～2284はタブレット形の桐紋飾瓦で、箔によってI～IVの4型式に分けられる。

いずれにも金箔は見られない。2277はI型式で桐葉の葉脈を2本の突線で描く。2279はII型式で、五七の桐紋。IV型式に比して右筒状花が小さい。2281はIII型式の桐紋。右桐葉の先がやや上を向く。2278・2279・2282～2285はIV型式で、五七の桐紋だが、左右の桐葉の先は下を向き、中央の筒状花は特に大きい。

2286～2293は違い釘抜き紋飾瓦、2294～2304は剣花菱紋飾瓦で、2292・2293・2303・2304以外、金箔がよく残る。2286の箔足から金箔は3.4cm前後と考えられる。釘穴は大概4箇所に通つのを基本とする。違い釘抜き紋飾瓦は型紙を当てての割り取り成形、剣花菱紋飾瓦は箔詰め成形である。

2305は割り取りによって帯状の突帯を斜めに成形した飾瓦。突帯上面のみに赤色漆で金箔を押す。

2306はやはり帯状の突帯を残す飾瓦で、突帯上面のみに赤色漆で金箔を押す。

2307は裏面が剥離し、粗いカキヤブリがあることから、鬼瓦の落とし込み張りに金箔を押したものかもしれない。

2308は丸瓦の凸面に金箔を押したもので、丸雁振り瓦の可能性はある。

2309は竹を表現したものと思われ、景色を構成する飾瓦の一部と考えられる。

2310は釘穴をもつことから、軒平瓦の平瓦部と思われ、凹面に細かい布目痕、凸面に離砂が付着する。室町時代の瓦であろう。

⑨ 差し瓦（菊丸瓦を含む）

2311は金箔押十弁菊丸瓦で、中房と花卉のみに金箔を押す。2312～2314は金箔をよく残し、2315～2317は金箔が見られないが、いずれも2311と同型式と考えられる。

2318は八弁菊丸瓦で、磨滅が激しい。

2319は広端面に金箔を押した差し瓦であり、2320も差し瓦の狭端部そばの破片である。

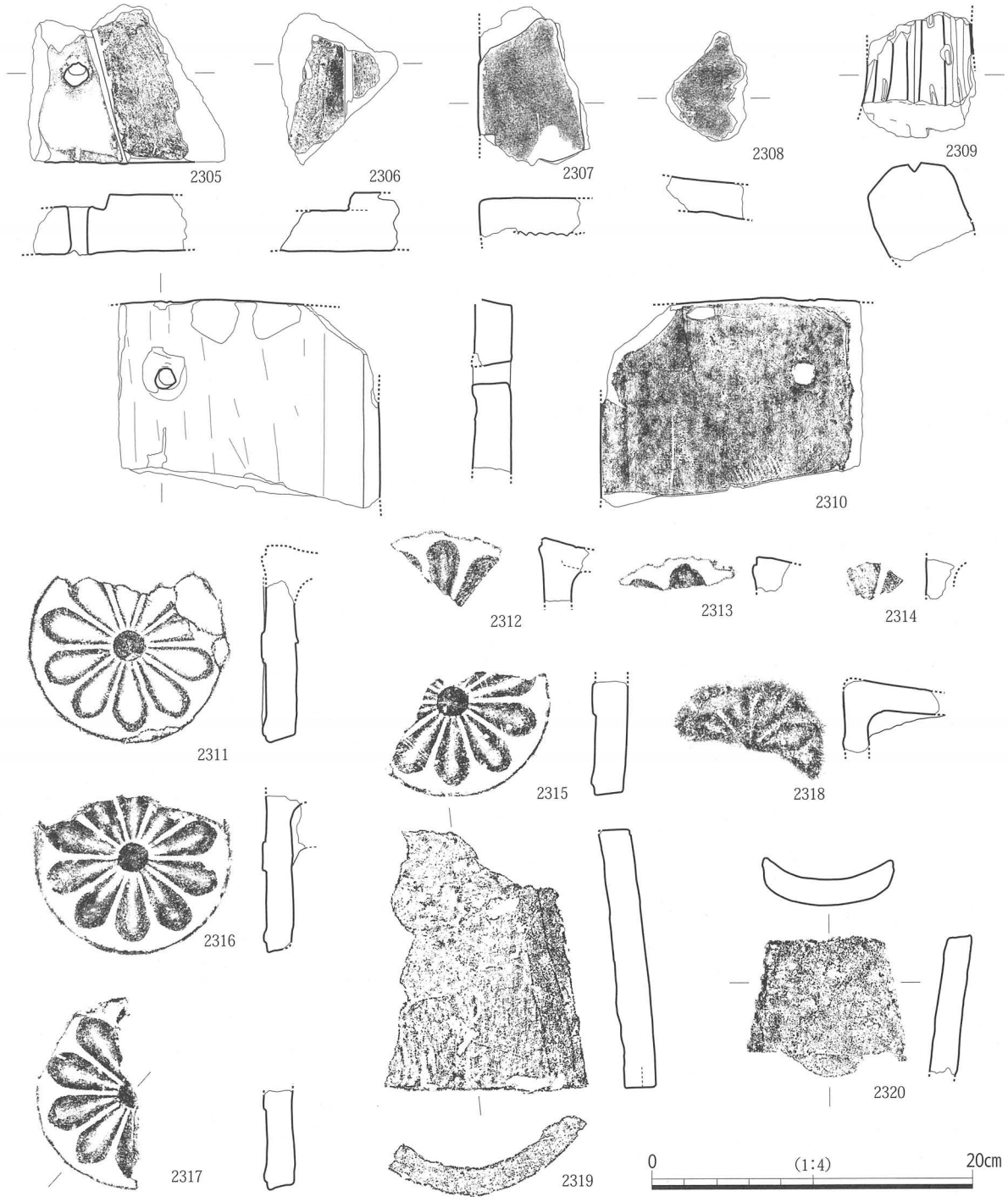


図 233 堀 83 出土 飾瓦・差し瓦

⑩鬼瓦

2321 は緩い内彎面に金箔を押した瓦で、復元すると直径 10 cm、高さ 3 cm ほどの低い截頭円錐形になることから、獅子口の経の巻きになるものと思う。

2322 は鬼の顎部破片で、ヘラによる沈線と刺突で下顎の鬚（ヒゲ）を表現する。幅 1.3 cm の口唇の上には沈線で歯が描かれている。

2323 は桐紋鬼瓦で、左葉と中葉の一部が残っている。ヘラによる刺突で葉脈を表現する。裏面にヘラ削りは見られるが削り取りがないことから、飾瓦の可能性も残る。

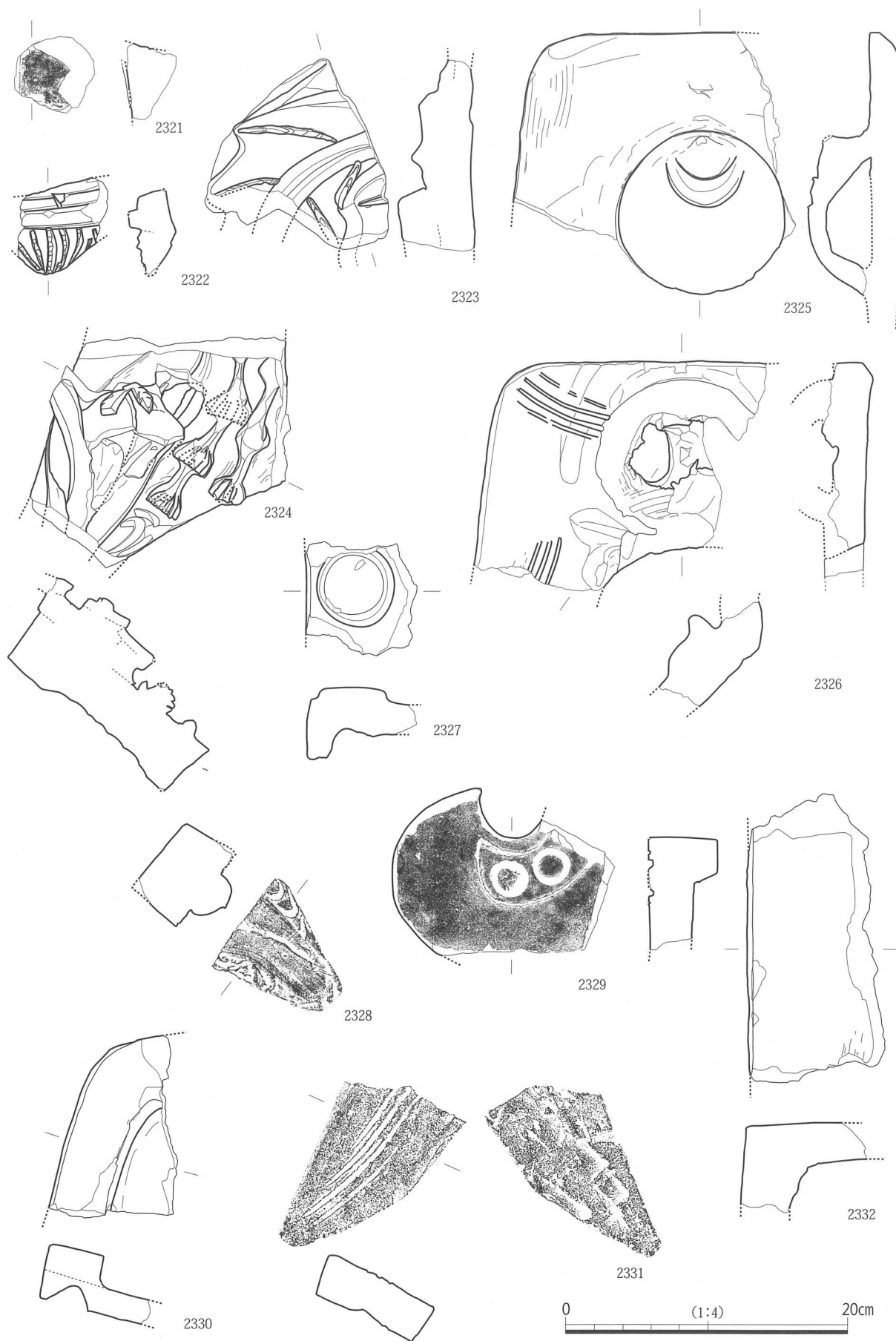


図 234 堀 83 出土 鬼瓦 (1)

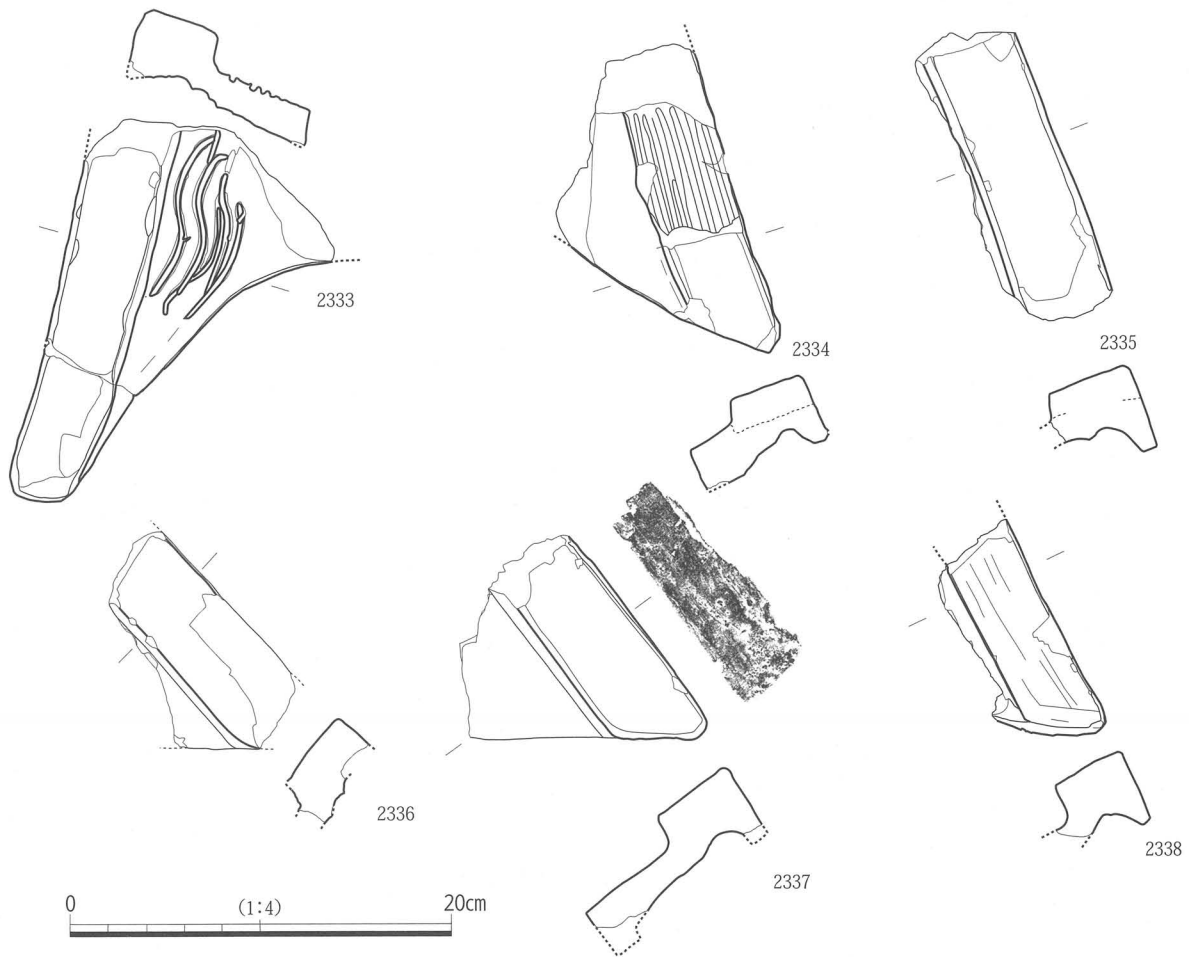


図 235 堀 83 出土 鬼瓦 (2)

2324 は棟鬼の左足元である。リンドウを思わせる長い葉が開き、藤のような花穂が 2 条垂れる。裏面を 0.8 cm ほどの深さでタテ方向に削り取る

2325 は宝珠文鬼瓦である。半球形空洞の宝珠を接合し、タテに把手を付ける。

2326 も宝珠文鬼瓦で、宝珠本体は失われたが敷台が残る。鬼瓦の地を削り取ることで把手を成形する。股削りが深いことから、隅二の鬼と考えられる。裏面は浅く削り取る。

2327 は鬼瓦の珠文で、裏面を深く削り取ることで側張りを拵えている。

2328 は鬼瓦の右足元で、木根の先のような形象と地には鱗が描かれている。裏面は砂が付着する。

2329 は鬼瓦の左ヒレで、足元は失われている。表面は沈線で溝を表現し、竹管を押して珠文を連ねる。裏面は削り取りで側張りを拵えるが、非常に丁寧なナデ調整を施している。

2330 は鬼瓦の落とし込み張り部分で、地の粘土板にカキヤブリを入れ帯状に粘土を足し、裏面を溝状に削り取っている。

2331 は隅二の鬼の左足元で、表面にヘラで沈線を施し、裏面は浅く削り取る。

2332 は棟鬼の台母屋の破片で、削り取り拵えで側張りを作る。

2333 は隅二の鬼の左足元で、地の粘土板にカキヤブリを施し、帯状に粘土を足し落とし込み張りを成形し、表面には火焰状にヘラで沈線を入れ、裏面は乱雑に浅く削り取る。

2334 は右足元で落とし込み張りの一部が欠落し、カキヤブリを見せている。裏面は粗く削り取る。

2335 ~ 2338 も落とし込み張りの破片で裏面の削り取りはさまざまである。2337 は側面を粗くナデる。

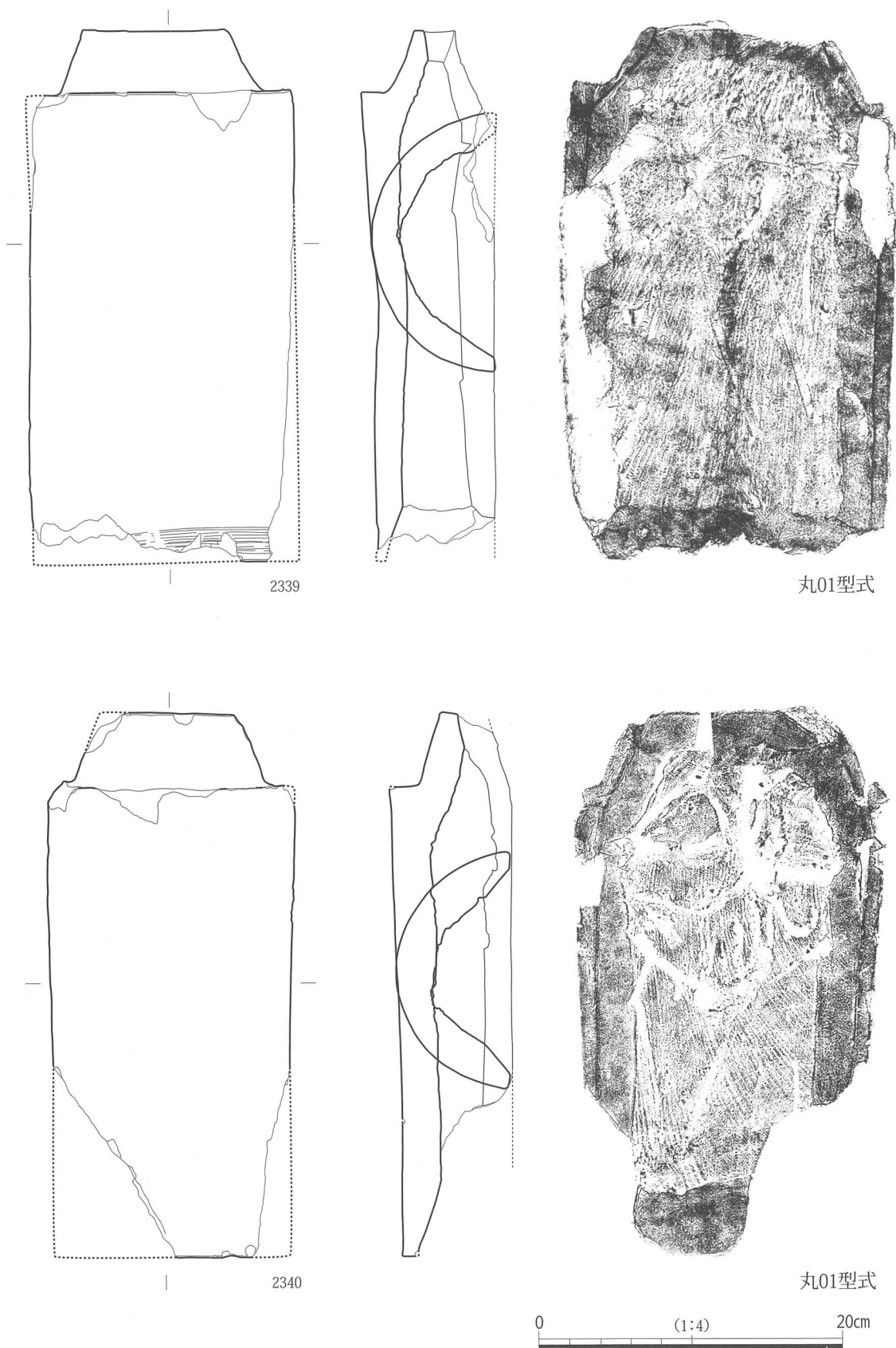
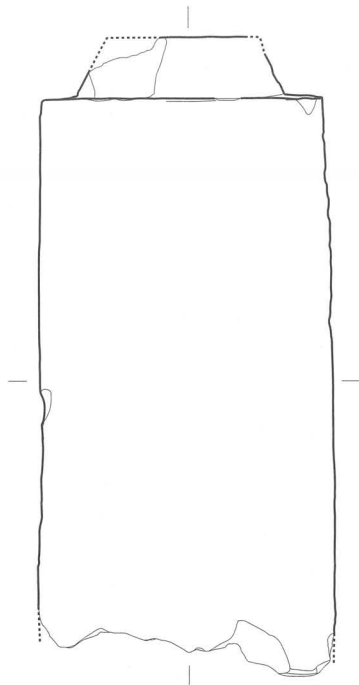
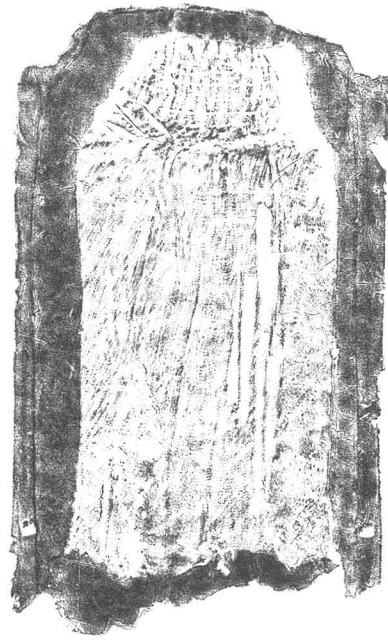


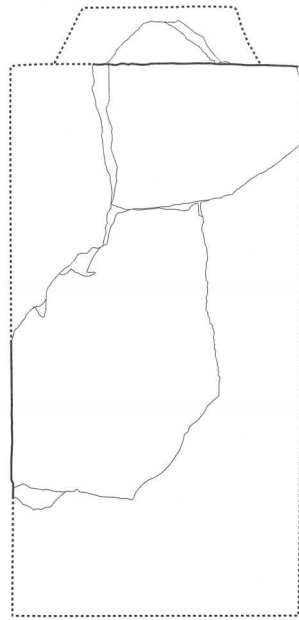
図 236 堀 83 出土丸瓦 (1)



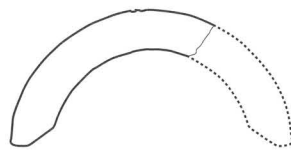
2341



丸02型式



2342



丸02型式

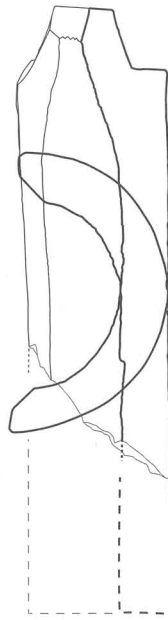
※上掲拓本は1/2



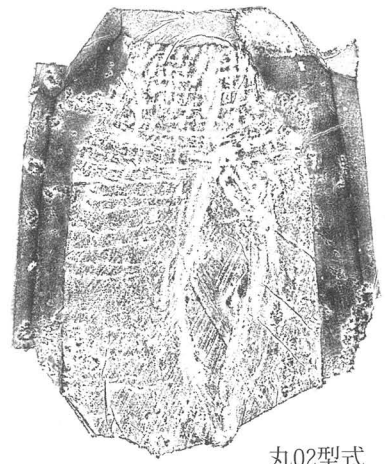
图 237 堀 83 出土丸瓦 (2)



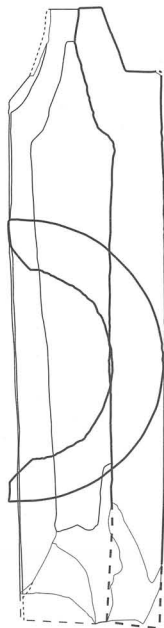
※左拓本は1/2



2343



丸02型式



2344



丸02型式



※上掲拓本は1/2

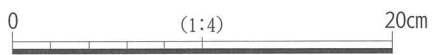


図 238 堀 83 出土丸瓦 (3)

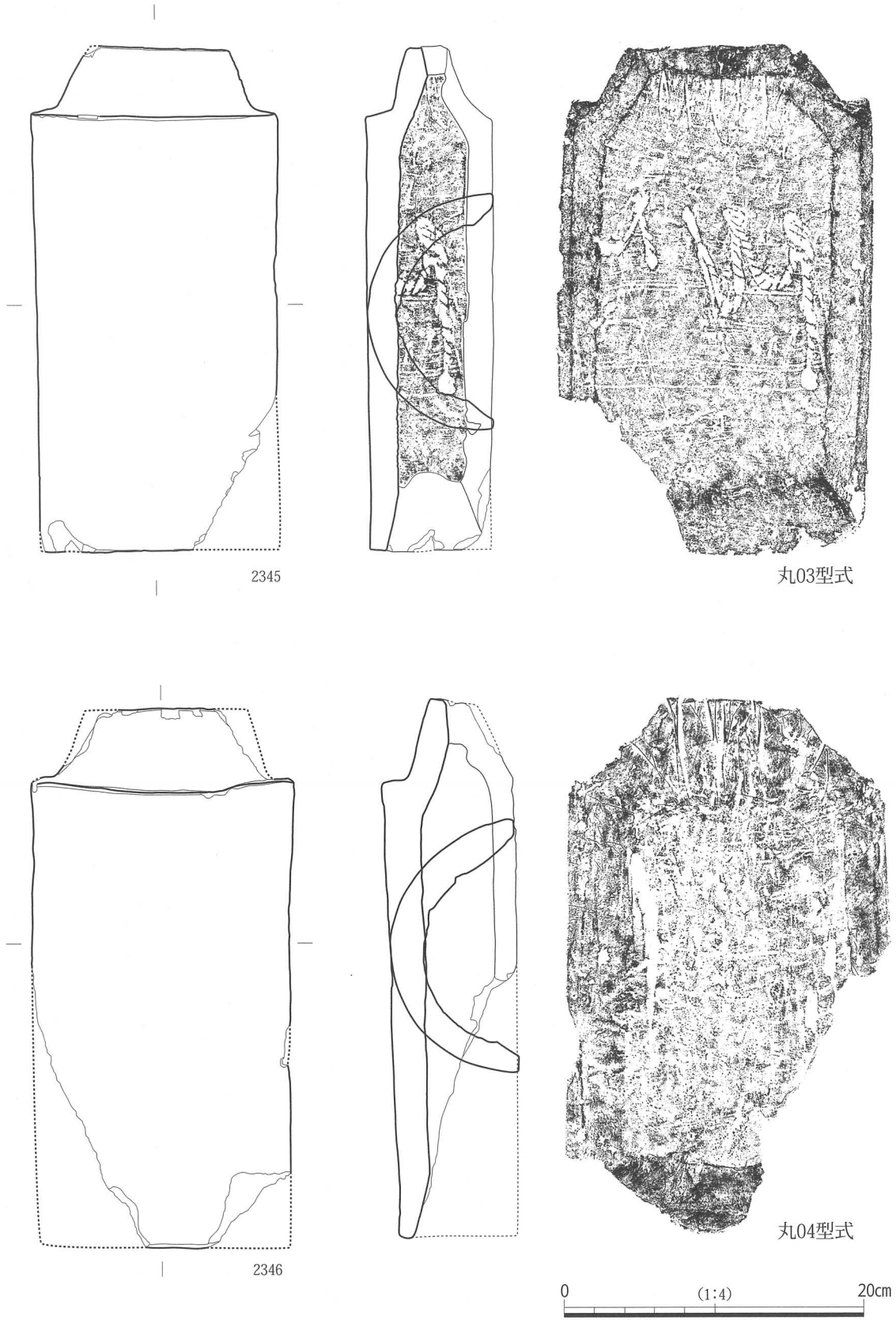


图 239 堀 83 出土丸瓦 (4)

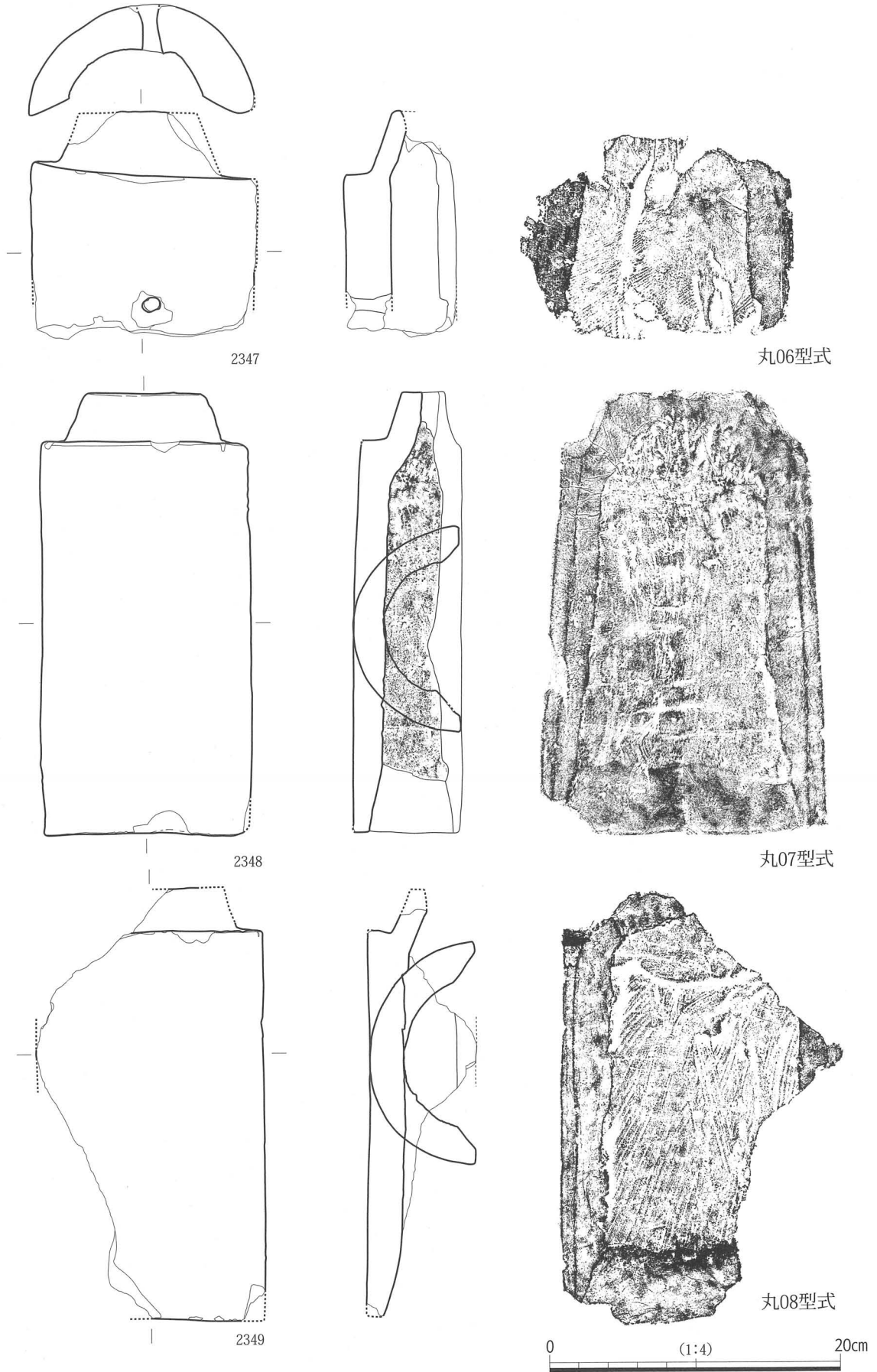
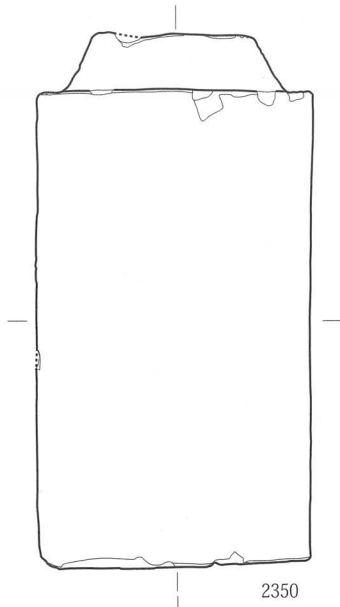
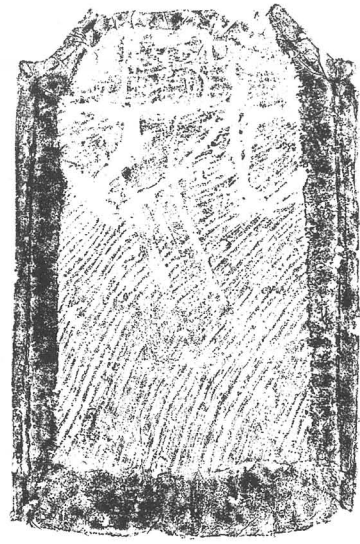
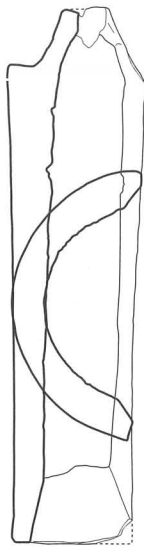


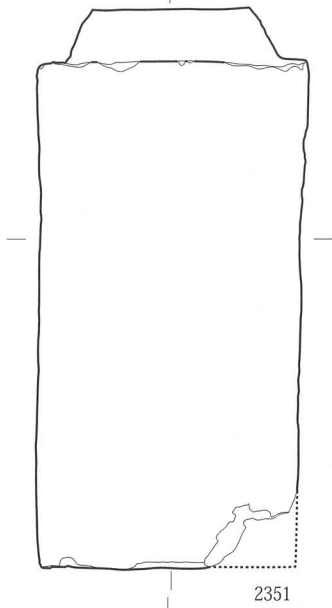
図240 堀83出土丸瓦(5)



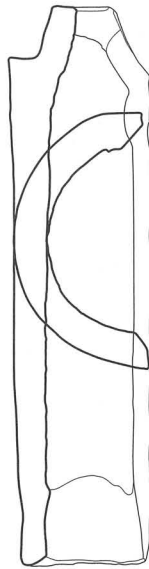
2350



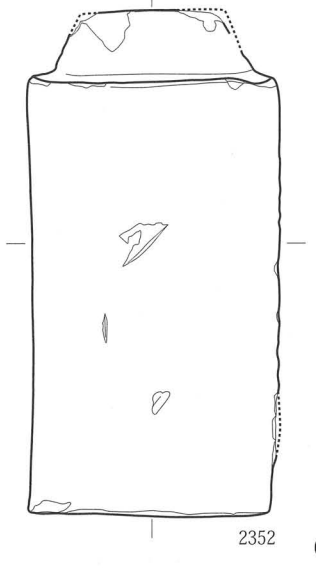
丸09型式



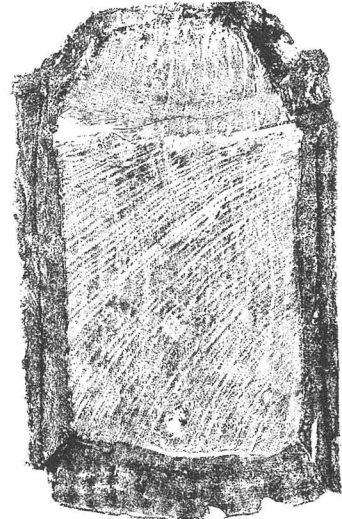
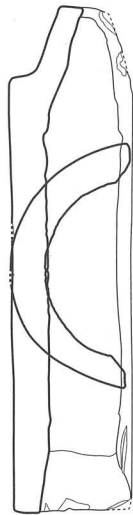
2351



丸09型式



2352



丸10型式

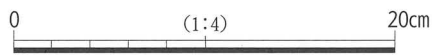


图 241 堀 83 出土丸瓦 (6)

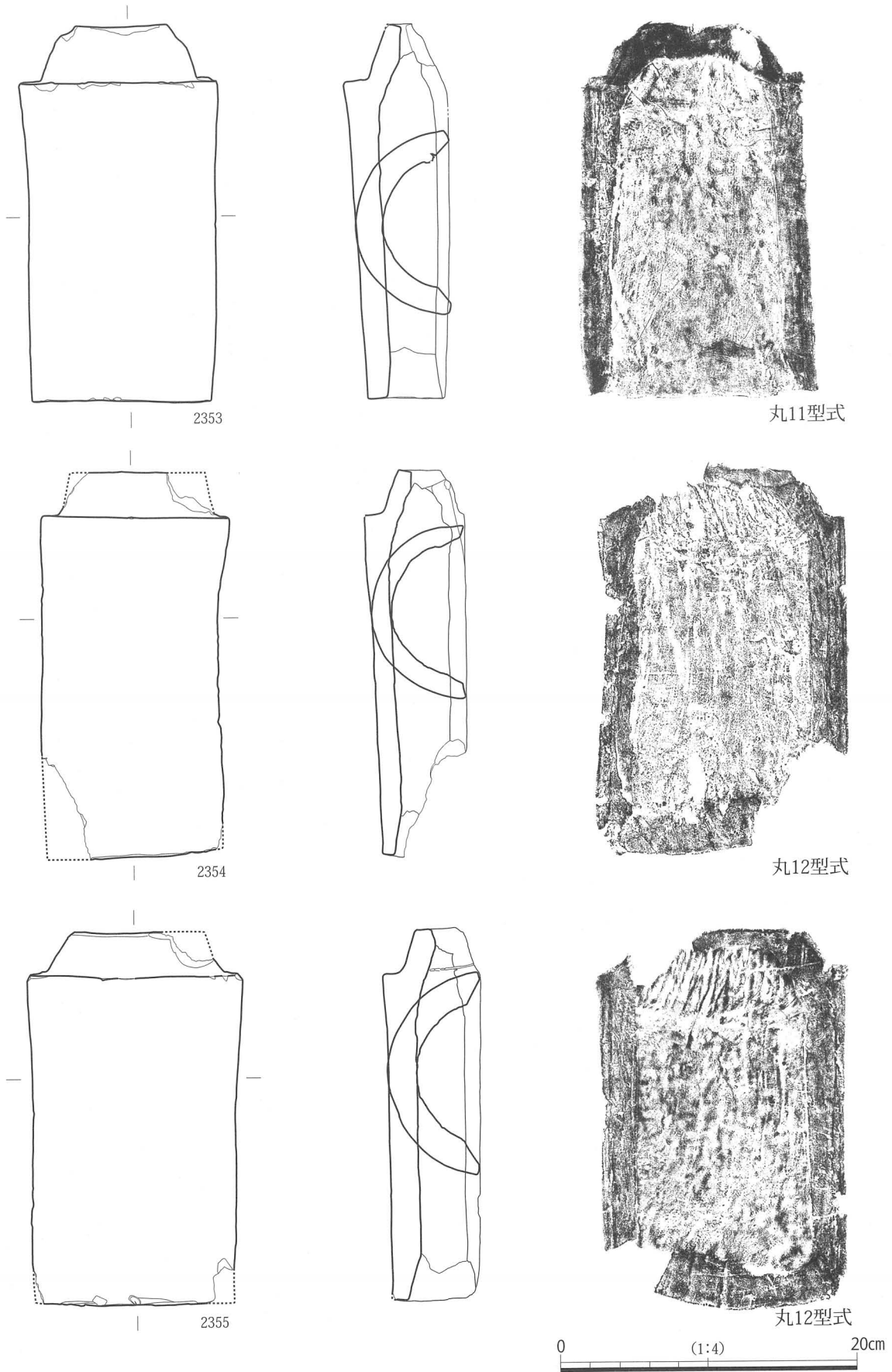
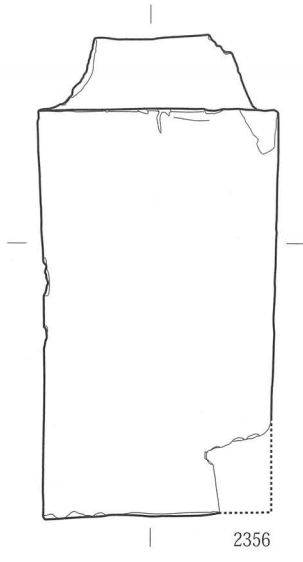
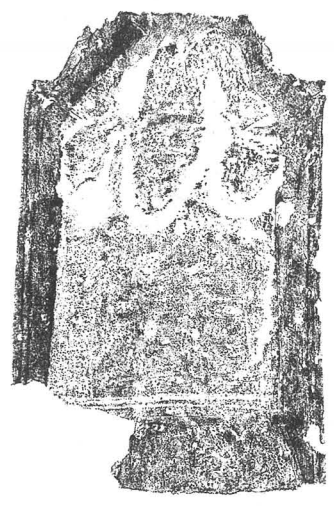
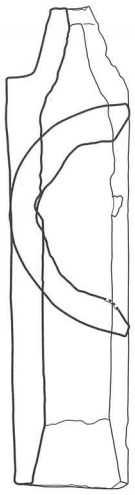


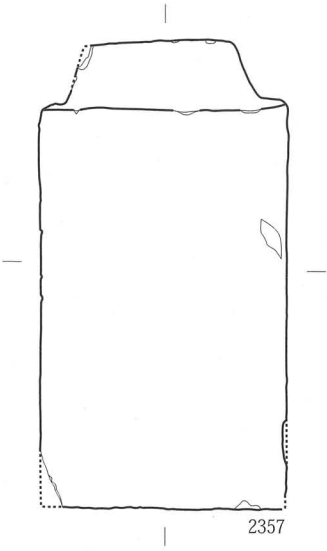
図 242 堀 83 出土丸瓦 (7)



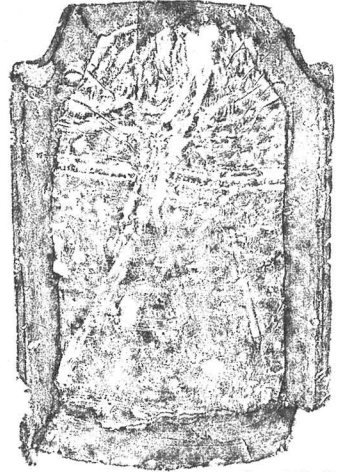
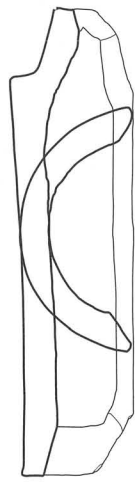
2356



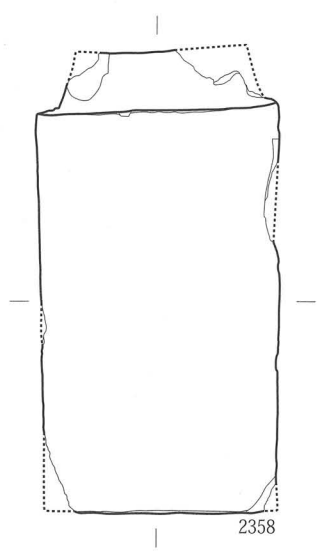
丸13型式



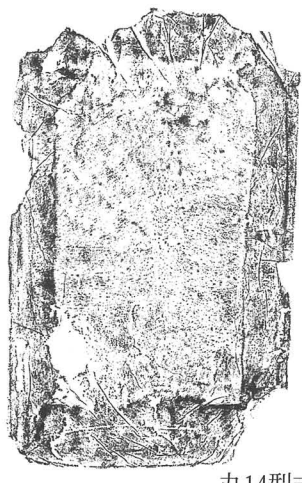
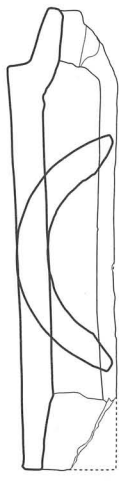
2357



丸14型式



2358



丸14型式

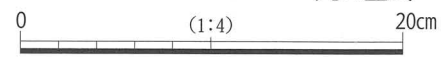


图 243 堀 83 出土丸瓦 (8)

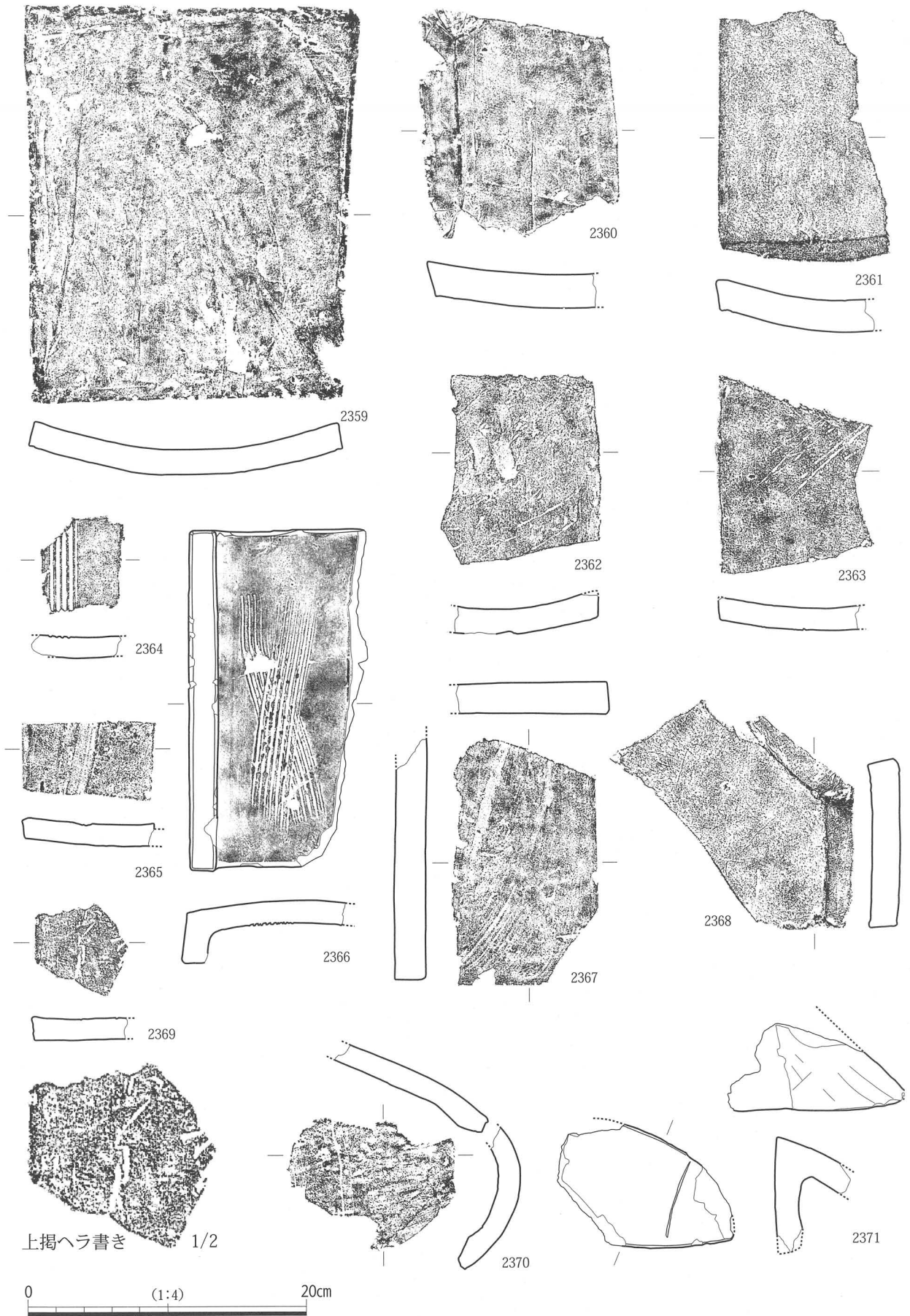


図 244 堀 83 出土 平瓦など

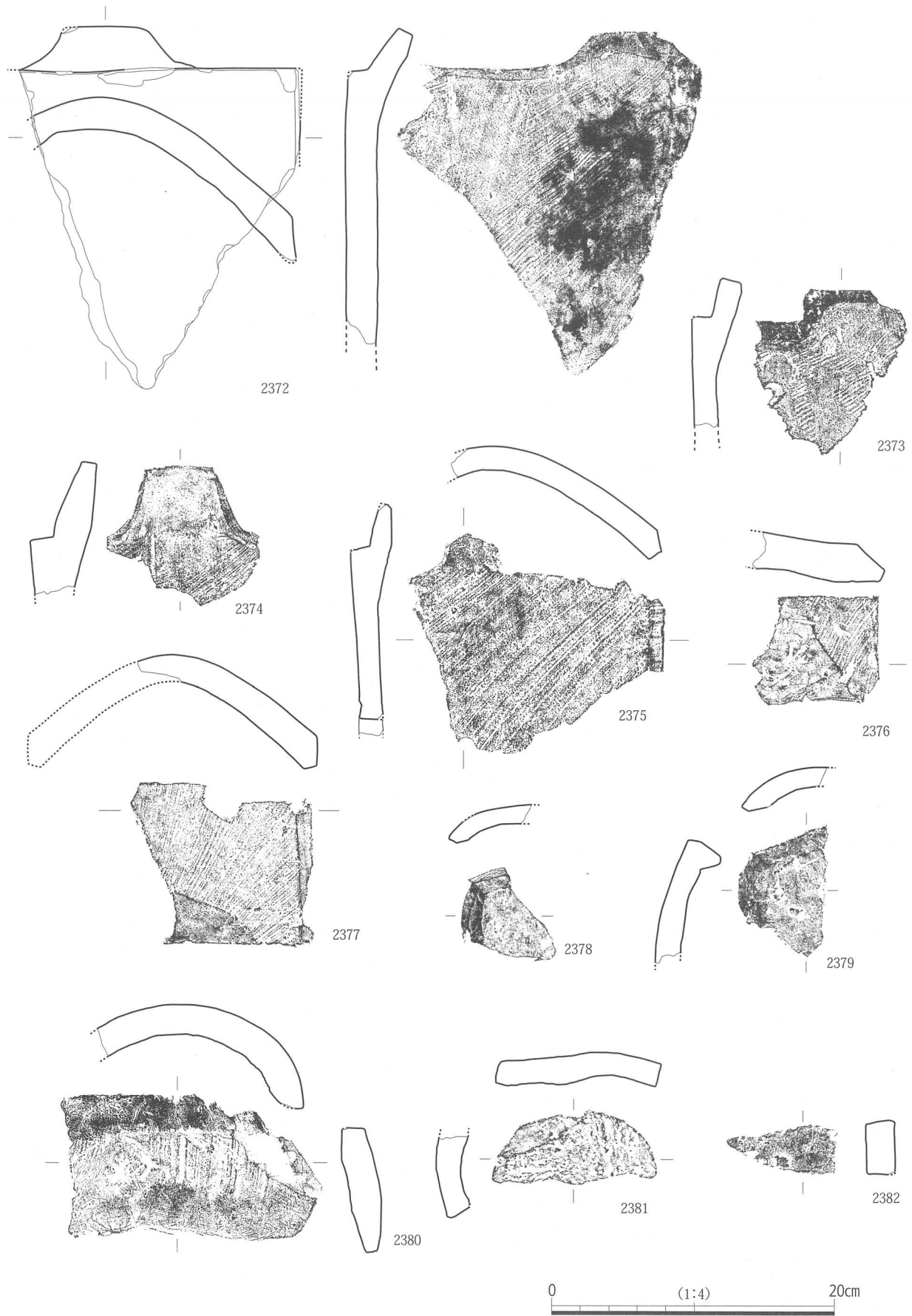


図 245 堀 83 出土 雁振瓦など

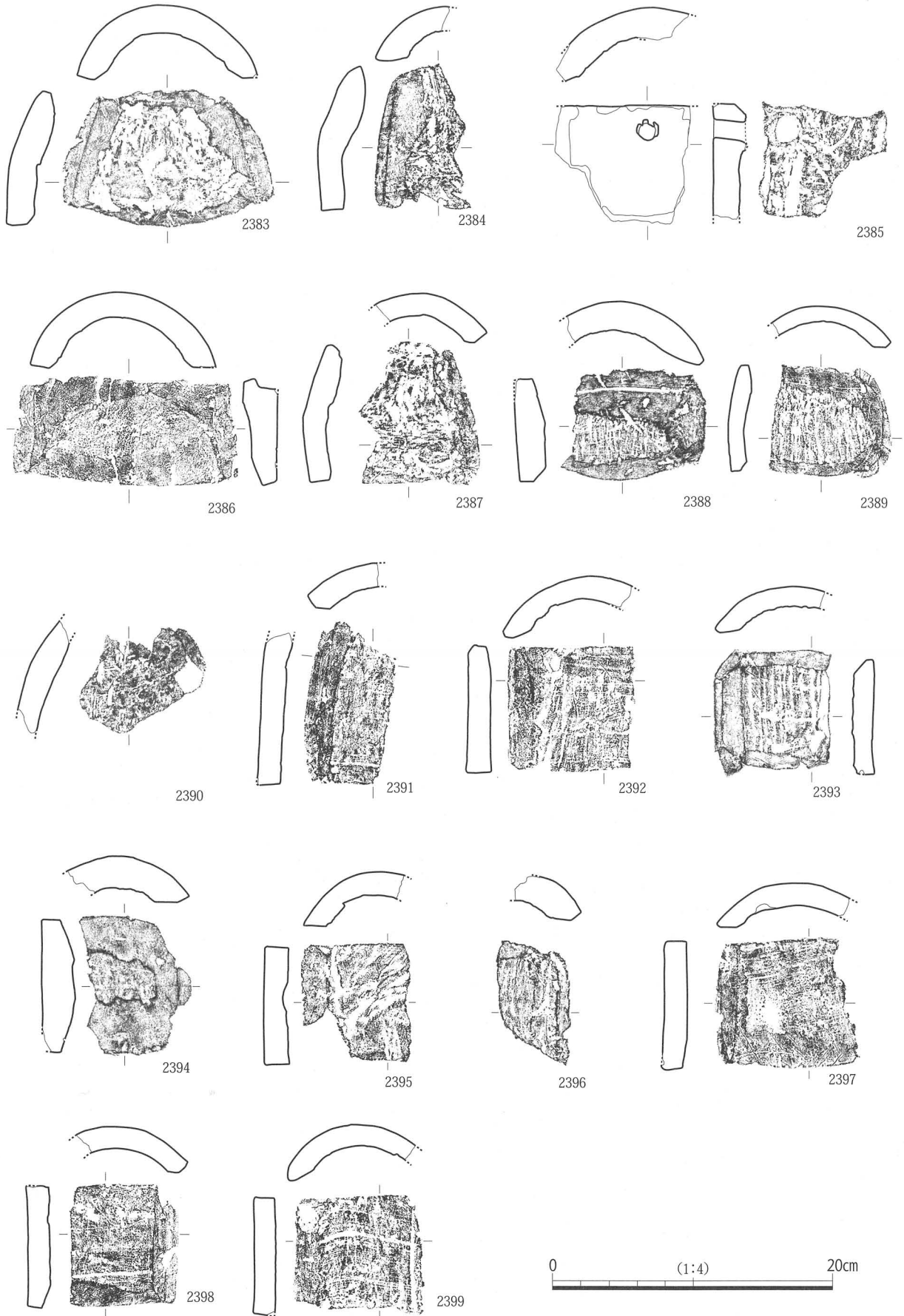


図246 堀83出土面戸瓦

⑪丸瓦

2339・2340は丸01型式で、両者とも凹面にループ状の吊り紐痕とコビキAを見せる。

2341～2344は丸02型式で、玉縁凹面に6～7段の横の差し縫いをもつのを特長とするが、2343の丸瓦凹面も横の差し縫いが顕著である。いずれもコビキA。2342は凸面に大日如来の種子である「ア」を先頭に「アビラウンケンソワカ」の梵字を記し、2343は「干時天正八年十一月」、2344は「天長地久御願円満皆令満足」とヘラ書き文字を配す。2341は蛍光X線資料「丸瓦6」、「丸瓦16」もこの型式のものである。

2345は丸03型式で、凹面にループ状の吊り紐痕とコビキBを見せる。

2346は丸04型式で、凹面側縁面取り際に叩き板小口面によるタタキがある。弱々しいコビキBである。

2347は丸06型式で、厚さ2.8cmと分厚い。凹面やや左側に布袋の紐痕跡がタテに見える。

2348は丸07型式で、蛍光X線資料「丸瓦1」がこの型式のものである。コビキB。

2349は丸08型式で、凹面にコビキAと布目痕を見せる。

2350・2351は丸09型式で、両者には玉縁凹面にタテ方向の刺し縫いがある。蛍光X線資料「丸瓦7」がこの型式のものである。

2352は丸10型式で、玉縁凹面にタテ方向の刺し縫いがある。蛍光X線資料「丸瓦10」「丸瓦11」がこの型式のものである。

2353は丸11型式で、蛍光X線資料「丸瓦2」はこの個体。「丸瓦4」「丸瓦13」「丸瓦15」もこの型式のものである。

2354・2355は丸12型式で、2355は蛍光X線資料「丸瓦8」。両者は凹面に弱々しいコビキBを見せる。「丸瓦5」「丸瓦12」もこの型式のものである。

2356は丸13型式で、蛍光X線資料「丸瓦3」はこの個体。凹面にループ状の吊り紐痕とコビキBがある。「丸瓦14」もこの型式のものである。

2357・2358は丸14型式で、両者は凹面にやや斜め方向のコビキBを見せる。蛍光X線資料「丸瓦

表 21 堀 83 出土丸瓦計測表

遺物番号	型 式	広端径	狭端径	全 長	玉縁長	コビキ	備 考
2339	丸01型式	16.0	9.7	34.8	3.9	A	
2340		15.5	9.5	36.0	4.9		
2341	丸02型式	15.1	9.0	33.3	3.0	A	
2342		(14.8)	—	—	—		梵字ヘラ書き瓦
2343		(14.9)	8.4	—	3.2		「干時天正八年十一月…」ヘラ書き瓦
2344		(15.0)	8.5	32.5	3.5		「天長地久御願円満皆令満足…」ヘラ書き瓦
2345	丸03型式	(15.0)	9.5	33.8	4.3	B	
2346	丸04型式	(16.9)	(9.0)	36.2	5.4	B	
2347	丸06型式	(15.0)	(6.5)	—	4.5	A	
2348	丸07型式	13.8	8.4	30.6	3.4	B	
2349	丸08型式	(15.5)	—	29.8	3.1	A	
2350	丸09型式	14.0	8.4	27.9	3.1	A	
2351		(13.5)	8.6	29.6	2.8		
2352	丸10型式	(12.8)	7.5	26.7	3.5	A	
2353	丸11型式	12.0	8.0	25.6	3.8	B	蛍光X線資料番号「丸瓦2」
2354	丸12型式	(12.4)	(7.5)	26.4	3.0	B	
2355		13.3	8.3	25.8	3.0		蛍光X線資料番号「丸瓦8」
2356	丸13型式	(12.0)	7.2	25.4	3.6	B	蛍光X線資料番号「丸瓦3」
2357	丸14型式	12.6	8.2	24.6	3.4	B	
2358		(12.0)	(8.0)	24.2	3.0		

9」がこの型式のものである。

⑫平瓦

2359は広端縁幅23.2cm、狭端縁幅21.7cm、全長28.2cm、厚さ1.8cmで、凸面は粗い不定方向のナデ調整で、凹面には丁寧なココナデを施す。2360は厚さ2.5cmで、凸面に叩き痕が見られる（拓本）。2361は厚さ2.3cmで、凸面に離砂が付着する。拓本は凹面で、広端縁を面取る。2362と2363は厚さ1.8cmで、凸面に叩きによると思われる斜め方向の条痕がある（拓本）。

⑬その他

2364・2365は熨斗瓦の破片で、カキヤブリが施されている。

2366は煽り台面（台面熨斗瓦）で、凹面にはやはりカキヤブリがある。

2367はやや分厚い塼で、拓本を提示した面（凹面）にコビキAが見られる。

2368は隅切瓦で平瓦の隅を斜めに切り落している。

2369は平瓦凹面左端近くにヘラ書きした文字瓦で、2行、3文字以上あったと思われる。右側1字は偏を残すのみで、左側に2字見える。

2370は隅蓋瓦で上を飾った形象は失われているが、コビキBの無玉縁の丸瓦が利用されている。

2371は半円形の無地の瓦当で蓋をした谷間瓦である。

2372～2377は雁振瓦で、玉縁の長い2374タイプと、短い2372・2373・2375タイプがあり、広端部のスリアワセも2376は面取りが深くなっている。

2378～2399は面戸瓦で、2380～2382が鯉面戸である以外は蟹面戸に属する。2380はコビキBの丸瓦を普通の輪切りとは90°異なった方向で使っている。蟹面戸は丸瓦の生地を輪切りにして作るが、無玉縁の丸瓦狭端部を輪切りにした2383・2384・2387と、有玉縁の丸瓦の玉縁をわざわざ切り落して面戸瓦にした2385・2386がある。2385は釘穴を有することから、軒丸瓦用に作った生地である。また凹面の四方を深々と面取りする2378・2379・2383・2386～2389・2393・2394のタイプと、輪切りにしただけの2395・2399のタイプ、三方のみを面取る2392・2397・2398がある。

（9）部材

部材は堀83およびそれに関連する遺構から出土した。多数出土した部材のうち、代表的なものを図化し報告する。

①木樋

2400～2413は木樋と考えられる部材で、節の残るものが多い。出土遺構は堀83の埋め戻しに関連する足場状遺構113・114からの出土がほとんどである。

木樋は断面が逆台形状や長方形をした、側面に釘の痕跡をもつ底板と推定するもの（2404・2405・2410）、長軸方向の片側が帯状に薄く、その部分に釘の痕跡をもち、底板との継ぎ目と考えられる側板と推定するもの（2400～2403・2407・2408）がある。底板と側板を組み合わせた場合、上端となる面には釘の痕跡が認められない。このことから、これらは板組みの溝の部材の可能もある。断面長方形のやや薄手で長辺の両側に釘の痕跡をもつ蓋の可能性が考えられるもの（2409・2411～2413）は、上記のものとはセットにはならない。一回り小さい木樋に伴うものか。2406は縦方向に半裁された側板と考えられるものである。底板・側板は長軸方向一端の長さ20cm前後を、蓋と考えられるものでは長さ12～13cm程を、板の半分の厚さにして相欠きにより継いでいたと推定され、その部分には釘ないし釘穴が数箇所残る。一部の木樋には刻印がみられる。

木樋は残存長の最も長い 2402 で 4 m 余りある。幅は側板が 34 ~ 35 cm、底板が 45 cm、51 cm、蓋かと推定するものは幅が 42 ~ 43 cm である。厚さは側板が 8 ~ 10 cm、底板が 4.7 cm、7.2 cm、8 cm、蓋かと推定するものの厚さは 4 ~ 5 cm である。

木樋は箱状に組み立てた場合、内側になる方の面は手斧痕が密に残り、丁寧な仕上げである。箱状の外側にあたる面では、大鋸挽のままのもの (2400・2409 ~ 2411・2413) や、粗いハツリ痕 (2401 ~ 2404) を残し、仕上げの雑なものが目に付く。但し、蓋と考えられる 2412 では内面に大鋸挽き、外面に手斧痕が残り、逆の場合もみられる。木樋の木取りは板目である。以下、番号順に説明する。

2400 は長軸の一辺が幅 6.5 cm の段差を持ち、この底板と接合した段差部分に 40 ~ 43 cm 間隔で釘の痕跡が残る木樋側板の部材である。もう一方の長軸には蟻形落し接ぎによる蟻ホゾが釘で固定されている。蟻ホゾの大きさは 7.5 × 6.3 cm である。長軸一端の長さ 21 cm は材の厚さが半分以下で、相欠き接ぎされていたと考えられる。内面は手斧痕が残り、刃の幅は 5.4 cm だ。大鋸挽きの外面には直径 3.1 cm の○の中に不鮮明な「大」であろうと思われるものを記した記号が重複部分を含め 10 数個認められた。これらには焦げた痕がみられず、材に印を当て、上から叩いてつけたものか。長軸一端の外面には材運搬時の紐かけ用と考えられる決り穴が 2 個あけられている。穴は 8 × 5 cm、9 × 6 cm の大きさで、穴と穴の間は幅 2.6 ~ 3.3 cm、厚さ 1.6 cm の棒状に残る。抉られた穴部分には刃幅 2.6 cm、5.6 cm の工具痕がみられる。

2401 は 2400 と同じく蟻ホゾが残る木樋側板である。蟻ホゾの大きさは 6.8 × 9.6 cm である。長軸の一端は原型を留める。平面形は台形状に先端に向けて幅狭く、斜め方向に段差があり、側板の厚さに近い長さ 8 cm の釘先が飛び出している。

木樋同士の接ぎというよりも、枅か何か他の部材と木樋を接いだ痕跡か。接続部の加工には鋸で段差の境を挽いており、アサリ幅は 2.4 mm である。他方の長軸端部は木樋廃棄後のハツリがみられる。底板との接合部は幅 6 cm で、その部分に 40 cm 間隔で釘が 2 箇所に残る。加工痕は上端面を除いた面全てにみられ、手斧痕の刃幅は確認できたものでは 4.4 cm である。

2402 は蟻ホゾが残る木樋側板である。蟻ホゾの大きさは 8.0 × 10.1 cm である。長軸一端の長さ 21 cm は材の厚さが約半分の相欠き接ぎと思われる段をなす。他端は残存状態は悪いが、2401 と同じく斜め方向に段差があり、他の部材と接いだ痕跡かと考えられる。底板との接合部は幅 5.8 cm で、47 ~ 75 cm の間隔で釘が残る。

相欠き接ぎ寄りの外面には幅 5 ~ 10 mm 幅のノミ状のもので刻んだ蔓性の植物に新芽らしいものと紋様の続き或いは○の刻印か不明のものが施紋されている。大阪府教育委員会の林義久氏の教示によれば、つるの新芽の表現は古い特徴を示す。紋様はいずれも手斧痕の後から施されており、試し彫りの可能性が考えられる。これは何の部材を木樋に転用したものかは不明である。

2403 も蟻ホゾが残る木樋側板である。蟻ホゾの大きさは 7.7 × 9.1 cm である。側板同士を蟻ホゾで接合した部材は途中で折られている。底板との接合部は幅 5.6 cm で、41.0 ~ 64.5 cm 間隔で釘が残る。長軸一端の長さ 21 cm は材の厚さが薄く、相欠き接ぎの段をなす。他端には木樋廃棄後のハツリがある。

2404 は底板が中央から縦方向に真二つに割れたものである。長軸一端の長さ 19 cm は材の厚さが薄く、相欠き接ぎの段をなす。他端には木樋廃棄後のハツリがみられる。また、外面には表面仕上げ加工とは異なるハツリがあり、木樋が破壊された時のものかと考えられる。両側面には 37 ~ 64 cm 間隔の釘ないし釘穴が残る。加工痕は外面に刃幅 11 cm、内外面に刃幅 3.5、4.5、6.5 cm のものがある。

2405 は底板に側板の底側が一部残る。長軸一端は鋸挽き、他端は木樋廃棄後のハツリがみられる。側面には底板に側板を止めた大きな釘が2つ残っており、その釘の頭は丸く巻き込んだ形をなす。釘の頭は完存するもので 1.8×0.6 cm、釘頭の根元は 8.7×7.3 mm、 9.3×7.0 mmである。釘と釘の間隔は26.5 cmである。反対側の側面では釘ないし釘穴の間隔は46、50 cmである。加工痕は内面では刃幅5 cm、外面では刃幅12.5 cmかと思われる。

2406 は側面に釘の痕跡が認められない点から、縦方向に半裁された木樋側板かと考えられるものである。両端部は破損しており、表裏ともに木樋廃棄後のハツリにより表面がささくれ立っている。加工痕は刃幅4.2 cm、破壊された時の工具の刃幅は4.7 cm前後か。

2407 は2401 及び2402 と同じく、斜め方向に段差をもつ側板の破片と考えられる。底板接合部とは反対側の側面に釘が残る。片側面は割れ面よりなる。手斧痕は刃幅3.3 cmか。

2408 は2400 と同じく、運搬用の紐かけ穴をもつ側板の破片である。決り穴は 9.1×6.0 cm、 9.2×5.8 cmである。残存部中央には「I」形状に幅0.8 cm、3.2 cmのノミ状のもので刻まれた痕跡がある。側面には蟻ホゾを固定したと考えられる釘が残る。釘の頭は巻き込まれており、大きさは 27×11 mm、釘の頭の根元では 10×8.2 mmである。

2409 は木樋蓋と考えられるものである。釘の先端側の手斧痕を残す面に鋭利なもので刻んだ「△」の刻印がある。両側に37～48.5 cm間隔で釘が残る。外面と考えられる大鋸挽きの面では長さ12.5 cmの相欠き接ぎ部分に手斧痕が残る。境目には鋸で挽いた痕があり、アサリ幅は2.9 mmである。内面と考えられる面では手斧痕が残り、刃幅は4.3 cmである。

2410 は長軸方向に欠損しているが、残る側面に25.5～48.5 cm間隔で釘ないし釘穴が残る点から、やや薄手の底板と推定する。ただし、釘の頭が残るものもあり、蓋との接合部とすれば、側板の可能性もありうる。片面には手斧痕、もう片面には大鋸挽きの痕跡が残る。大鋸挽きの痕跡が残る面に「へ」状の刻みがみられるが、木目が粗く浮き出ているため、「一」だけの可能性も考えられる。長軸一端の長さ12 cmは薄く、相欠き接ぎの段をなす。

2411～2413 は長辺の両側に釘が残り、木樋の蓋かと考えられるものである。但し、対応する側板の蓋との接点にあたる面に明瞭な釘の痕が認められないため、蓋で無い可能性も考えられる。

2411 は片面が手斧による加工、もう片面が大鋸挽きである。手斧痕の残る面の一端寄りに相欠き接ぎと思われる段がある。釘の間隔が片方の側辺では40.5～48 cm、他方の側辺では釘ないし釘穴の間隔が5.5～33 cmであるが、後者では5.5～15.5 cmと釘の間隔が狭いところもみられる。手斧痕のある面では、左側辺より幅9～10 cmの僅かな窪みがあり、これは側板にあたった痕跡の可能性が考えられ、手斧痕のある面が内面であったと推測される。手斧痕の刃幅は4.5 cmか。

2412 は大鋸挽きの面の右側辺から幅6 cm強で僅かな窪みがみられ、側板のあたった痕跡とすれば、大鋸挽きの面が内面にあたる。大鋸挽きの面からみて、左側辺の釘ないし釘穴の間隔は28.5 cm、右側辺の釘の間隔は10～21 cmである。釘の全長が残るものは長さ6.9 cmである。外面には手斧痕がみられ、刃の幅は4.5 cmか。2413 の長軸方向の一端は長軸に対し斜め方向に切り落とされているが、廃棄後のものか不明である。長軸両側には釘ないし釘の穴が残り、その間隔は42～92 cmである。加工痕は片面が大鋸挽き、もう片面には手斧痕が残り、刃幅は5.0、6.8 cmである。

② 板材

板材は堀83、堀83の足場状遺構106・113、遺構153から出土している。

2414 は板材である。片面・両側面は大鋸挽きの痕跡、裏面は雑な手斧痕を残す。大鋸挽きの面には直径 2.7 cm の○の中に「大」の入った刻印が数箇所認められた。これも焦げた痕跡がみられず、上から叩いてつけたものか。手斧痕の刃幅は 4.2 ~ 4.3 cm である。未使用の板材である。

2415 は全体に被熱したものか黒味を帯びている。これは船の部材であり、幅 12 ~ 14 cm の板材が釘で矧ぎ合わされている。釘部分には埋木が詰められており、埋木を外すと蟻溝 (1.8 × 6.1 cm、深さ 1.8 cm) の奥に釘の頭が見える。表側に 3 箇所、表側の途切れた部分の裏側に 1 箇所、釘跡が残る。和船底板の矧ぎ合わせに表と裏から縫うように釘を打ち込む技法があり、底板かと考えられる (大田区立郷土博物館 1996)。

2416・2417 は不明板である。長軸方向の一辺が残り、その部分には木の薄皮がついているが、幅狭の面取りが施されている。2416 は表面が手斧による加工、裏面が大鋸挽きである。側面には幅 1.0 ~ 1.7 cm の面取りがみられる。2417 は表裏両面に手斧と思われる加工痕が残る。側面は幅 1.5 ~ 2.0 cm の面取りがみられ、その部分には 42 cm 間隔で釘穴が 2 箇所残る。

2418 は小振りの板材である。上下両端部に各 2 箇所、釘穴があげられ、上端部では左側、下端部では右側に竹釘が残る。中央部は縦に細い筋が見えるが傷か不明である。両側面とも 2 箇所に直径 3 mm の穴があげられており、左側辺下部には竹釘が残る。左側辺の穴と竹釘の間隔は 14 cm、右側辺の釘穴の間隔は 16 cm である。両側面には無数の長軸と直交する筋が 2 ~ 4 mm 間隔であり、これは鉋がけの際つく筋のようなものと類似する。

2419 は不明の薄い板材である。小口に鋸で挽いた痕跡が残る。

2420 ~ 2422 は板目板で木目の美しい薄い板材である。2420・2421 の一辺は断面が V 字状に尖り、平矧ぎ接ぎの矢筈矧ぎと思われる。2420 は 3.5 cm 幅の棧木があたった痕跡があり、釘が中央に一列に並ぶ。釘の間隔は 5.5 ~ 7 cm である。2421 の裏面には幅 3.6 cm の棧を当てた痕跡と、釘が 1 箇所に残る。2420・2421 は同一個体の可能性が高い。2422 は片面に棧木の当たった痕跡を留め、その幅は上端部 2.5 cm、中央部 4.0 cm、下端部 4.8 ~ 4.9 cm である。一箇所に 5.2 × 2.4 cm の長形状の孔がみられるが、この孔は後世のものか不明である。棧のあたった痕には釘が一列に並び、その間隔は上端部では 4.5 ~ 6.5 cm、中央では 5 ~ 7.5 cm、下端部では 4.5 ~ 6 cm である。これは天井板である。

2423 はやや厚手の堅い板材である。両面ともに大鋸挽きの痕跡を留める。板幅の中央、長軸方向では少し偏った位置に、鉄砲玉が残る。凶化の際、鉄砲玉は除いている。写真図版 230 は鉄砲玉が途中で留まった時についたと思われる溝である。塀の板材か。

2424 は最大厚 1.5 cm の不明板材である。両面ともに大鋸挽きの痕跡が残る。上下端寄り、中央部などに釘穴が残り、表面のごく一部は黒く焦げている。

③柱

2425 ~ 2432 は柱である。2429 が部材集積遺構 97、それ以外は堀 83 出土である。2425 はホゾ穴が 4 箇所にあげられており、残存状態の良好な表面のホゾ穴の大きさは 2.7 × 9.2 cm、2.7 × 10.1 cm である。全面風化して木目が浮き出ているが、節部分に僅かに大鋸挽きの痕跡が残る。2426 は柱に面取りがみられ、1 つの面取り幅を柱の幅で割ったその割合は 8 分の 1 (部分によっては 13 分の 1) である (川勝政太郎 2002)。片面に 2 × 2.3 cm の四角い穴があげられているが、小舞をとりつける穴か。下端部は破損しており、表面は焼けて炭化している。大鋸挽きか。2427 はホゾ穴が 1 箇所に残り、その幅は 3.6 cm である。表面には手斧痕が残る。2428 は上端のホゾ穴にホゾ先端部分が残る、蟻形目違

いホゾ継ぎである。ホゾ断面は台形状を呈し、上辺の幅は 1.7 cm、底辺の幅は 5.0 cm である。中央部のホゾ穴は 4×11 cm、下部のホゾ穴は 2.8×6.2 cm である。表面は手斧により加工されており、刃の幅は 4.2 cm である。2429 の表面には矢羽状に規則正しくハツリ痕が残る。ホゾ穴は 3 箇所があり、大きさは 13.5×4.0 cm、 13.3×3.9 cm、 13.1×4.2 cm である。これは木柵の台にあたる柱か。

2430 は上端のホゾ穴が 3.1×5.2 cm、下部のホゾ穴が 2.8×6.2 cm である。大鋸挽きの痕跡が残る。

2431 はホゾ穴、小舞穴の多い転用柱材である。左から順に大きさを羅列すると、1 面目はホゾ穴が上から 3.4×10.1 cm、 4.0×21.8 cm、未貫通のホゾ穴が 2.2×10.4 cm、下部欠損のホゾ穴が 3.6 cm 幅である。2 面目のホゾ穴が上から 3.2×4.9 cm、 4.4×15.6 cm、 4.1×7.2 cm、未貫通のホゾ穴が 4.0×12.8 cm、小舞穴が上から 2.4×2.1 cm、 2.2×3.0 cm、 1.5×4.3 cm である。3 面目のホゾ穴は上から 3.9×6.0 cm、 4.2×21.2 cm、小舞穴が上から 2.5×2.4 cm、 1.6×2.0 cm、 2.0×1.8 cm、 2.9×3.4 cm、 2.0×2.1 cm である。4 面目では上部のホゾ穴が 4.3×16.0 cm、その周辺が一段浅く掘りこまれており、他の材と組み合わせた痕跡か。下部のホゾ穴は 3.3×6.8 cm である。柱は風化しているが、手斧痕が僅かに残り、面取りが施されている。面取りの割合は 13 分の 1 である。

2432 は全体に風化が著しくもろい。上部はホゾ穴部分で割れている。ホゾ穴の長さは 9.3 cm である。円い小舞穴は上から 2.0×2.0 cm、 2.6×3.1 cm である。四角い小舞穴は上から 2.4×1.9 cm、 2.4×1.9 cm である。長軸中央付近では表面が窪んでいるが、風化が著しく木が痩せたものか、摩滅したものかは不明である。2432 の面取り幅は広く、6 分の 1～8 分の 1 である。面取り幅が広い点から、中世の可能性もある。2432 の面の一つには長軸方向に直交する微かな筋と、中央部に木の割り裂けた痕跡が細長く残ることから、打割製材痕（渡辺 晶 1999）と推定する。

④ 柵材・杭

2433～2445 は柵関連の杭や柱である。出土遺構は 2433～2438 が堀 83、2439～2445 が堀 83 の遺構 141 である。2433 は丸太の皮を剥いだもので、尖端寄りには斜めの抉りが入り、その中央には釘が 1 つ残る。その裏面は極浅く抉っている。柵の控柱である。2434 は角柱の一端を尖らせたもので、長軸の中央部には転用前かと考えられる大きな釘が打ち込まれている。また、長軸より下半の 2 箇所には紐で縛った痕跡が白く微かに残る。下部破損部は図上で接合復元している。3 面目には釘が 5～6 cm 離れて平行に、11～31.5 cm 間隔で打ち込まれている。全面大鋸挽きで、柵の親柱か控柱である。

2435 は丸太を鋸で四分分割し、皮側の 2 面をハツリ、断面四角形状にしているが、薄皮部分を一部残す。1 面目の左側面は表面が風化している。柵の親柱か。2436 は 3.3×5.3 cm のハツリが 1 箇所にみられるが、丸太をそのまま利用したもので、一端を尖らせ、他端には 2.8×4.8 cm のホゾ穴を切っている。ハツリ部分には刃の幅 2.5、3.0 cm の手斧痕が残る。2437 は丸太を利用したもので、相対する面の異なる位置に抉りが入られている。抉りの大きさは 4.6×7.2 cm、 5.7×7.0 cm である。表面は薄く皮を剥いており、下半約 70 cm は焼かれて黒く変色している。抉り部分の下方には、「〇〇十月」の刻書が認められる。上 2 文字は不明であるが、文字ではなく記号の可能性もある。

2438 は丸太をそのまま利用したもので、下方には樹皮が残り、下部約 80 cm の樹皮表面は黒く焦げている。上方および中央部では皮を剥いだ痕跡が残り、尖端寄りには相対する位置に斜めの抉りとハツリ痕がみられる。抉りの大きさは 9.8×17.8 cm である。抉りを入れる際の鋸のアサリ幅は 2.3 mm である。

2439 は全面ハツリ、断面は七角形をなす。一端は杭状に尖り、尖端寄りで折れ曲がっている。

2440 は一部に皮を留める丸太で、一端を尖らせ、他端寄りにホゾ穴を 1 つあけている。ホゾ穴は 2.3

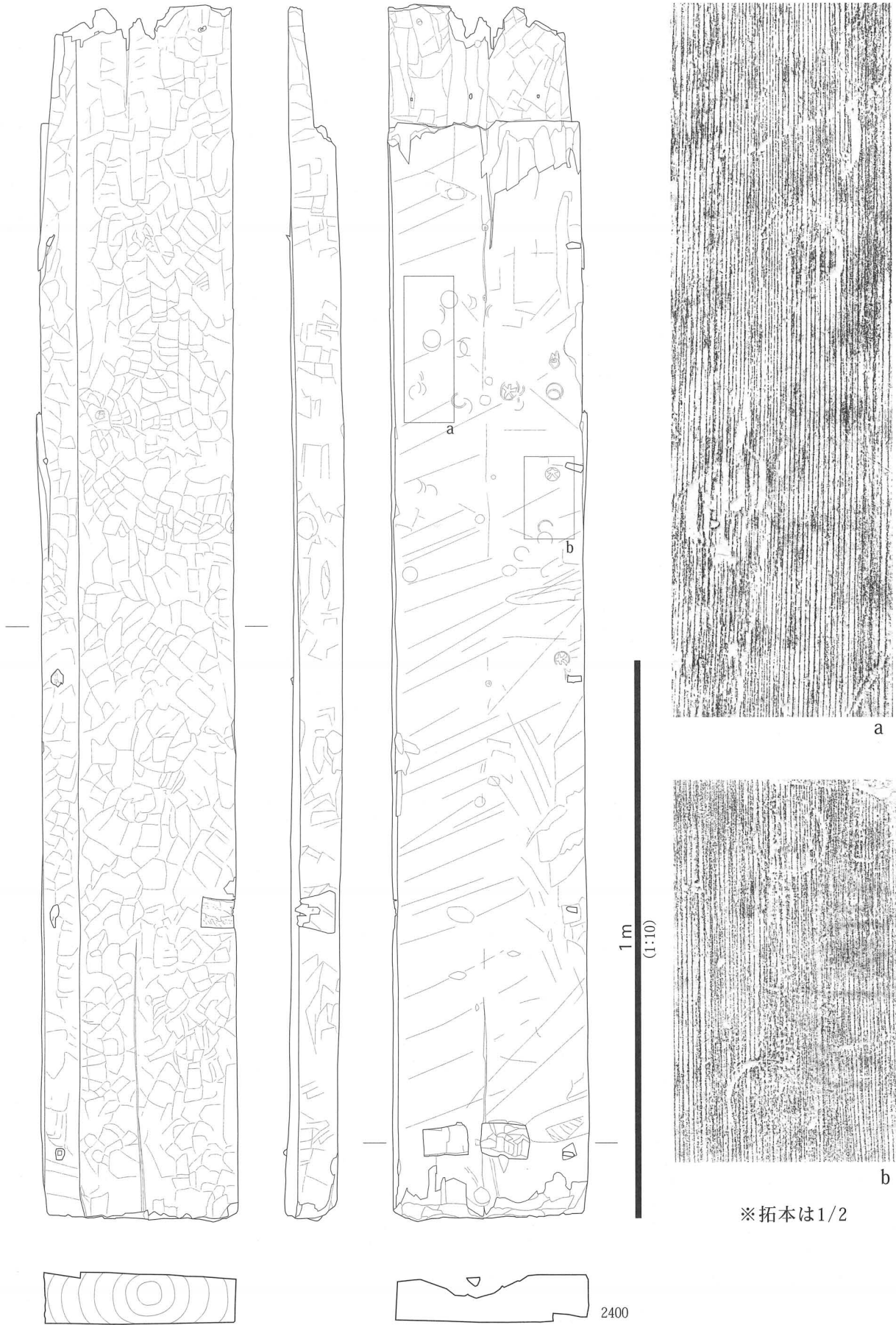


図 247 堀 83 出土大型木製品 (1)

× 8.7 cmの大きさである。尖端寄りで折れ曲がっている。

2441 は表面の傷みが著しく、無数の縦方向のひび割れがみられ、詳細は不明であるが、丸太の皮が極一部残る。これは一端を歪んで尖らせ、他端を斜めに切っている。

2442 は皮を剥いだ丸太の一端を鈍く尖らせ、他端は折れた状態である。

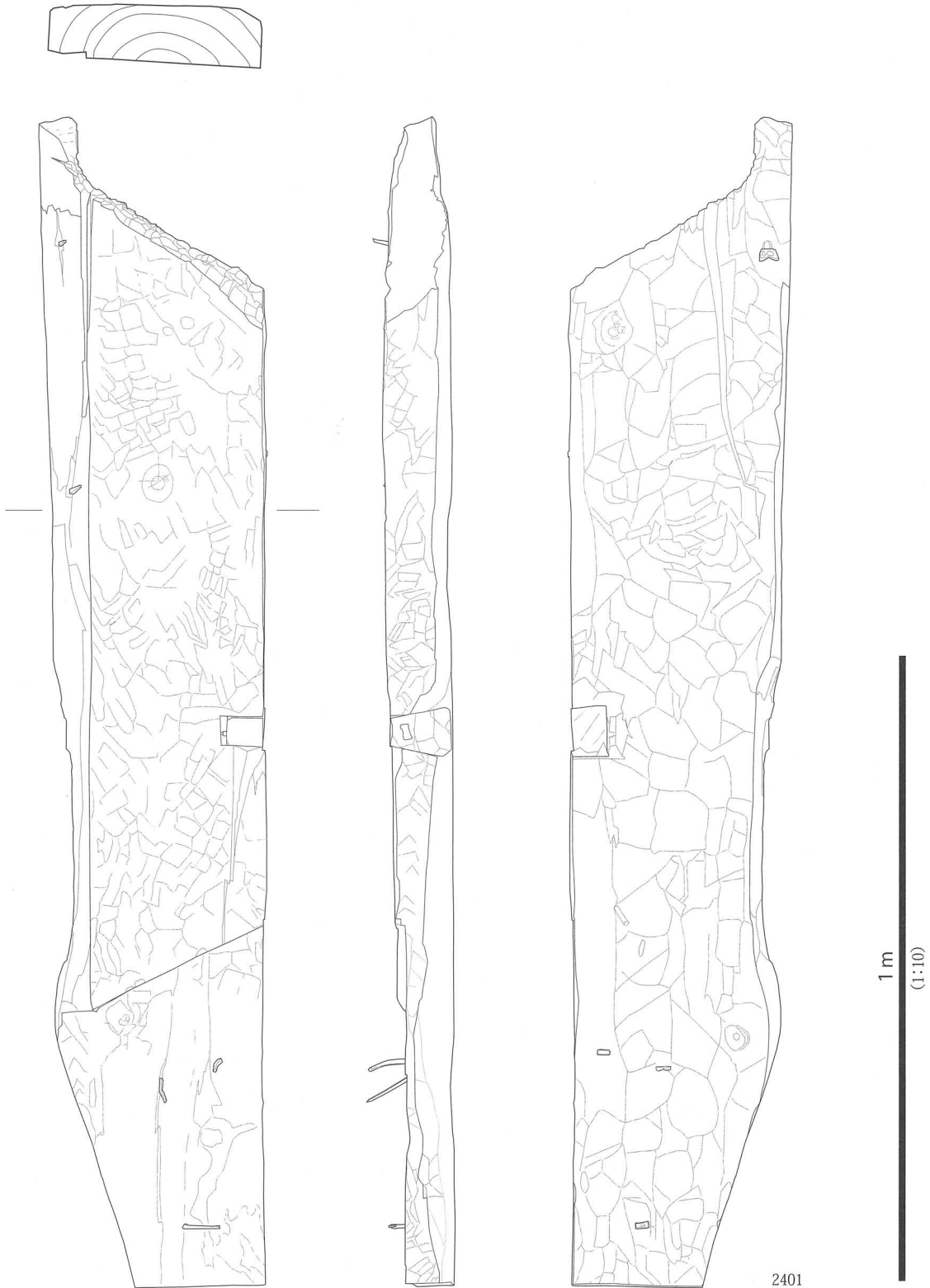
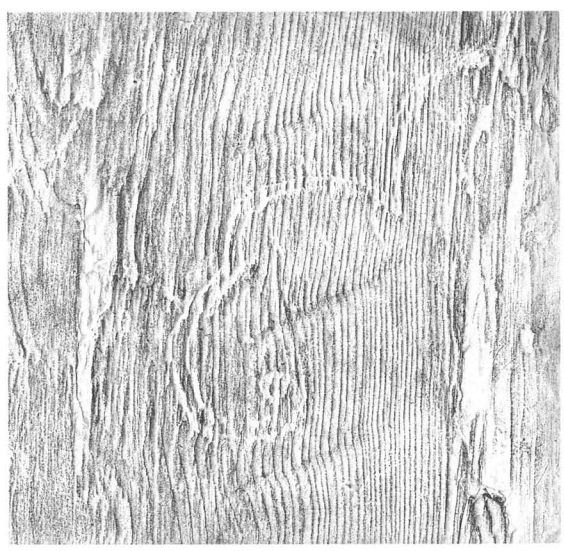
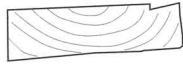


図 248 堀 83 出土大型木製品 (2)

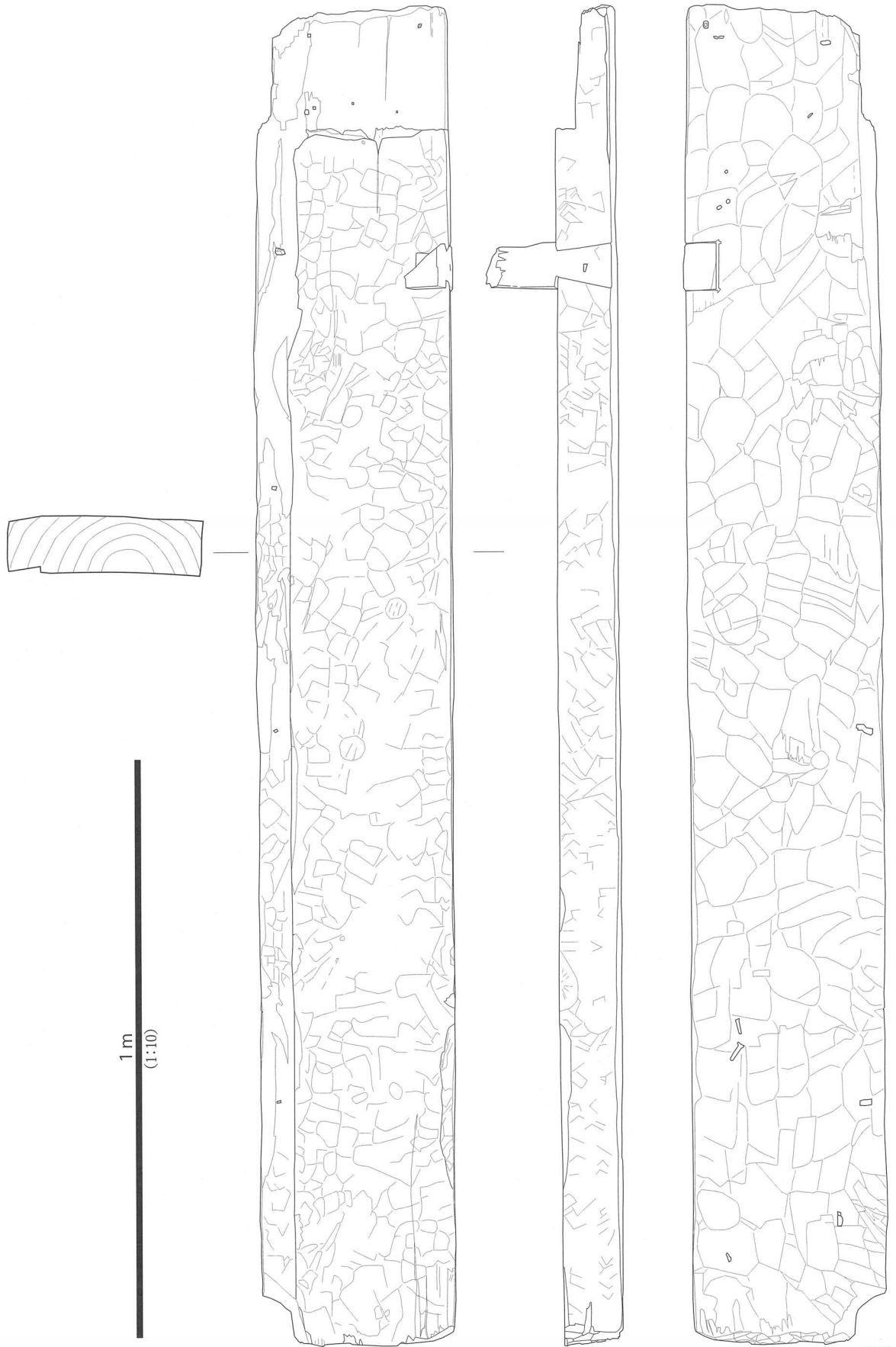


※拓本は1/3



2402

图 249 堀 83 出土大型木製品 (3)



2403

図 250 堀 83 出土大型木製品 (4)



图 251 堀 83 出土大型木製品 (5)

2443 は皮を剥いだ丸太の一端を尖らせ、他端を周囲からハツリ、断面は円形をなす。先端部は4面カットしているが、一部未加工部分を残して尖らせている。3箇所に紐で結んだ痕跡が黒く残る。紐の痕跡は斜め方向で、その続きには幅0.4～1.0 cmの横線が複数残る。

2444 は表面に皮を残す丸太の両端にホゾを作りだしている。一方のホゾには更にホゾ穴があげられているが、途中で欠損しており、詳細は不明である。ホゾの厚さは2.0 cm、上端のホゾ穴の幅は2.4 cmである。2445 は皮を剥いだ丸太の両端にホゾを作り出したもので、表面の傷みが著しく、細かいひび割れが多い。上部ホゾの厚さは2.5 cmである。

⑤その他の部材

2446～2463 は建築部材および不明のものである。そのうち、2447～2457 は幅・厚さともに10

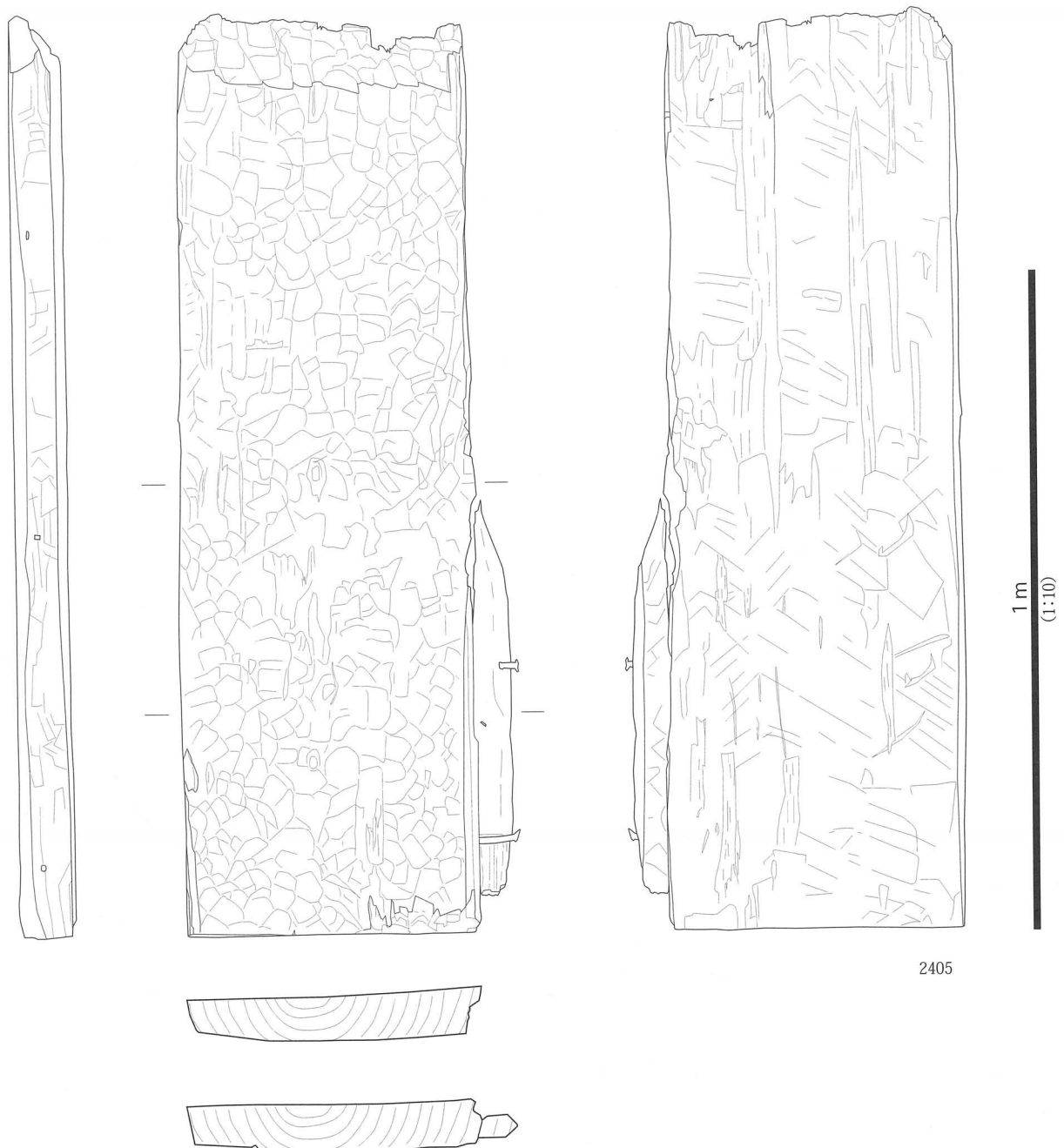


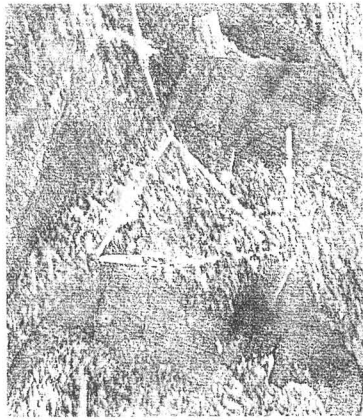
図252 堀83出土大型木製品(6)

cm未満の小角材で、建具類の部材の可能性が考えられるものである。出土遺構は堀 83、足場状遺構 104・106 である。2446 は片方の側面に釘が 1 つ残る、一本の溝を持つ部材である。幅 5.2 cm、溝幅は 1.6 cm、溝の深さは 1.4 ~ 1.9 cm の、おそらく鴨居の破片であろうと推定するものである。表面はかなり風化し、木目が浮き出ている。

2447 は表面に 0.7×4.9 cm、裏面に 0.7×2.5 cm のホゾ穴を設け、ホゾを裏面側から木の楔で固定している。片側には縦方向に幅 0.8 cm、深さ 0.7 cm の溝が切りこまれている。ホゾ穴のある側面には微かに墨でひいた線が残り、図化していないが裏面へと続いている。上端から 30 cm 弱の位置には釘が裏面側から打ち付けられている。図化していないが、本来は裏面が外面にあたるものと考えられる。

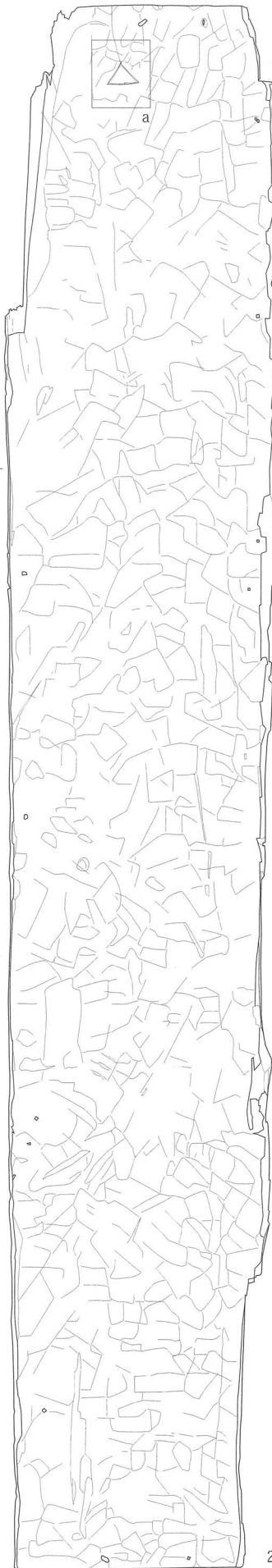


図 253 堀 83 出土大型木製品 (7)



※拓本は1/2

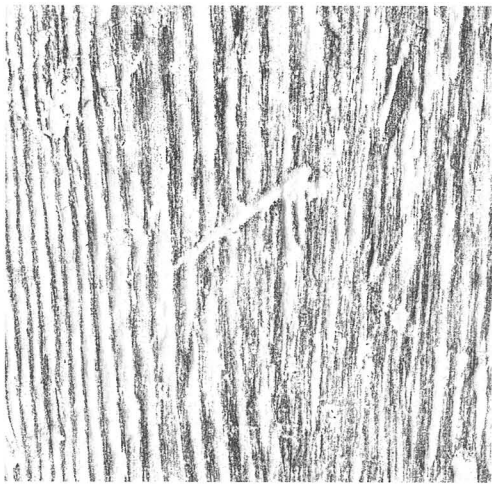
a



2409

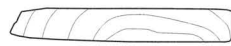


図 254
堀 83 出土大型木製品(8)

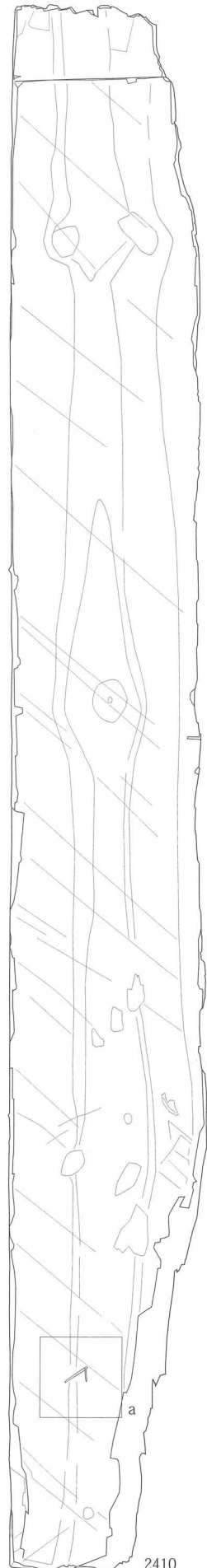


※拓本は1/2

a



1 m
(1:10)



a

2410

図 255 堀 83 出土大型木製品 (9)

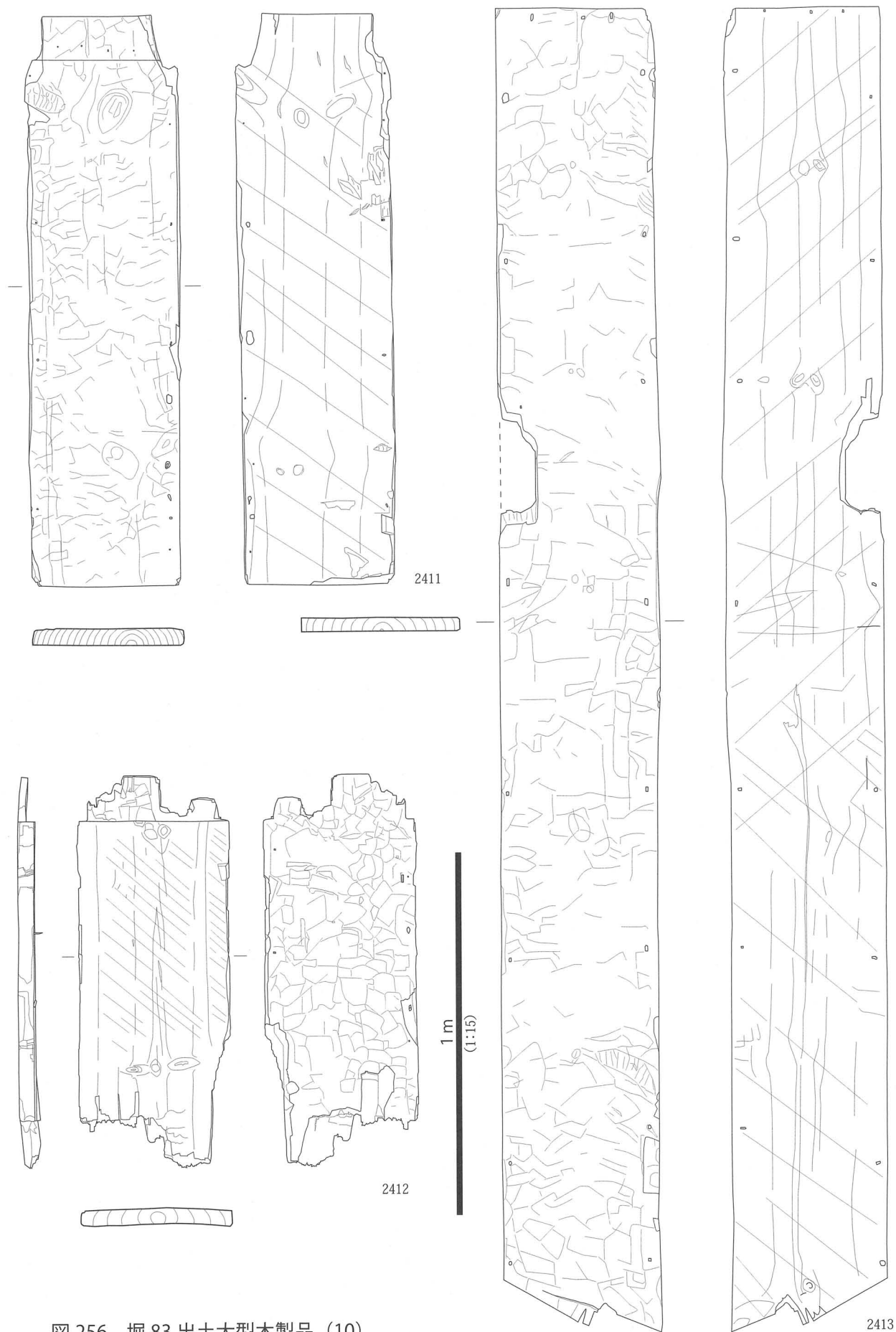


図 256 堀 83 出土大型木製品 (10)

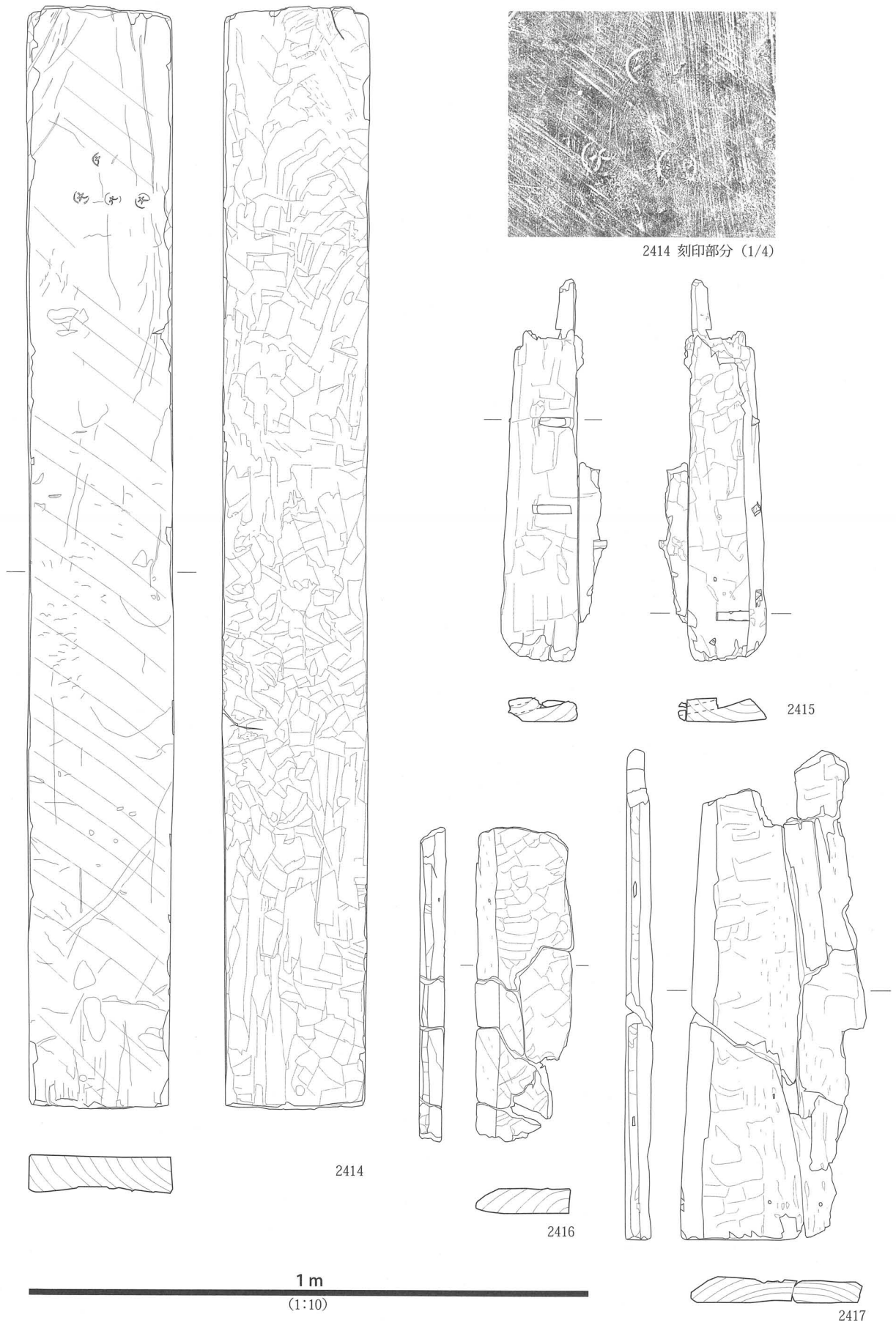


图 257 堀 83 出土大型木製品 (11)

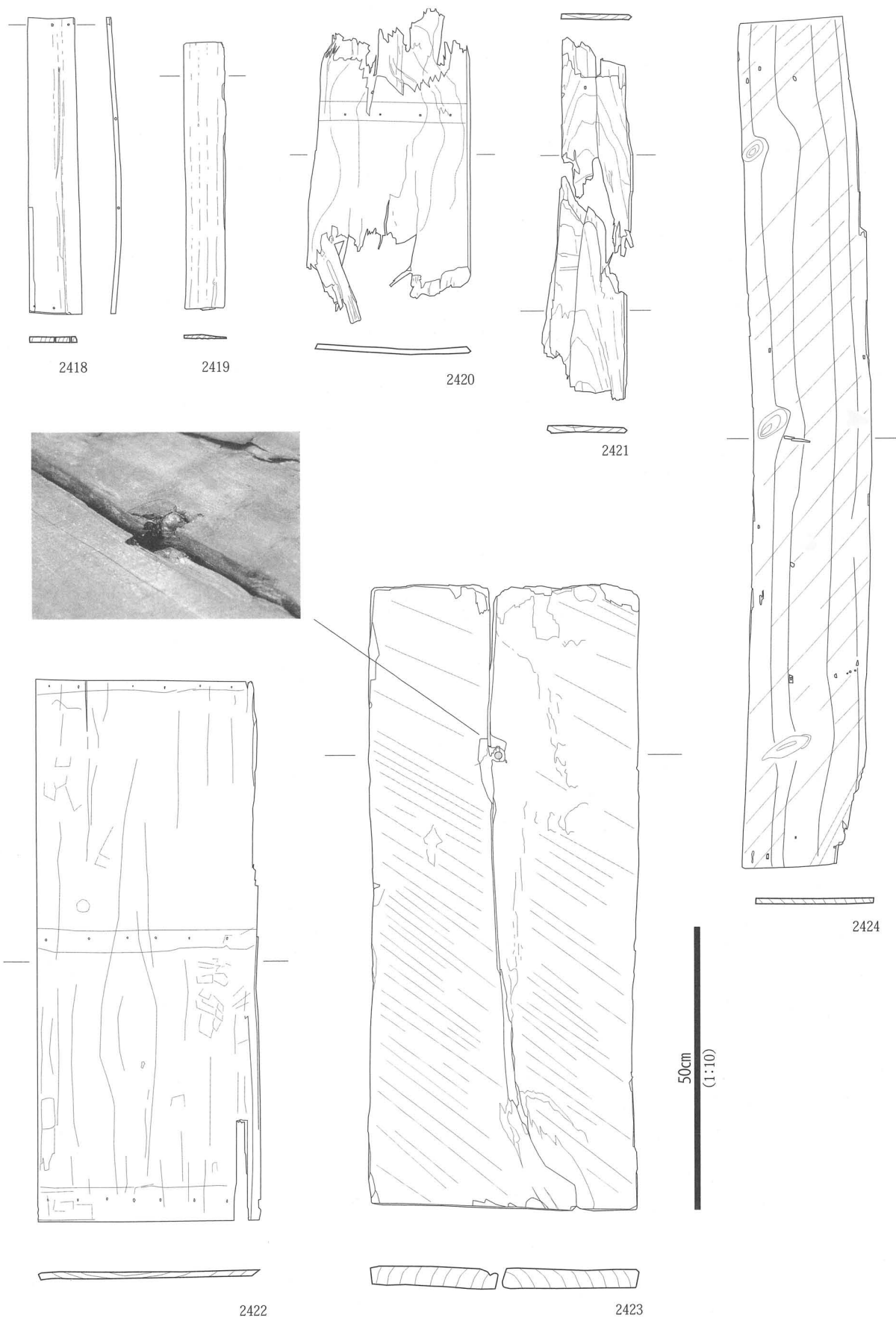


図 258 堀 83 出土大型木製品 (12)

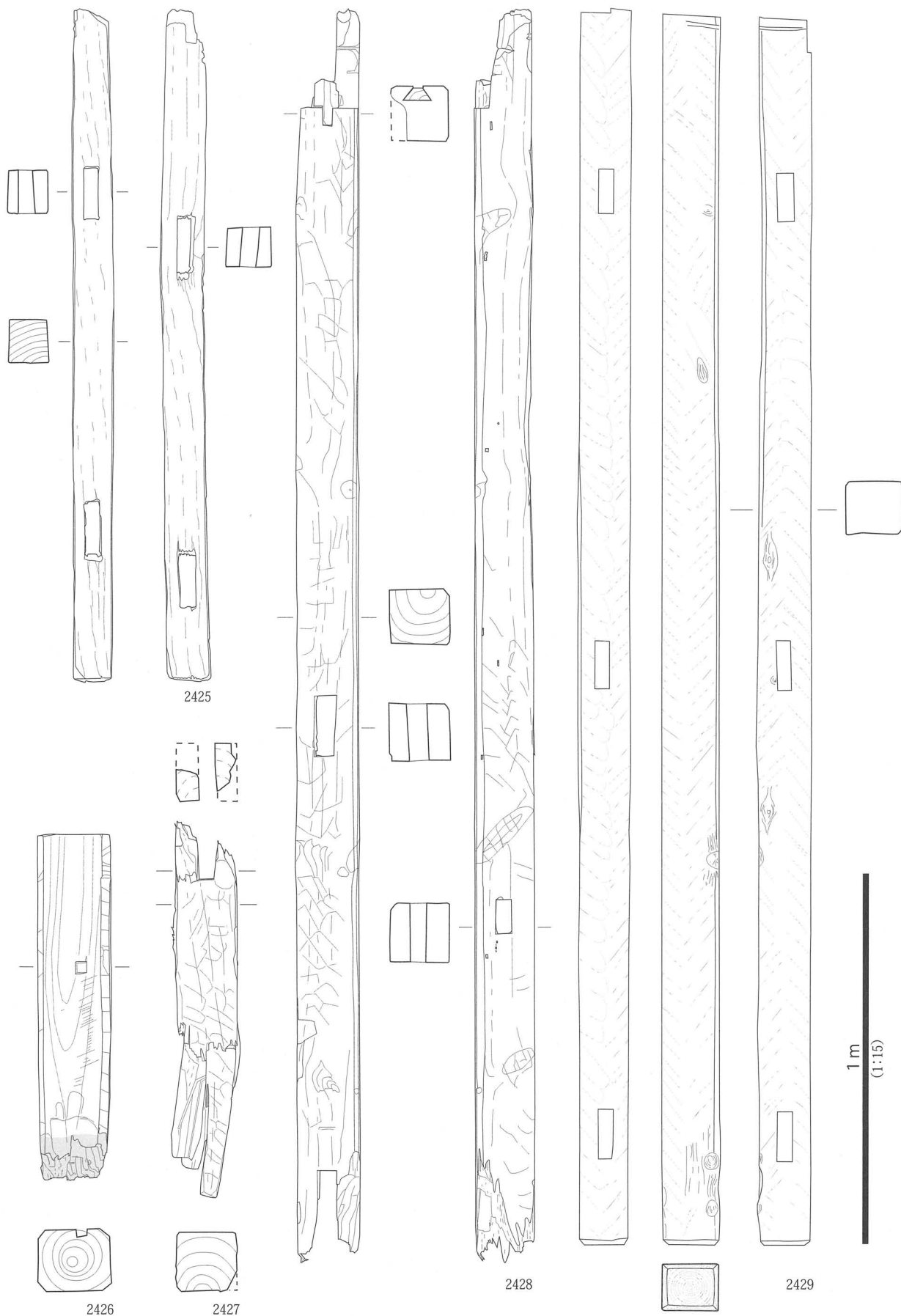


图 259 堀 83 出土大型木製品 (13)

2448 は 2447 と同じ種類と思われる破片である。片側には縦方向に幅 1.0 cm、深さ 0.7 cmの溝が切りこまれている。ホゾ穴は表面 0.9 × 4.6 cm、裏面 0.6 × 3.1 cmで、ホゾを裏面側から木の楔で固定している。ホゾ穴近辺には墨でひいた横方向の線が表面と裏面に残る。表面ではホゾ穴下辺に、裏面では表面のラインと対応する位置とその少し上部に計 2 本認められた。表面上端から 30 cmの位置に釘穴が残り、釘穴周囲に一辺 1.5 cmの金具状のものが当たっていた痕跡がある。

2449 はホゾの部分で欠損しているが、上端が三枚接ぎであれば、建具の框の可能性が考えられる。ホゾ穴内面には加工痕と思われる横方向の筋がみられる。

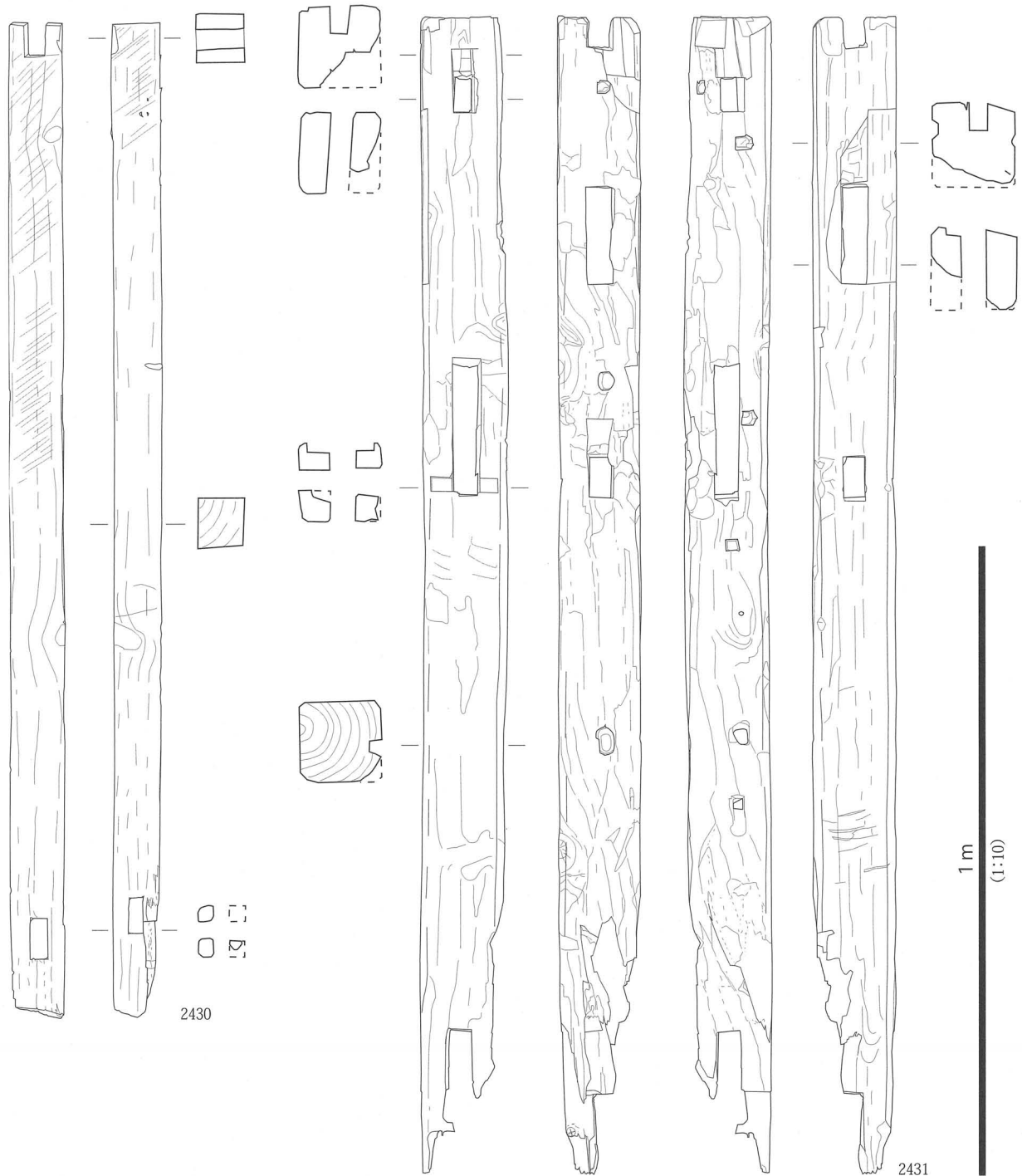


図 260 堀 83 出土大型木製品 (14)

2450 はホゾ穴と四角い小孔のある、断面形が五角形状の小角材である。ホゾ穴は上から 1.1×3.3 cm、 1.9×4.1 cm、 1.1×1.9 cm、 1.1×5.9 cm である。最下部のホゾ穴では更に 1.1×3.0 cm の貫通孔がある。小孔の大きさは 1.2×1.6 cm、 0.9×1.7 cm、 1.1×1.8 cm、 1.5×1.7 cm である。建具の部材か、不明である。2451 は断面長方形の一つの面に釘が 2 箇所残る部材である。釘間は 7.2 cm で、栈木のようなものか。

2452 は幅 3.5 cm の細長い部材に幅 0.65 cm の溝が穿たれ、中には 0.6×0.65 cm の材を斜めに差込み、現存部では 2 箇所を釘で固定している。裏面には 1.0×0.5 cm の穴が 2 箇所が開けられている。表面は黒く、他の部材と比べて華奢な作りであるが、建具の部類か。

2453 は一端に 3.7×0.8 cm のホゾのある小角材である。裏面中央には釘が 3 箇所に残り、釘と釘の間は 6.4、5.8 cm である。断面の 1 角は丸みを帯び、表面にかけて滑らかであるところから、手ずれの

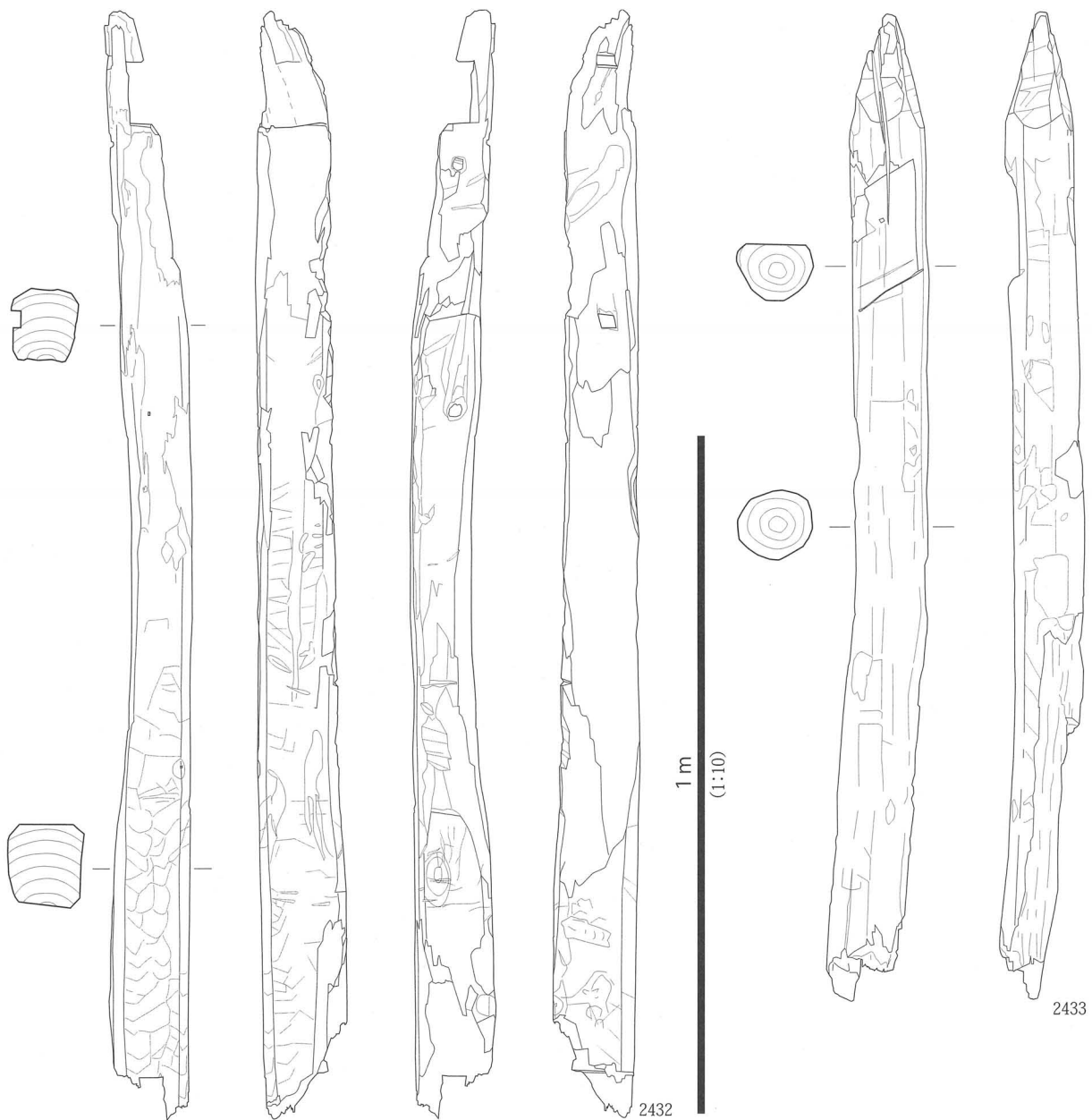


図 261 堀 83 出土大型木製品 (15)



図 262 堀 83 出土大型木製品 (16)

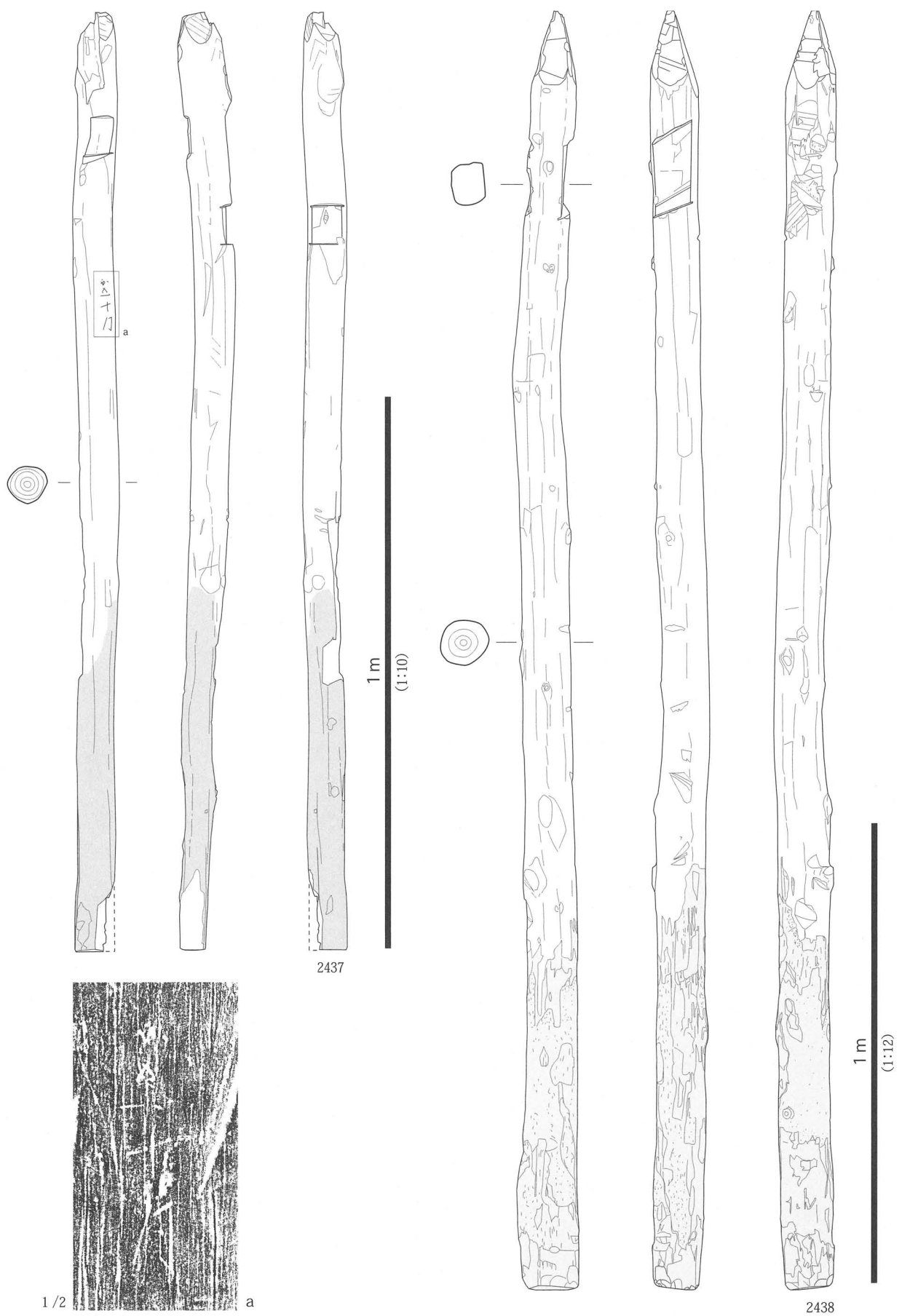


图 263 堀 83 出土大型木製品 (17)

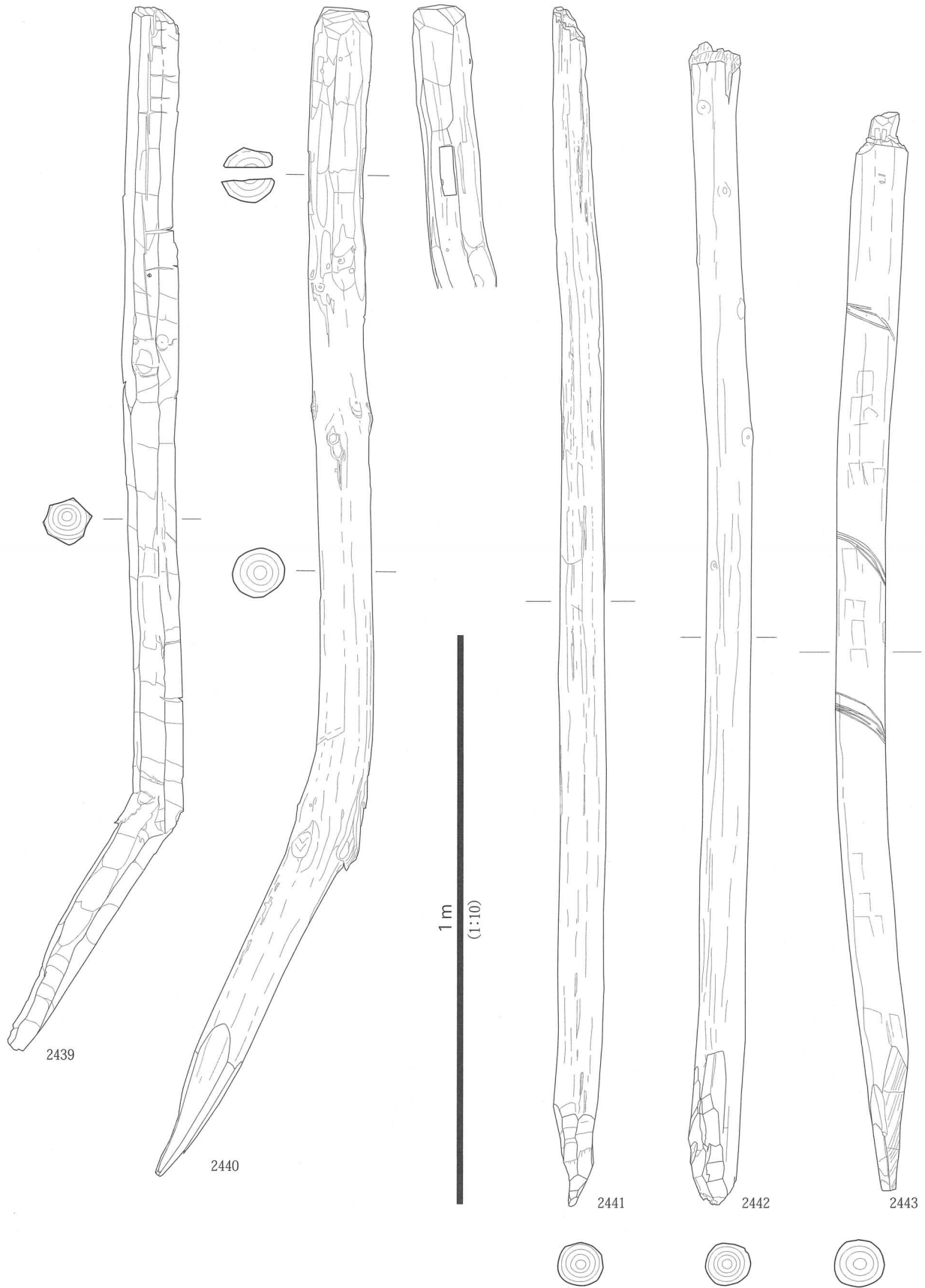


図 264 堀 83 出土大型木製品 (18)

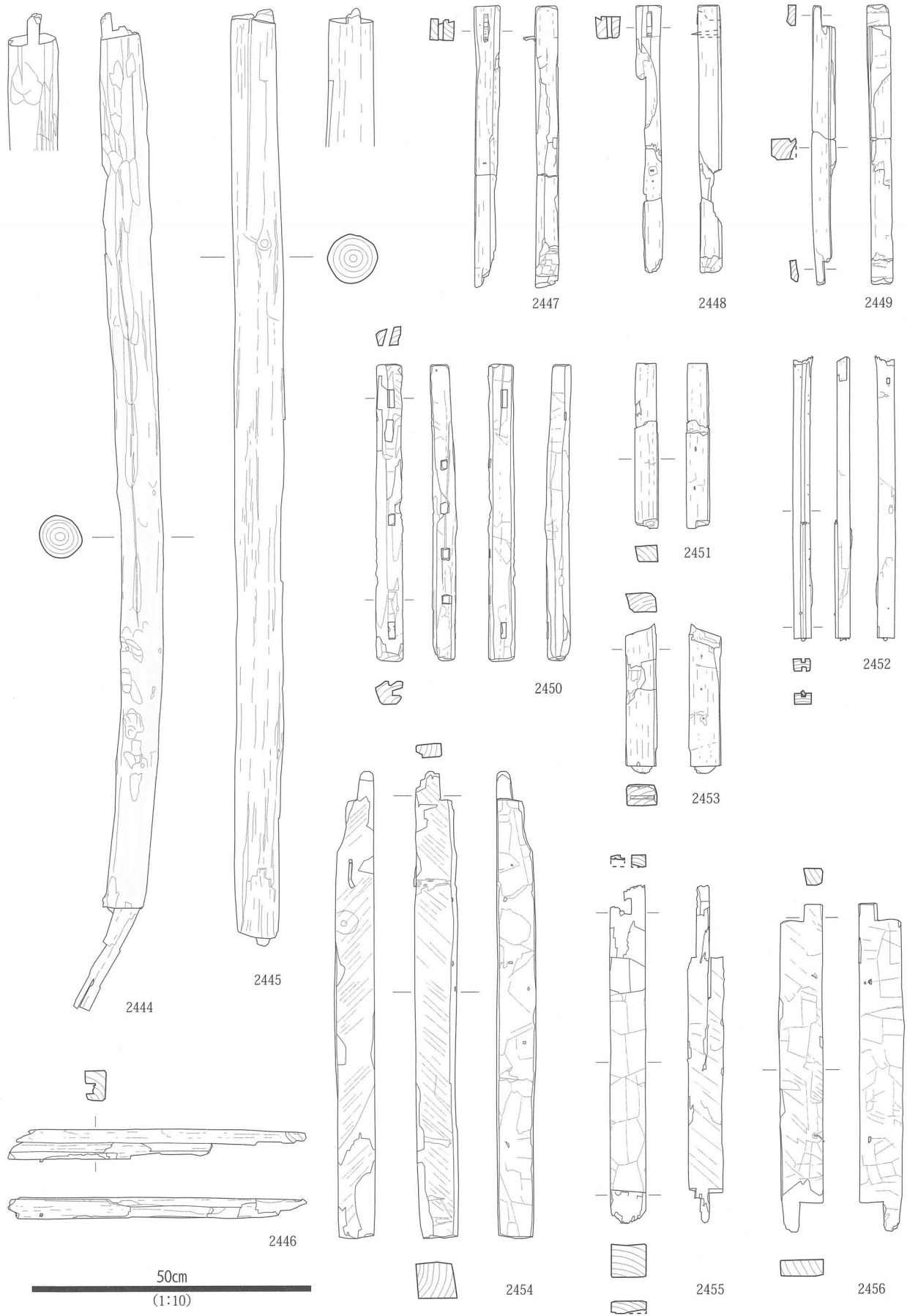


图 265 堀 83 出土大型木製品 (19)

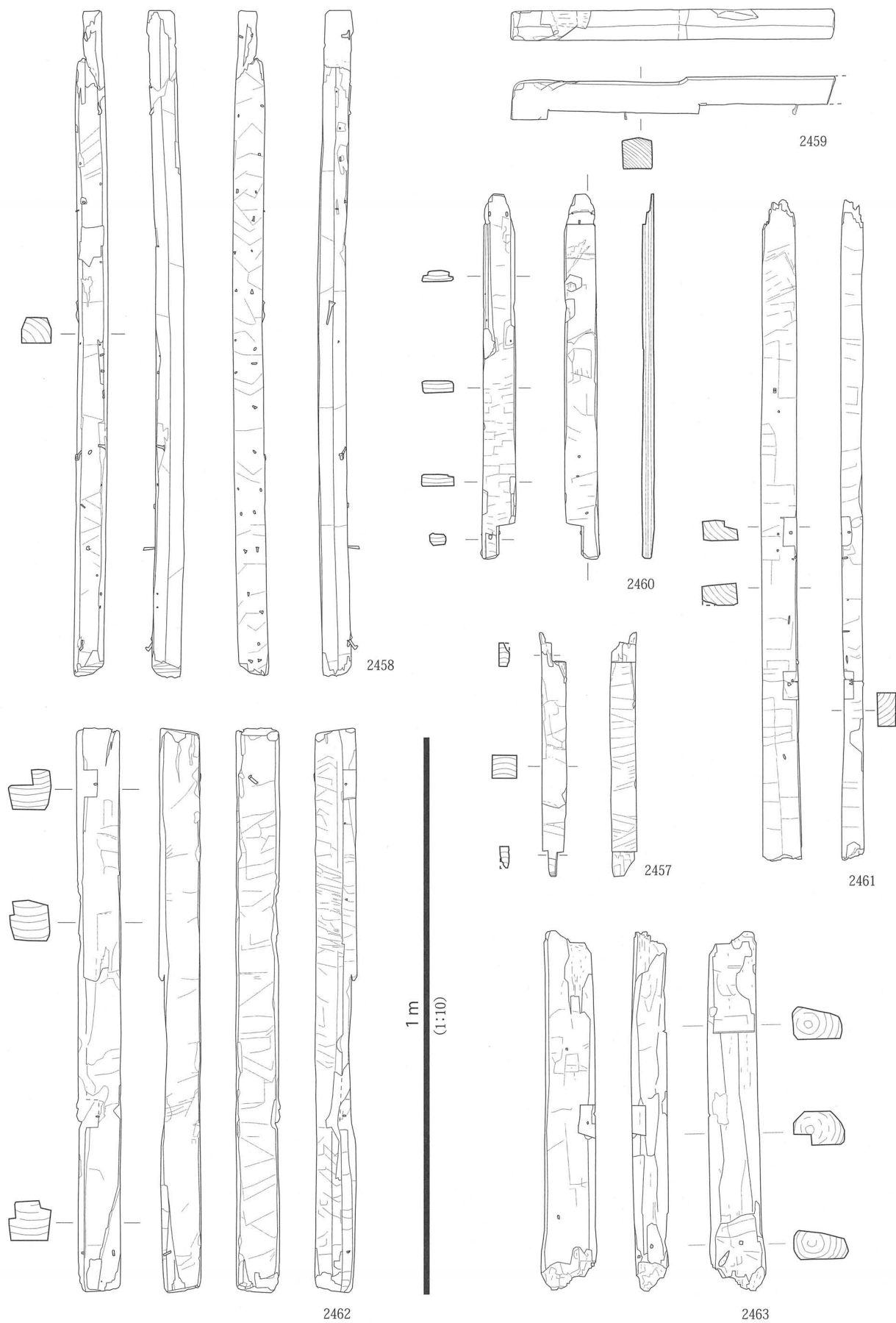


図 266 堀 83 出土大型木製品 (20)

表 22 堀 83 出土大型木製品一覧

遺物番号	挿図	写真図版	種 類	出土遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	樹 種	備 考
2400	247	225	木樋側板	足場状遺構 114	219.5	35.3	9.3	スギ	○に「大」?刻印、運搬用?穴、蟻ホゾはヒノキ
2401	248	225	木樋側板	足場状遺構 114	188.3	33.8	9.8	ヒノキ	
2402	249	225	木樋側板	足場状遺構 114	402.7	33.8	10.4	スギ	宝相華唐草紋・○?刻印
2403	250	225・226	木樋側板	足場状遺構 114	233.1	33.8	24.0		板の厚さ 9.7cm
2404	251	—	木樋底板	足場状遺構 114	240.5	45.3	8.0		
2405	252	225	木樋底板	足場状遺構 114	140.8	50.5	7.2	ヒノキ	
2406	253	—	木樋側板か	足場状遺構 114	146.7	18.0	8.8		
2407	253	—	木樋側板	足場状遺構 114	62.6	18.0	8.9		
2408	253	—	木樋側板	堀 83	82.4	34.6	8.0		運搬用?穴
2409	254	225	木樋蓋か	足場状遺構 113	252.7	43.4	5.0	マツ科	「△」刻印
2410	255	225	木樋底板か	足場状遺構 113	251.7	30.9	4.7	スギ	「へ」?刻印
2411	256	—	木樋蓋か	足場状遺構 113	158.4	42.7	5.2		
2412	256	—	木樋蓋か	足場状遺構 113	108.6	41.9	4.6		
2413	256	—	木樋蓋か	足場状遺構 113	366.5	43.4	4.1	スギ	
2414	257	225	板材	足場状遺構 106	199.4	26.1	7.5	ケヤキ	○に「大」刻印
2415	257	227	船底板か	堀 83 (遺構 153)	69.1	18.5	4.2	クスノキ	埋木はスギ
2416	257	—	不明板	足場状遺構 106	57.1	17.2	4.8		
2417	257	—	不明板	足場状遺構 113	88.5	30.9	4.7		
2418	258	—	不明板	堀 83	52.8	9.0	1.2		
2419	258	—	不明板	足場状遺構 113	47.6	7.4	0.6		
2420	258	227	天井板?	足場状遺構 106	56.1	28.6	1.0		
2421	258	—	天井板?	足場状遺構 106	40.0、38.9	15.0、12.5	0.9、1.0		破片 2点
2422	258	—	天井板	足場状遺構 106	96.3	39.3	1.1	スギ	
2423	258	227	塀の板材	足場状遺構 106	111.3	47.3	3.4	ムクノキ	鉄砲玉が残る
2424	258	—	板材	堀 83	151.4	20.9	1.5		
2425	259	—	柱	堀 83	124.4	6.9	7.9		
2426	259	—	柱	堀 83	62.5	13.0	11.3		
2427	259	—	柱	堀 83	68.0	11.1	10.8		
2428	259	—	柱	堀 83	226.9	11.0	10.5		
2429	259	—	柱	部材集積遺構 97	332.1	15.4	13.8	ヒノキ	
2430	260	—	柱	堀 83	158.5	8.2	7.5		
2431	260	—	柱	堀 83	184.4	13.2	13.2		
2432	261	226	柱	堀 83	164.0	11.0	12.0		室町時代的
2433	261	—	柵控柱	堀 83	146.2	10.9	10.2		
2434	262	—	柵親柱か控柱	堀 83	224.7	9.3	9.0	スギ	
2435	262	—	柵親柱か	堀 83	204.8	10.1	10.4	スギ	
2436	262	—	柵杭	堀 83	141.0	6.3	6.5		
2437	263	—	柵控柱	堀 83	170.9	7.2	8.7	不明	「〇〇十月」刻字
2438	263	226	柵控柱	堀 83	279.6	12.8	10.1	ヤブツバキ	
2439	264	226	柵杭	遺構 141	184.1	8.5	8.5		
2440	264	226	柵杭	遺構 141	206.7	9.2	9.3		
2441	264	226	柵杭	遺構 141	212.0	7.8	7.4		
2442	264	226	柵杭	遺構 141	205.0	7.7	7.6		
2443	264	226	柵杭	遺構 141	190.3	8.8	8.3		
2444	265	—	柵横木	遺構 141	180.5	8.3	8.6		
2445	265	226	柵横木	遺構 141	169.6	8.8	8.6		
2446	265	227	鴨居か	堀 83	53.5	5.2	3.7		
2447	265	—	不明	足場状遺構 106	51.0	4.5	4.0		
2448	265	227	不明	足場状遺構 106	48.5	4.4	3.9		
2449	265	—	不明	足場状遺構 106	50.5	4.4	3.9		2448 と同一個体?
2450	265	227	不明	堀 83	53.5	4.6	4.1		
2451	265	—	不明	足場状遺構 106	24.9	4.2	2.8		
2452	265	227	不明	堀 83	51.4	3.5	3.0		
2453	265	—	不明	足場状遺構 106	27.0	5.4	3.8		
2454	265	—	不明	足場状遺構 104	84.4	6.7	6.6		
2455	265	—	不明	堀 83	61.1	6.1	6.3		
2456	265	—	不明	堀 83	59.4	7.5	2.9		
2457	266	—	不明	堀 83	43.8	4.3	4.3		
2458	266	—	猿類天井の棹縁	足場状遺構 104	120.2	5.5	5.7	マツ科	
2459	266	227	猿頭	堀 83	58.0	5.5	7.0	マツ科	
2460	266	—	不明	堀 83	65.9	5.8	2.1		
2461	266	227	不明	堀 83	119.0	7.0	3.9		
2462	266	—	不明	堀 83	101.4	7.6	7.5		
2463	266	—	不明	足場状遺構 104	64.2	9.7	6.3		

痕跡か。これは建具の杵の可能性が考えられる。

2454 は一端に偏ってホゾのあるもので、長軸4面のうち1面に手斧痕が残るが、他の面は鋸で挽いた痕がある。鋸のアサリ幅は2.2 mmである。建具類の可能性が考えられる。

2455 は下部がホゾ、上部が長いホゾ中央に1.0 × 2.5 cmの孔を穿った部材で、ハツリ痕の残る面は1面のみで、残りの面は鋸で挽いた痕跡が残る。上部のホゾは根元が半ばで斜めに切りこまれている。ホゾの厚さは上部で2.0 cm、下部で2.2 cmである。上下部ともに材の中央より少し偏って作り出されている。2456 は上下端の相反する片側を欠いてホゾとしたもので、両面ともに手斧痕を留める。

2457 は上下部にホゾをもつ。上部ホゾの厚さは2 cm、長さは5.2 cm以上である。下部のホゾは厚さ1.1 cm、長さ4.5 cmで、棧のようなものか。1面のみ手斧痕が残る。

2458 は猿頬天井の棹縁である。幅5.5 cmの角材に面取りが施され、幅3.0 cmに仕上げている。各面に手斧による加工痕が残る。表裏ともに転用後の釘が多く残る。

2459 は猿頭である。庇の板を止めるため、下面には1.5 cmの段差がついており、釘が4箇所に残る。釘の間隔は9.7、11.5、9.6 cmである。上面は中央に稜をもち、下面は平である。断面は五角形状である。段差部分を鋸で挽いており、アサリ幅は2.0 mmである。他は手斧による加工痕が残る。丸みをもつ一端は表面が風化して痛んでいる。他端は鋭角的に仕上げ、表面の痛みは少ない。鋭角的な端部と壁との取り付け角度は80°である。2460 は下部片側を欠いてホゾとしたもので、上半両側面を薄く仕上げている。上端部は2段にわたり薄く仕上げている。釘が3箇所に残る。下方には釘穴らしい穴が3箇所みられる。表裏ともに加工痕が残る。何の部材か不明である。

2461 ~ 2463 は長軸の1辺に1ないし2箇所の四角い欠き込みのホゾ穴があるもので、ホゾ穴中央にはそれぞれ釘が一本残る。2461 はやや薄く、角材というよりも板材に近く、2箇所に5.3 × 2.5 × 1.8 cm、5.0 × 2.5 × 1.7 cmのホゾ穴がある。表面には加工痕が残る。

2462 は角材で、ホゾ穴のある辺は一段低く作り出している。ホゾ穴は5.1 × 3.8 × 2.7 cm、全面に加工痕が残る。2463 は丸太の相対する面を平坦に削り出したもので、全面平坦に削り出した面側に2.8 × 5.2 × 2.2 cmのホゾ穴があり、裏面は両端部を平坦に作り出している。

3. 井戸出土の遺物

今回の調査では、調査地の大半を堀83が占めていたこともあり、堀以外の遺構では2基の井戸を検出したのみである。個々の遺構からの出土遺物はさほど多くはないので、ここでは一括して報告しておくことにしたい。

(1) 土器・陶磁器

2464 は井戸88の最下層から出土した唐津焼の碗である。失透白色の釉がかかる。2465 ~ 2468 は井戸103から出土したものである。

2465 は土師器皿である。2466 は唐津焼の碗である。完形で暗緑色の灰釉をかける。

2467 は志野織部の丸皿である。口縁部内面と見込みにロクロを利用した圏線を引き、その中に草花文を描いている。鉄絵の上から薄く長石釉が掛けられている。2468 は唐津焼の大皿である。見込みと口縁端部に鉄絵が描かれている。

(2) 銭貨

2469 ~ 2478 は井戸88の最下層から出土した。水洗選別によって10点の銭貨を見出している。その内訳は表23に記したとおりである。いずれも北宋銭もしくはそれを模鑄したものである。最も古い



図 267 井戸出土土器・陶磁器

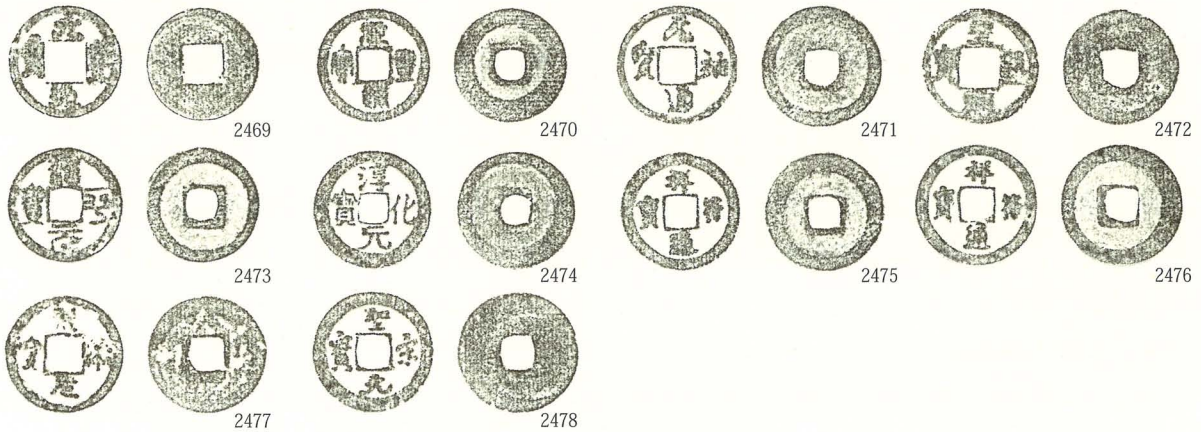


図 268 井戸 88 出土錢貨

表 23 井戸 88 出土錢貨一覽

遺物番号	旧錢番号	調査区	遺構	種類	直径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	残存率	直径/質量	登録番号	備考
2469	284	2e 南	井戸 88	元豊通寶	22.49	7.92	1.00	1.49	完存	0.07	1271	行書
2470	293	2e 南	井戸 88	元豊通寶	22.81	5.99	0.76	2.44	完存	0.11	1271	篆書
2471	286	2e 南	井戸 88	元祐通寶	24.15	6.96	1.05	2.67	完存	0.11	1271	行書
2472	288	2e 南	井戸 88	皇宗通寶	23.48	7.86	1.57	3.54	完存	0.15	1271	
2473	290	2e 南	井戸 88	治平元寶	23.27	6.16	1.44	3.42	完存	0.15	1271	篆書
2474	292	2e 南	井戸 88	淳化元寶	23.96	5.68	1.33	3.62	完存	0.15	1271	真書
2475	285	2e 南	井戸 88	祥符通寶	23.80	6.26	1.28	3.27	完存	0.14	1271	
2476	287	2e 南	井戸 88	祥符通寶	24.46	6.41	1.22	3.33	完存	0.14	1271	
2477	289	2e 南	井戸 88	聖宋元寶	23.55	6.63	1.16	2.96	完存	0.13	1271	篆書
2478	291	2e 南	井戸 88	聖宋元寶	24.23	6.66	1.23	2.68	完存	0.11	1271	行書

ものは淳化元寶で西暦990年初鑄、最も新しいものは聖宋元寶で1098年初鑄である。2469のように厚さが1mmで質量も軽く、模鑄銭と考えられるものも含まれている。

4. 墓出土の遺物

(1) 墓107の出土遺物

墓107からは、5点の銭貨と数珠と考えられる木玉1点が出土している。

2479～2483は銭貨である。人骨の頭蓋骨の前方から重ねた状態で出土した。その内訳は表24に記したとおりで、開元通寶・元豊通寶・紹聖元寶・政和通寶・大定通寶が各1点出土している。元豊通寶・紹聖元寶・政和通寶は北宋銭であるが、開元通寶2479は唐銭で621年初鑄、大定通寶2483は金銭で1178年初鑄である。

2484は木玉である。胸部内側、肋骨の上に乗った状態で出土した。数珠を構成する玉の可能性を考慮し、周辺を精査したが、他には確認できなかった。直径5.78mm、高さ5.74mmを測り、直径0.48mmの穿孔を行う。上下端は狭小ながらも面を成し、断面形状は樽形を呈する。

(2) 墓112の出土遺物

墓112からは、漆器椀1点、銭貨6点、数珠1連(玉108点)が出土している。

2485は人骨の腹部から出土した漆器椀である。塗色は外面が黒色、内面が茶色っぽい赤色である。外面には3方に漆絵があり、一方に「鶴亀」、2方に「松竹」が描かれる。漆絵はいずれも赤色ではあるが、鶴の胴部および松葉は色を違えており、色の使い分けが看取される。当該漆器椀は腹部に抱きかかえられた状態で出土したにもかかわらず、畳付や口縁端部が傷んで漆塗膜が剥がれており、かなり使い込まれた椀であったことが窺われる。

2486～2591は数珠である。糸は残らず、ばらばらに出土したが、108点の玉が出土した。欠損して出土した2点は図に掲げていない。いずれも種実を穿孔して用いたものであり、2489・2490の2点はT字形の3方に穿孔がなされた母珠である。

2492～2497は銭貨である。漆器椀の上から6点が重なった状態で出土した。その内訳は表24に記したとおりで、嘉祐通寶・元豊通寶・元祐通寶・紹聖元寶・祥符通寶が出土し、元豊通寶のみ2点である。いずれも北宋銭であり、漆器椀の上で銭文を下に向けた状態で出土している。

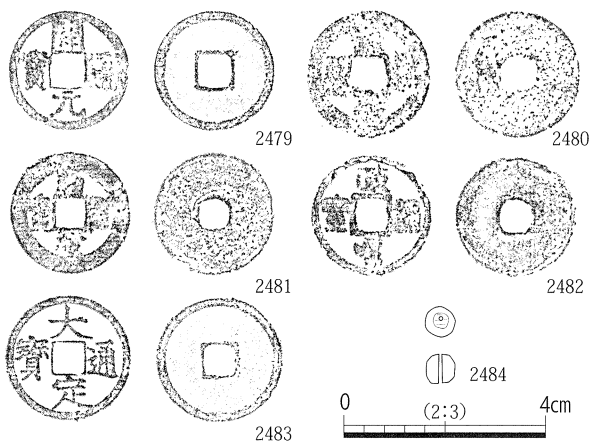


図269 墓107出土遺物

表24 墓107・112出土銭貨一覧

遺物番号	旧銭番号	調査区	遺構	種類	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率	直径/質量	登録番号	備考
2479	277	2d北	墓107	開元通寶	23.97	6.74	1.19	3.07	完存	0.13	2475	
2480	275	2d北	墓107	元豊通寶	25.71	6.23	1.41	3.53	完存	0.14	2475	篆書
2481	274	2d北	墓107	紹聖元寶	24.36	5.61	1.34	3.77	完存	0.15	2475	篆書
2482	273	2d北	墓107	政和通寶	24.02	6.36	1.15	2.85	完存	0.12	2475	篆書
2483	276	2d北	墓107	大定通寶	25.16	5.98	1.45	3.63	完存	0.14	2475	
2592	278	2c東	墓112	嘉祐通寶	24.54	7.61	1.09	2.64	完存	0.12	2044	
2593	279	2c東	墓112	元豊通寶	24.31	6.30	1.73	4.11	完存	0.17	2044	
2594	282	2c東	墓112	元豊通寶	24.37	6.32	1.81	3.54	完存	0.12	2044	
2595	283	2c東	墓112	元祐通寶	24.64	6.44	1.68	3.05	完存	0.12	2044	
2596	280	2c東	墓112	紹聖元寶	24.37	6.13	1.48	2.97	完存	0.12	2044	
2597	281	2c東	墓112	祥符通寶	24.77	6.17	1.58	3.30	完存	0.13	2044	

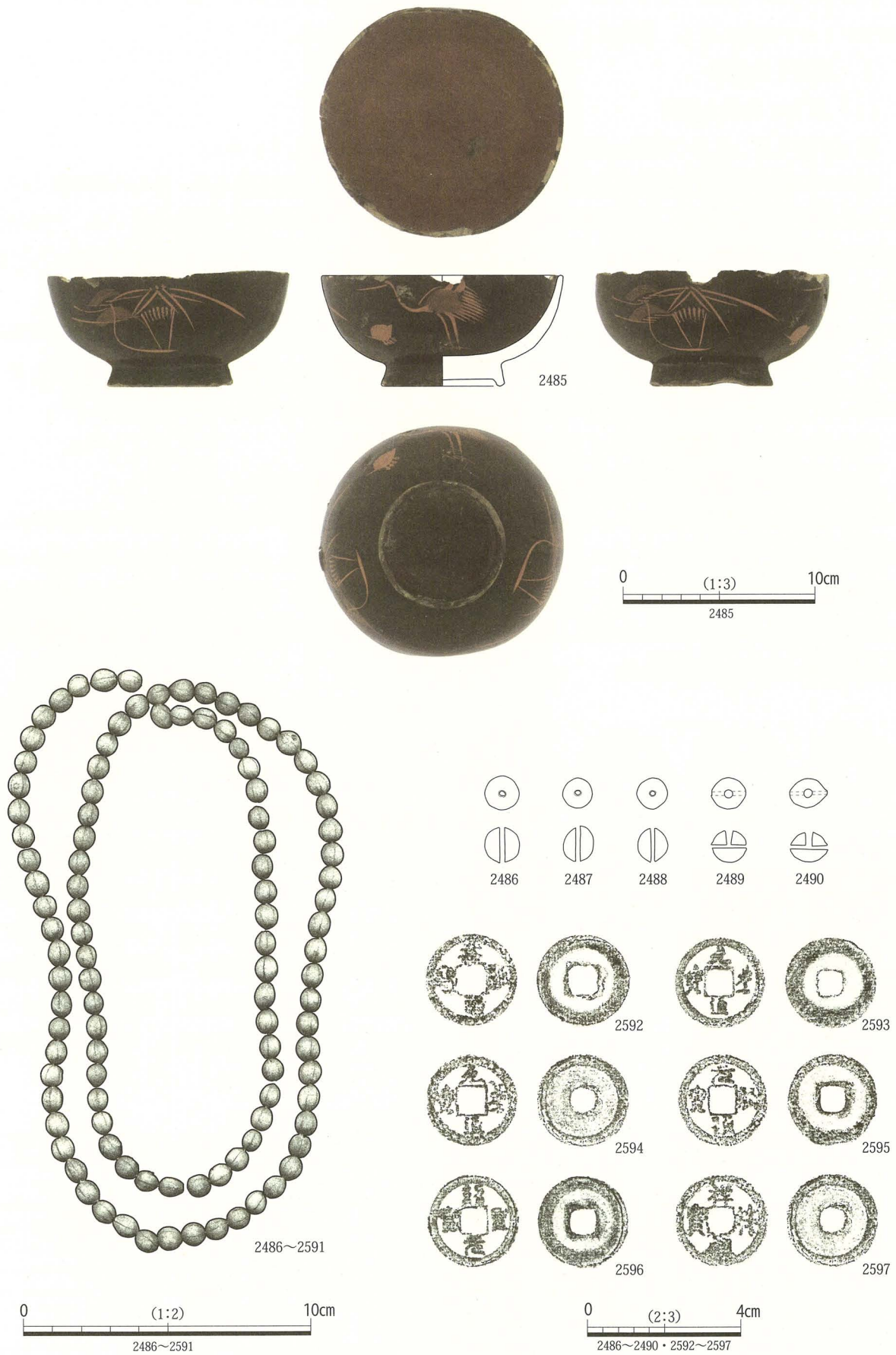


图 270 墓 112 出土遺物

第9章 江戸時代の遺構と遺物

第1節 遺構

1. 前提

今回の調査では、再三にわたって報告してきたように旧府警本部の建物などによる攪乱が著しく、江戸時代の遺構面や遺構は局地的に残存するのみで、多くが削平された状態であり、必ずしも良好とはいえない。

また、西に隣接する1期調査に伴う調査区においても、江戸時代の遺構は南北方向の柵列が検出されたのみで、遺構の分布密度は希薄であり、この状況は今回の調査地においても同様である。

以下では、遺構数も少ないことから、遺構種別での報告ではなく、調査区毎での報告を行っていくことにしたい。

2. 1 調査区

1調査区では東半部が旧府警本部棟の攪乱で遺構面は残っていなかった。西半部においても、近代以降の攪乱が及んでいる部分が少なくはないが、当該期の溝を検出している。

(1) 溝

調査区の北半から溝12・13、その南側から溝16・17を検出している。

溝12はやや東に振りながらも南から北にのびる溝である。溝としているが、開析谷のごとき状況を呈しており、北に向かって幅と深さが増している。断面図作成位置での深さは58cmである。埋土は西から東に傾斜した粘土層と粗砂層の互層であり、人為的に一気に埋め戻された状況を呈している。

平面的には、すでに報告した堀83と重複関係にあり、溝とはしたが、堀83の埋め戻し過程での溝状の窪みであった可能性もある。出土遺物は皆無である。

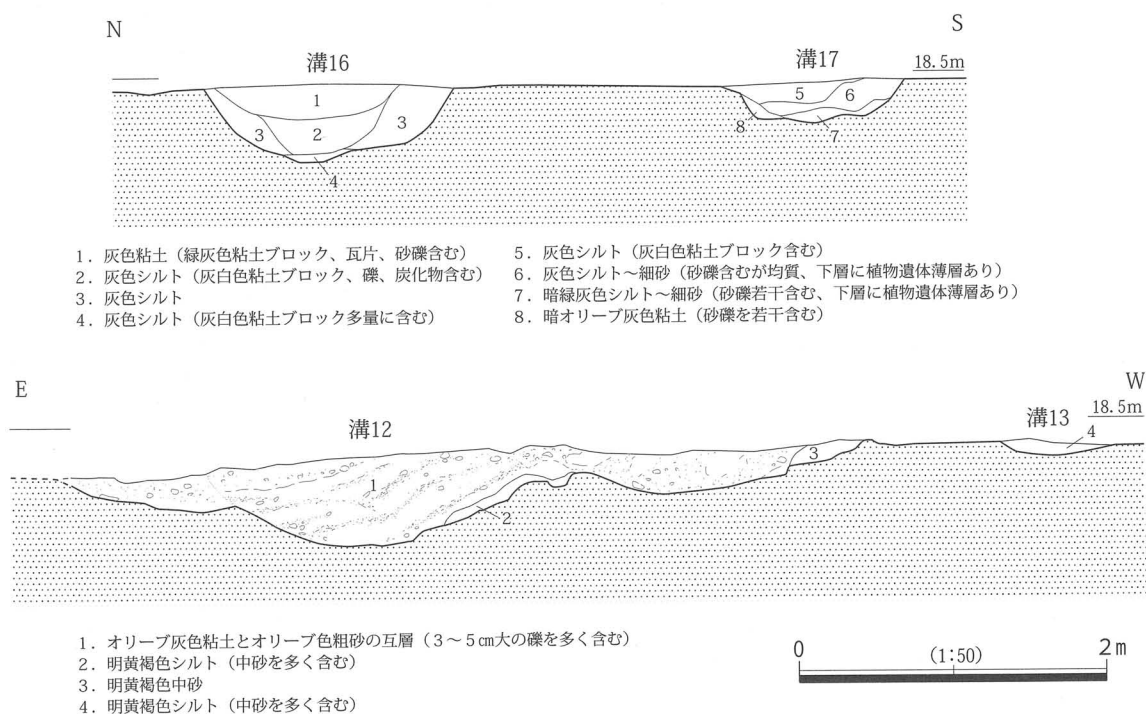


図 271 溝12・溝13・溝16・溝17断面図

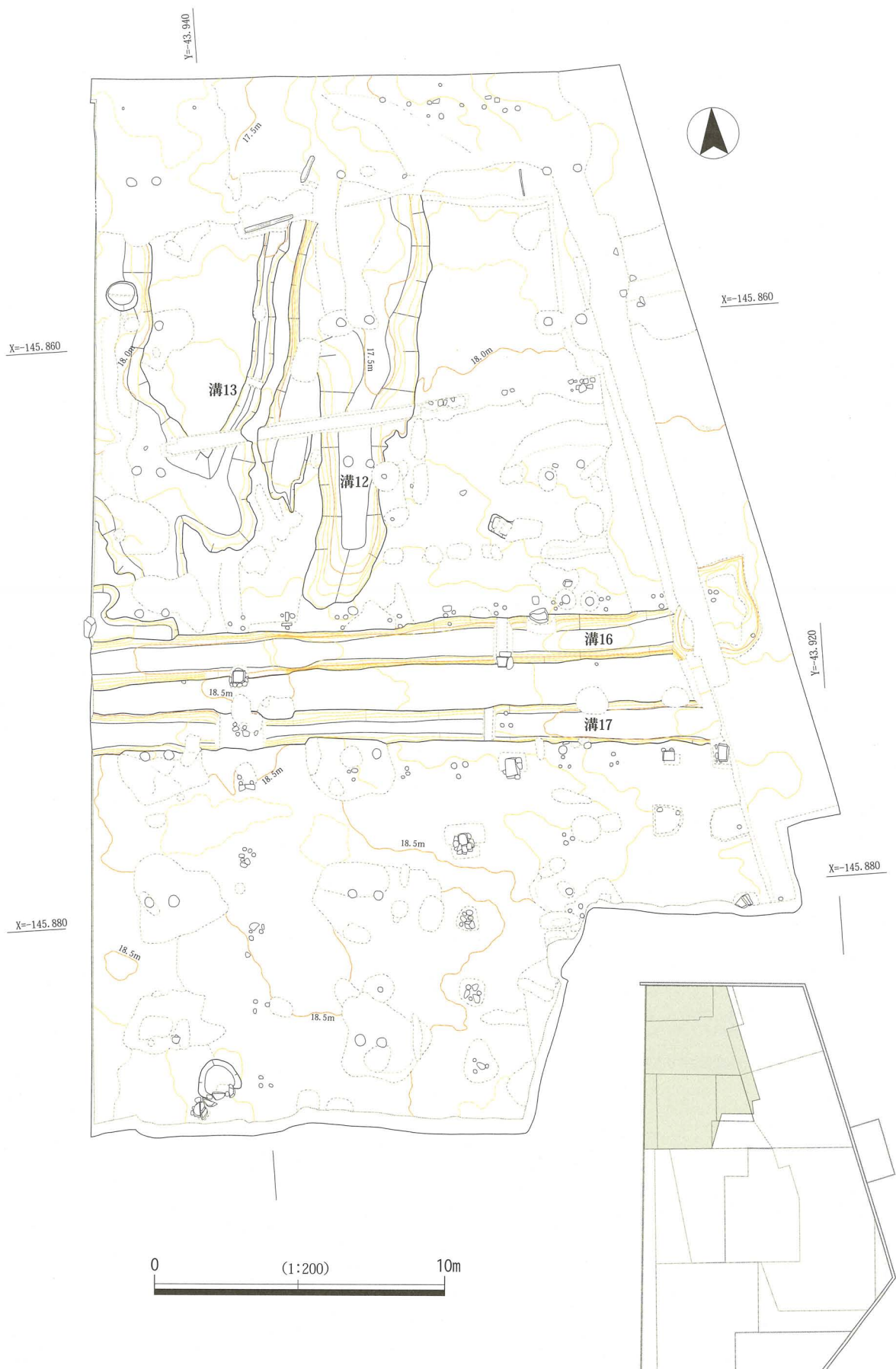


図 272 江戸時代遺構面 (1 調査区)

溝 13 は溝 12 の西側から平行するかたちで検出したものである。

調査地に西端部に広がる浅い落ち込みから北北東に向かってのびている。深さは 10 cm 前後と浅いが、幅は約 70 cm で均一であり、人為的に掘削されたものである可能性が高い。

ただし、区画溝などといった性格は見出しがたく、また先に報告した溝 12 と平行することや、浅い落ち込みから派生することなどを考えると、この溝もまた、堀 83 の埋め戻し段階に排水などを目的として掘削されたものである可能性が高いものと判断する。出土遺物は皆無である。

溝 16 と溝 17 は東西方向を指向する溝であり、微妙に角度を違えるものの、ほぼ平行するかたちで検出したものである。人為的に掘削されたものであることは確実だが、性格は判然としない。

溝 16 は調査地を横断するかたちで検出した東西溝である。方向は E - 1° - S である。幅は 1.5 ~ 1.6 m 前後、深さ約 45 cm で、断面形は台形を呈する。底面のレベルは西端では 18.07 m を測るのに対して東端では 17.70 m であり、西から東に向かって緩やかに傾斜している。

埋土には粘土ブロックや礫を含んでおり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物は多くないが、陶磁器や瓦の小片が出土している。

溝 17 は溝 16 の南側で調査地を横断するかたちで検出した東西溝である。方向は E - 3° - S である。幅は約 1.1 ~ 1.5 m 前後、深さ約 30 cm で、断面形は台形を呈する。底面のレベルは西端では 18.28 m を測るのに対して東端では 17.90 m である。溝 16 と同様に西から東に向かって緩やかに傾斜している。

埋土の状況は溝 16 とは異なり、下層には砂層が堆積し、部分的に植物遺体の薄層がみられる部分もある。出土遺物は多くないが、陶磁器や瓦の小片が出土している。

3.2 調査区

2 調査区では 2a トレンチと 2c トレンチでのみ遺構面が残り、これ以外では上面を削平されつつも、1 基の井戸が残存していた。ただし、以下で報告する遺構のうちのいくつかは出土遺物が僅少か、もしくは皆無であったりなどして、厳密には帰属する年代が不明確なものもある。

(1) 柱穴列

2a トレンチでは南北方向の柱穴列を検出している。

調査範囲内において 3 個の柱穴が南北に直列している。北側は削平されており、南側は調査範囲外となっている。ただし、東側には柱穴は展開しない。西側も削平されていることから、厳密に言えば掘立柱建物跡であるのか、南北方向の柵であるのか否かは不明であるが、後者の可能性が高いものと考えられる。

3 個の柱穴は正確に直列しており、方向は N - 12.4° - W である。いずれも隅丸方形の平面形を呈する。柱穴 48 は一辺 37 cm、深さ 42 cm、柱穴 49 は一辺 32 cm、深さ 27 cm、柱穴 50 は一辺 33 cm、深さ 26 cm を測る。柱穴にはいずれも直径約 16 cm の円形の柱痕跡が残る。

各柱穴間の心々距離は柱穴 48 と柱穴 49 の間が 1.91 m、柱穴 49 と柱穴 50 の間が 1.90 m である。

なお、各柱穴からの出土遺物は皆無であり、出土遺物から年代を特定することはできない。ただ、柱穴 50 は豊臣前期の遺構と考えている溝 46 の埋土上面から掘削されていることは確実である。したがって、当該ピット列に関しては豊臣後期に帰属する可能性も残していることを付言しておく。

また、2c トレンチで検出した東西方向のピット列（ピット 27 ~ 30）は、土坑 5 埋土上面にもものびていることから近代以降に下る可能性が高いものと判断している。詳細は第 10 章で報告することにした。

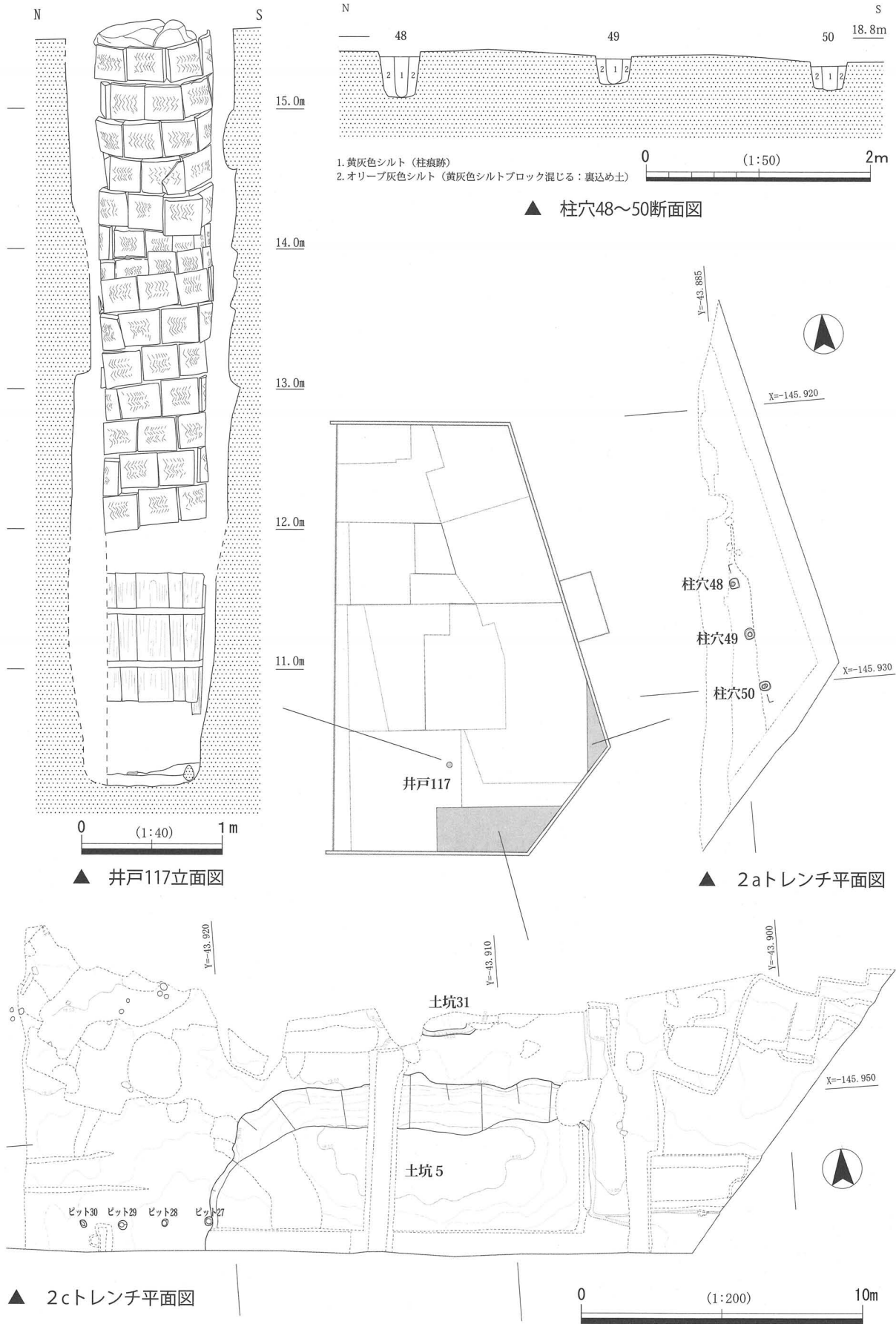


図 273 江戸時代遺構面 (2調査区)

(2) 土坑

土坑5は2cトレンチで検出した土坑で、規模は南北6.3 m以上、東西13.6 m以上を測る。深さは最深部で1.2 mである。北側の法面はおよそ30°の角度で緩やかに傾斜している。埋土の状況は図274に示したとおりであり、陶磁器片や瓦片が大量に投棄されている。とくに図274で4とした土層では陶磁器や瓦片が土砂を上回るほどの量の陶磁器類が密集した状態を呈している。

なお、土層番号10を境とした上下層の遺物を峻別して取り上げ作業を行ったが、整理段階では上下層の遺物が接合することが確認された。埋土中に自然堆積による間層が認められないこともあり、廃棄土坑としては比較的短期間で埋没した可能性が高い。出土遺物は多種多様でコンテナにして250箱以上が出土している。出土遺物に被熱痕跡などはみられない。

土坑31は土坑5の北側から検出した。大半が削平されており、全容は不明である。規模はいずれも残存で東西約1.9 m、南北0.8 m、深さ0.3 mを測る。陶磁器片、瓦片が出土しており、土坑5と同様に廃棄土坑であると考えられる。

(3) 井戸

井戸117は2dトレンチ東端で検出した。この部分は旧府警本部棟の範囲内であり、遺構面はほぼ完全に削平されていた。しかしながら、当該井戸に関しては掘削深度が深いこともあり、コンクリートの基礎杭で部分的に攪乱されていたが、かろうじて遺存していた。

掘方は直径約1.2 mの円形で、深さは残存で約5.4 mを測る。最下には底面からやや浮いた位置に桶が据えられ、それより上は井戸枠専用瓦を用いて井戸枠が作られている。基礎杭による攪乱で部分的に乱れているが、14段の井戸枠が残る。最上部には井戸を覆うように石が投棄されており、人為的に埋め戻されたことが窺われる。検出時に上面で刻印をもつ桶の板材が折り重なって出土しており、位置的にみて当該井戸に関わるものである蓋然性が高く、最上部には井戸枠に桶が据えられていた可能性がある。

全体に遺物は僅少であり、年代を特定できる遺物も出土していないが、堀83埋没後の造営であることは確実である。

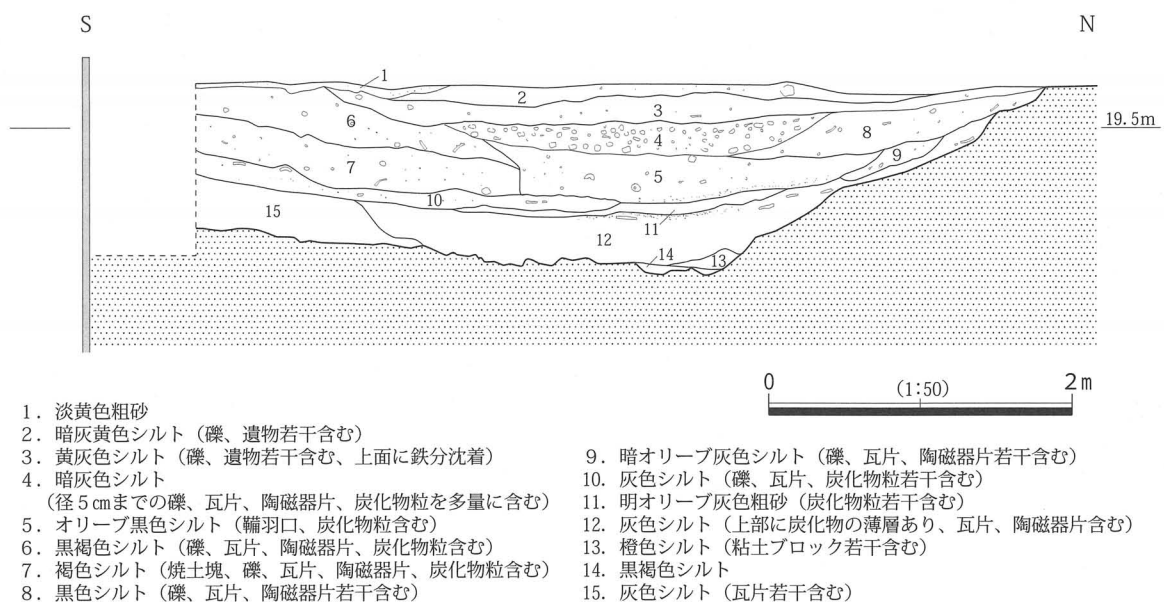


図274 土坑5断面図

第2節 遺物

1. 土坑5の出土遺物

(1) 前提

土坑5はその一部が調査範囲外にのびているが、調査を行った範囲内においては、微細遺物の徹底的な取り上げを目的として、埋土のすべてを水洗選別作業の対象とした。紙幅や時間的な制約もあり、作業結果のすべてを網羅的に報告することはできないが、報告の前提として、3mm以上の遺物に関してはほぼ遺漏なく取り上げていることを記しておきたい。

(2) 土器・陶磁器

土坑5からは多種多様な遺物がコンテナにして約250箱が出土している。このうち、土器・陶磁器類の占める割合は高く、一括性の高い遺物群として重要な位置を占める。しかしながら、本書では様々な制約から、網羅的に掲載することができず、図275～280にその一部を抽出して掲載したに留まる。

2598～2601は土師器皿である。2599～2601は底部を回転ヘラ削りとする。2598・2600・2601には口縁端部に油煙が付着した灯明皿である。2602は内面の3箇所突起が付される。内外面に油煙が付着している。2603は大型の蓋である。土師質で側面には2条の浅い沈線が巡る。火消壺の蓋であろうか。2604は瓦質の火鉢である。胴部には刻みをもつ2条の凸帯が巡る。2605・2606は焙烙である。2606は口縁端部の2箇所に把手が付され、縦方向に穿孔される。底面には方形の圧痕が残る。2607は十能で把手は中実である。2608はいわゆる舟竈である。外面には墨書がみられるが、全体に不明瞭で文意は不明である。2609～2620は焼塩壺である。2613～2616は板造り成形のもので、2614には「泉州麻生」の刻印がある。2615は「御壺塩師／堺湊伊織」の刻印がある藤左衛門系の焼塩壺である。2613・2616は刻印が部分的にしか残らないが、2615と同一刻印をもつ藤左衛門系焼塩壺であると考えられる。2617・2618は輪積み成形を行う藤左衛門系の焼塩壺である。2617には「天下一堺ミなど／藤左衛門」の刻印が残る。2609～2612の蓋は内面に布目痕跡が残る。また、やや丸みを帯びる2611は2617・2618の輪積み成形の焼塩壺に伴うものであろう。2619・2620は京都系の焼塩壺である。蓋2619には3行の刻印がある。2620は厚い器壁をもち、外面には横方向のミガキが残る。

2621・2623は肥前陶器の刷毛目文の碗と皿である。2622は肥前の香炉。2624は唐津の鉄釉皿で見込みは蛇の目釉剥ぎである。2625・2626・2629は蓋である。2626は瀬戸美濃の可能性もある。2629は備前である。2627・2628は肥前磁器の仏飯器で前者は白磁である。2630は青磁の香炉で肥前産と考えられる。2631・2632は肥前陶器の片口で、後者は口縁部付近に鉄泥が塗られる。2633・2634は軟質施釉の鬢水入れで、2634には見込みと底面に布目が残る。2635は磁器の水滴であり、柿をモチーフとしたものである。2639は肥前青磁の花生である。肩部には鳥をデフォルメした把手が付される。2640は丹波の播鉢である。播鉢は丹波の出土量が最も多く、備前および堺がこれに次いでいる。

2641～2647は肥前磁器の色絵で、2641～2645は碗、2646は皿、2647は油壺である。2645は青磁で鶴亀と松が描かれる。2648～2663・2666～2668は磁器染付の碗と鉢などである。2665はコンニャク印判、2659は型紙摺である。2660は墨弾きで施文された小杯である。2663は見込み荒磯文、外面は龍鳳凰文である。2667は口縁端部が釉剥ぎされた蓋物である。2648～2650には「大明年製」の底銘がある。2664・2665は陶胎染付である。

2669～2675・2679は肥前磁器である。2669は段重の蓋か、2670は鉢、2671・2672は蓋物である。

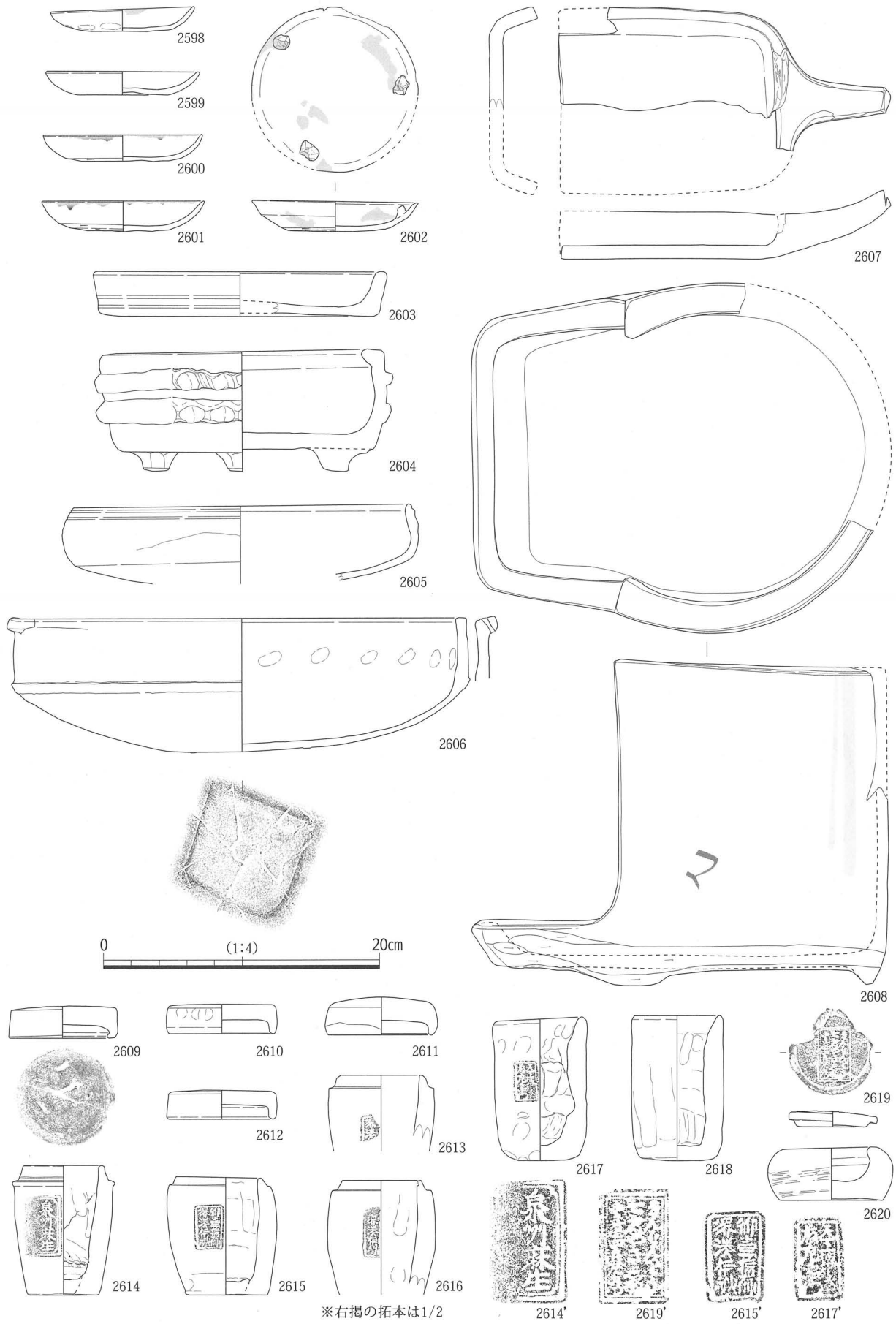


図 275 土坑 5 出土土器・陶磁器 (1)

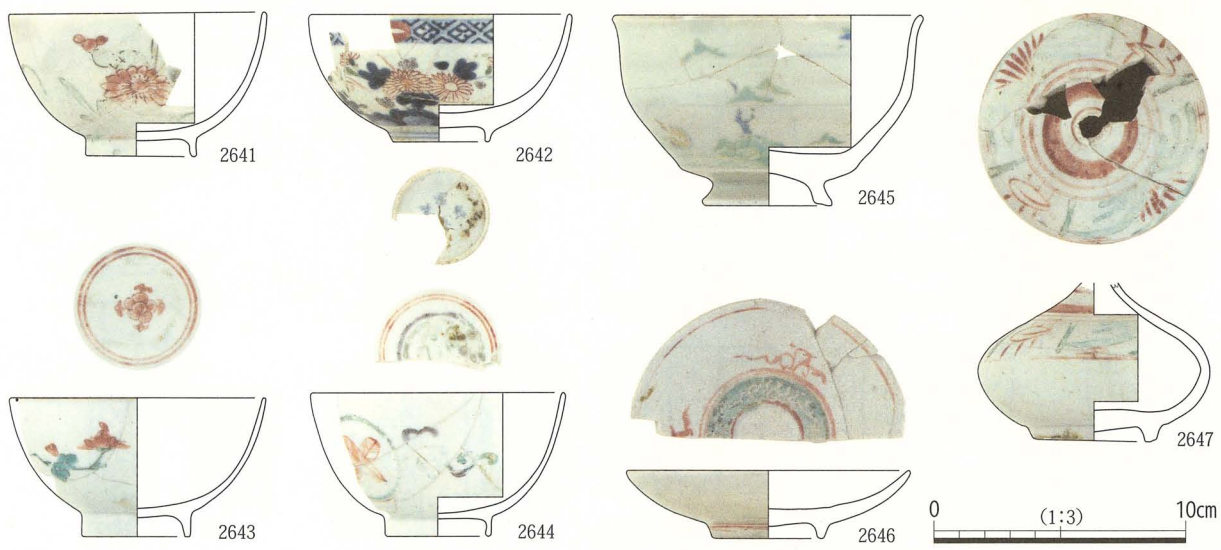
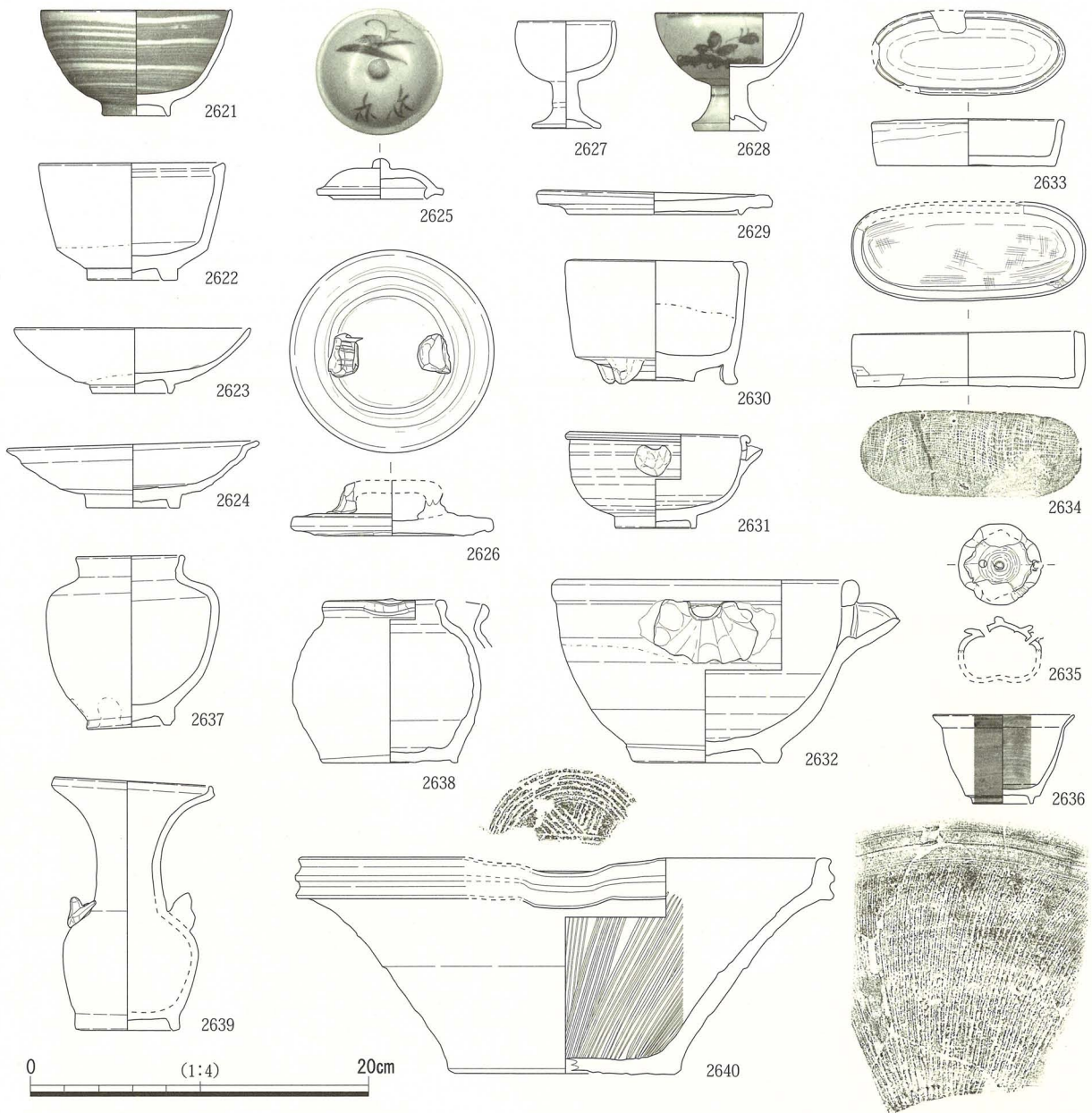


图 276 土坑 5 出土土器·陶磁器 (2)

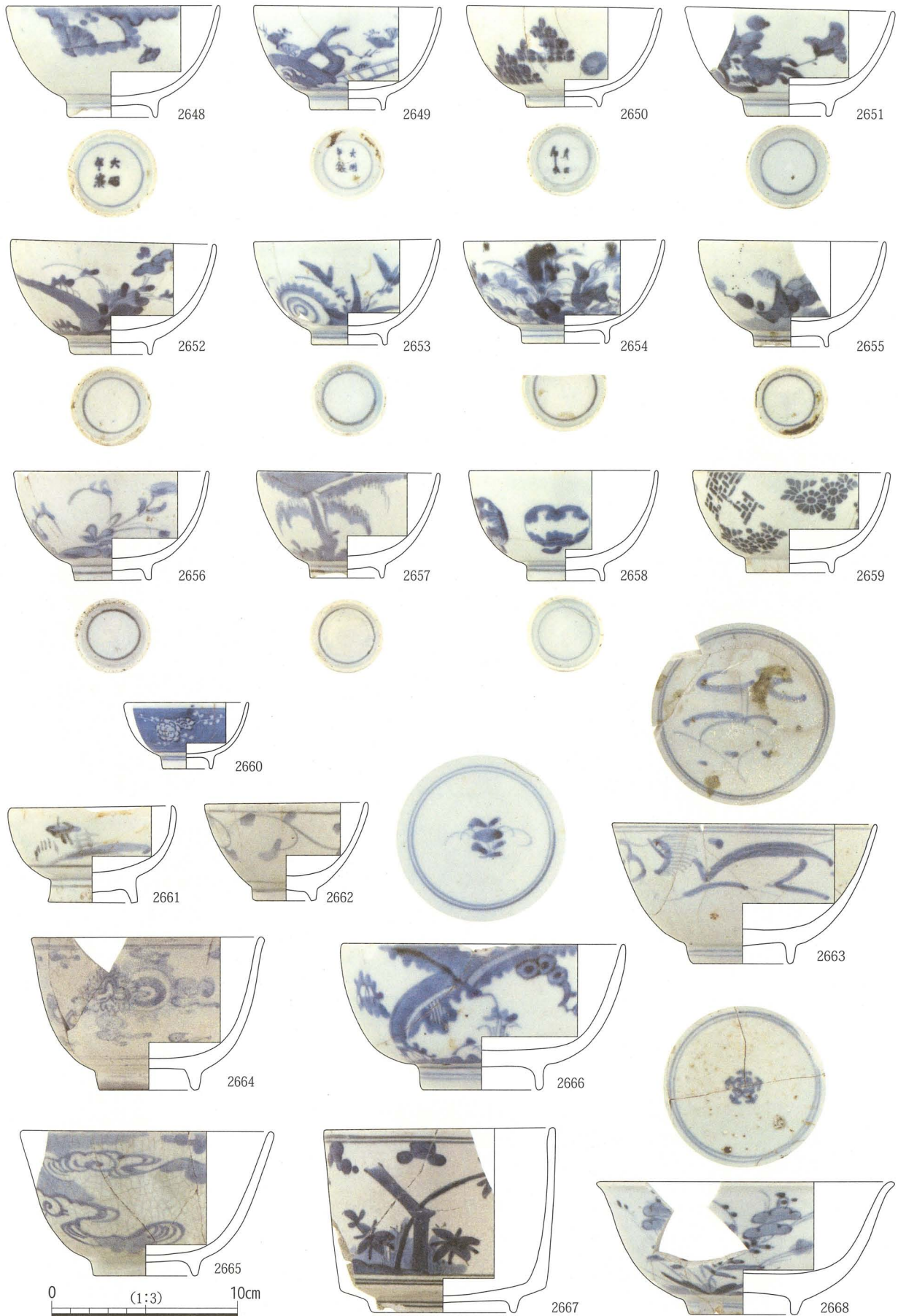


図 277 土坑 5 出土土器・陶磁器 (3)



图 278 土坑 5 出土土器·陶磁器 (4)

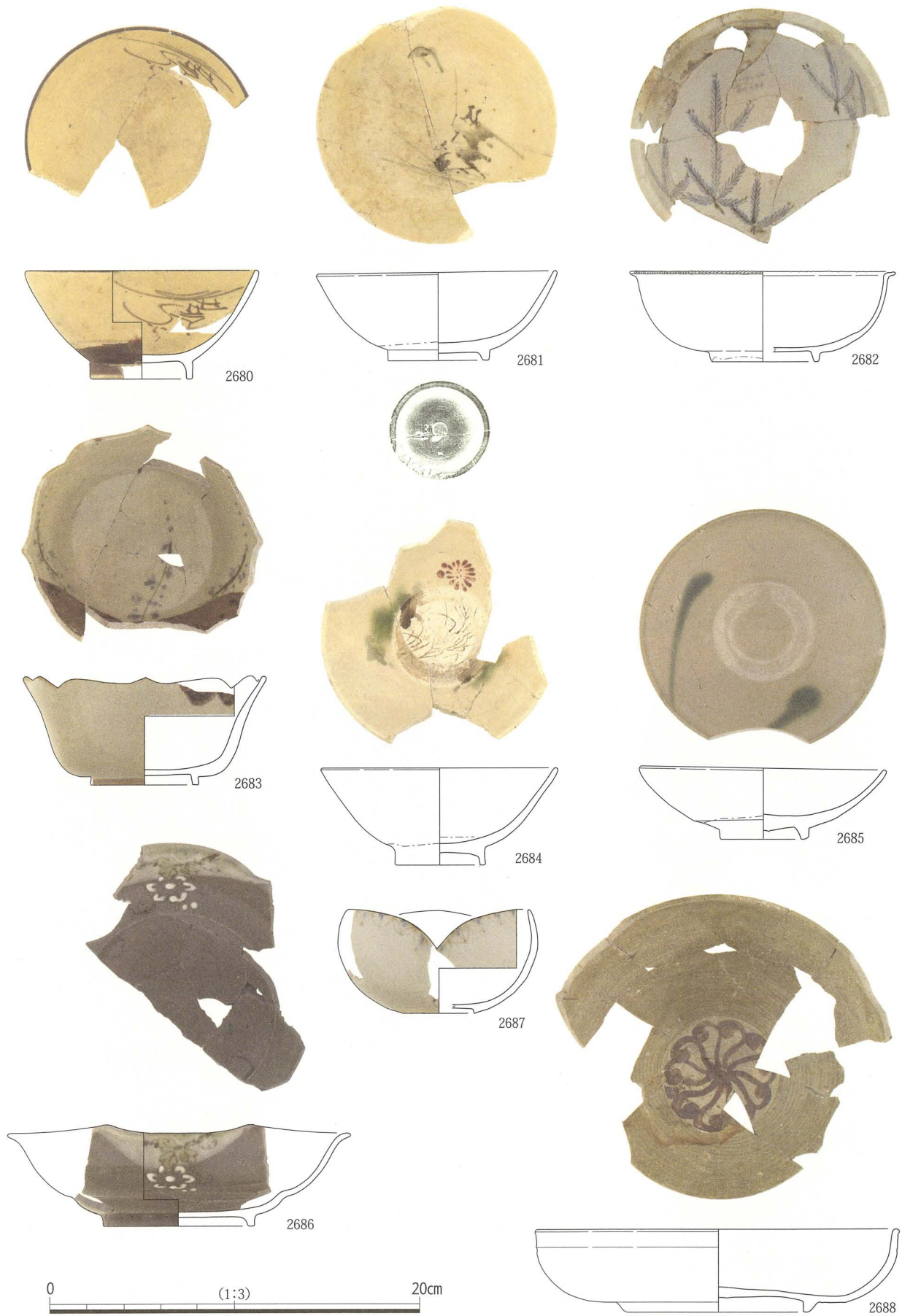


図 279 土坑5出土土器・陶磁器 (5)

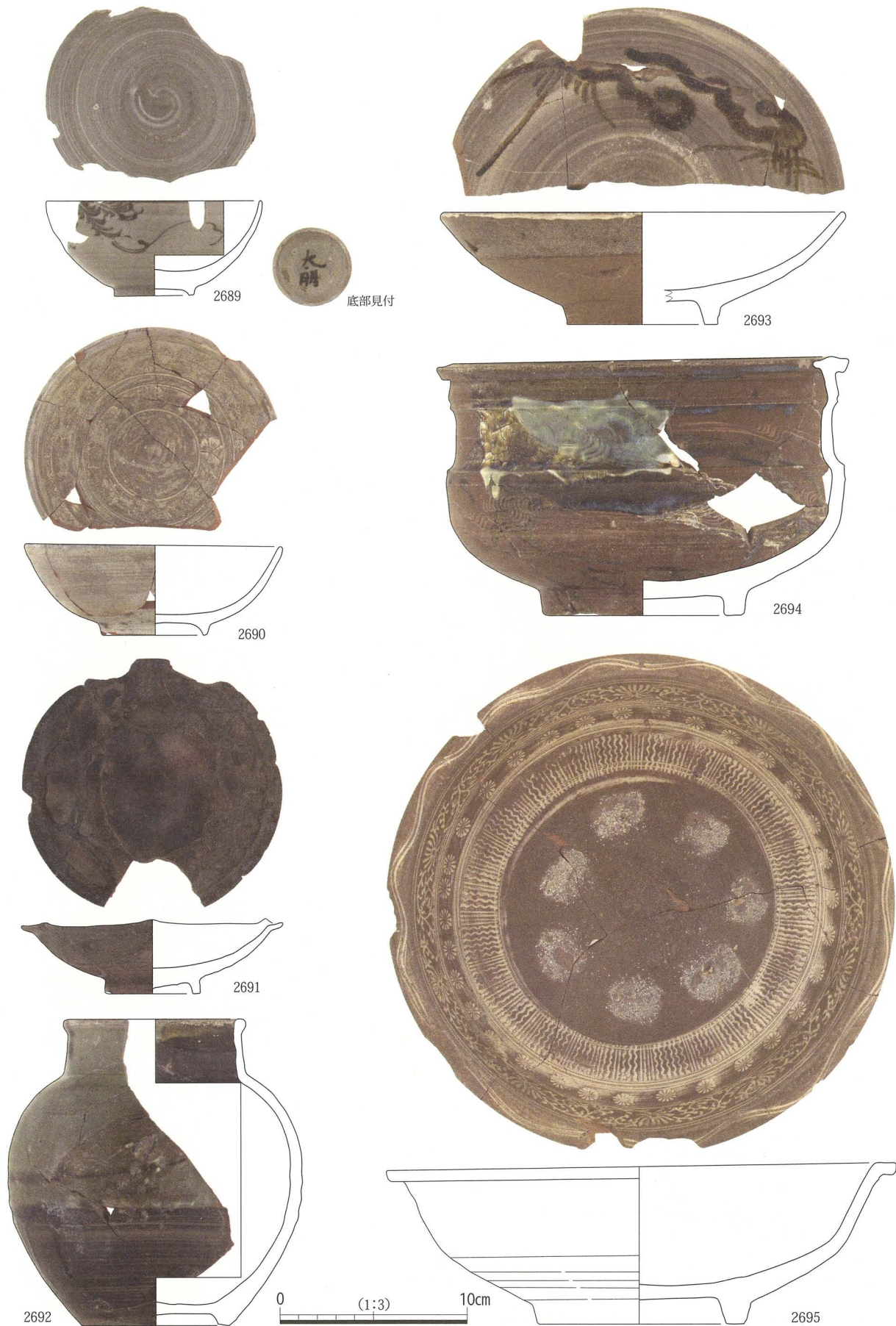


图 280 土坑 5 出土土器・陶磁器 (6)

2674・2675・2679は皿で、2675・2679は型打である。2674には「渦福」、2675には「大明成化年製」の底銘がある。2676は中国製の印青花、2677はベトナム陶器である。2678は水注で、瀬戸美濃産か。

2680は京焼風の茶碗で、肥前を真似た瀬戸美濃であろうか。2861～2683・2687は京・信楽系の陶器である。2684は京焼風の肥前陶器で上絵付けされている。

2685・2686は肥前陶器皿である。2685は内野山系、2686は輪花皿で口縁部を白化粧し、白泥で花文を施文する。2688は見込みに鉄絵を描く大皿である。瀬戸美濃か。

2689～2695は肥前陶器である。2689は刷毛目文の碗で、高台見付には「太明」の底銘がある。2691には肥前陶器の皿で網目状に釉がかけられている。2694は火入れの可能性が高いが、内面も施釉されている。2690・2695は三島手である。

(3) 土製玩具ほか

出土した土製玩具にはミニチュア、土人形、箱庭道具、泥面子などがある。

2696～2721はミニチュア製品である。

2702は器台である。碗とセットで使用したと考えられる。2703～2705は播鉢である。2703は型から外しやすくするための雲母粉が残存している。播目が均等であるのに対し、2704・2705は播目が4本あり、丹波播鉢、堺播鉢といった産地別を現したものであろうか。

2706～2709は内側に染付けを施す磁器である。2708・2709は型押し of 皿である。2710・2715は軟質施釉土器で型押し of 皿である。2711は半球状の足をつけた火鉢である。2712はロクロ成形の皿である。2713・2714は内側に花文の型押しが施される。2716は釜の蓋である。2717は菊文をもつ蓋である。2718は蓋で、土瓶などの実用品の可能性もある。2719は不明であるが、全体に雲母が付着しており、玩具の可能性が高い。2720・2721は軟質施釉土器の片口鍋である。

2722～2724は土鈴である。土坑5からは多量の土鈴が出土しているが、大半が上部を捻り合わせた手づくねで成形している。2722・2723は土玉が残存している。

2725・2726は土師質の土玉である。法量などから狩猟用などに用いられた鉄砲弾の可能性もある。

2727～2730は磁器で、染付のある玉である。根付などに使われていたものであろうか。

2731～2739・2742・2744・2755～2757・2761は泥面子である。泥面子は人面や動物などの顔型を模した芥子面と扁平で円盤状の面打、型を抜く面摸に分けられる。

2731～2739・2755・2761は芥子面である。芥子面は、大名屋敷などで大人が用いた指人形とされる。2731～2737は1cm前後の小型の芥子面で裏面は扁平である。順に算盤、太鼓、見返り馬、鈴、草履、蛸、人である。2738・2739は人を模した芥子面である。先の芥子面より一回り以上大きく、裏面に窪みを持っている。2755は釉を施しており、他の芥子面より丁寧な成形がなされている。裏面につまむ為の棧があり、棧中央部に孔は紐などを通すものと思われる。2761は童子を表した大型の芥子面で目に孔を持つ。

2742・2744は面打である。2742は鶴、2744は銭貨を現した小型の面打である。2743・2745は土器を打ち欠いて作った円盤状土製品で、面打と同様の遊具である。

2756・2757は面摸である。2756は大黒、2757は布袋である。粘土を入れて形を作る遊具である。

2740・2741は土製の絵銭である。絵銭は大黒や念仏を鋳出した信仰対象や玩具の類とされる。ともに釉薬のかかった型押し成形である。2740は表に背に俵を載せた馬、裏に大の文字が見える。2741は表に大黒を、裏面に宝珠を表している。

2746～2752・2754・2760は土人形である。2746～2752まで型合わせで成形している。2746は

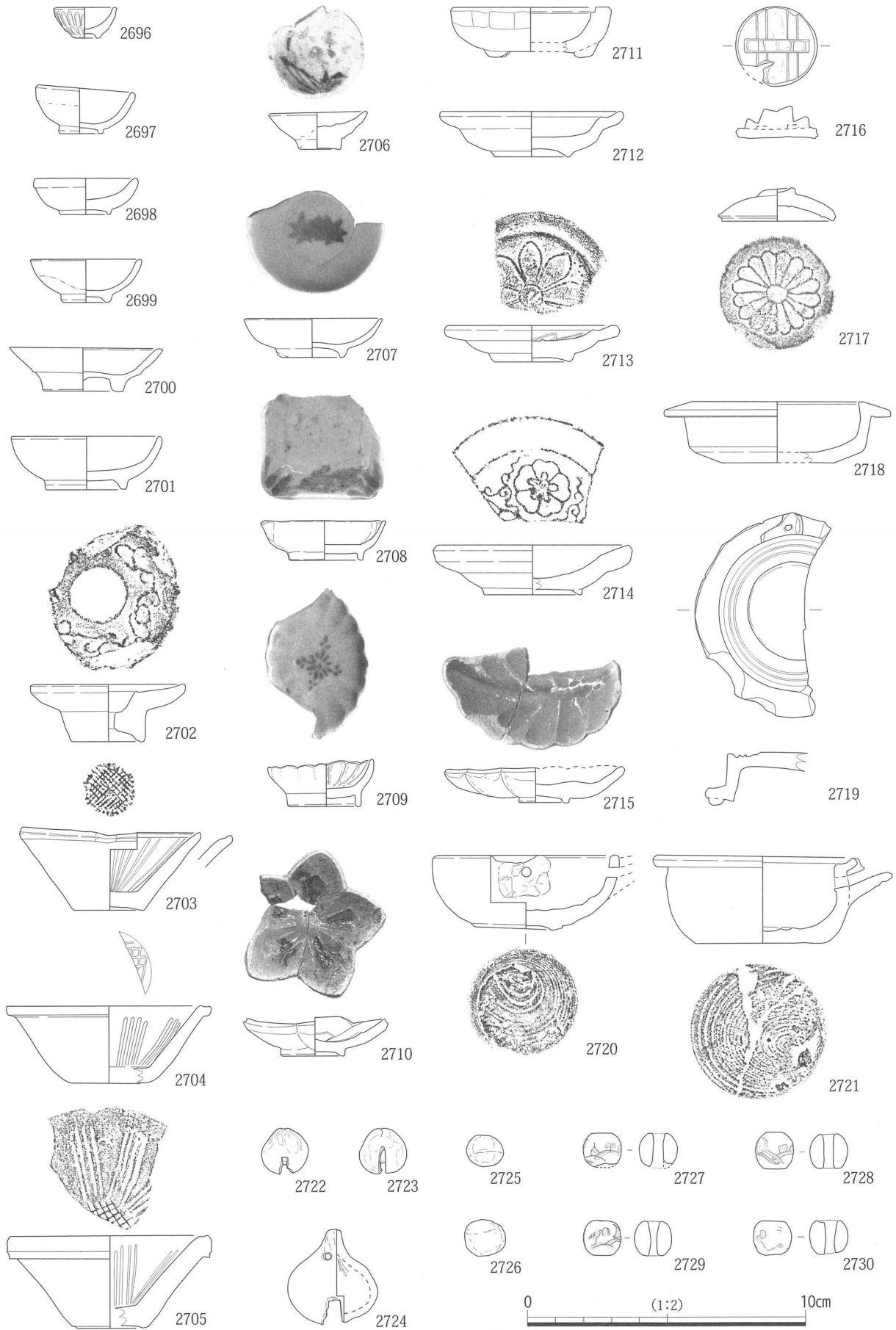


図 281 土坑 5 出土土製品ほか (1)



図 282 土坑 5 出土土製品ほか (2)

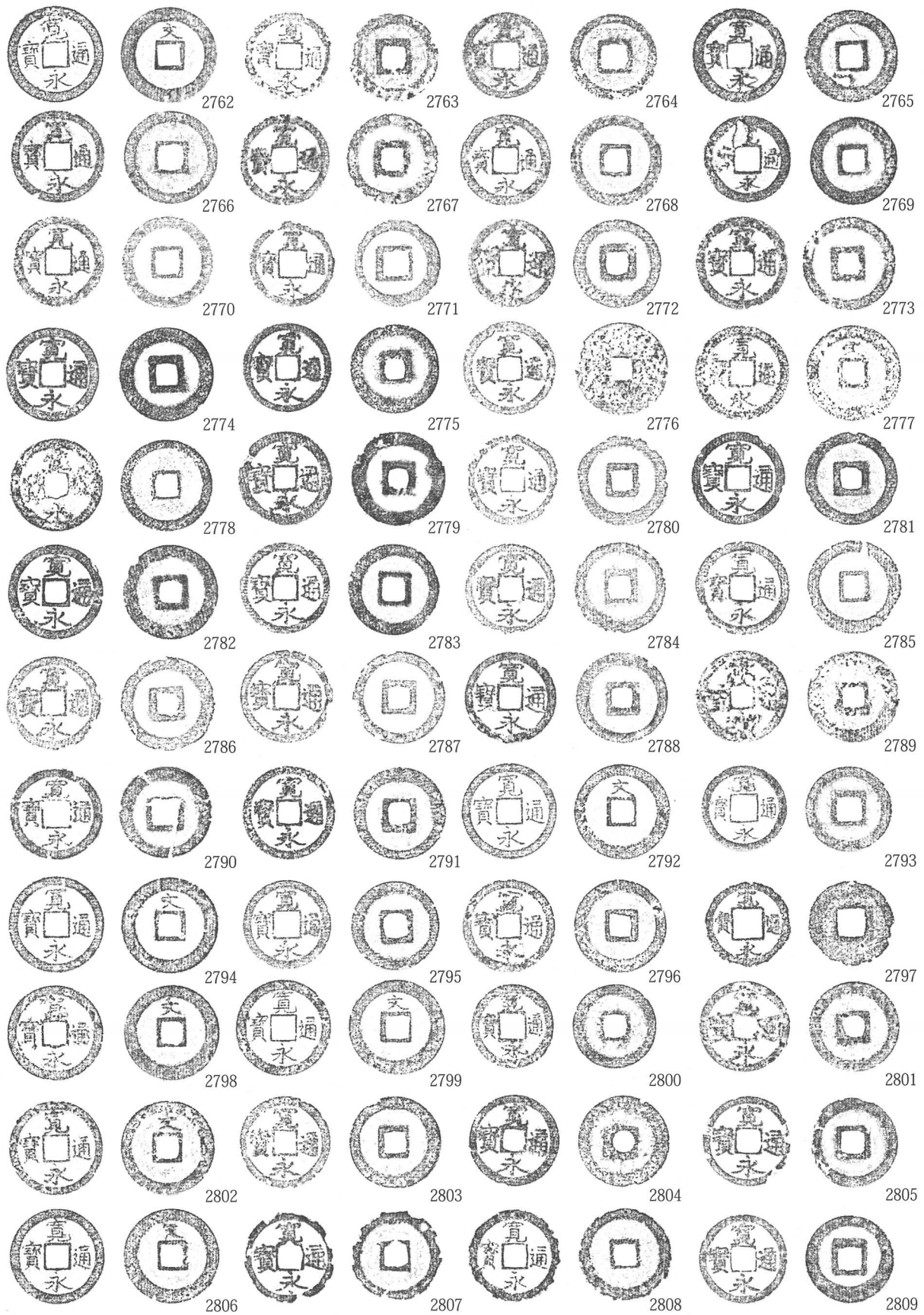


图 283 土坑 5 出土钱货 (1)

布袋像である。底面に孔を持つ。わずかに釉薬が残る。2747は釉薬を施した西行像である。2748は虚無僧、2749・2750は仏像である。2751は板状の仏像である。台座部に日蓮の文字が見える。2752は釉薬を施した天神である。下部に穿孔がある。2754は中空の鯛車である。2759は背に子亀を乗せた亀である。上部を型押し後、下部は指で成形している。2753・2758は箱庭道具である。2753は石灯籠、2758は家である。共に型合わせで釉薬はかかっている。2759は鳩笛である。鳥部は型押しで成形し、下部及び笛部は手づくねで作られている。釉薬も乱雑にかかっている。

(4) 銭貨

土坑5からは199点の銭貨が出土している。このうちには2枚が癒着して出土したものが4点、3枚が癒着したものと4枚が癒着した状態のものが各1点出土している。

出土銭貨の内訳は、銭文が判読可能なものが153点、銭文不明が26点、雁首銭が10点である。銭

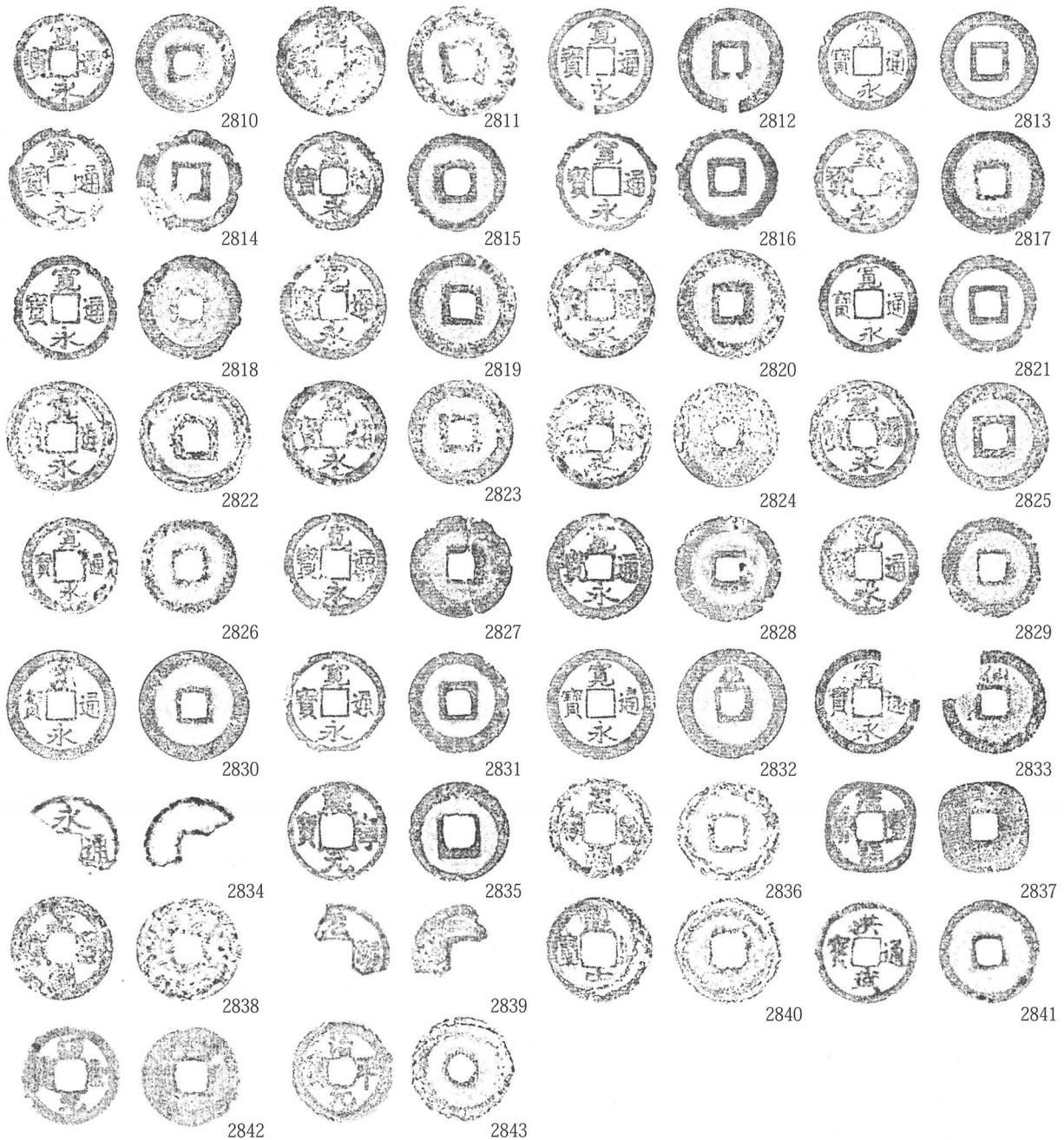


図 284 土坑5出土銭貨(2)

表 25 土坑 5 出土錢貨一覽

遺物番号	旧銭番号	種類	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率	直径/質量	備考
2762	3	寛永通寶	25.37	5.57	1.32	2.78	完存	0.11	新貨永
2763	4	寛永通寶	23.62	6.00	1.13	1.80	完存	0.08	新貨永
2764	5	寛永通寶	22.85	6.34	1.04	1.97	完存	0.09	新貨永
2765	8	寛永通寶	24.73	6.09	1.02	1.91	少々欠	—	古貨永
2766	9	寛永通寶	24.65	6.71	1.05	2.01	完存	0.08	古貨永?
2767	12	寛永通寶	23.98	6.01	1.02	2.60	完存	0.11	古貨永
2768	13	寛永通寶	24.31	6.17	1.40	2.82	完存	0.12	新貨永
2769	14	寛永通寶	23.05	6.04	1.41	2.41	完存	0.10	新貨永
2770	15	寛永通寶	24.15	6.20	0.99	2.12	完存	0.09	新貨永
2771	17	寛永通寶	22.76	6.52	1.00	1.86	完存	0.08	新貨永
2772	19	寛永通寶	23.40	5.68	1.29	2.70	完存	0.12	新貨永
2773	20	寛永通寶	24.85	5.42	1.37	2.75	完存	0.11	古貨永
2774	21	寛永通寶	24.73	5.74	1.18	2.76	完存	0.11	古貨永
2775	22	寛永通寶	23.68	5.19	1.73	4.08	完存	0.17	古貨永
2776	24	寛永通寶	24.58	5.73	1.12	2.55	完存	0.10	古貨永
2777	25	寛永通寶	25.34	5.80	1.79	3.37	完存	0.13	古貨永 背文
2778	26	寛永通寶	24.44	5.89	1.30	2.58	完存	0.11	新貨永
2779	31	寛永通寶	24.80	5.18	1.30	2.73	完存	0.11	古貨永
2780	33	寛永通寶	24.40	5.40	1.43	3.33	完存	0.14	新貨永
2781	34	寛永通寶	24.62	5.61	1.03	1.80	完存	0.07	古貨永
2782	35	寛永通寶	25.20	5.55	1.08	2.27	完存	0.09	古貨永
2783	36	寛永通寶	24.19	5.73	1.30	2.72	完存	0.11	古貨永
2784	37	寛永通寶	24.34	5.77	1.26	2.82	完存	0.12	古貨永
2785	42	寛永通寶	24.90	6.02	1.16	2.19	完存	0.09	新貨永
2786	43	寛永通寶	25.03	5.50	1.33	3.68	完存	0.15	古貨永
2787	44	寛永通寶	24.67	5.76	1.44	3.12	完存	0.13	古貨永
2788	45	寛永通寶	24.15	5.34	1.10	2.71	完存	0.11	古貨永
2789	48	寛永通寶	24.30	5.30	1.26	2.87	完存	0.12	古貨永
2790	53	寛永通寶	24.06	6.62	1.03	1.81	完存	0.08	新貨永
2791	63	寛永通寶	24.46	5.57	1.13	2.30	完存	0.09	古貨永
2792	66	寛永通寶	25.22	5.98	1.18	2.49	完存	0.10	新貨永 背文
2793	68	寛永通寶	22.84	6.38	1.30	2.20	完存	0.10	新貨永
2794	69	寛永通寶	25.35	5.78	1.20	2.33	完存	0.09	新貨永 背文
2795	70	寛永通寶	23.48	6.16	1.29	2.82	完存	0.12	新貨永
2796	77	寛永通寶	24.44	5.39	1.18	2.86	完存	0.12	古貨永
2797	80	寛永通寶	22.64	7.33	1.08	1.67	完存	0.07	新貨永
2798	81	寛永通寶	25.33	5.67	1.26	3.11	完存	0.12	新貨永 背文
2799	83	寛永通寶	25.36	6.05	1.18	2.53	完存	0.10	新貨永 背文
2800	85	寛永通寶	22.36	5.93	1.30	1.87	完存	0.08	古貨永 背文
2801	86	寛永通寶	24.02	5.42	1.28	2.89	完存	0.12	古貨永
2802	87	寛永通寶	25.07	5.73	1.63	3.99	完存	0.16	新貨永 背文
2803	88	寛永通寶	24.28	5.45	1.24	2.32	完存	0.10	古貨永
2804	89	寛永通寶	24.11	5.50	1.11	2.22	完存	0.09	古貨永
2805	90	寛永通寶	23.93	5.88	1.05	1.85	完存	0.08	古貨永
2806	98	寛永通寶	25.32	5.71	1.30	3.44	完存	0.14	古貨永
2807	107	寛永通寶	23.78	5.98	1.23	1.67	完存	0.07	古貨永?
2808	108	寛永通寶	24.55	5.75	1.27	2.45	完存	0.10	新貨永
2809	109	寛永通寶	23.31	6.11	1.21	2.00	完存	0.09	古貨永
2810	111	寛永通寶	23.10	5.62	1.42	2.94	完存	0.13	古貨永
2811	114	寛永通寶	25.69	6.04	1.35	2.92	完存	0.11	古貨永
2812	115	寛永通寶	24.61	5.32	1.56	3.01	3/4強	—	古貨永
2813	121	寛永通寶	22.97	5.88	1.27	2.22	完存	0.10	新貨永
2814	122	寛永通寶	24.20	5.72	1.49	1.98	完存	0.08	古貨永
2815	137	寛永通寶	23.13	5.90	1.16	2.25	完存	0.10	古貨永?
2816	138	寛永通寶	24.06	5.89	1.28	2.58	完存	0.11	古貨永
2817	139	寛永通寶	24.44	5.83	1.24	2.58	完存	0.11	古貨永
2818	145	寛永通寶	24.54	5.54	1.20	2.26	完存	0.09	古貨永
2819	146	寛永通寶	24.79	5.75	1.39	2.77	完存	0.11	古貨永?
2820	147	寛永通寶	25.34	6.13	1.35	3.08	完存	0.12	古貨永
2821	148	寛永通寶	22.94	5.84	1.14	2.13	完存	0.09	新貨永
2822	149	寛永通寶	25.73	6.35	1.12	3.12	完存	0.12	新貨永
2823	150	寛永通寶	24.69	5.61	1.13	3.12	完存	0.13	新貨永?
2824	151	寛永通寶	24.35	5.41	1.01	2.50	完存	0.10	不 明
2825	152	寛永通寶	25.49	5.95	1.51	2.97	完存	0.12	古貨永
2826	154	寛永通寶	22.29	6.37	1.16	2.14	完存	0.10	新貨永
2827	155	寛永通寶	23.90	5.93	1.14	2.38	完存	0.10	古貨永
2828	168	寛永通寶	24.61	5.37	1.24	2.50	完存	0.10	古貨永
2829	169	寛永通寶	23.20	6.24	0.92	1.53	完存	0.07	不 明
2830	170	寛永通寶	25.61	5.73	1.22	2.75	完存	0.11	新貨永
2831	171	寛永通寶	23.43	5.55	1.12	2.48	完存	0.11	古貨永?
2832	175	寛永通寶	25.47	6.02	1.10	2.73	完存	0.11	新貨永 背佐
2833	113	寛永通寶	24.39	5.73	1.53	2.86	3/4強	—	古貨永 背仙
2834	328	永樂通寶	—	—	1.42	0.88	1/3	—	—
2835	166	熙寧元寶	23.12	7.51	1.32	2.22	完存	0.10	真書
2836	64	元豐通寶	24.23	6.58	1.68	3.69	1/4	—	—
2837	82	元豐通寶	20.90	5.87	1.11	1.98	完存	0.09	篆書
2838	110	元豐通寶	24.07	6.53	0.92	3.19	完存	0.13	篆書
2839	40	元祐通寶	—	—	1.55	1.03	1/2	—	篆書
2840	75	皇宋通寶	24.38	7.62	1.12	1.81	完存	0.07	—
2841	11	洪武通寶	24.13	5.78	1.41	2.44	完存	0.10	—
2842	10	紹聖元寶	23.39	7.09	0.99	1.85	少々欠	—	—
2843	76	治平元寶	24.28	6.26	1.27	3.27	完存	0.13	真書
未掲載	1	寛永通寶	23.92	5.73	1.18	2.15	少々欠	—	古貨永
未掲載	2	寛永通寶	24.83	5.53	1.36	2.70	少々欠	—	新貨永
未掲載	6	寛永通寶	24.18	5.90	1.06	1.79	少々欠	—	古貨永
未掲載	7	寛永通寶	—	—	1.02	0.15	1/4	—	—
未掲載	16	寛永通寶	22.94	6.30	1.13	1.85	少々欠	—	新貨永
未掲載	18	寛永通寶	23.17	6.88	1.13	1.37	1/3	—	新貨永
未掲載	23	寛永通寶	25.69	5.47	1.76	2.95	完存	0.11	古貨永
未掲載	27	寛永通寶	25.32	5.88	1.33	2.22	3/4	—	新貨永
未掲載	28	寛永通寶	—	—	1.67	1.37	1/3	—	—
未掲載	29	寛永通寶	—	—	—	—	—	—	新貨永 2枚 背文
未掲載	30	寛永通寶	22.42	6.86	0.89	1.68	完存	0.07	新貨永
未掲載	32	寛永通寶	—	—	—	—	—	—	新貨永 3枚
未掲載	38	寛永通寶	24.19	5.13	1.18	2.57	少々欠	—	古貨永
未掲載	39	寛永通寶	24.87	5.98	1.44	2.67	3/4	—	—
未掲載	41	寛永通寶	—	—	1.23	0.52	1/4	—	新貨永

遺物番号	旧銭番号	種類	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率	直径/質量	備考
未掲載	46	寛永通寶	—	—	0.95	0.50	1/4	—	古貨永?
未掲載	47	寛永通寶	25.63	7.32	1.44	2.03	3/4強	—	—
未掲載	49	寛永通寶	24.69	6.28	1.16	2.46	完存	0.09	—
未掲載	50	寛永通寶	23.03	6.02	1.26	2.01	完存	0.09	—
未掲載	51	寛永通寶	23.39	6.56	0.95	1.21	3/4	—	—
未掲載	52	寛永通寶	—	—	1.18	1.26	3/4	—	—
未掲載	54	寛永通寶	—	—	1.19	0.43	1/4弱	—	—
未掲載	55	寛永通寶	—	—	5.66	0.97	0.76	1/2	—
未掲載	56	—	—	—	1.34	0.73	1/4	—	古貨永
未掲載	57	寛永通寶	—	—	1.35	1.40	1/2弱	—	—
未掲載	58	—	—	—	1.70	1.13	1/2弱	—	—
未掲載	59	寛永通寶	25.23	5.18	1.06	1.99	少々欠	—	古貨永
未掲載	60	—	—	—	1.10	0.53	1/4	—	—
未掲載	61	〇永〇	—	—	1.10	0.48	1/4	—	—
未掲載	62	〇〇貨	—	—	1.13	0.48	1/4	—	—
未掲載	65	〇〇貨	—	—	0.90	0.33	1/4	—	—
未掲載	67	寛永通寶	—	—	1.54	0.79	1/4	—	—
未掲載	71	寛永通寶	24.86	5.69	1.21	2.30	1/4	—	新貨永
未掲載	72	〇永〇	—	—	1.22	0.76	1/4	—	—
未掲載	73	〇〇貨	—	—	1.32	0.76	1/4	—	—
未掲載	74	寛永通寶	23.41	5.79	1.42	2.98	3/4強	—	古貨永
未掲載	78	〇〇貨	—	—	—	—	—	—	完存 2枚
未掲載	79	〇〇貨	—	—	1.21	0.59	1/4弱	—	—
未掲載	84	寛永通寶	—	—	1.14	1.51	1/2	—	古貨永
未掲載	91	—	—	—	1.25	0.46	1/4弱	—	—
未掲載	92	—	—	—	1.33	2.11	3/4弱	—	—
未掲載	93	—	—	—	1.48	1.29	1/2	—	—
未掲載	94	寛永通寶	24.86	5.46	1.25	2.38	3/4	—	古貨永
未掲載	95	寛永通寶	24.16	6.03	1.05	1.42	1/2強	—	古貨永
未掲載	96	寛永通寶	—	—	1.16	0.90	1/4強	—	—
未掲載	97	寛永通寶	24.36	5.70	1.26	2.64	3/4強	—	古貨永
未掲載	99	—	—	—	1.34	1.30	1/2	—	—
未掲載	100	寛永通寶	24.68	5.82	1.11	1.62	1/2強	—	—
未掲載	101	寛永通寶	24.51	—	1.15	1.29	1/2	—	古貨永?
未掲載	102	寛永通寶	24.71	5.73	1.29	2.14	3/4	—	古貨永
未掲載	103	寛永通寶	—	—	1.03	0.63	1/2弱	—	—
未掲載	104	寛永通寶	24.18	5.25	1.18	1.51	3/4弱	—	古貨永
未掲載	105	寛永通寶	—	—	1.00	0.49	1/4	—	—
未掲載	106	—	—	—	1.32	0.29	1/4	—	—
未掲載	112	寛永通寶	—	—	1.02	0.80	1/4	—	—
未掲載	116	〇〇貨	—	—	1.24	0.47	1/4弱	—	—

文判読可能な153点のうち143点が寛永通寶であり、残る10点が輸入銭である。

143点の寛永通寶のうち、銭文の細部まで視認できるものをみると、古寛永が62点、新寛永が44点を数え、残る45点は不明である。また、新寛永には「背文」が8点(2762・2777・2792・2794・2798・2799・2806)、「背仙」が1点(2833)、「背佐」が1点(2832)確認できる。

(5) 金属製品

土坑5からは約15000点の金属製品が出土している。ここではそのうちの22点を抽出して報告する。

2844は小柄である。刃部は欠損して残らない。金装で地紋はきわめて繊細な魚々子である。文様は剣巻き龍であり、X線写真によると、3本のピンで固定されていることが看取される。2845は隅切方形の飾り金具である。脚の先端は欠損する。地金の表面には繊細な魚々子が打たれており、その上面に繊細な花文が付されている。

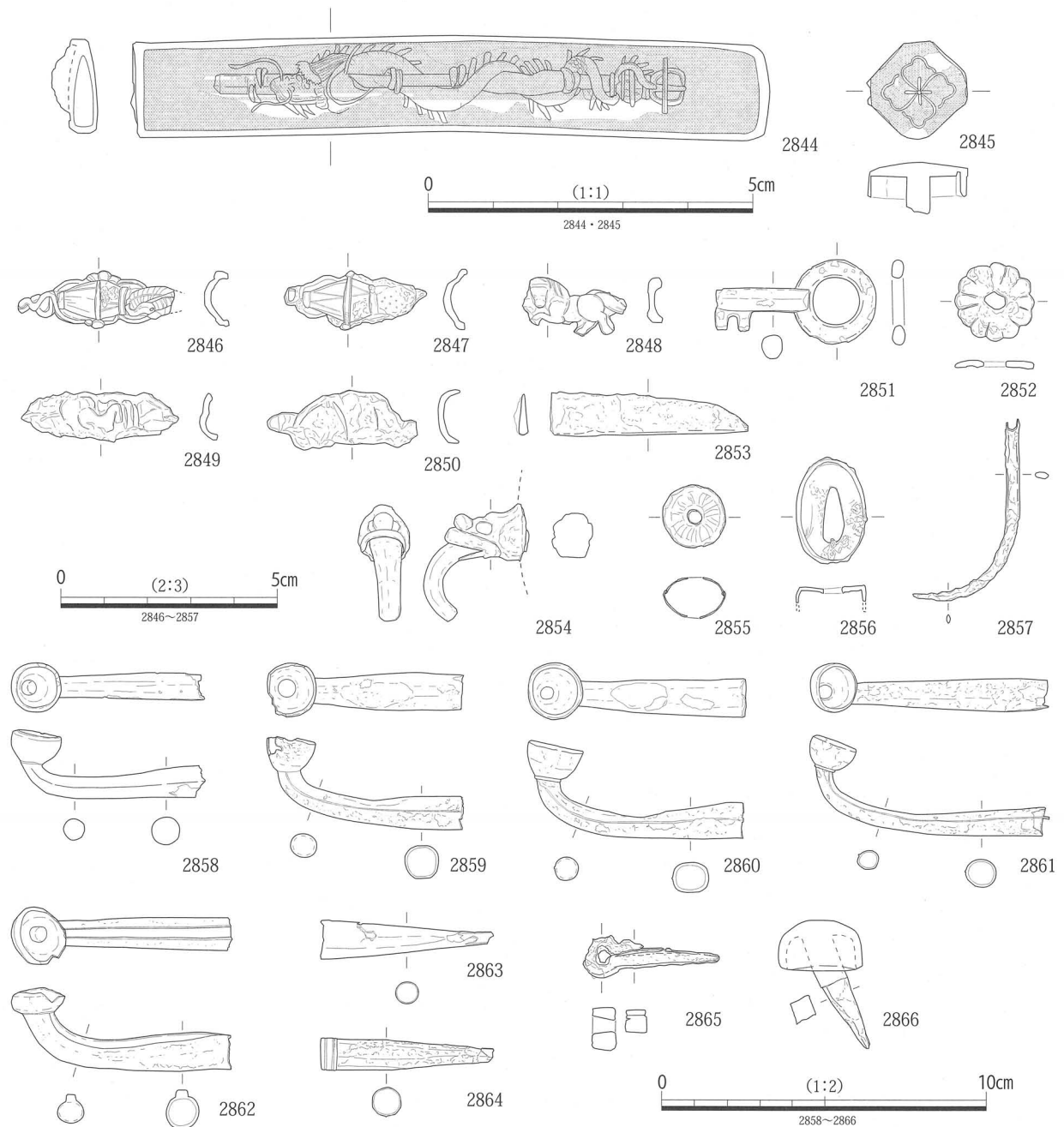


図 285 土坑5出土金属製品

2846～2850は目貫である。いずれも鑄目貫であり、2848が馬の意匠であるが、2846・2847・2849・2850は不明である。

2851は円環をもつ和錠の鍵である。2852は周囲を花卉状に成形した座金である。2853は小柄の切先である。2854は龍頭の把手である。基部には剥離痕が残る。2855は空玉である。上下別体を銀蠟付けする。一方の面にのみ花卉状の線刻がある。2856は小型の柄縁である。2857は吊り金具である。上端は欠損するが、円孔の痕跡が残る。桿秤の吊り金具であろうか。

2858～2864は煙管である。2858～2862は雁首であり、このうち、2862は火打付煙管である。2863・2864は吸口で、2864には羅字側に2条の沈線を施した肩を付す。2865は壺金、2866は大型の鋏である。

なお、図には掲げていないが、土坑5からは14912点の鉄釘が出土している。長さや質量の傾向は表26に示したとおりであり、1.0～3.5cmまでの小振りの釘が目立っている。

表26 土坑5出土鉄釘集計

長さ (cm)	数 (本)	質量 (g)
～1.0 cm	410	125
1.0～1.5 cm	2856	1680
1.5～2.0 cm	4079	3795
2.0～2.5 cm	3305	4725
2.5～3.0 cm	1863	3970
3.0～3.5 cm	1108	3260
3.5～4.0 cm	520	2050
4.0～4.5 cm	327	1640
4.5～5.0 cm	177	1080
5.0～5.5 cm	113	890
5.5～6.0 cm	68	585
6.0～6.5 cm	36	310
6.5～7.0 cm	17	170
7.0 cm～	33	440
合計	14912	24720

(6) 石製品

① 硯

土坑5からは微細な破片を含めて45点の硯が出土した。ここでは7点を抽出して報告する。

2867は一部が残るのみであるが、自然面を残して円形の彫り込みを行い、その外側に線刻を行っている。石材は緑灰色を呈する。2868・2872は隅丸方形を呈するものであり、前者は小豆色、後者は黒色を呈する。2869の裏面には「上々吉本□石」の刻書がある。2871が出土硯の中で最小のものであり、幅2.42cmである。また、2873は出土硯中、最も大きく、長さ17.55cm、幅8.08cmを測る。石材は明黄灰色を呈する。

② 玉類・碁石

2874は直径0.73cmの玉である。2875は直径1.37cmの水晶製の玉である。数珠の母珠であろうか。

2876～2891は碁石である。碁石は55点が出土しており、黒石が52点、明灰色を呈するものが2点、茶色っぽいものが1点ある。

③ 火打石

土坑5からは火打石が70点出土している。このうちの57点がサヌカイト製であり、残る13点がチャート・水晶・瑪瑙製である。

サヌカイト製の火打石は上記の通り、使用痕が確認できるものが57点で、これ以外に使用痕のみられないサヌカイト原石が9点、火打石のエッジを出すために割りとられた際に生じたと考えられるサヌカイト剥片が526点出土している。これらの火打石は図288に掲げたようにエッジ部分が敲打によってつぶれて丸みを帯びたものである。出土したサヌカイト製火打石の法量は表27に記した通りである。長辺は30～40mmに20点、40～50mmに16点で、この範囲に全体の6割以上が集中し、平均は43.20mmを測る。同様に短辺は20～30mmに28点、30～40mmに19点で、全体の8割がこの範囲に集中する。平均は32.08mmである。厚さは10～20mmに32点、20～30mmに21点が集中し、平均は18.90mmである。また、質量分布は図287に示したとおりであり、10～20gに16点、20～30gに14点が集中し、平均は29.87gである。また、表には使用頻度を「多」・「中」・「少」に分類

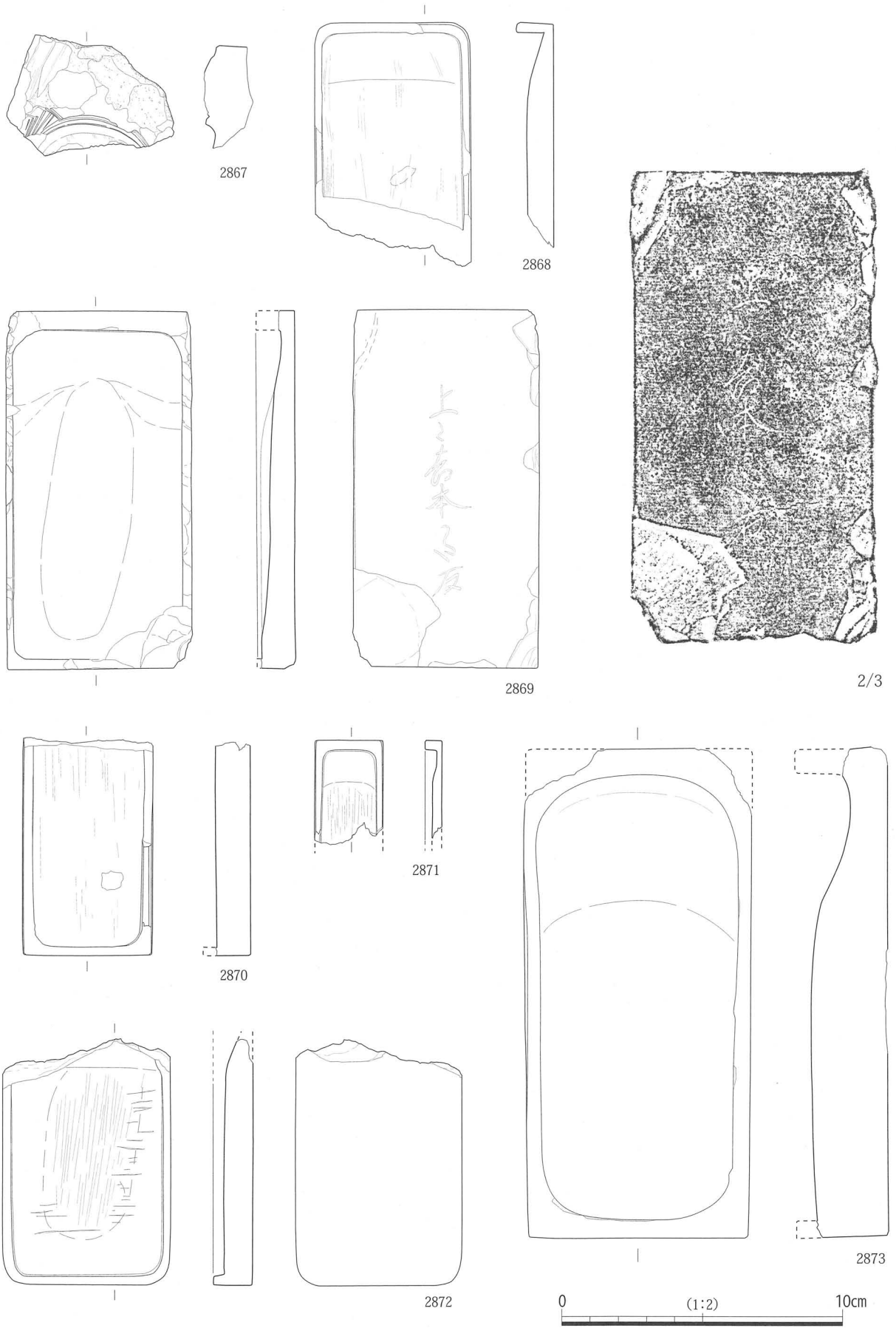


図 286 土坑 5 出土石製品 (1)

して表記している。多分に感覚的で曖昧な分類ではあるが、ここで「多」としたものは側縁のみならず、表裏面のわずかな稜線部分にも敲打痕が残るもの、「中」としたものは側縁には比較的密な敲打痕が残るものの、「少」としたものは側縁にわずかに敲打痕が残るものである。

図化した火打石でいえば、2893・2894・2898では表裏面のわずかな稜線にも敲打痕が残ることから「多」、2892・2895・2896が「中」、2897が「少」に分類される。なお、2989は裏面はフレッシュな剥離面が残り、当該面には敲打痕はみられないことから、さらに大きな火打石から割り取られたもので

表 27 サヌカイト製火打石一覧 あることが分かる一例である。

遺物番号	長辺 (mm)	短辺 (mm)	最大厚 (mm)	質量 (g)	使用頻度	挿図番号
2892	42.35	33.71	16.41	29.13	中	288
2893	44.48	33.89	23.40	48.03	多	288
2894	54.93	40.43	28.02	73.94	多	288
2895	51.50	43.47	24.73	63.41	中	288
2896	68.25	38.59	21.98	66.7	中	288
2897	33.39	26.64	16.83	15.94	少	288
2898	53.59	33.70	12.82	21.79	多	288
3088	15.17	32.57	24.76	35.51	少	—
3089	39.97	31.66	17.49	23.84	少	—
3090	45.43	23.76	22.04	21.7	中	—
3091	53.31	37.30	12.32	31.37	中	—
3092	45.42	26.67	20.30	21.11	少	—
3093	50.17	46.80	22.32	50.05	少	—
3094	39.62	37.32	20.23	27.32	中	—
3095	41.40	22.42	26.08	18.32	中	—
3096	45.48	24.21	18.53	23.26	中	—
3097	56.49	48.52	27.79	85.86	中	—
3098	47.62	39.01	19.33	35.29	中	—
3099	33.18	31.20	15.10	15.47	中	—
3100	35.36	26.74	8.28	9.88	中	—
3101	42.00	25.82	12.33	14.47	中	—
3102	60.03	34.50	33.94	45.2	中	—
3103	31.05	32.18	17.30	17.89	中	—
3104	49.47	39.13	24.22	51.35	少	—
3105	62.95	37.30	32.95	41.95	中	—
3106	35.36	30.80	14.41	22.12	中	—
3107	53.28	48.53	20.49	63.69	中	—
3108	64.81	44.39	19.64	53.03	中	—
3109	49.67	29.76	13.34	22.53	中	—
3110	37.43	20.21	24.43	17.71	中	—
3111	48.02	38.30	19.04	44.54	中	—
3112	36.23	27.18	22.74	21.47	中	—
3113	30.89	24.92	15.01	14.36	中	—
3114	68.68	49.82	22.32	59.78	中	—
3115	28.56	26.36	17.14	14.54	中	—
3116	66.73	52.99	18.28	64.45	中	—
3117	60.55	50.41	21.85	67.89	中	—
3118	36.86	31.75	15.98	16.46	中	—
3119	37.38	29.01	21.42	22.37	中	—
3120	43.98	41.39	21.90	37.18	中	—
3121	32.56	20.45	14.35	8.30	少	—
3122	36.70	26.34	19.09	15.50	少	—
3123	39.48	24.81	15.71	14.62	少	—
3124	51.79	27.47	25.70	47.47	中	—
3125	32.24	21.47	20.21	17.14	中	—
3126	38.05	23.34	11.59	9.05	少	—
3127	33.85	25.42	10.16	9.32	中	—
3128	41.40	26.58	14.54	13.37	少	—
3129	25.07	21.87	14.62	7.44	中	—
3130	27.45	23.00	18.36	9.52	少	—
3131	33.41	32.05	19.46	23.16	中	—
3132	36.48	29.27	15.20	15.74	中	—
3133	48.62	26.83	16.52	25.14	少	—
3134	42.67	28.59	13.70	10.26	中	—
3135	26.83	22.48	13.11	10.19	少	—
3136	45.54	33.25	19.12	27.62	少	—
3137	29.13	22.26	8.54	7.79	中	—
3138	51.08	20.70	11.95	13.82	少	—
3139	42.16	25.28	7.12	7.70	少	—

このほか、チャートなど、サヌカイト製以外の火打石も 13 点確認している。チャート製の火打石は 3 点出土しており、いずれも緑色を呈するもので、徳島県阿南市大田井で産出するものである可能性が高い（北野 2000）。

サヌカイト製の火打石と比較すると、全体に小さく質量は 1 ～ 32 g におさまる。また、同様の石材ではあるが、敲打痕が残らないものも 6 点出土している。

このほか、水晶製の火打石が 4 点、瑪瑙製の火打石が 6 点出土している。いずれの石材も同一石材の剥片が多数出土している。

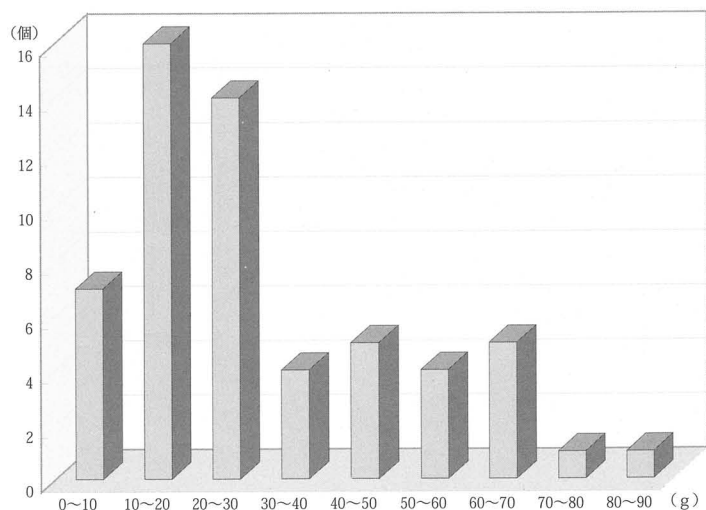


図 287 サヌカイト製火打石の質量分布

表 28 チャート・水晶・瑪瑙製火打石一覧

遺物番号	長辺 (mm)	短辺 (mm)	最大厚 (mm)	質量 (g)	石材	備考
3140	30.60	23.81	14.80	8.04	チャート	緑色を呈する。徳島県大田井産の可能性大。
3141	31.14	17.88	10.98	6.97	チャート	緑色を呈する。徳島県大田井産の可能性大。
3142	35.74	19.04	14.49	8.18	チャート	緑色を呈する。徳島県大田井産の可能性大。
3143	29.26	15.99	11.99	5.55	水晶	無色透明。
3144	20.88	15.46	5.70	2.20	水晶	無色透明。
3145	35.56	19.07	14.50	9.77	水晶	無色透明。
3146	21.24	18.43	6.00	2.29	水晶	黒っぽい色調を呈する。
3147	26.02	17.93	9.57	5.36	瑪瑙	乳白色を呈する。
3148	18.55	14.19	9.67	2.15	瑪瑙	乳白色を呈する。
3149	17.02	15.16	11.22	3.55	瑪瑙	乳白色を呈する。
3150	33.90	33.14	28.04	32.93	瑪瑙	乳白色を呈する。
3151	18.19	11.02	4.44	0.92	瑪瑙	一部、筋状に褐色を呈する。
3152	31.08	21.28	15.84	8.23	瑪瑙	一部、筋状に褐色を呈する。



図 288 土坑5出土石製品 (2)

④軽石

2899 は軽石である。軽石はこれ以外に 5 点が出土している。

⑤砥石

土坑 5 からは破片を含めて 514 点にもおよぶ砥石が出土している。荒砥が過半を占め、これに仕上げ砥、中砥が次いでいる。本書では 7 点を図化した。2900 は小型の砥石である。2901・2902 は筋状の窪みをもつ。後者は断面が正方形に近く、各面ともに使用痕がある。いずれの窪みも断面形は V 字状を呈する。2903～2906 は短冊形の砥石であり、2903・2906 では表裏面を使用している。

⑥石臼

2907 は直径約 21 cm に復元される茶臼である。全体の約 4 分の 1 が残るのみであり、残存部位には挽き木を差し込むほぞ穴は残らない。臼の目は繊細な線刻であり、8 分画と考えられる。

(7) 金属加工関連遺物

2908～2912 は小型のトリベである。出土したトリベはいずれも小型品であり、最も小さい 2908 は口径 3.1 cm、器高 1.6 cm であり、大振りの 2912 でも口径 5.4 cm、器高 2.9 cm である。容量は 3～18 cc である。

2913・2914 は鞆羽口である。原形を留めるものが 15 点出土しているほか、破片はコンテナにして 3 箱分が出土している。いずれも外径は約 8.5 cm を測り、内径は先端部では約 2.6 cm で基部に向かって緩やかに広がっている。先端の溶着物の付着状況からみて、炉には 80° 前後で挿入されていた可能性が高い。また、図には掲げていないが、厚さ 1 cm 前後を測る炉壁が 11 コンテナ分、67.93 kg が出土しているほか、スラグが 225.185 kg 出土している。

(8) 瓦類

2915～2919 は豊臣時代の瓦である。

2915 は左巻き三巴文軒丸瓦 NM07Q 型式で、太いしっかりした巴尾が他の胴に接する。復元珠文

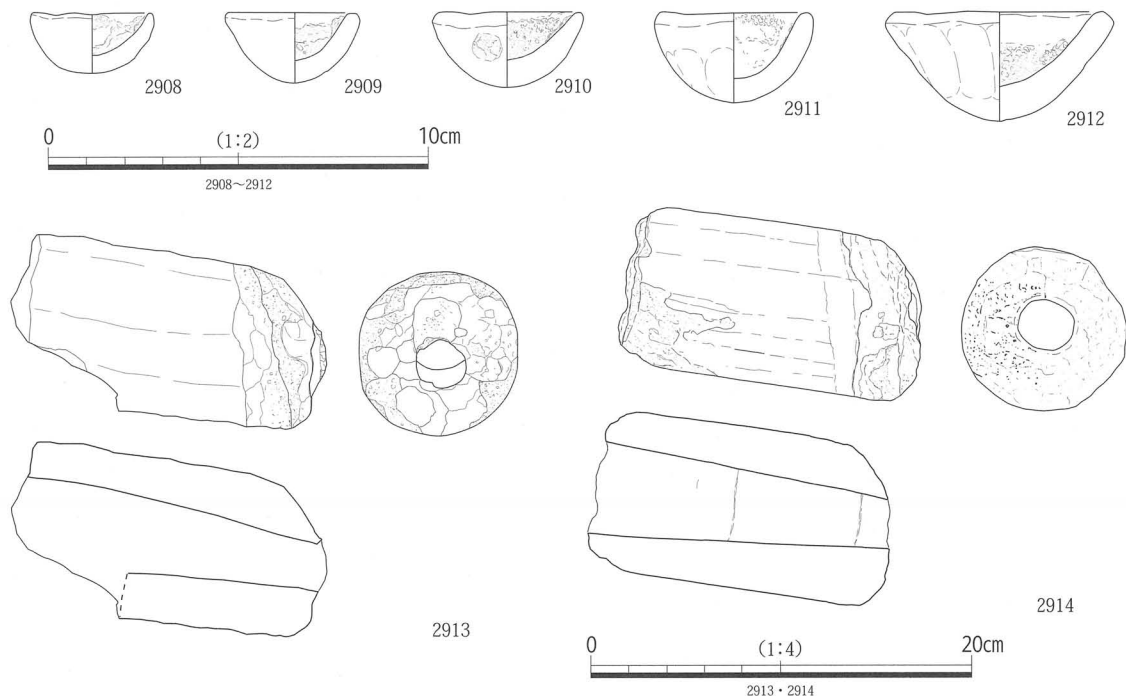


図 289 土坑 5 出土トリベ・鞆羽口



図 290 土坑 5 出土瓦

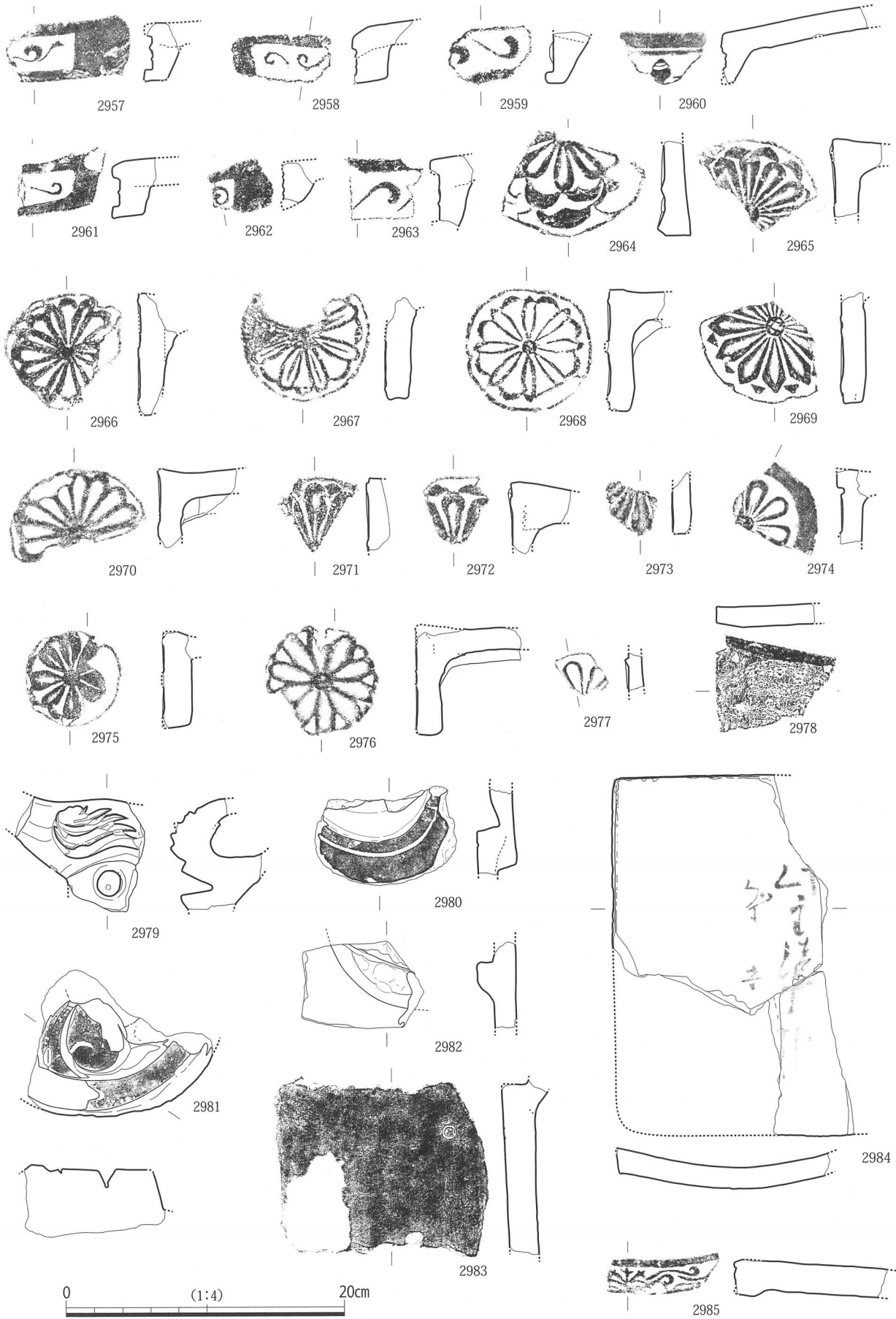


图 291 土坑 5 · 土坑 31 出土瓦

数は14個。2916～2918は唐草文軒平瓦で、2916はNH01A型式、火中し橙色を呈する。2917はNH30E型式の金箔押瓦で、唐草に金箔が残る。蛍光X線資料「金箔平12」である。2918はNH18I型式で、三葉の上に点珠7個を配する。瓦当成形は芋継ぎ。瓦当裏面のヘラ削りの際、ヘラ先が当り平瓦部が深々と切られている。2919は桐紋飾瓦で今回分類のⅢ類であろう。

2920～2927は左巻き三巴文軒丸瓦で、復元珠文数は2920が18個、2921が16個、2922が12個、2924が20個、2925が10個、2926が16個である。また2922は瓦当中央にコンパス芯と思われる突起があり、2927は豊臣時代のNM06C型式の可能性はある。

2928は軒棧瓦の軒丸部で、2929は形式化した蔦紋軒丸瓦である。

2930～2963は唐草文軒平瓦で、中心飾は2930・2931が丁子形をした三葉、2932が二葉、2933・2934・2939が左右の葉が外反する三葉、2940・2941・2946～2948・2953・2954が橘、2935～2938が萼のある三葉、2960が宝珠である。2954は軒棧瓦、2958は一体構成の隅唐草の可能性があり、NH10J型式と思われる。2964～2978は差し瓦で、2978が棟に青海や輪違いなどを組む瓦当を持たない差し瓦である以外は、菊丸瓦である。2964が三重菊文、2965～2969・2971・2972・2975が二重菊紋である。また2978の凹面にコビキBが見える。

2979は鬼瓦の右目と眉毛、角である。2980・2982は桃の実文鬼瓦の破片と思われ、桃の葉が残る。2981は葵紋飾瓦だが裏面に剥離痕跡があるので、鬼瓦の可能性も残る。

2983は丸瓦凸面の玉縁そばに「丸に十」の刻印を押す。2984は墨書瓦で平瓦凸面に「此主清十□／□□吉□」（／は改行）と記す。

2. その他の遺構・包含層出土遺物

以下では土坑5以外の遺構および包含層から出土した遺物を報告する。遺物を出土した遺構が少ない上に出土遺物量も僅少であることから、遺物種別ではなく、遺構単位で報告を行う。

(1) 土坑31出土遺物

土坑5の北側から検出した土坑31からは陶磁器・瓦・銭貨などが出土した。いずれも細片で図化に耐えるのが少なく、ここでは軒平瓦2985を掲げたのみである。

2985は豊臣時代NH04S型式の軒平瓦である。瓦当厚は平瓦部厚とほとんど変わらない。

このほか、図には掲げていないが、新寛永の寛永通寶が1点出土している（表29）。

(2) 井戸117出土遺物

井戸117から出土した遺物は井戸枠内から出土した遺物と井戸枠を構成する遺物に大別される。2986は井戸の下層から出土した鉄鍋である。口縁部は受口状を呈する。2987・2988は井戸枠瓦である。いずれも基本的には同一形態、同一成形であることから2点のみを図化した。凸面には押圧による刻みが付けられる。いずれも同一原体を用いており、一元的に生産されたものが持ち込まれている。また、上端面に円形の刻印が付される点も共通している。

2989～2991は井戸117検出時にその上面から折り重なるように出土したものである。井戸枠の最上部を構成していた樽の部材であると考えられる。2989・2990は矩形を呈するが、2991は台形を呈する。いずれも下端が裏面側が斜めに削り取られている。表面にはいずれもほぼ同じ位置に焼印が押されている。2989は「木伊」、2990・2991は井桁の中に「木」の文字を配している。

2989・2990は両側面に同一の墨書が認められる。縦長で判読は難しいが、「ほ □□□ 廿八」と読める。中段は人名であろうか。組み合わせの順序を記したものではなく、同一の樽を構成する部材を

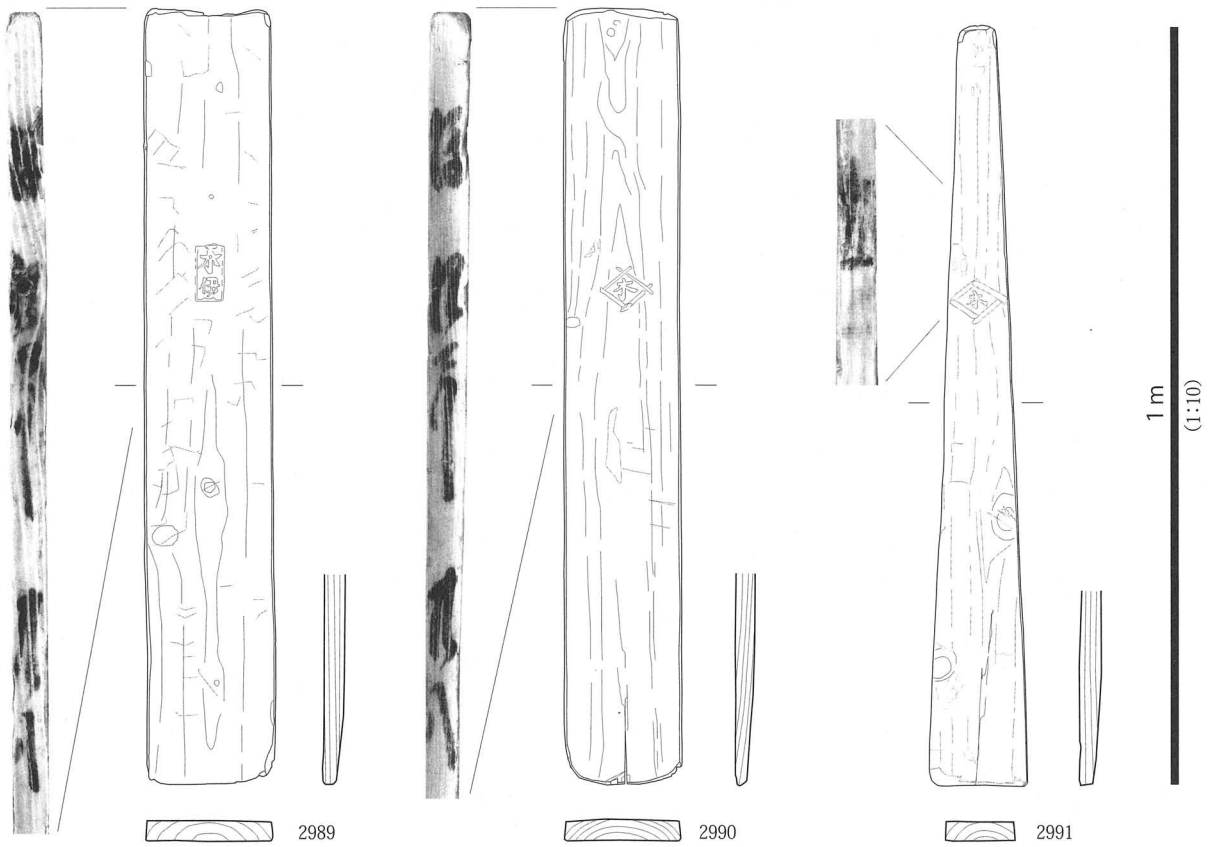
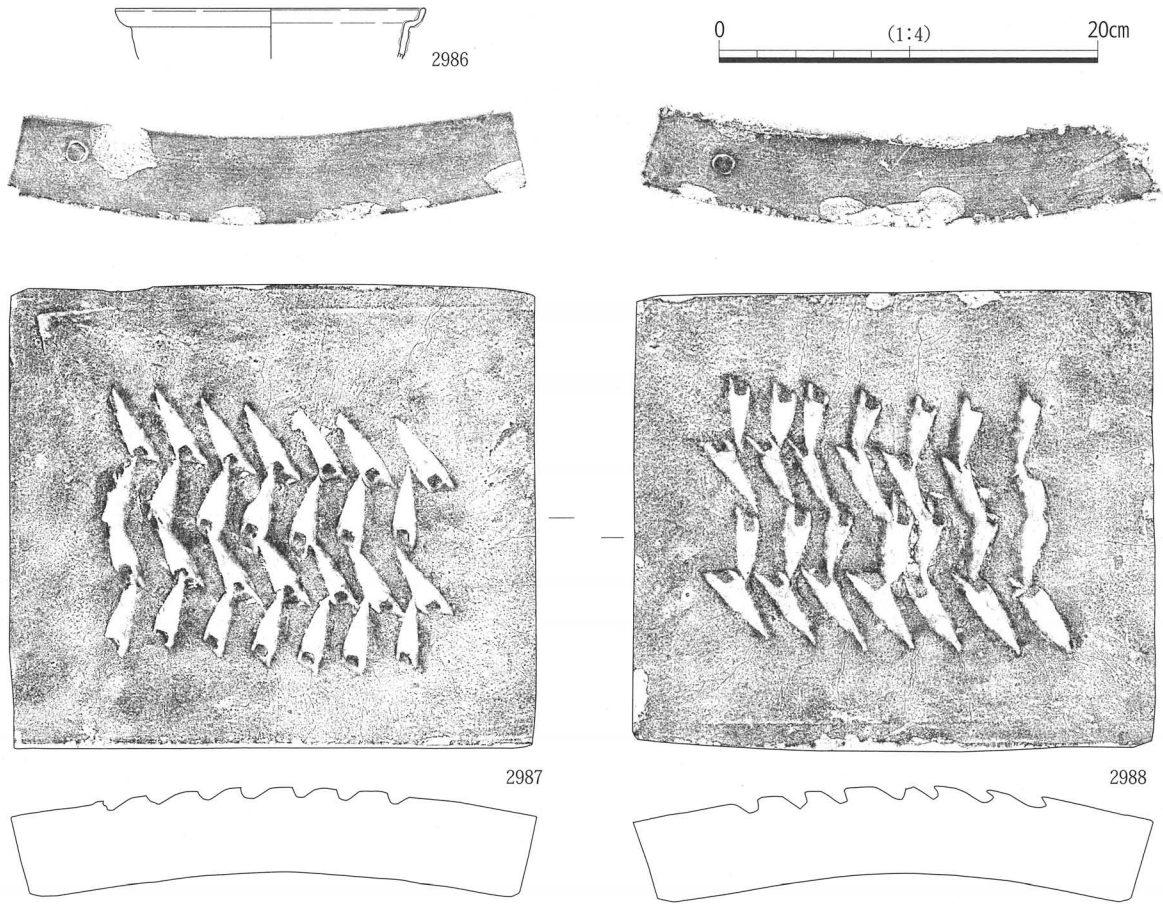


图 292 井戸 117 出土遺物

識別するためのものであると考えられる。2991のみ異なる墨書が確認できるが、不明瞭で判読不能である。木取りは板目であることから、樽と同じ木取りである（安藤 2002）。樽の底を抜いて転用したものである可能性が高い。

(3) 包含層出土遺物

① 銭貨・煙管

包含層等からは寛永通寶（2992～2998）、熙寧元寶（2999）、煙管（3000）が出土している。2992は背文が11波の当四銭である。3000は羅字の部分も金属で作られた延べ煙管である。

② 瓦類

3001・3002は豊臣時代の左巻き三巴文軒丸瓦で、3003はNM07 γ型式で復元珠文数15個、3002はNM03F型式で同18個である。

3003・3004は中心飾が三葉の唐草文軒平瓦で、3004は中心飾右側に竹管様のもので刻印を捺す。

3005～3014は菊丸瓦で、3005～3009が二重菊文である。3015は凹面の四方を広く面取る面戸瓦で、3016・3017は刻印瓦で、平瓦と丸瓦玉縁際の端面に竹管様のもので捺す。

3018～3020は左巻き三巴文軒丸瓦で、3018は豊臣時代のNM03F型式で復元珠文数は16個、3019・3020も珠文数は16個である。3021～3029は唐草文軒平瓦で、3021は中心飾が丁子様の三葉一点珠で、2930と同型式である。3024～3028の中心飾は橘と思われる。3030～3036は菊丸瓦で、3030は二重菊文である。3037は丸瓦凸面に捺された「丸に十」の刻印である。

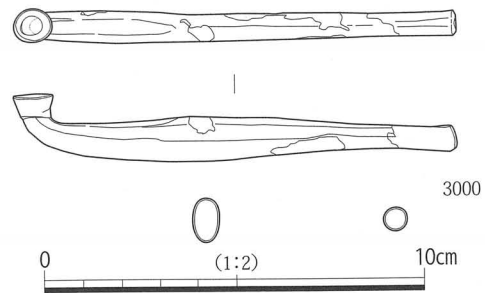


図 293 包含層出土煙管

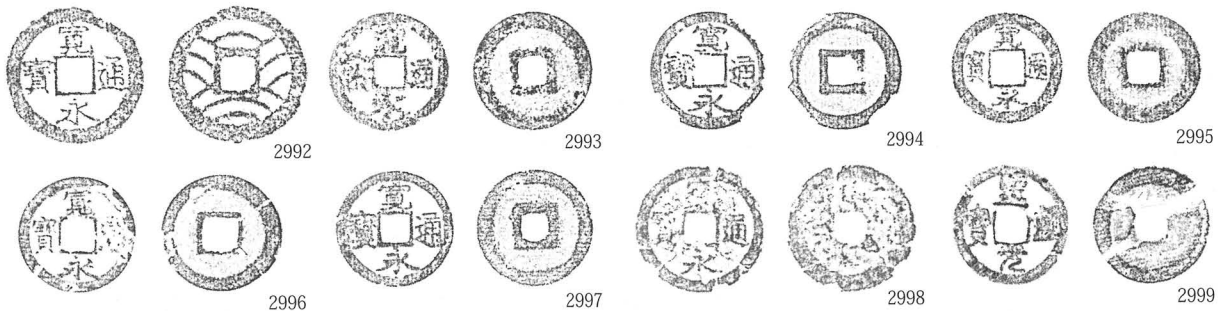


図 294 江戸時代遺構・包含層出土銭貨

表 29 江戸時代遺構・包含層出土銭貨一覧

掲載番号	旧銭番号	調査区	層位	種類	直径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	残存率	直径/質量	備考
2992	294	1e	第4層	寛永通寶	27.59	6.49	1.24	3.17	完存	0.11	新寛永 背青海波文
2993	295	2b	第4層	寛永通寶	23.88	5.73	1.18	2.50	完存	0.10	
2994	296	2b	第4層	寛永通寶	23.77	5.64	1.32	1.81	少々欠	—	古寛永
2995	299	2b	第4層	寛永通寶	22.43	6.52	1.03	1.51	完存	0.07	古寛永
2996	300	2b	第4層	寛永通寶	23.59	6.27	1.42	2.40	完存	0.10	新寛永
2996	306	2e	第3層	熙寧元寶	—	—	1.22	2.48	完存	—	篆書 変形
2997	308	2d 南	攪乱	寛永通寶	23.42	5.53	1.22	2.56	完存	0.11	古寛永
2998	303	2b	第4面	寛永通寶	25.98	6.57	1.24	1.60	少々欠	—	新寛永
未掲載	297	2b	第4層	寛永通寶	22.64	6.71	0.99	1.40	3/4強	—	
未掲載	298	2b	第4層	寛永通寶	22.10	6.41	1.16	1.92	3/4強	—	新寛永
未掲載	301	1e	第4層下	寛永通寶	23.09	6.20	1.41	2.46	3/4強	—	新寛永
未掲載	302	2b	第4面	—	23.60	6.57	1.10	2.15	完存	0.09	
未掲載	304	2e	第3層	—	—	—	—	—	—	—	2枚
未掲載	305	2e	第3層	—	—	—	1.05	0.73	1/2	—	
未掲載	307	2c	土坑 31	寛永通寶	—	6.47	1.38	1.74	3/4	—	新寛永

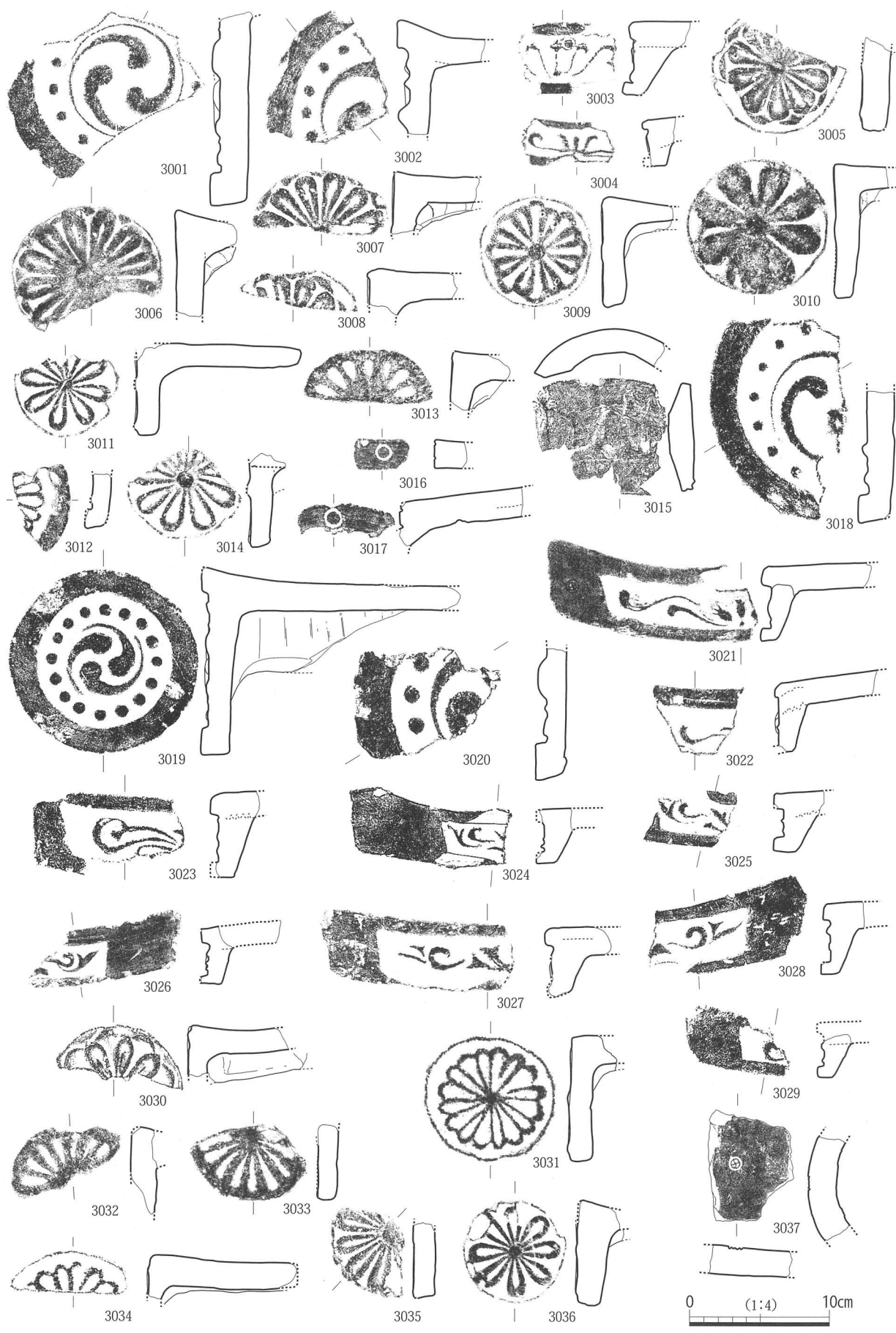


图 295 近代包含層出土 江戸時代瓦

第 10 章 近現代の遺構と遺物

第 1 節 遺 構

1. 前提

近現代の遺構面に関しては、江戸時代遺構面と同様に旧府警本部の建物などによる攪乱が著しく、しかも局地的に残存するのみであり、部分的には調査の工程上、調査自体が不十分に終わった部分も少なくない。以下では、遺構種別での報告ではなく、調査地全体を概観するかたちで報告を行う。

2. 明治時代の遺構

出土遺物の年代観ならびに遺構の切り合い関係から、明治時代の遺構と判断されるものには礎石建物跡 200 と土坑 18 がある。

(1) 礎石建物跡 200

礎石建物跡 200 は 1 調査区で検出した礎石列および 2b・2c トレンチで検出した礎石列ならびにその痕跡を一連の建物遺構と判断したものである。厳密にいうと、直接的に連続する遺構ではないが、個々の遺構の特徴や方向の共通性から同時性が高いものと判断している。

1 調査区では礎石は 6 箇所旧状を留めたまま検出している。これらの細部を見ると図 298 に示したように下層に直径 15 cm 前後の松杭を 3 本打設し、その上面に礎石を据えたのち、周りを根石で固めている。礎石 6～11 以外では礎石は残らないが、根石が残っていたり、石材がなくとも松杭が残ることから柱筋を復元することが可能となっている。建物の柱列は基本的には二重の L 字形を呈しており、その配列状況から、建物跡の北東角であることは明らかである。建物跡の方位は、ほぼ座標北に一致する。

北側で検出した東西の柱列の間隔は約 5.5 m であり、この部分の柱間は 1.8 m 前後で 1 間を意図したものであることを考えると、5.5 m の間隔は 3 間幅であるといえる。実際、両者をつなぐように検出した礎石 7 を含む南北柱列は 3 間であり、個々の間隔は約 1.8 m を測る。南北方向の柱列も約 7.4 m 間隔で平行して南にのびる。4 間幅で設計されたものか。なお、南北柱列はいずれも柱間の間隔が約 2.7 m で、1 間半で設計されている。また、礎石 11 を含む南北柱列の東側 3.6 m (2 間) には平行して南に延びる柱痕跡がみられる。当該柱列も柱間間隔は約 2.7 m である。

2 調査区の 2b トレンチでは礎石 84・85 が南北方向に並んで検出され、その南北に松杭が残っている。この柱列の間隔は 1 間半の約 2.7 m であり、これは 1 調査区で検出した南北方向の柱列と共通する。なお、礎石 84 の 1.5 m 西からは礎石 72 を検出しているが、角度や距離などから直接的に関連するものとは断言できない。2c トレンチでは東西方向に並ぶ松杭を検出した。攪乱によって残りは良くないものの、柱列の南端を推定する上で重要な位置を占めている。

なお、1 調査区で検出した東西柱列の北側を建物の北端とし、2c トレンチで検出した東西柱列を建物南端とした場合、建物の南北長は約 74.2 m となる。また、当該建物跡の基礎となる松杭は後述する土坑 5 を切る形で打設されており、その造営は明治 12 年以降であることは確実である。

(2) 土坑 18

南北長 3.4 m、東西長 3.1 m、深さ 1.0 m を測る不整な土坑である。下層には木片が多く含まれているものの、瓦片や陶磁器類などはほとんど含まれない。一種の廃棄土坑と考えられるが、厳密には性格は不明である。先に報告した礎石建物跡 200 は当該土坑の埋土を切って松杭を打ち込んでいる。



図 296 明治～昭和時代遺構全体図



図 297 明治時代遺構面 (1 調査区)

3. 大正～昭和時代の遺構

今回の調査地の南半部は大正6年から昭和20年までの間、大阪憲兵隊本部が置かれた場所に該当し、同じ頃、北半部は輜重兵関連の施設が置かれていたことが地図資料などで窺われる。今回の調査でも、わずかではあるが、当該期の建物痕跡や溝などを検出している。

(1) 1調査区

1調査区では石組み溝などを検出している。

溝1は東西方向の石組み溝である。東西検出長は12.6m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。方向はE-4°-Nである。南北とも間知石が1段だけ残るが、北側は大半が抜き取られている。溝1の西端では底面に瓦が敷かれており、府警本部1期調査区で検出した溝333に接続するものであると考えられる。

溝2は北側で溝1に取り付く南北方向の石組み溝である。検出長は途中、攪乱部分を含むが、南北9.3m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。方向はほぼ座標北を指向する。間知石は部分的に残るのみであるが、底面に敷かれた花崗岩が配列を乱しながらも遺存している。

溝3は調査地の南東側で検出した東西方向の石組み溝である。東西検出長は4.6m、幅0.3m、深さ0.2mを測る。方向はE-1°-Nである。南北とも間知石が1段残るのみである。下層にはコンクリートが検出され、これが北西方向にのびている。このコンクリートの延長上は浅いくぼみとして痕跡が確認でき、溝2はこの影響で中断している状況が窺われる。したがって、間接的な遺構の切り合い関係ではあるが、溝3は溝1・2に後出するものと考えられる。

このほか、溝1および溝2の南東からは矩形の素掘り溝を検出している。この遺構は溝状を呈し、拳大から人頭大の円礫と砂利をいれたものである。建物基礎の痕跡とも考えられる。なお、昭和17年の航空写真と対比すると、大阪憲兵隊本部の北東に東西棟建物が写っており、位置的にはほぼ一致することから、当該建物に関わるものである可能性が高いものといえる。

(2) 2調査区

2調査区では北側の2bトレンチで防空壕、南端の2cトレンチでは大阪憲兵隊本部に関連する遺構を検出している。

防空壕32は東西に長辺をもつ矩形の掘り込みに板と杭を用いて壁面を作り、横方向に棧を入れてい

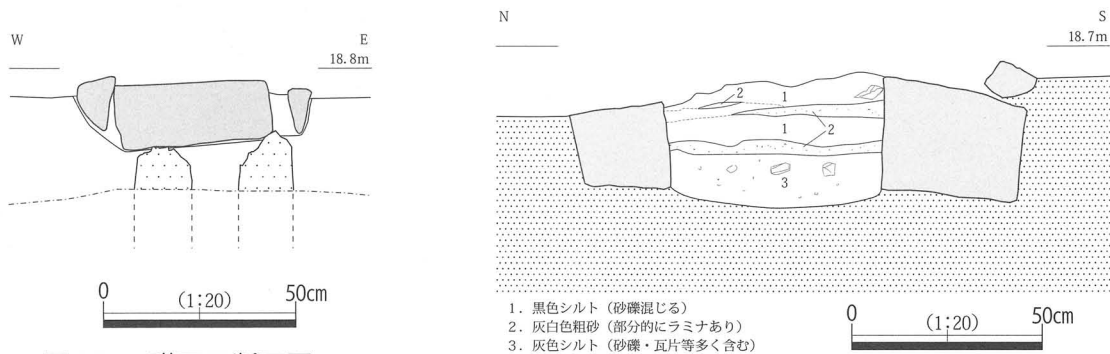


図 298 礎石7断面図

図 299 溝1断面図

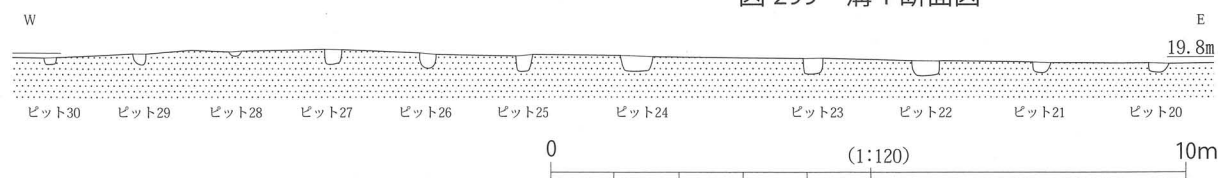


図 300 ピット20～30断面図

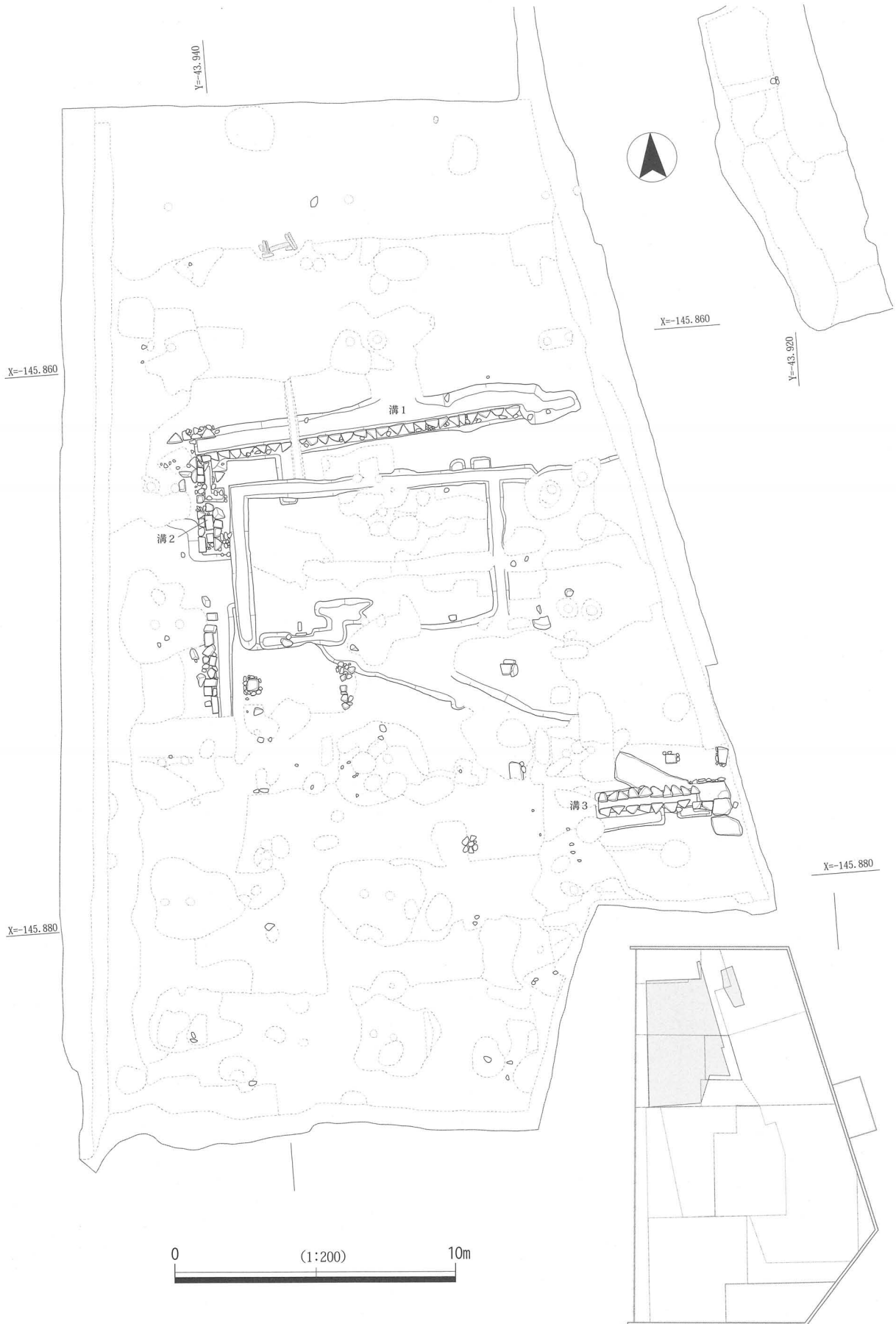
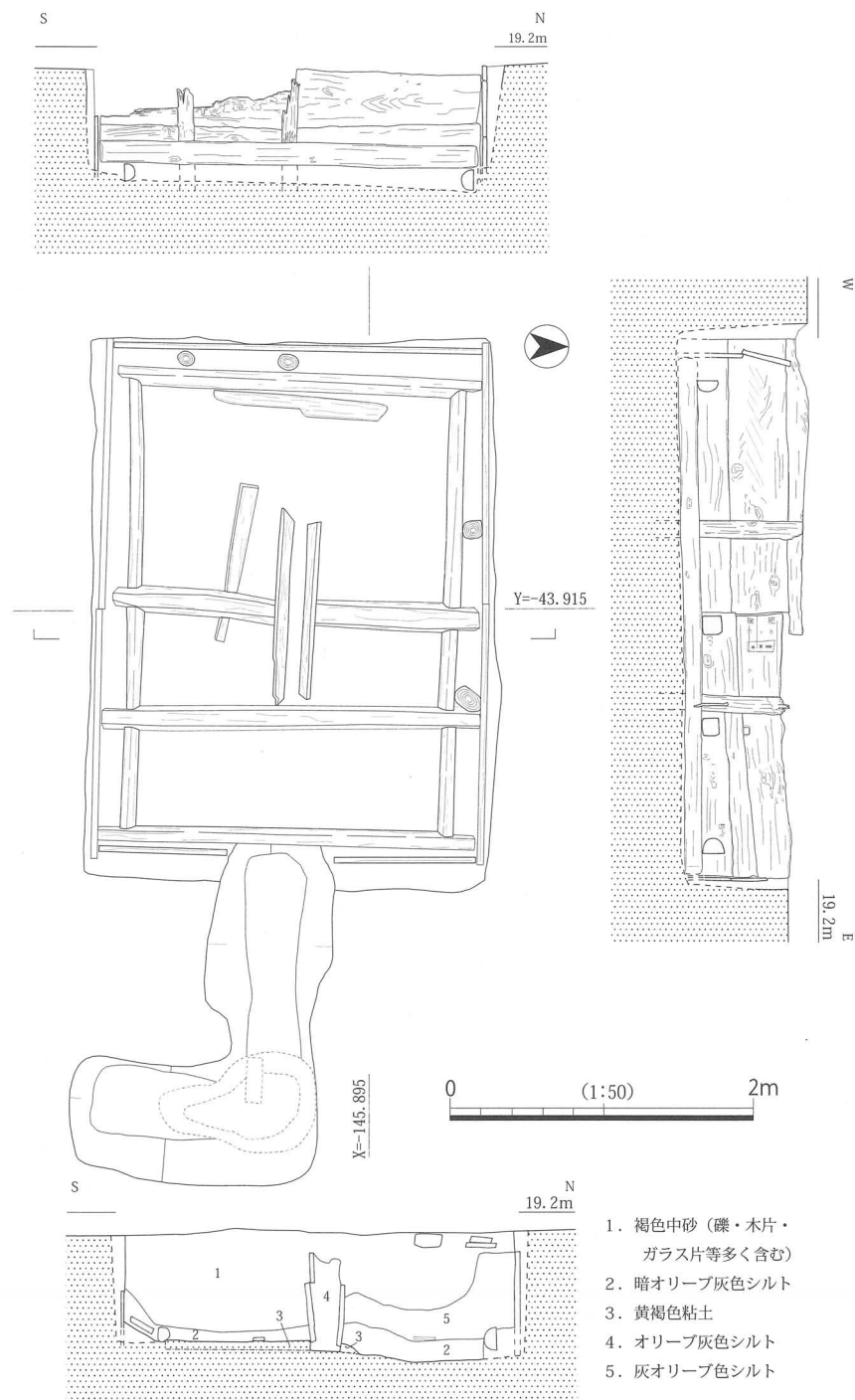


図 301 大正～昭和時代遺構面（1 調査区）

る。南北両壁面の裾部には半截した丸太材が敷設されて椅子状に作り出されている。中央には間仕切り状の板材が残る。規模は東西 3.5 m、東西 2.6 m、深さは残存で 0.8 m を測る。東側の入口部分には幅 0.8 m 前後の溝状の窪みが逆 L 字形にのびている。入口を 90° に屈曲させているのは、爆風が直接的に防空壕内に及ばないようにするための工夫であると考えられる。最終的には人為的に埋め戻されているが、底面付近からは日本刀やガラス瓶などが出土している。

調査地南東からは大阪憲兵隊本部基礎を検出している。建物の南西角を L 字形に調査したに留まる。この基礎は掘方を掘削して礫を敷き、その上に鉄筋を入れた断面台形状のコンクリート基礎を作っている。基礎は下端幅 1.5 m、上端幅 1.2 m、高さ 0.3 m である。大阪憲兵隊本部は大正 6 (1917) 年に



南区から当地に移転した時のものである可能性が高い。

また、この西側からは東西方向に直列するピット列を検出している。このピット 20 ~ 30 はおおむね 1.5 m 間隔でピットが並ぶ。ピットの平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺 20 ~ 50 cm、深さは 10 ~ 25 cm 前後である。埋土には極粗砂の単層のものもあり、これらは掘立柱の柱穴とは考えがたく、基礎を据えた痕跡の可能性が高い。いずれにして塀などの区画施設に伴うものであると判断できる。

このほか、貯水槽と考えられる円形のコンクリート施設を検出している。内径は約 3.5 m、コンクリート壁の厚さは約 35 cm を測る。深さは残存で約 2 m である。底面には直径 63 cm、深さ 40 cm の円形の窪みがある。内面の南北 2 箇所には直径約 2 cm の鉄筋で作られた梯子が作り付けられている。内部には上部を覆っていた鉄筋入りのコンクリートが落ち込んでいる。南と北に内径 70 cm のマンホールが存在していたことが看取される。バケツが 1 点のみ出土した。

図 302 防空壕 32

第2節 遺物

1. 土坑18出土遺物

(1) 木簡

3038は長さ10.9 cm、幅3.5 cm、厚さ2 mmを測る。上半部の2箇所直径1 mm弱の穿孔があり、その部分で縦方向に折損している。表面には「はじ馬くにがたがた郡のもろよせ・・・」と書かれており、出身地を記したものであることがわかる。国名の「はじ馬くに」は但馬国ことを、郡名の「がたがたがうり」は国名と村名から明治33(1900)年の府県制・郡制によって「七美郡」と統合し「美方郡」となる「二方郡」を示すものであると判断される。現在の兵庫県美方郡浜坂町諸寄にあたる。本来は「但馬国二方郡」と記すべきところをウィットに富んだ表記を行っている。裏面には右側に「中寫寅三持」の文字があり、「明治十二年四月中旬調ス」と書かれている。これは明治12年4月の中旬に調達した何かの中寫寅三なる人物の持ち物となったことを示している。この面の周囲6～9 mmは木が変色しておらず、2箇所の穿孔がつまみを付けるためのものであるとすると、この木簡は箱の蓋であった可能性が高い。表面と裏面の関係は不明だが、二次的に利用された状況が見出せないことから、表面には中寫寅三の出身地が記された可能性が高いものと判断する。

3039は長さ10.8 cm、幅2.5 cm、厚さ2 mmを測る。下端はキリオリ、上端には木釘が残る。箱の側板を転用した木簡であると考えられる。表には漢字の間違ひはあるものの「総革将田盧」の文字が明瞭に読み取れる。意味は不明だが、総革製の何らかの物品名を記したものであろうか。裏面は「加年仕度被下候バ追」と読める文字があり、表面の文字が物品名であれば、これと対応するものと考えられる。

3040は長さ13.2 cm、最大幅1.9 cm、厚さ1～3 mmを測る。上部と左端は欠損している。表面には「森寫(竹?)次郎」という人名が記され、裏面には天地逆で「兵庫県下淡路国三原かうり□□」と2行にわたって書かれている。これは木簡3037と同様に出身地を記したものであると考えられる。「兵庫県」という表現があることから明治11(1878)年の郡区町村編制法の施行以降であることが判明する。

3038および3040に記された地名の地域はいずれも大阪鎮台の徴兵範囲に含まれている。木簡は大阪鎮台に徴兵された兵士に関わるものである可能性が高い。

(2) 漆器

3041は漆器椀である。内外面ともに塗色は黒色であり、文様は描かれない。

2. 近現代遺構・包含層出土遺物

3042は防空壕32から出土した鍵である。先端は折損する。表面には「MADE.IN.NIPPON」、「2」の文字、裏面には「NTS」の文字がある。3043は包含層出土の薬莖である。法量等からみて三八式歩兵銃の実弾薬莖である可能性が高い。3044は防空壕32から出土したインク瓶の蓋である。中山太陽堂の傍系会社であった日本文具製造株式会社が生産していたものである。

3045～3048は包含層中から出土した磁器である。いずれも口縁近くに緑色の二重線を施文したいわゆる国民食器である。3045は湯呑み茶碗、3046・3047は皿、3048はどんぶり茶碗である。

3049～3054がガラス瓶である。3049・3053は防空壕32から出土した。3049は透明ガラス瓶であり、口縁部付近の器壁にはかなりムラがある。3053は透明のガラス瓶で肩部の2箇所に「BNK」、裾部には右から書かれた「大日本麥酒株式會社製造」の陽刻文字がある。底面には星印とその下に「9」と「A」の文字がある。胴部外面にはわずかにラベルが残り、「□イダー」の文字が読み取れる。

3050 は廃棄土坑 202 から出土した昭和初期の「味の素」の容器である。

3051・3052・3054 は廃棄土坑 201 から出土した。3051 は裾部に「カオール」の文字がある。安藤井筒堂（現在の㈱オリジナル）が現在に至っても販売している口中清涼剤「カオール」の容器である。

3052 は扁平な円形の水色ガラス容器であり、底部には「被服協會」の陽刻文字がある。被服協會は昭和 4 (1929) 年 7 月に陸軍によって設立された組織である。出土したガラス容器の中身は不明だが、形態からペースト系の性状をもつものであった可能性が高い。3054 は青色ガラス瓶であり、側面下方には右書きで「三蚬詰」（3 デシリットル詰め）の陽刻文字がある。清涼飲料水の容器であろうか。3055～3062 はレンガである。3055・3056 には岸和田煉瓦株式会社の社印が残る。3057 は大阪窯業株式会社製。3061・3062 には菱形に S の文字を入れた刻印がある。この刻印は下野煉化製造会社に似る。3058 は両面に星形の刻印をもつ煉瓦片である。この星形の刻印も下野煉化製造会社の社印に酷似する（水野 2001）。3059・3060 には文字のような刻印があるが、詳細は不明である。

3. 近現代層出土の刻印瓦

前項の 3037 や 3063～3071 は、鉛筆断面大ほどの一文字や文様で仲間内での識別をめざした刻印であり、3072～3087 は印判になり、より広い相手に製造元を知らしめることを意図した刻印である。

3063 は丸瓦凸面に、小さく細い圏線内に「ひ」字の陰刻を捺し、3064 は丸瓦凸面に、丸内に「太」字を陽刻し、3065 は振間瓦端面中央に「八」下に「大」と刻し、3066 は平瓦の広端面に、小圏線内に四星（四つ目）を陰刻する刻印を捺す。3067 は平瓦の広端面に、丸内に「太」字を陽刻する刻印を捺し、3068 は丸瓦玉縁端部に正方形内に「チ」を入れた刻印を捺す。3069 は平瓦狭端面に、縦長の「清」字を陰刻した小判形の刻印を捺す。3070 は平瓦端面に竹管によるとと思われる丸（圏線）を刻する。3071 は平瓦端面に、丸内に「太」字を陽刻する。3072 は軒棧瓦の蛇の目軒丸部周縁に矩形の刻印を配す。刻印は印ズレを起しており、一部ダブっているが、「泉州谷川」を 2 行に分かち書きし、横界線を入れ「日下堅作」とある。3073 は軒平瓦周縁部の左側区上端に、2 行タテ書きの刻印を右方向に 90° 倒して印刻する。銘文は「南瓦屋町壹丁目上／瓦屋真治郎（／は改行）」である。3074 は軒棧瓦の軒平瓦当部側区に斜めに刻印を捺す。刻印は矩形内に横界線を 1 本入れ、上段に「淡路津井」を 2 行に分かち書きし、下段に「雨堤（元カ）」の文字を配する。3075 は振間瓦凸面の針金孔 2 孔の右に、矩形の刻印を配し「泉

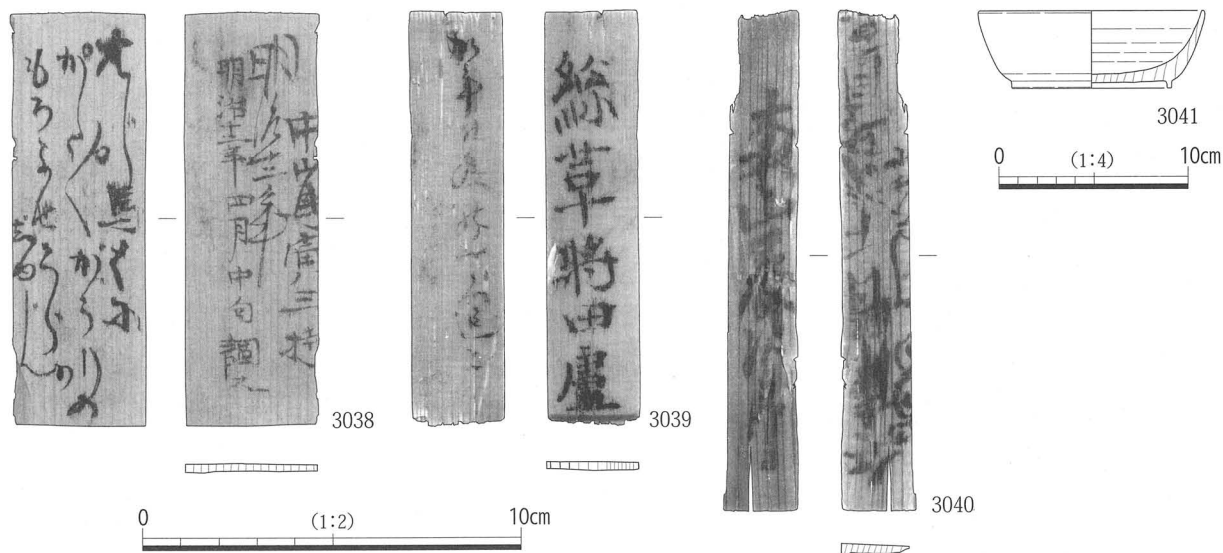


図 303 土坑 18 出土遺物

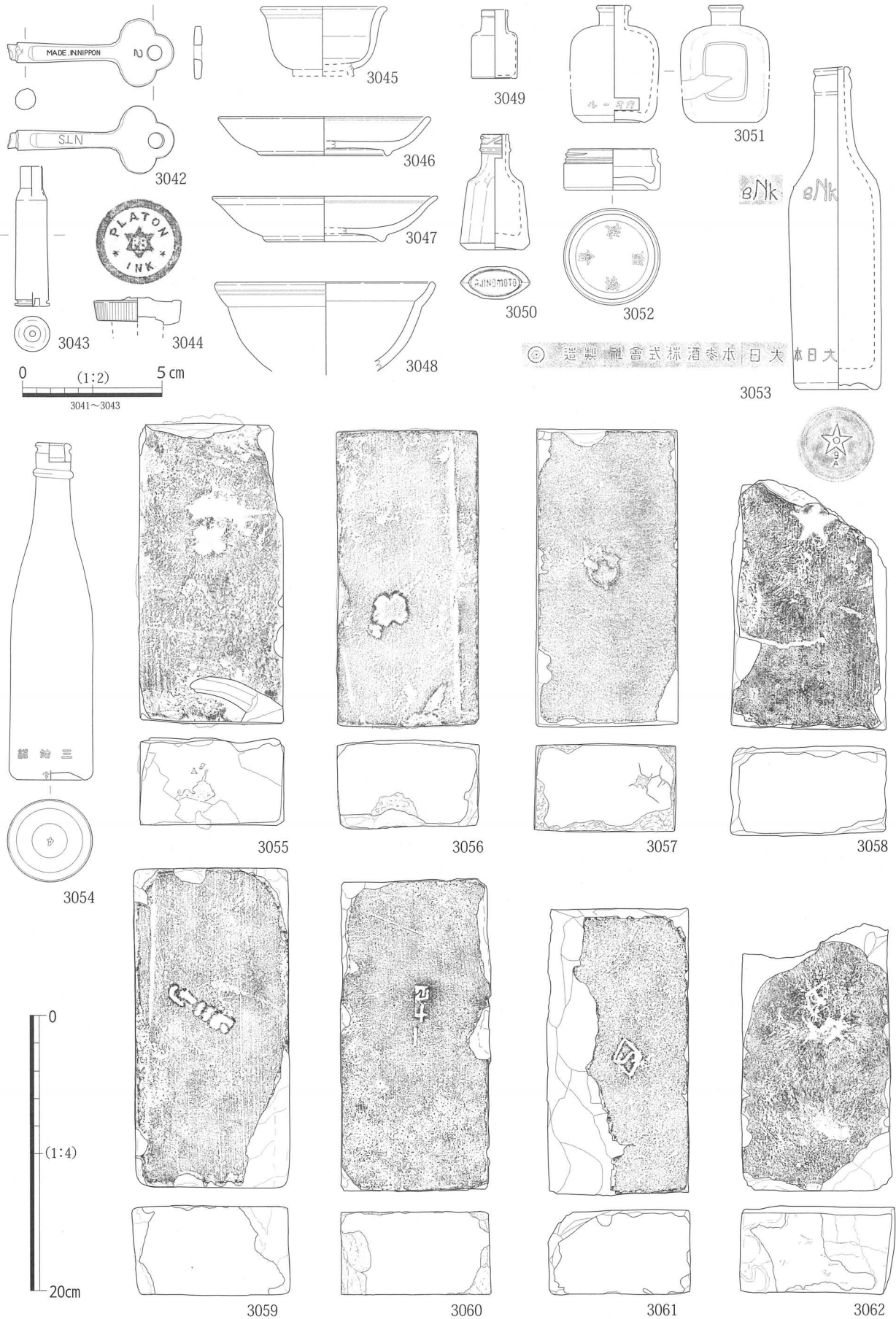


図 304 近現代遺構・包含層出土遺物

州谷川」は2行の分かち書き、その下に「中喜」と記す。3076は受け部をもつ振間瓦凸面の玉縁部から約6cm下に、矩形の刻印を捺す。矩形内には「苦□（瓜カ）」と見え、下部は欠損する。3077は針金を通す孔が左右に2孔開けられ、凹面にカキヤブリをもつことから振間瓦と考えられるものの凸面2孔中央下に、矩形内に「泉州谷川田兵」と記す。3079は棧瓦の切込み横の端面に、矩形内に「中山春吉改」の文字を配する刻印を捺す。3081は平瓦広端面の凸面際に矩形の刻印を捺す。矩形の上部を正方形に画する一本の界線を入れ、そこに「深日」、下に「酒□（井カ）虎吉」と記す。平瓦の凹面には原体5本のカキヤブリを施す。3083は平瓦狭端面に、矩形内上段に「泉州谷川」を2行に分かち書きし、下段に「石田善七」の文字を配する刻印を捺す。3085は平瓦端面に、矩形内に「・□改」の文字を配する刻印を捺す。3078は平瓦端面に捺された矩形に画された刻印で、上部は欠損する。「□川山口」と見える。3080は平瓦端面に、矩形内に「谷瓦喜」の文字を配する刻印を捺す。3082は彎曲のない平瓦（埴の可能性あり）の側面に、矩形内に「谷川平七」の文字を配する刻印を捺す。凹面は辺に沿って工具で調整している。3084は平瓦端面に、矩形内に「泉□・」の文字を配する刻印を捺す。3086は棧瓦の端面に、矩形内に横界線を2本入れ、上段に「商標」の文字と「土」字を中房に入れた14弁菊文、中段に「泉州」、下段右側は欠損するが、左端に「角谷」の2文字が見える。3087は平瓦広端面に矩形で画した刻印を捺すが、凹面に太く浅い沈線を長辺に平行して中央に入れ、原体4本の沈線を同方向に3箇所施していることから、本来は熨斗瓦にするため作られたものかも知れない。矩形は3区画に分けられ、最上部は中央に「土」字を入れた井桁文と、その4隅に「登録商□（標カ）」を上下に1字ずつ右→左に配し、2段目の細い区画には「泉州」をやはり右→左に配置し、最下部には2行分かち書きで、右側に「谷川瓦株式会社」、左側に「掛持人八小阪長太郎」とある。

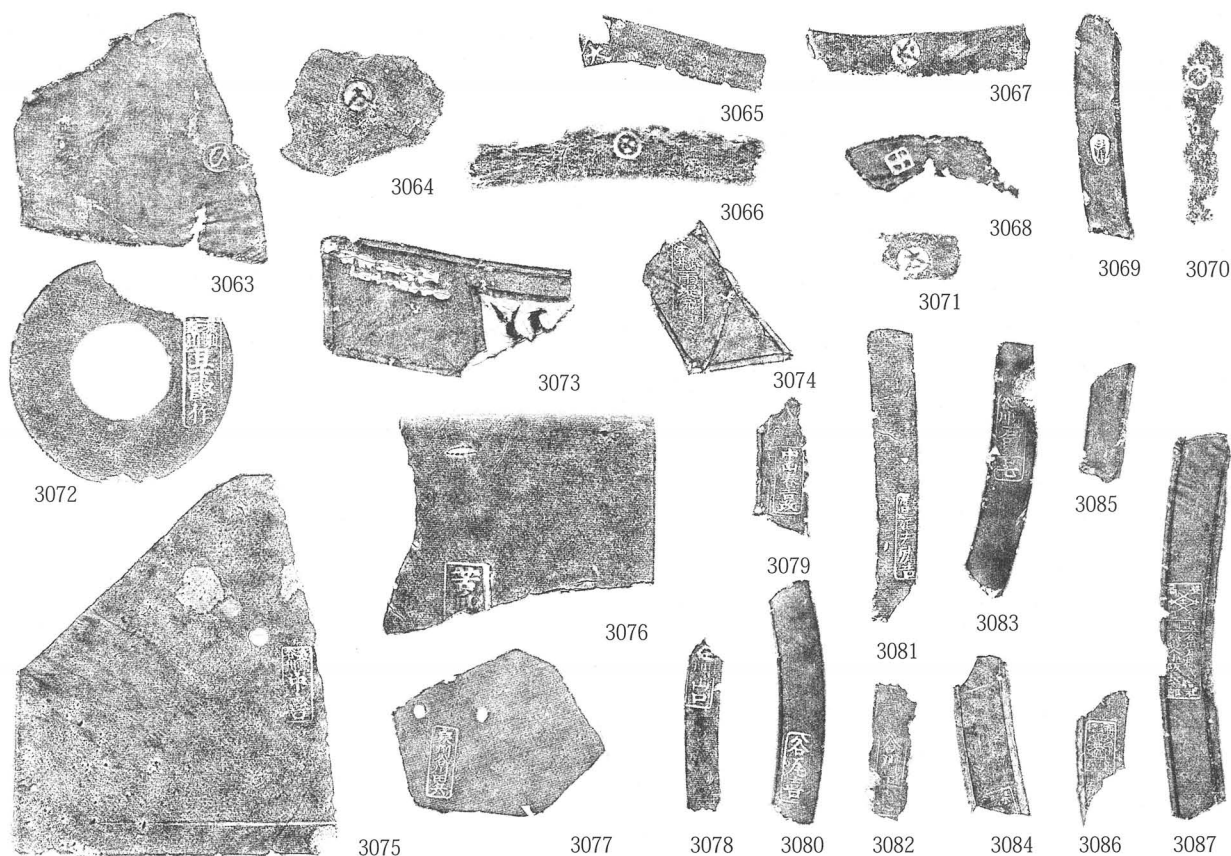


図 305 近現代刻印瓦拓影 (1/3)